大規模経年調査資料集　18
Material for Large-Scale, Long-Term Studies of Japanese

敬語の変化と採用時期
―岡崎の継続調査―

Honorific Changes and Time of Adoption
—Repetitive Surveys in Okazaki—

(Ver. 1.1)

国立国語研究所
National Institute for Japanese Language and Linguistics

日本語の大規模経年調査に関する総合的研究
Comprehensive Research
Based on Large-Scale, Long-Term Studies of Japanese

井上史雄・阿部貴人・鑓水兼貴・柳村裕
INOUE Fumio, ABE Takahito, YARIMIZU Kanetaka, YANAGIMURA Yu

平成 27 年 8 月 31 日
31 Aug 2015

目　　次

目　　次.....1
はしがき.....9

第１部.....10
岡崎調査の位置づけと分析手順.....10
第１章.....11
世界の中の岡崎敬語の位置.....11
１．岡崎の言語的位置.....11
２．岡崎の言語と社会の相関関係.....12
第２章.....13
岡崎のインフォーマントの社会的属性.....13
１．インフォーマントの男女比の変化.....13
２．インフォーマントの学歴の変化.....14
第３章.....17
岡崎敬語調査データベースの用例検索.....17
１．岡崎敬語調査の反応文項目.....17
2. データ概要.....17
2.1. 回答数.....17
2.2. 文字数.....18
2.3. KWIC 検索ツール.....20
3. 検索例１・方言敬語形式の衰退.....21
3.1. 「お書きる」式の方言敬語形式.....21
3.2. 接続形式による分類.....22
3.3. 敬語形式自体の減少.....23
4. 検索例２・タラ節における定型化.....23
4.1. 「よかったら」「よろしかったら」の増加.....23
4.2. タラ節の内訳の変化.....25
4.3. 「111 傘貸し」場面の表現方法の変化.....26
5. 検索例３・原因・理由表現の共通語化.....28
5.1. 岡崎市におけるダデ.....28
5.2. 「108 医者」場面での検索結果.....29
5.3. 敬語形式との接続.....30

5.4. 世代別使用率の変遷 31
6. まとめ 32
6.1. 反応文データの利点 32
6.2. 第１次調査の貴重性 32
6.3. 今後の課題 33

第２部 34
岡崎継続調査 12 項目の分析結果 34
敬語の成人後採用を中心に 34
第１章 35
敬語の成人後採用序説 35
―岡崎敬語調査の「川の字」変化― 35
はじめに 35
1. 岡崎の反応文の長さの増加 35
作業手順と生年実年代グラフの読み取り方 35
文の長さの「イコール」変化 36
2. 「ていただく」の増加 38
3. 「丁寧さ」の増加 39
4. 言い淀み「あのー」の増加 40
5. 「ていただく」と長さと丁寧さの相互関連 41
第２章 43
岡崎 100 年間の「ていただく」増加傾向 43
―受恵表現にみる敬語の民主化― 43
はじめに 43
1 敬語理論と岡崎調査 43
1.1 敬語の民主化・平等化と「ていただく」 43
1.2 岡崎データの理論的位置付け 45
1.3 敬語変化の見方とデータの必要性 46
1.4 岡崎敬語の世界史的・日本史的位置付け 47
2 岡崎「ていただく」点数の増加傾向 47
2.1. 「ていただく」点数の全体的増加傾向 47
2.2 「ていただく」点数による場面の順番の変化 49
2.3. 場面の構成 51
2.4. 年齢層別 100 年の「ていただく」点数増加傾向 52
3 「ていただく」単独の増加傾向 53
3.1 「てもらう」と「ていただく」の区別 53

3.2 「てもらう」の増加と「ていただく」の増減 53
4.「ていただく」と字数 56
4.1 字数のグラフ表示技法 56
4.2 字数減少傾向と受恵表現の増加とストラテジー 57
5. 丁寧さと「ていただく」の使い分け原理と場面分類 59
5.1. 丁寧さの使い分け原理：「依頼」と「心理的優位」 59
5.2. 「ていただく」の使い分け原理：「行動要求」 59
5.3. 第 1 次調査の丁寧さと「ていただく」点数 59
5.4. 第 2 次調査の丁寧さと「ていただく」点数 61
5.5. 第 3 次調査の丁寧さと「ていただく」点数 62
5.6. 丁寧さの使い分け原理：「力」から「親疎」へ 63
5.7. 第 1 次調査の丁寧さと親疎関係 63
5.8. 第 2 次調査の丁寧さと親疎関係 64
5.9. 第 3 次調査の丁寧さと親疎関係 65
5.10. 丁寧さと「親疎関係」 66
5.11. 他の分析項目への応用 67
5.12. 外挿法による過去と未来 68
5.13. 敬語の民主化・平等化 68
6 結論 敬語研究の未来 69
第 3 章 70
丁寧さの段階づけの安定性 70
はじめに 70
1.丁寧さの段階づけ研究手法 70
1.1 「丁寧さの段階付け」 70
2.丁寧さ グラフ解説 71
グラフから読み取れることの概要 71
「丁寧な説明」とは 75
3 結論 丁寧さを支配する要因 75
第 4 章 76
岡崎の文体の変化と 76
「ゴザイマス」の成人後採用 76
はじめに 76
1.岡崎の文末の文体 概観 76
1.1.「ゴザイマス」の限定使用 76
1.2. 結果の概要 岡崎 文末の分類 18948 文 77
2.岡崎のゴザイマス体 78

2.1. デゴザイマス体 78
2.2. 文末「ゴザル.」の成人後採用　グラフ解説 78
2.3. 文中「ゴザル」の減少　グラフ解説 80
3.岡崎のデスマス体の増減 82
3.1. 文末「デスマス」の増加　グラフ解説 83
3.2. 文末「デス.」の横ばい　グラフ解説 85
3.3. 文末「マス.」の減少　グラフ解説 88
3.4. 文末「マセン.」の急増　グラフ解説 89
4.岡崎のダ体 92
4.1. 文末「ダ体」の場面差 グラフ解説 92
5. 岡崎調査の文体変化まとめ 93
第 5 章 95
「わたくし」使用率の増加：岡崎と全国 95
はじめに 95
1. 岡崎調査の「わたくし」使用率 95
1.1. 岡崎調査と文化庁世論調査の「わたくし」使用率 95
1.2. 岡崎「わたくし」使用率グラフ解説 96
1.3. 自称詞「わたくし」　グラフ解説 98
2. 文化庁世論調査の「わたくし」使用率 98
2.1.文化庁調査の「わたくし」増加　----「わたくし」適齢期 ---- 98
2.2.文化庁調査 2 回の「わたくし」の概要 100
3. 大都市の「わたくし」使用率 104
3. 1. はじめに 104
3. 2.「私」 札幌の場面差・性差・年齢差 105
3. 3.「わたくし」東京の年齢差 107
3. 4.「わたくし」大阪の年齢差 107
4. GAJ と地方議会会議録の「わたくし」 108
4.1. GAJ「わたくし」の分布 108
4.2.地方議会会議録など 109
5.「わたくし」の地域差と成人後採用 109
5. 1. 全国分布と岡崎調査の違い 109
5. 2. 都市としての岡崎の調査と方言分布 111
5. 3.「公共用語」という視点 111
5. 4. 言語変化論と敬語 112
5. 5. 他の調査における敬語の成人後採用 112
第 6 章 113

岡崎の言い淀みの増加 113
はじめに 113
1.岡崎の言い淀みの分析法 113
1.1.「あのー」　グラフ解説 113
1.2. 周辺用語の整理 114
1.3. 作業手順 115
1.4. フィラー作業手順（阿部私信） 115
2. 「あのー」グラフ解説 117
「あのー」グラフ結論 120
第 7 章 121
岡崎の反応文の長さの増大と加齢変化 121
はじめに 121
1.反応文の長さの研究方法 121
1.1.モーラ数と字数 121
2.反応文の長さの結果概要 121
2.1.岡崎敬語調査 3 回の回答モーラ数 121
2.2.加齢と回答の長さ 122
2.3.モーラ数増加の背景 123
2.4. 調査所要時間の加齢変化 123
3. 反応文の長さ　グラフ解説 124
3.1. 岡崎敬語ランダム調査 3 回のモーラ数 125
3.2. 岡崎敬語第 1 次調査のモーラ数 126
3.3. 岡崎の反応文の長さの場面差 126
3.4. 岡崎市の住民構成の変化 128
4.反応文の長さの結論 129
第 8 章 130
岡崎パネル調査の反応文の長さ増大 130
1. パネル調査（追跡調査）の意義 130
2. 岡崎パネル調査の方法 130
3. パネル調査と反応文の長さの問題点 132
3.1. 住民構成の変化の可能性 132
3.2. 住民構成の変化の影響 132
3.3. 文字化の忠実度の影響 133
4. パネル調査結果 長さの概要 134
4.1. 第 1，2，3 次全話者の人数と 6 分類構成 134
4.2. 第 1，2，3 次全話者の反応文の長さの推移 136

4.3. 第 1，2，3 次パネル話者の反応文の長さの平均値 137
5. パネル調査結果　長さ全項目総合 140
5.1. パネル調査の反応文の長さ　全話者 140
5.2. パネル調査の反応文の長さ　第 1 次 2 次話者 143
5.3. パネル調査の反応文の長さ　第 2 次 3 次話者 144
6. 第 1，2，3 次パネルの長さ　斜め表示技法 145
6.1. パネル調査の反応文の長さの斜め表示技法 145
6.2. パネル調査表示の反応文の長さ　第 1，2，3 次全話者 145
6.3. パネル調査表示の技法解説 146
6.4. パネル調査の反応文の長さ　第 1，2 次話者と第 2，3 次話者 147
6.5. パネル調査の反応文の長さ　第 1，2 次，第 2，3 次の男女差 148
7. パネル調査結果 12 項目個別の長さ 151
7.1. 項目別回答反応文の長さ　パネルデータ全体像 151
7.2. 項目別反応文の長さ　パネルデータ個別 152
101 道教え 153
102 電報振込 154
103 荷物預け 155
104 傘忘れ 156
105 先生 157
106 電灯新聞 158
107 議事堂 159
108 医者 160
109 席譲られ 161
110 おつり 162
111 傘貸し 163
8. 岡崎パネル調査（追跡調査）の成果 164
第 9 章 165
敬語の成人後採用とライフステージ 165
はじめに 165
9.1. 世論敬語・通説敬語・指針敬語 165
9.2. 家庭，地域，学校，職場とライフステージ 166
1. 家庭 166
2. 地域 168
3. 学校 168
4. 職場 168
9.3.成人後採用のメカニズムと性差 169

9.4.言語調査と世論調査 170
9.5.言語以外の加齢変化 171
9.6.方言と敬語の習得　世論調査 172
9.7.敬語使用基準の変化とポライトネスの要素 174
9.8. ディスコースポライトネスの可能性とわきまえ理論 175
第 10 章　結論 176
岡崎調査と敬語の採用時期 176
1. 研究の背景 176
2. 結果のまとめ 177
3. 将来の課題 178
4. 関係者　分担　謝辞 179
参考文献（五十音順） 180

第 3 部 185
岡崎継続調査　詳細グラフと解説 185
詳細グラフの見方 186
折れ線グラフの見方 186
ラベル付き散布図の見方 186
場面別の生年実年代グラフの見方 187
性別・学歴別の散布図の見方 187
各グラフの見方の詳細 187
詳細グラフ 1　第 3 章丁寧さ 191
2.丁寧さ　第 3 章詳細グラフ解説 203
詳細グラフから読み取れることの概要 203
詳細グラフ 2　第 4 章 2-2 文末「ゴザル.」 209
2.2.　文末「ゴザル.」の成人後採用　詳細グラフ解説 221
詳細グラフ 3　第 4 章 2-3 文中「ゴザル」 225
2.3.　文中「ゴザル」の減少　詳細グラフ解説 237
詳細グラフ 4　第 4 章 3-1 文末「デスマス」 239
3.1.　文末「デスマス」の増加　詳細グラフ解説 251
詳細グラフ 5　第 4 章 3-2 文末「デス.」 255
3.2.　文末「デス.」の横ばい　詳細グラフ解説 267
詳細グラフ 6　第 4 章 3-3 文末「マス.」 271
3.3.　文末「マス.」の減少　詳細グラフ解説 283
詳細グラフ 7　第 4 章 3-4 文末「マセン.」 287
3.4.　文末「マセン.」の急増　詳細グラフ解説 299

詳細グラフ８　第６章言い淀み..... 303
2.「あのー」　詳細グラフ解説..... 315
詳細グラフ９　第７章文の長さ..... 319
3. 文の長さ　第７章詳細グラフの解説..... 331

はしがき

この報告書は，国立国語研究所が中心となって，1953（昭和 28）年，1972(昭和 47)年，2008（平成 20）年の 3 次にわたり，愛知県岡崎市において継続した敬語使用と敬語意識に関する調査に関する一連の報告書の一つである．国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語の大規模経年調査に関する総合的研究」（代表者:井上史雄）の成果公表の一環として公表するものである．

岡崎敬語調査は，戦後の 55 年という実時間をまたいで岡崎市という地域社会に起きた敬語使用と敬語意識の変化・不変化の姿をとらえようとする研究目標を掲げて継続しているものである．第 1 次調査については『敬語と敬語意識』（国立国語研究所報告 11　国語研 1957），第 2 次調査については『敬語と敬語意識―岡崎における 20 年前との比較』（同報告 77　国語研 1983）に，それぞれの包括的な分析報告がある．

本書では，第 3 次調査の実施とその後の分析の進展を受けて，岡崎敬語調査の全体的な枠組み・内容・経緯をあらためて包括的に解説するとともに，これまでに進めた調査データの全体的・基本的な分析の成果のいくつかを収録して公表する．第 3 次調査で得た調査結果に求められるのは，岡崎敬語調査の持つ定点・経年という調査の特性を最大限に生かすべく第 1 次・第 2 次の調査結果と比較し関連付ける様々な分析・検討である．本書に示すデータの整理や分析は，今後そうした研究を広げたり深めたりするための基盤として位置付けられるものである．

第 3 次調査は，文部科学省科学研究費補助金（基盤研究 A）「敬語と敬語意識－岡崎市における第三次調査」（課題番号 19202014　2007 年度～2009 年度　代表者：杉戸清樹）を受けて 主に 2008 年に実施し，調査の実施状況等については 4 分冊からなる資料として報告した（2009 年同標題の科研費報告書）．その後，調査データの具体的・多面的な分析・研究は，国立国語研究所における次の共同研究プロジェクトにおいて継続してきている．「文字環境のモデル化と社会言語科学への応用」（2009 年度～　代表者：横山詔一），「敬語と敬語意識の半世紀－愛知県岡崎市における調査データの分析を中心に」（2010 年度～2011 年度　代表者：井上史雄）及び「日本語の大規模経年調査に関する総合的研究」（2012 年度～　代表者：井上史雄）である．

共同研究プロジェクトには研究所の内外から多くの研究者が参加してきている．これまでに，基盤とすべき調査データの整備を進めて，主な 12 の調査場面での回答反応文データをインターネット上に公開・供用する（2014 年 12 月）とともに，様々な観点や手法によってデータの分析を行って，その成果を国の内外の学会・研究会での口頭発表，学会誌・専門誌への論文掲載，研究プロジェクトの Web サイトでの成果公開などとして，数多く公表している．

本書は，そうした様々な観点や手法による分析研究と併行して，前述のとおり今後深化・展開させていくべき岡崎敬語調査の包括的・総合的な分析研究の基盤となることを期して公表する．その実をあげるために，多くのお立場の皆様からのご批判・ご教示をいただくようお願いする．

2015 年 9 月

第三次岡崎敬語調査　代表者
杉戸清樹（国立国語研究所名誉所員）

第１部

岡崎調査の位置づけと分析手順

第１章

世界の中の岡崎敬語の位置

１．岡崎の言語的位置

これまでの岡崎敬語調査の報告書では，岡崎の言語的位置について十分な説明がなされなかった．その視点がなく，岡崎調査の内部の分析にとらわれていたこともある．位置付けを試みようにも，大まかな方言区画や方言記述をもとにするしかなかったという事情もある．幸いなことに21 世紀初頭の今は，多様な言語地図や学術論文が公開されており，着眼点・視点もさまざま指摘されている．

この章では代表的な現象をもとに岡崎のことばおよび方言を位置づける．

愛知県は日本の本土方言を東西に分けるときに境界地帯にあたり，東西どちらに含めるか，説が多様である．アクセントでは明らかに東に属し，音韻でも東である，文法と語彙では多くの現象を積算すると（または多変量解析法を適用すると）東に属する．敬語に関しては，絶対敬語的か相対敬語的か（自然物敬語の有無，話題の人物・第３者への敬語使用，身内の目上への敬語使用），場面による使い分けの細かさ，美化語の使用などの基準によると，西日本的である．敬語の西高東低という傾向でいうと中間段階にあたる．また方言イメージを典型とすることばのイメージからいうと，都会的なパターンを示す．

愛知県内では東の三河と西の尾張の対立意識があるが，方言区画からいって，その間に東西の区画が認められるわけではない．むしろことばの面で問題になりうるのは，都市化・都会化の程度である．東京（または昔の京阪）にどの程度近いかが，手がかりである．敬語の発達は，近代の共通語化と結びつき，つまりは共通語化の進展の程度や都市化・共通語化の指標となりうる．これまでの方言研究では主に農山村の生え抜きの人を対象にして方言の性格付けを行ってきた．しかし現在は県内レベルのもっと細かい地域差も把握できるようになり，地域内の社会階層などによることばの違いも分かってきた．共通語化は，全国レベルではほぼ東京（と京都）からの鉄道距離に支配される形で連続体を示すが，同じ県内でもほぼ人口規模に比例する形で，県庁所在地などをトップに，市部，町村部の順に共通語使用の連続体が見られる．その非言語的背景としては，経済発展と，それに伴う社会的経済的格差がある．

愛知県は全国的レベルでは都市的・都会的共通語使用地域になり，その中で岡崎市は県全体の中間的・平均的位置にあると，考えられる．人口規模から言って，昔からの政令指定都市名古屋

にはるかに及ばず，多くの中規模衛星都市の一員にあたり，町村部とは一線を画する．日本の諸都市全体の中に置くと，やや上位に属する．共通語化も進んでおり，市内で耳にする会話でも方言色は薄れている．敬語に関しても，京都のような細やかな使い分けがあるわけではなく，東京における乱れとも言われる敬語変化を受け入れているわけでもない．北関東や農山村のような無敬語，敬語未発達の状況でもない．「てみえる」「ておられる」「ておる」などの方言的な敬語表現を使う．現代の急激な敬語変化を受け入れていない，やや古風な敬語である．

本報告書では，岡崎市という 1 都市を扱ったので，東京や首都圏の現在の敬語の状況が直接分かるわけではない．しかし日本全体のやや保守的な，伝統的な敬語使用をとらえたことになる．

２．　岡崎の言語と社会の相関関係

地域の言語状況をとらえるに際して，最近の社会言語学では従来の方言研究と違って，住民全体をとらえようとする．つまり外来者（よそもの，旅の人）も考慮に入れる．しかし地域社会の外来者の割合には規則性が認められる．全国規模のデータとして NHK「全国県民性調査」の県別の「生粋県人」の割合を見ると（NHK 放送文化研究所 1997a，1997b），政令指定都市を含む都道府県には少ない．一方東北や九州などの周辺県（方言学で辺境と言ったところ）には多い．他の統計資料で見ると，人口規模が大きく，人口密度が高く，県民平均所得が多い地域と相関関係がある．地価も高く，平均時給も多く，衛星からの夜の地球画像で明るい地域とも重なる．

人間の移動のメカニズムからいうと，人々は多くの所得が得られる地域に移動する．すると人口が集中して人口密度が高くなる．地価も高くなる．商業が発達し，夜も明るくなる．人口が集積すれば多様な人々の間に専門化が生じ，所得，資産，職業，学歴などに差が大きくなる．つまり社会階層差が大きくなる．ことばにも反映する．

近代以降は東京がトップで，他の大都市，地方中核都市，県庁所在地などが続き，地方都市が続く．この順番で言うと，岡崎市は市制をしいた順番（全国で 67 番目，1916 年）や過去・現在の人口規模（2014 年約 38 万人，愛知県内第 4 位）からいって，全国で中間的な位置にあると見られる．東京からの圧倒的な圧力・影響力を受けているわけではない．この点から日本の地方都市の一例と見なすことが可能である．

ことばの変化，敬語の変化にはいくつかの普遍的な法則性が観察されているので，本報告書で観察された現象は，現代日本語に拡大適用しても，間違いではない．

第２章

岡崎のインフォーマントの社会的属性

１．インフォーマントの男女比の変化

岡崎市のデータを解析してみると，インフォーマントの言語外的性格（属性）における変化が，学歴や男女比に見られるので，結果の読み取りに際して考慮に入れるべきである．岡崎市の位置を考えると，言語外の（フェイスシート，社会的属性）項目として，性別と学歴についての基礎グラフが必要である．これまで『資料集』として公にした他の一連のグラフの分析の基盤を固めるためにも，必須である．

「丁寧さ」の分析に関して「高学歴の人が増えたから丁寧さが上がった」と考えると，「モーラ数」他の現象の解釈にも影響する．さらに，丁寧さは一般に性別に左右される．また女性の高学歴が増える傾向は，岡崎でも見えるはずである．半世紀の調査で，性別の実年代が気になる．被調査者の男女比が実年代でどう推移したか，今までの各種グラフで３回の調査全体を見て，大きな変化はない．

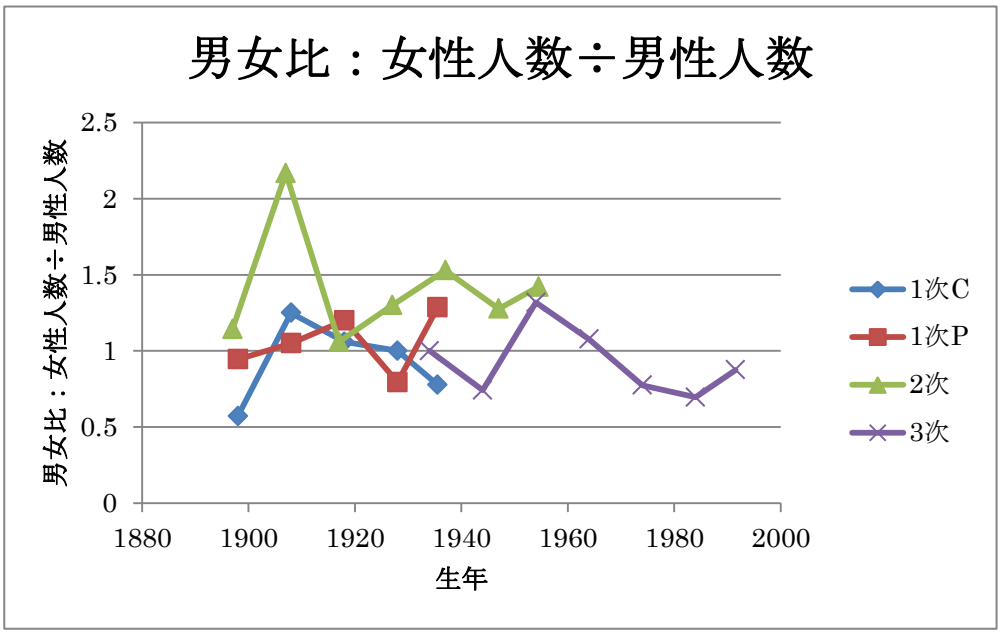


図 2-1　インフォーマントの男女比

図 2-1 に生年実年代に分けて男女比を示す（グラフの見方について，詳しくは第 2 部第 1 章で後述）．グラフで 1 より上か下かを見ると，大部分の世代が上で，つまり女性が多い．4 本の線では，中高の傾向が見られる．第 1 次 C と第 3 次の若い世代で男性が多い．都市的傾向である．

２．インフォーマントの学歴の変化

図 2-2 では 3 回の調査の学歴の変化を男女に分けて示す．低学歴の話者＝調査協力者の割合が目立って減り，高学歴者が増えた．低学歴の女性が大幅に減ったので，半世紀で女性の脱低学歴化（≒高学歴化）が進んだことになる．「女性の高学歴化」少なくとも「女性の脱低学歴化」を指摘していい．

これからみるモーラ数やていただくの使用率の背景にある非言語的事情である．丁寧さは高学歴と女性に目立つから，「この非言語要因によって，見かけ上丁寧さが増大した」という説明が可能である．なおこの学歴平均点の計算法を利用すると，後掲第 3 部のグラフ集図 2-1 のような生年実年代のグラフも（男女別に）作成できる．なお岡崎における高学歴化と言語の関係については，柳村（2014）の考察がある．

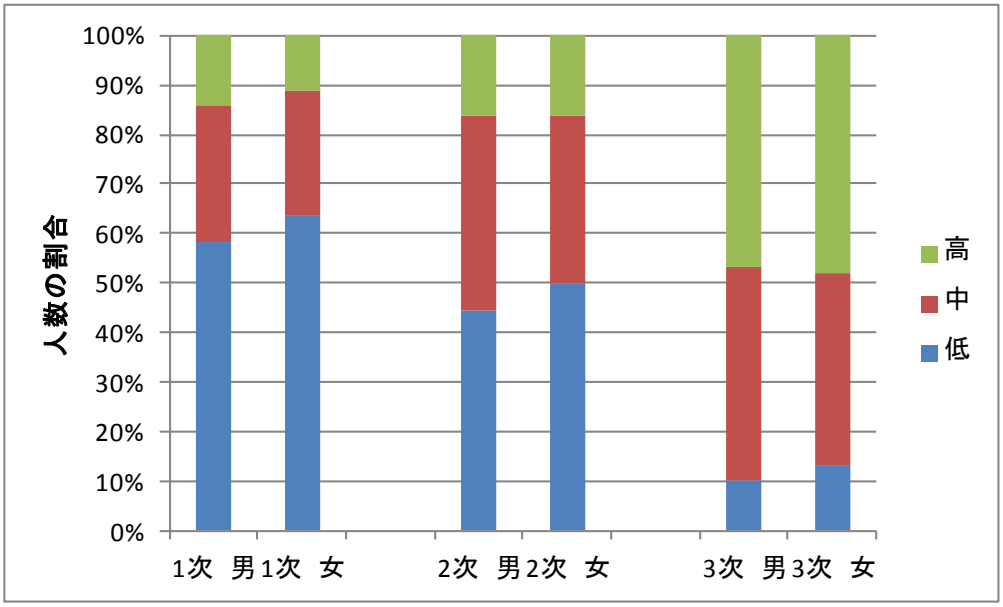


図 2-2　学歴の変化

図 2-3 では，学歴のグラフを点数化して折れ線にした．1 点が低学歴，2 点が中学歴，3 点が高学歴である．学歴平均点は男女とも全体として大きく上昇した．第 1 次では女性の低学歴が多かったが，第 3 次では男女差が薄れた．男女差はもっとくっきり出るかと思ったが，僅かな違いだった．

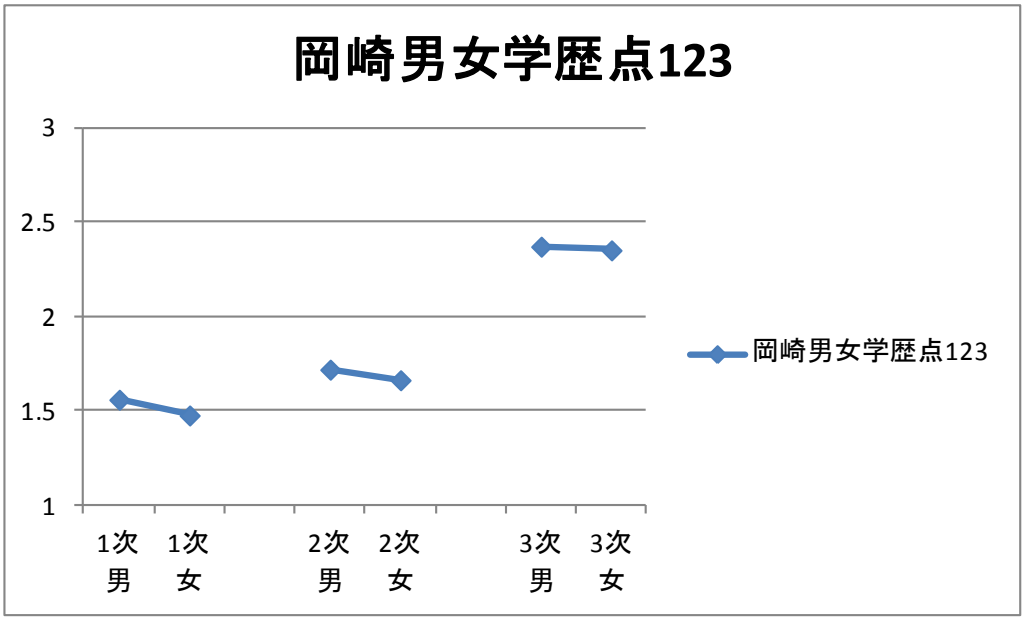


図 2-3 学歴平均点

図 2-4，5 により，男女に分けて生年実年代のグラフの傾斜を見ると，3 回の調査を通じて，話者たちの学歴は若いほど高い傾向が見られる．10 代の数値が低いのは，地元の愛知教育大学をはじめとする大学卒の割合が少ないからである．（女性の）線がなだらかでないのは，団塊の世代の集団就職などによって，特定の世代の偏った学歴の人が外部から転入したことによる可能性がある．

方言研究の NORM (Non-mobile Old Rural Male)のくびきを離れて，社会言語学の変異研究の視点から言語変化を見るためには，MYUF (Mobile Young Urban Female)の動向を考慮に入れるべきだが，その基盤として，話者の属性を見直す必要がある．学歴がその一つである．

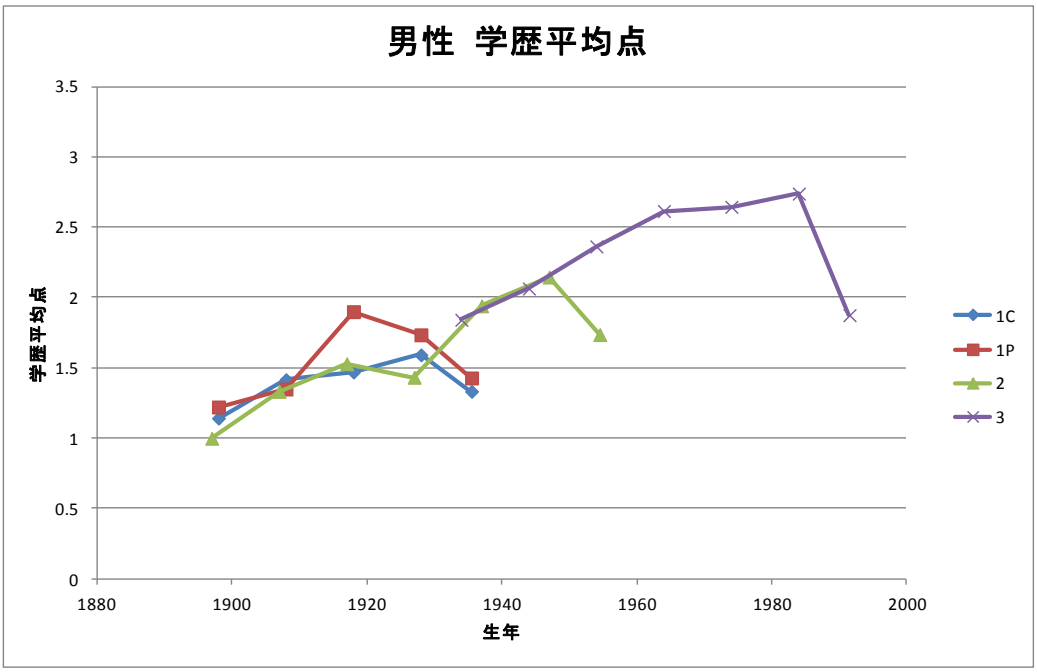


図 2-4 男性の学歴平均点

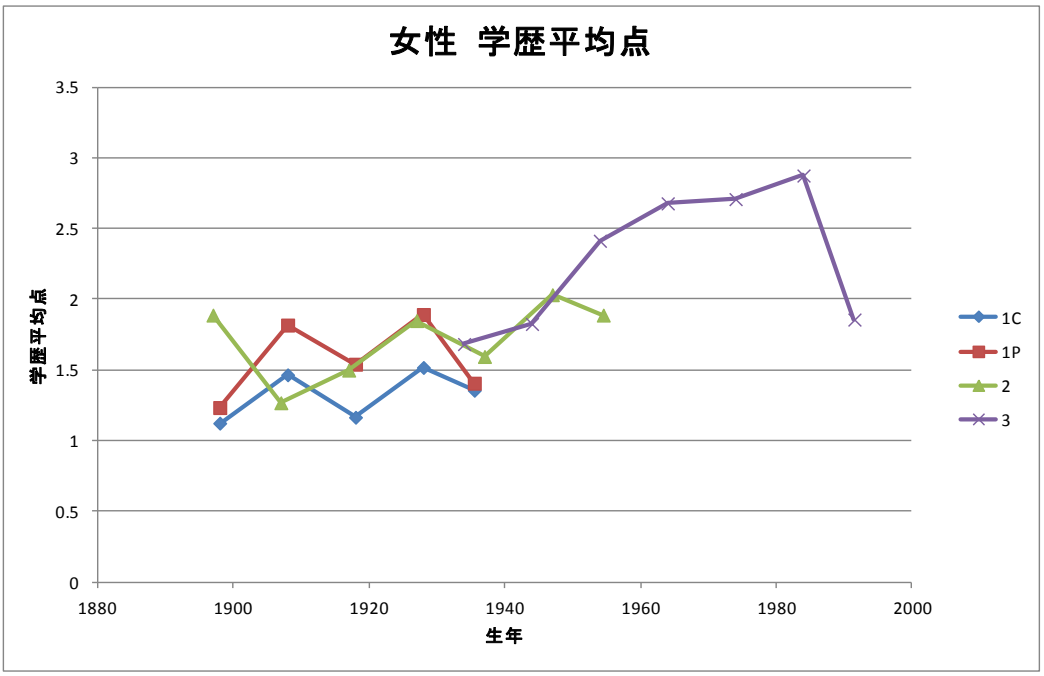


図 2-5 女性の学歴平均点

第３章

岡崎敬語調査データベースの用例検索

１．　岡崎敬語調査の反応文項目

岡崎敬語調査の反応文項目(101～120)は，特定場面における個人の回答である．場面ごとに話し相手が想定されているが，調査者と回答者とのロールプレイ会話ではない．面接調査において，回答者は状況を頭の中で考えて回答をしているだけで，実際の談話とは異なる可能性もある．

反応文項目は，３回の調査でのべ 20 場面が設定されている．敬語使用の全場面を網羅しているわけではないが，敬語行動における様々な文脈内で回答されたデータが揃っていると考えられる．そのため，熊谷・篠崎(2006)や，松田(2009)のように，反応文項目の回答を，談話データの断片の発話とみなした分析も行われている．

反応文項目のデータは，「敬語行動のコーパス」であると同時に，愛知県岡崎市のデータという点で，「方言コーパス」としての側面も持つ．敬語使用場面は丁寧なスタイルが想定され，共通語コードに切り替わることも多い．しかし方言コードにおいても丁寧なスタイルは存在する．また，共通語と同形式であっても，従来から岡崎方言で使用されていれば，方言コードとみなされるため，実際には方言と共通語の切り替え能力とあわせて考えなければならない．

方言談話コーパスについては，井上(2013)のようなロールプレイ会話データ収集の試みがあるが，岡崎敬語調査の反応文項目には，前述のような場面網羅的という利点がある．

本稿では，反応文項目の用例検索システムを紹介し，岡崎市における敬語行動・言語行動の総合的分析に役立てるための検索例をいくつか紹介する．

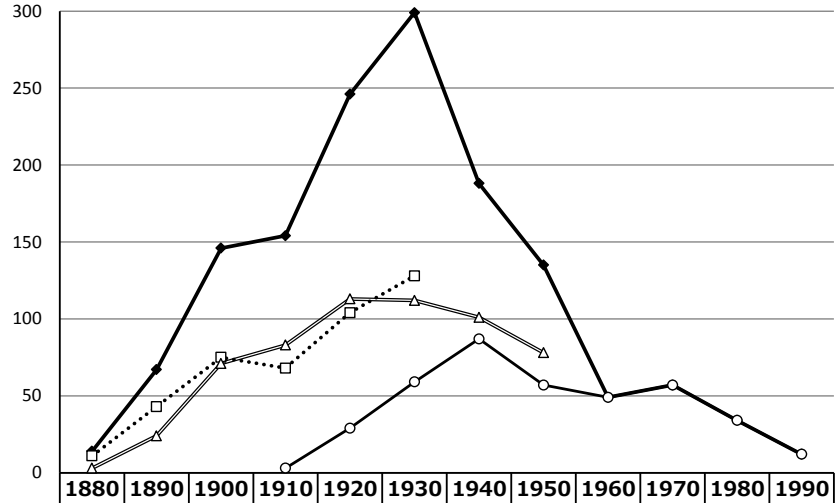
２．　データ概要

2.1. 回答数

岡崎敬語調査は 1953 年，1972 年，2008 年の 3 回実施され，のべ回答者数は 1402 人である．調査次別には，

第１次　429 人（ランダム 429 人（プロパー184 人・コントロール 245 人））
第２次　585 人（ランダム 400 人，パネル 185 人）
第３次　388 人（ランダム 306 人，パネル 82 人）

となっている．図 3-1 に全回答者の年代別構成を示す．1920～30 年代生まれが特に多く，合計 645 人と全体の 4 割近くを占める．これは過去の調査者に継続的に調査するパネルサンプルが含まれることや，第２次と第３次の調査間隔が 36 年と長いこと，第３次調査は回収率が低いことなどから，調査の重なりやすい世代が限定されたためだと思われる．用例数を生年との関係で分析する場合には，注意が必要である．



	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990
全体	14	67	146	154	246	299	188	135	49	57	34	12
第１次	11	43	75	68	104	128						
第２次	3	24	71	83	113	112	101	78				
第３次				3	29	59	87	57	49	57	34	12

図 3-1　調査次・生年別回答者数

2.2. 文字数

全反応文(101～120)の文字数は，仮名表記で約 50 万字，形態素解析による形態素数は約 20 数万（短単位）であり，コーパスとしては小規模といえる．

表 3-1 に調査次・場面ごとの平均文字数の推移を示す．全体として増加傾向にあるが，項目によって増加・減少にわかれている．

「101 道教え」は，第１次から第２次にかけて 50%程度の大幅な増加となっている．これには「明代橋」の認知度の低下が関係していると思われる．東岡崎駅の近くにある明代橋は，「すぐそこです」といえば済んだはずが，説明が必要な橋になったと推測される．

一方，「111 傘貸し」は第１次から第２次にかけて 15%程度減少，「104 傘忘れ」も調査次ごとに 10%程度ずつ減少している．これは，相手へ働きかける表現が定型化する傾向にあり，状況に応じて考える発話が減少しているのだと思われる．

文字数の変化にはあまりあらわれていないが，医者に急患を伝える「108 医者」や，行きつけの店に荷物を預ける「103 荷物預け」，魚釣りをする子に話しかける「112 魚つり」など，時代が

新しくなるにつれて，状況自体が想像しにくくなっている場面もある．

場面自体の変化や，場面に対する意識も変化しており，用例の増減を分析する際にも考慮する必要があるだろう．

表 3-1　文字数の推移

番号	場面名	第１次	順	第２次	順	（第１次比）	第３次	順	（第１次比）	（第２次比）
108	医者	38.47	1	38.91	1	101%	41.30	1	**107%**	**106%**
107	議事堂	35.80	2	37.89	2	**106%**	39.25	2	**110%**	104%
106	電灯新聞	33.84	3	36.95	3	**109%**	36.93	3	**109%**	100%
103	荷物預け	30.62	4	34.45	5	**113%**	36.22	**4**	**118%**	**105%**
101	道教え	23.05	8	34.89	**4**	**151%**	33.86	5	**147%**	97%
109	席譲られ	25.62	6	26.13	6	102%	28.93	6	**113%**	111%
110	おつり	26.55	5	24.40	7	92%	25.25	7	95%	104%
102	電報振込	17.48	10	21.43	**8**	**123%**	22.60	8	**129%**	**106%**
111	傘貸し	23.64	7	20.33	9	86%	19.75	9	84%	97%
104	傘忘れ	18.22	9	16.69	10	92%	15.09	10	83%	90%
105	先生	11.83	11	12.41	11	**105%**	12.66	11	**107%**	102%
112	魚つり			10.76	12		10.57	12		98%

■：順位下降・文字数５％以上減少　　**太字**：順位上昇・文字数５％以上増加

つづいて井上(2014)による，回答者の生年からみた文字数の推移を図 3-2 に示す．ランダムサンプルにおける 11 場面（101～111）の文字数の平均値のグラフだが，各調査次とも若年層は短く，高年層は長い．１回の調査の見かけの時間差だけをみると，時代を下るごとに発話が短くなる傾向があるようにみえる（図 3-2 白い矢印）．

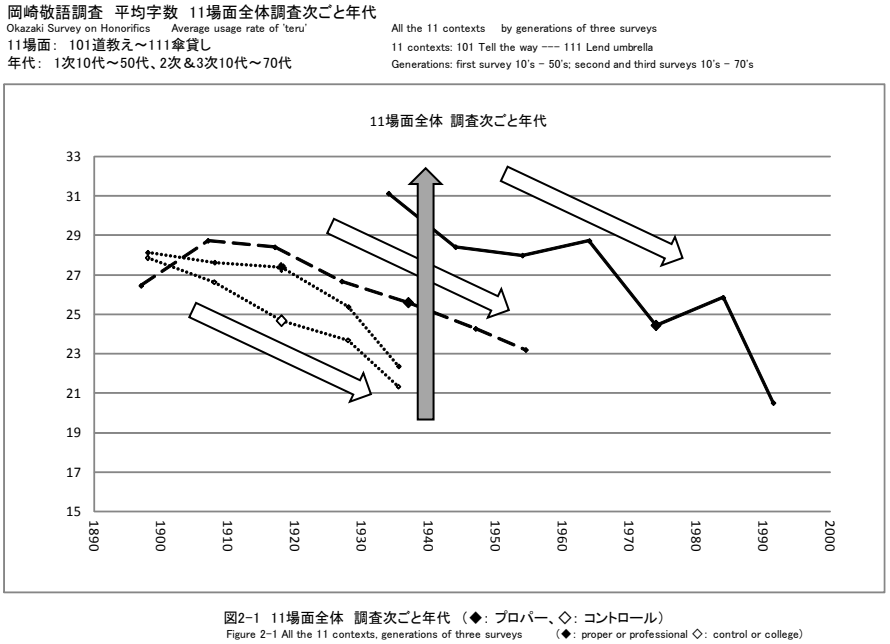


図2-1　11場面全体　調査次ごと年代（◆：プロパー、◇：コントロール）
Figure 2-1 All the 11 contexts, generations of three surveys　（◆: proper or professional ◇: control or college）

図 3-2　反応文項目の平均文字数（生年）(井上 2014)

しかし 3 回とも調査対象となった 1930 年代生まれの回答者について，調査次ごとにみると，文字数が増加していることがわかる（図 3-2 灰色の矢印）．すなわち，加齢に伴って使用文字数が増加していることになる．こういった，言語使用の変化に，年齢，生年，時代のどの要因が関係しているのかを明らかにすることができるのが実時間調査の強みであろう．

2.3. KWIC 検索ツール

以上，岡崎敬語調査の反応文データの特徴をみてきた．この反応文データをコーパスのように扱うために，KWIC 検索を行うツールを作成した．場面を横断的に検索することも可能で，岡崎市における約 60 年間の敬語行動・言語行動の変化を観察できる．

図 3-3 に検索画面サンプル（初期状態）を示す．現時点では試験版だが，プロジェクトのサイト(http://keinen.info/)より公開予定である．

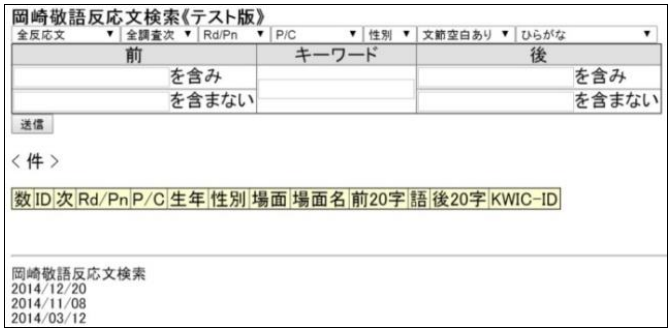


図 3-3　検索画面サンプル（初期状態）

検索キーワードや，前後の文字列も指定可能である．正規表現による検索はできないため，今後バージョンアップを考えている．今後は形態素解析結果も検索に加える予定である．

現バージョンで選択可能なデータは以下の通りである．

反応文	全反応文，１つの反応文を選択
調査次	全調査次，１つの調査次を選択
サンプル	ランダム・パネル両方，ランダムのみ，パネルのみ
第１次サンプル	プロパー・コントロール，プロパーのみ，コントロールのみ
性別	両方・男性のみ・女性のみ
文節空白[1]	あり・なし
検索文字列	ひらがな・カタカナ・漢字かな混じり(ver.0.0)[2]

次節以降では，KWIC 検索ツールを使用した３つの事例を紹介し，反応文データの検索の有効性について検討する．

---

1 オリジナルデータベースの空白．文節を基本としている．

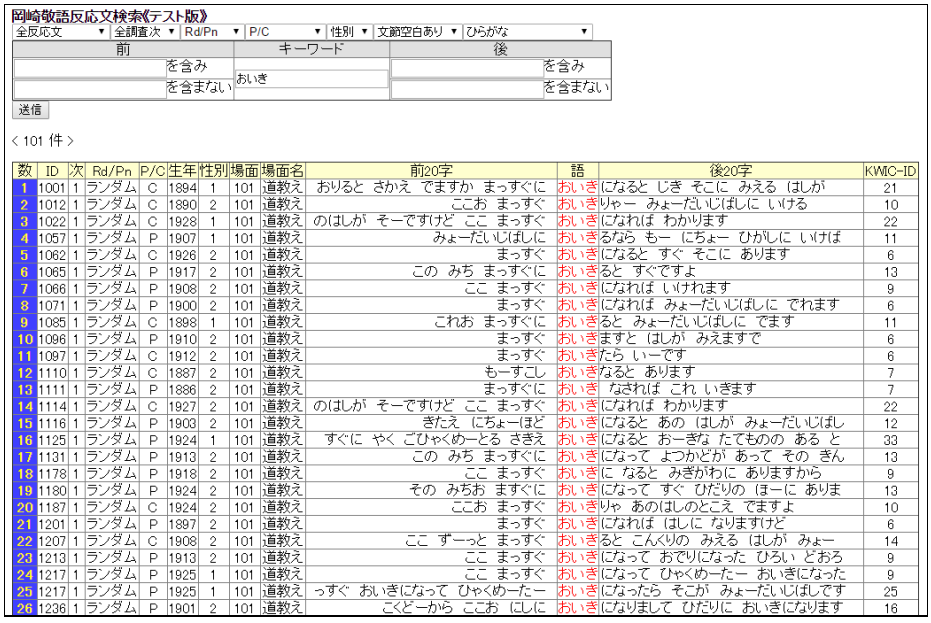
2 井上・鑓水(2014)で作成されたデータ．

3. 検索例１ ・方言敬語形式の衰退

3.1. 「お書きる」式の方言敬語形式

全国的な共通語化の傾向と同様に，岡崎市の方言敬語形式も衰退傾向にある．ここでは岡崎市で特徴的な「お書きる」式の方言敬語形式の使用状況を，KWIC 検索により確かめる．

現時点では，データベースに形態素情報は付加されていないため，「お＋動詞連用形」のような検索ができない．効率的に検索するために，反応文の特徴から出現が多く見込まれる動詞を検索語形として選ぶ．ここでは「101 道教え」で「行く」の形が出やすいことから，「お行きる」「お行きます」を選んだ．語形の出現状況に着目するため，ランダムサンプル・パネルサンプルの両方を検索対象とした．図 3-4 に，「おいき」で検索した結果の一部を示す．



岡崎敬語反応文検索《テスト版》

全反応文 | 全調査次 | Rd/Pn | P/C | 性別 | 文節空白あり | ひらがな

前		キーワード	後	
	を含み	おいき		を含み
	を含まない			を含まない

送信

< 101 件 >

数	ID	次	Rd/Pn	P/C	生年	性別	場面	場面名	前20字	語	後20字	KWIC-ID
1	1001	1	ランダム	C	1894	1	101	道教え	おりると さかえ ですか まっすぐに	おいき	になると じき そこに みえる はしが	21
2	1012	1	ランダム	C	1890	2	101	道教え	ここお まっすぐ	おいき	りゃー みょーだいじばしに いける	10
3	1022	1	ランダム	C	1928	1	101	道教え	のはしが そーですけど ここ まっすぐ	おいき	になれば わかります	22
4	1057	1	ランダム	P	1907	1	101	道教え	みょーだいじばしに	おいき	るなら もー にちょー ひがしに いけば	11
5	1062	1	ランダム	C	1926	2	101	道教え	まっすぐ	おいき	になると すぐ そこに あります	6
6	1065	1	ランダム	P	1917	2	101	道教え	この みち まっすぐに	おいき	ると すぐですよ	13
7	1066	1	ランダム	P	1908	2	101	道教え	ここ まっすぐ	おいき	になれば いけれます	9
8	1071	1	ランダム	P	1900	2	101	道教え	まっすぐ	おいき	になれば みょーだいじばしに でれます	6
9	1085	1	ランダム	C	1898	1	101	道教え	これお まっすぐに	おいき	ると みょーだいじばしに でます	11
10	1096	1	ランダム	P	1910	2	101	道教え	まっすぐ	おいき	ますと はしが みえますで	6
11	1097	1	ランダム	C	1912	2	101	道教え	まっすぐ	おいき	たら いーです	6
12	1110	1	ランダム	C	1887	2	101	道教え	もーすこし	おいき	なると あります	7
13	1111	1	ランダム	P	1886	2	101	道教え	まっすぐに	おいき	なければ これ いきます	7
14	1114	1	ランダム	C	1927	2	101	道教え	のはしが そーですけど ここ まっすぐ	おいき	になれば わかります	22
15	1116	1	ランダム	P	1903	2	101	道教え	きたえ にちょーほど	おいき	になると あの はしが みょーだいじばし	12
16	1125	1	ランダム	P	1924	1	101	道教え	すぐに やく ごひゃくめーとる さきえ	おいき	になると おーきな たてものの ある と	33
17	1131	1	ランダム	P	1913	2	101	道教え	この みち まっすぐに	おいき	になって よつかどが あって その きん	13
18	1178	1	ランダム	P	1918	2	101	道教え	ここ まっすぐ	おいき	に なると みぎがわに ありますから	9
19	1180	1	ランダム	P	1924	2	101	道教え	その みちお ますぐに	おいき	になって すぐ ひだりの ほーに ありま	13
20	1187	1	ランダム	C	1924	2	101	道教え	ここお まっすぐ	おいき	りゃ あのはしのとこえ ですよ	10
21	1201	1	ランダム	P	1897	2	101	道教え	まっすぐ	おいき	になれば はしに なりますけど	6
22	1207	1	ランダム	C	1908	2	101	道教え	ここ ずーっと まっすぐ	おいき	ると こんくりの みえる はしが みょー	14
23	1213	1	ランダム	P	1913	2	101	道教え	ここ まっすぐ	おいき	になって おでりになった ひろい どおろ	9
24	1217	1	ランダム	P	1925	1	101	道教え	ここ まっすぐ	おいき	になって ひゃくめーたー おいきになった	9
25	1217	1	ランダム	P	1925	1	101	道教え	っすぐ おいきになって ひゃくめーたー	おいき	になったら そこが みょーだいじばしです	25
26	1236	1	ランダム	P	1901	2	101	道教え	こくどーから ここお にしに	おいき	になりまして ひだりに おいきになります	16

図 3-4 「おいき」の検索結果（一部）

検索結果の 100 例[3]について分類する．まず，場面別にみると，

101 道教え	68 例	（「おいき」のみ）
104 傘忘れ	11 例	（「わすれておいき」が大半）
111 傘貸し	19 例	（「もっておいき」が大半）
113 市役所	2 例	（「おいきました」と「おいきあいした」）

と，4 場面で出現した．傘忘れ・傘貸しの場面では，「忘れて行く」「持って行く」といった複合語形式で出現している．

[3] 図 3-4 では 101 例だが，「どう行きますか」の音声表記「どおいきますか」を除外した．

3.2. 接続形式による分類

さらに「113 市役所」での「お行き会い」の 1 例を除いた 99 例について，接続する形式から分類した結果を以下に示す.

a. おいき｛た・たら・て・りゃ・れば・る・ん(かね)｝	20 例
b. おいき｛まし・ます｝	15 例
c. おいき｛やす・やー｝	10 例
d. おいき｛な・なさい・φ｝	6 例
e. おいき｛に(なる)・ん(なる)・φ(なる)｝	47 例
f. おいき｛の(かた)｝	1 例

※（ ）は後接形式

このうち「お行きる」形は上記の a,b の 35 例と考えられる．e,f の「お行きになる」形は「行く」の尊敬語形式であり，多く出現する．命令表現の「お行き」となる c,d は，「お行きる」「お行きになる」どちらの形式ともいえる．これらの形式の生年別分布を表 3-2 に示す.

表 3-2　「お行きる」形式の生年別分布

生年代	回答数
1880	1
1890	8
1900	14
1910	8
1920	3
1930	1
計	35

「お行きる」形(a, b)

生年代	回答数
1880	2
1890	5
1900	4
1910	4
1920	2
1930	0
計	17

「お行き」命令（c, d）

生年代	回答数
1880	2
1890	6
1900	10
1910	8
1920	18
1930	3
計	47

「お行きになる」形(e, f)

「お行きる」形(a,b)は，出現した 35 例すべてが 1930 年代以前の生まれの人で，そのうち 31 例が 1910 年代以前生まれであった．調査次別にみると，35 例中 29 例が第 1 次調査であり，第 2 次調査の高年層でも出現しなくなっていることがわかった.

また，「お行き」命令形(c,d)と「お行きになる」形(e,f)についても，合計 64 例すべてが 1930 年代以前の生まれで，すべて第 1 次・第 2 次調査の回答であった.

しかし，「お行きる」形と「お行きになる」形の出現生年を比較すると，「お行きる」のピークが 1900 年代にあるのに対して，「お行きになる」のピークは 1920 年代と，やや若い年代に多いように見える.

ただし，1920～30 年代は回答者数も多いため（図 3-1），「お行きる」「お行きになる」は，ほぼ同時期に使用されていたと思われる.

3.3. 敬語形式自体の減少

「お行きる」形，「お行きになる」形ともに，検索結果では 1934 年生まれ以降出現しない．これらに代わる語形としては，敬語動詞イラッシャルと，尊敬の助動詞レル（「行かれる」「行かれます」）が考えられる．それぞれ検索をすると，

いらっしゃる	31 例（27 例が 1920 年代以前）
いかれる	182 例（89 例が 1930 年代以後）

となった．「いらっしゃる」（「いらっしゃ」で検索）は，31 例中 27 例が 1920 年代までで，もっとも若い生年でも 1944 年であった．一方「行かれる」「行かれます」（「いかれ」で検索）は 182 例中，過半数となる 89 例が 1930 年代以降であった．

このことから，「お行きになる」から「行かれる」「行かれます」に置き換わった可能性がある．しかし，丁寧度の高い「いらっしゃる」は若い世代では使用されておらず，「行かれる」「行かれます」も件数が少ないことから，敬語形式自体の減少を検討する必要がある．

「101 道教え」場面において，「行く」は従属節内に多く出現する．丁・阿部・井上(2014)では従属節内の丁寧度の低下が報告されているが，検索を行うと，

いきますと	62 例
いくと	506 例
いったら	792 例

のように，丁寧語の「いきますと」に比べて，無敬語の「いくと」「いったら」が非常に多い結果となった．

このため，「お行きになる」から「行かれる」に変化したと同時に，従属節内の丁寧度の低下により「行くと」「行ったら」のように敬語形式が簡素化されてきたと考えられる．

4. 検索例２ ‐ タラ節における定型化

4.1. 「よかったら」「よろしかったら」の増加

丁・阿部・井上(2014)では，岡崎調査データにおける条件節「たら」における使用率の変化について，敬語使用の定型化の影響を示唆している．

タラ節が出現しやすいとして，丁・阿部・井上(2014)では「111 傘貸し」があげられている．図 3-5 は，「111 傘貸し」場面における「たら」の検索結果の一部である．

岡崎敬語反応文検索《テスト版》

111傘貸し ▾ | 全調査次 ▾ | Rd/Pn ▾ | P/C ▾ | 性別 ▾ | 文節空白あり ▾ | ひらがな ▾

前		キーワード		後	
	を含み	たら			を含み
	を含まない				を含まない

送信

< 389 件 >

数	ID	次	Rd/Pn	P/C	生年	性別	場面	場面名	前20字	語	後20字	KWIC-ID
1	1001	1	ランダム	C	1894	1	111	傘貸し	れいかれず あまやすみお していきなさっ	たら	どーですか②らんごくな かさだが かさ	46
2	1001	1	ランダム	C	1894	1	111	傘貸し	ごくな かさだが かさでも おもちになっ	たら	どーですか	77
3	1006	1	ランダム	C	1920	2	111	傘貸し	よろしかっ	たら	かさお おももちください	6
4	1010	1	ランダム	C	1916	2	111	傘貸し	これ わるい かさですけど おさしになっ	たら	いかがですか	21
5	1014	1	ランダム	C	1938	1	111	傘貸し	どーです かさお さしてっ	たら		14
6	1023	1	ランダム	P	1894	2	111	傘貸し	ふってきましたから おかさ おもちになっ	たら	どーですか	33
7	1024	1	ランダム	P	1927	2	111	傘貸し	どーぞ きゅーな あめですから よかっ	たら	もってて ください	20
8	1033	1	ランダム	C	1918	1	111	傘貸し	よかっ	たら	かさ どーだね かさ さしてゆかれんか	4
9	1035	1	ランダム	P	1892	1	111	傘貸し	らい あめ ふって うちで あめ やまし	たら	どーですか つまらん かさですが おも	22
10	1035	1	ランダム	P	1892	1	111	傘貸し	すか つまらん かさですが おもちになっ	たら	どーですか	48
11	1036	1	ランダム	P	1911	1	111	傘貸し	おこまりだから よかっ	たら	どーぞ もってって ください	12
12	1039	1	ランダム	P	1925	1	111	傘貸し	あー だれだれさん かさが よかっ	たら	もってらっしゃい にわかあめで いやな	18
13	1039	1	ランダム	P	1925	1	111	傘貸し	にわかあめで いやな あめですね よかっ	たら	もってって ください	50
14	1050	1	ランダム	P	1904	2	111	傘貸し	あめですから この かさ おもちになっ	たら	いかがですか	24
15	1055	1	ランダム	C	1913	2	111	傘貸し	よろしかっ	たら	かさ おももちください	6
16	1056	1	ランダム	C	1894	1	111	傘貸し	めが ふってるから かさお おもちになっ	たら	いかがですか	22
17	1067	1	ランダム	C	1931	2	111	傘貸し	○○さん かさお おもちになっ	たら		16
18	1070	1	ランダム	P	1901	2	111	傘貸し	よかっ	たら	あなた かさお おもち なさい	4
19	1084	1	ランダム	C	1908	1	111	傘貸し	もしもし なんでし	たら	うちの かさお おもちになりませんか	10
20	1086	1	ランダム	P	1910	2	111	傘貸し	この かさで よかっ	たら	もって いって ください	11
21	1092	1	ランダム	P	1924	2	111	傘貸し	ぼっこがさですけど よかっ	たらもって	いって ください	14
22	1093	1	ランダム	P	1917	2	111	傘貸し	よろしかっ	たら	この かさお おもち なさって くださ	6
23	1099	1	ランダム	P	1932	2	111	傘貸し	あの だれだれさん かさお よかっ	たら	おもち ください	18
24	1104	1	ランダム	P	1900	1	111	傘貸し	また ついでの ときにすまいて いただい	たら	けっこーですから	77
25	1105	1	ランダム	P	1916	1	111	傘貸し	いー かさじゃ ありませんけど よかっ	たら	おもち ください	25
26	1119	1	ランダム	C	1935	1	111	傘貸し	○○さん こんな かさでも よかっ	たら	どーぞ	18

図 3-5　「たら」の検索結果（一部）

図 3-5 に示した 26 例だけでも，定型表現である「よかったら」「よろしかったら」が目立つ．このため２表現の出現頻度について，調査次別の回答者の使用率を図 3-6 に示す．なお，調査次の回答者構成を考慮してランダムサンプルに限っている[4]．

図 3-6 をみると，「よかったら」「よろしかったら」の２表現が，調査次ごとに増加していることがわかる．「よろしかったら」は，第２次調査以降増加していないが，「よかったら」は第３次調査でも増加し，３割近くの人が使用している．第３次調査では，２表現だけで回答者の 45.1%が使用しており，タラ節の使用自体にも影響していると思われる．

「よかったら」より丁寧な表現である「よろしかったら」があまり増加していないのは，従属節内の丁寧さの低下と関係していると思われる．この点についても後述する．

[4] 本章では用例の出現を重視して，あえてランダムサンプル・パネルサンプルの区別をしていない．しかし調査次ごとに割合を見る場合には，パネルサンプルが入ると回答者の年齢構成に偏りが生じるため，パネルサンプルは除外することが望ましい．

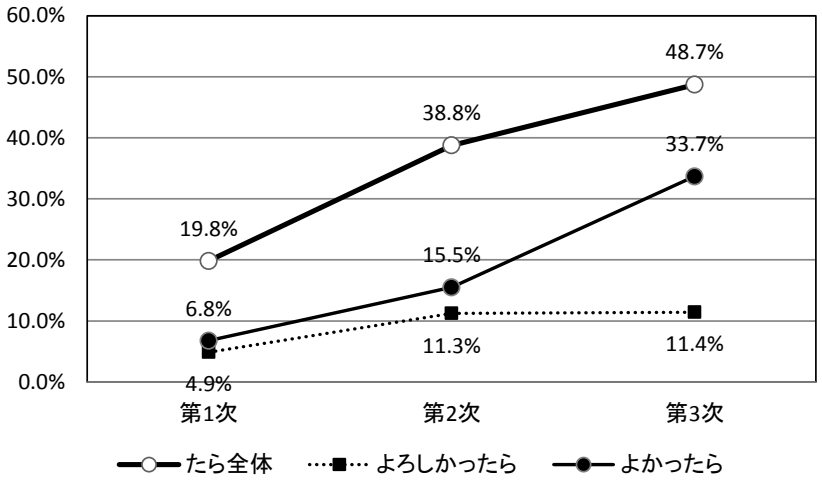


図 3-6　「よかったら」「よろしかったら」の出現比率

4.2. タラ節の内訳の変化

つづいて「たら」節の内訳をみる．「111 傘貸し」場面において，「たら」は 389 例であるが（ランダム・パネル合計）[5]．そのうち「よかったら」（194 例）と「よろしかったら」（101 例）の 2 表現だけで全体の 75.8%を占めており，表現の定型化の影響が大きい．

図 3-7 は，タラ節における「よかったら」「よろしかったら」の年代別占有率の変遷グラフである．初期は 2 表現ともに増加傾向にあり，1940 年代にはタラ節のほとんどを 2 表現で占有したことがわかる．しかし，２表現のうち「よろしかったら」は 1940 年代以降減少し始め，増加を続ける「よかったら」によって独占される結果となった．

調査次ごとの違いをみると，第 3 次調査において 1920～1950 年代生まれの人の「よかったら」の使用率が増加している．また第 2 次調査と第 3 次調査における同一年代を比較すると，増加がみられる（図 3- 7 矢印）．このことから，「よかったら」の使用は，第 2 次調査と第 3 次調査の間に急速に進行したものと思われる．

[5]　なお，「たら」とは異なるが，同じ条件節である「ば」については，「よければ」が 10 例，「よろしければ」8 例と少なく，岡崎市においては「たら」が優勢である．ただし，18 例中 15 例が 1940 年代以降，11 例が 1970 年代以降と，「よかったら」と並行して増加していると思われる．

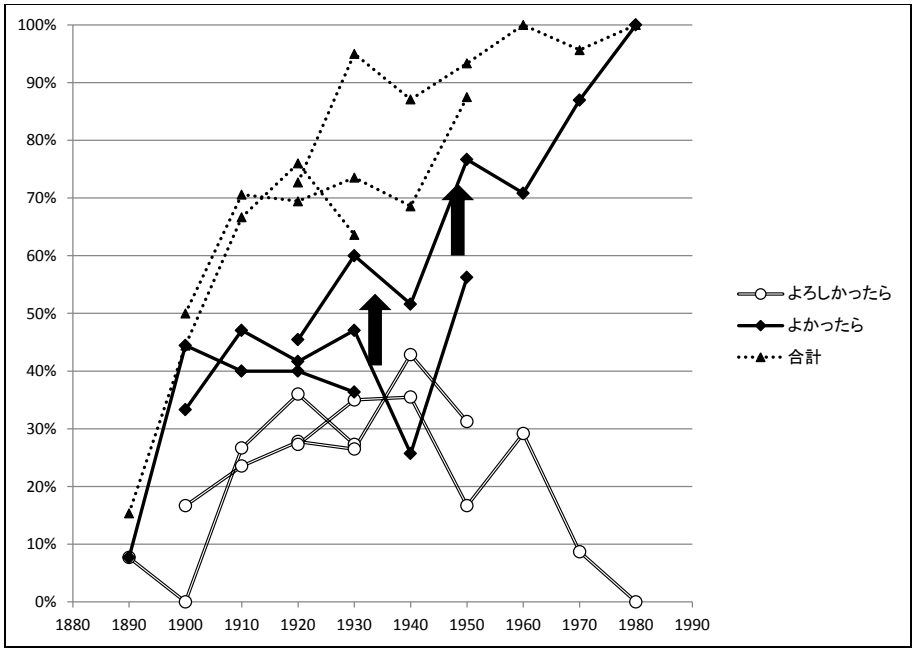


図 3-7　「たら」節内の「よかったら」「よろしかったら」占有率（調査次・生年別）

4.3. 「111 傘貸し」場面の表現方法の変化

「たら」節内部の占有がこれだけ劇的に変化したことの背景として，表現方法に変化があったと考えられる．前述のように，「たら」が出現する 389 例を分類すると，

a. 持って行ったら（お持ちになったら），どうですか（いかがですか）．
b. よかったら（よろしかったら），持って行きませんか（持って行って下さい）．

の 2 類型が多い．b については，前述のとおり「よかったら」と「よろしかったら」で 295 例を占める．一方，a の主節部分についても，

どう｛です・だ・ですか・か｝	36 例（「111 傘貸し」全体で 97 例[6]）
いかが｛ですか・ございますか｝	12 例（「111 傘貸し」全体で 24 例）

のように，「～たら，どうですか」（以下「どうですか」）が 48 例出現した．「111 傘貸し」全体では 121 例なので，4 割弱しか占めないが，単独（「傘どうですか」等）や，他の条件表現（「お持ちになっては」等），原因理由表現（「ありますから」等）があるため，割合は高いと思われる．

[6] 表記は「どー」となる．検索では「けどー」「どーぞ」「どーも」「どーか」「どーなりましょー」を除外した．

「よろしかったら，どうですか」のように，タラ節の文において，「よかったら」と「どうですか」が同時に出現する例は 3 例（「どう」2 例，「いかが」1 例）しかない．a と b は相補分布となっており，a と b で 340 例と，「たら」全体の 87.4%を占めている．

以上から，図 3-8 のように，a から b に変化したことになる．

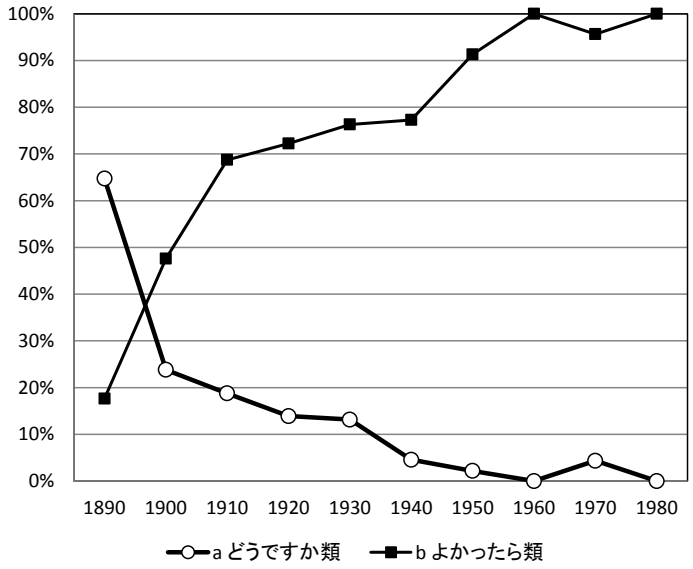


図 3-8　「どうですか」類から「よかったら」類への変化

この変化については，文の機能面からの分析が必要であろう．機能としては，話し手が傘を持っていくよう提案する部分と，聞き手が提案に対する判断に配慮する部分がある．a と b とでは構成が異なっており，

a　[提案] たら＋ [判断]　（「傘を持っていったら」＋「どうか」）
b　[判断] たら＋ [提案]　（「よかったら」＋「傘を持っていかないか」）

のように，a では提案が先であるのに対して，b は提案が後になっている．本章では詳細な分析は行わないが，分析方法について考える．

ひとつは熊谷・篠崎(2006)の「機能的要素」からの分析が考えられる[7]．前述の a と b はともに二つの機能的要素から構成されており，そのうち，b の「よかったら」が，提案に対して「対人配慮」のコミュニケーション機能を持っていると考えられる．そのため a よりも b のほうが，配慮が大きくなる．

7 言語行動の指向性には，「当該の言語行動の目的を効果的に達成すること」と「相手との対人関係を良好に保つこと」があり，両者のバランスを保ちながら工夫や配慮を行うとしている．そして言語行動の働きかけの仕方について分析するために機能的要素という単位を設定し，発話文を単位分割して，働きかけの内容によって分類する．熊谷・篠崎(2006)では「103 荷物預け」「108 医者」「110 おつり」の 3 場面について，機能的要素と，上位分類のコミュニケーション機能によって分析を行っている．

もうひとつは，ポライトネス理論（Brown & Levinson 1987）による分析が考えられる[8]．傘を勧める行為は，勧めた人の積極的フェイス（傘を貸したいという願望を満たす）を無視するため，申し出に対して断りにくくなる．そこで，申し出を断る余地を与えるために，具体的な提案内容の前に「前置き」をすることがある．b の「よかったら」は，その「前置き」に近い機能を持っていると思われる[9]．

どちらの分析方法からも，a よりも b のほうが聞き手への配慮が働いていることが推測される．a から b への表現方法の変化も，より聞き手への配慮を強める方向に変化しているものと思われる．

5. 検索例３・原因・理由表現の共通語化

5.1. 岡崎市におけるダデ

つづく検索例として，敬語以外の例についても行う．岡崎市における原因・理由をあらわす方言形式ダデについて取り上げる．

『方言文法全国地図(GAJ)』における「から」「ので」の地図の三河地方の部分を図 3-9 に示す．この地域では，ともにデが主流で，形式名詞のノやモンが入らないことが多い．

第 33 図（雨が）降っているから

第 37 図　子どもなので

主要語形：〈-de〉〈-monde〉〈-node〉

図 3-9　方言文法全国地図(GAJ)における原因・理由表現

[8] 人の願望は，「積極的フェイス」（他人からよく思われたい）と「消極的フェイス」（自由を妨げられたくない）の二つの側面があり，発話によって，それらの「フェイス」（面子）が傷つけられる可能性がある行為を「フェイス威嚇行為」（FTA）と呼ぶ．そして，それぞれの相手のフェイスを救済する行為を，それぞれ「積極的ポライトネス」，「消極的ポライトネス」という．

[9] たとえば「大丈夫ですか」のように，別の発話のほうが「前置き」になりやすい．

5.2. 「108 医者」場面での検索結果

原因理由表現が出現しやすい場面としては，急患が出たことを理由とする「108 医者」場面が考えられる．図 3-10 は「だで」の検索結果の一部である．「急病だで」「病気だで」という形式が多く出現していることがわかる．

同様に，「だから」「なので（なんで）」についても検索を行い，３表現の生年ごとの出現数を図 3-11 に示す．

岡崎敬語反応文検索《テスト版》

108医者 | 全調査次 | Rd/Pn | P/C | 性別 | 文節空白あり | ひらがな

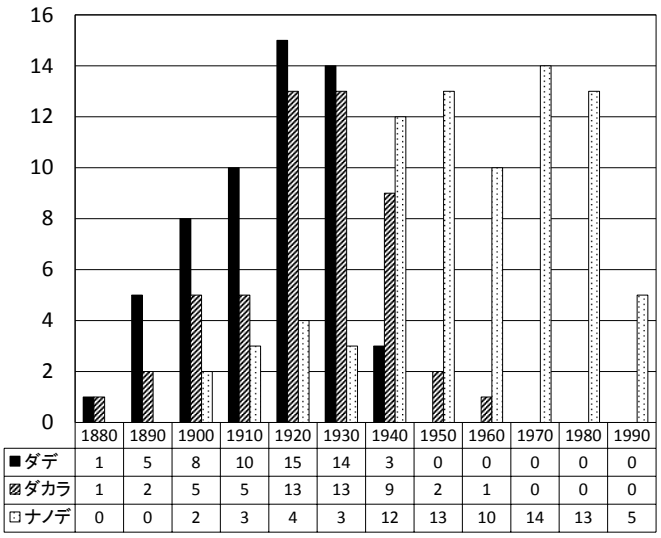
前		キーワード	後	
	を含み	だで		を含み
	を含まない			を含まない

送信

< 57 件 >

数	ID	次	Rd/Pn	P/C	生年	性別	場面	場面名	前20字	語	後20字	KWIC-ID
1	1014	1	ランダム	C	1938	1	108	医者	きんじょのひとが ぎゅーびょー	だで	はよ きて	16
2	1042	1	ランダム	P	1902	1	108	医者	となりの ひとが ぎゅーびょー	だで	なるべく はやく きて ください	16
3	1083	1	ランダム	P	1926	1	108	医者	いま すぐ となりの こどもが びょーき	だで	すぐ おーしんに きてもらえんかね	21
4	1137	1	ランダム	P	1894	1	108	医者	よその こどもが ぎゅーびょー	だで	たのまれて きたんだが ぜひとも ひと	16
5	1144	1	ランダム	C	1922	2	108	医者	となりのひとが びょーき	だで	すぐ きてもらえませんか	13
6	1175	1	ランダム	C	1916	1	108	医者	ぎんじょに ぎゅーびょーにんが あるもん	だで	まことに すまんが すぐ きていただけ	24
7	1187	1	ランダム	C	1924	2	108	医者	ぎゅーびょーにん	だで	いそいで おねがいします	8
8	1223	1	ランダム	P	1928	1	108	医者	じゅーびょーにん	だで	すみませんが わしと いっしょに きて	9
9	1257	1	ランダム	P	1927	1	108	医者	すぐ まえの だれだれが ぎゅーびょー	だで	しぎゅー おねがい したいと おもいま	47
10	1289	1	ランダム	P	1927	1	108	医者	ぎゅーびょー	だで	すぐ きて もらいたい	7
11	1325	1	ランダム	P	1904	1	108	医者	となりの だれだれさんが びょーき	だで	すぐ きて もらえないでしょーか	18
12	1336	1	ランダム	C	1929	1	108	医者	○○の ○○が ぎゅーびょー	だで	いそいで きてくれ	15
13	1357	1	ランダム	C	1911	1	108	医者	ぎゅーびょーにん	だで	ひとつ すぐ きていただけませんか	9
14	1388	1	ランダム	C	1900	1	108	医者	わたしの となりのかたが ぎゅーびょー	だで	ぜひ つごーして だいしぎゅー きても	20
15	1405	1	ランダム	P	1925	1	108	医者	あの ぎゅーびょーにん	だで	おねがい します	12
16	1418	1	ランダム	P	1917	2	108	医者	ぎゅーびょーにん	だで	すぐ きて いただきたい	9
17	2022	2	ランダム		1931	1	108	医者	となりのひとが ぎゅーびょー	だで	すぐ きてもらえんか	15
18	2029	2	ランダム		1911	1	108	医者	こーゆーとこの あれ	だで	すぐ きてもらえんか	11
19	2043	2	ランダム		1920	1	108	医者	ぎゅーびょーにん	だで	たのむ きてくれ となりのひとが ぎゅ	9
20	2043	2	ランダム		1920	1	108	医者	きてくれ となりのひとが ぎゅーびょー	だで		35
21	2053	2	ランダム		1930	1	108	医者	すぐ ちかくのひとですけど ぎゅーびょー	だで	だいしぎゅー ちょっと きてもらえませ	21
22	2057	2	ランダム		1903	2	108	医者	いま となりのひとが ぎゅーびょー	だで	おーしんしていただけますか	18
23	2062	2	ランダム		1926	1	108	医者	せんせー ぎゅーびょー	だで	すぐ おねがいします	12
24	2079	2	ランダム		1948	1	108	医者	ぎんじょのひとが ぎゅーびょー	だで	ちょっと きてもらえんかな	16
25	2089	2	ランダム		1901	1	108	医者	せんせー うちの となりのひとが ぎとく	だで	すぐ きていただけないでしょーか	25
26	2090	2	ランダム		1898	2	108	医者	ぎゅーびょー	だで	すみませんが ごつごー どーでしょーか	7

図 3-10　「だで」の検索結果（一部）



	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990
■ダデ	1	5	8	10	15	14	3	0	0	0	0	0
▨ダカラ	1	2	5	5	13	13	9	2	1	0	0	0
□ナノデ	0	0	2	3	4	3	12	13	10	14	13	5

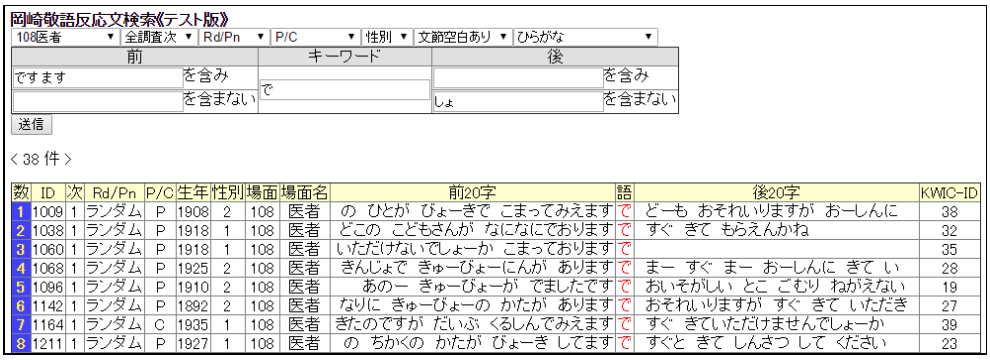
図 3-11　原因理由表現の生年分布

図 3-11 をみると，岡崎地方における原因理由表現の形式が，デ→カラ→ノデと交替していることが予想される．

しかし，医者場面は，目上に対する依頼場面であるため敬語形式になりやすいため，「だ」以外の接続もみる必要がある．

5.3. 敬語形式との接続

「です」「ます」との接続をみる．図 3-12 は「ですで」「ますで」の検索例である．前接語形に「です ます」と複数登録し，「でしょう」を検索から除くために，後接語形で「しょ」を含まないように指定している．



岡崎敬語反応文検索(テスト版)

108医者 | 全調査次 | Rd/Pn | P/C | 性別 | 文節空白あり | ひらがな

前		キーワード	後	
ですます	を含み	で		を含み
	を含まない		しょ	を含まない

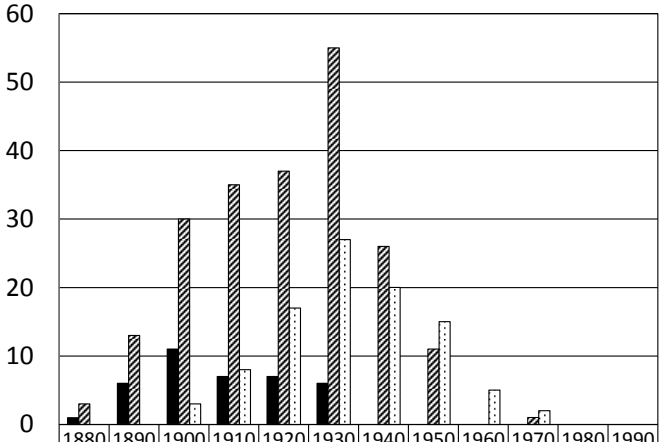
送信

< 38 件 >

数	ID	次	Rd/Pn	P/C	生年	性別	場面	場面名	前20字	語	後20字	KWIC-ID
1	1009	1	ランダム	P	1908	2	108	医者	の ひとが ぴょーぎで こまってみえます	で	どーも おそれいりますが おーしんに	38
2	1038	1	ランダム	P	1918	1	108	医者	どこの こどもさんが なになにでおります	で	すぐ ぎて もらえんかね	32
3	1060	1	ランダム	P	1918	1	108	医者	いただけないでしょーか こまっております	で		35
4	1068	1	ランダム	P	1925	2	108	医者	ぎんじょで ぎゅーぴょーにんが あります	で	まー すぐ まー おーしんに きて い	28
5	1096	1	ランダム	P	1910	2	108	医者	あのー ぎゅーぴょーが でましたです	で	おいそがしい とこ ごむり ねがえない	19
6	1142	1	ランダム	P	1892	2	108	医者	なりに ぎゅーぴょーの かたが あります	で	おそれいりますが すぐ きて いただき	27
7	1164	1	ランダム	C	1935	1	108	医者	ぎたのですが だいぶ くるしんでみえます	で	すぐ ぎていただけませんでしょーか	39
8	1211	1	ランダム	P	1927	1	108	医者	の ちかくの かたが ぴょーぎ してます	で	すぐと きて しんさつ して ください	23

図 3-12　「ですで」「ますで」の検索結果（一部）

同様に，「ですから」「ますから」と「ですので（んで）」「ますので（んで）」を検索した結果を，図 3-13 に示す．敬語形式に関しても，同様の傾向がみられるが，敬語形式の場合は「で」より「から」のほうが多いことがわかった．ただし使用のピークは同様である．



	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990
■デスデ・マスデ	1	6	11	7	7	6	0	0	0	0	0	0
▨デスカラ・マスカラ	3	13	30	35	37	55	26	11	0	1	0	0
⊡デスノデ・マスノデ	0	0	3	8	17	27	20	15	5	2	0	0

図 3-13　原因理由表現の生年分布（敬語形式）

5.4. 世代別使用率の変遷

図 3-11 では「から」のあとに「ので」が増加するが，図 3-13 では「ですので」「ますので」は一時的に増加するものの 1940 年代以降は減少し，1980 年代以降は出現していない．

これは前節でも述べた，従属節内の無敬語化が関係していると思われる．また，世代別の人数が大きく異なるため，全語形の世代別使用率として計算したグラフを図 3-14 に示す．ここでは折れ線グラフで示している．

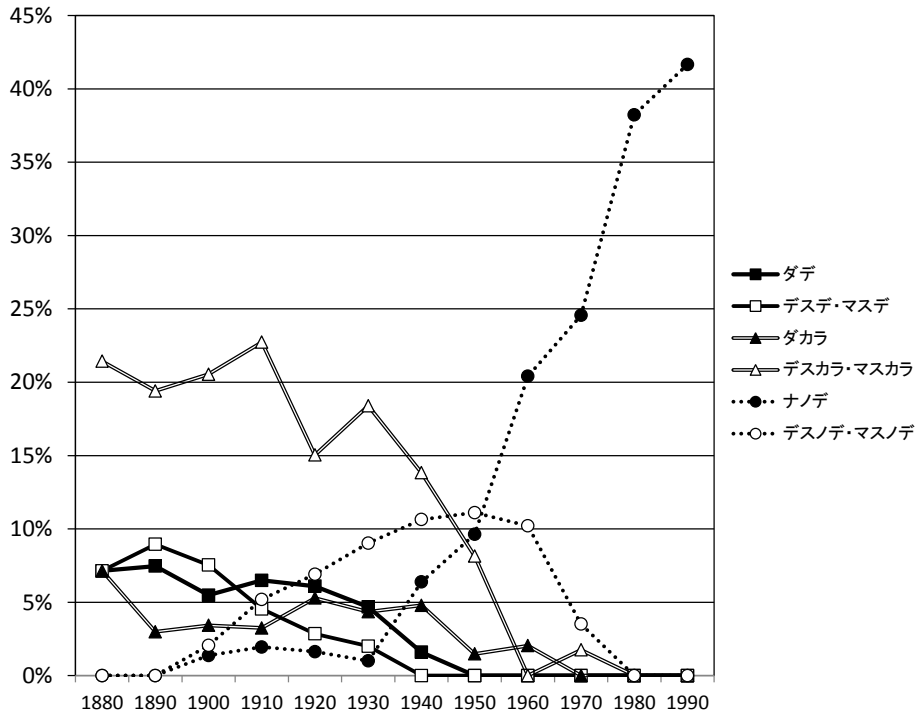


図 3-14　原因理由表現の世代別変遷(1)

世代別使用率をみると，前節で「よろしかったら」が 1940 年代をピークに減少し，丁寧さの低い「よかったら」に交代したのと同様に，1940 年前後から無敬語形式の「なので」が増加し，最終的に「なので」が従属節のほとんどを占めている．ノデ自体はすでに 1900 年代頃から「ですので」「ますので」という形式で増加していたことがわかる．

まとめとして，図 3-15 に表現別，図 3-16 に敬語形式の有無で集計したグラフを示す．表現別にみると，デの衰退は第 1 次調査以前から進行していたと考えられ，カラがピークであったことがわかる．つづいてカラが衰退し，ノデにとってかわったが，同時に無敬語形式の増加で，ナノデ単用へと収斂していったことがわかる．ダカラは無敬語化の影響はあまり受けることなく，ナノデに交代している．

カラからノデへの交代について，主観的判断とされるカラから，客観的判断とされるノデへの変化だとすると，間接的表現による相手への配慮と関係あると思われる．この点については，岡崎市方言との関連から考察する必要があるだろう．

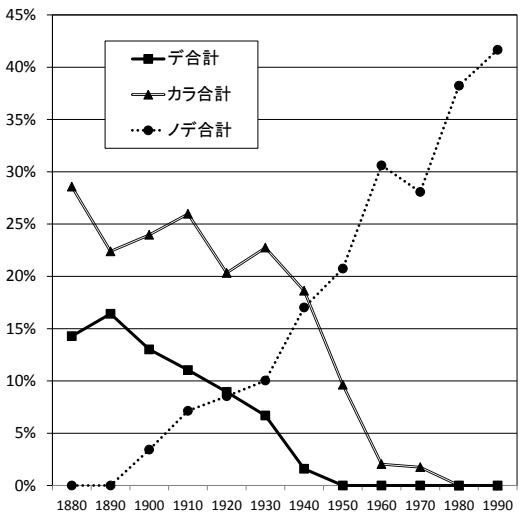


図 3-15　原因理由表現の世代別変遷(2)

図 3-16　原因理由表現の世代別変遷(3)

6.　まとめ

6.1. 反応文データの利点

岡崎敬語調査の反応文データには，ランダムサンプルとパネルサンプルの両方が入っている．サンプリングによって得られたランダムサンプル内で集計することで，岡崎市における集計結果として，統計的信頼性をもつ．パネルサンプルについては，同一話者の回答の変化をたどることができる．また反応文の場面は，敬語使用における 20 場面のデータからなっている．このため，さまざまな敬語使用例を得ることができる．

このように，反応文データベースは敬語使用における豊富な用例を持っている．本章では，３つの検索事例を示したが，敬語行動の変化を見るうえで様々なアプローチが可能になると思われる．

6.2. 第１次調査の貴重性

岡崎敬語調査の第 1 次調査からは，古い敬語使用状況を知ることができる．第 1 次調査が実施された 1953 年時点の活躍層は，明治・大正生まれである．そのため，岡崎市における 19 世紀末～20 世紀初頭の敬語使用状況を反映しており，非常に貴重である．

このため，ランダムサンプリングによる統計的信頼性も重要であるが，表現形式の年代別出現例を観察するという点で，パネルサンプルと統合する意義はあると思われる．

ただし，すべてを含む場合，統計的には岡崎市の代表性は失われるため，割合を算出する場合は，取扱いに注意が必要である．

6.3. 今後の課題

以上，岡崎敬語調査の反応文データを談話コーパスとみなし，KWIC 検索によって岡崎市における敬語使用の変化をみてきた．しかし，現状の反応文データには，形態素情報が付与されていない．そのため，4 節の検索例でも，特定の動詞が出現しやすい場面を選ばざるをえず，場面横断的な分析になりにくい．

鑓水(2014)では，MeCab と UniDic を用いて反応文データへの形態素解析をテストしている．すべて仮名の状態では解析精度が低いため，漢字かな交じりテキストを元にした解析を行う予定である．KWIC 検索についても，形態素情報からの検索をできるように整備を進めている．

参考文献

井上史雄（2014）「岡崎の反応文の長さと加齢」『大規模経年調査資料集』8.

井上史雄・松田謙次郎・柳村裕(2014)「岡崎敬語「丁寧さ」の変化」『岡崎敬語資料集（大規模経年資料集)」2.

井上史雄・鑓水兼貴（2014）「岡崎敬語反応文漢字かな混じりデータ」『岡崎敬語資料集（大規模経年調査資料集)』3.

井上文子（2013）「方言ロールプレイ会話におけるコミュニケーション機能について」国立国語研究所『国語研プロジェクトレビューVol4』127-135.

熊谷智子・篠崎晃一（2006）「依頼場面での働きかけ方における世代差・地域差」国立国語研究所『言語行動における「配慮」の諸相』19-54 くろしお出版.

国立国語研究所（1958）『敬語と敬語意識』秀英出版.

国立国語研究所（1983）『敬語と敬語意識－岡崎における 20 年前との比較－』三省堂.

国立国語研究所（2010）『敬語と敬語意識－愛知県岡崎市における第三次調査－』科研費成果報告書 第 1～4 分冊.

丁美貞・阿部貴人・井上史雄（2014）「条件節における丁寧さの経年変化□国立国語研究所の岡崎敬語調査からー」日本語学会 2014 年秋季大会.

松田謙二郎(2009)「談話型による第 2 次岡崎敬語調査 3 場面分析の試み」Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin： トークス 12, 神戸松蔭女子大学, 13-19.

Brown, P. & S. C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage.* Cambridge: Cambridge University Press.

第 2 部

岡崎継続調査 12 項目の分析結果
敬語の成人後採用を中心に

第 1 章

敬語の成人後採用序説
―岡崎敬語調査の「川の字」変化―

はじめに

ここでは，国立国語研究所がこれまで半世紀以上にわたって継続した調査のうち，岡崎敬語に関して成果を報告する．この章では，全体の論理の流れを見渡すために，文の長さを出発点にして，丁寧さ，テイタダクの使用，アノーの使用などの関係を論じる．第 2 章以下で個別の現象をグラフに沿って解説する．

岡崎の敬語調査に関してさまざまな現象を分析して意外だったのは，反応文の長さのグラフである．これまで見たことのない年齢パターンが現れた．

「S 字，二の字，川の字」と名付けたこともあったが，外国人にも分かりやすくするために，「S 字，Ⅱの字，＝（イコール）」の変化と名付けることもできる．それぞれの字を傾けて，線をずらした形が，以下で示す経年調査のグラフのパターンと似る．なお「S，Ⅱ，＝」の形は 2 回の調査結果を比べると判別ができるはずだが，実際には鶴岡，岡崎ともに 3 回調査を繰り返して，同じパターンが現れることを確かめて，初めて自信を持って，存在を主張できた．

この章では岡崎敬語調査の中心部分の反応文全体（の合計値）を扱う．11（または 12）個の場面は，道を教えたり，ものを頼んだりするときのことばである．

1．岡崎の反応文の長さの増加

作業手順と生年実年代グラフの読み取り方

反応文の長さは，モーラ（拍）で数えた．長さを測るのに，問題点として複数回答（併用）の処理がある．今回は内容に関わらず，複数回答を取り込んで集計した．数は多くないので，グラフ化して考察する際に大勢に影響を与えることはない．

岡崎敬語調査の分析に有用と判断されたのは，**生年実年代グラフ**である．半世紀以上前から繰り返した 3 回の調査の被調査者全員を，（エクセルの散布図の技法を使って）生まれた年代によって忠実に並べた．このグラフから読み取れることは実り豊かである．

図 1-1 を見よう．グラフの横軸が生年（10 年刻み）で，左が昔のお年寄り，右が今の若い人である．縦軸はモーラ数で，上は文が長い人，下は短い人である（下端が平均 15 モーラであることに注意）．点線は第 1 次，破線は第 2 次，実線は 3 次調査を表す．第 1 次調査は調査員の性質

によって 2 種の線で示した．白いプロットが C，黒いプロットが P である（後述）．線は，すべてほぼ右下がりである．つまり年長の人ほどモーラ数が多く，10 代は少ない．

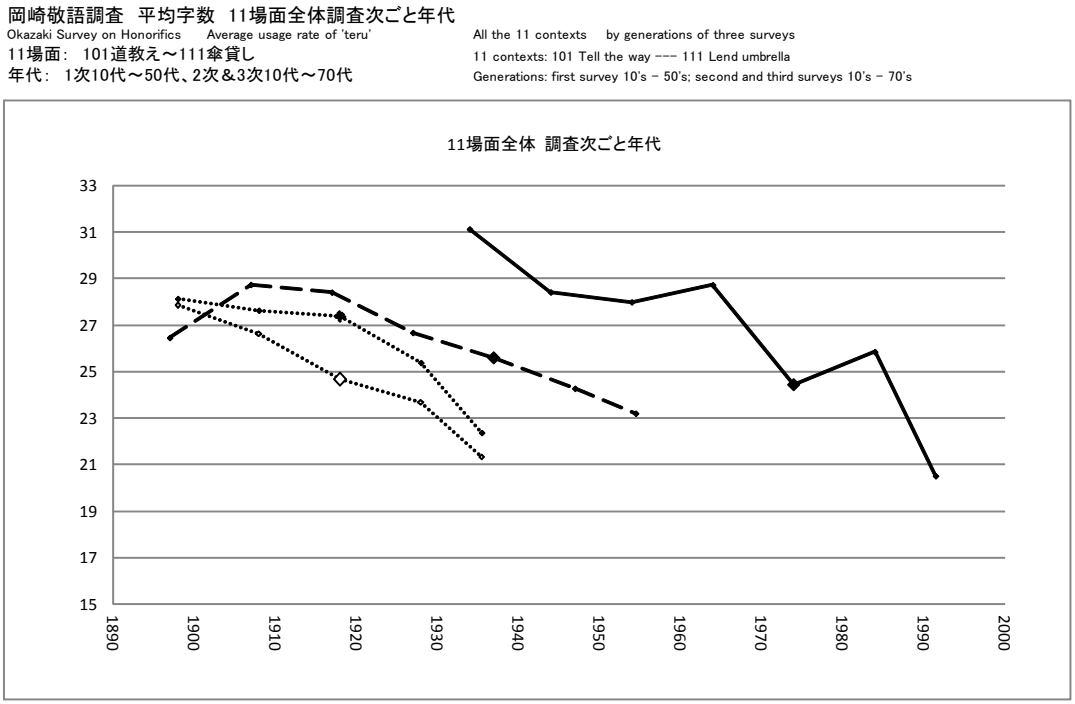


図2-1　11場面全体　調査次ごと年代　（◆：プロパー、◇：コントロール）
Figure 2-1 All the 11 contexts, generations of three surveys　（◆: proper or professional ◇: control or college）

図 1-1　文の長さの変化.

文の長さの「イコール」変化

ふつう年齢差（見かけの時間 apparent time）から見て若い世代で減る現象は，のちに（実時間 real time で）調査を繰り返せば，使用率が減るはずである．古い方言形や死語・廃語の例だと，調査を繰り返すと，右下がりの線がつながって，減り続ける．1 回の調査だけで年齢差をみたら，この右下がりのパターンから，若い人の答えが短いから，将来短くなるだろうと予測する．ところが岡崎で繰り返してみたら，実際には短くはならない．調査のたびに前回の右下がりパターンに復帰する．想定外のパターンである．3 回の調査を通じて平行線を描く点が似ているので，「川の字」変化と名付けた．象形文字の「川」に似た右下がりの線が続くので名付けたが，漢字圏以外にも通じるように「＝（イコール）変化」とも呼ぶ.

また 1940 年前後に生まれた世代をみると，半世紀前の第 1 次調査のときは 10 代で短く答えたのに，第 2 次調査のときに 30 代になって，やや長く答え，第 3 次調査のときには 70 代になり，昔の話者よりも長く答えている．つまり 10 代は手短に話した．その後中年になったら昔の中年と同じくらいの長さで答える．第 3 次調査ではお年寄りになったが，昔のお年寄りよりもっと長く話す．若いときは短くてぶっきらぼうでも，年をとると長くなるのだ．ふつうの言語変化と違

う．同時出生集団・コーホート cohort の比較で，年をとるとモーラ数が多くなるのは，加齢による変化である．なお後述第 8 章のように，パネル調査における同一人物の追跡データでも，年を取るにつれて反応文が長くなる傾向が確認された. しかしデータの偏りのせいではないだろうか. このグラフでは，3 回の調査の 4 本の線が右下がりパターンを示した．第 1 次岡崎調査のデータは 2 種類から成る. 報告書で分析されたのは,「熟練した調査員 6 人」P（Proper だが Professional とも呼べる）のデータで，愛知学芸大学（現愛知教育大学）の男女学生 9 人の対照群 C（Control だが College とも呼べる）のデータは参考にとどめられた．しかしデータとして重要と考え，今回 2 本の線で双方を区別し，同等に扱った．なお第 2 次・第 3 次調査の調査員は，方言研究のフィールドワーク経験者で，特に指示のない限りは「ふだんのことば」を聞きだす態度・技術を身につけた人たちである.

第 1 次調査の P と C の両方を考察対象にしてからは，第 3 次調査まで通しての傾向が見やすくなった．学生調査員が回答を忠実に書きとらなかったという疑いもあった．しかし今回の結果をみると，P も C もほぼ同様の結果を記録している．大学の学生相手のときのほうが，くだけた言い方の答えが得られている．文の長さ（モーラ数）も短い．C 学生調査員の結果は，大まかに見て，歴史的推移の一段古い段階を示すことが多い. 図 1−1 はまさにそのとおりで，第 1 次 C，第 1 次 P，第 2 次，第 3 次の順に左下から右上にならんだ．（人数の少ない第 2 次の最高年齢層を除いてだが.）

年をとった人の回答が長いという傾向は第 2 次調査でも分かっていた（国立国語研究所 1983：p.38，99）．しかし当時第 1 次と第 2 次で同じ年齢パターンを繰り返していることを示すグラフは作らなかったので，重要な現象を読み取れなかったのだ.

岡崎の調査は，場面に応じた反応文を調査員が書きとる「他記式」のもので，言語行動調査における DCT（Discourse Completion Test）に相当する．実際に声に出したものを書きとるので，ロールプレイング（Role Playing）や参与観察には及ばないが，現実の発話に近いと期待される.

同じ質問への回答（反応文）の長さは客観的に定まるもので，問ごとに違うことがあっても，時代（調査次）による違いは少ないと思われていた．また（ランダムな）個人差が大きいと考えられていた．しかし実際には年齢差が大きく現れた．実証困難と思っていたが，同一の調査法を半世紀へだてて大勢に適用したからこそ，確認できた．さらに実時間と見かけの時間が矛盾する傾向を見せた．つまり，特定の生年の話者は，調査の時期が後になり，年齢が高くなるほど長く話す．加齢変化の一種であり，個人内の言語形成期以降の習得，すなわち成人後習得・成人後採用 late adoption の例と考えることができる.

文の長さと加齢について，類似の現象は知能に関する大規模経年調査 Seattle Longitudinal Study でも観察できたという．老年心理学での知見に新たに論拠を加えることになるだろう．Google scholar で verbosity, aging などの検索をすると多くの論文がヒットする．ただし多くは知能の衰えとともに的外れな発言が多くなるという論理である.

右下がりパターンは，鶴岡の経年調査の音韻共通語化の右上がりパターンと対照的である（鶴岡市における言語調査研究グループ 2014）．そこでは 4 回の調査結果がきれいに重なって S 字カ

ーブを描き，100 年ほどにわたって共通語化が完成する過程が示された．言語変化は常にこのパターンをとると思われていた．

2．「ていただく」の増加

同様の右下がりパターンは，図 1−2「ていただく」でも見られた（井上他 2012）．ここには図 1−1，図 1−3 と同じ形に書き直したグラフを掲げる．パターンは「川」または「＝イコール」に近い．

第 3 次調査の年齢の線は凹凸が激しいが，大まかには右下がりで，若い人はあまり「ていただく」を使わない．1 回だけの調査では確言できないが，第 1 次，2 次の調査結果と比べると，増加は明らかである．「ていただく」の最近の増加は全国で報告されている．また近代語史からも，後述の文化庁の世論調査でも明らかである．第 3 次調査の右下がりの線は，敬語行動の成人後採用の典型と読み取るべきである．「ていただく」が敬語論の中で占める位置については，民主化・平等化というキーワードのもとで論じた（井上 1999）．

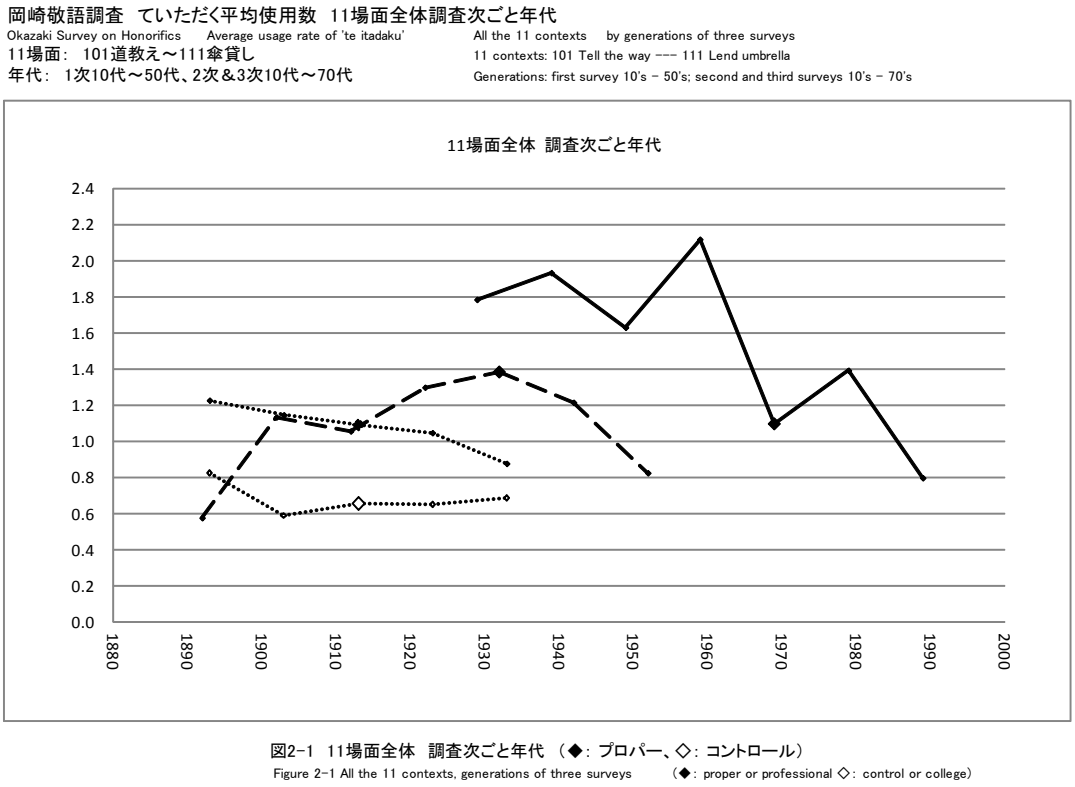


図2−1　11場面全体　調査次ごと年代　（◆：プロパー、◇：コントロール）
Figure 2−1 All the 11 contexts, generations of three surveys　（◆: proper or professional ◇: control or college）

図 1−2　「ていただく」の生年による推移

実は後掲の図 1−3「丁寧さの段階付け」で右下がりの線が描かれたのは，図 1−2「ていただく」の影響である．のちに点数の基準を示すが，「てもらう」などよりも，1 段階丁寧な値が与え

られる仕組みになっているからである．図 1−2 と図 1−3 がそっくりなのは，この計量手法のせいである．凹凸も似ている．「ていただく」の増加が岡崎敬語調査の結果に大きく影響を与えたと見られる．

なお「丁寧さ」で期待される「デスマス体」「デゴザイマス体」の使い方をみると，半世紀の間の変化はわずかである．グラフは第 4 章に掲げる．「デスマス体」はやや増加する．「ダ体」からと「デゴザイマス体」からの移行による．「デゴザイマス」はわずかしか使われないが，成人後採用のパターンを示す．

3. 「丁寧さ」の増加

図 1−1 の反応文の長さとそっくりの右下がりの線を描くグラフがある．「丁寧さの段階付け」の結果である．まさに敬語研究の中心課題で，第 1 次，第 2 次岡崎敬語調査の報告で主題になった．図 1−3 に示す．なお丁寧さの段階は敬意の高い言い方が 1 点，低い言い方が 3 点なので，平均値を出したときなど惑わされやすい．グラフにするときに，点数を反転させる必要が生じる．

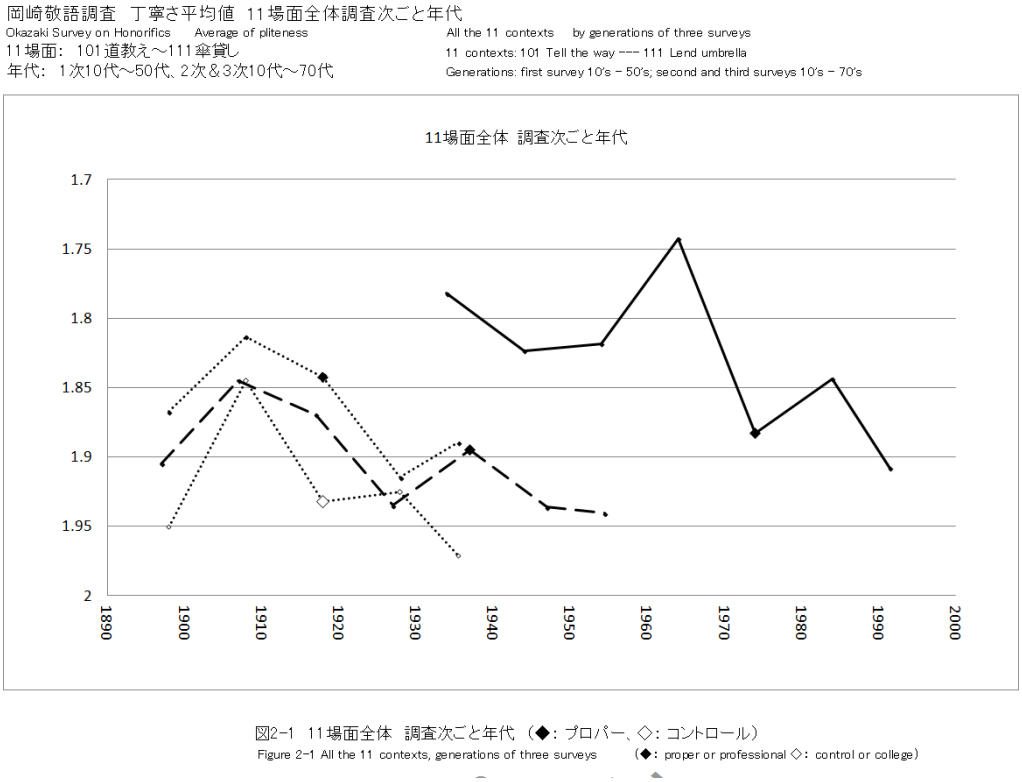


図 1−3　「丁寧さ」の生年による推移

ここでも 3 回の調査の 4 本の線は右下がりである．高年層も数値が下向きになるので，中高と言ってもいい．高年層の人数が少ないせいもあるが，お年寄りは社会活動から遠ざかって，かつ敬老精神を当然と考えて，若いものへの敬語を使わないためとも考えられる．

1940 年前後に生まれた人たちは，（第 1 次調査で若い世代として，第 2 次調査で壮年として，第 3 次では高年層として）3 回対象になったが，半世紀経って際立って丁寧さを増やしている．成人後採用の典型である．前述の「ていただく」をはじめとして，敬語現象で成人後採用が目立ったが，中心課題としての丁寧さでも認められたわけである．これはコーホートの実時間による比較に基づく．一方，3 回の調査の 4 本の線すべてで，世代差という見かけの時間で，中年層以上が丁寧で，若年層は乱暴またはぶっきらぼうという傾向が見られる．理論的射程の大きい現象である．

第 1 次の P と C, および第 2 次の 3 本の線は，ほぼ同様のパターンを示すが，丁寧さの程度（図中の上下位置）にはわずかに差がある．第 1 次では C よりも P のほうが丁寧である．つまり，調査員が学生 C の場合よりも，調査員が研究者 P の場合のほうが，より丁寧な回答が得られたわけである．そして，その両者のほぼ中間に第 2 次の線が位置する．第 1 次の P と C の話者数はほぼ同数なので，両者を平均すると，第 2 次との差がそれほど大きくならない．以下のグラフでも，第 1 次と第 2 次の線は，図 1−1 ほどにきれいに差が出ない．敬語については，個人の中の使い分けが大きいので，調査結果がぶれるのだろう．第 1 次（と第 2 次）の報告書では P のデータしか扱わなかったので，ここまで読み取れなかったのだろう．

4. 言い淀み「あの一」の増加

グラフのパターンから言って，第 3 次調査の右下がりという点で似た様相を見せるのが，広義の敬語にかかわる諸現象である．ここでは談話に関わる現象を取り上げよう．「言い淀み」という日常用語を採用した．「言い淀み」は，談話標識の一つで，「（対人）配慮表現」の 1 種でもあり，「フィラーfiller」「垣根表現・ヘッジ hedge」など，これまでさまざまな用語，現象が指摘されてきた．

ここではその一つ「あのー」に着目する．図 1−4 の生年実年代による 11 場面全体のグラフからは，多くの読み取りができる．録音に基づき忠実に文字化された第 3 次調査の結果をまず読み取ろう．「あのー」使用は，中年以上の世代で多い．相手への配慮だけが使用の原理だとしたら，年をとるほど年下，目下の人が増えるわけだから，言い淀みの「あのー」は減るはずである．もっとも，待遇表現としてではなく，年をとって適切な単語や表現が出なくなったための言い淀みの可能性も否定できない（第 6 章で述べるように，文字化に際しては除いたが）．

しかし第 1 次，2 次の年齢差をみると，わずかな違いだが，むしろ若い世代が「あのー」をよく使っていた．人間関係，対人配慮に関わる表現は，戦後増える傾向にあり，はじめは若い人が（自分より年上の人への談話の）必要に応じて使ったが，現在は社会の民主化・平等化の進行とともにむしろ高年層がよく使う，と解釈できる．言い淀みとして，他に「すみません」なども 3 回目の調査で増えている．また今回はデータを提示しなかったが，場面によっては対人配慮表現などが増えている．

岡崎敬語調査　あの平均使用数　11場面全体調査次ごと年代
Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'a'　All the 11 contexts　by generations of three surveys
11場面：　101道教え～111傘貸し　11 contexts: 101 Tell the way --- 111 Lend umbrella
年代：　1次10代～50代、2次＆3次10代～70代　Generations: first survey 10's – 50's; second and third surveys 10's – 70's

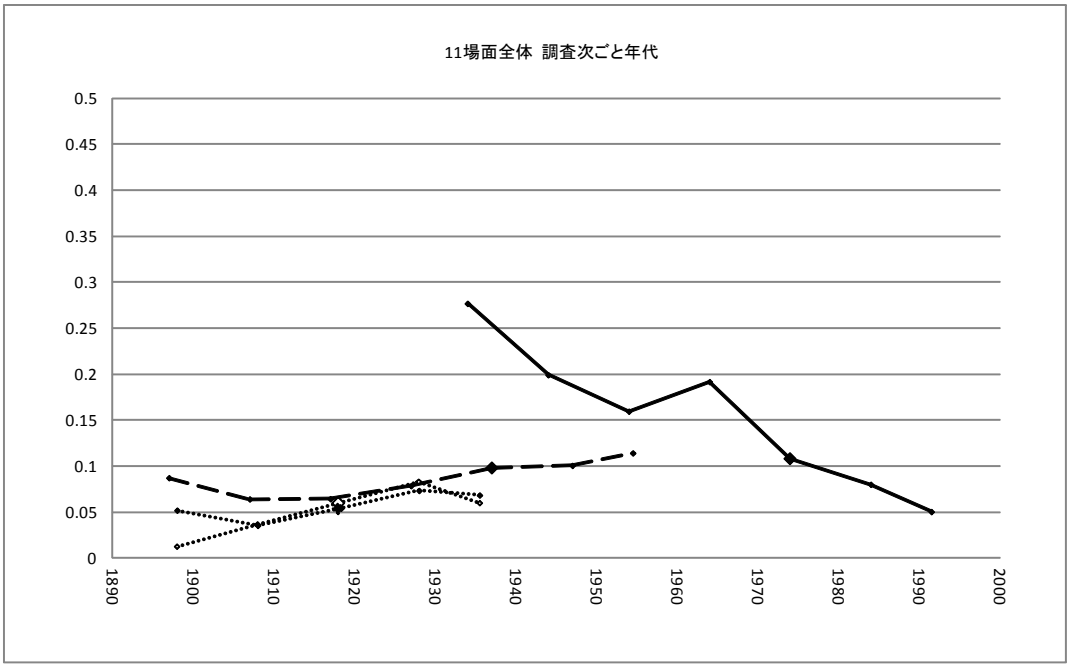


図2-1　11場面全体　調査次ごと年代　（◆：プロパー、◇：コントロール）
Figure 2-1 All the 11 contexts, generations of three surveys　（◆: proper or professional ◇: control or college）

図１−4　「あのー」の生年による推移

５．「ていただく」と長さと丁寧さの相互関連

以上，「川の字」または「＝イコール」の右下がりの線に着目して，岡崎敬語データから得られた 4 個のグラフを分析した．相互に補強しあう形で，敬語関連現象の成人後採用という一般傾向を示した．以下では，諸現象の理論的関係を論じ，かつ視野の拡大の可能性を探ろう．

近代語史の背景からいって明確なのは（2）「ていただく」の増加である．新現象を成人が採用しているのだ．これは，数値化の基準からいって（3）「丁寧さの段階付け」に直接反映する．「ていただく」は「丁寧さ」と似たパターンを示し，同じ現象の別の面である．また「ていただく」は（1）長さに影響する．「ていただく」を使えば，最低数個分のモーラだけ文が長くなる．さらに（4）「あのー」を使えば 3 モーラ分は長くなる．以上が論理的因果関係である．このほかにも半世紀経って長さの増大に貢献した現象はあるだろう．そもそも（1）回答（反応文）の長さは，（3）「丁寧さ」と深くかかわる．日本語の「丁寧」は，長いというニュアンスも含むし，敬語と長さは，正の相関がある．日本語は膠着語だから，丁寧さを表わすのに「敬語添加形式」を多用

すれば，当然長さと正の相関を示す．また言語の統計的性格により，使用頻度数の多い現象は短くなる傾向があり（ジップ Zipf の法則），敬語表現では（日常多く使われないので）この圧力が少ないために，長い表現が保たれる．

さらに，時が経つにつれて，人々は色々なことをことばで表すようになった．「腹芸」とか「不言実行」「言わなくても分かる」「目は口ほどに物を言い」でなくなりつつある．ただしことばづかいの技術・習慣は幼いときに身に付くのでなく，成長とともに，周囲の影響を受けて，採用されるものらしい．「敬語をいつ身につけたか」についての文化庁世論調査の結果によると（第 9 章），学校，職場で身につけたとする人が多く，家庭（つまりは親のしつけ）は大きな働きを示さない．敬語は社会人としての成長につれ，熟練労働として身につくのだ．「敬語は教養のバロメーター」というとらえ方は，個人に固定したものととらえているが，成人後も使用能力を伸ばせる．言語教育でも留意すべきである．

以下の章では，以上の論理を詳しいデータに基づいて論じる．

第 2 章

岡崎 100 年間の「ていただく」増加傾向
―受恵表現にみる敬語の民主化―

はじめに

この章では，対人関係調節のための新表現が，実時間の 100 年間でどのように増加したかを論じる．具体的には，敬語にかかわる新表現「ていただく」における進行中の言語変化を見る．岡崎市の 55 年をへだてた計 1000 人規模の大規模社会言語学的調査に基づき，年齢という見かけの時間を利用する．間隔の異なる 3 回の調査結果を，時間軸を忠実に反映できるグラフ技法によって提示した．「てもらう」「ていただく」が着実に普及しつつあることを，確認できた．日本語の補助動詞の発達，授受表現の普及と一致し，岡崎という東海地方の都市の言語変化が日本語史全体と深く結びついていることが分かった．

新表現が個人の一生の間にいかに獲得されるかを見ると，若い世代が最初に採用するわけではない．敬語やポライトネスなどで，30 代以上の壮年層が最初に新表現を採用する例が認められた．対人関係にかかわる現象に関しては，社会的活躍層が必要性・実用性を感じて，使いはじめる．

この背景には敬語変化の普遍性がある．ヨーロッパの 2 人称代名詞の用法における力関係から親疎関係 power to solidarity (Brown and Gilman 1960)と並行的な変化が，現代日本語の敬語でも起こりつつある．つまり地位の上下による使い分けから，親疎による使い分けに変化しつつある．コミュニケーションの民主化・平等化が進んだと考えられる．また，場面による使われ方の違いをみると，依頼表現に伴って多用されるようになった．つまりかつての身分，地位による敬語の使い方と異なった基準が導入され，(ポライトネス理論で扱うような) 場面ごとの心理的負担や親疎関係がからむ．このメカニズムも，敬語の民主化・平等化として解釈できる．

1　敬語理論と岡崎調査

1.1　敬語の民主化・平等化と「ていただく」

1.1.1 敬語の民主化・平等化とは

現代日本語の敬語は様々な面で変化を重ねている．そのうちのかなりが長期間にわたる歴史的変化の現代的一局面と位置付けられる．かつて三つの変化要因を挙げた(井上 1999)．①敬意低減の法則，②敬語自体の丁寧語化，③敬語の民主化・平等化．その後方言接触を考慮し，④方言化を加えた（井上 2012)．①と②は言語内要因と関係し，③と④は言語外要因と関係する．

このうち③については，多くの研究者が以下のような多様な名付けを行っているが，実質はほぼ同様の現象を指している．身分敬語から役割敬語へ，上下敬語から左右敬語へ，地位敬語から商業敬語へ，力（権力）power から親疎 solidarity へ，縦社会から横社会へ，敬意から心理的距離へ，ウチからソトへ．

これらは，封建的固定的身分制度によって敬語が生じたという世界史的視点からみて，それと対立させる形で「民主化・平等化」と呼べる[10]．敬語の「民主化・平等化」の動きは，文化庁の世論調査でもみられる．また 60 年近くに及ぶ学習院作文に見られる（鈴木 2000）．学習院作文では，謙譲語の代わりに「ていただく」が普及したとみられる（井上 2011）．近代の「四民平等」などのかけ声は，敬語の変容に効果がなかった．戦後民主主義の遅ればせの浸透と一致して進行した現象とみられる．

他に②敬語自体の丁寧語化への動きなどもある．一方従来の文法的敬語の解体への兆しもみられる．文化庁文化審議会の提唱する敬語 5 分類は，現代東京の現状をとらえるにはいいが，過去と未来に拡大するには不便である（井上 2007）．これに伴い，敬語実用書で，「決まり文句，クッションことば，ビジネス用語」を解説し，企業がアルバイターに「マニュアル敬語」，文字どおりの「コンビニ敬語」を教え込む傾向がみられる．

以上の敬語変化の 4 つのメカニズムが岡崎の地でどう作用したかは，未解明だった．以下では「ていただく」に着目するが，第 1 章で概要を述べたように，他の多様な言語要素を考察し，最終的には多変量解析法によって総合的に分析することが目標である．

松田他（2012）では，丁寧さに関する主成分分析の結果を「敬語の民主化」の表れとしてとらえた．本章で扱う受恵表現「ていただく」も，場面の順番は一致を示さないが，語形（発想）からいうと民主化の表れの例としていい．

1.1.2 「ていただく」進出の歴史的背景

以上の敬語変化の流れの中に，「ていただく」の進出が位置付けられる（井上 2011）．「ていただく」は典型的な授受表現・受恵（受益）表現であり，近世以降の発達である．また補助動詞一般も，近世近代の発達による．中世的な助動詞が機能を変えて，代わりに補助動詞が進出したとも言える．近代語の分析的傾向にも合致するし，動詞における方向性の表現とも関わる．

語源にさかのぼると「頂く」「戴く」であり，上から下への動作を示す本動詞に由来する．現今の「ていただく」の多用，頻出は，井上（1999，2011）でも指摘した．「ていただく」の用法の拡大は，使用例の形で多様な研究文献に記されている．また主な使用者は必ずしも若年層ではなく，社会的活躍層といえる．方言差が明らかで，井上（2011）に掲げた日本地図にみるように，

10　経済発展段階によって世界史的に社会体制を順序づけるという考えを踏まえる．ただしマルクス主義のように共産主義が最終的な（理想的）段階とはとらえない．民主化・平等化という名は，そもそも社会経済的レベルの違う共産主義体制と対比させられることもあるために，国家によっては誤解を招く名称だが，すでに「民主化・平等化」として使われているので，変更の必要を感じない(井上 1999)．

関西付近に密に分布する[11]．すでに柳田（1963）が「てもらう」が関西風であることを指摘していたことを思い起こすべきである．

敬意低減の法則が働いて敬意の程度の下がった「てもらう」に代わって，「ていただく」が，進出したのであり，美化語的用法である．ことに 20 世紀末期から，「〜せていただく」の形で東京の話しことば，ひいては標準語・共通語として急速に広がった．「読まさせていただく」のような「さ入れことば」をも派生して，誤用論議を巻き起こしている（佐野 2008）．このような新しい傾向は首都圏で際立つが，少し前の方言分布をみると近畿出自である．

敬語は身分の上下関係を示す機能を薄めた．現代では「ていただく」によって，擬制的な恩恵関係の授受を暗示する[12]．上下関係でなく左右関係を表わし，架空の恩恵関係を用いる表現であり，謙譲語の使いにくさに代わって出たと考えられる．謙譲語は形の上ではすべての動詞に作れるが，実際には用法の制限があり，適切な使用場面が少ない．恩恵関係の生じうる場面なら，受容度が大きい．このように使用メカニズムの難しさがあるのに加え，形の混乱があり，尊敬語との混同が敬語実用書で指摘される（井上 1999）．

井上は左右敬語として位置づけたが，似た考えは，他にもみられる．例えば吉岡（2011：28）参照．また山岡他（2010: 153）は配慮表現の一つとして，「授受受動化」をあげる．文法的な敬語と別な形で人間関係を調節し，待遇表現を使いこなす．

1.1.3 変化メカニズムと受恵表現の拡大

敬語の民主化・平等化の動きは，敬意低減の法則と同じく，多くの面に現れる．使用者の増加，使用場面の拡大，用法文脈の拡大などである（井上 1999）．そもそも個々の言語変化は多くの要因の複合によって生じるし，他方変化要因は多様な言語変化に現れる．もちろん作用の強弱がある．そのうちで強い因果関係（結びつき）を示すペアを取り上げると説明しやすいが，多様な関係を忘れてはいけない．民主化・平等化を示す敬語事象は多いが，その典型が「ていただく」の普及である．論理的に説明しやすく，分かりやすいのが利点である．

1.2 岡崎データの理論的位置付け

1.2.1 二つの視点

以下では具体的データとして岡崎敬語調査の結果を利用する[13]．従来にない視点として，(1) 受恵表現に着目して，狭義の敬語以外の現象をみる．また (2) 時系列の実年代の表示技法を改良し，また散布図を利用し，半世紀の増え方が一定傾向を示すことを明らかにする．これは，表示技法の有効性とともに，岡崎調査データの信頼性の高さを示す．岡崎データには多様な分析が可能なことを提言したいが，本章はその 1 例である．

---

[11] このために司馬遼太郎の謬説が広がった．「ていただく」を浄土真宗の教理と結びつけるのは，時代錯誤である．

[12] 受恵表現は方向性を示すので，人称指示の代用もなす．

[13] エクセルデータが希望者に公開される．国立国語研究所ホームページを参照．

1.2.2 理論的背景

敬語については，地理と歴史（空間と時間）の対応として，方言分布と日本語史のきれいな呼応がみられる．タブーを出発点に，絶対敬語から相対敬語へ（金田一 1959），さらに丁寧語化への変化は，文献国語史でも確認され（辻村 1968），また地理的（方言）分布としても観察される．ただし，現代は従来のいわゆる敬語形式の出現だけではとらえきれない状況になった．現代敬語を適切に分析，記述するためには，待遇表現，配慮，ポライトネスなどの言語行動を広くとらえる視点が必要である．受恵表現の「ていただく」が顕著な例で，左右敬語，対者敬語化の具現と言える．岡崎敬語調査は，現代日本語敬語の動向と対応をみせる[14]．前述の敬語の民主化・平等化についても，岡崎敬語の半世紀は近代・現代敬語の動向のかなりの期間を実年代で示す．

1.2.3 調査文の実例　道教えと医者

以下では，岡崎調査の質問文と回答の具体例を，大づかみにみる．まず「てもらう」は，荷物預けと医者の場面で同じ程度に使われるようになった．荷物預けでは純粋の受恵表現が使われ，医者ではいわゆる敬語表現が伴う．次に「せていただく」は依頼場面で急増した．相手の動作に「てもらう」「ていただく」を使うのは，左右関係・受恵関係を疑似的に示す．

1.3 敬語変化の見方とデータの必要性

1.3.1 背景: 敬語変化の見方

言語変化は様々な形で観察できる. いわゆる誤用は, 変化の先駆けとみることができる. 一方, 現実の使用状況をみると，すでに普及していることが分かることがある．文化庁をはじめとする世論調査でも分かるし，インターネットで使用例を探しても分かる．これらはのちには正用とみなされるだろう．このプロセスは，かつて（例えば戦前）の敬語指南書などで指摘された誤用が，今は正用として堂々と使われることでも示される．岡崎のデータもある時点での慣用を示すととらえうる．

方言（共通語化）調査や 2 言語併用の研究成果と合わせると，恐らく 3 世代（つまり 100 年前後）が，言語変化に必要な最少年数だろう．しかし大きな地域社会では，いわゆる誤用の拡大過程や変化が一斉に起こるわけではない．場面による使い分けもあり，新旧が併用される期間も長い（井上 2008.5: 115，井上 2002.2 第 27 章）．敬語については，残念ながら戦前の実地調査結果は管見の限り見当たらない．戦後間もなく岡崎で行われた調査は，後世の研究の重要な礎石，基準点，出発点になる．岡崎での変化の速さは，世代差を考慮に入れて，基準になりうる．

---

[14] 井上の口頭発表（2012.3）で全国の「いただく」の増加について言及した．それに関して辻加代子の「岡崎でも増えているようだ」との一言がきっかけになった．実際にどのように増えているか，以前の調査データと照合しながら考察する．

1.4 岡崎敬語の世界史的・日本史的位置付け

1.4.1 岡崎敬語の位置付け

東海地方の 1 都市岡崎の調査データを扱うに際して，広い視野のもとに位置付けておきたい．国立国語研究所の研究発表会（井上 2012a）では，敬語の世界的分布，世界史的発展過程を紹介し，かつ日本語史における発達過程と方言分布が周圏論的な対応を示すことをみた．岡崎の敬語は，古代的敬語を残す地域に近く，近畿の中世的敬語と関東の近代的敬語との接触点にあると，位置付けた．既発表の論考を参照されたい（井上 2011.12，2012b）．

彦坂（2015）によると，岡崎市は方言敬語を東西に分けたときの西側タイプの東のはずれと位置付けられる．吉岡（2000）もほぼ同様のとらえ方である．今後は文化庁「国語に関する世論調査」のデータなどを使って，実証的に位置付けることが可能になるだろう．

同じ岡崎のデータのうち，美化語についてはすでに分析した（井上 2012b）．「お野菜」「お車」を敬語と思わない人が増えている．本来の敬語的機能を果たしていた要素が変質したわけで，「ていただく」の進出の鏡像としての，意識の衰退である．

1.4.2 言語変化の拡大過程　誤用・慣用・正用

岡崎調査のように，生年で言って 100 年以上に及ぶ実態が分かる意義は大きい．長期的歴史的変化と個人の人生経験（個人史）の結節となりうるし，進行中の言語変化のタイムスパンを延長することにも役立つ．

以下の岡崎 100 年のタイムスパンに及ぶ調査結果（国立国語研究所 1983，2010）は，この数百年の敬語発達史の一貫した動きの，かなりの部分をカバーする．また岡崎の 100 年は，個人の一生（記憶としての数十年）より長い．つまり岡崎調査は，日本語史と個人史の両方をつなぐ効果がある．さらに『方言文法全国地図』GAJ（国立国語研究所 1989～2006）でみると，岡崎は「ていただく」の元の分布地域の東端よりさらに東に離れている．東京には「ていただく」が飛び火の形で伝播したと考えられる．「ていただく」は大都市調査（国立国語研究所 1981）にも現れるので，年齢層別に対比すれば分かる．岡崎の 100 年間の推移と，東京の近代語史とを対比することによって，伝播の様相が実証できるであろう．

2　岡崎「ていただく」点数の増加傾向

2.1. 「ていただく」点数の全体的増加傾向

2.1.1 「ていただく」平均点数の計算

岡崎調査 3 回の受恵表現を大きくとらえるために，「てもらう」「ていただく」に点数を与えて，第 3 次調査の値で項目をソートした．その順番に項目を並べて，第 3 次の全項目を 1 枚のグラフにし，同じ順番で第 1, 2 次のグラフも作った．

この順番が報告書（国立国語研究所 1983）の丁寧さの順番とどう関係するか，これは数値化し，散布図で考察できる．「てもらう」1 点，「ていただく」2 点とし，12 問全部の平均値を出した．

敬語としての価値が違うので，数値化に差を付けた（岡崎第 1,2 次調査で「丁寧さの段階づけ」をしたと同じ発想である）．1 問（1 場面）に複数の受恵表現が出た場合には，それぞれに点数を与えた．医者の場面などは，複数使われることがある．反応文の受恵表現の全活用形を調べてあると考えていい．場面ごとの人数が違うので，使用率（%）を出して作成した．グラフラベルは，岡崎科研報告書（国立国語研究所 2010）の第 3 次のラベルとほぼ一致している[15]．

2.1.2 「ていただく」点数実年代グラフの解釈

第 1 次と第 2 次と第 3 次の調査の間には，19 年と 36 年という隔たりがあり，第 3 次調査が 2 倍ほど離れている．

第 1 次：1953 年
第 2 次：1972 年　19 年後[16]
第 3 次：2008 年　55 年後

グラフ作成技法として，コーホート分析（国立国語研究所 2010）に向く形式をとろうと試みた．単純な折れ線グラフを作ったときに，線の傾斜角度がそのまま変化の速度や大きさを示すわけではない．調査実施の実年代に忠実にこれを表現するには，エクセルの散布図にすればいい．または横軸を「時系列」にすればいい．

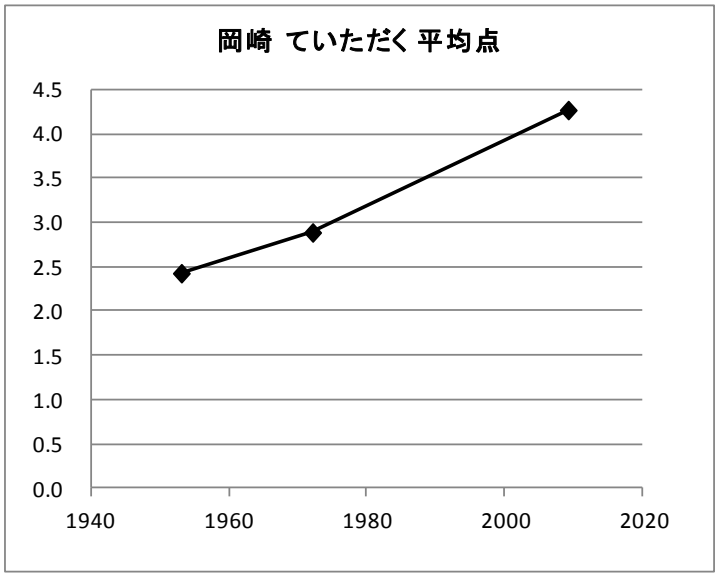


図 2 - 1　岡崎「ていただく」平均点　実年代散布図

図 2 - 1 では調査年の実際のへだたりを表現した．「てもらう」「ていただく」という表現の平均点は，確かに岡崎で増えている．図 2 - 1 で，3 回の調査はほぼ同じ傾向線をたどっている．散

[15] 第 1,2,3 次調査で入れ換えた場面があり，対応する名前が違っている．
[16] 9 年間隔または 19 年間隔で年齢層を区切ると，3 回の調査の間隔と年齢刻みがかなり一致するが，普通の 10 年刻みの年齢層と食い違うので，読み取りが厄介である．

布図は棒グラフか折れ線グラフと違って，タイトルなどが自動的に出ない点は不便だが[17]，数式の読み取り，説明も可能である．このように，現実をよく反映するために，現象の読み取りもたやすいし，さらに高度な理論的視点を導入するきっかけを作る．実年代散布図の技法については，他稿を参照されたい（井上 2012.5）．

2.2 「ていただく」点数による場面の順番の変化

以上で示したのは，3 回の岡崎調査全体の数値だった．以下で細分したデータを考察する．考察はデータ行列の 2 次元に分けられる．まず，場面別の分析を行い，次に年齢層別の考察を行う．

2.2.1 調査場面の略称の変更

以下で調査の場面（項目）に分けて論じるが，この第 3 次調査報告書で場面の略称を変える．第 2 次と第 3 次の調査で，時勢に合わせて場面設定を変えた(国立国語研究所 2010 第 2 分冊)．第 2 次調査ではほぼ同じ場面と見て，のちの場面の略称を採用したが，変更したことが分かりにくいので，変更のあった 102 番と 106 番，112 番については，以下のように複合した略称を用いる．

101 道教え，102 電報用紙→電報振込，103 荷物預け，104 傘忘れ，105 先生，106 電灯料→電灯新聞，107 議事堂，108 医者，109 席譲られ，110 おつり，111 傘貸し，112 魚釣り→物売魚釣．

2.2.2 岡崎 3 回調査の場面別の傾向と負担の大きさ

以下では，個々の場面の違いを分析する．まず 3 回の調査のそれぞれについての合計を扱う．年齢層別にする前に，全体的傾向を読み取ろうという戦略である．「てもらう」1 点，「ていただく」2 点として，総合点で考察する．

2.2.3 点数化　場面別グラフ

点数化した結果を，第 3 次調査の数値の順でソートして，図 2 - 2 に示す．まず場面の順番をみると，右端の医者，荷物預け，新聞代（確認），おつりなど，相手の負担の大きい場面で点数が高い．ポライトネス理論からいっても，説明できる．道教え，議事堂（道聞き）のように，相手の負担のそれほど大きくない場面でも点数が高いのは，後述のように，最近の「ていただく」の進出（過剰用法）の反映である．他の場面では点数が低い．

同じく図 2 - 2 で，3 回の調査結果の比較をしよう．全体として後の時期の調査になるにつれて点数が高くなる．つまり「てもらう」「ていただく」という受恵表現が増える．第 3 次で受恵表現が多くなったのは，荷物預け，新聞代，道教え，議事堂である．例外は右端の医者である．医

[17] ラベル付き散布図のプログラム XY Chart Labells をダウンロードすれば可能になる．本論文の図で利用した．

者は前から多かったが，第 3 次であまり増えない．対話者どうしの心理的関係（受恵関係，左右関係）が前面に出た，と解釈したくなる．のちに詳しく考察する．

図 2 - 2 は，後掲の図 2 - 3 と同一のデータで，図示の技法が違うだけである．3 回の調査の詳しい比較は，図 2 - 3 で論じ直す．

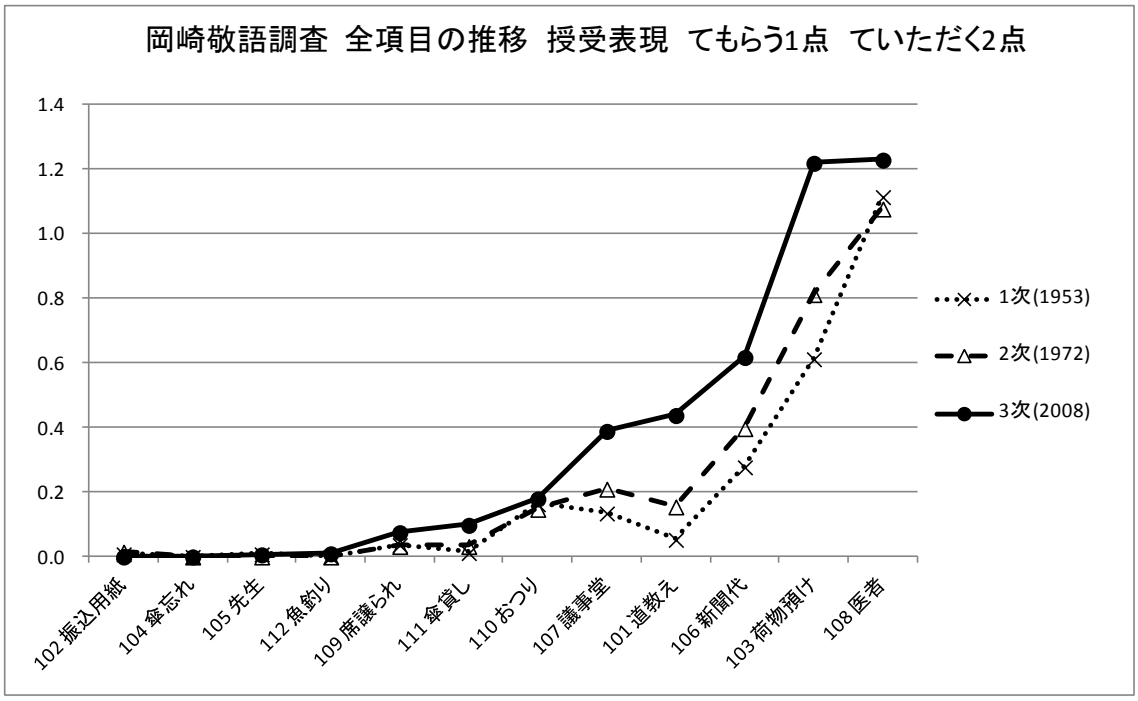


図 2 - 2　岡崎「ていただく」場面別平均点

2.2.4 岡崎 3 回調査の場面別の「ていただく」点数増加パターン

これ以降は 11 場面別に 3 回の調査の結果を考察しよう．図 2 - 1 で利用した技法を使い，第 1,2,3 次の調査間隔を忠実に表わす形でグラフを提示する[18]．

図 2 - 3 は，図 2 - 2 と同じデータに基づくグラフである．3 回の調査の結果を時系列に忠実な形で示す．多くの場面で 3 回の調査結果が直線で表現された．時系列を忠実に示すという技法の有効性を語るし，また岡崎調査 3 回の信頼性の高さをも表わす．線を前代に伸ばすと，1900 年代前半で横線の 0 に交わる．例外的に増加を示さない場面は，医者とおつりである．

本章 5.11 で述べるように，図 2-3 の「ていただく」では，行動要求 3 場面（医者，荷物預け，電灯新聞）が上位を占めて，説明原理として有効である．心理的優位の 4 項目（電灯新聞，道教え，おつり，傘貸し）は中位に散らばり，場面分類の要因としては働かない．親疎関係も働かな

[18] 3 時点の線の傾斜を外挿すると，左に出発点としての年代を想定できる．様々な線を想定できるが，詳論は他稿に譲る．ここではグラフ左側に空白の年代をとって，20 世紀に発生したかの印象を示すにとどめる．

い.

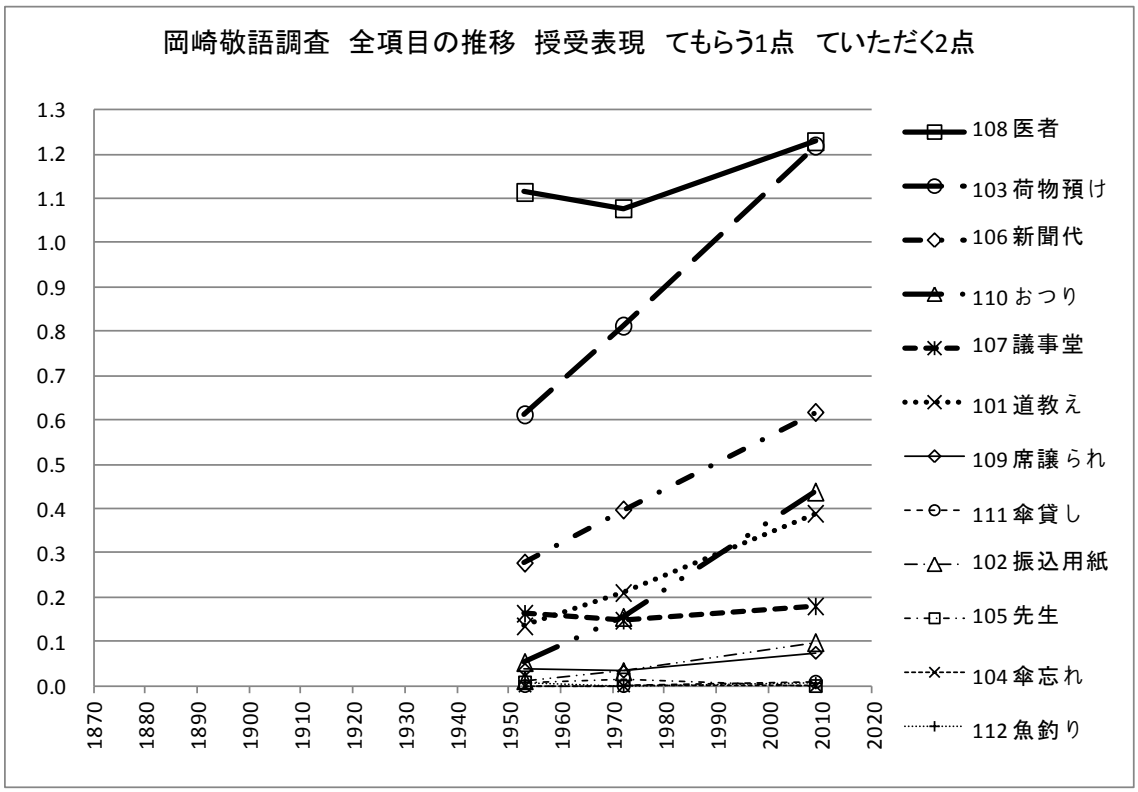


図 2 - 3　岡崎　全項目の授受表現の推移の散布図

2.3. 場面の構成

岡崎調査の場面は，表 2-1 のような構成を持っている（第 3 次調査の準備として江川の整理したものに一部改変を加えた）．表右端に談話類型が示してあり，伊賀上野調査と岡崎第 1 次第 2 次調査での丁寧度の順位が記してある．依頼とされた 4 場面（108 医者，103 荷物預け，102 電報用紙，107 議事堂）で丁寧度が高い傾向がある．この 4 場面は心理的に劣位にあると位置付けられている．第 3 次調査を加えての「てもらう」「ていただく」についても似た傾向があるが，疑義とされた 2 場面（106 電灯料＝新聞代，110 おつり；心理的に優位）でも高い点が違う．

表 2-1 岡崎調査の場面（項目）一覧

岡崎面接調査場面

問番	報告書での略称 1回目	報告書での略称 2回目	「各調査関連一覧」(国研報告11)でのラベル(390p.) 場所	事態	性・年層	相手	親疎	上下	心理	談話類型	丁寧度順位 上	①	②
101	道教え	道教え	東岡崎駅前	道を教える*	m23	旅の人	疎		優	応答	11	11	10
102	電報用紙	電報用紙	電信電話局	電報用紙をもらう	m23	局員	親/中		劣	依頼	3	4	3
103	荷物あずけ	荷物預け	買いつけの店	荷物をあずける	m23	店の人	親		劣	依頼	5	3	2
104	傘忘れ	傘忘れ	バスの中	忘れた傘を注意する	m3	見知らぬ人(中年)	疎		優？	注意	7	2	4
105	先生	先生	公園	昔の先生に話す	m5	恩師	親/中	上		応答	6	7	8
106	電灯料	電灯料	被の玄関	電灯料の集金人	m23	集金人	疎		優	疑義	9	9	7
107	議事堂	議事堂	東京の路上	道を聞く	m23	見知らぬ人	疎		劣	依頼	4	6	5
108	医者	医者	医院の玄関	医者に頼む	m5	医者(かかりつけ？)	親/中	上	劣	依頼	1	1	1
109	席ゆずられ	席ゆずられ	バスの中*	席をことわる	m1	学生(高校生？)	疎	下		応答	2	5	6
110	おつり	おつり	買いつけの店	おつりが足りない	f3	店の人	親		優	疑義	8	10	11
111	傘貸し	傘貸し	被の家の前	傘を貸す	m23	知人(少し知っている)	中		優	勧誘	10	8	9
112	物売り		被の玄関	物売りにたずねる	m0	物売りの子ども	疎	下		質問	12	12	
		魚つり	川べり	子どもにたずねる	m0	魚つりの子ども							12
113	市役所	市役所	道路上	目上の人に話す	m5	目上の他人	親/中	上		応答			
114	×	公害問題	集会	意見を言う		多数	疎			意見陳述			
115	×		先生の家	先生にたずねる		恩師	親	上		質問			

113の第2回調査全国調査Ⅱ('53年度実施)の改定に従っている(報告11、148p.)。状況設定と絵の使用。
*電車の中　*道を聞く

上：上野調査
①：岡崎1回目
②：岡崎2回目

注1) 上野調査では「友人に今夜遊びに来るように誘う」場面があり、この場面が丁寧度が最も低い。
また、「議事堂」の他に「(津市で)県庁」があるが、両者の丁寧度は微差。
注2) 岡崎1回目の調査では「市役所」場面の丁寧度は「物売り」をやや上回る12位。

「引き回し(の場面録音)調査」(面接調査infから男女各6名、年齢は壮老各6名)
① 電報局で電報用紙をもらう(面接102場面)　「張り込みの場面録音調査」にも
② 道で先生に会う(105場面)
③ 道で知らない旅人に市役所へいく道を聞かれる(101場面)
④ 買いつけの店(酒屋)に荷物をあずける(103場面)
面接調査との突合せの結果は報告11の220—225pp.参照

2.4. 年齢層別 100 年の「ていただく」点数増加傾向

図 2 - 4 では，図 2 - 1 と同じ散布図技法を拡大し，「てもらう」1 点，「ていただく」2 点とした平均点で 3 回の調査の各年齢層を，調査実年代のずれを忠実に反映した位置にプロットした．

敬語に関する世論調査やアンケート調査の分析経験から，10 代は未熟で，将来の敬語の予測に役立ちにくいこと，社会的活躍層として 30 代前後が敬語使いこなしのピークになることから，折れ線グラフの 30 代に大きな◆マークを付けて目立たせた．また 30 代が全体の平均値に近いこともある．このマークは 3 回の調査の折れ線が重なって見づらいときに，3 本の線の判別にも役立つ．

まず図 2 - 4 の全体を考察しよう．あまりきれいでないのは，現実の複雑さを反映している．近似直線を手がかりにすると，3 回の調査を通じて点数が増えている．また 30 代の回答（◆）も近似直線に沿った形で増えている．30 代が全世代の平均値に近いという予測は正しかった．またグラフで垂直にみると，1940 年前後に生れた同じ世代の人が，3 回の調査で得点を増やしていることが分かる．

10 代と 60，70 代がパターンを乱しているようである．3 回の調査で 10 代の数値が低いのは，場面の位置付けが社会的に変わった可能性も否定できないが，受恵表現を使う場面に十分に接していない未熟さのためと考えられる．敬語は個人がライフスパンの中で新たに習得するもので，社会的活躍層として身に付く．敬語現象の多くが壮年期に最大値を示す．ある場面での適切な表現として受恵表現「てもらう」「ていただく」が社会に広がり，成人後採用 late adoption が行わ

れたと説明できる (Boberg 2004, 井上 2012.3a, Inoue & Yamashita 2014). 高年層に関しては, 岡崎調査での人数が少ないせいか, または高齢化により適切な反応が得られなくなったかが原因だろう[19]. グラフ上で 70 代を点線に加工して目立たなくすると, すべての年代で使用率が上昇することが分かる[20].

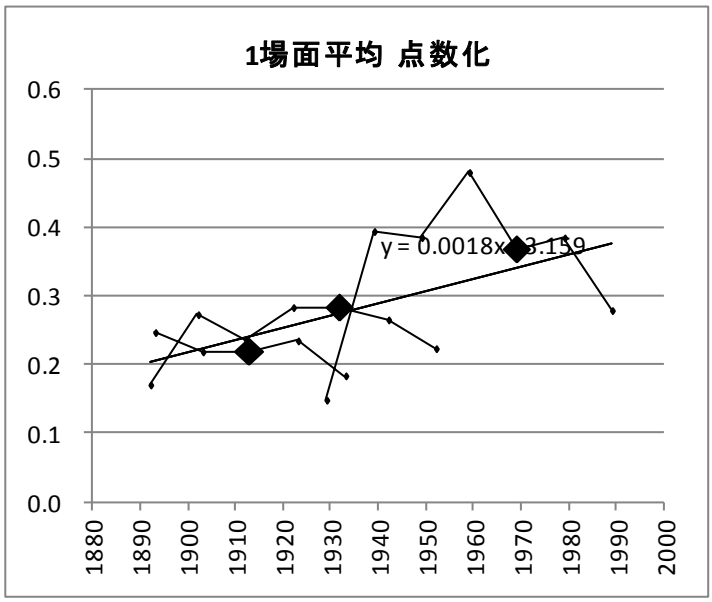


図 2 - 4　岡崎「てもらう」「ていただく」平均点の世代別散布図

3　「ていただく」単独の増加傾向

3.1　「てもらう」と「ていただく」の区別

これまでは, 受恵表現全体を見渡したいと考え,「てもらう」1 点,「ていただく」2 点として, 点数化し, 総合点で考察した. 個別にみる必要もあるので, 以下では, それぞれ別語形として考察する. その結果,「てもらう」「ていただく」が一部異なった行動を示すことが分かった.

以下図 2 - 5, 図 2 - 6 のグラフで縦軸は各個人ごとの 12 問全部の平均値（使用率%）を示す. 横軸は西暦で, 調査年のへだたりを「時系列」として忠実に示す手法を用いた. 年齢構成が違うので平均年齢で示す.

3.2　「てもらう」の増加と「ていただく」の増減

以下では「てもらう」「ていただく」を区別し, まず図 2 - 5 で「てもらう」の使用率を示す.

19　記憶と言語磨滅には鏡像性がある. 人生後期に身に付けたものは早く忘れられる.
20　10 代の答えを無視すれば, 増加傾向はもっとはっきりする.

全体として右上がりで，3 回の調査を通じて一定速度で使用率が増大したと解釈できる．場面の順番はこれまで「ていただく」点数によって考察したものと同様である．この「てもらう」という非敬語の語については，わずかの差で荷物預けが医者の上位に立つ．また「おつり」の場面でも第 2 次の使用率が落ちている．医者，荷物預け，新聞代で急に増えた．

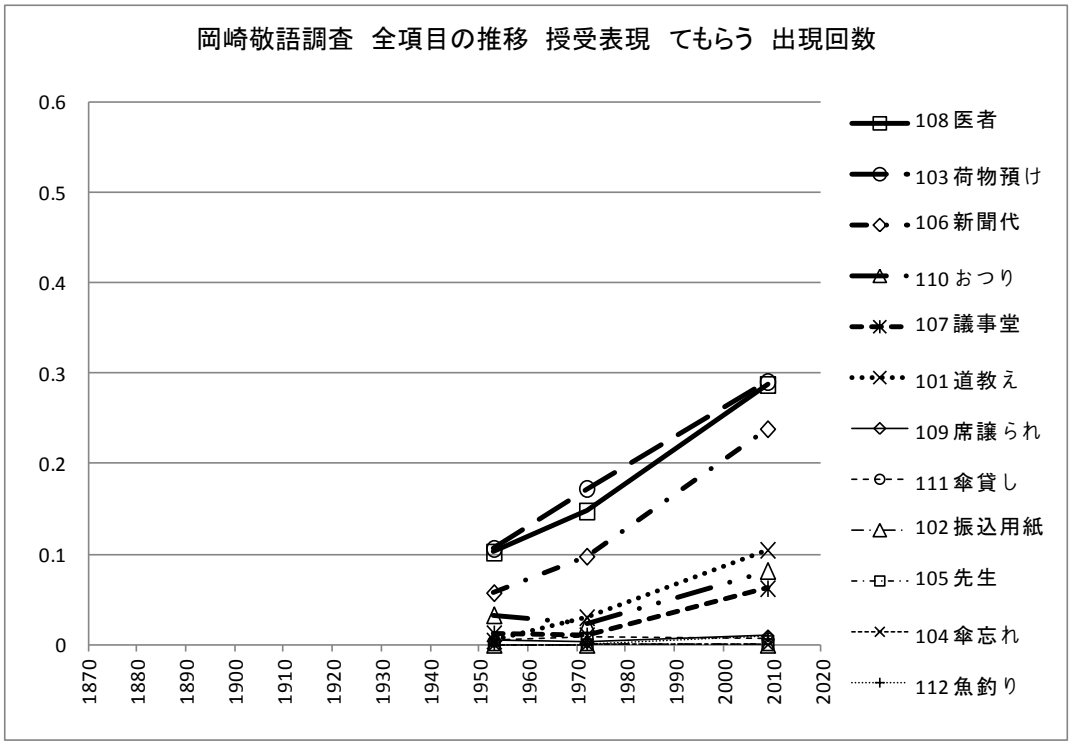


図 2 - 5　岡崎「てもらう」使用度数　場面別実年代散布図

図 2 - 6 は「ていただく」の使用率を示す．図 2 - 5 にくらべて全体の使用率が大きいようにみえるが，医者と荷物預けでの多さによる．荷物預けでは，敬語的表現が急に増え，3 回の調査でみごとな直線的増加を示している．荷物預けの場面の順番はこれまで考察したものと同様である．他の言い方は微増か横ばいか減少であり，敬語と連動するわけではない．

図 2 - 6 で，第 1 次で圧倒的だった医者への「ていただく」が第 3 次にかけて減少気味であることが目立つ．往診を頼むことが少なくなり，質問文も第 3 回で「(近所の) お医者さん」のようにカッコ内が加わったためでもあろう．また医師と患者との力関係，社会的位置関係が変化したことも影響している．敬語の民主化・平等化の発現とみられる．なお，この医者への「ていただく」の減少が，これまでの全体の平均点に影響を及ぼしたと，みることができる．

下位の項目では「てもらう」と「ていただく」の使用率の違いが目立たない．前述のように「ていただく」が依頼場面で急に進出した．

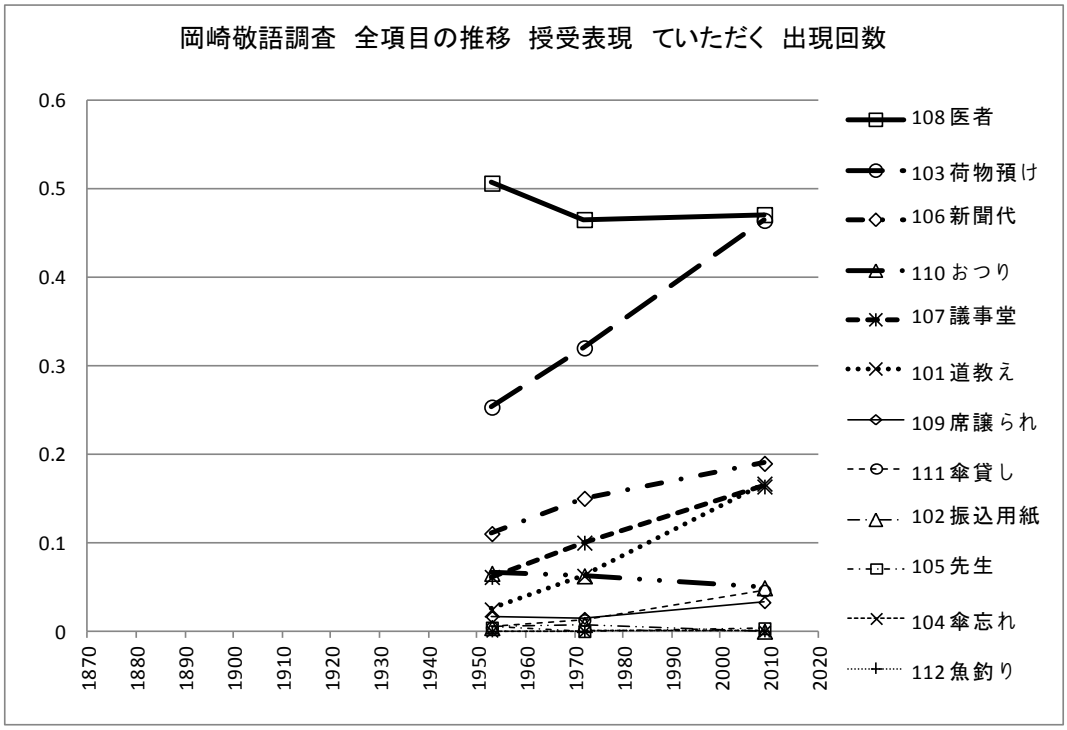


図２-６　岡崎「ていただく」使用度数　場面別実年代散布図

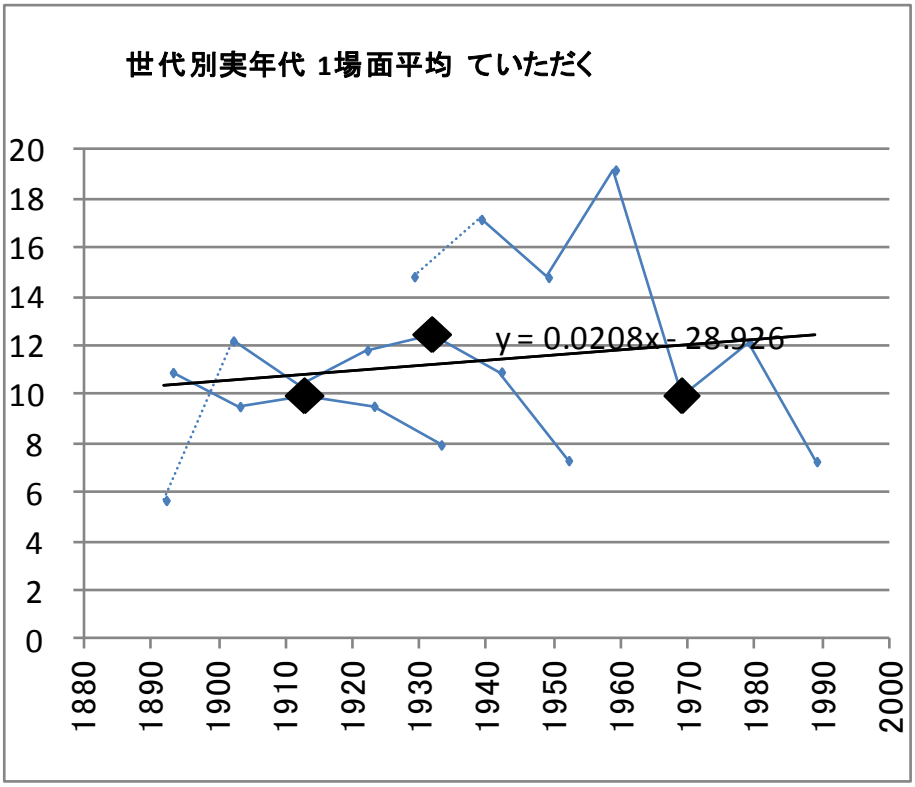


図２-７「ていただく」の生年実年代による推移

図 2 - 7 は，図 2 - 4 と同様の散布図で，「ていただく」のみの使用率平均点で，3 回の調査の各年齢層を調査実年代のずれを忠実に反映した位置にプロットした．図 2 - 4 にくらべて，3 回の調査結果の違いが大きい．背景にある「てもらう」の微増傾向と対照的である．対等な人どうしの恩恵のやりとりを暗示する授受表現として普及し，「ていただく」という一段丁寧な敬語表現として，この半世紀ほどの間に急に増加したわけである．

4. 「ていただく」と字数

4.1 字数のグラフ表示技法

受恵表現が増加し，「ていただく」が普及すれば，当然字数・モーラ数が（5 モーラ程度）増える．効果がどの程度ありうるかを検討しよう．

生年の違いを無視し，場面（問い）ごとに分割して 3 回の調査の平均点を示す．図 2 - 8 は従来の岡崎調査報告書 2 冊で用いられた図と同等のものである．後掲の図 8−2 では調査間の年数の違いを忠実に表現できたし，場面ごとの増減も分かりやすい．それに比べてこの図 2 - 8 は，点線と実線の上下関係を手がかりにするのがせいぜいで，増減が読み取りにくい．第 2 次調査の破線まで考慮に入れるのは困難である．岡崎第 2 次報告書ではこのタイプのグラフが用いられた．視覚化の手法によって読み取れることが違う例として，提示する．

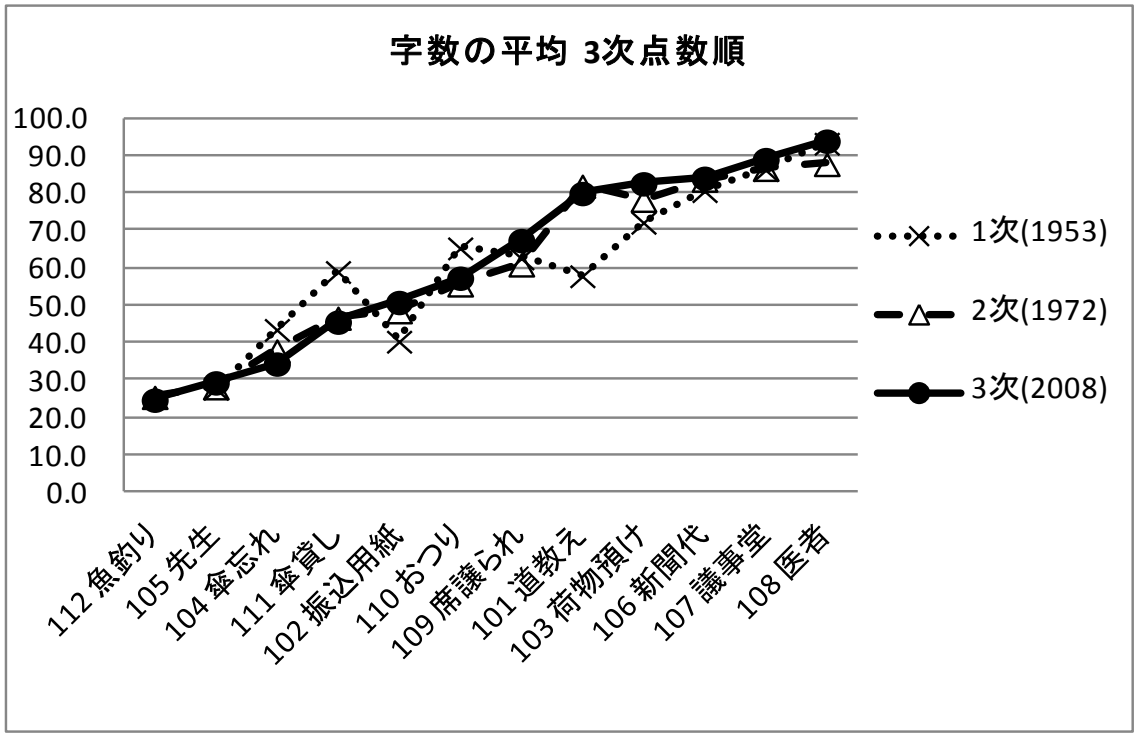


図 2 - 8　字数の平均　場面別

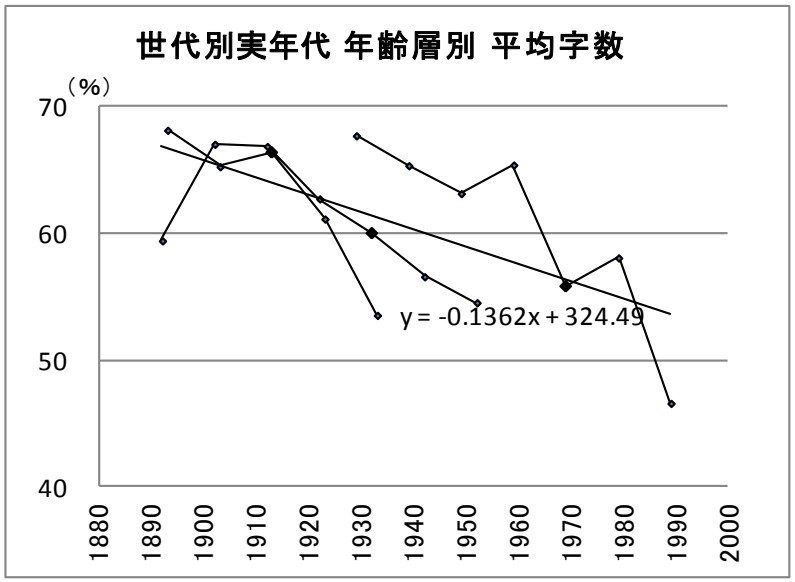


図２－９岡崎字数年齢層別

4.2 字数減少傾向と受恵表現の増加とストラテジー

ところで，一般に発話や文の長さが「丁寧さ」に影響すると考えられ，受恵表現も関連が想定される．岡崎調査の回答の字数が多くなったためだけで受恵表現が多くなったとしたら，これまでの議論は幻にだまされたことになる．第３次調査での増え方は，反応文が長くなったためとも考えられる．

字数の計算は，電子化された岡崎データでは簡単である．図２－９に示す．３回の調査の年齢差を通してグラフ化してみると，減少傾向を示す．３回とも中年以上は字数が多く，若いほど簡潔である．確かに時代的にことばをあまり使わなくなる傾向がある．無口化といえる．

だとしたら，談話のどの要素が略されるのかも課題になる．相手の領域（縄張り）に踏み込まないように，ことばを使わない傾向が出た可能性もある．松田他（2012）によれば，傘貸し場面で「補償ストラテジー」および「相手の困った状況に言及した頻度（割合）」が減少している．他の場面でも同様の推移が予測される．一方簡潔な別のストラテジーを活用して円滑なコミュニケーションを図っている可能性もある．

対人交渉として声をかけるか，どのような言い方をするかには，地域差がある（小林・澤村 2010）．一般に都市化，都会化が進むほどことばを使うことが多くなる．産業構成から言っても，第１次，第２次，第３次産業になるにつれてことばに頼る場面が多くなる．村社会，村落社会では，家族か親戚のように気心の知れた仲間が多いので，ことばに頼って説得したりする機会はそれほど多くない．受恵表現「ていただく」の進出は，この文脈で考えるべきである．岡崎調査の字数の減少は，独立に検証されるべきで，「ていただく」と字数・モーラ数との関係については，第７章でも考察する．

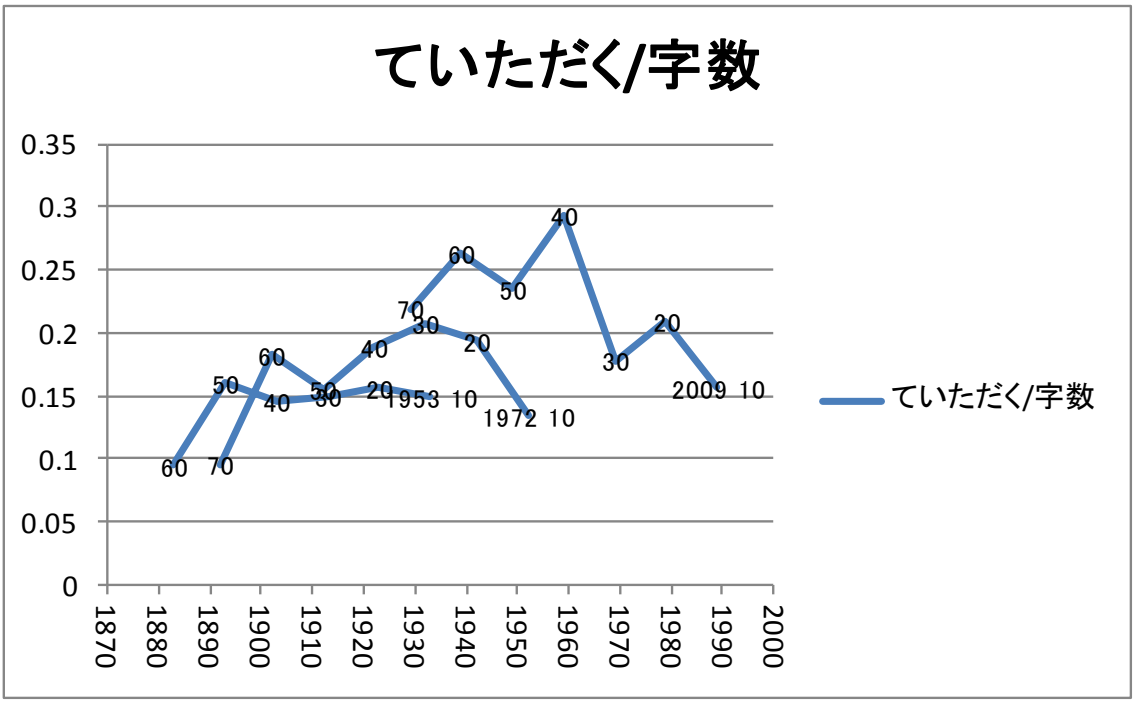


図 2 - 10 「ていただく」と字数

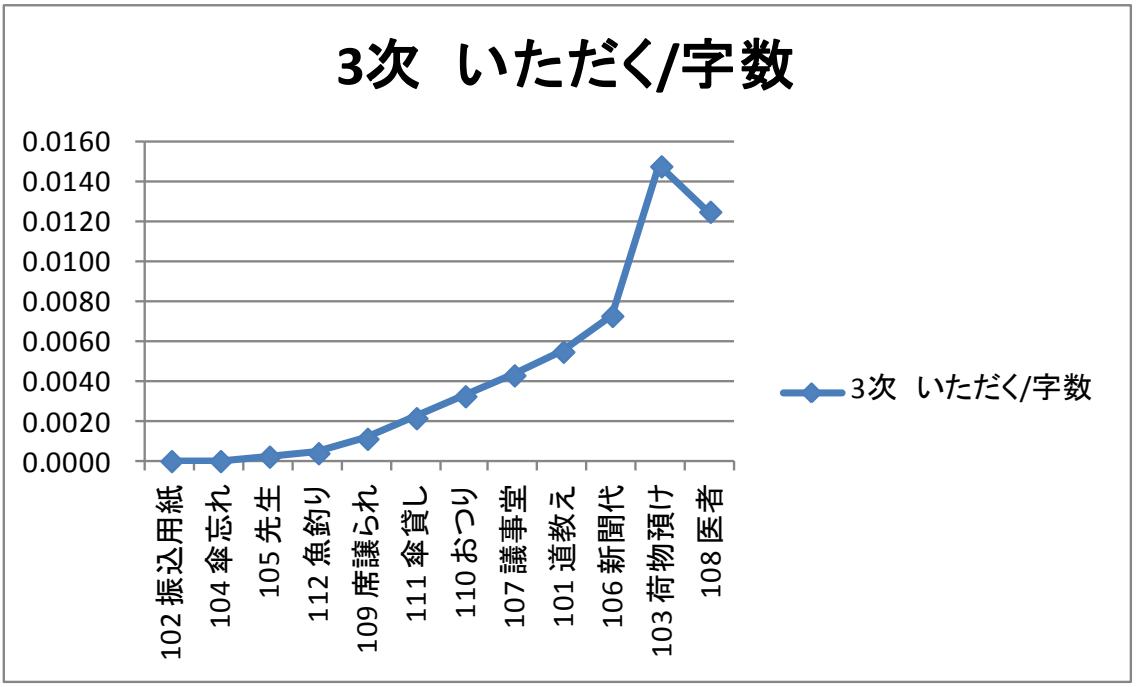


図 2 - 11 「ていただく」と字数

図 2 - 10 は字数増加の理由を探るために作った．作業として，「ていただく」の各年代の用例数を字数で割り，生年実年代によってグラフ化した．差は少ない．テイタダク使用のために増え

る文字数は少ない.

図 2 - 11 は，第 3 次調査の各年代の「ていただく」の用例数を字数で割った同じデータを使って，問い（場面）の違いをみたものである．「医者」と「荷物預け」が多い．「丁寧さ」などでもトップになる場面である．次の「新聞代」も依頼と似た場面である．4 位の「道教え」，5 位の「議事堂」は，道案内に関するもので，最近多くなってきた「行っていただくと」の類が多くなったためと推測される．「ていただく」の用例数が増えれば字数は 4 字か 5 字増えるが，場面順の増え方はほぼ比例するが，それ以上に字数が多くなる．ことばに表わすことが，依頼などの場面で多くなるのである．ただし医者場面で逆転する．

5. 丁寧さと「ていただく」の使い分け原理と場面分類

以下では，11 場面の性格を利用して，ことばの使い方の原理を探る．手がかりとして，丁寧さの段階付けと「ていただく」の使い分け原理を，3 回の調査ごとに散布図で組み合わせた．表 2-1 の江川作成の場面分類基準が役立った．本報告書の場面の分析の基本をなす結果が得られたことになる．

5.1. 丁寧さの使い分け原理：「依頼」と「心理的優位」

結論を先取りして述べる．丁寧さについては，3 回を通じて，依頼場面か否かと，心理的に優位にあるか否かが大きな作用をする．グラフ上できれいに区切れるかで変化があった．

第 1 次には心理的に優位にあるかどうかが大きな基準と見られた．

第 2 次には依頼場面か否かと，かつ心理的に優位にあるかどうかが大きな基準と見られた．

第 3 次には依頼場面か否かが決定的となり，例外なしに 11 場面を分類できた．

5.2. 「ていただく」の使い分け原理：「行動要求」

「ていただく」の使用については，医者が 3 回ともトップだった．荷物預けと電灯新聞が半世紀のあいだに急上昇した．3 場面の共通性は表 2-1 の基準からは説明しにくい．話し相手に具体的な行動を要求することが働くと考えられた．「行動要求」と名付けられる．

5.3. 第 1 次調査の丁寧さと「ていただく」点数

以下 3 回の調査ごとの散布図を考察する．

第 1 次調査の縦軸の丁寧さについては，表 2-1 の心理的優位に立つかが決定的と見られる．図左下に点線で囲んだ 4 場面（道教え，おつり，傘貸し，電灯新聞）が固まり，横線を引けば他の場面ときれいに区切れる．この 4 場面は，道教え＝応答△，おつり＝疑義＋，電灯新聞＝疑義＋，電灯新聞＝勧誘／に相当し，図では目立たない記号を与えた．応答△は席譲られと先生も含む．

数値 2 はデスマス体であり，それより大きい値はダ体に傾き，小さい値はゴザイマス体に傾く

ことを示す（数値の与え方が他と違うので，グラフでは数値を逆転して示した）．つまり心理的優位に立つ場面では丁寧さが落ちる．ダ体に傾き，他の敬語表現も少なくなる．

これと対立する形で，実線で囲んだ●印の依頼の 4 場面（医者，荷物預け，議事堂，電報振込）が図の上方に位置する．ゴザイマス体に傾くわけである．ただし注意（■）の傘忘れ，応答（△）の席譲られも混じり，きれいに分離されない．点線で区別した．

第 1 次調査横軸の「ていただく」点数については，破線で行動要求の 3 場面を囲んだ．医者だけが飛びぬけて大きい値を取る．荷物預けが続き，電灯新聞はむしろ他の場面に近い位置にある．医者だけが違う位置で，目上か否かが基準だと医者以外に先生があるが，図の左端で医者と両極端である．表現の例外で，わが子の紹介という場面だからだろう．先生を話題にしていたら主語尊敬語が現れたかも知れない．

まとめると 1953 年の第 1 次調査段階では，心理的優位にある場合は丁寧さが低いという原理が一番強く働いたとみなしうる．この対極として行動要求の「ていただく」点数では医者への使用だけが際立った，前代の目上目下とか，封建的身分は第 1 次調査の段階ですでに背景にしりぞいていたと思われる．

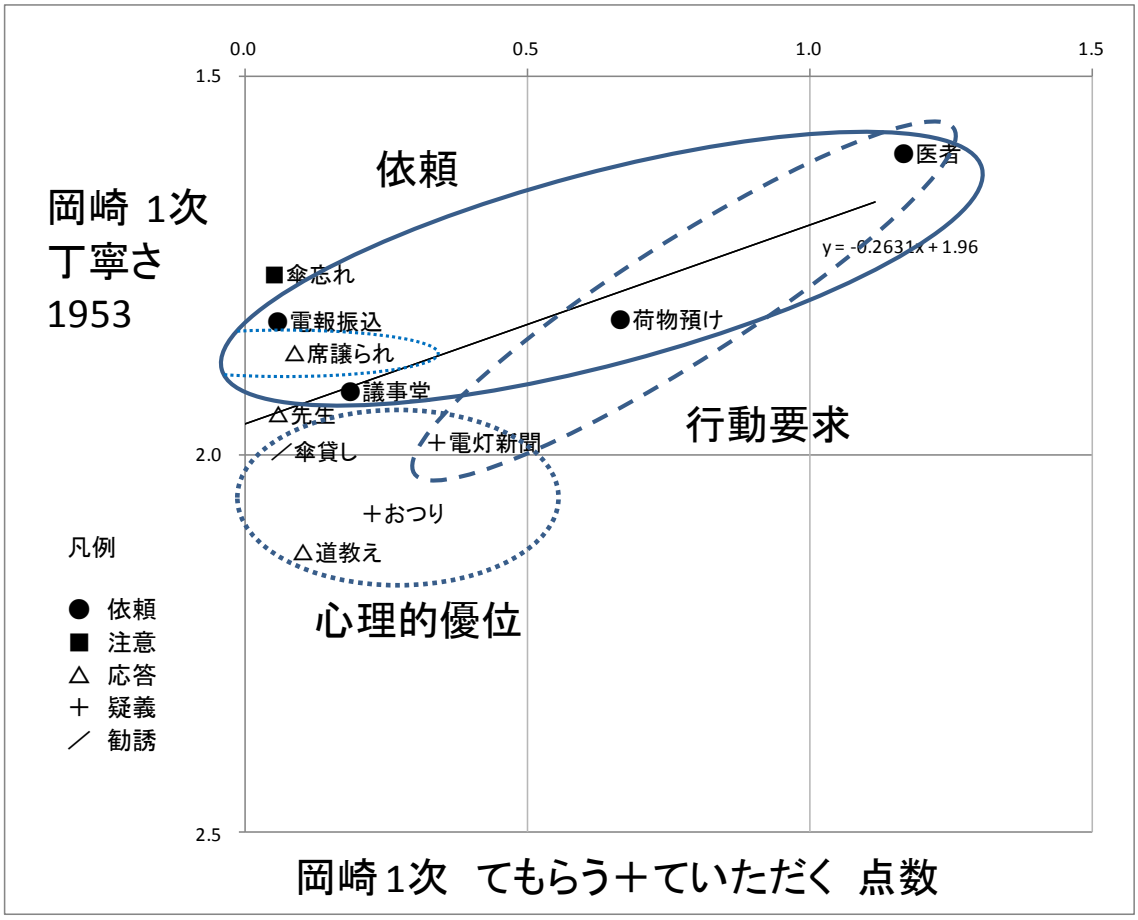


図 2-12　丁寧さと「ていただく」点数　第 1 次調査散布図

5.4. 第 2 次調査の丁寧さと「ていただく」点数

19 年後の 1972 年には，わずかな変化が観察された．

第 2 次調査縦軸の丁寧さについては，心理的優位に立つかがゆるやかになった．図左下の点線で囲んだ心理的優位の 4 場面（道教え，おつり，傘貸し，電灯新聞）は左右にひろがり，位置も少しずれた．横の一線で他と区切ることはできない．これと対立する実線で囲んだ依頼（●印）の 4 場面（医者，荷物預け，議事堂，電報振込）は図の上方に位置する．ただし注意の傘忘れも似た位置にあり，きれいに分離されない．

横軸の「ていただく」点数については，破線の行動要求の 3 場面のうち医者に続いて荷物預けが位置を右に上昇させ，電灯新聞はわずかに右に位置をずらした．電灯新聞の場面は依頼と重ならない．他の場面でも「ていただく」の使用が増えはじめた．

まとめると 1972 年の第 2 次調査段階では，心理的優位の原理が弱くなった．対極として行動要求の「ていただく」点数で医者以外に荷物預けが登場しはじめた．封建的な身分などが働かなくなったわけである．第 3 次調査の結果を参照すれば，動きの方向を指摘できるが，たった 2 回だけの調査結果では方向性を見出すのは困難だっただろう．

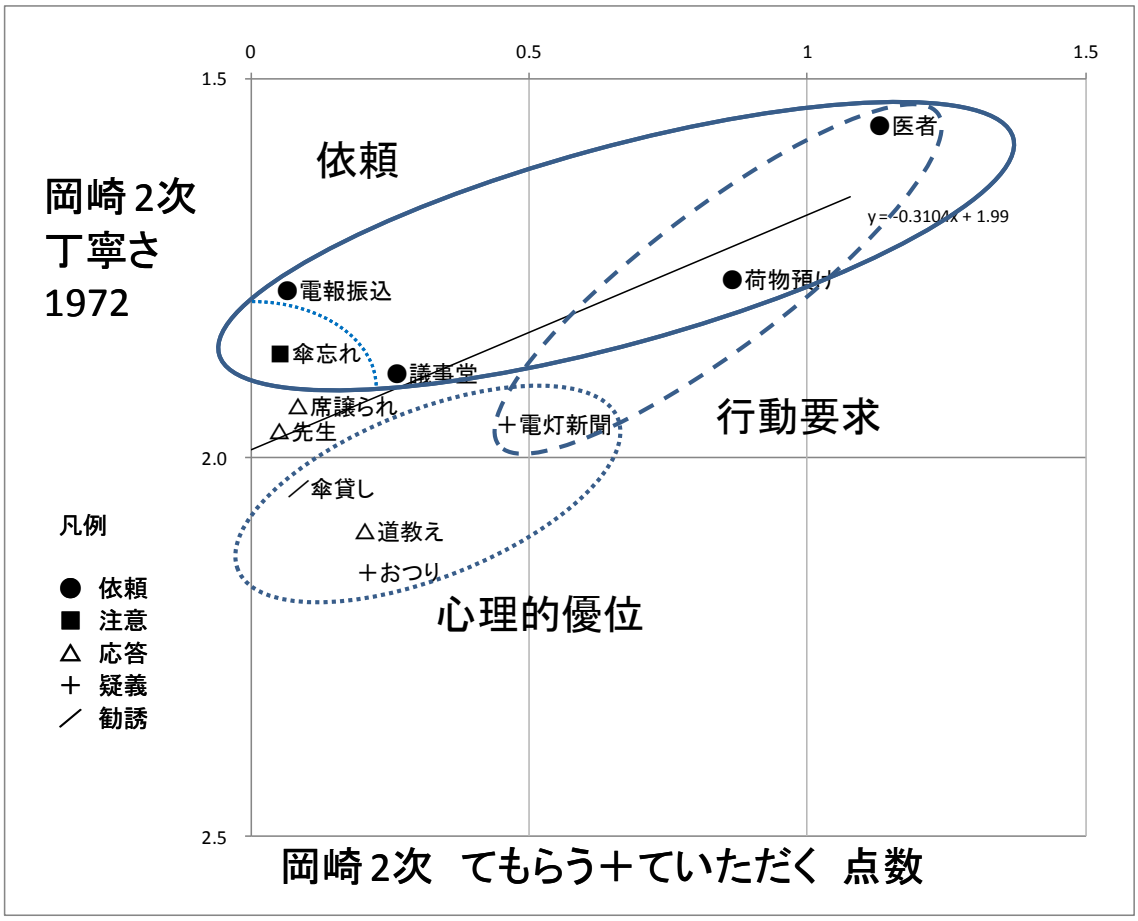


図 2-13　丁寧さと「ていただく」点数　第 2 次調査散布図

5.5. 第 3 次調査の丁寧さと「ていただく」点数

55 年後の 2008 年には，大きな変化が見られた．

縦軸の丁寧さについては，心理的優位に立つかがさらにゆるやかになった．図左下の点線で囲んだ心理的優位の 4 場面（道教え，おつり，傘貸し，電灯新聞）は右と上に拡散した．これと対立する実線で囲んだ依頼（●印）の 4 場面（医者，荷物預け，議事堂，電報振込）は，図の上方に固まり，他の場面と横線できれいに分離できるようになった．依頼の場面で丁寧さが上がるという原理が強まったことを意味する．また第 1，2 次にくらべて，全体として上にずれた．多くの場面で丁寧さが上がったわけで，敬意低減の法則が場面ごとに作用したと考えられる．社会的背景として，高学歴化や第 3 次産業従事者増加があり，敬語使いこなしの要求される職業が増えたことがある．また共通語化が進行し，共通語化の最高峰としての敬語使用が普及したこともある．国民総中流意識により，敬語使用場面の普遍化が進んだとも言える．

横軸の「ていただく」点数については，破線の行動要求の 3 場面のうち医者と荷物預けが同じ位置になり，電灯新聞はを右にずれて，固まり，他も右にずれた．他の場面（議事堂，道教え，おつり）でも「ていただく」が使われるようになった．しかし傘貸し，席譲られは数値が小さく，先生，傘忘れ，電報振込ではほとんど使われない．3 回の調査での増加ぶりを基準に，場面を 3 類型に分けることも可能である．語彙的伝播 Lexical diffusion の例である．文化庁世論調査でも動詞により異なった使用率を示すとともに，継続調査で増える．

まとめると第 3 次調査では，依頼かどうかが強く作用するようになり，心理的優位の原理が弱くなった．行動要求の「ていただく」点数で医者・荷物預け以外に電灯新聞が登場し，まとまりがよくなった．話し相手とのその場限りの要求・依頼という表現内容が強く働くようになったわけである．

半世紀を通して，依頼・行動要求場面が，丁寧さと「ていただく」の使用に大きく関わることが分かった．3 枚のグラフに入れた近似直線によって，丁寧さと「ていただく」の使用は比例関係を示すことが分かる．

以下の分析でも，丁寧さを示す基本として，依頼の 4 場面（医者，荷物預け，議事堂，電報振込）には注目する必要がある．逆に，心理的優位に立つ 4 場面（道教え，おつり，傘貸し，電灯新聞）は，丁寧さが低いので，後掲のグラフでは目立たない位置になる．そのうち電灯新聞だけは「ていただく」の使用が増えたが，文脈上「調べてもらう」ことが表現されるからである．

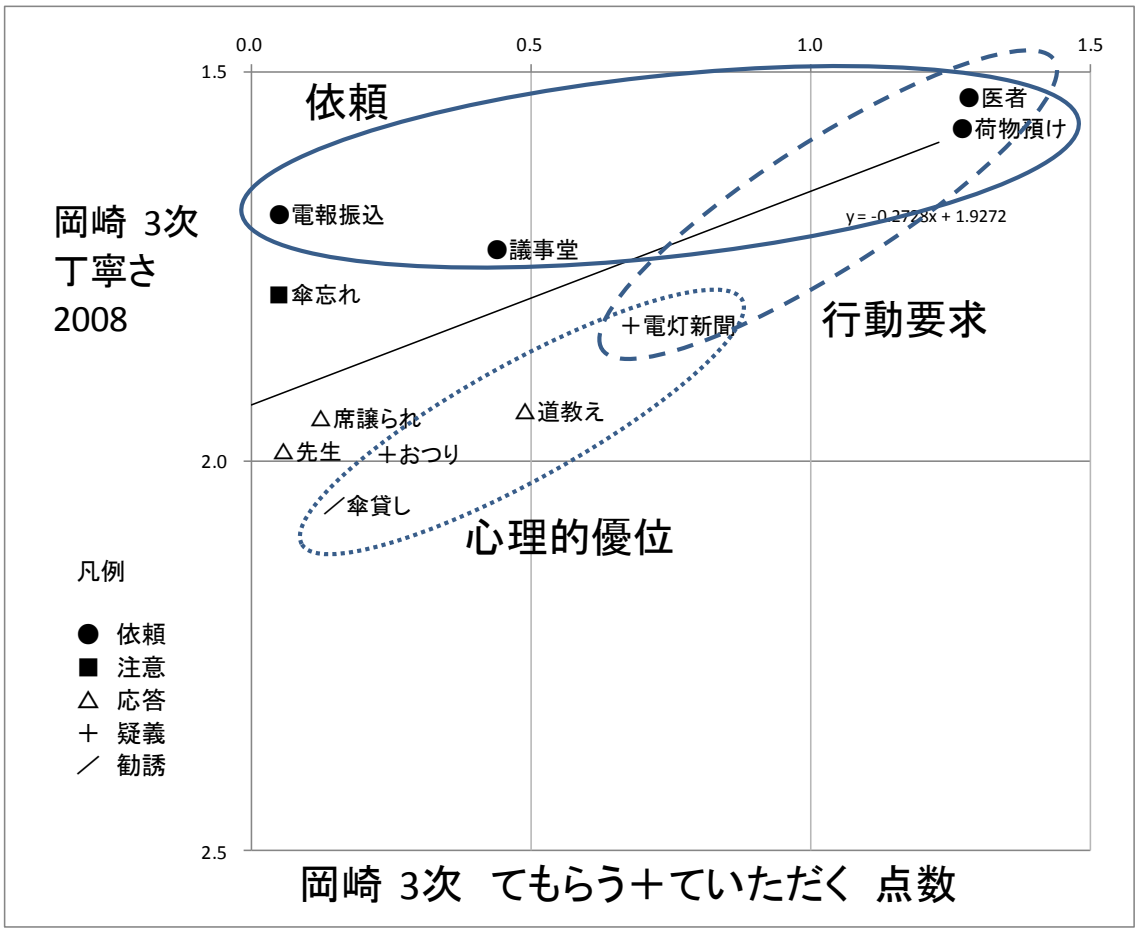


図 2-14　丁寧さと「ていただく」点数　第 3 次調査散布図

5.6. 丁寧さの使い分け原理：「力」から「親疎」へ

以上では，丁寧さの段階付けと「ていただく」の使い分け原理を，3 回の調査ごとに散布図で組み合わせた．以下では，同じグラフを手がかりとして，力関係から親疎関係への変化を確かめる．11 場面の別の性格付けを利用して，ことばの使い方の原理を探る．

前掲表 2-1 には，多様な性格付けが付されている．世界の，そして日本の敬語の大きな歴史的変化の流れからいうと，力から親疎へ from power to solidarity の動きが見えるはずである．表 2-1 にはまさにそれにあたる親疎による指標が記入してある．前掲の 3 個のグラフと同じものに，親疎による記号をマーカーとして付した．ただし表 2-1 では，102 電報用紙＝電報振込を「親/中」にしてあるが，質問文やさし絵の設定からみて「中/疎」に変更した．このために 5 段階になった．

5.7. 第 1 次調査の丁寧さと親疎関係

図 2-15 に第 1 次調査の結果を掲げる．場面の配置は図 2-12 と同じである．マーカーを親疎の 5 段階表示に変え，同じ程度の親疎を線で囲んだ．親と中に属する医者と荷物預けは，横軸「て

いただく」点数によって右にずれるので，別のグループとして線で囲んだ．疎/中と疎のグループを実線で囲んだが，その中に親から中にかけての点線の 3 場面（先生，傘貸し，おつり）が入り込む．親疎関係は目立った働きを示さない．図 2-12 で心理的優位にある 4 場面が下端にきれいにまとまったのと対照的である．

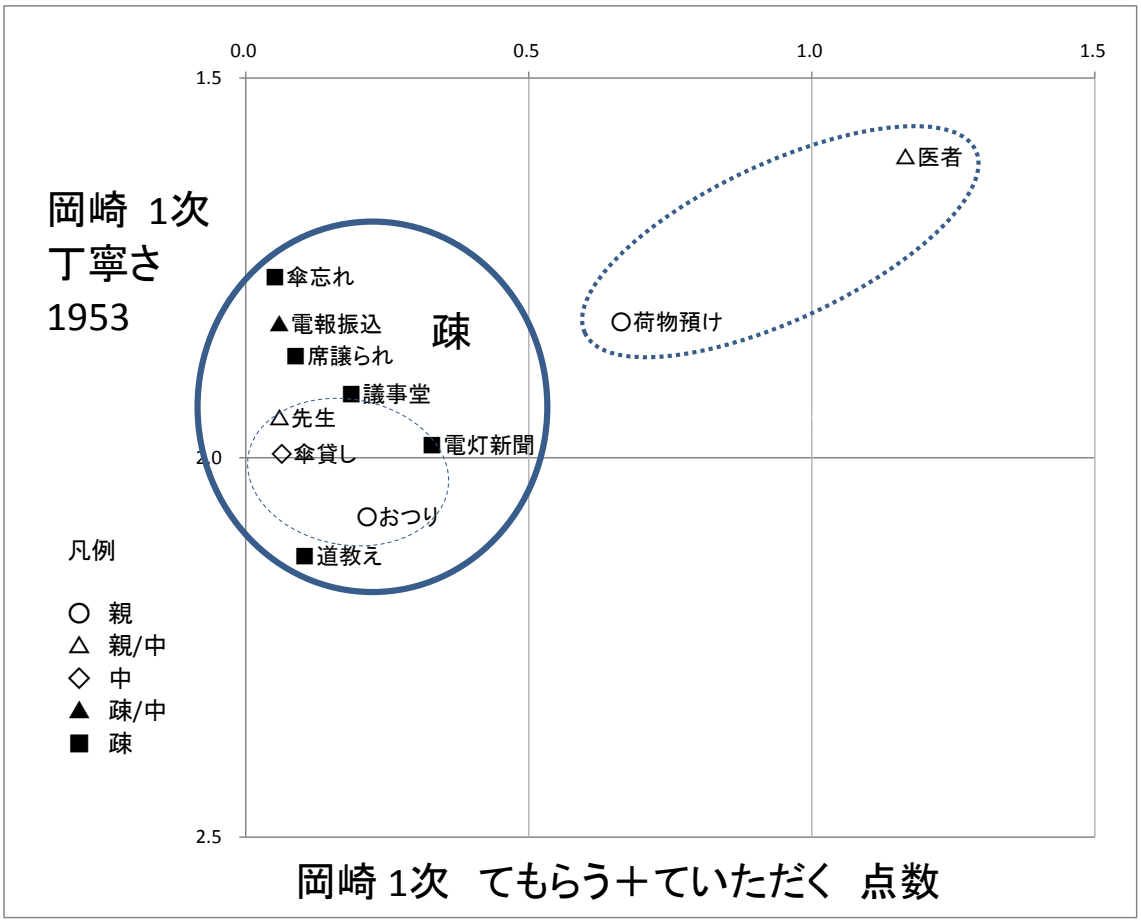


図 2-15　丁寧さと親疎関係　第 1 次調査散布図

5.8.　第 2 次調査の丁寧さと親疎関係

図 2-16 に第 2 次調査の結果を掲げる．場面の配置は図 2-13 と同じである．疎/中と疎のグループを線で囲んだが，親から中にかけての 3 場面（先生，傘貸し，おつり）が一部入り込む．親疎関係は目立った働きを示さない．

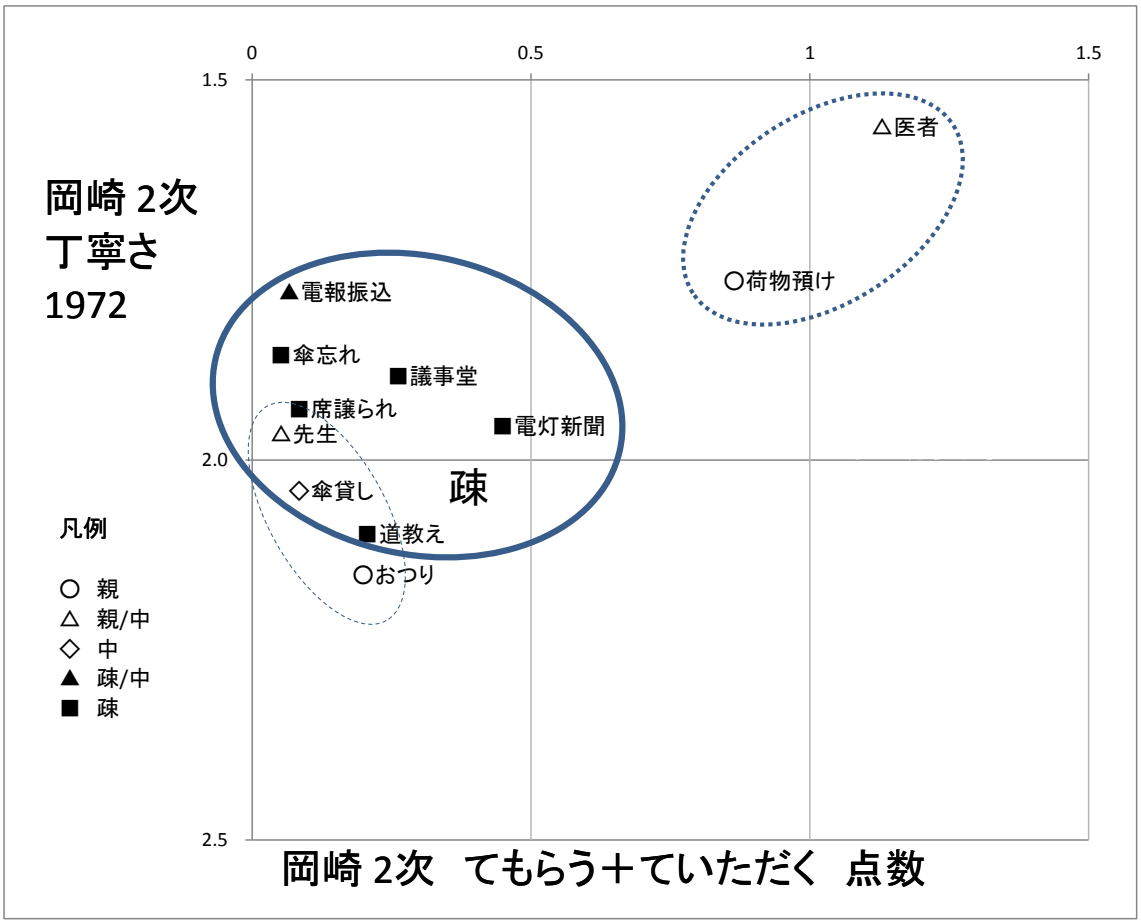


図 2-16　丁寧さと親疎関係　第 2 次調査散布図

5.9. 第 3 次調査の丁寧さと親疎関係

図 2-17 に第 3 次調査の結果を掲げる．場面の配置は図 2-14 と同じである．疎/中と疎の 6 場面を線で囲むと，親から中にかけての 3 場面（先生，傘貸し，おつり）ときれいに分離される．グラフの縦軸は親疎関係によって横一線で区切れる．第 3 次調査では場面による丁寧さの違いが親疎で説明できるように変化した．行動要求表現をともなう 2 場面を除いて，親の人には丁寧さの低い表現を使うという基準で説明できるようになったわけである．

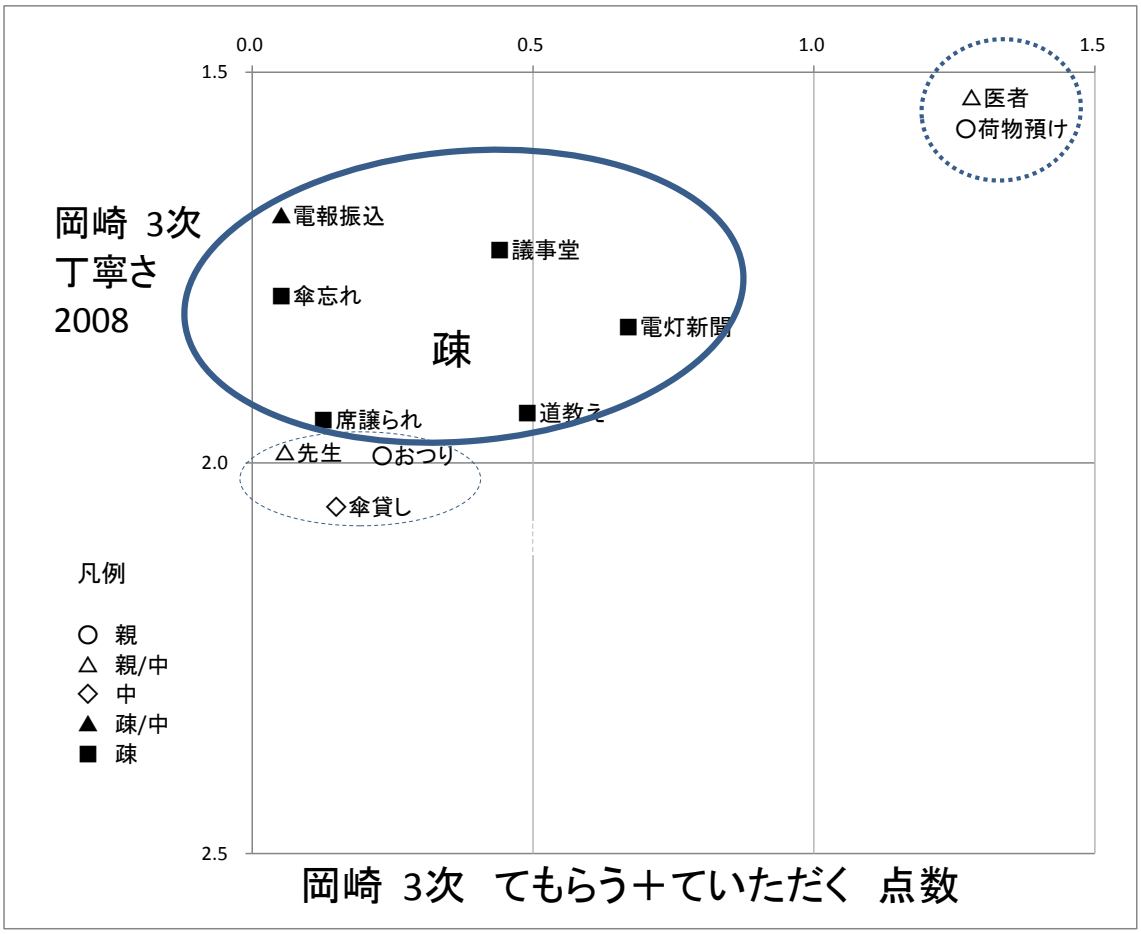


図 2-17　丁寧さと親疎関係　第 3 次調査散布図

5.10. 丁寧さと「親疎関係」

第 1 次調査の丁寧さで支配された場面は，図 2-12 によれば，心理的優位か否かで，きれいに分離できた．力関係と換言できる．第 3 次調査では，図 2-17 によれば，親疎関係によって説明できた．まさに力から親疎へ from power to solidarity の変化である（井上 2011.12）．ヨーロッパの 2 人称代名詞の長期的変化と一致し，また日本語敬語の《タブーから絶対敬語，さらに相対敬語へ》という変化の流れの中に位置づけられる. 岡崎では第 3 次調査のデータをグラフ化して，はじめて確認できた[21]．第 2 次調査の段階では，変化がそれほど大きくなかったわけである．小さい地域社会の個々の単語や文法現象の言語変化について，最低でも 3 世代，つまり 1 世紀近くかかると考えられる（井上 2008.5）．敬語，丁寧さの使い分けのようなもっと原理的な現象についても，同様のタイムスパンが必要と思われる．

[21] なお以上が分かった段階でこれまで発表された折れ線グラフを見ても，ここまで深く読み取ることはできない．図化の工夫により読み取れることが違う例と言える．

5.11. 他の分析項目への応用

以上の場面分類結果は，以下の諸項目の場面別の分析にどの程度汎用性があるだろうか．予備的な考察結果を前もって提示する．以下の場面別のグラフを見渡した結果によると，丁寧さに関しては「依頼」で，「ていただく」に関しては「行動要求」できれいに説明できるが，他の項目では一部が説明できるだけである．また丁寧さに関して「親疎関係」も働くが，他の現象についてはきれいに作用しない．ただし多くの現象で医者が特別な位置を占める．一方で，ここでの場面分類と全く離れた使用状況を示す項目は，あいさつ表現や定型表現が使われたためと判断できた．これまで個々の項目ごとに場面の順番を考えたが，４個の基準（依頼，行動要求，心理的優位，親疎関係）を考慮に入れることで，論理的な分析ができた．

第 2 章，図 2-3，図 2-5，図 2-6 の「ていただく」関係では，行動要求 3 場面が上位を占めて，説明原理として有効と分かった．心理的優位の 4 項目（電灯新聞，道教え，おつり，傘貸し）は中位に散らばり，場面分類の要因としては働かない．親疎関係も働かない．

図 2-8，図 2-11 の字数でも，行動要求 3 場面と依頼のうちの議事堂，応答の道教えが上位になる．「ていただく」の順番と，かなり重なる．心理的優位の 4 項目は中位に散らばり，要因としては働かない．親疎関係の親の場面では字数が少ない傾向がある．

第 3 章，図 3-3 の丁寧さは，依頼表現ときれいに一致する．心理的優位の 4 項目（電灯新聞，道教え，おつり，傘貸し）は下位になる（グラフの数値の逆転に注意）．また親疎関係は強く働く．

第 4 章の文体的要素では関連が薄い．図 4-3 文末のゴザルと図 4-5 文中のゴザルでは，席譲られだけが飛びぬけるが，「ありがとうございます」のためだろうと見当が付く．図 4-7 文末のデスマスでは，依頼表現と結び付く．また心理的優位の場面が下位になる．親疎関係は働かない．文体の選択に心理的優位がからむわけである．図 4-9 文末のデスは先生，席譲られ，道教えで多い．表 2-1 の心理的に疎の関係と結び付くが，名詞の断定文が出やすい場面という共通性のためもある．図 4-11 文末のマスでは，心理的優位の道教えがトップだが，他の心理的優位場面は中位である．依頼との関連が見られるが，他の雑多な要因も働くようである．親疎関係は働かない．図 4-13 文末のマセンは，第 3 次にかけて急に増えた．依頼との関連が大きい．心理的優位場面は中位になる．親疎関係は働かない．図 4-15 文末のダ体は，物売魚釣，傘貸しが飛びぬけて多く，電報振込は第 1 次の多さが第 2 次で下がった．心理的優位場面と深い関係が見られる．親疎関係は働かない．行動要求の逆パターンと判断できる．

第 5 章，図 5-2 のワタクシでは，先生が飛びぬけて多く，議事堂や医者は第 2 次以降減った．他場面では少ない．限られた文脈で 1 人称代名詞が使われたのだろう．心理的優位場面は下位になる．親疎関係は働かない．

第 6 章，図 6-2 言い淀みでは，応答の席譲られを除くと，依頼と行動要求の場面で多い．心理的優位場面は中位に固まる．逆に親疎関係の親の場面が下位になる．「あのー」が使われやすい場面の性格をよく反映する．

第 7 章，第 8 章の図 7-3，図 8-2 のモーラ数は，図 2-8，図 2-11 の字数と同じで，行動要求 3 場面と依頼のうちの議事堂，応答の道教えが上位になる．心理的優位の 4 項目は中位に散らばり，

要因としては働かない．親疎関係の親の場面では短い傾向がある．敬語と発話（反応文）の長さとは正比例の関係が認められるので，論理的には納得できる．

以上，この報告書で扱った項目のかなりが，依頼，行動要求，心理的優位という原理で説明できそうだと分かった．また個々の場面の位置が半世紀以上にわたって変化したことが分かった．場面ごとにまた個々の言語現象ごとに個別の変化が進むのではなく，もっと根源的な要因が働いたと推測される．究極的には人間関係や場面の捉え方の変化だろう．その原理については，第 9 章で述べる．

かつて言語相対性理論に関して述べたと同じく（井上 2008.5），「言語体系　→　個人　→　文化」は循環構造をなして作用する．中間項を入れれば，言語は文化を反映する．敬語も個人が場面に応じて使い分け，それが文化として普及すると，言語体系の中に確立する．岡崎調査の半世紀以上の場面別の言語表現使用状況の変化は，長期にわたる敬語変化の過程を連続的に示すものと，位置づけることができる．

5.12. 外挿法による過去と未来

以上で 3 回の調査を通して見た．変化が一定の方向性を持つと読み取れた．だとしたら，外挿法 extrapolation という考えを使って，過去と未来を考えることもできる．

過去にさかのぼって外挿すると，荷物預けはもっと左で，他場面と同じだったろう．医者だけが違う位置である．目上としては先生もあるが，例外的なのは，わが子の紹介の文脈のためである．前代の，封建的身分による目上目下意識による敬語の使い分けは，3 枚のグラフから過去にさかのぼっても，たどりつかない．

未来に向かって外挿すると，もっと多くの場面で「ていただく」の使用が増えると予測される．「ていただく」「てあげる」という補助動詞による表現は日本語全体として最近増えており，人称代名詞使用が避けられることとからんで，動作者を暗示する機能を果たしつつある．架空の恩恵関係を暗示する表現であり，民主化・平等化の表れととらえることもできる．

5.13. 敬語の民主化・平等化

「ていただく」の使用については，荷物預け場面の推移が典型で，半世紀の間に「行動要求」場面の中で急速な変化が見られた．話し相手との心理的関係が機序として働くようになった．また「ていただく」という語形自体が，話し相手との恩恵のやりとりを仮構的に暗示する．昔の敬語の目上目下の基準または身分による使い分けは影を薄くした．敬語の民主化・平等化として位置付けうる．

言語表現の面からみると，「ていただく」の進出は象徴的である．従来の謙譲語の使いにくさから，代用しうる言い方として採用されたが，古代日本語以来の尊敬語・謙譲語の助動詞に中心をおく文法的敬語に代わって，補助動詞に軸足を移した面もある．また中世以来普及したマス（および近世発祥のデス）による丁寧語が，現代は確立して公的場面では当然の無標の，デフォルトとしての表現になり，代わりに差別化により受恵表現が広がったとも言える．

対人関係の調節や配慮表現に関わる現象が，最近研究対象として盛んに取り上げられ，個々の単語や文法形式でなく，談話全体を扱う研究が多くなった．世の中の関心が移り変わった面もあるが，そもそも言語行動において，いわゆる敬語形式以外の現象が強い働きを示すようになった面もある．この方面でも目上目下とか身分は影をひそめた．談話に参加する個人どうしの心理的相互作用が問題になる．場面の把握，対話者との関係についても，民主化・平等化が進みつつあるといえる．

6　結論　敬語研究の未来

以上，岡崎調査のデータを，時系列に忠実にグラフ化するという技法によって，一定の方向性，法則性をもって変化が進行していることを確認できた．「てもらう」「ていただく」のような，受恵表現や方向性という，いわゆる敬語以外の関連現象で，ことばづかいを調節する．このような上下関係から親疎関係へという変化傾向も，敬語の民主化・平等化を指し示す．これらの見通しをもとに，さらに研究を発展させることが可能である．

第３章

丁寧さの段階づけの安定性

はじめに

この章では，岡崎調査の本来のテーマだった敬語の「**丁寧さ**」のレベルについて，基礎的な資料をグラフの形で提示する．「丁寧さ」は，第１次と第２次の調査報告の中心テーマだった．半世紀以上を経た第３次調査の結果を入れることによって，敬語の大きな変化傾向を把握することができた．丁寧さは，過去の報告書では，３段階，５段階に分けて分析された．この資料集では，松田謙次郎による第３次調査の３段階判定をそのまま利用した．ほぼ「ゴザイマス体，デスマス体，ダ体」に相当する．「特別（御）丁寧体，丁寧体，普通体」「最高敬体，敬体，常体」などとも呼ばれる．松田はこのデータを主成分分析にかけて，国際会議で発表し，英語論文として公表した（松田 2012）．

これまで丁寧なものから 1，2，3 と数値化されていたので，グラフにするときは縦軸の値の大小を入れかえ，丁寧なものが上になるようにした．

結果はグラフで示した．数表だと，変化パターンが読み取りにくいからである．具体的数値は後日インターネットで公開するので，興味のある人は検証できるし，さらに分析を進めることもできる．第１次から第２次にかけては，丁寧さが落ちる傾向が見られた．しかし，第３次の調査は，丁寧さが大幅に増加する傾向を見せた．また使い分けが，話し相手との身分・階層関係から，依頼関係の有無という個人間の心理に左右される傾向が読み取れた．

1.丁寧さの段階づけ研究手法

1.1 「丁寧さの段階付け」

実際の作業は，以下の分担で行われた．松田謙次郎が判定を付けた．基準は第２次報告書所載のものを用いた．ほぼ「ダ体」３点，「デスマス体」２点，「ゴザイマス体」１点である．「丁寧さの段階付け」について，次のような手順があった．図３－１　３段階方式の基準：国立国語研究所（1983：62）である．

段階 1	(…) デゴザイマス, (…シテ) イタダキマス, (…シテ) クダサイマセ, イラシテクダサイ, イラッシャイマセ, のように, 大体二つの高い敬語形式の結合から成るもの. およびそれより丁寧な形.
段階 2	…デス, …マス, (…シテ) クダサイ, イラッシャイ, のように,「です・ます調」や一つの高い敬語形式から成るもの.
段階 3	…ダ, …ヨ, …シテ (依頼), …シロ, 言い捨て (例えば「電報用紙！」), のように, 高い敬語形式がないとみられるもの. およびそれよりさらに乱暴な形. …シテクレ, …シテモラオウ, のように, 簡単な頼む言い方や, オクレ, オイデ, …(シ) ナサイ, のように目下などにしか使わない言語形式.

図 3 - 1　岡崎調査の丁寧さ（3 段階方式の基準）

2.丁寧さ　グラフ解説

グラフから読み取れることの概要

「丁寧さ」の状況について，グラフ化したことにより，以下の様相が読み取れた．丁寧さの度合いが，時が経つごとに上がることが分かり，ただし若い人が先導するのでなく，中年層がいつも丁寧な言い方を答えることが分かった．「敬語の成人後採用」が敬語の典型とも言える「丁寧さの段階付け」でも観察された．

図 3 - 2 では 3 回の調査結果を「生年実年代による表示法」で示した．第 1 次調査の報告書では主に P (Proper or Professional) しか扱っていないが，ここでは C (Control or College) のデータも別の細い線で示した．丁寧さが場面全体として数十年にわたって増加しつつあることが示された．第 3 次調査の結果が過去の調査と大きくずれることが分かった．マーカーの数字は人数を示す．

図 3 - 2 によると，第 1 次調査の◆P (Proper or Professional) と◇C (Control or College) の違いが問題になる．第 1 次調査の P と C は違いがあり，第 2 次調査は（10 代を除くと）P と C の中間になる．つまり第 1 次調査の C（現在の愛知教育大学生）の値を基準にすると，丁寧さは大きくなる一方ということになる．第 2 次調査の報告書で，20 年間の変化について明瞭な結果が出にくかったのは，第 1 次調査のデータのうち，P だけを扱ったためとも考えられる．当時の大学生

は，やや乱暴な言い方を得たわけだが，都会から来た研究所員に対するよりも，地元の大学生に対して，ふだんのことば（敬語）を答えた可能性を否定できない．P と C の人数はほぼ同等なので，第 1 次調査の数値を P と C の中間にプロットすると，第 2 次調査との違いがそれほど大きくならない．

各調査次の年齢差を見ると，ほぼすべてで中高（または右下がり）を示す．つまり若い人の丁寧さは低く，中年層は高い．高年層は再び低くなる．1950 年の鶴岡市の共通語化調査で 10 代でなく壮年層がピークになった現象と似ている．鶴岡では「社会的活躍層」が共通語化の頂点をなすと説明された. 実務での共通語使用が要求されることを想定しての命名だった. この岡崎では，類似の現象について，「成人後採用」という用語で説明する．10 代が初期採用者，先駆者，ピークでないという点では，共通のメカニズムに支配されている．

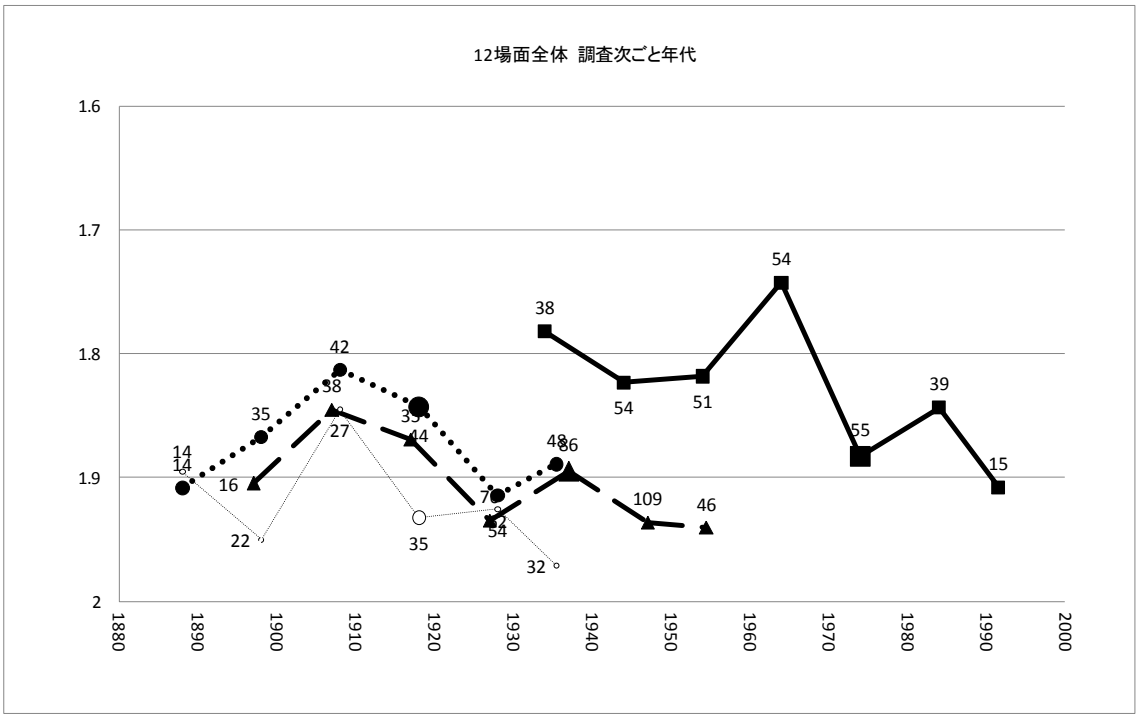


図 3 - 2　丁寧さ　11 場面全体　調査次ごと年代

図 3 - 2 では，同一コーホートに属する人々が，のちの調査でどう変わったかも読み取れる．1930 年代に生まれた人たちは，（第 1 次調査では若い世代として，第 2 次で壮年層，第 3 次で高年層として）3 度の調査の対象になったが，半世紀経って際立って丁寧さを増やしている．岡崎の「ていただく」をはじめとして，敬語関連現象で「成人後採用」late adoption が目立ったが，岡崎調査の中心課題としての丁寧さでも認められたわけである．これは同じ生年世代の実時間 real time による比較に基づく．

一方，3 回の調査の 4 本の線すべてで，世代差という見かけの時間 apparent time で，中年層が丁寧で，若年層は乱暴またはぶっきらぼうという傾向が見られる．なおこのパターンは，「てい

ただく」でも見られたし，文の長さ（モーラ数）でも見られた．日本語の「丁寧」は，長いというニュアンスも含む．もっと多くの現象とともに，総合的分析を進める必要がある．

「道教え」の丁寧さ

解明のヒントは面接調査第 1 問「道教え」である．「わたしのような旅行で来た者が，東岡崎駅の北口で，明代橋（みょうだいばし）はどちらかということをあなたにたずねました．何と言って教えますか．」である．第 1 次調査の調査員 P (Proper or Professional)は，「熟練した調査員 6 人」で，C (Control or College)は愛知学芸大学（現愛知教育大学）の男女学生 9 人だった．面接の相手が，戦後まもなくの旧師範学校の学生に，年下だということで「常体（ダ体）」を使ったとして，この文体選択が第 2 問以下の場面設定にかかわらず影響を及ぼしたことが考えられる．

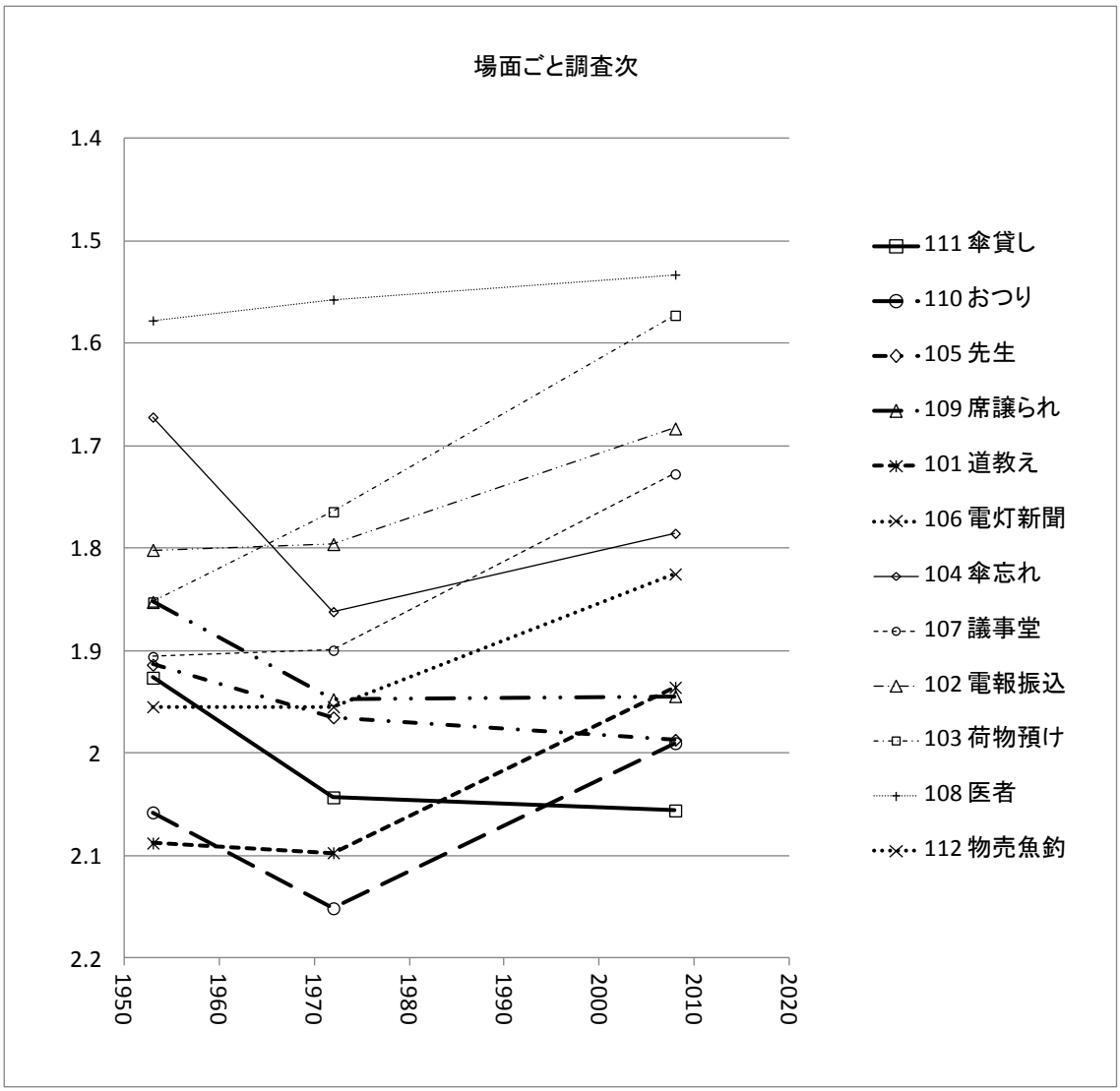


図 3 - 3　丁寧さ　11 場面全体　場面ごと調査次

図 3 - 3 では場面によって増加ぶりが違うことが分かる．なおこの図の第 1 次のデータは P の

みである．グラフでは道教えは丁寧さの低い場面に属し，第 1 次から第 2 次にかけて少し下がったあと第 3 次で上昇する．医者の場面は 3 回を通じて丁寧さが高い．荷物預けは上昇ぶりが著しい．第 2 次調査で減るものが混じる．

第 2 章，図 2-12～2-17 で見たように，丁寧さは依頼表現ときれいに一致する．心理的優位の 4 項目（電灯新聞，道教え，おつり，傘貸し）は下位になる．また親疎関係は強く働く．

これを手がかりに第 1 次，第 2 次の丁寧さの原理を探ろう．全体は 3 グループに分かれる．まず医者が飛び離れ，丁寧でない言い方に道教えとおつりがある．他の場面はその中間である．相手との力関係(強い立場か弱い立場か)が影響すると読み取れる．その中で，傘忘れ，傘貸しの丁寧さが第 2 次で落ちた．他の場面でも丁寧さが落ちた．

医者という社会的地位の高い人への依頼では丁寧さが高く，道教え，おつりという相手より優位な立場で雑になる，と説明できる．荷物預け，振込用紙，傘忘れは，相手に依頼するまたは注意するという場面なので，やや丁寧な言い方になったと，説明できる．

第 3 次調査で丁寧さが急増した場面として，特に荷物預けが目立つ．上方に位置するのは，第 3 次調査で丁寧さの大きい項目で，医者，荷物預けを筆頭に，電報振込，議事堂のように，相手に依頼する項目が多い．傘貸し，席譲られが少し減っている．下半分に位置するのは自分が優位に立つ（または中立的な）場面である．説明原理としては，依頼では丁寧さが高まり，心理的優位に立つときには丁寧さが低くなると考えられる．

固まりに着目すると第 3 次調査の使い分け原理が分かる．第 3 次調査では，全体として丁寧さが増したと読み取れる．話し手と相手との心理的優劣関係が，丁寧さの基準として働きはじめたようである．これに対し第 1 次調査では，右に来る医者が飛び離れ，傘忘れ以下は単純な説明が難しい．

調査用さし絵の変化

第 1 次，第 2 次の調査法に，何か違いがあった可能性もある．この背景として考慮すべき現象に調査用さし絵の変化がある．半世紀前と服装などが違うからというので，第 3 次調査で全部のさし絵を描き直した．メンバーの一人が唱えた「何も足さない　何も引かない」という標語は，守られなかった．以上の変化にさし絵がどれほど影響したかは，判定が難しい．

しかし図 3 - 3 によれば，ほぼすべての場面（反応文）で「丁寧さ」は一定の変化を示す．永い歴史的変化過程の中に位置付けて，考えるべきだろう．

第 2 次調査の報告書では，約 20 年の変化についての記述で，歯切れが悪いが，このグラフによれば，仕方がない．第 3 次調査による半世紀以上という長いタイムスパンをおいてはじめて，変化の趨勢をつかめたことになる．敬語は一般にことばの「乱れ」論議の対象になりやすいが，変化しやすいとは言っても，個人差や場面差が大きく，文脈別の用法まで考えると，大量調査によっても，確定しにくい現象がある．

「丁寧な説明」とは

ここで「丁寧さ」について，別の目で考察しよう．「丁寧」とは，敬語以外にも使われる．動作などにも使われるが，「丁寧な説明」などという場合は，必要なことをすべてことばに表わすことをも含意する．必要なことは繰り返し，省略しない．聞き手に配慮した言葉づかいとも言える．岡崎で 3 回の調査を通してモーラ数が増えたのは，（ことに駅前の橋を教える「道教え」場面では）「丁寧さ」の増加を図った市民の心理の反映とも解釈できる．

なおモーラ数の多さ，長さの評価としては，マイナスとして「くどくど」などが結び付くが，「じっくり」「事細か」はプラス評価である．モーラ数の少なさ，短さの評価としては，マイナスとして「ぶっきらぼう，唐突，失敬，失礼」などが結び付くが，「こざっぱり，簡潔」はプラス評価である．

３　結論　丁寧さを支配する要因

以上で「丁寧さの段階付け」の 3 段階の数値を使って，3 調査次の 12 場面別のデータについて，生年実年代という要因の作用を考察した．丁寧さの度合いが，時が経つごとに上がることが分かり，ただし若い人が先導するのでなく，中年層がいつも丁寧な言い方を答えることが分かった．第 3 次で丁寧な言い方が多くなったが，場面でいうと荷物預けで丁寧になった．若者が新現象を率先して採用するという，これまでの共通語で見られたパターン（言語以外でもよく観察されるパターン）は，敬語にあてはまらなかった．敬語の典型とも言える「丁寧さの段階付け」でも「敬語の成人後採用」が観察された．どの層が敬語の変化を促すかの見当もついた．数表からは複雑すぎて読み取れない現象をグラフによって視覚化して，解釈できた．生年実年代のグラフや散布図の使用により，従来のグラフよりも，傾向を読み取りやすくなった．統計ソフトの普及が基礎的考察を深めたわけである．

第４章

岡崎の文体の変化と「ゴザイマス」の成人後採用

はじめに

本章では調査の回答（反応文）の文体要素に関して報告する．一番丁寧な文体を形成する「ゴザル」は，第 3 次調査の中年以上の世代で使用が復活するパターンを示した．これまで「丁寧さ」「ていただく」「モーラ数」などで観察された成人後採用 late adoption のパターンである．これに対し，文末の「デス」と「マス」に限ると，二つが相反する傾向を示すことが分かった．「デス」は増加し，「マス」は減少した．成人後採用のパターンと異なる．また『大規模経年調査資料集 11』では，文末の「デスマス」をまとめて扱ったが，内部に違いがあることが分かった．この対照的なグラフをもとに，国語研の第 1，2 次調査の報告書で示された「丁寧さの段階付け」が，実は「ゴザイマス」の使用に大きく左右されていると，推定できた．今後も細かい表現を再考察する必要がある．同時にデータ全体をまとめて考察する必要がある．

１.岡崎の文末の文体　概観

1.1.「ゴザイマス」の限定使用

この章では，岡崎調査の反応文の文体について分析する．具体的には文末のゴザイマス体，デスマス体, ダ体などの使用率を扱う. 敬語の丁寧さをになう基礎的な単位とみなすことができる．現代話しことばの三つの文体のうちのデゴザイマス体を最初に見る．特別丁寧体，御丁寧体とも称される．衰退の道をたどる流れも見えるが，敬意低減の法則に従って，多くの(改まった)場面で使われる動きもある．手がかりとして，「ゴザル」（実質的には「ゴザイマス」）の出現を見る．

実際の使用率は大変低い．後述のように使用場面も限られていて，ほぼ「席譲られ」のみである．他は「先生」と「議事堂」でともに自分に関する紹介の入りうる場面である．現代敬語の特質の一つで，「ゴザル」が単独で使われることはまれで，岡崎の文例の大部分はお礼の「ありがとうございます」である．従来の国語研の報告書で示された「丁寧さの段階付け」が，実は（ありがとう）「ゴザイマス」の使用に大きく左右されていると，推定できた．これまで「丁寧さ」「ていただく」「モーラ数」などで観察されたパターンは，成人後採用を示すものだった．

1.2. 結果の概要　岡崎　文末の分類　18948 文

以下に全データの一覧を掲げる．図 4 - 1 参照．岡崎の文末，総計 18948 文の分類である．ゴザイマス系 841 文，デス系 6748 文，マス系 10048 文，ダ系 1148 文である．他の類型もまとめて，多いものから順に並べてグラフにすると以下のようになる．

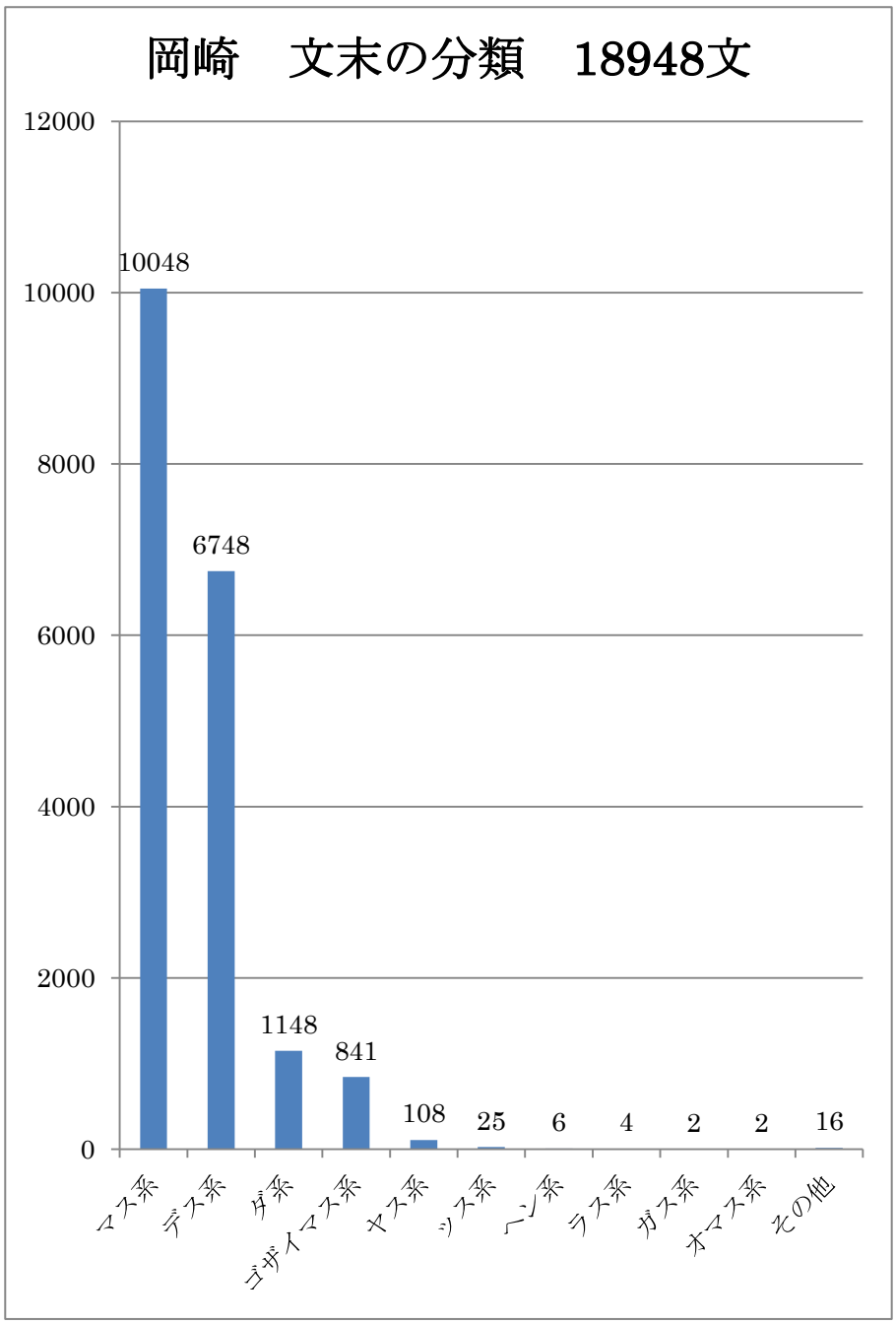


図 4 - 1　岡崎 12 場面全体　文末文体の分類

デスマス体が圧倒的である．ダ体が少しと，ゴザイマス系が少し使われる．他の方言的表現はわずかである．出現の多い 4 種類をここで扱う．

マス系 10048 文が一番多く，次にデス系 6748 文が使われる．合わせて 16796 文で，88.6%を占める．デスマス体が基本（デフォルト）になっていると言える．ただし岡崎調査の大部分の場面が顔見知りか未知の人で，子どもに話しかける場面を除くと明らかな目下への場面が設定されていない．また親友や家族の場面も調べていない．そのための偏りにも配慮すべきである．マスがデスより多いのは，動詞文がよく使われるからである．もっとも「いくです」のような動詞＋デスの表現も岡崎では出現する．

一方で，ダ体 1148 文に比べると，ゴザイマス体 841 文は多いとみるべきだが，前述のようにあいさつの定型文が多い．ゴザイマス体の大部分は形容詞か名詞に接続するもので，東京に広がりつつある「形容詞＋デス」の普及以前の状況を呈すると思われる．

以上の主な 4 類型以外は，ヤス系 108，ッス系 25，ガス系 2，ラス系 4，オマス系 2，ヘン系 6，その他 16 で，方言的な表現である．ッス系は，21 世紀初頭の今首都圏で広がっているものの先駆的使用の可能性がある．

2.岡崎のゴザイマス体

2.1. デゴザイマス体

現代話しことばの三つの文体のうちのデゴザイマス体を最初に見る．特別丁寧体，御丁寧体とも称される．衰退の道をたどる流れも見えるが，敬意低減の法則に従って，多くの(改まった)場面で使われる動きもある．

2.2. 文末「ゴザル.」の成人後採用　グラフ解説

以下では「デゴザイマス体」(特別丁寧体，御丁寧体)を扱う．手がかりとして，「ゴザル」（実質的には「ゴザイマス」）の出現を見る．

実際の使用率は大変低い．後述のように使用場面も限られていて，ほぼ「席譲られ」のみである．他は「先生」と「議事堂」でともに自分に関する紹介の入りうる場面である．現代敬語の特質の一つで，「ゴザル」が単独で使われることはまれで，丁寧語マスが付き，岡崎の文例の大部分はお礼の「ありがとうございます」である．

「ありがとうございます」の文体的位置付けには問題がある．ダ体・デスマス体・デゴザイマス体に 3 分したときに，対応が 1 対 1 でなく，体系的でないからである．ダ体の文脈では「ありがとう」で十分である．デゴザイマス体には「ありがとうございます」がふさわしい．しかし中間のデスマス体には「ありがとう」では不十分で，「ありがとうございます」は丁寧すぎる．ちょうど「おはよう」と「おはようございます」の使い分けと似ている．これに対して「こんにちは」は文体的使い分けがない．

現在デスマス体の確立に伴ってさまざまなことばにデスマスが付くようになった．「それでで

すね，そこでですね，なるほどですね」などである．しかし「ありがとう」にはですの付いた形が確立していない．この事情が岡崎の「ございます」の年齢差に働いたと見ることもできる．

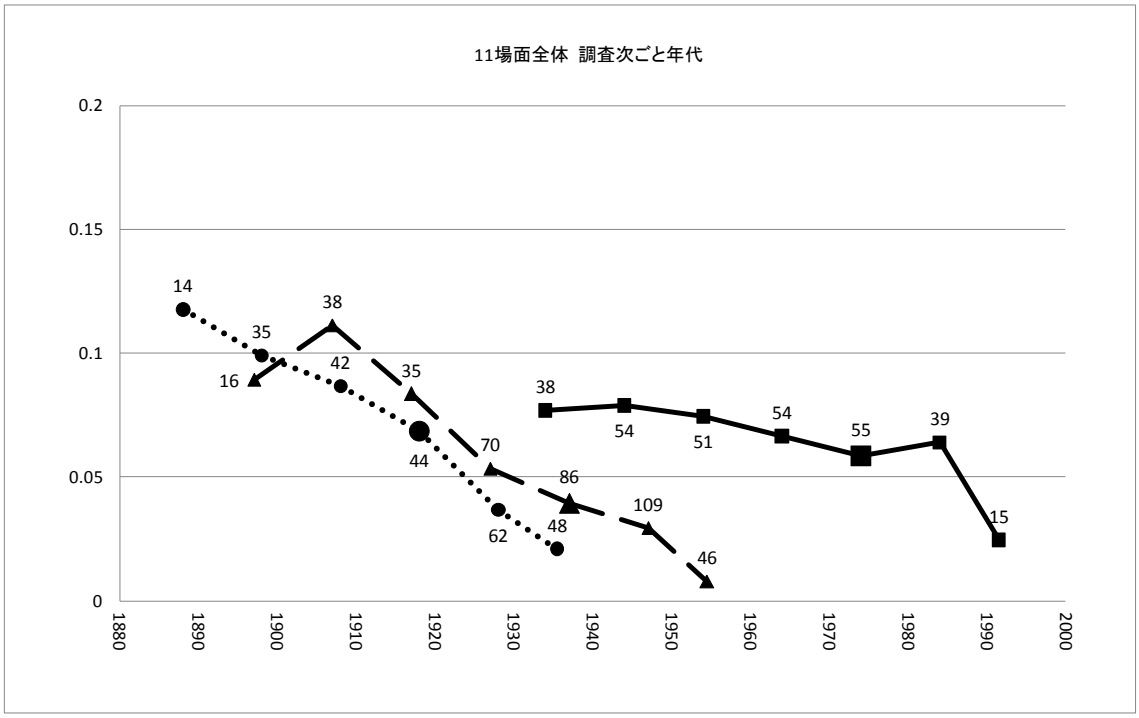


図 4-2　文末「ゴザル.」12 場面全体　調査次ごと年代

図 4-2 の生年実年代による 12 場面全体の「ゴザル」使用は，右下がり復活パターンとでも呼びうるものである．典型的な成人後採用を示す．形から「川の字変化」「Ⅱの字変化」と呼べる．これまでモーラ数，いただく，丁寧さなどで観察された．「ゴザイマス」を使いこなすのは，若いときではなく，壮年期以降であることによる．ただし使用頻度数は少ない．

第 3 節で後述の「デスマス」では順調な右上がりパターンである．第 3 章丁寧さで見られた右下がり復活パターン，「川の字変化」は，「ゴザル」の影響で生じたと推定できる．しかも「席譲られ」の「ありがとうございます」に影響された可能性がある．

図 4-3 は 12 場面個々の推移を示す．横軸は 3 回の調査の間隔，実時間（19 年と 36 年）に合わせた．顕著な増加が「席譲られ」で見られた．減少を示したのは「先生，議事堂」などである．

第 3 部の詳細グラフによれば，「席譲られ」がきれいな「川の字変化」を示す．つまりお礼のあいさつとして「～ゴザイマス」を使いこなせるようになるのは，半世紀間にわたって 20 代以降である．

以上，文末の「ゴザル」使用に関して生年実年代とからめて年次推移を考察した．「丁寧さ（の段階づけ）」で観察されたのと同様のきれいな川の字変化が見られた．「ありがとうございます」などの表現で使われたのだろう．

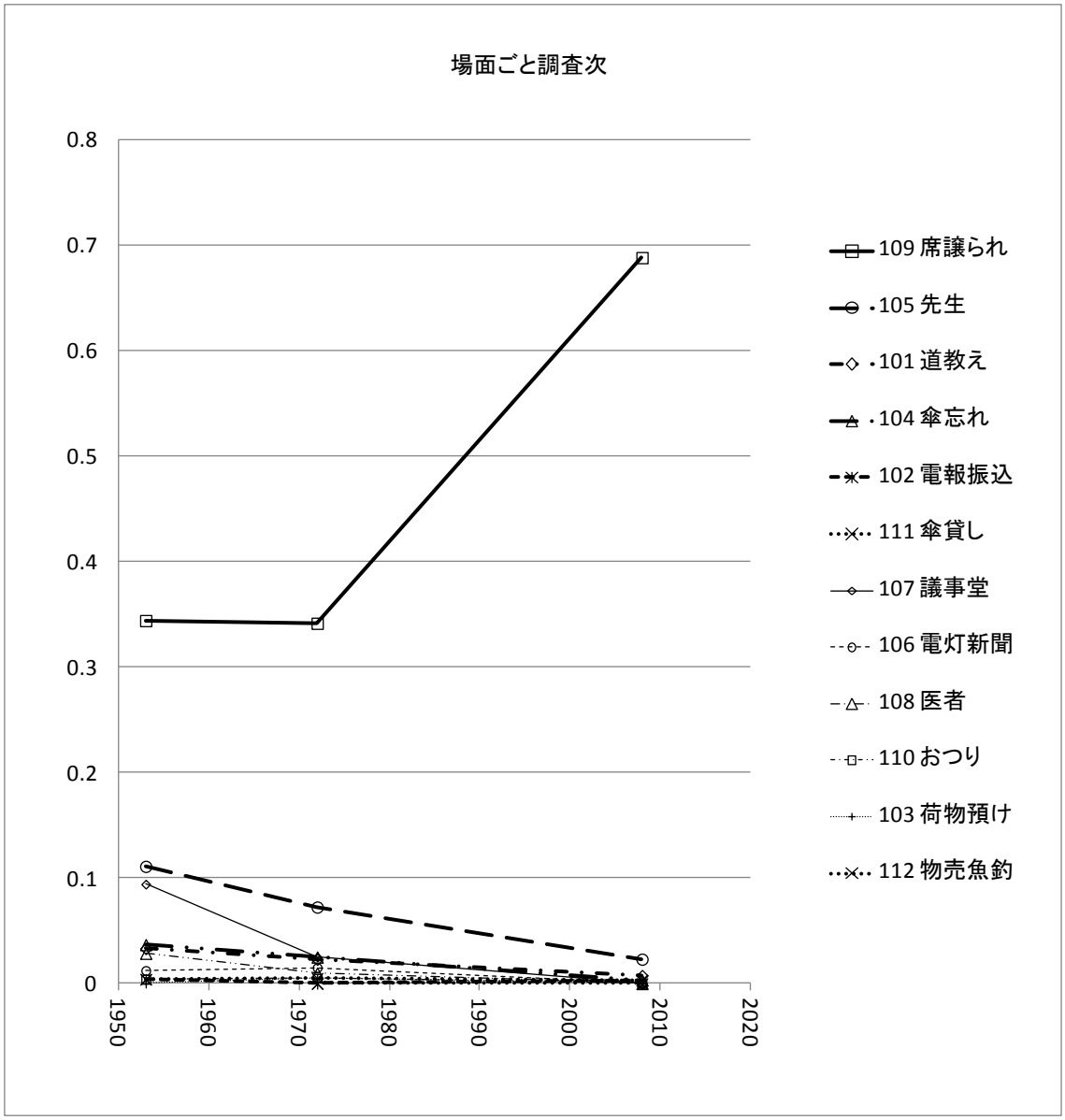


図 4-3　文末「ゴザル.」12 場面全体　場面ごと調査次

2.3. 文中「ゴザル」の減少　グラフ解説

以下では「ゴザイマス体」の中の「ゴザル」の文中の出現を見る．使用度数が低いので，差がはっきり見えるように，グラフの軸の上限値を小さくした．

図 4-4　の生年実年代による 12 場面全体の「ゴザル」使用は，右下がりが連続している．第 1 次，第 2 次の高年層でわずかな使用者がいたが，第 3 次の若い世代ではゼロになった．

図 4-5 は 12 場面個々の推移を示す．横軸は 3 回の調査の実時間（19 年と 36 年）に合わせた．使用場面が限られていて，実質的に「席譲られ」のみである．その使用が顕著に減少している．

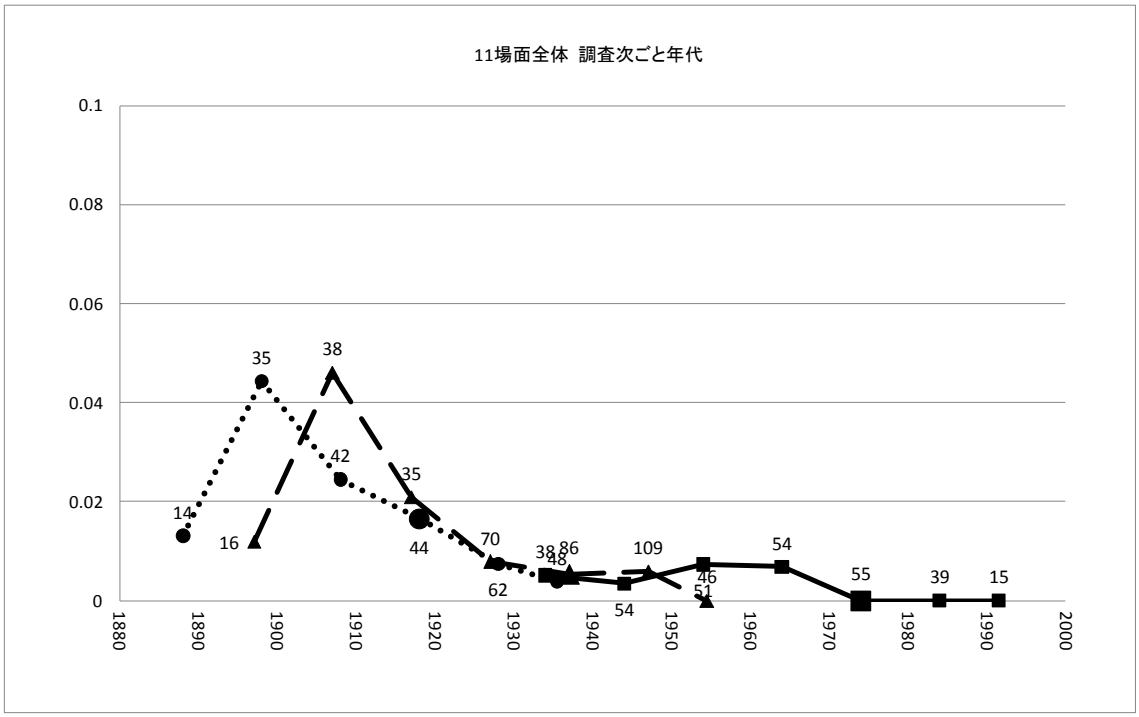


図 4-4　文中「ゴザル」　12 場面全体　調査次ごと年代

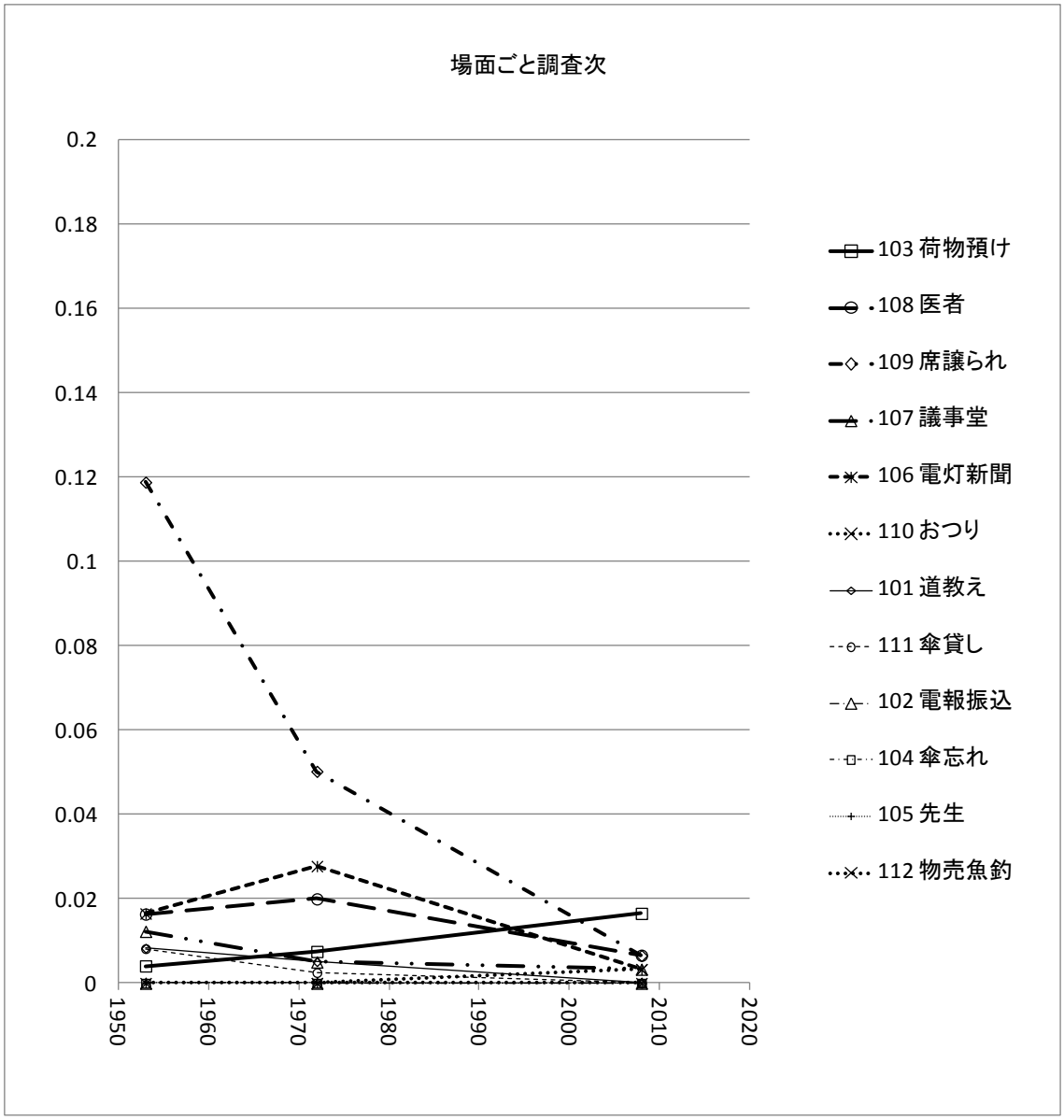


図 4-5　文中「ゴザル」　12 場面全体　場面ごと調査次

以上，文中の「ゴザル」使用に関して生年実年代とからめて年次推移を考察した．使用者数が限られているので読み取りには用心が必要だが，文中の「ゴザル」は衰退中と思われる．文末の「ゴザル」が川の字変化を示すのと対照的である．

3.岡崎のデスマス体の増減

以下では岡崎のデスマス体を形成する文末の 3 表現について，グラフによって考察する．最初に先取りして大きな傾向を指摘しておくと，「デス」は進出中と見られ，「マス」は衰退中と見られるが，「マセン」は大幅進出中と見られる．恐らく，「すみません」という定型的表現の進出の

ためだろう．これは，第 3 部詳細グラフの第 4 章 3-3 のグラフで，デスとマスがデスマス体の中で使われることが多いのに，マセンはゴザイマス体の中で多いことから，読み取れる．

3.1. 文末「デスマス」の増加　グラフ解説

以下では，「デスマス」グラフについて解説を加える．

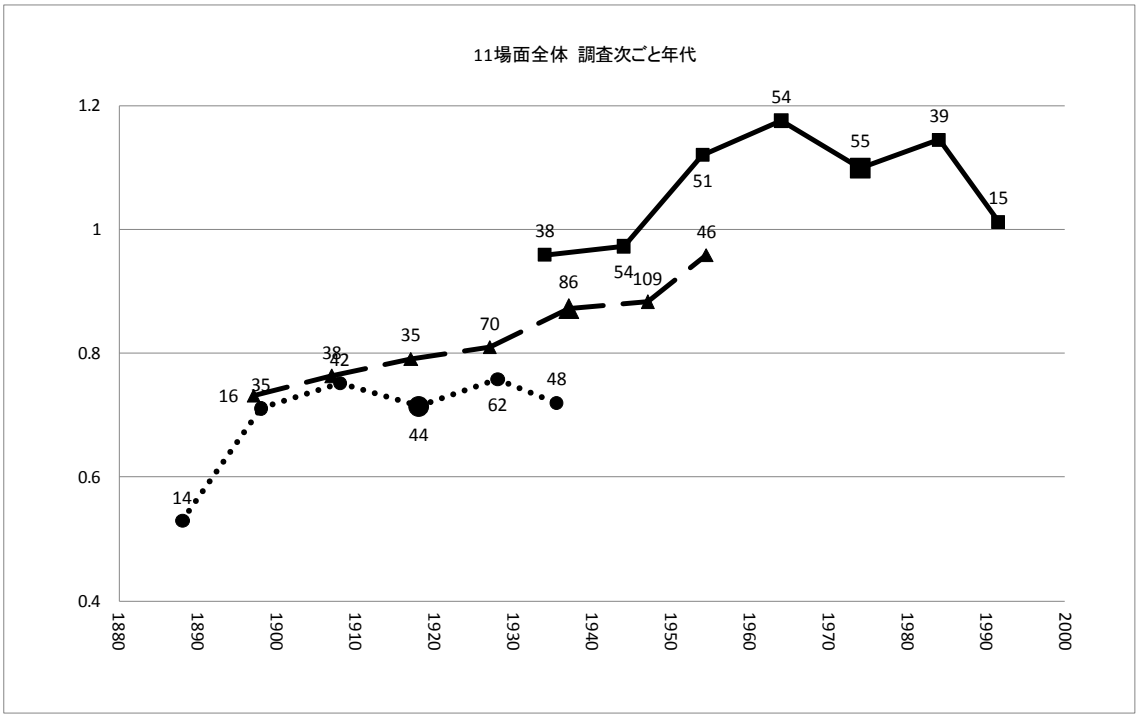


図 4-6　文末「デスマス」　12 場面全体　調査次ごと年代

図 4-6 に生年実年代による 12 場面全体の「デスマス」の出現頻度推移を示した．全体として右上がりで，「デスマス」使用が多くなったことを示す．約半世紀の増加傾向を示す．「デスマス」使用は，若い世代ほど多く，かつ年数が経つにつれ多くなったことを示す．ただし第 3 次では 10 代の数値が低い．鶴岡の共通語化で見られたパターンと似る．敬語のとらえ方全体に関わる重要なパターンである．

共通語化でよく見られるパターンである．未知の人に無難な言い方，デフォルトとして「デスマス」体が使われるようになったという観察と符合する．ここで，数値の 1 というのは，「デスマス」使用が，一人のインフォーマントの 1 問（1 場面）につき平均 1 回あったことを示す．それより線が上だとしたら，平均 1 回以上あったことを示す．第 1 次，2 次には 0.6 から 0.9 だったから，かつては「ダ体」による会話場面がかなり多かったことになる．つまり，半世紀をへだてた第 3 次調査の全体で，「デスマス」使用がほぼ全場面に及ぶようになったことを示す．以前は「ダ体」，「デアル体」がかなり使われていたのである．

成人後採用のパターンではない．つまりこれまで「丁寧さ」「ていただく」「モーラ数」などで

出てきた右下がり矢印の繰り返しパターン（3 本の右下がり線が復活する）傾向と違う．

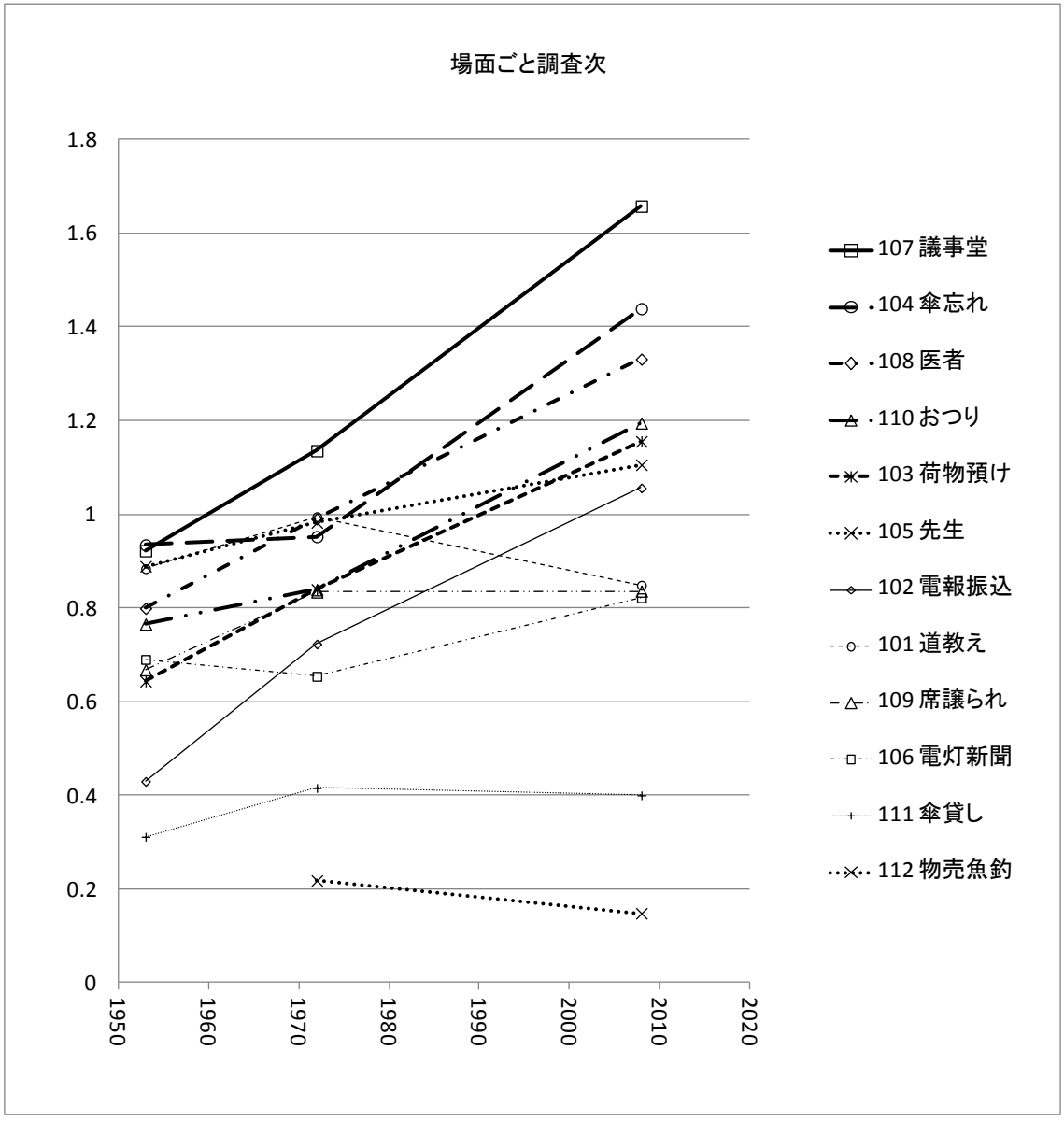


図 4-7　文末「デスマス」　12 場面全体　場面ごと調査次

図 4-7 は 12 場面個々の推移を示す．大多数の場面で「デスマス」使用増加を示す．数値 1 を基準と考えると，第 1 次調査では全場面で 1 以下だった．第 3 次調査では半数以上の場面で「デスマス」が優勢になった．

顕著な増加が「議事堂，傘忘れ，医者，おつり，荷物預け，振込用紙」などで見られ，基準線 1 を越えるようになった．デフォルトとして「デスマス」を使うのが多くの場面で当たり前になったのだ．表 2−1 の談話類型によれば，依頼と注意，疑義の場面に多い．「医者」での使用が第 1 次で少なかった理由は，未解明である．後述のように，「ゴザル」が代わりに多かったわけでは

ない.

「傘貸し，物売魚釣」の 2 場面が他と離れて，低い位置にある．片方は勧誘で，恩恵を与えようという場面，もう一方は質問，こどもへの話しかけ場面であり，「デスマス」体が出ない理由は説明が付く．減少を示したのは応答の「道教え」である．これも恩恵を与えようという場面である．ただしこれまでこのような談話類型や心理的負担関係の要素が「デスマス体」の使用に直接働きかけるという指摘は少なかった（南 1987).

場面が東京の「議事堂」で第 3 次の跳ね上がりが見られた．共通語的使用と見なされる．やや減少を示したのは「道教え，物売魚釣」である．「傘貸し」は他と離れて「デスマス」が少ない.

なお井出・荻野・川崎・生田（1986）によれば，日本の大学生では「デスマス」を使うかどうかで言語表現がきれいに 2 分され，かつ話し相手も目上か目下かできれいに 2 分された．それにくらべると，岡崎の 12 場面はそれほどきれいには分かれない.

基準線 1 より上か下かが文体の推移としては重要である．生年実年代 3 回の調査で，全世代で 1 を越える場面はない．それに近いものとして，「傘忘れ，議事堂，先生」がある．目上と見なされる人または未知の人が相手である．共通語の要求される場面でもある．他の多くの場面では，第 1 次で 1 以下で，第 3 次で 1 以上になる．「おつり，医者，振込用紙，荷物預け」である．一方ずっと 1 以下の項目もある．「席譲られ，新聞代，傘貸し」である．1 以下でしかも右下がりを示す項目もある．子どもが相手の「物売魚釣」である．「道教え」は，第 2 次で 1 以上の値を示したが，第 3 次で下がった.

全体グラフと同様の右上がりパターンがあるかに着目すると，かなり多い．3 本の線の傾きに着目すると，大きく 3 パターンになる．大部分は右上がりの自然な増加パターンである．右下がりの減少パターンを示すのは，「物売魚釣，道教え」，中高パターンを示すのは，「医者，傘貸し」である．「医者」の第 3 次若年層での減少は不可解である．「ゴザイマス」が代わりに増えているわけではない.

第 3 部詳細グラフによれば，多くの場面でむしろ若い人が「デスマス」をよく使う．共通語として普及しつつある（岡崎の方言としては「デスマス」をあまり使わなかった）と見られる．辻 2014 によると，岡崎では古風な尊敬語的な「マス」の用法も見られたという.

以上，文末の「デスマス」使用に関して生年実年代とからめて年次推移を考察し，かつ性別，学歴別という言語外的条件との関係を見た．「丁寧さ（の段階づけ）」で観察されたのと違うきれいな増加傾向が見られた．世の中全体の「デスマス」体普及の流れと一致する．今回の分析結果を重んじるべきだろう．「丁寧さ（の段階づけ）」でなぜ複雑なパターンが見られたのか，再検討の必要がある.

3.2. 文末「デス.」の横ばい　グラフ解説

以上では文体を大きく分けるために，「デスマス」体としてまとめてグラフ化して解説した．以下では「デス」と「マス」を区別して，各グラフについて解説を加える．まず最近色々な形で進出著しい文末の「デス」を見る．文中・文末には助動詞，助詞を伴うもの，なしで終わるもの

など様々あるが，ここでは助詞などをともなわずに，文を終えるものを選んだ．ただし話しことばの宿命で，単独の文なのか，2 文なのかの判別のつきにくいものもある．

以下では，「デス」のグラフについて解説を加える．

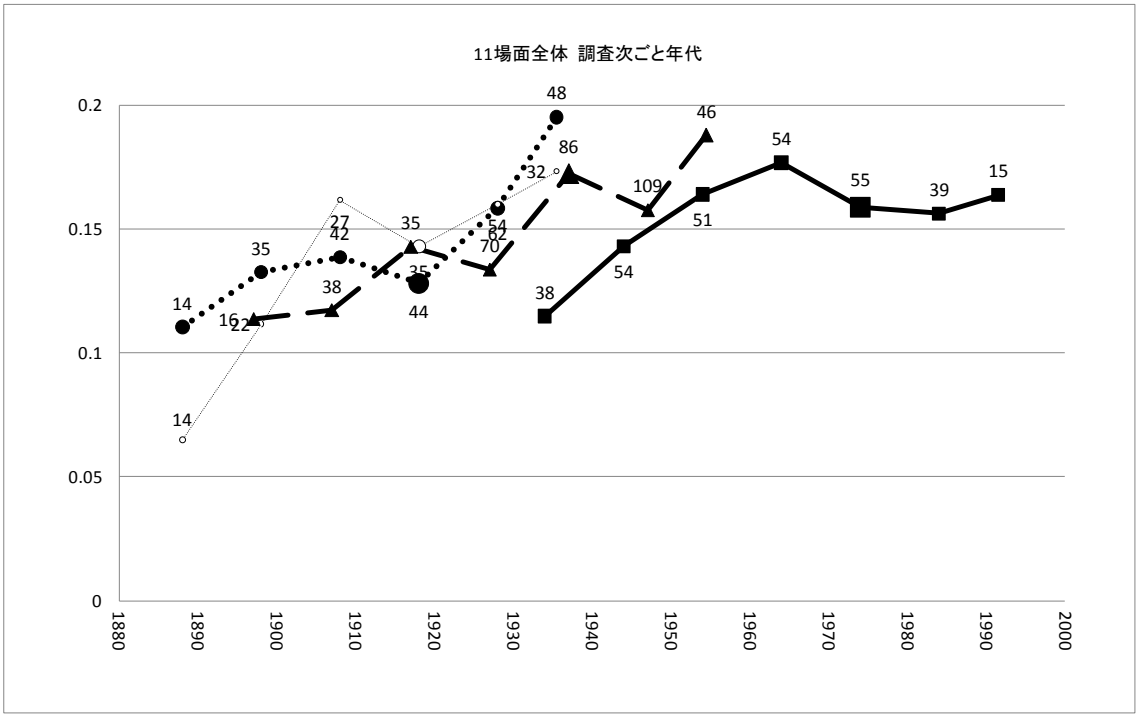


図 4-8　文末「デス.」12 場面全体　調査次ごと年代

図 4-8 の生年実年代による 12 場面全体のグラフで，「デス」使用は，3 回の調査の 4 本の線でゆるやかな右上がりが繰り返される．中年以下の若い世代で多くなることを示す．ただし 1940 年前後生れの人で分かるように，のちの時代になり，年を取ると「デス」を使わなくなる．『大規模経年調査資料集 11』でみると，「ゴザル」が増えるわけでもないので，「ダ体」＝常体＝普通体になるのだろう．加齢に従い，調査で設定された相手が話者よりも年下になることも働くだろう．成人後採用の逆パターンである．

文末「デスマス」の使用が多くなったことと矛盾する．次節 3.3 で「マス」も減っている．何かが代わりに増えたのだろう．そのあとに終助詞ネなどが付く表現が普及した可能性がある．

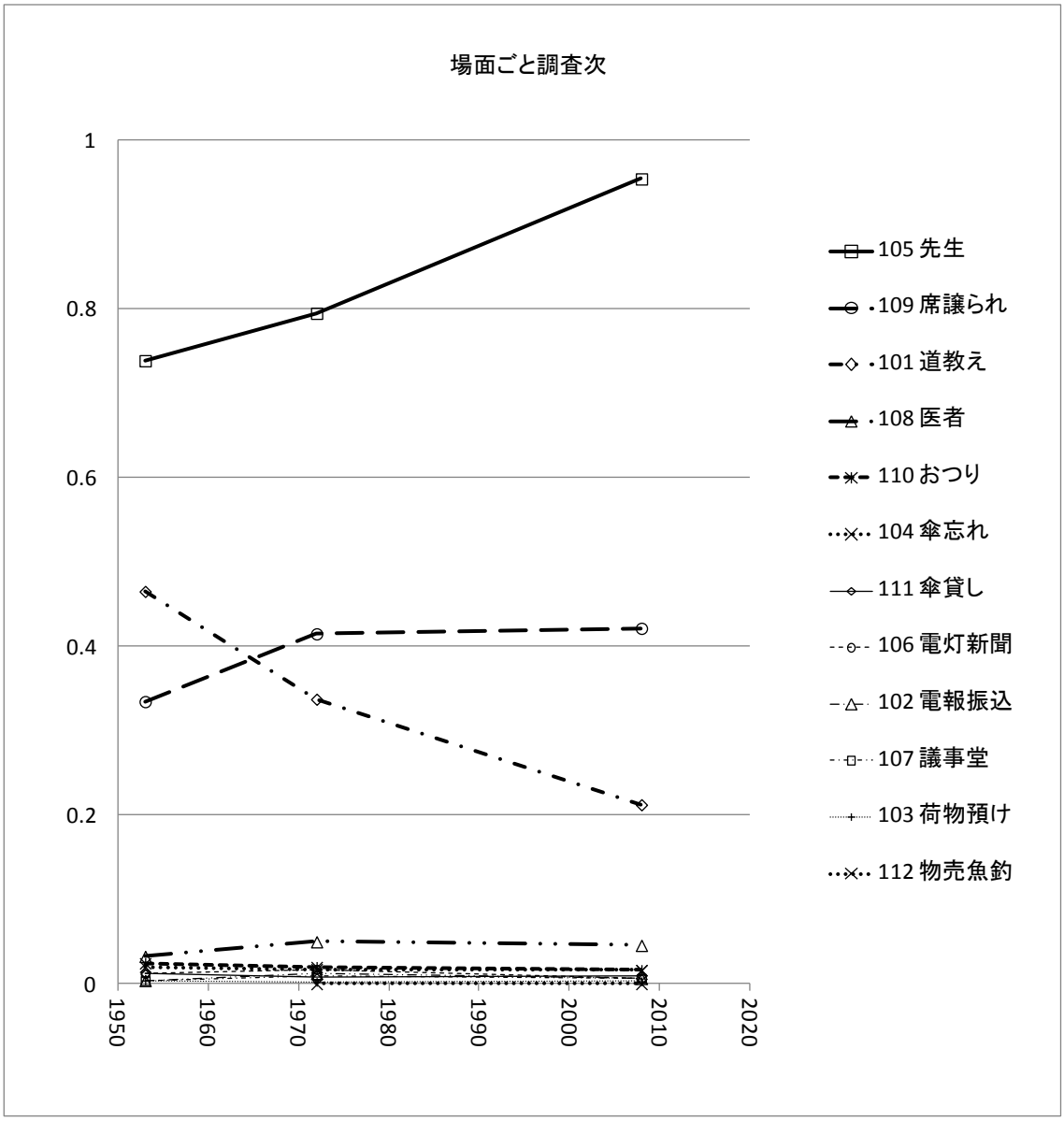


図 4-9　文末「デス.」12 場面全体　場面ごと調査次

図 4-9 は 12 場面個々の推移を示す.「先生」で増え続けている. 近年になるほど「デス」が増えており, 先生への（自分の子供の）紹介が画一化に向かいつつある.「席譲られ」では第 2 次で多くなり, 第 3 次では横ばいである.「道教え」では減り続けている. 大多数の場面で「デス」が使われない. 恐らく定型的な表現が多いのだろう.

以上,「デス」使用に関して生年実年代とからめて年次推移を見た.「丁寧さ（の段階づけ）」で観察されたのと違った増加傾向が見られた. 日本全体の「デス」体普及の流れと一致する. 一方以下で述べる「マス」とは一致しない. その理由の解明には, 全体を新たな目で見る必要がある.

3.3. 文末「マス.」の減少　グラフ解説

以下では，第 4 章 3.3 の文末の「マス.」のグラフについて解説を加える．「デスマス体」としてまとめて扱われるが，前述 3.2 の「デス.」と異なった傾向を見せる．

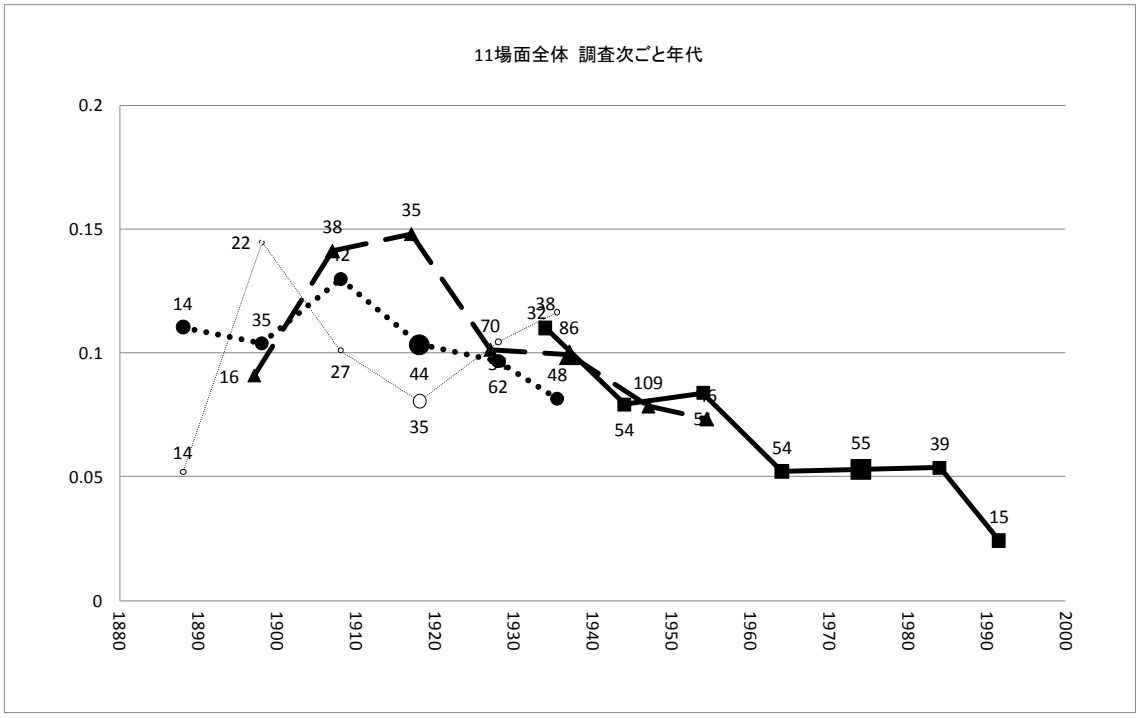


図 4-10　文末「マス.」12 場面全体　調査次ごと年代

図 4-10 の生年実年代による 12 場面全体のグラフでは，「マス.」使用は，3 回の調査の 4 本の線でゆるやかな右下がりがつながる．中年以下の世代で少なくなり，かつ半世紀かけて減っていることを示す．典型的な衰退パターンである．日本語敬語全体として「デス」が増えて「マス」が減るという予測には一致する（井上 1999.5）．定型的表現が変わった可能性がある．代わりに終助詞付きの文が増えた可能性がある．1940 年前後生れの人は，のちの時代になり，年を取っても「マス」の使用率は同様である．

図 4-11 は 12 場面個々の推移を示す．助詞なしの文末言い切りの「マス.」は，ほかに比べればよく使われるが，1 次から 2 次にかけて減る，3 次でも減る．またすべてで若い人のほうが少ない．衰退傾向である．「デス.」に押されたこともあるし，後述のように終助詞付きの文が会話で多く使われるようになったためとも言える．場面による違いがある．道教えで一番多いのは，指示表現として「まっすぐです」などの文が使われるからである．振込用紙，荷物預けでも同様であるが，減っている．

「マス.」の使用率の場面差は連続的である．道教え，電報振込，医者，新聞代が多い．「道教え」は横ばいで，「デス.」の減少を補うわけではない．「先生」「席譲られ」はそもそも「マス.」が表れない文脈なのか，回答が少ないので，「デス.」との関係は見られない．「振込用紙」は第 2

次で少し増えた．「荷物預け」は減少が著しい．「デス．」で「先生」「席譲られ」「道教え」で特に多く使われたのと一致しない．以上，文末の「デス．」と「マス．」で異なった傾向が見られた．少なくとも両者が連動する関係ではない．

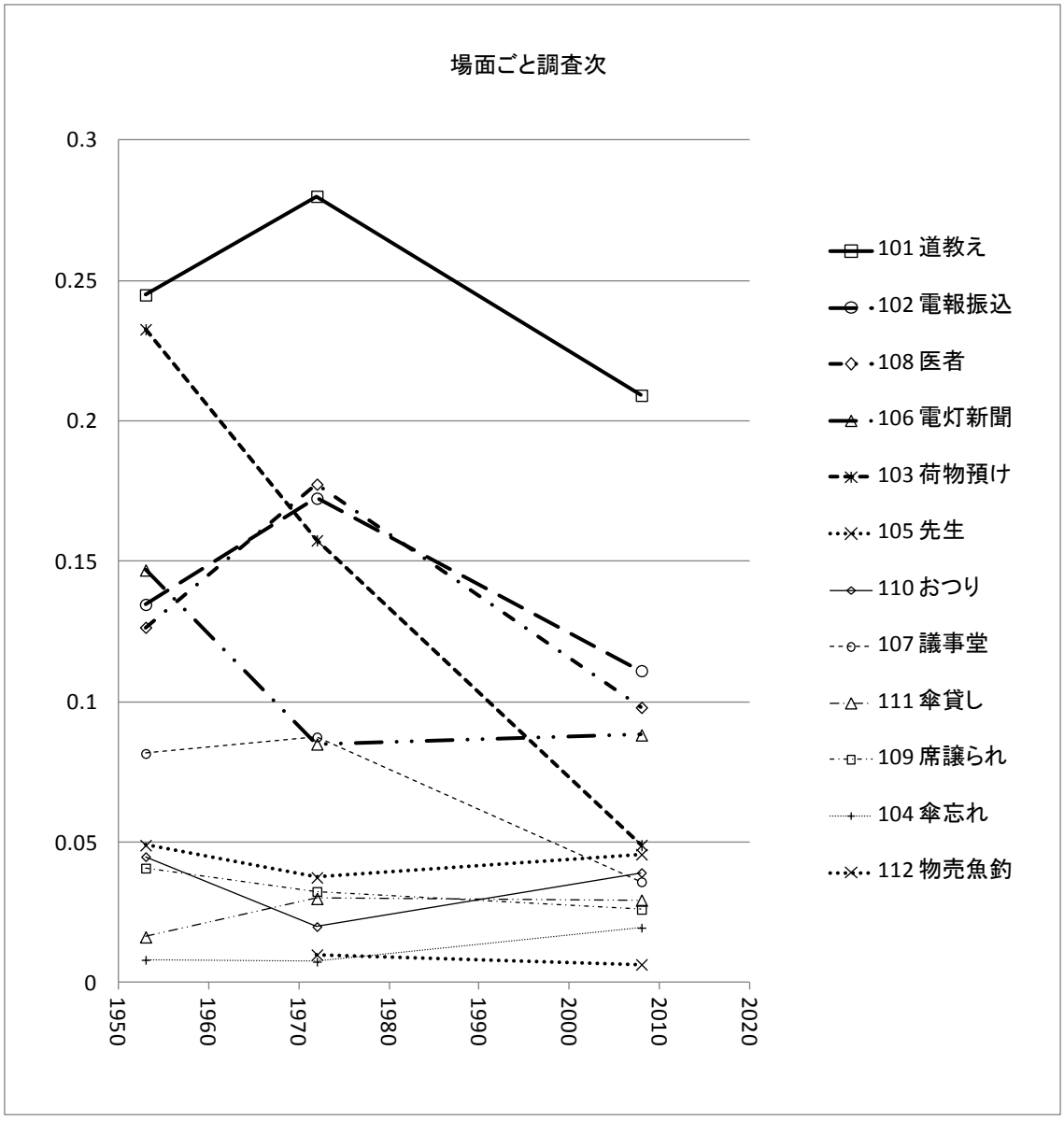


図 4-11　文末「マス．」12 場面全体　場面ごと調査次

以上，「マス．」使用に関して生年実年代とからめて年次推移を見た．「丁寧さ（の段階づけ）」で観察されたのと違った減少傾向が見られた．世の中全体の「マス」の衰退と一致する．

3.4.　文末「マセン．」の急増　グラフ解説

以下では，文末「マセン．」のグラフについて解説を加える．「デスマス体」としてまとめて扱

われるが，前述の「マス.」と異なった傾向を見せる．同じ意味の「～ナイデス」が東京で普及していることとの対照を念頭におくべきである．結論からいうと，「マセン.」はデスマス体と連携するのでなく，「すみません」という定型的表現として広がったものと考えられる．

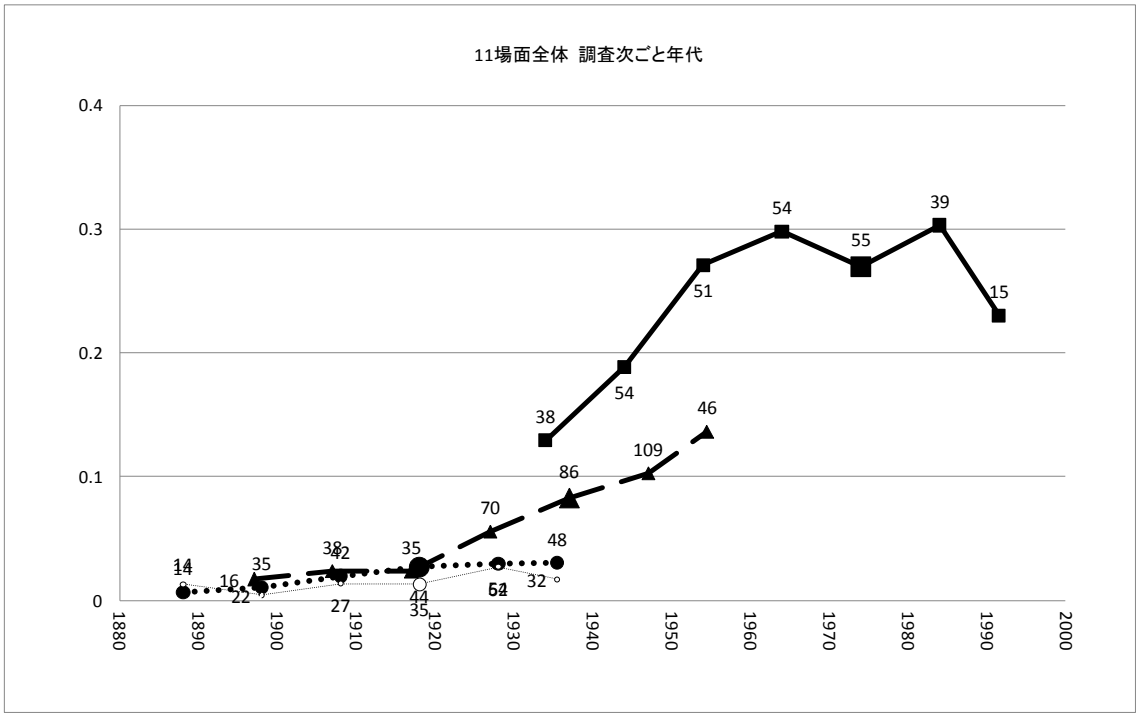


図 4-12　文末「マセン.」12 場面全体　調査次ごと年代

図 4-12 の生年実年代による 12 場面全体のグラフでは，「マセン.」使用は，3 回の調査の 4 本の線でゆるやかな右上がりがつながる．若い世代が多く使い，かつ半世紀かけて増えていることを示す．1940 年前後生れの人は，のちの時代になり，年を取って「マセン」の使用率を増やしている．典型的な増加パターンである．日本語敬語全体として「デス」が増えて「マス」が減るという予測に一致しない（井上 1999.5）．また東京で「～マセン」から「～ナイデス」に変化したことと食いちがう．定型的表現が岡崎で増えた可能性がある．

図 4-13 は 12 場面個々の推移を示す．全体として急激な増加を見せる．文末「デスマス」の使用が多くなったことと合致する．しかし前節の「マス.」の減少とは食い違う．

「マセン.」の使用率は大多数の場面で増えた．「議事堂」「傘忘れ」「おつり」「振込用紙」「医者」「荷物預け」の増加が目立つ．表 2－1 の談話類型によれば，依頼と注意，疑義の場面に多い．応答の「道教え」「先生」「席譲られ」はそもそも「マセン.」が使われない文脈なのか，回答が少ない．数値 1 は「マセン」使用基準線である．第 3 次調査で推移が大きくなった．「議事堂」「傘忘れ」の第 3 次での増加が特に目立つ．「おつり」「振込用紙」「医者」「荷物預け」「道教え」でも，第 2 次と第 3 次にかけて順調に増える．「席譲られ」「新聞代」「傘貸し」は 3 回を通じて増加傾向だが，若い世代で使用が少ない．「先生」と「物売魚釣」では使われない．多くの場面で使

われることが，「デス」「マス」と違う．談話の冒頭で「すみません」と声をかけそうな場面が上位に並ぶ．後述言い淀みの「あのー」の使われやすい場面と共通性がある．談話における機能からいうと，同様と言える．

以上，「マセン」使用に関して生年実年代とからめて年次推移を見た．「丁寧さ（の段階づけ）」で観察されたのと違った減少傾向が見られた．「すみません」という表現で使われたのだろう．

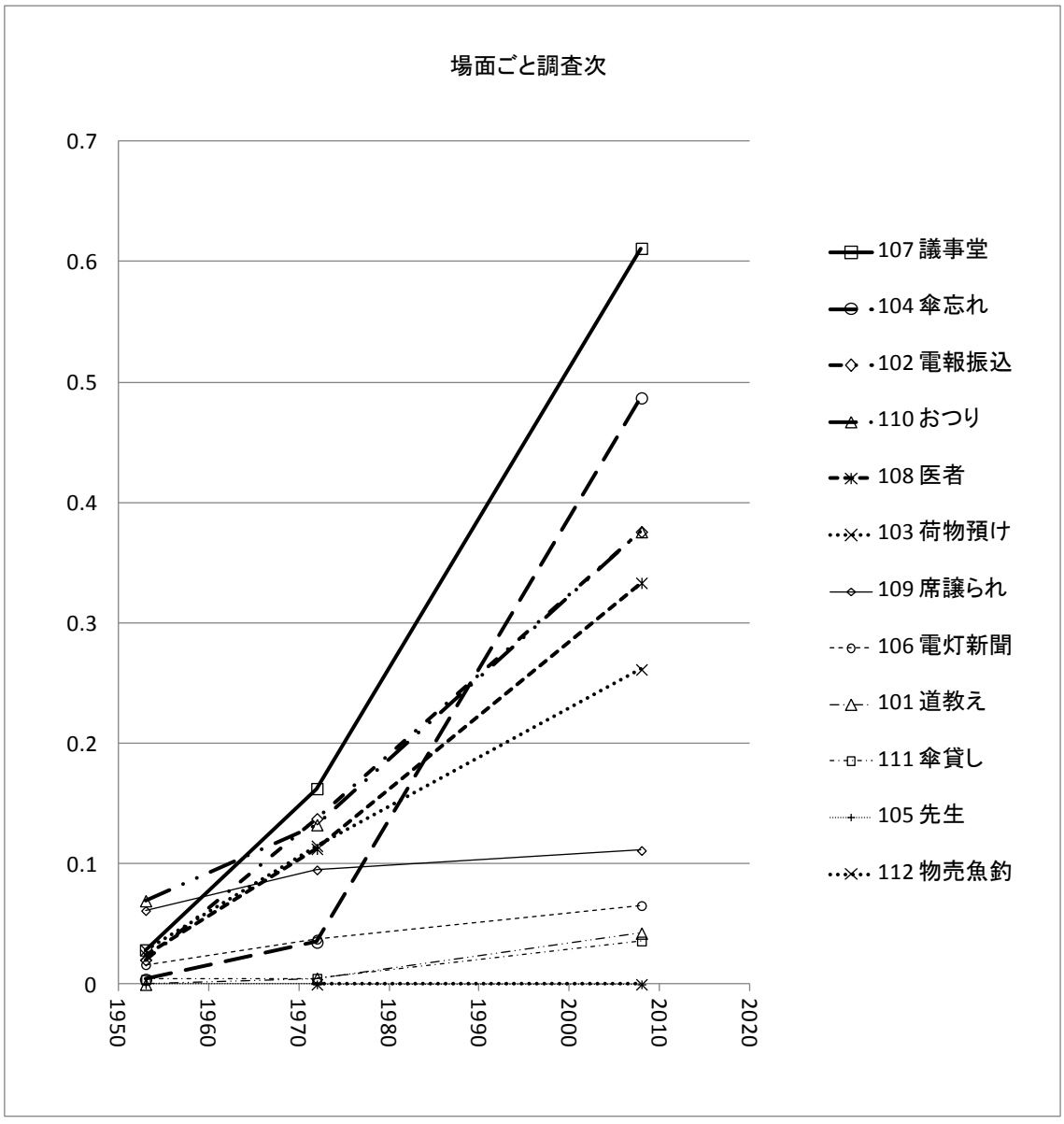


図 4-13　文末「マセン.」12 場面全体　場面ごと調査次

以上，文末の「デス.」「マス.」と「マセン.」で異なった傾向が見られた．少なくとも 3 者が連動する関係ではない．

4.岡崎のダ体

現代話しことばの三つの文体のうちの「ダ体」は，常体，普通体とも呼ばれる．なお書きことばの「デアル体」は，岡崎調査では出なかった．ダ体は，単独で終わることがまれで，助詞が付くことが多い．

4.1. 文末「ダ体」の場面差 グラフ解説

ゴザイマス体，デスマス体に比べて，ダ体はまとめて検索するのが難しい．終助詞付きの例文をまとめるなどの手法で集めたデータを挙げて検討する．

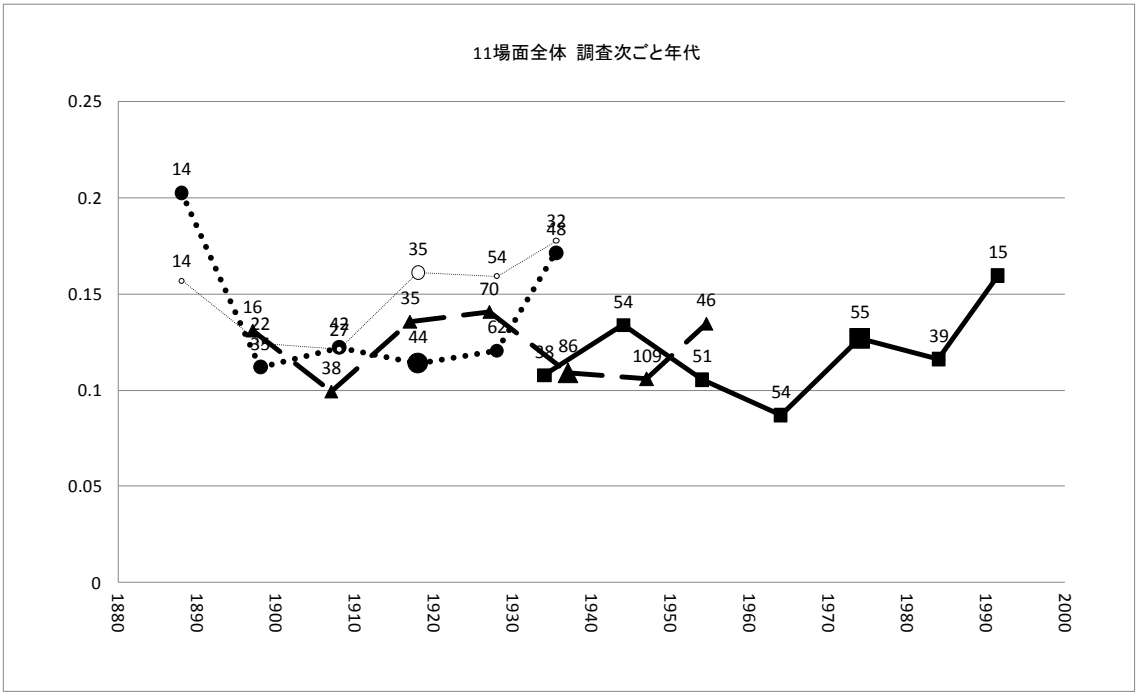


図 4-14　文末「ダ体」　12 場面全体　調査次ごと年代

図 4-14 の生年実年代による 12 場面全体のグラフでは，裸のダ体は，3 回の調査の 4 本の線がほぼ横ばいになる．高年層と若年層が多く使う．敬語の成人後採用と逆で，10 代が敬語を使いこなせずにダ体を使い，高年層は使い分け能力が衰えて（または若い者への丁寧語は不要と考えて）ダ体を使うと，説明できる．

図 4-15 は 12 場面個々の推移を示す．傘貸しと物売魚釣とおつりで多い．電報振込は第 1 次で多かったが，第 2 次以降減った．なかば公共的な依頼場面で半世紀前にダ体が使われていたのは，意外である．

以上をまとめると，裸のダ体は，場面によって出現が違う．第 3 次調査にかけて減るもの，若い世代で使われるものがあり，デフォルトとしてダ体が選ばれることは少なくなったと思われる．

デスマス体の進出と表裏の関係にある.

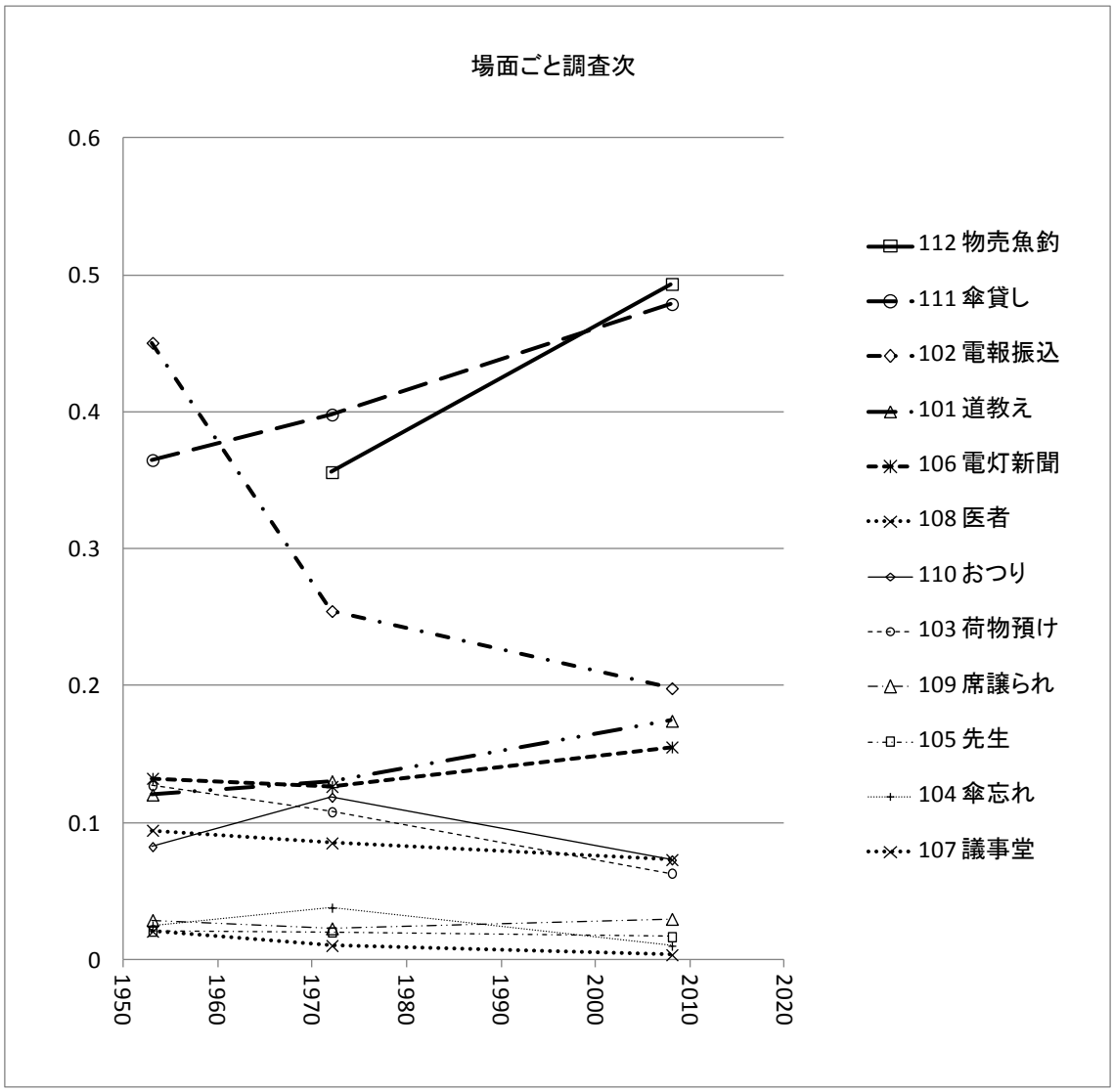


図 4-15　文末「ダ体」　12 場面全体　場面ごと調査次

5. 岡崎調査の文体変化まとめ

以上，岡崎調査の文体要素を「ゴザイマス」「デスマス」「ダ」などに分けて，個別のグラフで解説した.「ゴザイマス」体,「デスマス」体,「ダ」体の使用に関して，年次推移を考察した.「丁寧さ（の段階づけ）」で観察された「敬語の成人後採用」とまったく違った傾向が見られた．また世の中全体の「デスマス体」ことに「デス」の普及の流れと一致しない．岡崎の基本的文体要素「デスマス」の使用は，やや古い段階を保っているようである.

あいさつ表現に限って使われるものがあり，使用が少ないものもある．全体としてはデスマス体が普及して，当たり前のデフォルトとしての文体になったと見られる．若い世代の使用率が高い点で，「ていただく」などで見られた「川の字変化」の成人後採用と違う．しかし「すみません」のような定型的あいさつ表現は増えており，広い意味の敬語，配慮表現が増えたと言える．対者敬語の基本を形成する文体要素のうち「デスマス」の増加は把握できた．しかし成人後採用を左右する動きとは連動しない．戦後の待遇表現や配慮行動の動きを説明するには，「ゴザイマス」「デスマス」「ダ」などを観察するのでは不十分である．また尊敬語・謙譲語の使用でも説明しきれない．前述の「ていただく」などで見られたような多様な表現が，対人関係を調整するために新たに現れたと見られる．

丁寧語は文体の基本を形成するものととらえられるが，民衆の考える「世論敬語」の中には入らない（9.1 節参照）．尊敬語と謙譲語が主体なのである．一方三つの文体のうち，ダ体は幼児期から基本的文体として身に付く．デスマス体は学童期に教室での談話として使用が要求される．デゴザイマス体は，成人以降に使う機会が訪れる．この言語習得の時期の違いが，岡崎調査の敬語使用パターンに反映されたと考えていい．拡大すれば，音韻やアクセントは幼児期にほぼ定まるもので，鶴岡調査の結果によればどの時期に生まれたかでほぼ規定される．このように，言語習得の時期と新現象の採用の時期とは，密接に関連する．

第５章

「わたくし」使用率の増加：岡崎と全国

はじめに

本章では岡崎敬語調査における自称詞（1 人称代名詞）を扱う．動詞に典型的に表れる敬語と，密接に連動する現象だが，ここでは独立に扱い，文化庁の世論調査データや『大都市の言語生活』，『方言文法全国地図』などと照らし合わせて，岡崎の 3 回の調査を全国レベルで位置付ける．「わたくし」の使用パターンにおいて，全国的データでも「成人後採用」の現象が観察された．ただし結論としては，3 回の岡崎の調査結果は，戦後の日本（特に東京）で起きた変化と直接に連動するものではない．岡崎市民の敬語使用は共通語化を起こしているが，東京でも別の変化を起こしていて，追いついてはいない．

岡崎調査の結果はこれまで単独で分析されてきた．他の都市の敬語とどんな関係にあるかが解析されず，標準語，共通語の敬語との関係も解明不十分だった．岡崎という地方都市の変化の背景が分からず，普遍性のある現象かも分からなかった．敬語現象は個人差や場面差が大きいので，調査手法が違うと直接対比することが困難だという難関がある．その点自称代名詞に限定すれば，類似の調査がいくつかあるので，比較の指標として岡崎の調査結果を全国レベルで対照しやすい．以下では岡崎以外の地域の各種調査にも言及する．

１．岡崎調査の「わたくし」使用率

1.1. 岡崎調査と文化庁世論調査の「わたくし」使用率

結論を先取りして，最初に示す．日本語の代名詞は，英語を通じて知るような印欧語と違って，文法(構文論 syntax)的に使用が規定されることはなく，省略可能である．1 人称代名詞は，自明の場合省略されることが多い．その中で，岡崎調査では「わたくし」の使用について，興味ある現象が見られた．若い世代の使用率が低いのに，調査を繰り返すと同じ世代の人の使用率が高くなる現象，成人後採用である．

以下で岡崎調査と文化庁世論調査の「わたくし」の使用率などを対比した．文化庁の世論調査では，「わたくし」の使用者が高年層に多いのに，調査を繰り返すと全年齢層で増加するという，これまでの言語変化と違うパターンが得られた．敬語の成人後採用を示す例で，「イコール変化」

「川の字変化」にあたる．全国レベルで，共通語化の進行と一致して，都市規模に応じる形で増えている．

岡崎の 3 回の調査でもこれに近いパターンが出た．「敬語の成人後採用」については，いくつかの論考で言及して実例を挙げた．これまでのところ岡崎敬語調査のデータが主で，「ていただく」使用率（第 2 章），「丁寧さ」（第 3 章），「ゴザイマス」（第 4 章），言い淀み（「あのう」などのヘッジ，フィラー）（第 6 章），回答（反応文）の長さ（第 7 章）などで観察された．

しかし，岡崎の半世紀以上を経た 3 回の調査では「わたくし」は減少傾向を示し，音韻や語彙と違って，若い世代が先行して使うわけではない．岡崎の 3 回の調査で「わたくし」の普及が観察されなかったことは，岡崎が地方都市としての位置にあって，最近の首都圏主導の，全国レベルでの都会的なことばの動きについて行けないことを示す．岡崎敬語調査の位置付けのために重要な視点である．そもそも岡崎を調査地に選んだのは，人口規模から言ってサンプリング調査による母集団の推定に適切だったことと，従前の調査で協力率（達成率）が高かったことがある．いわゆる身内敬語を持つような，西日本の敬語体系と東京語の敬語体系の接触が観察できるという強みもあった．

その状況の中で，韓国で類似の調査が行われたのは（青山 1969 - 1970），珍重すべきである．

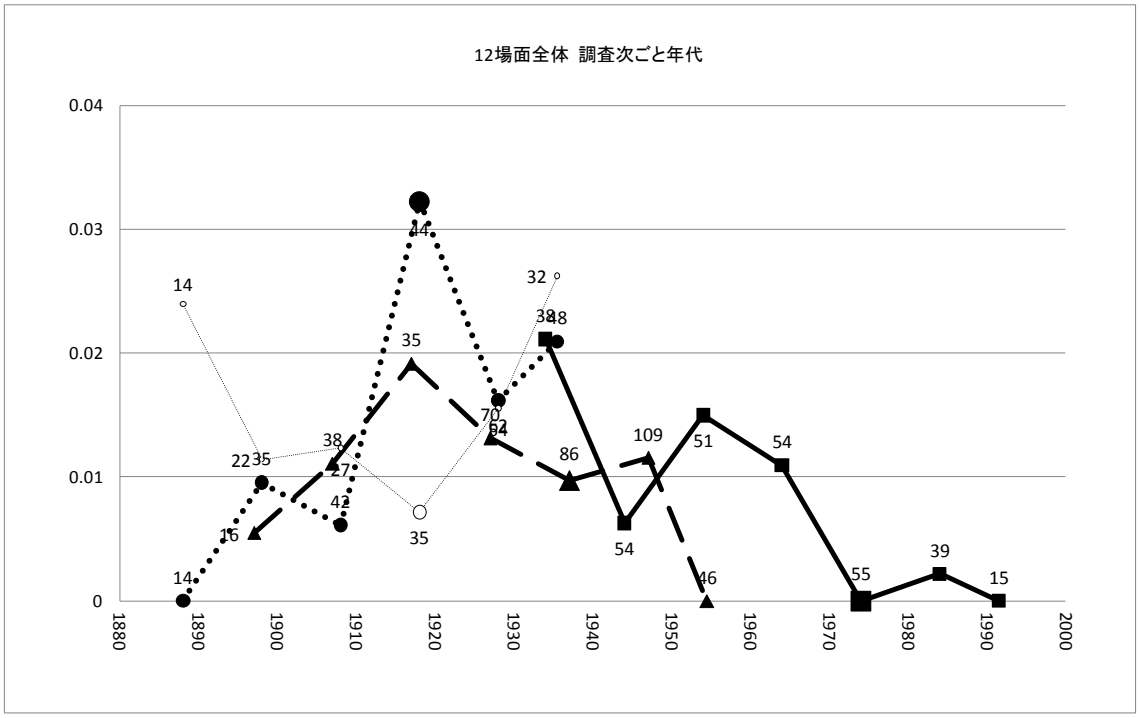


図 5 - 1　岡崎調査の「わたくし」使用率

1.2. 岡崎「わたくし」使用率グラフ解説

ここで扱う「わたくし」使用率は，主要 12 場面全体についてである．最初に 12 場面合計値を扱い，のちに各場面別の数値を扱う．まず全体像を見る．

図５－１に，岡崎調査の「わたくし」使用率のグラフを示す．これまで「ていただく」「文の長さ」その他で用いた生年実年代のグラフである．

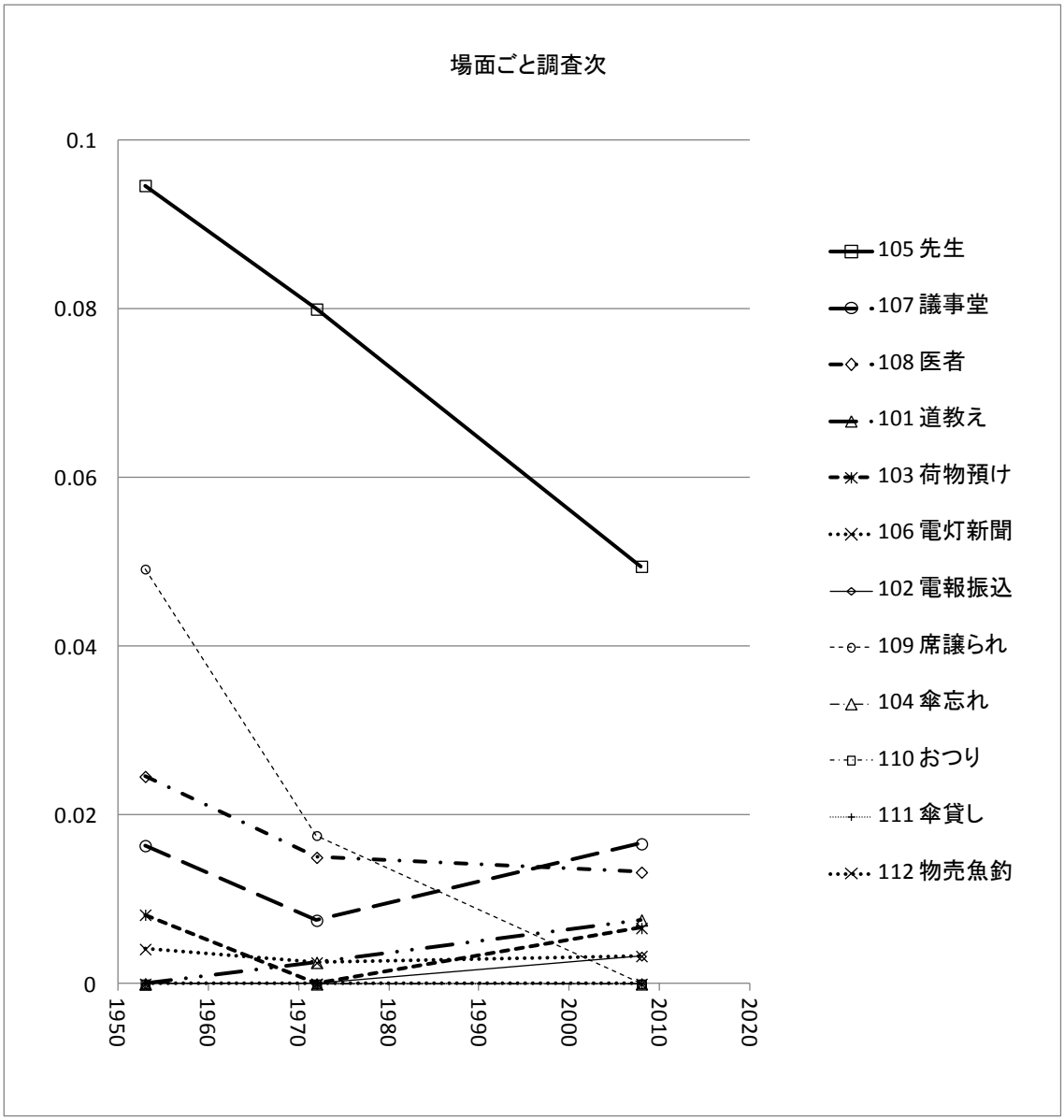


図 5-2　「わたくし」使用率　12 場面全体　場面ごと調査次

図 5 - 1 では，使用率が非常に低いので，変化を強調するために縦軸を拡大した．全体として中高（山型）のパターンを示す．点線第 1 次調査の P（Proper, Professional 本グループ）サンプルと C (Control, College，比較グループ) サンプルは数値がやや離れるが，若い世代の使用率が高い．しかし破線第 2 次調査と実線第 3 次調査では，使用率が全体として減少し，しかも若い世代の使用率がゼロに近くなる．単独で見たら，減少・衰退のカーブである．ただ，右下がりの線が繰り返されており，第 2 次調査でゼロだった 10 代が，第 3 次調査で 50 代になって，使用率を

上げていることを考えると，「敬語の成人後採用」の例ととらえうる．第 1 次調査を除くと，右下がりのイコール変化（川の字変化）の例と見てよい．

1.3. 自称詞「わたくし」　グラフ解説

場面による違いを見よう．図 5-2 によれば，先生と議事堂，席譲られ場面に多い．しかし 3 場面とも 3 回の調査を通じて減少している．先生への態度が変化したとも考えられる．丁寧さでも見られた傾向である．一方いくつかの場面ではわずかに増加している．つまり場面による使い分けが薄れたことになる．

図 5 - 1 によれば，3 回の調査ともに中年層が多く使い，高年層と若年層はあまり使わないと読み取れる．前述のように，右下がりまたは中高と読み取って，敬語の成人後採用の例ととらえていい．以上岡崎の 3 回の結果により，限られた場面での「わたくし」の成人後採用が見られた．

2. 文化庁世論調査の「わたくし」使用率

2.1.文化庁調査の「わたくし」増加　----「わたくし」適齢期 ----

敬語に関わる現象を分析しているうちに，年齢差が歴史的変化と食い違う例が見つかった．「敬語の成人後採用」と名付けた．岡崎調査の他にもあるだろうか．同じ手法で繰り返した調査データが必要だが，幸いに文化庁「国語に関する世論調査」のいくつかで，継続して繰り返した項目がある．1996 年と 2006 年だが，後の調査は岡崎第 3 次調査の 2 年前にあたるので，ほぼ重なる．

「わたくし」が典型例として見つかった．

文化庁世論調査では，自称詞（1 人称代名詞）の選択を尋ねている．以下の 2 冊に載る．グラフのラベルの年は奥付の西暦による．

文化庁国語課(1996)『国語に関する世論調査（平成 7 年 4 月調査)』(大蔵省印刷局)

文化庁国語課(2006)『平成 17 度国語に関する世論調査（平成 18 年 2 月調査）日本人の敬語意識』(国立印刷局)

ともに「自分の呼び方」という題名であり，質問文は以下のようで，1996 年に「改まった」をかなで表記している以外に違いがない．

「あなたは，改まった場で，それほど親しくない相手に自分のことを言うとき，どんな言葉を使いますか．この中で，あなたが最も多く使うものを一つ選んでください．」

（ア）わたくし，（イ）わたし，（ウ）あたし，（エ）ぼく，（オ）自分，（カ）おれ，

（キ）わし，その他（　　），分からない．

他の項目が世論調査の常道に従って意見や態度を尋ねることが多い中で，具体的言語現象の使用(選択)を尋ねた点で，貴重な情報である．市販の文化庁世論調査報告書では大きな傾向を指摘しているだけだが，巻末（文化庁国語課(2006)の内部資料いわゆる白表紙の巻末）に数表があり，

地方差，都市規模差，性差，年齢差，職業差などが分かる．数表では傾向が読み取りにくく，これまでは目立つ数値に印を付けて考察するのみだったが，このほど（生年実年代の）年齢差以外についても統計ソフトに数値を入力して，グラフ化して考察した．視覚化によって，これまで気づかなかった大きな流れが読み取れた．

図 5-3 に 10 年を隔てた 2 回の調査の結果を示す．横軸は生れた年を示し，左が高年層，右が 10 代の若者である．「わたくし」の使用率は，全体としては右下がりである．年齢差でいうと若い世代で減る．もしこの線のうちの一本を単独で見たら，古い言い方の衰退だろうと判断する．ところが同じ世代が 10 年後に使用率を軒並みに増やしている．想定外の変化である．

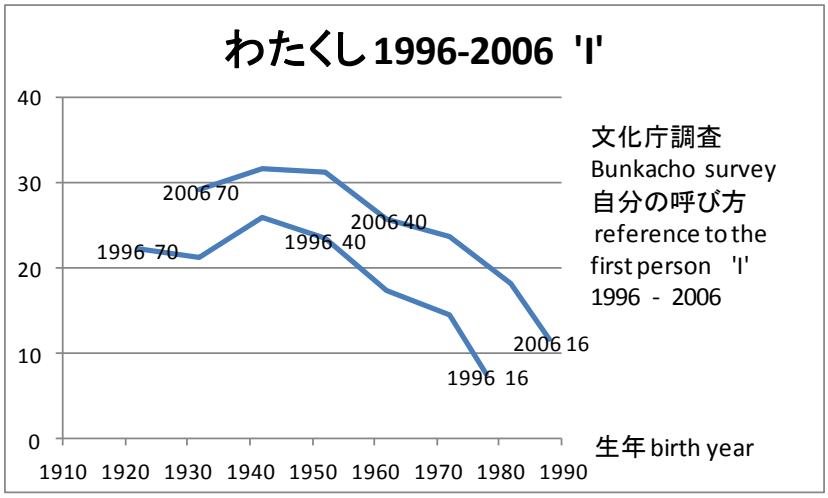


図 5-3　「わたくし」（1996　2006）文化庁『国語に関する世論調査』

図 5-3 のパターンを図式として強調しよう．**図 5-4** で 2 本の黄色矢印は若い人に向けての下降傾向を示す．もしこの線のうちの 1 本を単独で見たら，古い方言形やかつての流行語などの，衰退過程を考えるだろう．傾斜がもっと急で，老年層で 100%近くになるなら，老人語と位置付けられる．赤矢印で上昇傾向を記した．同じ年に生まれた人たち（コーホート，同時出生集団）が 10 年後の調査で軒並み使用率を（10%近く）増やしている．ふつうは期待できない増加ぶりである．2 種の矢印は，下降，上昇の矛盾する方向を示す．

なぜこのような変化がありうるのか，結論を先取りして述べると，10 年の違いは，例外的な共通語化のパターンと考えると説明できる．後述のような使用者の職業差，地域差を踏まえ，かつ「わたくし」の代わりに 10 年後に衰えた語形を考慮しての結論である．

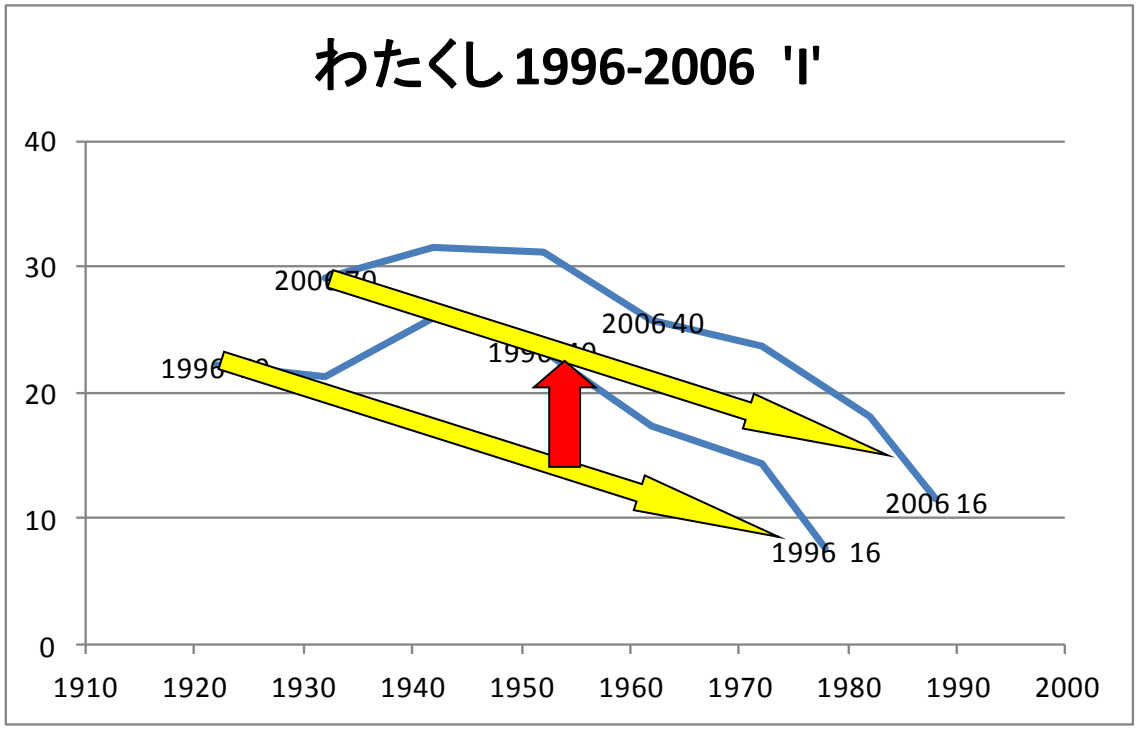


図 5-4　「わたくし」(1996　2006)

なぜこのような変化がありうるのか，説明しよう．文化庁のデータでさらに地域差を見ると，「わたくし」は関東地方特に東京都区部に多い．2 回目の調査では政令指定都市でも伸びる．また職業差で見ると，ホワイトカラー，管理専門技術に多く，農業，学生に少ない．性差があって女性に多いが，ここでは男女統合してグラフ化した．後掲図 5-5 の生年実年代の図で，性差と調査年をからめ 4 本の線で表わして，考察する．

他の調査で文献の使用例を見ると，「わたくし」は改まった場面で使われる．これがヒントだ．10 年後の増加は，共通語化のパターンと考えると説明できる．東京から改まったことばとして普及しているのだろう．若い世代は「わたくし」を使う機会がない．中年以上が社会的な必要に応じて使いはじめる，と考えた．

このパターンは，1 回だけの調査では判断が難しい．繰り返し調査によって確実に実証できる．「わたくし」の場合は全国規模の調査で，実証できた．文化庁世論調査の繰り返し調査は貴重である．同じ方法で反復すると，さらに大きな成果が得られる．

2.2.文化庁調査 2 回の「わたくし」の概要

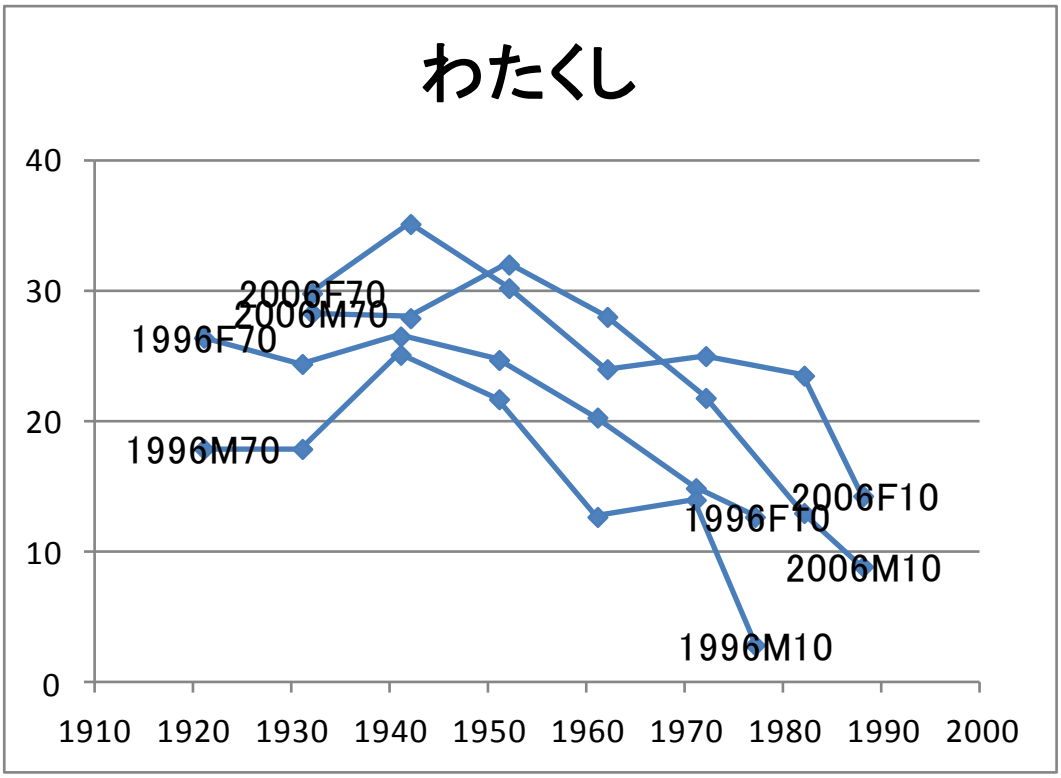


図 5-5　「わたくし」と性と年層（1996　2006）

「わたくし」の使用には性別がからむと思われるので，**図 5-5** に 2 回の調査を男女別の線で示す．「わたくし」は，全体として中年層にピークがあり，若い世代に少ない．4 本の線は下の 1996 年と上の 2006 年に分離される．4 本の線を比べると，各回で女性が多い．1996 年には全年齢層で女性のほうが使用率が高かったが，女性語の特徴とするまでの差はない．2006 年には 40 代，50 代で男性が女性を追い越す．つまり中年（実年）層の男性で 10 年間の変化が大きかったわけである．「わたくし」の増加は男性の採用に影響されたと読み取れる．選択肢の語形 1 個だけの選択なので，個人の使いこなす多様なレパートリーの中から本人の意識に従って選んだ結果である．2 回目，10 年後の調査で「わたくし」という改まったことばが一番多く人々の頭に思い浮かんだと解釈すべきだろう．

職業と自己表現としての自称

「わたくし」には，社会階層差が関係すると思われる．自称は各種職業の自己表現としての機能も持つ．文化庁データの集計表には職業別の数値があって，手がかりを提供する．**図 5-6** に示した．2006 年の数値でソートして，1996 年の数値も示した．「わたくし」使用は，図左のホワイトカラーの 30%前後と結びつく．農林漁業などは 10%以下なので，職業差，階層差の大きさを物語る（農林漁業の家族は人数が少ないために極端な値を示した）．学歴差は不明だが，一般に職業と所得と学歴は深い関係を示すことから，世論調査の項目に入っていなくとも，ある程度の見当が付く．「わたくし」は，高学歴の人に多いだろう．一方で高学歴化が進み，「国民総中流意識」

が普及すれば「わたくし」が国民に広く普及することになる.

「わたくし」は，2 回目の調査で増加した．両年の数値はほぼ比例する．1996 年の数値が 2006 年より大きいのは農林漁業家族で，人数が少ないための影響と考えられる．つまり「わたくし」は，ほぼ全国民にわたって 10 年間の増加を見せたことになる．これはまた「敬意低減の法則」に合致する．使用者層が下に広がり，使用の相手も広がったと解釈できる．改まりの意識が働き，場面限定性が薄れたのである.

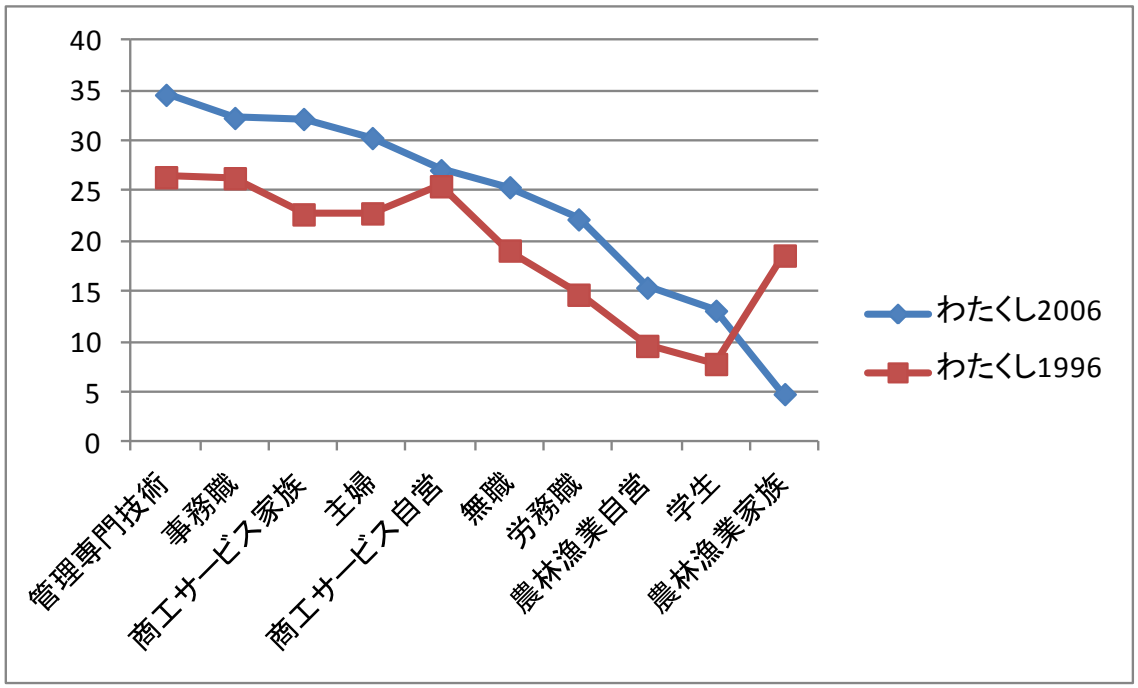


図 5-6　「わたくし」の職業差（1996　2006）

「わたくし」の地方差

「わたくし」使用は，地域差を示す．文化庁世論調査の結果でも，**図 5-7** では関東地方が多く，35%ほどの使用率で，最低の東北地方 20%以下との差が大きい．都市規模別に見ると東京都区部がトップで 40%近くに及ぶ．小都市や町村部の 15%前後の 2.5 倍の使用である．この地域差は，都市規模と社会階層構成との関連によって生じた面もある．2 回の調査をくらべると 2006 年に（中国地方と東京都区部を除いて）多くなる．1996 年には中部，関東，近畿が高い．2006 年には関東が高くなり，北海道，中部が高い．東京をピークに関東中部地方に多いというのは，近代に東京から急速に広がった共通語標準語の分布パターンである．「わたくし」使用は，東京周辺部や都市部が，受容を広げつつあると，解釈できる.

「わたくし」は，関東と中部に多い．東京都区部と政令指定都市に多いので，都会的なひびきがあるのだろう．2 回の調査を比べると，関東以北と政令指定都市での使用が多くなった．都会の威光 prestige を背景にして，広がりつつあると解釈できる.

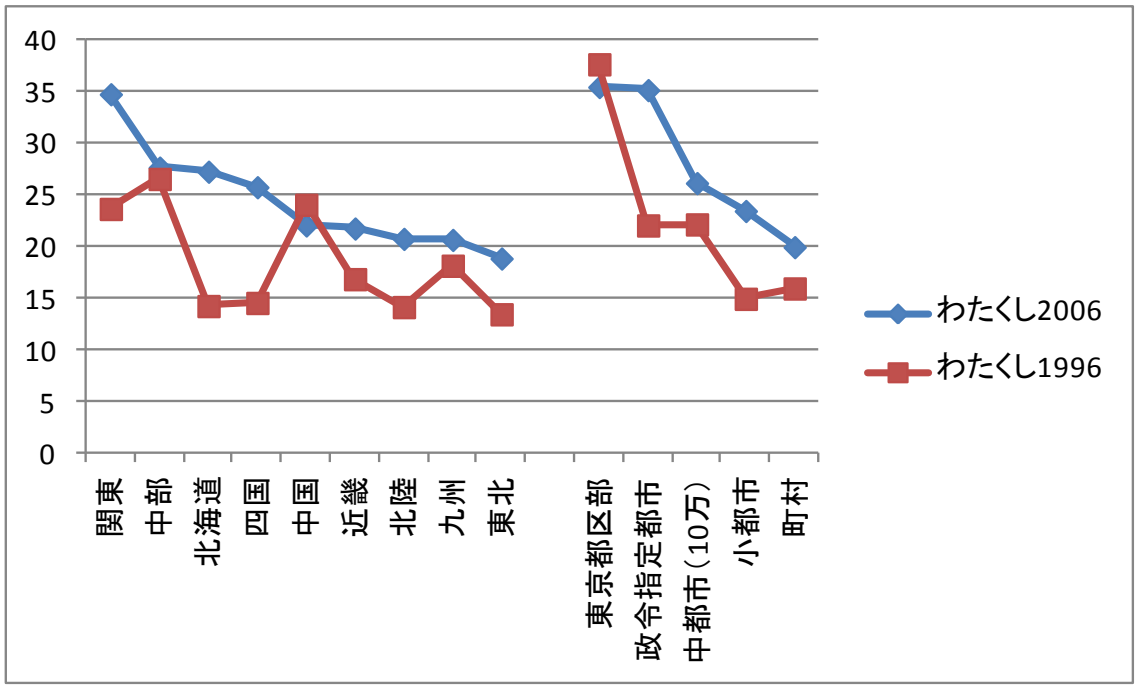


図 5-7　「わたくし」の地方差（1996　2006）

以上の社会階層，地方差，都市規模差は，全国共通語の普及過程とそっくりである．これを根拠に「わたくし」の 10 年間の増加は，共通語化の 1 種ととらえることができる．ただし若い世代に最初に普及するのではない．加齢変化を伴う特殊な普及パターンを示す．高年層に受容される共通語で，役割語としての老人語と似た機能を持つ．

「わたくし」の歴史的背景

以上で文化庁世論調査のデータを解析した．以下では多様な資料をもとに傍証を得る．まず現代語として，いくつかの国語辞典を見たが，使用者が高年層に偏ることの指摘はない．「新明解」で「成人の男性女性ともに用いる」とあるのが近い．他の辞書では「目上に対して」，「ていねいな，けんそんした」「改まった」などの説明がある．役割語としての「わし」などと性格が違う．

国語史上の位置付けを見よう．「わたくし」は，語源からいうと「私物」である．音変化により多様な語形を生みだした．使用頻度の多さと単純化，磨滅という普遍的な言語変化メカニズムが作用した．主な語形をローマ字で表記すると，分かりやすい．

Watakushi → Watashi　→　Washi
　　↘ Atakushi →↘ Atashi → Asshi
　　↘ Atai

辻村(1991）には以下のような記述がある．

「わたくし」は名詞として平安の用例がある．代名詞としては，室町の狂言に用例があり，男女とも使った．その変化形「わたし」は代名詞として江戸の用例があり，女性以外に男性も使った．「あたくし」は大正の例があり，女性が使用者．「あたし」は明治以降の女性の用例がある．

「わたくし」の地理的背景

次に地理的背景として方言差を見る．国立国語研究所（1989～2006)『方言文法全国地図』第6集 338, 340, 341 図に自称の 3 場面のデータがある．「わたくし」は「この土地の目上の人」の場面で多く使われ，近畿以西と首都圏に多い．ほかに，東北北部と北海道に散在する．「近所の知り合いの人」の場面では全国で（800 地点中）5 例のみである．「親しい友達」の場面では全国で 1 例のみ．つまり文体的な限定が大きく，日常の方言としては確立していない．京都付近にも空白地域がある．文化庁調査で東京都区部の 4 割近くが使うと答えたのと大差がある．方言調査の対象者が実は NORM (Non-mobile Older Rural Male)という限定された人々であることによる．

3．大都市の「わたくし」使用率

3．1．はじめに

この節では，『大都市の言語生活』の自称代名詞を扱う．1974～1975 年に行われた調査で，第2 次岡崎調査直後にあたる．ここでは岡崎の 3 回の調査を全国レベルで位置付ける．「わたくし」の使用パターンにおいて，全国的データでも「成人後採用」の現象が観察された．

前節では，岡崎調査と文化庁世論調査の「わたくし」の使用率を対比した．文化庁の世論調査では，「わたくし」の使用者が高年層に多いのに，調査を繰り返すと全年齢層で増加するという，これまでの言語変化と違うパターンが得られた．全国レベルで，共通語化の進行と一致して，都市規模に応じる形で増えている．

岡崎の 3 回の調査でもこれに近いパターンが出た．しかし，岡崎の半世紀以上を経た 3 回の調査では「わたくし」は減少傾向を示すし，音韻や語彙と違って，若い世代が先行して使うわけではない．岡崎の 3 回の調査で「わたくし」の普及が観察されなかったことは，岡崎が地方都市としての位置にあって，最近の首都圏主導の，全国レベルでの都会的なことばの動きについて行けないことを示す．

本章末尾でまとめるように，全国方言分布を見，地方議会での使われ方を見ることにより，ふだんのことばと改まった場面でのことばを把握でき，その中に岡崎と東京と大阪の「わたくし」の使われ方を位置づけることができる．「わたくし」の成人後採用のメカニズムを解明できた．近代の共通語化の過程で各地に広がりつつある新形だが，使用場面と階層に偏りがあるために，通常の初期採用者である若い世代は採用せず，成人後に徐々に採用し，中年層でピークに達すると，説明できる．

3. 2.「私」 札幌の場面差・性差・年齢差

『大都市の言語生活』の自称代名詞に入る前に，同じく大都市の札幌で同一事項の調査が行われたので，相互の位置づけのために目を通しておく．

尾崎(1989)は札幌における「わたくし」の同様の調査結果をグラフで示し，成人後採用という用語は使っていないが，まさに個人内ののちの採用というとらえ方で解説している．この調査では 2 場面に分けた結果を提示しており，他の調査を位置づける手がかりになるので，グラフを再掲して解説を加える．

図 5-8 の上が「親しい友達に向かって」，下が「初対面の人に向かって」の言い方で，左が男性，右が女性の話者である．ここでは棒グラフ下端の「わたくし」に着目する．左上の図 1 から右下の図 4 に向かって，図の順番どおりに「わたくし」が増える．つまり改まった場面でことに多く使われる言い方である．さらに年齢差をみると，4 図ほぼすべての年齢層で年上の世代ほど「わたくし」を多く使う．たった 1 回の調査なので，二つの読み取りが可能である．一つは衰退過程説で，高年層に古めかしい言い方が残っていると考える．もう一つは進出過程説で，高年層が改まった言い方を採用しはじめていると考える．「成人後採用」説である．尾崎(1989)の解説は後者である．

なお尾崎(1989)は「母」への呼びかけと言及の表現も扱っており，柴田（1978）で研究されたハハという言及称の完全採用が札幌では 20 代以降であることも示している．これも「成人後採用」と同じプロセスである．年齢階梯制 age grading の例といえる．

図１

<私>－ウチ（In-group）　男性

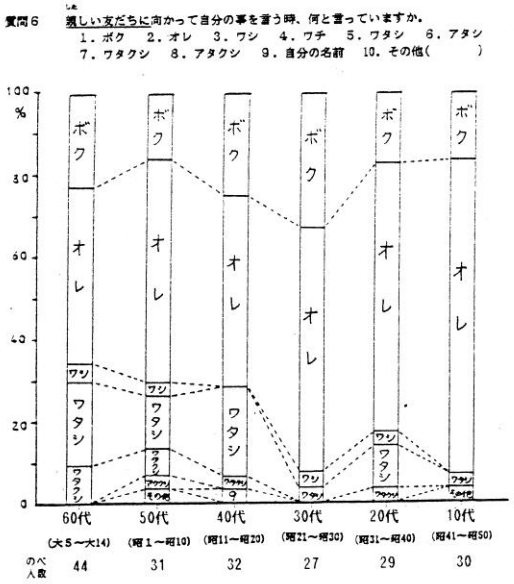


図２

<私>－ウチ（In-group）　女性

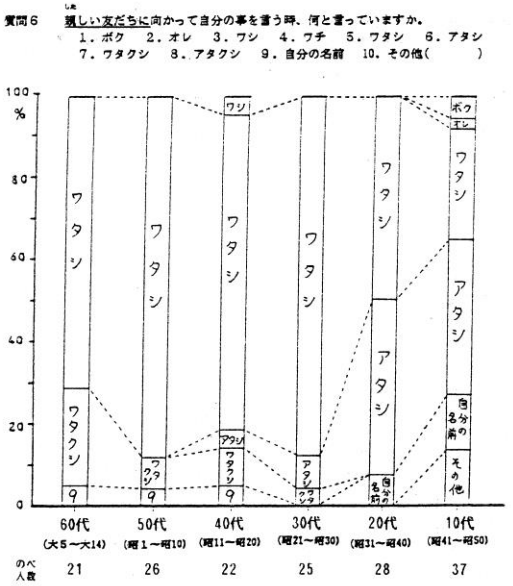


図３

<私>－ヨソ（Out-group）　男性

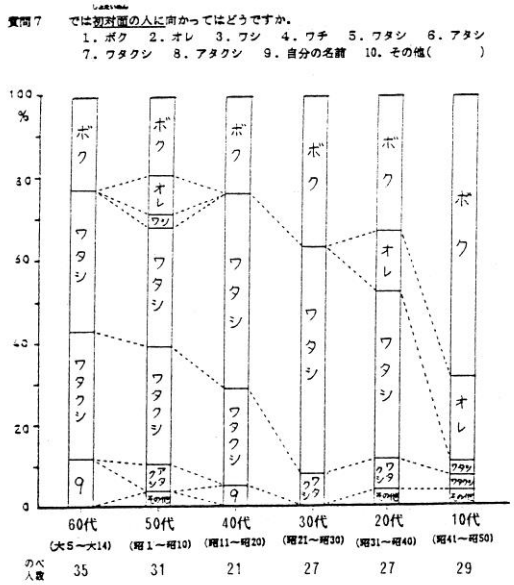


図４

<私>－ヨソ（Out-group）　女性

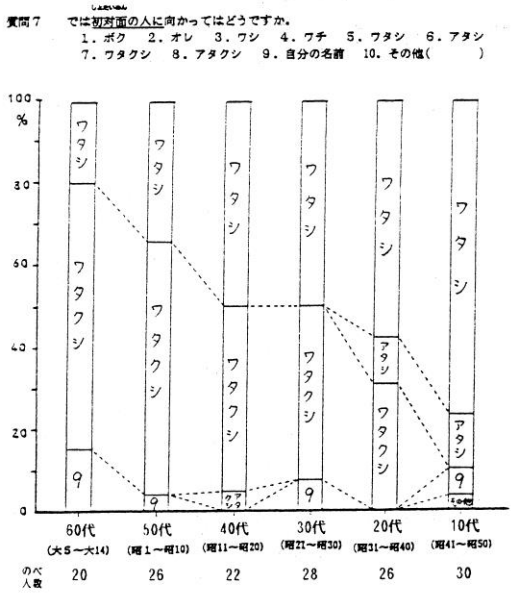


図 5-8「私」　札幌の場面差・性差・年齢差

以上の札幌の場面差・性差・年齢差により，自称について１個人内の場面による使い分けが大

きいことが示された．文化庁のような 1 個を選択する調査の結果を読み取るには，注意が必要である．

1985 年の札幌の調査と 1974～75 の東京・大阪の調査は，10 年を隔てているし，場面差を見ているかいないかの差もある．尾崎の図に対応する細かいグラフは，以下の大都市の付表集計表からは作れない．ただし以下の大都市のグラフは尾崎(1989)の「親しい友達に向かって」の場面に対応する．図 5-8 のグラフの数値を見ると，「わたくし」の使用率は札幌では男女とも最大の年齢層でも 20%程度なので，図 5-9 の東京にくらべてずっと低い．大阪よりも低い．都市規模と「わたくし」の使用率が比例しそうにも見える．

共通語化の最高峰，最先端を敬語が担っていると考えると，「わたくし」の使用率はその典型または指標ととらえることもできる．以下で『方言文法全国地図』のデータも見ながら論じる．

3．3．「わたくし」東京の年齢差

『大都市の言語生活』の東京について，結論を先取りして示す．1 人称代名詞「わたくし」について，岡崎調査と文化庁世論調査の結果を補強する例が，『大都市の言語生活』の自称と対称(第 1 人称･第 2 人称の単数)の項目で得られた．「わたくし」は東京でも大阪でも中年層または高年層に多い．1 回だけの調査なので確言するのは困難であるが，他の調査との整合性から，成人後採用と考えていい．

図 5-9 東京の年齢カーブはスムーズに見える．50 代後半の 6 割近くをピークに，それより若い人と年とった人の使用率が低い．

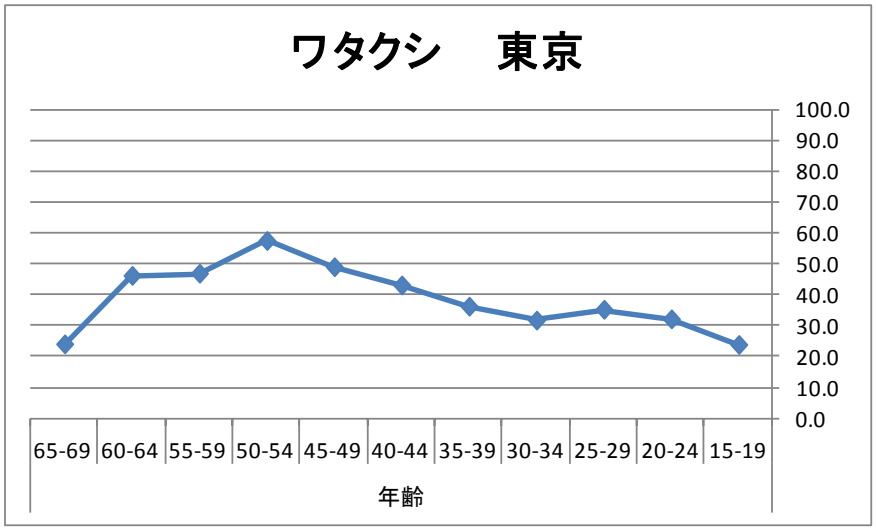


図 5-9「わたくし」の使用率 東京の年齢差

3．4．「わたくし」大阪の年齢差

図 5-10 大阪は東京よりも使用率が低く，最大の年齢層でも 4 割以下である．またカーブは凹凸が激しい．大都市のサンプリング調査で，有効回答数が少ないために起きた現象であろう．5

年間隔を 10 年間隔に置き替えると，10 代を除いて，なだらかな線になる．

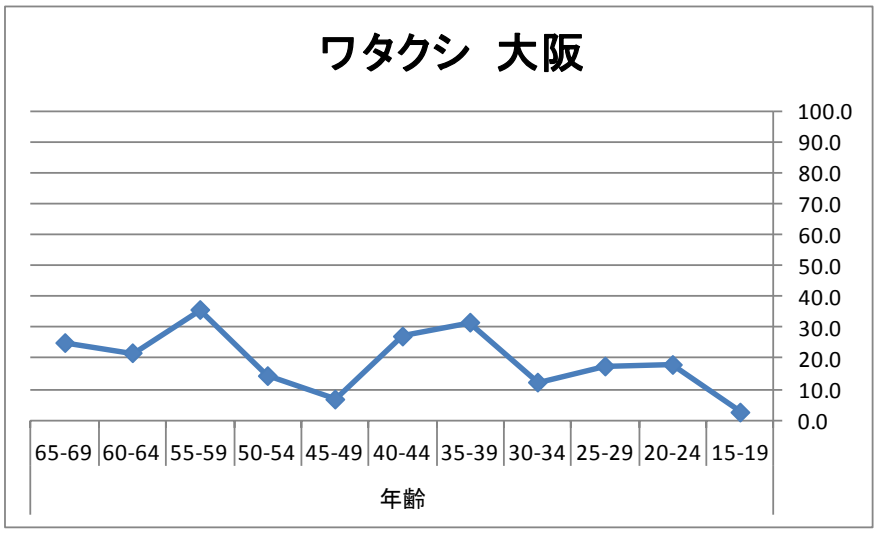


図 5-10「わたくし」の使用率 大阪の年齢差

「わたくし」の使用率は，図 5-9 の東京では 2 割台から 5 割台で，図 5-10 の大阪では 1 割台から 3 割台で，違いが大きい．時代は違うが，文化庁の全国調査では 1996 年には 1 割以下から 2 割台で大阪の数値より低かったが，2006 年には 1 割台から 3 割台で大阪の数値に近づいた．「わたくし」は現在全国的に急速に普及している過程と思われる．鶴岡調査の結果から考えると，音韻の共通語化はほぼ終了したと思われる．アクセントの共通語化は進行中である．文法の共通語化も進行中だが，新たな非共通語化（新方言）も見られる．その中で敬語関係の現象は，共通語化が進行中で，地域差をまだ大きく反映していると考えられる．かつてのグロットグラムにおける共通語化の調査で，語彙や文法における共通語化の頂点として敬語関係の現象が位置づけられたことが想起される．

「わたくし」の使用率は都市規模に比例し，東京都区部では 4 割近くになるが，他の都市では 2 割台に落ちる．また職業差も見られる．これは背景に東京からの伝播であることを示し，同時に社会階層とも密接にからむことを示唆する．

4. GAJ と地方議会会議録の「わたくし」

4.1. GAJ「わたくし」の分布

『方言文法全国地図』(GAJ)の二つの地図で自称(1 人称代名詞)の地理的分布が分かる．「近所の人」と「目上の人」の 2 場面のことばが地図化されている．

GAJ6-338　　私 のです　　(B 場面) 243-B

GAJ6-340　　私 のです　　(O 場面) 243-O

2 図の分布は大まかには似ていて，京都中心の周圏論的分布を描く．古語にも出る「ワ」系統は，

東北地方北端と九州に散在し，近所の人の場面に多い．中世に出てくる「オレ」は東日本に広く分布するとともに，九州にもある．近所の人の場面に多い．新形の「ワタクシ」は国土の中央部に散在する．共通語として「空からばらまいたような」分布だが，近畿地方に密で，京都が伝播中心と推定される．目上の人の場面に多い．近代の標準語として，改まった場面や文章を通じて，全国に波及中なのだろう． 近代の書生ことばから生れた「ボク」(後述)は「方言文法全国地図」(GAJ)にはほとんど出てこない．

4.2.地方議会会議録など

「わたくし」について，インターネットでの大量データを検索してみたが，「私」のような漢字表記が多く，発音の判別が困難だった．国会会議録の「わたくし」も，地方議会会議録の「わたくし」も同様である．コーパスなどの用例でも同様の問題がありうる．

goo ブログ検索結果でも，「わたくし」の使用は「ワタシ」に比べて少ない．

「ワタクシ」(約 323，214 件)

「ワタシ」(約 1，982，837 件)

「地方議会会議録」のホームページで，1 人称代名詞の日本地図を作成できる．ただし「わたくし」については，常用漢字で「私」の読み方に 2 種類が許容されたおかげで，漢字表記がなされたときにどちらなのかの判別が付かない．多くの地図を比べるしかない．

明らかなかな表記の「わたくし」は岐阜と埼玉に多い．議事録作成業者の方針によるのだろう．漢字表記の「私」は全国に広がるが，山梨と福島に少なく，また青森，鹿児島にも少ない．埼玉，岐阜，滋賀が薄い色なのは，かな表記が併存するからである．議事録全体としては，「わたくし」「わたし」がともに漢字で記されるので，語形(発音)が不明である．

以上により「地方議会会議録」の自称についてまとめると，国土全体にわたる地域差がかなり認められる．「わたし」は全国で使われる．「ぼく」は西日本の会議で盛んに使われる．「わし」は中国四国を中心に会議で使われる．「わたくし」は岐阜と埼玉に多いが，ほかでも国土の中央部分で使われている可能性がある．

5. 「わたくし」の地域差と成人後採用

5. 1. 全国分布と岡崎調査の違い

以上，「わたくし」の成人後採用を全国的に位置付け，岡崎調査との関係を見るために，いくつかの大がかりな調査の結果を図化して考察した．数表をグラフ化し，地図で示された検索結果を利用することによって，各種数値データを視覚的に把握することができた．数表を見渡して，目立った数値に印を付けるような手法では，本節のような読み取りは不可能だった．

結果全体を解釈するには，逆からたどるほうがいい．まず『方言文法全国地図』で，自称の方言分布を見た．古代語からの代名詞の変遷にほぼ対応する形で京都中心の周圏論的分布を読み取

ることができた．東京付近はおれ，大阪付近はわしとわたし，岡崎付近はわしが使われている．また地方議会での使われ方を見ることにより，ふだんのことばと改まった場面でのことばを把握できた．「わたし」が多いようで，「わたくし」は，議会の改まった場でもあまり使われない．

一方「大都市」調査の東京と大阪での面接による世論調査によると，『方言文法全国地図』で付近に分布するおれ，わしは，使用率が低く，わたしがやや多い．地方議会で使われる「わたくし」が，複数回答として多く出る．つまり話者は二つ以上の代名詞をあげるときに，ふだん家庭や気の置けない友人と話すときのことばに加えて，かなり改まった場面での（日常的な使用頻度数の少ない）ことばを答える傾向がある．実際の行動でなく意識を尋ねるときのデータの歪みの一つである．

「わたくし」という語形は本節で述べたように，自称として用いられたときの初期の語源(公私の私の意味)を保つ言い方であり，その後のわたし，あたし，わしなどの派生形の元になった．古代以来使われつづけた言い方だが，「敬意低減の法則」に逆らって，高い文体的地位を保った．使用場面が限定されていたからだろう．地理的にも社会階層的にも限定されていたと思われる．この語形が近代以降，公文書や教科書を通じて，全国の改まった場面に普及しはじめた．『方言文法全国地図』と地方議会会議録の使用状況が示唆する．ふつうの言語変化は，都市の若い人（階層の高い女性）が先駆的採用者になることが多い．しかし「わたくし」は，使用場面が公的な改まった場面に卓越するために，若い世代は使用の機会が少ない．また高い社会階層と結びつきうる「わたくし」は，相互的に平等な敬語使用に傾きかけている現代の若い世代には受け入れられにくい．そもそも自称は自己表現の手段であり，アイデンティティーの発現でもあるのだ．これが成人後採用の根本原因である．

一方岡崎の調査は，場面を与えてそれにふさわしい言い方を想像して答えてもらうという形式である．与えた場面は，ふだん接するものが多く，1 個人の持つ敬語のレパートリーから言うと，狭い．下向きの場面として「物売り」「物売魚釣」の少年への話しかけさえも，報告書で別扱いにして集計されたほどで，レパートリーの中央部に集中している．また複数回答を推奨していない．ごく一部の話者が言い直すか言い替える形で複数の表現を答えたのみである．なお集計に際しては，長い繰り返しの回答として扱った．従って岡崎のデータは，個人の使いこなしうるレパートリーの一部分しか扱っていない．「わたくし」の出現率が低かったのはそのせいである．先生への出会いの場面がやや改まった場面に近い．しかし方言と共通語の使い分け意識調査で取り上げられたような「地元の人の（30 人くらいの）集まりでの発言」とか「テレビインタビューを受けたとき」,「校長先生との会話」などで調べていれば，レパートリーの上のほうも把握できただろう．なお最後の「校長先生との会話」に近い場面は第 3 次調査で採用されたが(表 2-1 の 114 番以降)，継続調査 12 場面の中に入っていないので，集計は後回しになった．

「わたくし」が，文化庁の全国調査で明瞭な成人後採用パターンを示したのに，岡崎の敬語調査でくっきりとした結果が出なかった理由は，以上のように説明できる．

なお自称詞「わたくし」は，対称詞「あなたさま，そちらさま」などと照応するとともに，文末としてデゴザイマスとも照応する傾向がある．つまり現在の都市部を中心にした「わたくし」

の普及は，特別丁寧体，ゴザイマス体の普及とも関係があると考えられる．敬意低減の法則から言って，一段敬意度の高い言い方が広がることは自然な流れである．実際『大規模経年調査資料集 9』で述べたように，岡崎の 3 回の調査でも文末の「ゴザル」は（使用率は低いが）右下がりが復活して繰り返される形の，典型的な成人後採用パターンを示した．

5. 2. 都市としての岡崎の調査と方言分布

それにしても『方言文法全国地図』で，岡崎付近で優勢なわしの使用率が，岡崎敬語調査では，著しく低い．都市と郊外農村のあいだに敬語の大きな違いがあることは，鶴岡市と近郊山添地区ですでに確認されていた．北海道における近接した漁村・農村・商店街の調査でも把握されていた（井上 2001.2）．岡崎の調査では近隣農村との違いが明らかでないが，他と同様に，都市はいわば小さな言語島として周囲の農村から浮き上がった形をなすと，考えられる．特に戦後の自動車産業の発展で，よそからの移住者が増えただけに，農村的な，方言的な言い方が早くすたれた可能性もある．文化庁の全国調査と同様に，複数回答を認める調査を行ったが，「わたくし」のような改まった言い方の使用が多い．

敬語を取り入れると，日本国内の地域差は，従来の方言区画と別の形でくっきりする．共通語化の地域差と連動する形で周圏論的な分布を示すが，近代の語彙・文法の共通語化が東京中心に東日本に際立つのに対して，古代以来の京都中心の西高東低の周圏論的分布を示す点が異なる．岡崎調査をきっかけとして，敬語の全国分布を再考察する必要がある．

言語島としての典型が東京と大阪である．方言の伝播に関しては方言周圏論や逆周圏論が唱えられているが，その基盤として「地伝いの伝播」が暗黙の前提とされることが多い．しかし各種資料によって，都市から都市への飛び火による伝播（または落下傘部隊のような伝播）も確認された．この際に社会階層差を考慮に入れると，上層から別都市の上層へという伝播パターンも想定しうる．婚姻圏の調査で，高い社会階層ほど地理的範囲が広い（同等の階層どうしの婚姻を望むと遠方との結び付きになる）という現象とも関わりがある．敬語使用は高い社会階層と結びつくので，飛び火的伝播が起こりやすい．途中の農山村を飛び越して伝播する．また都市規模(階層差の大きさ）とも比例する傾向がある．本節で扱った東京，大阪，札幌，岡崎の自称の敬意度の違いは，調査手法や調査年代の違いはあるが，都市規模とも正比例の関係を示す．社会言語学と方言地理学の接点をなす研究に発展しうる．

5. 3. 「公共用語」という視点

「公共用語」としての視点も必要である．『方言文法全国地図』では「ぼく」はほとんど出てこなかった．「公共用語」として会議や文書で使われる日本語については，地域差がないと考えられている．つまり全国共通語，標準語が確立していると思われている．しかし実際にはさまざまな違いがあり，「気づかない方言」も含めて，日本語領域の地域差･方言差については，解明すべき点が多い．敬語･待遇表現に関わる現象は，事物の違いやことがらの誤解を引き起こすものではないが，感情や印象を左右し，ときには不快感を与えることがある．また話し手の人柄の解釈が歪む

ことがありうる．つまり知的な情報伝達よりは，情的な親近感に関わる．ことに自称は，個人のアイデンティティーとも関わり，切り替えにくいことがある．岡崎敬語の整理研究から拡大して，現代日本語における自称を概観したが，課題はさらに広がる．今後の研究に期待したい．

5．4．言語変化論と敬語

言語変化の研究は欧米の社会言語学的研究の進展とともに発展しつつある．眼前で進行中の言語変化という視点のタイムスケールをさらに過去に伸ばして，歴史社会言語学の研究も盛んになった．しかし，欧米語の研究は，日本語のような文法的に発達した敬語体系を持たないために，視野が限定される．また公的機関による統計的に信頼できる大規模調査も少ない．その日本でも敬語に関する大規模調査を行ったのに，分析が不十分で，しかも報告が遅れた．さらに国際発信の機会がほとんどなかった．今後は，国際会議や国際的学術誌での発表や海外の研究者との交流とを通じて，学術的成果の交換に力を注ぐ必要がある．

5．5．他の調査における敬語の成人後採用

以上，岡崎の「ていただく」使用や文の長さで観察された成人後採用が，他の調査でも観察されるかを考えてみた．大規模経年調査の一つとして文化庁世論調査を見渡して，「わたくし」の全国データが相当することが分かった．振り返って岡崎全反応文での「わたくし」の出現を見ても，成人後採用パターンがあてはまることが分かった．当初使用率が低いために，適用をためらっていたが，他の項目との関連を見て，成人後採用をあてはめていいと，結論できた．他の項目にもあてはまるはずである．

成人後採用パターンは，狭義の敬語以外に，待遇表現全体に関わるもので，もっと多くの現象に適用されると思われる．これまで言語変化論の視野に入らなかっただけの話である．言語変化論，言語習得論とからんで，射程の大きい問題である．経年調査のデータがゆるぎない基盤になる．今後のさらなる研究が必要である．

第 6 章

岡崎の言い淀みの増加

はじめに

この章では調査の回答（反応文）の文体要素のうち，言い淀みの「あのー」に関して報告する．第 3 次調査で忠実に文字化されたために，この内部での分析は信頼できる．心理的な距離感の生じそうな場面で多く使われること，高年層が多く使い，かつ女性に多いことが読み取れた．

第 1 次・第 2 次の調査でも同様の結果が得られた．第 3 次調査にかけて多く使われる傾向が見えたが，これが文字化の忠実さによるかは，判定が難しい．ただ第 1 次調査で言語研究者 P と大学生 C との間に差がなかったのは，注目すべきである．これまでの分析で丁寧さや文の長さや「テイタダク」の使用率に大きな差が見られた．これは調査員の書き取りの忠実さによるのでなく，回答者の態度の違いによるものという可能性が大きい．この点はさらに検証する必要がある．

広義の敬語，つまりポライトネス，待遇表現，敬意表現，配慮表現などとの関連が認められる．今後他の言い淀みにも考察を広げ，また「丁寧さ」などとのクロス集計も行う予定である．

1.岡崎の言い淀みの分析法

1.1.「あのー」　グラフ解説

本章では調査の回答（反応文）の「言い淀み」の表現に関して報告する．英語の社会言語学，談話論でいう hedge, filler にあたる在来の日本語を使う．術語として，いわば作業原則としてとりあえず使用する．その実質（意味分野）は，今後の研究の過程で定めるべきである．

最初に手がけたのは「あのー」である．これまでの岡崎調査の報告では「あのー」は正面から分析されることはなかったが，敬語と関連のある現象と見られる．結果をみると，場面による差があり，回答者による違いもある．それぞれ論理的に説明ができる．心理的距離表示に活用されていると思われ，ポライトネス理論によって位置付けることができる．さらに杉戸（1983）のとらえる「注釈」（メタ談話）との関係も浮かび上がる．

下記のとおりの事情で第 3 次調査では忠実に文字化されたために，精細な分析に値する．ただし単純な経年変化を論じる資料としては用心すべきである．しかし高年層ほど使用が多い点などは，老人学の談話研究にも貢献できる成果であり，多面的な分析が可能である．

本章の図 6-1 の生年実年代によるグラフからは，多くのことが読み取れる．以下では，個別の

グラフの解説を加える.

1.2. 周辺用語の整理

ここでは「言い淀み」という日本語の日常用語を採用した(土屋 2000). 談話論の術語になった英語の filler, hedge にあたる. 周辺の概念とからめて整理しよう.「言い淀み」は, 談話標識の一つである. 談話標識には, これまでさまざまなものが指摘されてきた. 今回取り上げた「あのー」は中間的な位置にある.

談話標識としての「言い淀み」は, 語彙的なものと非語彙的なものに囲まれて, 3 段階の真ん中に位置する.「言い淀み」の典型と言っていいだろうが, 似た機能を有するものに, 注意喚起の「すみません」の一群がある (第 4 章参照). 予備的考察の結果, 類似の動きを示すことが分かった. 今後分析を広げる予定である.

1. 関連概念として place holder がある.「語彙形式の代わりとして用いられるフィラー」で, 日本語で言えば思い出せないときに使う「あれ」「なに」のような疑問 (不定称) 代名詞の類にあたる. 辞書に載り, 意味記述もあり, 品詞分類も確立している. (関連分野で異なった意味で使っているものとかち合うが)「代用表現」とも呼べる.

2. 「言い淀み」は「フィラー」filler という外来語で導入された (山根 2002). Hedge を直訳して「垣根」という人もいる.「ええと」「あの」「その」「まあ」「んー」など, 発話の合間にはさみこむ言葉を言う. 辞書に載るが, (名詞や動詞・形容詞に付くような) 具体的な意味記述はない.

3. ほかに「あーうー (アーウー)」(アーウー宰相[22]＝大平首相) などと表現される現象も「言い淀み」と呼ばれる (後藤他 1999).「ちゅうちょ標識」と呼ぶ人もいる (北野 2014). これは語彙的でなく, 単語として扱われないので, 辞書にふつう載らない. 末尾母音を伸ばす現象は, 男性に多い. 女性はこの代わりに「尻上がり」と呼ばれる上昇下降イントネーション (「それでエ, あたしがァ」などと表記される) を使うことがある. これは超分節的 suprasegmental 現象として,「あーうー」とは同列に扱われないことが多い (井上 2008).「んー」もこの類に入る.

4. 関連現象としてあいづち (言語的なおよび動作としての) がある. ふつう (二人以上の) 対話で使われるが, 独話で一人で「はい」「ん」と言ったりうなずいたりすることも観察される.

実際の談話ではこれらが混ざって使われる. また歴史的には 1 から 2 へ, さらに 3 へ転化したものがある. 文法化の先にある現象として「ファティック化」を指摘したことがあるが (井上 2011), その言語変化の 1 種である. 1 と 2 の中間, 混交として,「いわゆるそのー」「いわばこのー」などがある. 2 と 3 の中間には「あのーほら」のような混交,「えーっと」「えーと」「えー」のような連続態もある. このような事情があるので,「言い淀み」filler, hedge を, 周辺概念と明確に区切って定義するのは困難であるし, 生産的ではない. ここで扱う岡崎敬語データも, 多様な言い

[22] 自身は「戦後で一番長い間外務大臣をやらせていただきましたが, 外務大臣の答弁は下手に言えないので, あーといいながら考えて, うーと言いながら文章は考えてその癖がついてしまったが, 悔いはございません (笑)」と発言している. この「あーうー」は当時流行語にもなり, 物まねする子供も多かった. (wikipedia)

淀み表現を含んでいる. とりあえず敬語や敬意表現, 談話の分析と関連させての分析を遂行する. その結果から逆に（帰納として）理論的整理が生まれると期待される.

1.3. 作業手順

文字化されたデータから「あのー」と「あの」の例を選んだ. ただし文脈をみて，指示詞と判断された例は省いた. 以下のグラフの読み取りに際しては，第 3 次調査が録音され，言い淀みも含めて忠実に文字化されたという事情を考慮すべきである. 反応文の文字化方針については，阿部貴人(2010：37)（＝国立国語研究所 2010 科研報告書・第 2 分冊の 37 ページ）に概略が記してある.

1.4. フィラー作業手順（阿部私信）

阿部貴人によれば以下のような事情があった.

（3）フィラーの扱いについて

どこまでを反応文内のフィラーと見るかが課題である.

（a）エート，ココオ マッスグ ッテ イーマス

⇒ 反応文内でのフィラー（＝引用）

（a’）エート，ココオ マッスグ ッテ イーマス

⇒ 調査場面でのフィラー（＝発話時）

（b）アッ，カサ ワスレテマスヨ ッテ イーマス

⇒ 反応文内でのフィラー（＝引用）

（b’）アッ，カサ ワスレテマスヨ ッテ イーマス

⇒ 調査場面でのフィラー（＝発話時）

□ 例文は発話の冒頭にフィラーが現れた場合であるが，当然，反応文の途中に現れることもある.

□ フィラーの扱いは分析に大きく関わってくる. フィラー自体の分析はもちろんのこと，反応文を機能的要素に分けて分析するうえでも重要である

岡調 08-042

2009/02/27

経年調査班打合せ

以下に，反応文整備の作業手順（案）を挙げる.

（A）作業者担当

（A-1）インフォーマントが回答した発話を聞き取り，そこで現れるものすべてを反応文として扱う（どちらのフィラーであるかはあえて判断せずに，入力された反応文データを補完する）.

（A-2）同時に，決められた基準に合うように，入力データの修正を行う（分かち書きルールの徹底など．調査員の書き間違いの修正等も含む）．

（B）研究者担当

研究者が（1）で整理されたデータをすべて聞き直し，最終的に反応文とする部分を決め，入力データを整備する．

（4）語断片（word fragment），言い間違いについて

（4-1）語断片は，入力しない方針をとる．

（a）ワ，ワタシガ … ⇒ 語の断片化

（b）コノミチノ，オ（目的格”を”）マッスグ⇒ 機能語の断片化

（4-2）言い間違いも入力しない．

（c）コノミチオ ミギニ アッ イヤ ヒダリニ… ⇒ 言い間違い

（5）その他

（5-1）長音の表記

特に，節末の長音については，調査員によって付ける／付けないが分れている．

センゲツブンワ {ハラッテルノデ／ハラッテルノデー}

→（案）敬語に関わる可能性のある要素である．分析に活用することを考えて，付けるべきか（ただし，この現象の分析にあたっては，分析者自身が聞き直すべきであるが）．

（5-2）固有名詞

コノコドモワ ワタクシノ マゴデス ユーセート イイマス ユーセークン ゴアイサツシナサイヨ ＜0399＞

→（案）○○（人名）

（5-3）ドコドコ，ナニナニサン，マルマルサン，ダレダレの扱い

ドコドコノ ナニナニサンガ チョット キュービョーナノデ ＜0430＞

→（案）○○（住所）ノ △△（人名）サンガ キュービョーナノデ

※ 一つ目は○，二つ目は△，三つ目は□で表記．

さらに，阿部貴人によれば以下のような事情があった．作業用として記しておく．

（阿部私信）

なお，フィラーの扱いについては，下記のような手順をとりました．

⑴調査後，各調査員が録音を聞きとって調査票に反応文を書く時点では，できるだけすべてを書き写す．（どこまでが反応文かは調査員は判断しない）

⑵添付資料のように，研究者が録音を聞き直して，反応文に含めてよいフィラーであるかどうかを判断し，反応文を確定する．（添付ファイルの 3 ページあたり）

こういったルールは第 2 回調査まではなく，これが原因でフィラーが増えることが予想され，

経年調査班(当時)も数か月にわたって議論しました.

結局，敬語という語彙的範囲を超えて，待遇表現，敬意表現，配慮表現，ポライトネスで見る場合にはフィラーも重要だろうという結論に至り，第 3 回調査でフィラーが急増するかもしれないことは承知のうえで，上記のようなルールとした経緯があります.

なお，反応文に含めてよいフィラーについても，(昨日も話題にした)呼びかけの「あのー」なのか，いわゆる形式検索の「あのー」なのかは，反応文整理の段階では不問としました．機能的要素として分析する場合には当然分ける必要があるわけですが，そのあたりは分析者に委ねたわけです.

例)

よびかけ：あのー，すみません…

形式検索：あのー，何て言ったかな…

以上，ご参考まで.

第 1 回～第 3 回調査のデータを整理した(あくまで)印象としては，第 1 回調査は研究者でもフィラーは記録しなかったのではないかという気がしています．やはり，録音をとっておらず，その場で反応文を書くとなると，フィラーよりも実質的発話の記録を優先するしかなかったのだと思います.

ちなみに，第 1 回～第 3 回調査の調査票は，各場面の設問(質問文)のあとに予想回答反応文を記してあって，医者場面以外は「あのー」を記していません．調査員が「医者場面以外はフィラーを記録しなくてよいのだ」と判断した可能性もあります.

(特に第 1 回・第 2 回調査の調査票は，その予想反応文の一部に下線を引いてあり，最低限下線部分だけは記せ，という指示があったようです)

---

2. 「あのー」グラフ解説

以下では言い淀みのうち「あのー」のグラフについて解説を加える.

図 6-1 の生年実年代による 12 場面全体のグラフからは，多くの読み取りができる．全体として右上がりで，約半世紀の増加傾向を示す．ただし「あのー」使用が実際に多くなったと，すぐには判断できない．前述のように文字化の方針について第 3 次とそれ以前で大きな方針転換があったからである．しかし第 1 次から第 2 次にかけて増えていること，第 1 次の C と P の違いが見られないことなどは重要である.

録音に基づき忠実に文字化された第 3 次調査の結果，実線をまず読み取ろう．「あのー」使用は，右下がりで中年以上の世代で多い．相手への配慮だけが使用の原理だとしたら，年をとるほど調査で設定した相手に年下，目下の人が増えるわけだから，言い淀みの「あのー」は減るはずである．待遇表現としてではなく，年をとって適切な単語や表現が出なくなったための言い淀み

の可能性も大きいが，文字化のときにそれは省いてある．

しかし第 1 次，2 次の年齢差をみると，わずかな違いだが，むしろ若い世代が「あのー」をよく使う．

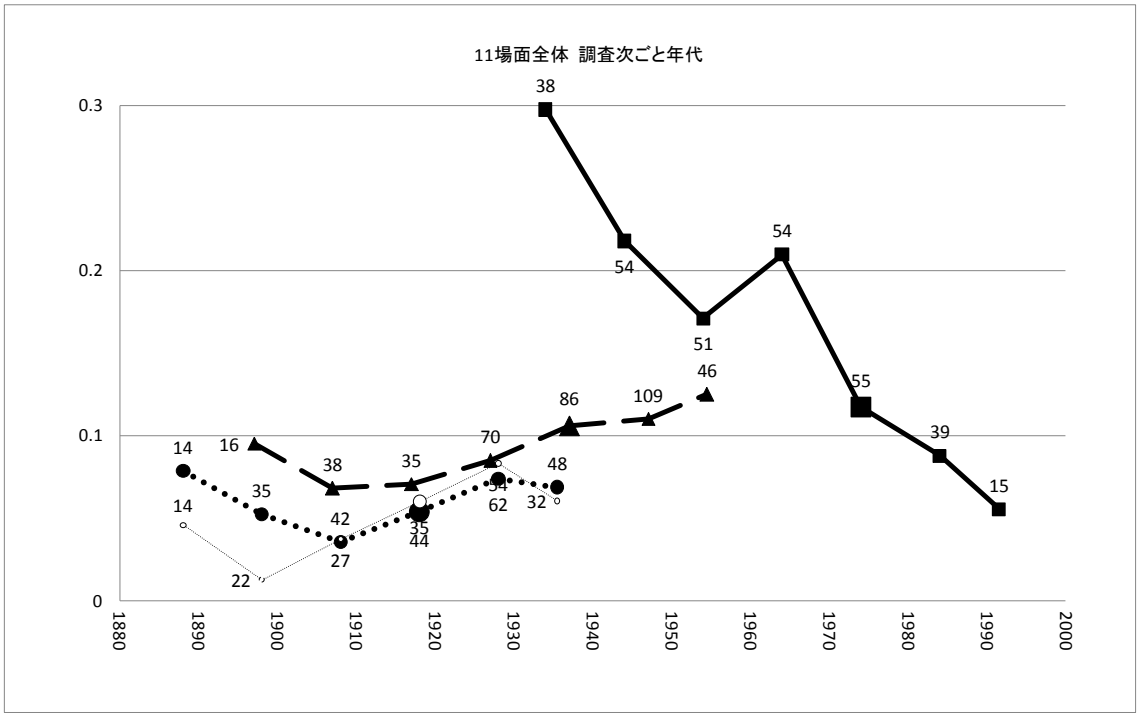


図 6-1　「あのー」　12 場面全体　調査次ごと年代

第 1 次調査の調査員は P（Proper or Professional）と C(Control or College)に分かれる．第 1 次調査の報告書では両者の結果を比較して，大きな差がないことを確かめた上で，P（のみ）を優先的に扱っている．ところが今回「丁寧さ」や「ていただく」の分析をしたところ，P と C に系統的な違いが見られた．C つまり愛知学芸大学の学生を相手にしたときのほうが，あまりかしこまった言い方でない答えが得られている．時代の推移からみると，より古い段階をとらえている．文の長さ（モーラ数）も短い．学生調査員が忠実に書きとらなかったという疑いもあった．しかし今回の結果をみると，P も C もほぼ同様の結果を記録している（ただし細線で分かるように，50 代，60 代の話者のことばについては C のほうが「あのー」が少ない）．学生調査員が言い淀みの部分を書きとらなかったという推測は，あてはまらないようである．

これまで第 3 次の文字化の忠実度向上の影響に配慮して，読み取りに一定の保留をしてきたが，このグラフの線の推移をみると，一定の角度を保っており，第 1 次，第 2 次の文字化も「あのー」についてはそう変わりがなかったと解釈できる．

図 6-2 は 12 場面個々の推移を示す．大多数の場面で「あのー」使用増加を示す．

「医者，席譲られ」の 2 場面で多くなる．「医者」場面では調査票の見本の文に「あのう」が印刷してあったことも影響しているだろう．

第 2 次調査で「議事堂，医者」で増えた．依頼場面で，相手への遠慮の意識が強く出る場面である．第 3 次調査でほぼ全項目で顕著な増加が見られた．同じく「席譲られ，議事堂，医者」で増えた．例外は「傘忘れ」である．

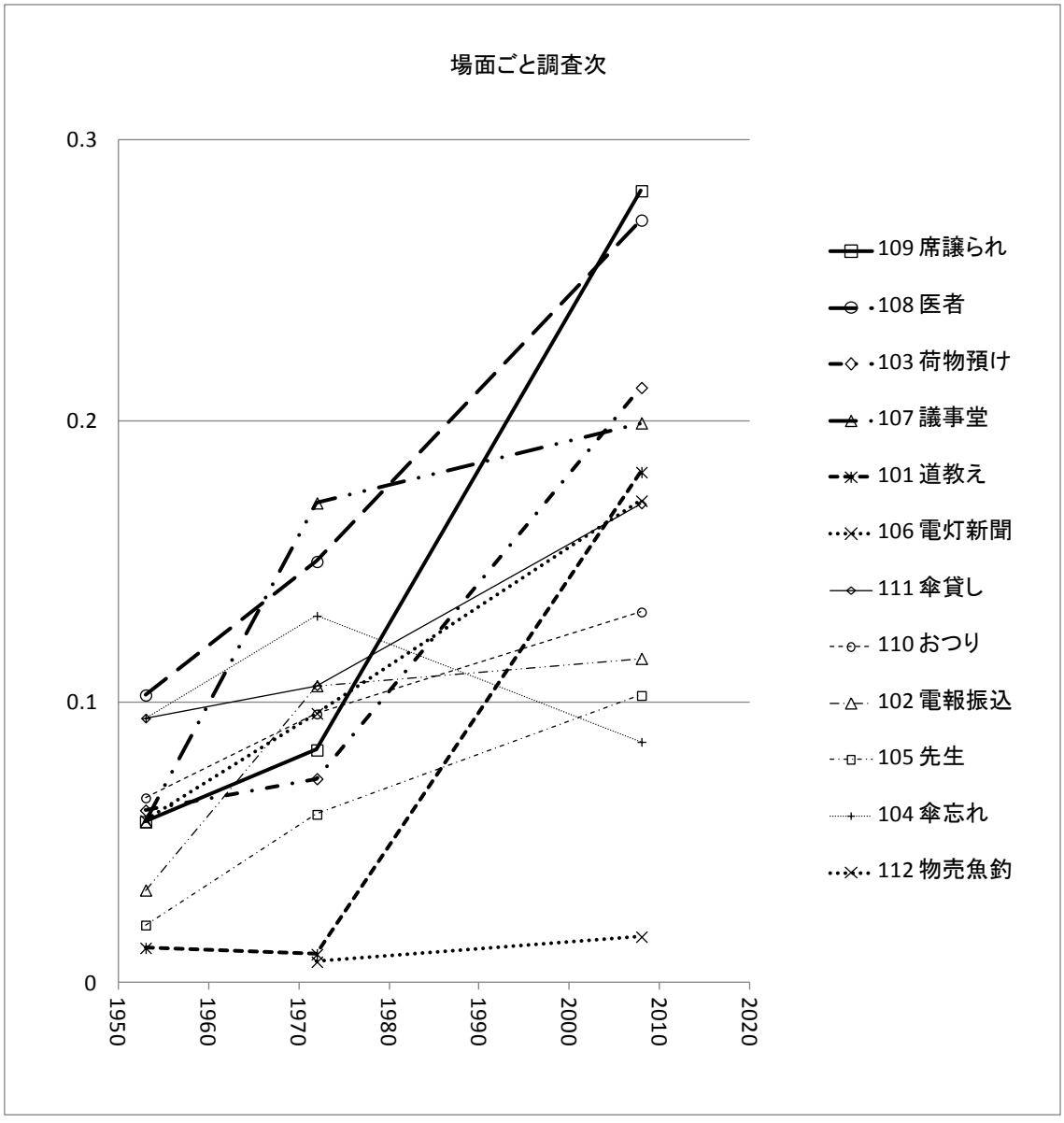


図 6-2　「あのー」　12 場面全体　場面ごと調査次

場面ごとの生年実年代の詳細グラフ（第 3 部）によると，大多数の場面で高年層ほど多い．「議事堂，医者，席譲られ，傘貸し，道教え」などで特に値が大きい．「物売魚釣」というこどもに話しかける場面ではほとんど使われない．「傘忘れ，おつり」もそれほど心理的な負担の度合いが大きくない．「あのー」は待遇表現，配慮表現として機能していると考えてよい．

詳細グラフ図 2-2 などで場面別の使い分けをみると，医者と席譲られ場面が最高で，荷物預け

と議事堂の道尋ね場面とが続く．一方傘忘れのような緊急性のある場面や先生，電報振込のような定型的な言い回しがあって単純な場面では，「あのー」が少ない．

これらから，文字化の方針は十分に信頼できると判断される．ただし図 1-2 で見ると，第 3 次にかけての頻度の上昇が大変大きい．文字化の方針の変化は，着実に見かけの使用頻度数を増やした．しかし図 2-1 で第 1 次のデータが 20 代ピークを示していることなどからみて，「イコール変化」と見なせる．

「あのー」グラフ結論

以上言い淀みの典型として，「あのー」を見た．文字化に関して信頼できる第 3 次調査のデータについて，若年層はあまり使わず，壮年層以上で多くなるという現象が見られた．成人後採用と見なしてよい．とりあえず第 3 次調査で明らかな右下がりを示したことは重要である．成人後採用のパターンと考える．今後他の言い淀み表現に広げて考察する予定である．

第 7 章

岡崎の反応文の長さの増大と加齢変化

はじめに

本章では岡崎調査の回答（反応文）の長さに関して報告する．3 回の調査の線がこれまで観察されたことのないパターンを示したので，まずその位置付けについて論じる．そのあと個別のグラフの解説を加える．

結果として，3 回の調査を通じて反応文の長さには年齢差があり，若年層よりも中年以上が長いという傾向が認められた．しかもこの傾向は 3 回の調査を通じて再現された．敬語の成人後採用と深い関係が認められる．

これまで「ていただく」や丁寧さの分析を進める際に，反応文の長さが問題になった．反応文が長くなったから「ていただく」が増え，丁寧さを示す表現が増えたのか？逆か？因果関係を知る足がかりが必要と判断された．

1.反応文の長さの研究方法

1.1.モーラ数と字数

反応文の長さを測るのには，モーラ数を用いた．ほぼカナ 1 字にあたる単位で，「拍」とも言われる．（母音を単位とする）音節と違って，撥音「ン」，促音「ッ」，長音「ー」をも 1 単位にする．俳句・和歌などで字余りになるかで数えるときの単位でもある．カナの正書法と違うのは，拗音「ゃゅょ」が 1 単位に数えられない点である．

反応文の長さを測るのに，問題点として複数回答，併用の処理がある．今回は内容に関わらず，第一回答のみを集計した．

2.反応文の長さの結果概要

2.1.岡崎敬語調査 3 回の回答モーラ数

同じ質問への回答（反応文）の長さは客観的に定まるもので，問ごとに違うことがあっても，時代（調査次）による違いは少ないと思われる．しかし実際には年齢差が大きく現れた．また岡崎調査の主題である敬語と深くかかわる傾向を見せた．さらに実時間と見かけの時間が矛盾する

傾向を見せた．これは「ていただく」とも似たパターンで，熟練労働の形による，敬語の成人後採用 late adoption によると説明できる．

生年の実年代を基準にしたグラフで，長さは丁寧さと正の相関を示す．パターンは文化庁調査の「わたくし」と似るが，ただし岡崎の「わたくし」は減少傾向とも見られた．中年層の使用者が多いのは矛盾しない．

2.2.加齢と回答の長さ

図 7 - 1 に概要を示す．グラフの横軸が生年で，左が昔のお年寄り，右が今の若い人である．縦軸はモーラ数で，上は多い人，下は少ない人である．

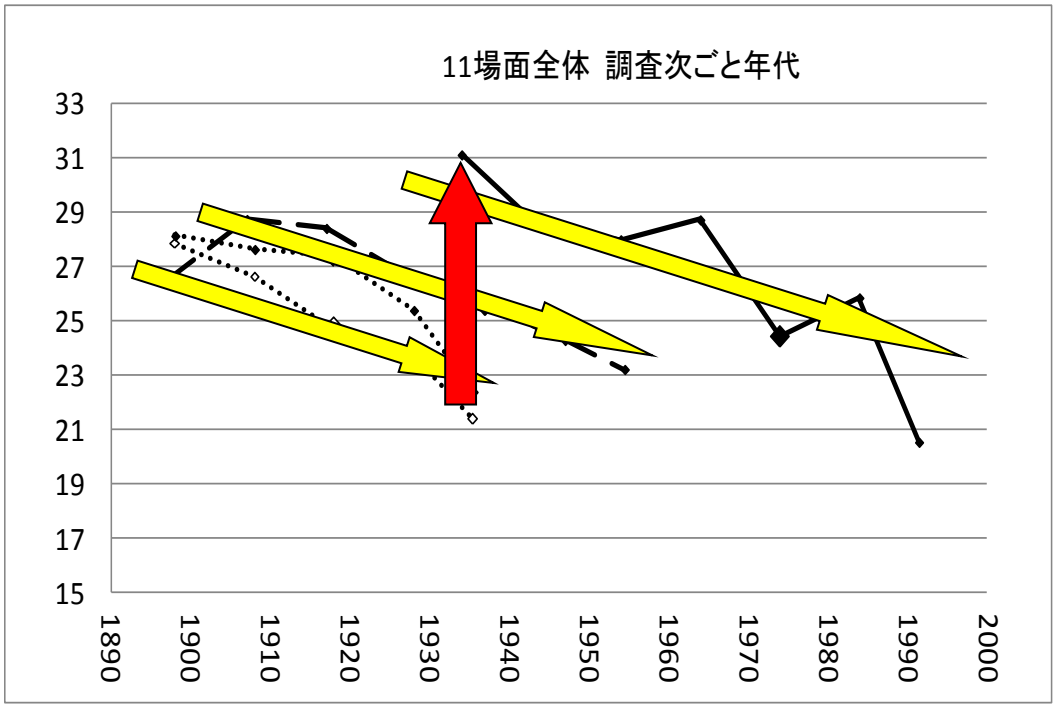


図 7 - 1　モーラ数の推移　12 場面全体　調査次ごと年代

意外だったのは，反応文の長さのグラフである．単純化した矢印を補入して示す．道を教えたり，頼んだりするときのことばだが，線はすべて右下がりである（第 1 次調査は調査員の性質によって 2 種の線で示した）．つまり年長の人ほどモーラ数が多く，10 代は少ない．1 回だけの調査だったら，この右下がりのパターンから，回答モーラ数が減る方向の変化を考える．調査を繰り返すと，右下がりの線がつながって，下がり続けるのが普通だ．ところが，岡崎では調査のたびに前回の右下がりパターンに復帰する．想定外のパターンである．

また 1940 年前後に生まれた世代をみると，第 1 次調査のときは 10 代で短く答えたのに，第 2 次調査のときに 30 代になり，やや長く答え，第 3 次調査のときには 70 代になり，昔の被調査者よりも長く答える．つまり半世紀前の 10 代は手短に話した．その後中年になったら昔の中年と

同じくらいの長さで答える．第 3 次調査ではお年寄りになったが，昔のお年寄りと同じくらい長く話す．若いときは短くてぶっきらぼうでも，年をとると長くなるのだ．ふつうの言語変化と違う．年をとるとモーラ数が多くなるのは，加齢による変化だ．

ふつう年齢差（見かけの時間）から見て若い世代で減る現象（図の右下がりの矢印）は，次に調査を繰り返せば（実時間），使用率が減るはずで，図の垂直矢印は下向きになるはずである．1 回の調査だけで年齢差をみたら，若い人の答えが短いから，将来短くなるだろう，と考えてしまう．ところが繰り返してみたら，短くはならない．個人差が大きいから，実証困難と思っていたが，同一の調査法を半世紀へだてて大勢に適用したから，確認できた．

ところで，1940 年代前後に生まれた人たちは，（かつては若い世代として，次に壮年層として，第 3 次では高年層として）3 度の調査の対象になったが，半世紀経って際立って丁寧さを増やしている（第 3 章）．岡崎の「ていただく」（第 2 章）をはじめとして敬語現象でも成人後採用 late adoption が目立ったが，中心課題としての丁寧さでも認められた．これは同じ生年世代の実時間 real time による比較に基づく．一方，3 回の調査の 4 本の線すべてで，世代差という見かけの時間 apparent time で，中年層以上が丁寧で，若年層は乱暴またはぶっきらぼうという傾向が見られる．なおこのパターンは，「あのー」でも見られたし（第 6 章），「わたくし」（第 5 章），「デゴザイマス」（第 4 章）でも見られた．反応文の長さ（モーラ数）（第 7 章）とからめていうと，日本語の「丁寧」は，長いというニュアンスも含む．

2.3.モーラ数増加の背景

井上（2013）でモーラ数の一見奇妙なパターンが見つかったときに，《言語外の事情が変わったために，半世紀のうちに長くなった》という解釈，反論も考えられた．例えば「道教え」場面では，駅前の橋の位置が分かりにくくなったこと，よそ者が増えたために細かい説明が必要になったことがある．また「医者」場面では，往診を頼むことが昔と違ってまれになった．意識した第 3 次調査の高年層は，医師に長く説明する．「荷物預け」も今はまれになったこと（車やキャリーバッグ使用）があげられる．しかもこれらの場面では，回答文（反応文）が長いので，この数問が全体に影響を与えたという説である．他に無回答者増加の可能性もある．

言語外の事情解明のヒントは，場面ごとのグラフの考察である．個々の場面の条件が左右するとしたら，場面ごとに細かい分析が必要になる．12 個の質問それぞれのグラフを作ったが，大部分のグラフで同様の年齢パターンが読み取れた．

年をとった人の回答が長いという傾向は第 2 次調査でも分かっていた（国立国語研究所 1983：p.38，99）．しかし当時第 1 次と第 2 次で同じ年齢パターンを繰り返していることを示すグラフは作らなかった．

2.4. 調査所要時間の加齢変化

年をとった人の回答が長いという傾向は，方言調査でも体験していた．中学生などは，てきぱきと答えを出して 20 分くらいで終わるのに，高年層は 1 時間ほどかかるというのはよくあるこ

とだ．その都度「最近の学生はテスト慣れしているから」と考えていた．また，昔からこどもは答えだけを言うのに，成人は「と言います」まで言語化するために時間を食う．メタ談話の問題である．年寄りのくどい話は，繰り返しの多さも含む．「一度言えば分かる」と考えるか，念のために繰り返すかである．昔の日本人の伝統的伝達パターンとされる「腹芸」または「目は口ほどに物を言い」の世界は，無言の伝達にかえって時間がかかる．また反応時間，考える時間が加齢によって長くなるかも知れない．年をくうと色々答えたくなり，反応時間が長くなるのかも知れない．ほかに，社会に出て，周囲の空気を読み取るために反応が遅くなるとか，若者は言語的に単純だから短くて済むが，一方中年以上は敬語使用についてバイリンガル的なので長くなる，という説明も可能である．さらに老年になると昔を思い出して，長くなることもある．

そもそも談話のパターンの変化があったとも考えられる．談話パターンの年齢差，時代差に気づいていたが，その調査は思い付かなかった．昔の田舎の挨拶の長さについては体験がある．また城下町鶴岡の士族の親戚のあいさつの長さについては横光利一も書いており，筆者の体験と一致する．それに比べて最近のビジネストークはあっけない．またはそっけない．世の中が忙しくなったことがあるだろう．次の人へのアポが控えているかも知れないが，その余裕，所要時間の見積もりが短くなったのだろう．「お忙しいでしょうからこのへんで」などとあいさつして帰る人もいるが，恩着せがましいことばと違って，自分自身が忙しいのかも知れない．

対面の談話の機能としては，知的情報の交換以外に情的交流の往復がある．初対面の談話は，お互いに名乗って，共通点を見つけて，親しくなってから行われることが多く，そのほうが効果的である．だからこそ昔はあいさつが長く，世間話も長かった．談話終了の合図にも変化があり，最近の若い人は重要な伝達が終われば終了してもいいと考えるようである．余剰な情報の価値を認めない．世間話は最初でなく最後に回ることがあり，しかも無駄話と位置付けられることもある．長くなると老害だと評価される．

日本社会では目上，年上は何かと発言が尊重されていた．会話の順番取り turn taking でも上位になる．会議で年長者が早く発言し，そのあとに中堅が続くという傾向もある．教授会に助手が出ることができた某大学では，助手に「発言するな」と釘をさしたそうだ．これが，年寄りの長話を導いたとも考えうる．ただし岡崎データはこの仮説を支持しない．グラフで第 1 次調査の大学生（C，図 7 - 1 の○）への回答の長さは専門の研究者（P，図 7 - 1 の●）への回答よりも短いからである．

全体として半世紀かけて短くなる傾向がみえるが，追跡調査をしてみると，同じ年代の人が年をとると長く話すようになる．同じことを話すのに，年をとると長く話すのだ．これは実際に同一条件で調査しないと実証できない．岡崎調査 3 回の調査，実年代で同じ項目の繰り返しで分かった．

3．反応文の長さ　グラフ解説

3.1. 岡崎敬語ランダム調査 3 回のモーラ数

以下では反応文の長さのグラフについて解説を加える．グラフ縦軸の目盛は，推移が分かりやすいように，最大値最小値を調整した．大部分は 10 モーラから 40 モーラの範囲である．

図 7-2 に 12 場面全体のモーラ数推移を示した．かつて井上他（2012）で示したグラフは第 2 次までの岡崎ランダム調査データを使って，第 3 次調査のデータを足したもので，凹型の分布を示した．一定方向の推移を示さなかった．

図 7-2 ではすべてのデータを活用することを心がけて，6 本の線にした．これまで使ったのは 4 本線のグラフで，これまでに提示したことのないグラフである．ただし第 7 章での考察は 4 本の線に限り，残りは第 8 章で論じる．

3 本の太線は第 1 次調査の P ＝ Proper or Professional のデータと，第 2 次のランダム調査データと第 3 次のランダム調査の結果である．3 本の細線は第 1 次の C (Control or College) 調査員のデータと，第 2 次，第 3 次のパネルサンプルを示す．●を点線で結んで表わしたのは，第 1 次調査のランダムサンプル，▲で表わしたのは第 2 次のランダム調査データ，■で表わしたのは第 3 次のランダム調査データである．○は第 1 次調査の C ＝ Control or College で，△は第 2 次のパネル話者，□は第 3 次のパネル話者である．パネル調査の話者データは，岡崎市民全体を代表するものではない．

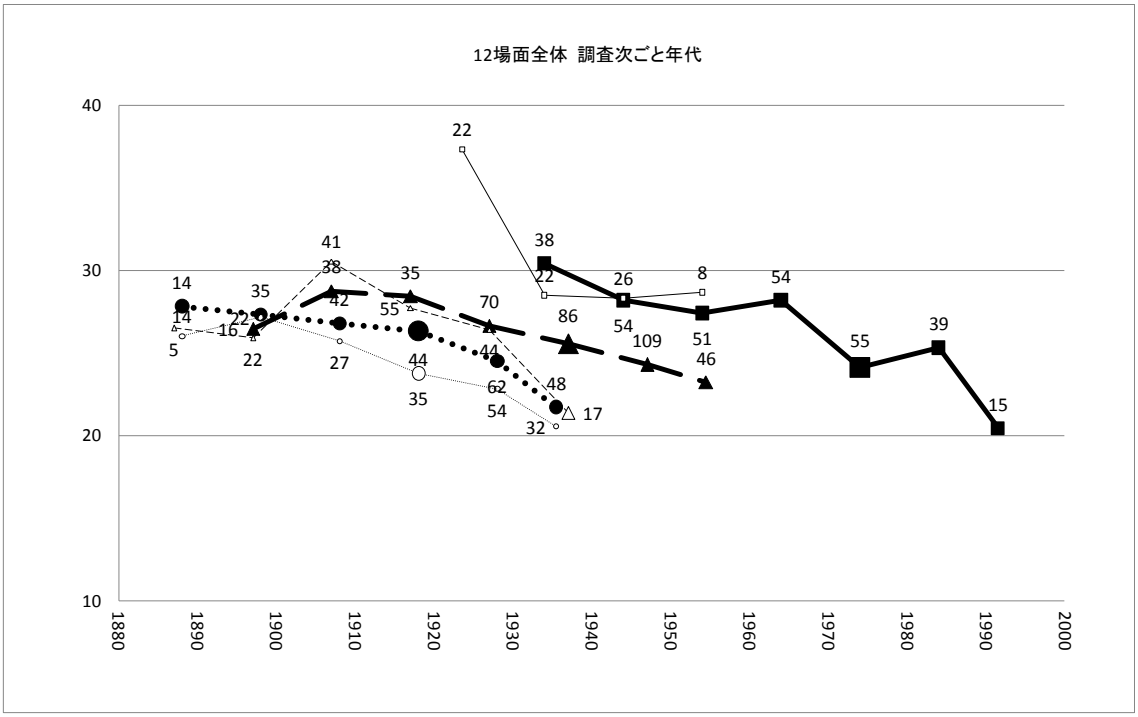


図 7-2　反応文の長さ　12 場面全体　調査次ごと年代

第 1 次調査報告書（国立国語研究所 1958）では P (Proper, Professional，本グループ）サンプルと C (Control, College，比較グループ)サンプルの双方を示した．第 2 次調査報告書（国立国語

研究所 1983）ではこのうち P サンプルと第 2 次ランダムサンプルとの比較を重視していた．今回は第 1 次の P と C を同等に扱って図化した．第 1 次，第 2 次の調査報告書で扱われている第 1 次調査のデータは，実はプロパーグループのみである．これを「第 1 次 P 」と呼び，コントロールグループを「第 1 次 C」と呼ぶ．3 回の調査の傾向をつかむには，3 本の太い線に頼るべきである．

まず太い線 3 本について，解説する．第 1 次調査の P ＝ Proper or Professional のデータ（●に点線）と，第 2 次のランダム調査（▲に破線）と第 3 次のランダム調査（■に実線）の結果である．3 回の調査での岡崎市民全体の傾向を示すものとして重視すべきである．3 本の線がそろってゆるやかな右下がりパターンを示す．太線 3 本とも 3 回とも信頼できる手法によるランダムサンプルの結果なので，岡崎全体として高年層のほうが長く答えたことを意味する．しかし調査を繰り返すと線はつながらず，前回の調査と同じくらいの位置に復帰する．つまり同じくらいの長さの回答をする．さらに 1930 年台に生れた世代は，第 1 次の若者，第 2 次の壮年層，第 3 次の高年層と，年を取るにつれて反応文が長くなる．ただし第 3 次の文字化に際して，言い淀みに関する部分を忠実に文字化したという点は，考慮する必要がある．

3.2. 岡崎敬語第 1 次調査のモーラ数

図 7-2 の細い線について，解説する．細線 3 本は，対照のために表示した．第 1 次の C (Control or College) のデータ（○に点線）と，第 2 次のパネルサンプル（△に破線），第 3 次のパネルサンプル（□に実線）である．パネルサンプルについては，第 8 章で考察する．

第 1 次の○は C ＝ Control or College で大学生調査員の結果だが，研究者 P よりも短く書きとっている．第 1 次の細い点線 C は，太い点線 P よりも下に位置する．学生への答えが簡潔だったとも考えられるし，学生の書きとりが忠実でなかったとも考えられる．話者が短く答えたのか，調査員の書き落としがあったのかは，これだけでは判別できない．（なお第 1 次調査の Proper or Professional の話者は C に比べて学歴に偏りがあり，答えの偏りも想定される．）

ヒントは面接調査第 1 問，場面 1「道教え」である．「わたしのような旅行で来た者が，東岡崎駅の北口で，明代橋（みょうだいばし）はどちらかということをあなたにたずねました．何と言って教えますか．」である．ここで戦後まもなくの学芸大学（元の師範学校）の学生に年下だということで「常体（ダ体）」を使ったとして，この文体選択が第 2 問以下の場面設定にかかわらず影響を及ぼしたことが考えられる．東京から来た研究者向けと地元愛知学芸大学の学生向けで違う可能性がある．次の問との違いは，今後の課題である．

ただし第 6 章言い淀みの図を見ると P も C もほぼ同様の結果を記録しているので，C 学生調査員が言い淀みの部分を書きとらなかったという推測は，あてはまらない．実質的情報を伝える部分で学生調査員向けの反応文が簡潔になったのだろう．

3.3. 岡崎の反応文の長さの場面差

図 7-3 は 12 場面個々の推移を示す．第 1 次調査は P のみのデータである．横軸は 3 回の調査

の間隔，実時間（19 年と 36 年）に合わせた．場面ごとに増加と減少の双方を示す．

モーラ数の増えた場面は，「道教え，議事堂，電灯新聞，荷物預け」などで，依頼関係の場面が多い．「ていただく」の多用される場面とかなり共通で，「丁寧さ」の高い場面とも共通である．医者と議事堂は依頼の典型であり，事情の説明が長くなる．電灯新聞，荷物預けも依頼または依頼に近い場面である．橋の位置を説明する「道教え」は，第 2 次以降で長くなるが，しかしモーラ数のトップではない．他の多くの項目でのわずかな増加傾向が重なって，全体として図 7-2 の増加傾向が提示されたのである．

減少を示す例外的な場面として，「おつり（間違い），傘忘れ，傘貸し」がある．あとの二つについては，傘の価値，傘の値段の変化を考慮すべきだが，話し相手との交渉にしつこくなくなった，つまりは相手の領域（縄張り）への立ち入りを控えるという傾向が考えられる（西尾 2015）．

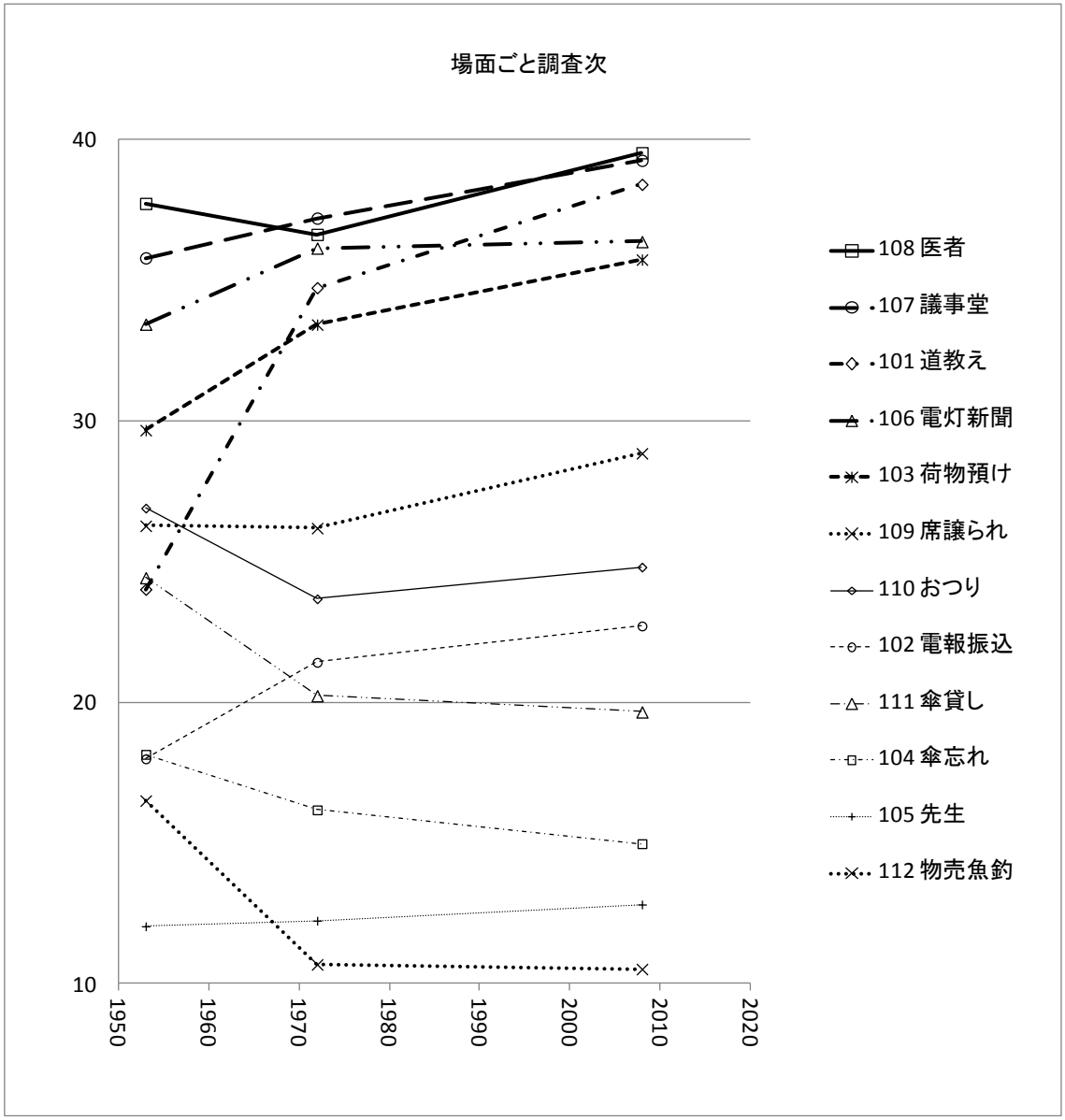


図 7-3　反応文の長さ　12 場面全体　場面ごと調査次

後掲第 3 部詳細グラフによれば，「道教え」では，全体として年をとるほどことばを多く使う．ただし第 2 次 10 代で急な跳ね上がりが見られた．「道教え」などの限られた場面ではない．「医者，議事堂，荷物預け，おつり，席譲られ，（傘貸し）」でも顕著である．ことば数が多くなり，丁寧に説明する．

これは，同じ年齢層の人のモーラ数が加齢によって増えることで分かる．1940 年ころのコーホートが典型である．例外に近いのは図 4-4「傘忘れ」で，モーラ数の年層差が少ない．

3.4. 岡崎市の住民構成の変化

岡崎市では以下のような住民構成の変化があったが，地域社会全体の変化と個人の生涯変化とが一致するのは，「単純接触効果」によっても説明できる（横山 2006）．ゲットーを形成したり，差異意識が大きかったりという場合と違って，市の在住者の間にことばの違いの意識が薄い場合には，特に地域の変化と個人の変化には平行性が認められる．

ところで，岡崎市は 1945 年 7 月の空襲により中心部の大部分が焼け野原になり，復興後も住民の入れ替わりがあった．第 1 次調査は空襲の 13 年後である．また第 1 次調査の 1953 年から第 2 次調査の 1972 にかけては，集団就職，高度経済成長などにより，国内の人口大移動があった時期だった．第 3 次調査報告書第 3 分冊（国立国語研究所）の話者の出生地を見ると，この時期に他地域からの移住者が多くいたことが分かる．継続調査のランダムサンプルでは，岡崎市出生者が第 1 次 44.1%，第 2 次 51.3%，第 3 次 48%で半数ほどで推移し，中部地方以外出生者は第 1 次 11.4%，第 2 次 15.8%，第 3 次 21.5%で増えていた．それほど他地域の人の回答が多かったわけである．言い替えると，もし岡崎出生者だけの傾向を見ようとしたら，ランダムサンプルの半数ほどしか役立たないことになる．つまりランダムサンプルの繰り返し調査の結果の一部は，他地域からの移住者増加による住民構成全体の変化によると考えられる．

なおパネルサンプルでは第 2 次・第 3 次とも岡崎市出生者が 60%前後で，中部地方以外出生者は 6～7%にすぎないから，岡崎市出生者は永住傾向があると言える．またパネルサンプルのみの数値の比較は，岡崎出生者の傾向をよく反映するとみてよい．

山形県鶴岡市近郊の山添地区のように，15 年ごとの調査を繰り返しているうちに以前の農村よりも人口規模の大きい住宅団地が近接して形成された場合には（井上他 2009.3，『大規模経年調査資料集 7 山添』），もし住民全体の調査をしていたら，言語使用の回答は大幅に変わることになる．岡崎はそれほどではないが，隣接の豊田市の自動車産業の発展による継続的人口流入があったことを考慮すべきである．

これまでの第 1 章以降，ランダムサンプルのデータを分析してきた．岡崎市全体の半世紀以上（生年を考えると 1 世紀以上）のことばの推移が分かるが，住民構成が変わったためなのかは，分析が難しかった（後掲詳細グラフに生育地の集計を含めたら見当がつくが）．第 8 章では，パネル調査の結果により，同一人物の追跡調査をして，ことばの変化を確認する．

4.反応文の長さの結論

第7章では, モーラ数を手がかりに反応文の長さを分析した. 高年層ほど長いという年齢差が, 繰り返し観察され, 「敬語の成人後採用」の一環として位置付けられた. また女性が長く, 高学歴ほど長いという傾向も見られた. さらに丁寧さの段階の高い回答が長いことも分かった.

岡崎調査の主な目的としての丁寧さと反応文の長さとは, 一見離れているようで, 実は密接にからむことが分かった. 日米の学生の敬意表現対照研究の数量化による分析でも, 敬意の高さと反応文の長さはきれいな相関を示した(井出他 1986). 敬語や談話行動についての研究は多いが, まったく機械的に反応文の長さを比べるだけでも, 一定の傾向が見えると, 期待される.

第 8 章

岡崎パネル調査の反応文の長さ増大

1. パネル調査（追跡調査）の意義

第 8 章では，岡崎敬語調査のうち，パネル調査（同一人物追跡調査データ）について論じる．個別データの表示法の工夫についても報告する．これまでの章は，ランダムサンプリングに基づくデータの分析だった．

パネル調査，つまり同一人物の追跡による調査データは，変化過程を具体的に知るのに有用である．これまで鶴岡市と岡崎市，富良野市などの大規模経年調査，いわゆる定点観測調査で実施され，分析された．ただし言語研究におけるパネルサンプルの研究技法は確立したとは言い難い．信頼できる結論を得るためには大勢のデータが必要だが，追跡調査が可能だった話者には年齢や性別の偏りがあり，平均値だけをもって論じることは危険でありうる．一方個々のケースを個別に論じるのは手間がかかるし，一般性を見失う可能性がある．この章では，散布図の機能によるグラフを利用して，一方の軸に全話者を生年月順に配置し，もう一つの軸に言語事象の数値をプロットして，データ全体を検討する技法を紹介する．

初期の成果の報告のために，岡崎調査（国立国語研究所 1958，1983，2010）の反応文の長さ（反応文，回答の長さ）を分析対象にした．これにより，一人一人の追跡データでも，生涯変化（加齢変化）として反応文が長くなることが分かった．また場面別に見ることにより，どの場面の増え方が大きいかが分かった．さらに個々の表現別に見ることにより，どの言い方がどんな人で増えたかも分かった．

第 7 章の岡崎の反応文の長さは，話者全体のデータできれいな成人後採用を示した．ただ岡崎市の住民構成が変わって，外来者が増えたための変化という可能性を否定できない．第 8 章の分析で，同一個人の加齢変化としても同じ傾向を確認できた．教科書での敬語の扱い方や，社会人向けの敬語教育にも影響するところが大きい．また学校敬語の特殊性の位置付けにも関係する．

2. 岡崎パネル調査の方法

岡崎敬語調査の調査デザインと規模は図 8 - 1 に要約できる．第 2 次と第 3 次調査では，ランダムサンプルをその都度住民票から抽出するとともに，パネルサンプルとして，以前の話者を探

し出して，追跡調査を行った．

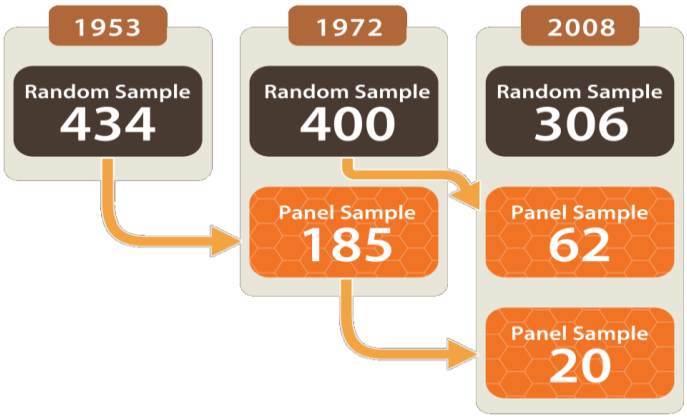


図 8 - 1　岡崎パネルデータの構成

表 8-1　岡崎パネルデータ　調査当時の年齢

生年	①1953年調査	②1972年調査	③2008年調査
1880	①73歳	②92歳	
1890	①63歳	②82歳	
1900	①53歳	②72歳	
1910	①43歳	②62歳	③98歳
1920	①33歳	②52歳	③88歳
1930	①23歳	②42歳	③78歳
1940	①13歳	②32歳	③68歳
1950		②22歳	③58歳
1960		②12歳	③48歳
1970			③38歳
1980			③28歳
1990			③18歳

図8-3以下の読み取りの参考として表8-1に10年齢層ごとに，3回の調査のときの年齢を示す．1930 年，1940 年頃に生まれた人は，第 1 次から第 3 次までの 3 回の調査に協力できる年齢だった．ただし以前の世論調査のランダムサンプリングでは 16 歳を下限にし，59 歳か 69 歳を上限にすることもあったので，パネルサンプルの追跡にも同じ基準を適用していたら，3 回の調査を通して協力できた人はなくなっていたはずである．図 8-1 によれば実際には 20 人だった．

パネル調査の問題点は，あとになるほど人数が少なくなることである．統計的有意差などを計算しようとすると信頼度が落ちて，結果が不分明になる．また年齢などによるグラフを作っても，各セルの人数が少なくて，一定のパターンが現れにくい．この弱点を逃れる（またはカバーする）ために個々のケーススタディーを行うことがあるが，これはまた一般化が困難になるという欠陥がある．

以上のジレンマを逃れる 1 技法として，エクセル散布図の利用が考えられる．個別例を図表の形で配置するもので，基本的発想・根本精神としては，言語地図（方言分布図）やグロットグラム（地理×年齢図）と同じである（井上 2000.2）．少数例の平均値でなく，個人表示をするのは，グロットグラムの発展である．岡崎市を 1 地点とみなし，年齢の軸を細分して，生年月日により 1 次元に配列したことになる．残った 1 次元に言語現象の使用率を表示した．

この場合，個々の例を絶対的な不動のものとして見るのでなく，全体のパターンをとらえることが必要である．言語地図やグロットグラムの個人表示では，全体のパターンを読み取る必要があり，名人芸がときに要求されるが，幸いにこの章では連続的数値を扱う．数表でなくグラフで視覚化したので，表面的な解釈に個人差は少ない．ただし究極的な論理の読み取りの深さには，経験による違いや個人差がありうる．

3. パネル調査と反応文の長さの問題点

3.1. 住民構成の変化の可能性

これまで岡崎で得られた成果報告の大部分は，住民（サンプル）全体についてだった．岡崎 3 回の調査結果の違いについては，住民構成の変化，「よそもの」の流入の影響によって生じたという可能性がある．山形県鶴岡市，愛知県岡崎市のように数十年をへだてて大規模サンプリング調査を行った場合の実時間の違いは，移転・移住などによる住民構成の変化を反映する可能性もあり，ニュータウンにおける方言形成と似た状況も想定できる（朝日 2008）．ことに岡崎市では，隣接の豊田市という工業都市の住宅地として，岡崎市に流入する住民が増えた．鶴岡市のように首都圏への人口流出（と後背地農山漁村からの流入）が主で，人口減少傾向にある地域とは性格が違う．

純粋の言語変化を扱うには，同一人物追跡によるパネル調査の結果を重んじるべきである．また個人内の加齢による変化を考慮すべきである．同一個人が数十年経って年取ったときに同じような（長く話す，答えるという）傾向を見せるだろうか．岡崎にはこの貴重な追跡データがある．

3.2. 住民構成の変化の影響

以下では，反応文の長さを 12 項目に分けて観察する．技法としては第 7 章以前と同様である．3 回にわたって反応文が長くなった理由について，住民によそもの（外来者，転入者）が増えたために 101 道教え項目で長くなったのが主要因だという解釈があった．住民にとって場所が分かりにくくなったために，長く説明するようになったという論理である．確認のためには，その他の項目でも長くなったかどうかを確認する必要がある．

全 12 項目の比較のために，図 8 - 2 に，ランダムサンプル全員の反応文の長さを示す．第 7 章の図 7-3 の再掲にあたる．第 6 節以下の 12 場面ごとの図を要約して示すことになる．薄い線（赤字）は特に長くなった 3 項目である．101 道教えは，確かに第 2 次第 3 次で際立って長くなった．しかし道教えの逆の東京で道を尋ねる議事堂も長くなり，荷物預けでも長くなった．いずれも情

報のやりとりや相手に負担を求める行動である．他は微増か横ばいかであり，減少は傘貸しと傘忘れ（とおつり）である．反応文の長さは確実に長くなっていて，それには談話行動としてのとらえ方の変化がからんでいると考えられる．図 8-2 はランダムサンプルの結果で，住民全体としての増加傾向だが，以下ではパネルサンプルを用いて，同一個人が生涯で長く答えるようになったかを確かめることにする．

図 8-7 のグラフと照合すると，ランダムサンプルもパネルサンプルも同様に長さを長くしていると読み取れる．

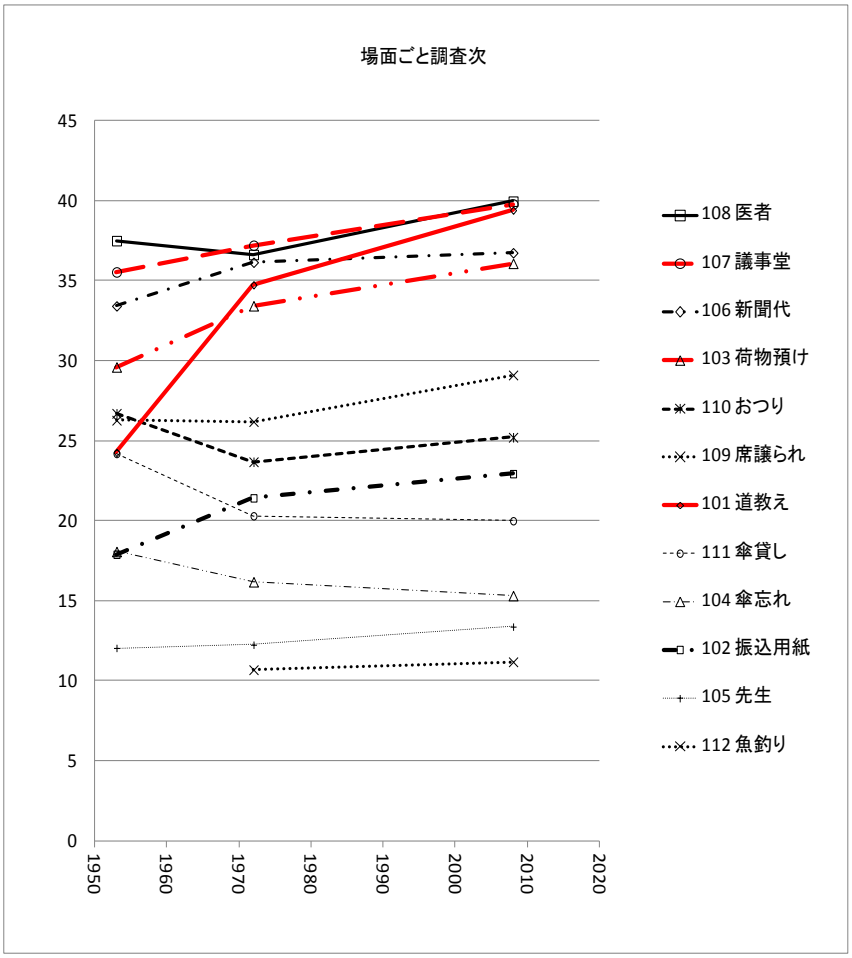


図 8 - 2　岡崎調査の反応文の長さ　ランダムデータの比較

3.3. 文字化の忠実度の影響

3 回にわたって反応文が長くなった理由について，実際に反応文が長くなったのでなく，文字化の忠実度が影響したという反論がありうる．1953 年の第 1 次調査では録音機を使用せず，その場の短期記憶を手書きで書きとった. ベテラン調査員 Professional と愛知学芸大学学生 College で，技術と考え方の差があったと考えられる．それに反して，第 3 次の文字起こしでは，言い淀み，ヘッジに関わる部分も忠実に文字化しようという方針を取った（第 6 章）．その影響はあり

うるが，各調査次の全員，全年齢層に同様に働くはずである．確認のためには，年齢差を検証する必要がある．

4. パネル調査結果 長さの概要

4.1. 第 1，2，3 次全話者の人数と 6 分類構成

図 8 - 3 に，これまでの 3 回の調査データを 6 本で表現したグラフを示す．図 7 - 2 と同一で，全データの生年実年代グラフである．結論を先取りしていうと，その読み取りによれば，たとえ文字起こしの技術と方針に差があったとしても，「成人後採用」の傾向を崩すものでない．

図 8 - 3 のグラフの横軸は話者の生年，縦軸は反応文の文字数を示す．6 本の線のうち，点線は第 1 次調査，破線は第 2 次調査，実線は第 3 次調査を示す．3 本の太い線は各調査次で重視すべきデータで，第 1 次のプロパーグループ（または Professional 調査員）と，第 2 次のランダムサンプル，第 3 次のランダムサンプルである．第 7 章で考察ずみである．

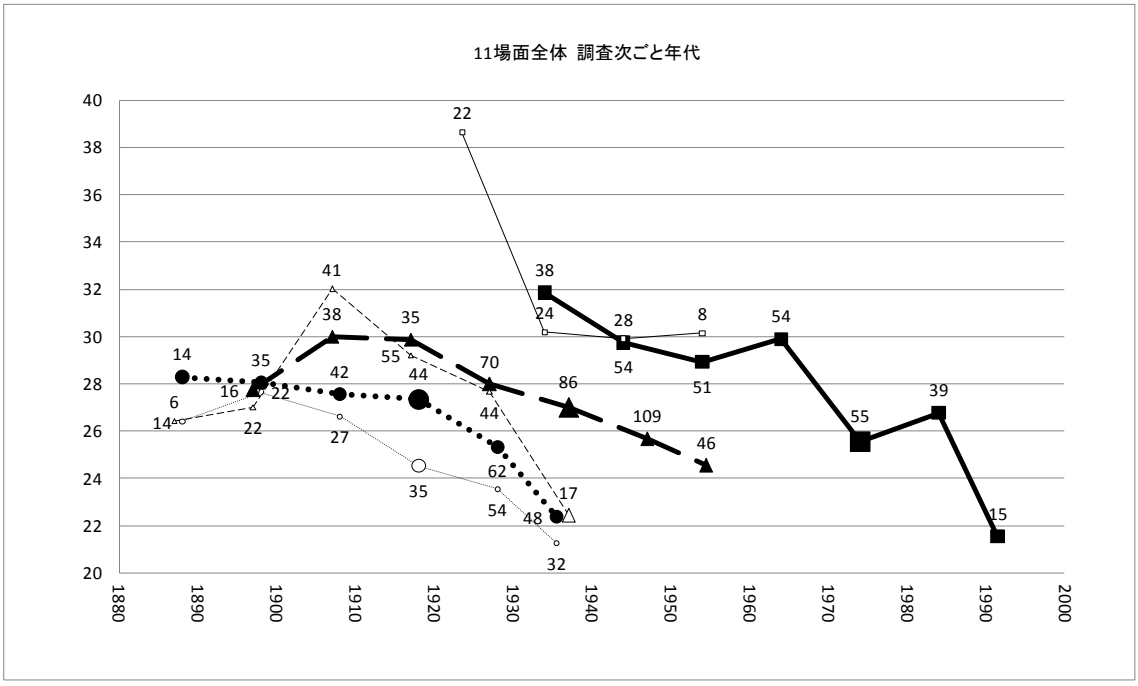


図 8 - 3　反応文の長さ　6 本線グラフ　12 場面総平均

3 本の細い線は参考にするデータで，第 1 次の C コントロールグループ（または College 調査員），第 2 次と第 3 次のパネル（追跡調査）サンプルである．同じ人たちが 19 年後，36 年後にどう変わったかを見るときには細い線を見ることになる．各調査時の全体像と比べるときには，太い線と細い線を比べることになる．

図 8 - 3 には，各セルの人数も示した．それぞれのセルの人数は十分である．ただし第 3 次パネルの 90 代は一人だけで，人数が少なく，グラフにした場合に極端なパターンを示す可能性が

あるので，80 代に含めた．このため第 3 次パネルの 80 代は，各年代の話者数の比率に応じて，横軸上でわずかに左にずらして表示した（本来，80 代は 1924 年，90 代は 1914 年にプロットされる．80 代が 21 名，90 代が 1 名なので，（1924×21 ＋ 1914×1）÷22＝1923.5 年にプロットした）．

ただし第 1 次調査 C80 代の 6 人と，第 3 次調査パネルサンプルの 50 代 8 人は人数が少ないので，平均値でみるときには用心すべきである．他のセルは最低でも 14 人以上なので，惑わすパターンを示すことは少ないと思われる．

まず岡崎敬語調査全体像を見るためにランダムサンプルとパネルサンプル（追跡調査話者）全員の反応文の長さ総平均の推移を図 8 - 3 で考察する．第 2 次，第 3 次のパネルサンプルは，ランダムサンプルと性格の違い（特に年齢層の偏り）が大きいので扱いに困るが，このグラフでは 6 本線のグラフとして組み入れる．ただし時代の趨勢を読み取るには参考資料として扱うべきなので，図化に工夫を加えた．第 1 次調査については P（本グループ）サンプルを太く大きく示した．第 2，3 次調査については R（Random）サンプルを太く大きく示した．パネルサンプルは細く小さくした．

パネルサンプルは，年齢層別に分けると人数が少なくなって信頼度が落ちるので，読み取りに用心が必要である．同一個人の追跡という視点からは，第 8 章のようなアプローチを取るのがよい．しかし第 8 章の手法だと，パネルでとらえられた人がランダムサンプリングでとらえられた岡崎市民一般の中にどう位置づけられるか不明である．

第 2 次の△と第 3 次の□は，それぞれの調査で追跡に成功したパネルサンプルの平均値である．若い世代は含まないので，高年層の傾向を反映することになる．後述のように反応文の長さには年齢差があって，年を取るほど長く答える傾向があるので，パネルサンプルはランダムサンプルよりも長くなると期待される．第 2 次の△と第 3 次の□は，年層差があり，期待どおりのパターンとは言えない．

第 2 次のパネルサンプルの細い破線△は，第 2 次ランダムサンプルの太い破線よりも下に位置する．つまり反応文が短い傾向がある．それはまた，第 1 次の線に近いとも言える．

第 3 次のパネルサンプルの細い実線□は，第 3 次ランダムサンプルの太い実線と重なる年齢層が少ない．38 年を経たので，中年以上しかいないためである．大まかに見ると第 3 次のランダムサンプルと似ている．

パネルサンプルの回答の傾向は，ランダムサンプルとずれることが多い．しかし右下がりの線が観察され，しかも 3 回の調査で繰り返される．ランダムサンプルでとらえられた傾向が補強されたと見られる．パネルサンプルは人数が少なくなるので，細かいきざみの年齢層などに分けて考察するときなどには用心すべきだが，この章のように，そもそも多段階の連続的数値になる反応文の長さについては，それほど大きな影響はなさそうである．第 8 章で個人内の生涯変化，加齢変化について分析するが，そこで取り上げられるパネルサンプルの回答パターンに，特に偏りがあるわけではない．岡崎市民全体の言語変化を個人内で反映するものと，認められる．

4.2. 第 1，2，3 次全話者の反応文の長さの推移

図 8 - 3 では反応文の長さの推移を示している．読み取りを試みよう．

3 本の太い線はこれまでに生年実年代グラフで示したものと実質的に同じである（第 1 次は P と C は区別し，P のみを太くした）．年齢差を見ると，3 回とも右下がりで，成人後採用パターンを示す．1 本だけ見たら，若い世代に向けて減っているので，減少，衰退を期待する．しかし 3 回の調査で，同じ右下がりパターンを繰り返しながら増えている．典型的な「成人後採用」のパターンである．

細い線は，パネルサンプルなどを示す．そのうち細い点線の第 1 次は College 調査員の数値である．太い線と少しずれることがあり，Professional 調査員より下に位置する．つまり反応文が短い．書き取り能力・忠実度の違いを示す可能性があるが，一方で，話者が若い地元の学生に気を許して，くだけた感じの回答を口にした可能性もある．

他の 2 本の細い線を見る．細い破線の第 2 次調査のパネルサンプルは，第 1 次のランダムサンプルのうち追跡できた人である．すなわち，第 1 次調査の Professional と College の全ランダムサンプルのうち，第 2 次調査でパネルサンプルになった人だけをとりあげてプロットした．第 2 次と第 3 次調査の関係も並行的である．なお後述図 8 - 9a, b, c, d で表示された話者は，パネルサンプルだけである．

第 2 次調査のパネルサンプルは，第 1 次調査のランダムサンプル全体と比べると 19 年後にほぼすべての年齢層で長くなり，ことにかつての 40 代（のちの 60 代）が著しく長くなった．とはいえそれより若い人は，第 1 次調査時よりも長くなったといっても，第 2 次のランダムサンプルほどには長くなっていない．世の中の動きに付いていっていない．

細い実線の第 3 次調査のパネルサンプルは，すべて 50 代以上の高年層である．第 3 次のパネルサンプルの数値はランダムサンプルの数値とそれほど違わない．50 代から 70 代までは，太線の第 3 次ランダムサンプルとあまり変わりないが，ただ追跡できた高年齢の人（80 代）は他の層の数倍の長さで答えている．22 人の回答なので，信頼性は高い．

パネルサンプルは，追跡に成功した人々で，直前の転入者ではない．この人たちは最高年齢層を除くと，以前の調査次よりもすべて長く回答している．また第 2 次と第 3 次のパネルサンプルとランダムサンプルを比べると，年齢層によりずれが見られるが，そう大きいものではない（38 年後の調査なので，重なる年齢層は少ない）．各調査次において，（第 1 次・第 2 次調査の高年層を除くと）右下がりの線を描くことは，全体に適用できる．文字化の方針の違い，変化によるとしたら，第 1 次から第 3 次にかけて全年齢層にわたって数値の大きな跳ね上がりが観察されるだろうが，それほどではない．従って，3 回の調査で文字化の方針の違いがあったとしても，年齢層の違いに基づく成人後採用の働きは，認められる．どのような要因によって長くなったのかを確かめるのが，課題である．

4.3. 第 1，2，3 次パネル話者の反応文の長さの平均値

以下ではパネル調査の対象者にしぼって第 1 次 2 次の共通サンプル，第 2 次 3 次の共通サンプルに分けて，表示する．このうち第 1 次 2 次の共通サンプルの第 1 次サンプルは，図 8 - 3 にそれとして表示されない．「後の世に」第 2 次のパネルサンプルになるが，第 1 次調査のときには予測できないことが理由の一つである[23]．ただし第 1 次調査が P と C に分かれていなかったら，第 1 次のパネルを（第 1 次のランダムサンプルと重なる形で）表示することは考えられる．

パネルサンプル（追跡調査話者）の反応文の長さ総平均の推移を以下の表 8 - 2 に数値で示す．

表 8 - 2　反応文の長さ総平均

第 1 次 2 次共通			第 2 次 3 次共通	
第 1 次	第 2 次		第 2 次	第 3 次
1953	1972		1972	2008
25.715	28.514		26.657	32.367
36.6 歳	55.5 歳		36.1 歳	72.1 歳

1953 年第 1 次調査のサンプルのうち，第 2 次調査に応じた人の平均値は 25.7 モーラから 28.5 モーラに増加した．同様に 1972 年第 2 次調査のサンプルのうち，2008 年第 3 次調査に応じた人の平均値は 26.7 モーラから 32.4 モーラに増加した．わずかの違いであるが，同じ人たちが加齢により（時勢の変化により）長く答えたことになる．

なお各調査時の平均年齢は表 8-2 に示すように，のちになるほど高くなっている．当然ながら第 1 次 2 次共通の人の年齢は 19 歳多くなっているし，第 2 次 3 次共通共通の人の年齢は 36 歳多くなっている．わずかのずれは調査時期の違いによる．

全体像を見るために，反応文の長さ総平均の数値をグラフ化した．散布図の技法により，年代に忠実に図 8 - 4 に提示した．横軸が話者の調査年を示す．縦軸は反応文の長さをモーラ数で示す．黒塗りマーカーは第 1 次 2 次共通，白抜きマーカーは第 2 次 3 次共通のサンプルである．全体のパターンに大きなずれはない．年数が経つにつれ，また同一個人が年を取るにつれて，反応文の長さが長くなる．

---

[23] 大衆演劇では「我こそは木下藤吉郎，後の世の豊臣秀吉なるぞ」などと名乗ることがあったというが，アナクロニズムもいいところで，占い者や予言者でも後の世の名を言うことはできないはずである．

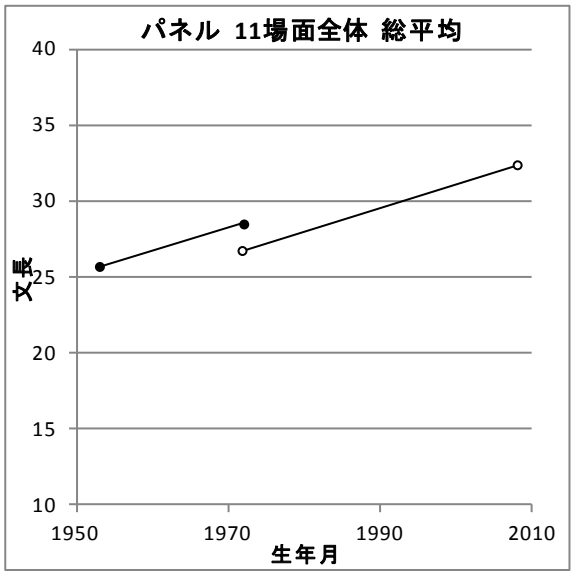


図 8 - 4　反応文の長さ　12 場面総平均

図 8 - 5 に示すように性差もある．黒塗りマーカーは第 1 次 2 次共通，白抜きマーカーは第 2 次 3 次共通のサンプルで，実線が女性，点線が男性のデータである．実線の女性のほうがすべての時点で反応文が長い．また第 1 次から第 2 次にかけて女性の上昇が際立つ．女性のほうがおしゃべりだという世間の評判（ステレオタイプ）に合致する．ただし情報量に違いがあるか，繰り返しが多いか，無駄な情報も口にしているのか，敬語的表現（おっしゃる，ていただく）を多く使うか，などについては，答え（反応文）を分析しなおす必要（および価値）がある．

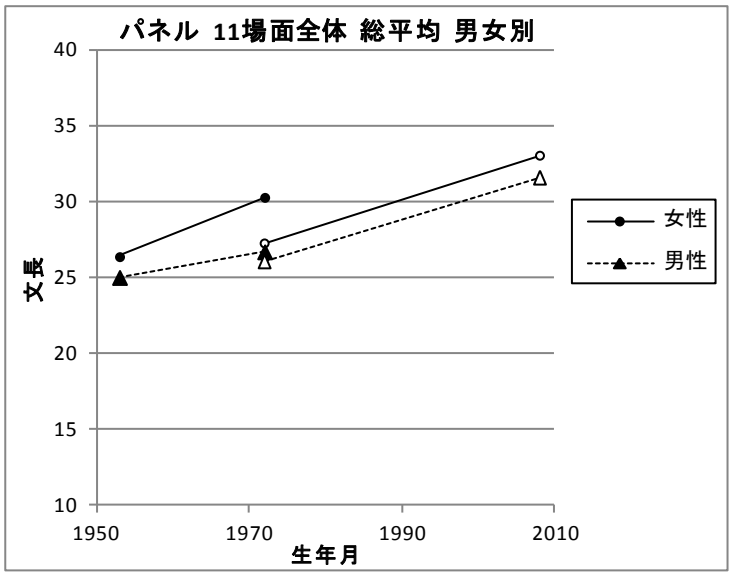


図 8 - 5　反応文の長さ　12 場面総平均男女別

黒塗りマーカーは第 1 次 2 次共通，白抜きマーカーは第 2 次 3 次共通

実線が女性，点線が男性

さらに，生年を 10 年ごとに区切って，散布図の技法により，生年実年代に忠実に図 8 - 6 に提示する．横軸が話者の年齢層ごとの平均生年を示す．縦軸は反応文の長さ平均値をモーラ数で示す．黒塗りマーカーは第 1，2 次共通，白抜きマーカーは第 2，3 次共通のサンプルで，同一サンプルのうち早い方の調査次（第 1，2 次共通の第 1 次，第 2，3 次共通の第 2 次）のデータを破線，遅い方のデータを実線で示す．第 3 次調査の 90 代（1 人）は 80 代に統合した．第 1 次の 60 代（5 人），第 1，2 次共通の第 2 次の 80 代（4 人），第 2，3 次共通の第 2 次の 10 代（2 人）と 50 代（7 人），第 3 次の 50 代（8 人）は人数が少ないので，注意が必要である（他のセルはどれも 17 人以上）．

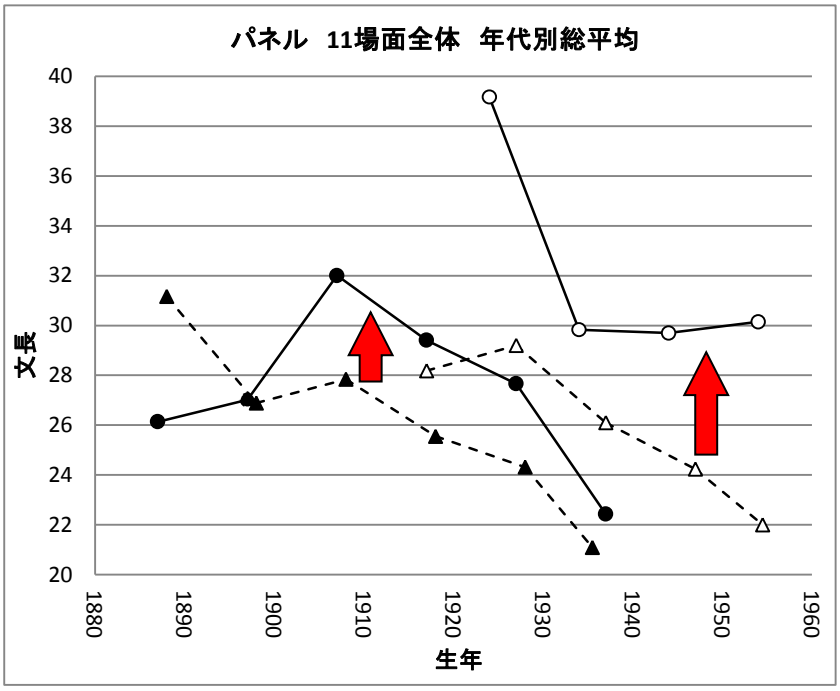


図 8 - 6　パネル調査の反応文の長さ　12 場面総平均　調査時点の平均年齢
黒塗りマーカーは第 1，2 次共通，白抜きマーカーは第 2，3 次共通
早い方の調査次は破線，遅い方のデータは実線

全体のパターンを見ると，4 本の線はいずれも右下がりの繰り返しと見ることができて，高年層を除くと大きなずれはない．つまり，成人後採用として，同一個人が年を取るにつれて（4 本の線の右から左に向かって），反応文の長さが長くなる．加齢変化である．

また矢印で示したように，追跡調査により年数が経つと（点線にくらべて実線で），反応文が長くなる．黒塗りマーカーの第 1 次 2 次共通の人たちは，第 2 次調査で（高年層を除いて）顕著に長く答えた．白抜きマーカーの第 2 次 3 次共通の人たちは，第 2 次では低かったが，第 3 次調査でかなり長くなった．2 本ずつの線の傾斜はよく似ている．黒塗りマーカーの実線と白塗りマ

ーカーの破線は，ともに第 2 次調査のサンプルだが，二つの線の動きは，人数が少ない割には似ていると言ってよい．

つまり第 7 章で岡崎市民全体として回答が長くなる傾向が見られた上に，この第 8 章で同一個人の集団でも加齢のプロセスで回答が長くなる傾向も見られた．外来者などの影響ではない．

5. パネル調査結果　長さ全項目総合

5.1. パネル調査の反応文の長さ　全話者

これまで全体パターンの類型化を試みて，「S 字，二の字，川の字変化」（S 字，Ⅱの字，＝（イコール）変化）という三つの変化パターンを提示した．以下では岡崎敬語調査の中で思いがけなく興味深いパターン「川の字変化」を示した現象の典型，反応文の長さについて扱う．3 回の調査全体を通して長くなる傾向が見られ，にも関わらず年齢差を見ると若い世代では短くなる傾向がある．実時間の繰り返し（経年）調査としては長くなり，年齢差と言う見かけの時間では短くなるという，矛盾した方向が示された．同一個人の生涯を通して追跡したらどうなるだろうか．

図 8 - 7 に散布図の技法により各個人のデータを提示する．紙のページへの割り付けのために，これまでの図と 90 度ずれた形で表示する．縦軸が話者の生年を示す．月まで考慮することにより，全員を判別できた．横軸は反応文の長さをモーラ数で示す．この表示法は連続的数値について適用可能である[24]．グラフ右側に生年実年代による 3 回の調査時の年齢を示した．

[24] 今後丁寧さの段階付け，「テモラウ，テイタダク」使用率，ヘッジ使用率，文体（テゴザイマス，ため口使用率）などにも拡大する予定である．一方非連続の名目変数にあたる 1 ／ 0 データについては，「●△ー」などの記号を使って有無を表示する技法で，第 1 次から第 3 次にかけてのパネル話者の変化を表示できる．グロットグラムや社会言語学の一覧表で使われていた技法の応用である．

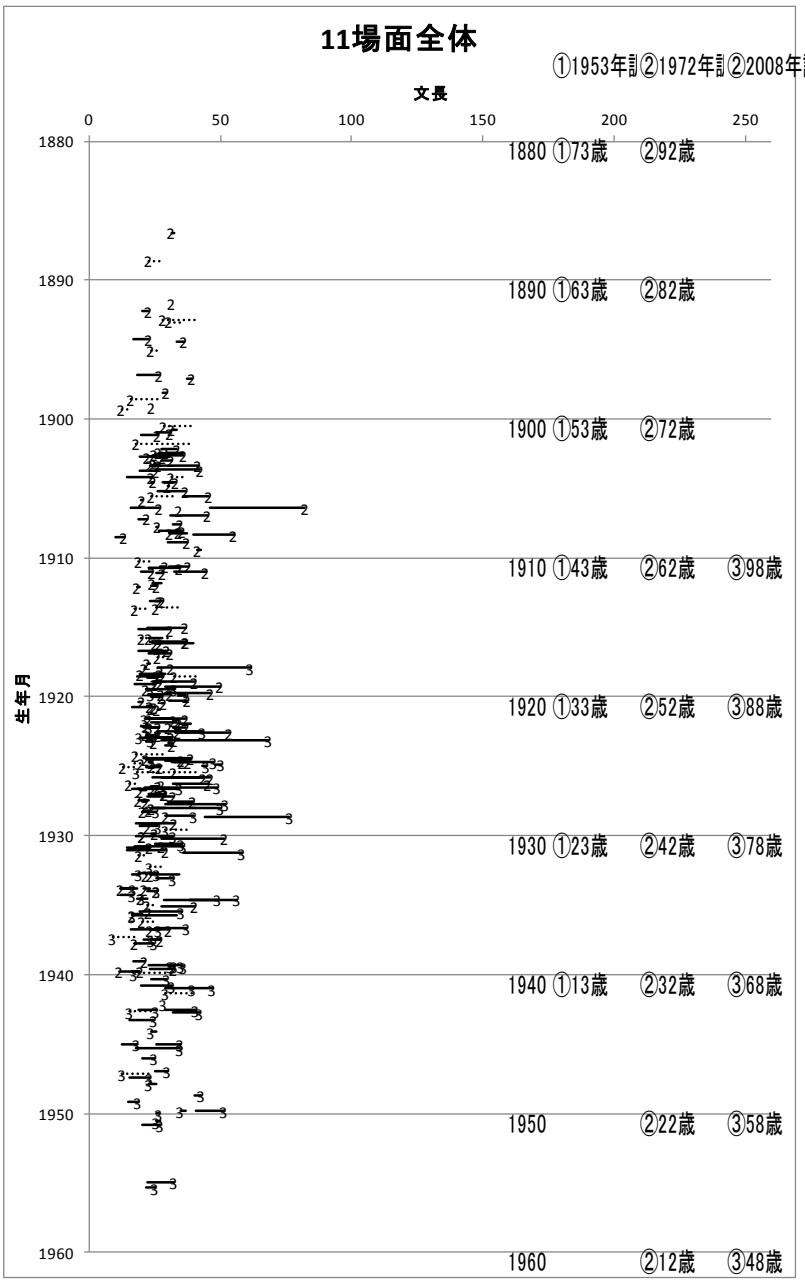


図８－７　岡崎パネル全データの反応文の長さ

第１次から第３次までの調査次は数字のラベルで示した．ただし第１次の数字は省いた．これにより，線を矢印のように読み取ることができる．大部分の線は右向きである．つまり後の調査で確かに反応文が長くなる．一部短くなるケースは，線を点線に変えた．1900 年以前の生まれの人（第１次調査ですでに高齢だった人）に多い．ある程度年を取ると，反応文がさらに長くなる傾向は収まるものらしい．

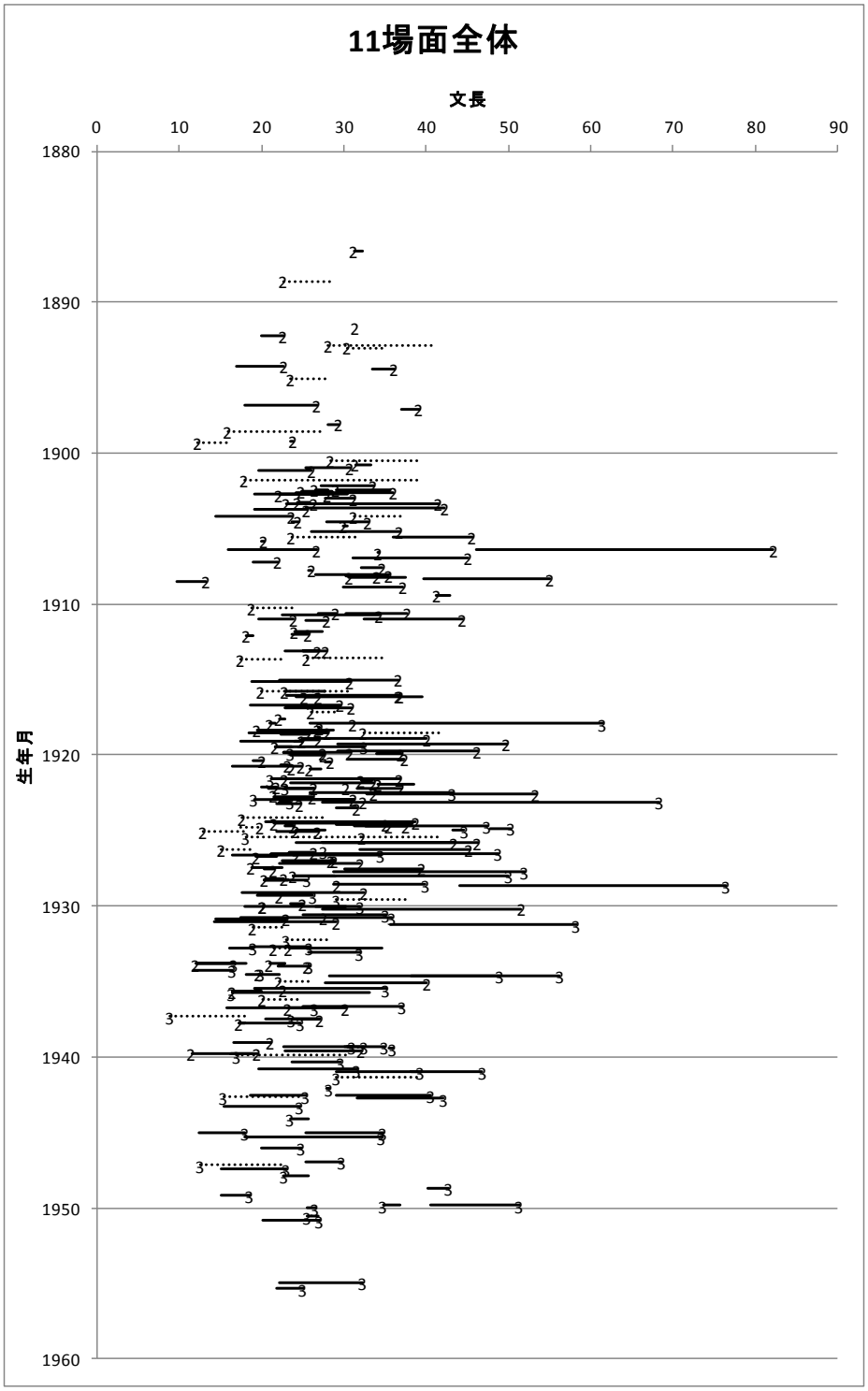


図８-８　岡崎パネル全データの反応文の長さ（拡大）

図８-８に図８-７の主要部分を拡大して示す．同一個人を 19 年後，36 年後に追跡して調べたところ，全体としては，反応文が長くなる人が圧倒的に多いことが示された．

5.2. パネル調査の反応文の長さ　第 1 次 2 次話者

図 8 - 7，8 のグラフのデータは 3 回の調査のパネルデータ全体を含む．細分したらもっと傾向が読み取りやすくなると期待される．図 8 - 9a, b に話者を 2 グループに細分して，岡崎調査の反応文の長さを 4 枚に分けて示す．対比して見やすいように 90 度傾けた．個々の話者を表示したので，個別のケースも把握できるが，全体的傾向を要約して示す必要もあるので，グラフ中に近似直線と近似曲線を入れて，傾向を把握する．ここでは年齢層に分けて平均値を出す手法は避けた．パネル調査では人数の少ないセルが生じがちで，個人の偏った回答の影響が大きく働きうるからである．

図 8 - 9a, b の 2 枚は，（左 a）第 1 次調査全員のうち，のちの第 2 次のパネル調査の対象になった話者だけを取り上げたものと，（右 b）第 2 次調査のパネル話者のデータである．横軸に生年をとったので，同一人物の 19 年間の変化が分かる．同一人物かどうかは左右の生年で判別できるが，今回は左右の幅を狭めたので，同定が困難である．（図 8 - 7，8 で分かることである．）縦軸には反応文の長さをモーラ数で示した．左の第 1 次調査と右の第 2 次調査を比べると，パターンが違い，右 b の第 2 次調査の結果の方で，長い反応文を使う人が増えている．ことに 1900 年前後に生れた人の間に極端に長い反応文を答えた人がいる．

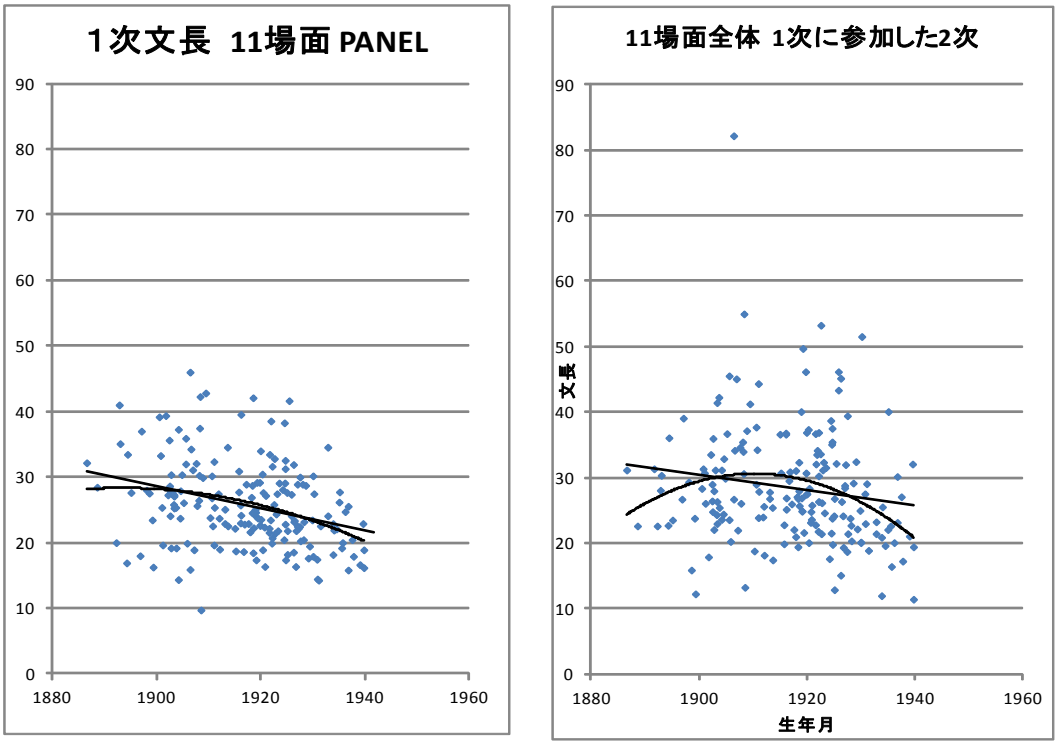


図 8 - 9a, b　岡崎調査の反応文の長さ第 1 次パネル・第 2 次パネルの比較

（左 a）第 1 次調査のパネル調査対象，（右 b）第 2 次調査のパネル話者

近似直線と近似 2 次曲線を入れた．近似直線から分かるように，年取った人のほうが長い傾向

がある．また第 2 次調査全体で反応文が長くなった．中でも長いのは中年層で，高齢者と若い人は短い．

5.3. パネル調査の反応文の長さ　第 2 次 3 次話者

図 8 - 9c, d の 2 枚は，（左 c）第 2 次調査全員のうち第 3 次のパネル調査の対象になった話者だけを取り上げたものと，（右 d）第 3 次調査のパネル話者のデータである．第 1 次から第 3 次まで参加している 20 人は図 8 - 9 b のグラフと重複して図化されている．左 c と右 d のグラフを比べると，ここでも後の第 3 次調査で反応文が長くなる傾向が見られた．第 2 次と比べて全体として反応文が長くなっている．また年齢の上の人ほど長い．

近似直線の位置から，第 2 次調査全体で長くなったと読み取れる．近似曲線は上の 2 枚と違って凹型で，老年層が長く，また若年層もやや長い．

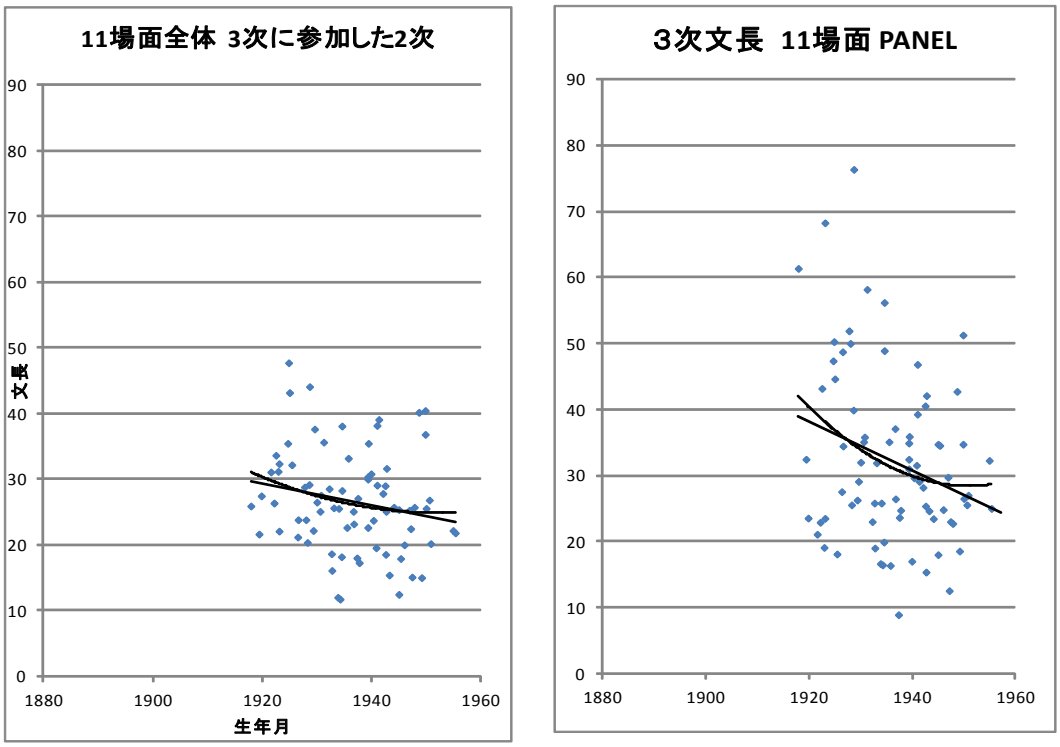


図 8 - 9c, d　岡崎調査の反応文の長さ　第 2 次パネル・第 3 次パネルの比較

（左 c）第 2 次調査の第 3 次パネル調査対象，（右 d）第 3 次調査のパネル話者

以上で，反応文が長くなるのは，岡崎の住民構成が変わった（よそものが増えたために，例えば道案内のときに詳しく説明するようになった）という理由ではないと推論できる．同じ人が 19 年後，36 年後に同じ中身を伝えるのに長く話すようになったことが示された．これこそ同一人物を追跡して行うパネル調査の価値である．実時間の差が分かるし，個人の経年変化，加齢変化が

実証できた．しかもかなりの（100 人前後の）人数の全体的傾向が個人別に把握できた．

以上図 8 - 9a, b, c, d で，「イコール変化」「川の字変化」の右下がり（左上がり）の線に着目して，岡崎敬語データから得られた 4 個のグラフを分析した．相互に補強しあう形で，敬語関連現象の成人後採用という一般傾向を示した．

6．第 1，2，3 次パネルの長さ　斜め表示技法

6.1. パネル調査の反応文の長さの斜め表示技法

以下では岡崎パネル調査（同一人物追跡調査データ）の新表示法について紹介する．前節で使った表示技法にさらに改良を加えて，全体の様子を把握しやすくした．一人の異なった時点の調査結果に複数の表示箇所を与えて，斜めの線で結んで，右上がりか右下がりかで増減を表示して，趨勢を探る手法を採用した．反応文の長さが長くなる傾向がきれいに示された．

前節では，第 1，2，3 次を通した結果を表示した．ここでは第 1 次と第 2 次の共通サンプル，第 2 次と第 3 次の共通サンプルに分けて，表示する．なお第 1，2，3 次を通して協力の得られた 20 人は，双方のサンプルにダブって表示される．前節で述べたことの繰り返しは，可能な限り避ける．

6.2. パネル調査表示の反応文の長さ　第 1，2，3 次全話者

以下ではパネルサンプル個人ごとの値の変化を考察する．まず第 1，2，3 次を通して協力の得られた 20 人について考察する．

図 8 - 10 に 3 回の調査を通して協力の得られた 20 人（ただし一人は第 1 次と第 3 次の協力）の反応文の長さを示す．本章図 8 - 8 の全パネルサンプルのうちから該当者を抜き出したグラフに相当する．図 8 - 8 では一人を 1 本の線で表し，調査次を 2，3 の数字によって示した．矢印のような効果があると期待したが，3 回の調査で増えたか減ったかははっきり見えず，減った人を探し出して，手動で実線を点線にした．この図 8 - 10 の場合は，人数が少ないので左右の余裕があり，一人に左から 3 つの位置を与えることができた．下端の凡例では分かりにくいので，一番左の人を例に説明する．話者 ID 番号 P（パネル）223 で，1919（大正 8）年生まれの M（男性）で，三つの◆は第 1 次，第 2 次，第 3 次における反応文の長さを示す．第 1 次から第 2 次にかけて少し短くなったが，第 3 次には 20 字台から 30 字台に 1.5 倍ほどに長くなった．このように 20 人すべての趨勢を個別に読み取ることができる．

話者の配列は，生年の順である．これまでと違って，生年実年代を散布図の技法によって忠実に示すという技法を採用していないので，1922 年前後生れの人が固まって，1930 年代前半生れ（戦時中の 10 代前半）の人が欠けていることは読み取れない．

しかしほぼすべての人が右上がりの線を描き，第 3 次で長く表現するようになったという動きは読み取れる．一部に中高型や凹型を示す人もいるが，モーラ数の違いは少ない．

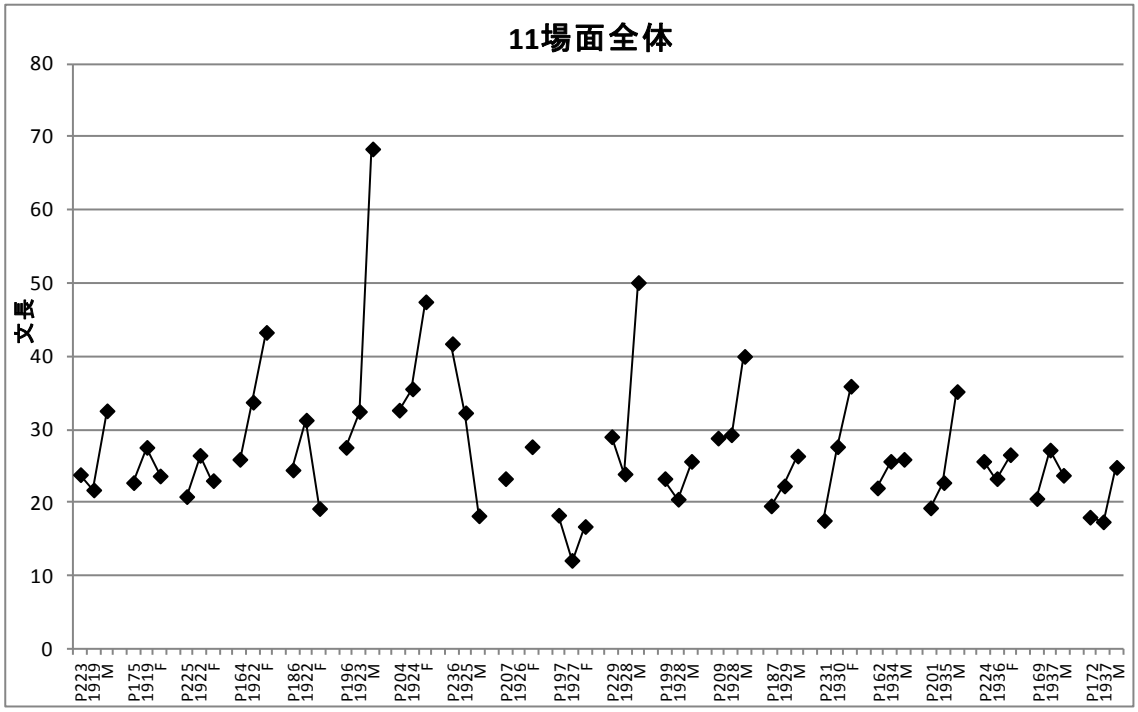


図 8 - 10　反応文の長さ　12 場面平均　第 1, 2, 3 次共通パネルサンプル

3 回の調査の 20 人；一人に第 1 次，第 2 次，第 3 次の三つの数値

3 回の調査を通じてデータの得られたまれな人々全体として，のちになるほど長くなるという傾向は，個人ごとに視覚的に確認された．ここで使った一人の値を調査次ごとに左右にずらして表示する技法は，他にも応用できる．横軸に生年実年代を使って，より忠実に表示することも可能である．

6.3. パネル調査表示の技法解説

第 1，2 次追跡調査と第 2，3 次追跡調査の結果を，図 8 - 11 以下に散布図の技法により個人ごとに提示する．これまでと同様に，縦軸は反応文の長さをモーラ数で示す．横軸は話者の生年実年代を示す．月まで考慮することにより，全員を判別できた．横軸上の位置は，各グラフの早いほうの調査次（第 1，2 次追跡調査の第 1 次，第 2，3 次追跡調査の第 2 次）の値は話者の生年実年代で示し，遅いほうの調査次の値はそれに 1 を足した値で示した．つまり，遅いほうの調査次の値は右に 1 年分ずらして表示した．これにより，反応文の長さが増えた場合は右上がりの線に見え，減った場合は右下がりの線に見える．前項では，減少の人を目で探して，線を手作業で点線に変えたが，手間がかかるし，実線と点線の違いも，目立たなかった．その欠陥がなくなったことになる．

第 1 次から第 3 次までの調査次を数字のラベルで示した．ただし第 1，2 次の追跡サンプルの第 1 次の数字は省いた．また第 2，3 次の追跡サンプルの第 2 次の数字は省いた．これにより，

線を矢印のように読み取ることができる．実例をもとに読み取り方を説明する．

図 8 - 11 の左端は 1887 年生れの人で，第 1 次調査では平均 32 モーラで答えたが，第 2 次調査では 31 モーラで答え，わずかに短くなった．図 8 - 11 では例外的な人である．図 8 - 12 の左端は 1918 年生れの人で，第 2 次調査では 27 モーラで答えたが，第 3 次調査では 61 モーラとかなり長く答えた．図 8 - 12 では平均的な行動である．

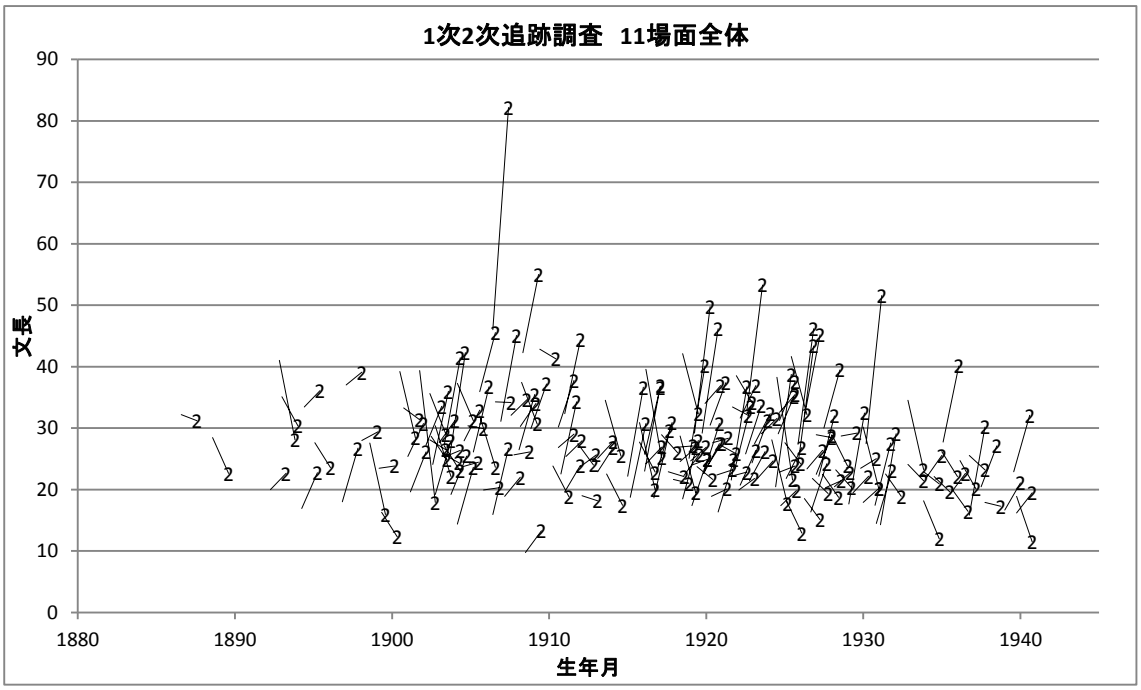


図 8-11　　第 1，2 次追跡調査　12 場面全体

横軸で，第 1 次の値は話者の生年実年代で示し，第 2 次の値は右に 1 年分ずらした

6.4. パネル調査の反応文の長さ　第 1，2 次話者と第 2，3 次話者

図 8-11 は，第 1 次調査全員のうち第 2 次のパネル調査の対象になった話者と，第 2 次調査のパネル話者を線でつないだデータである．第 1，2 次追跡調査の 12 場面全体のパターンを全場面の平均値で示す．大部分の個人の線は右上がりである．つまり第 2 次調査全体で反応文が長くなった．中でも長いのは中年層で，高年層と若年層は短い．後の追跡調査で確かに同じ人の反応文が長くなる．中間世代の人は，反応文がさらに長くなる傾向があるらしい．右下がりの例外的な線は 1900 年以前生まれの人と 1920 年以後生まれの人（第 1 次調査ですでに高齢だった人と若かった人）に多い．

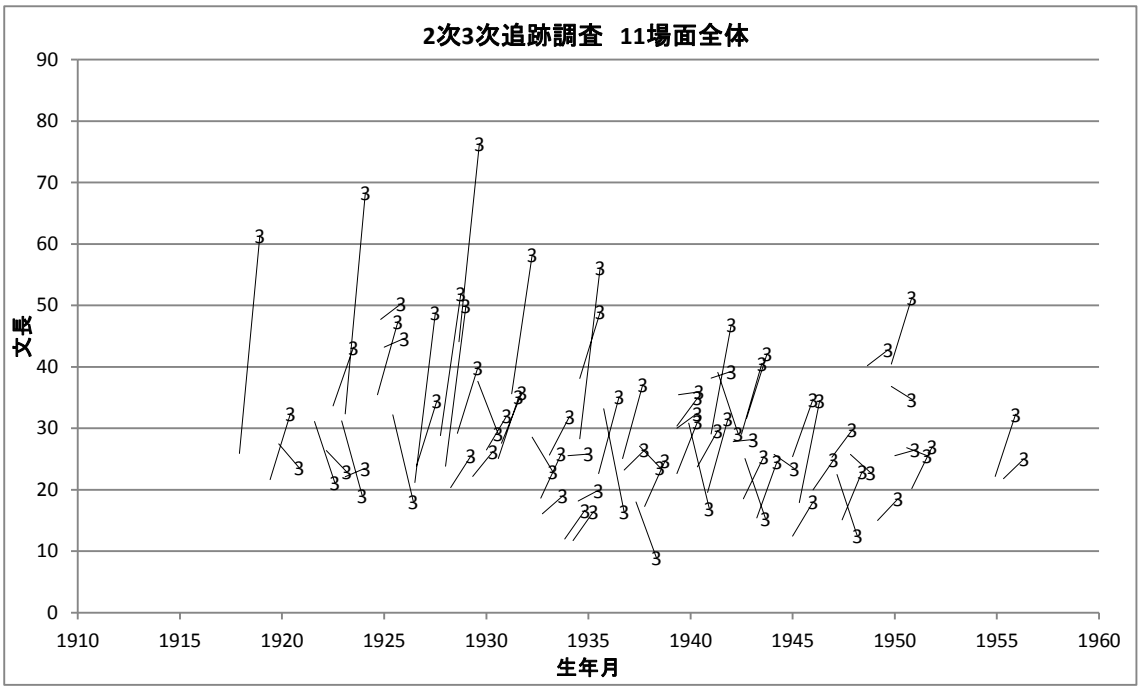


図 8-12　　第 2，3 次追跡調査　12 場面全体

横軸で，第 2 次の値は話者の生年実年代で示し，第 3 次の値は右に 1 年分ずらした

図 8-12 は，第 2 次調査全員のうち第 3 次のパネル調査の対象になった話者と，第 3 次調査のパネル話者のデータである．第 1 次から第 3 次まで参加している 20 人は図 8-11 のグラフと重複して図化されている．36 年へだてた追跡調査なので，人数が少なく，しかも第 3 次調査では 50 代以降に限られる．ここでも右上がりの線が目立ち，後の調査で反応文が長くなる傾向が見られる．老年層が長く，また若年層もやや長い．右下がりの個人は少ない．第 2 次と比べて全体として反応文が長くなっている．成人後採用が，個人の加齢変化としても認められた．

6.5. パネル調査の反応文の長さ　第 1，2 次，第 2，3 次の男女差

性差をみよう．図 8-13，図 8-14 で，第 1，2 次調査を男女に分けて 2 枚で表示する．上下を比べると下の図 8-14 の女性のほうが長い．女性が長く話すというステレオタイプを補強する．また線の向きを見ると，図 8-13 でも，図 8-14 でも右上がりが圧倒的に多い．第 1 次よりも第 2 次で，長くなっていることを，個人個人の加齢変化として，目で確かめられる．ちなみに女性のほうが 1900 年以前生れの高齢者が多い．

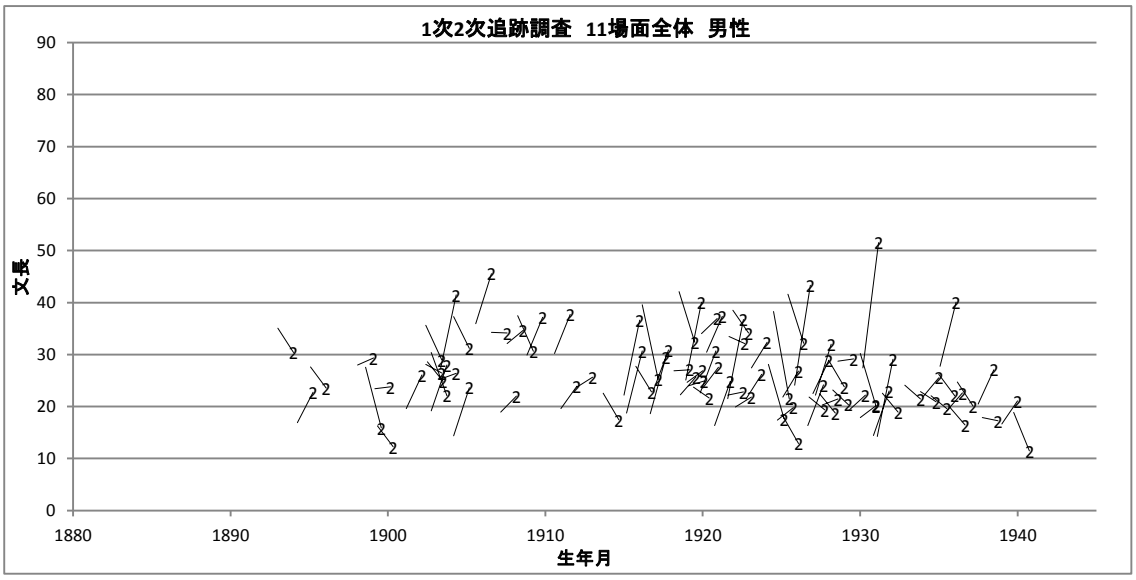


図 8-13　　第 1，2 次追跡調査　11 場面全体　男性

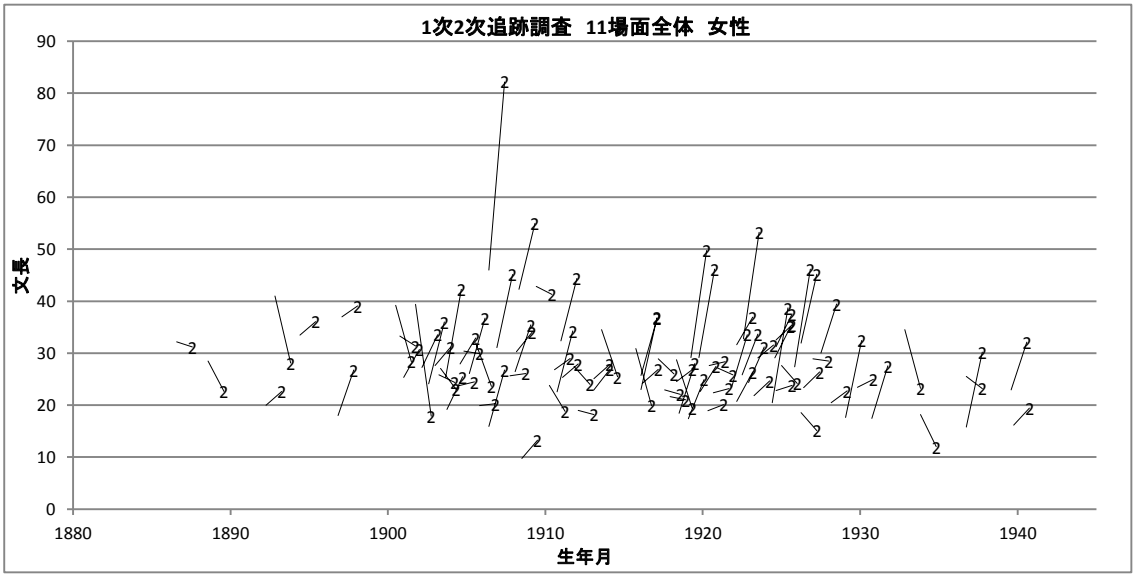


図 8-14　　第 1，2 次追跡調査　11 場面全体　女性

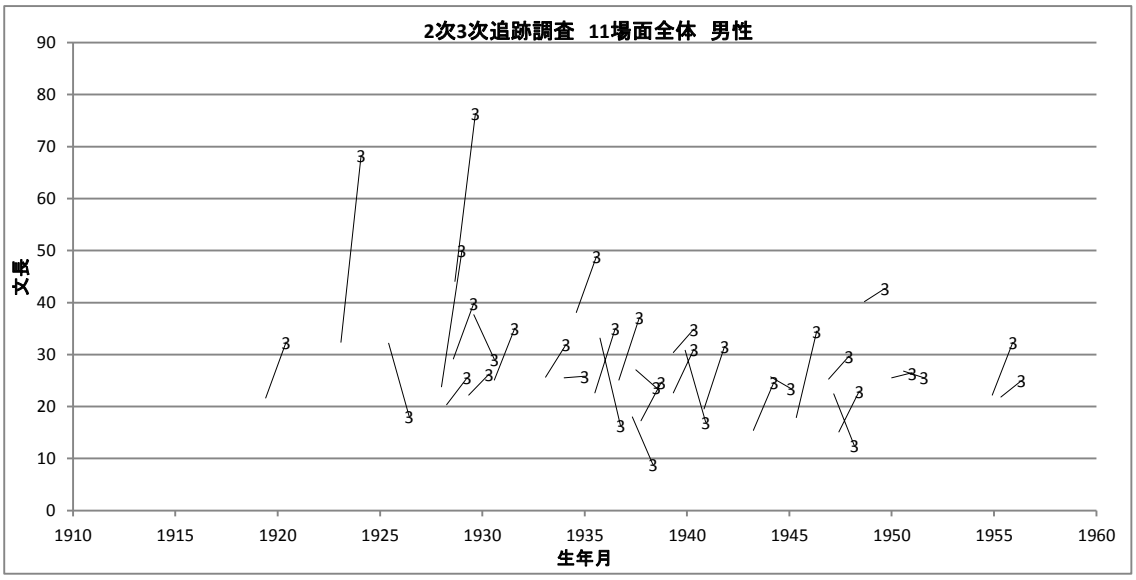


図 8-15　　第 2，3 次追跡調査　12 場面全体　男性

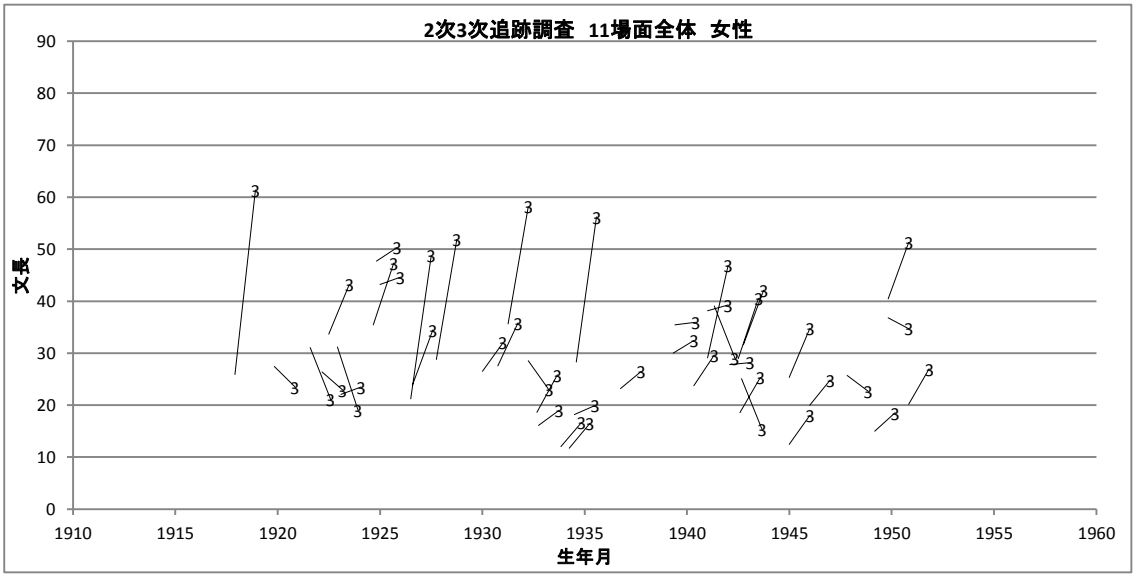


図 8-16　　第 2，3 次追跡調査　12 場面全体　女性

図 8-15，図 8-16 で，同じく第 2，3 次調査の男女に分けて 2 枚で表示する．人数が少ないので用心すべきだが，上図 8-15 のグラフの男性は個人差が大きく，高年層には顕著に長くなった人がいるが，短くなった人が散発的に見つかる．下図 8-16 のグラフの女性は，高年層の数人を除いてほぼ全員がそろって長くなっている．男女ともに加齢変化は 1935 年以前生れの高年層に際立つ．

以上の散布図により，図 8-5 の男女別平均値の推移で見られた成人後採用の傾向を，個人レベルまでさかのぼって視覚化して確認できた．

7. パネル調査結果 12 項目個別の長さ

7.1. 項目別回答反応文の長さ　パネルデータ全体像

101 道教え　　102 振込用紙　103 荷物預け

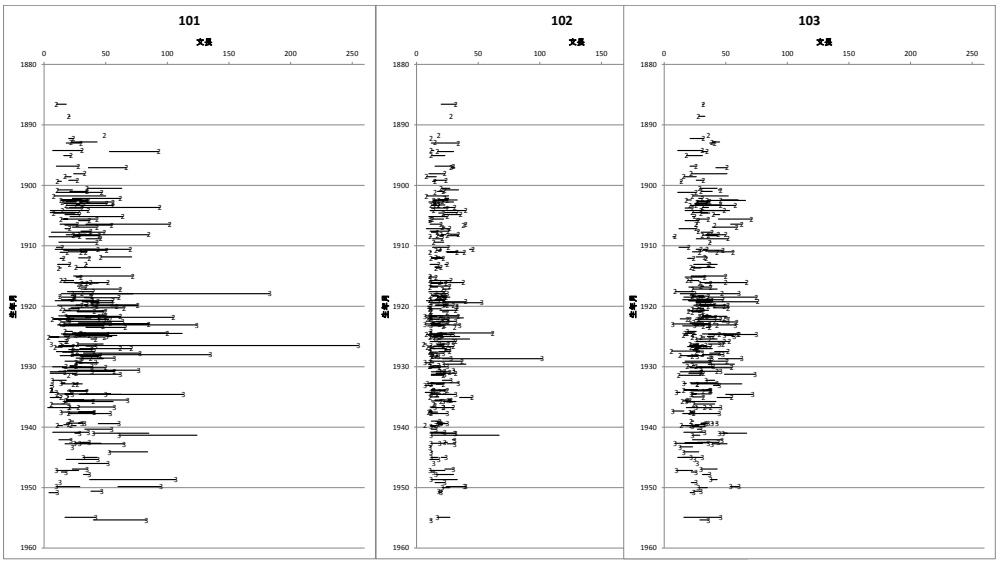


図 8-17a　反応文の長さ　12 項目全体（パネルサンプル　全員）

104 傘忘れ　105 先生　106 新聞代　107 議事堂

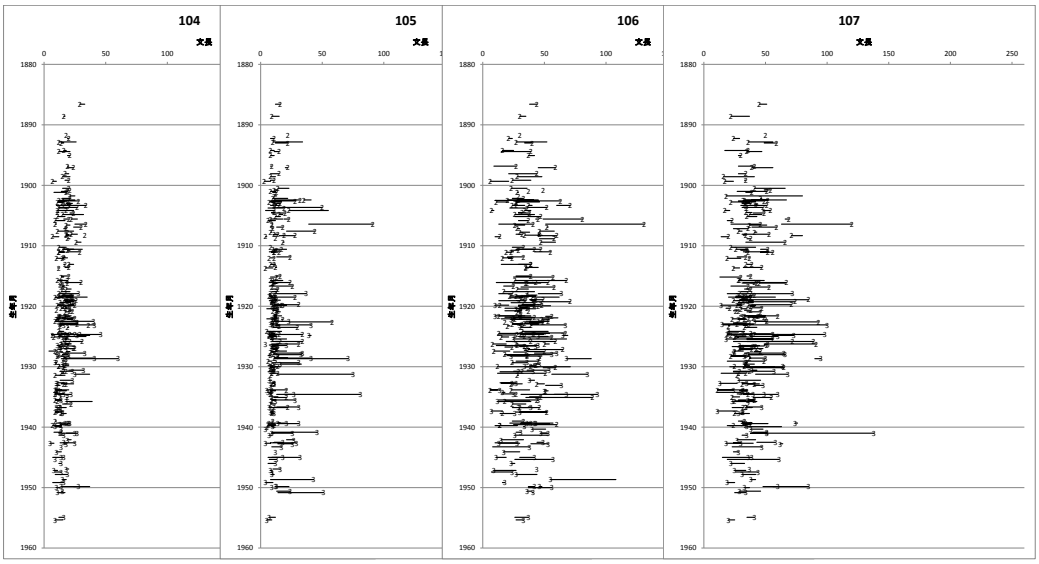


図 8-17b　反応文の長さ　12 項目全体（パネルサンプル　全員）

108 医者　109 席譲られ　110 おつり　111 傘貸し

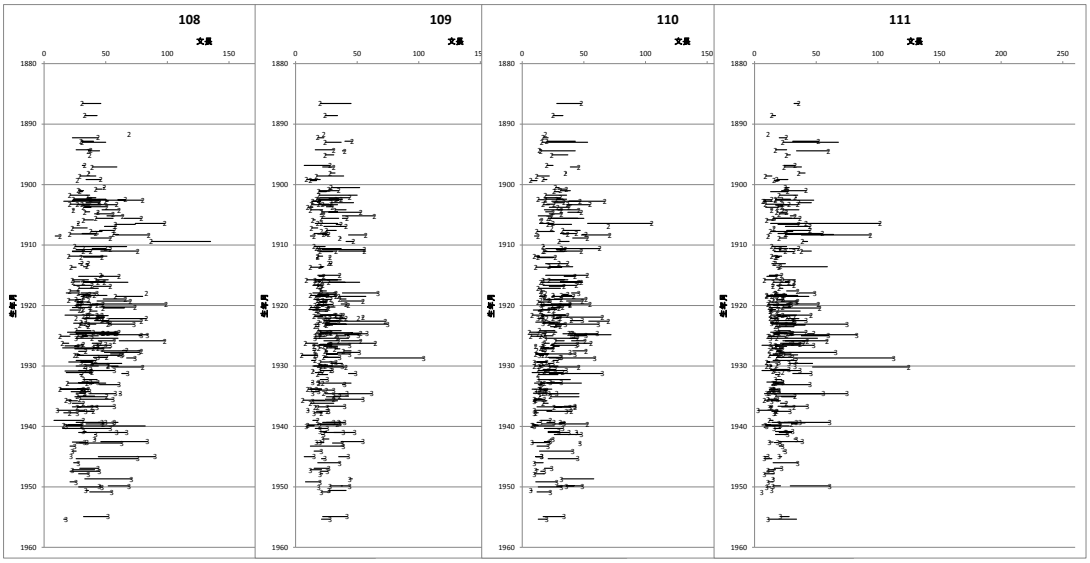


図 8-17c　反応文の長さ　12 項目全体（パネルサンプル　全員）

ここではパネルデータの各項目による違いをグラフ化して考察する．まず初期に分析した全 12 項目を，図 8-17a ，b，c に 3～4 枚並べて相互に比較する．

確かに 101 道教え項目で顕著に長くなった．また議事堂，傘貸しなどでも長くなった．しかし全項目で長くなる現象が観察された．これにより，よそものの影響などでなく，ほぼ全項目にかかわる言語的要因が，長さの増加に働いていると考えられる．

7.2. 項目別反応文の長さ　パネルデータ個別

以下図 8-18～では，12 項目それぞれに分けた散布図を提示する．以下の図は 2 グループに分かれる．第 1，2 次の共通サンプル，第 2，3 次の共通サンプルに分けて，ペアとして上下に表示する．図 8-18～の上 a 系列は第 1 次から第 2 次までの追跡パネルサンプル，図 8-18～の下 b 系列は第 2 次から第 3 次までの追跡パネルサンプルである．線の角度（右上がりが否か）と，矢印に代わる 2，3 の数字とで，長くなったかどうかの判別をする．

101 **道教え**

図 8-18-1a, b の 2 枚は，調査票冒頭の調査員相手を想定しての道教えの場面で，図 8-2 でも分かるように，回答の長い場面である．上の図 8-18-1a で第 1 次よりも第 2 次で，ほぼ全員が長くなっている．下の図 8-18-1b では，第 3 次で際立って長い人が増えた．よそから来た人のために具体的に道を説明する人が増えた可能性もある．しかし短くなった人もわずかにいる．全体としては長くなる傾向が明瞭に現れた. 図 8-2 の場面ごとのランダムデータの平均モーラ数でみても，著しい増加が見られるので，岡崎全体の動きを反映していると考えていい．

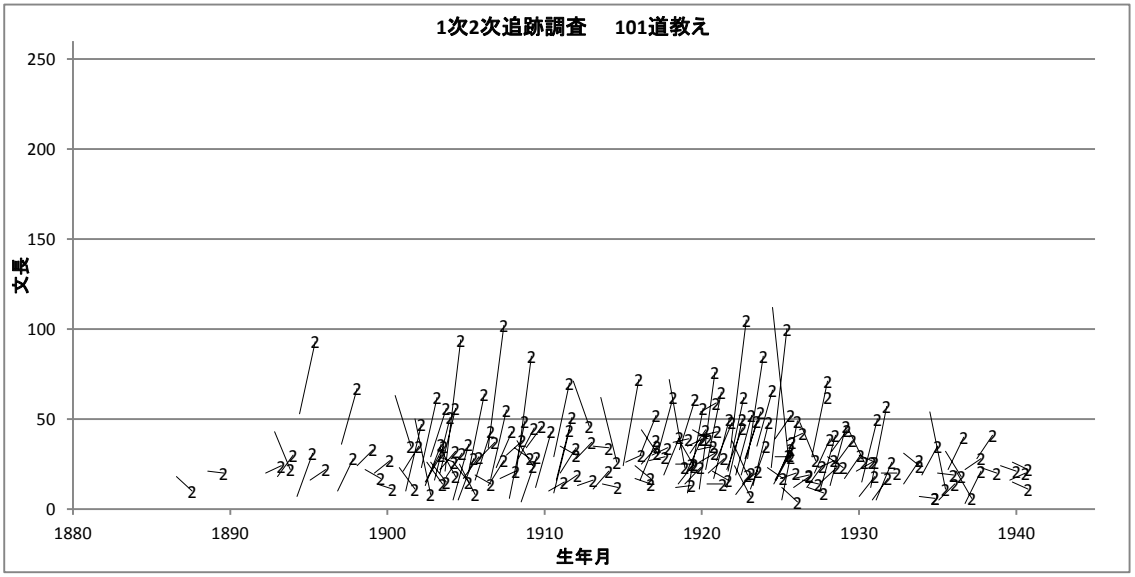


図 8-18-1a　　第 1，2 次追跡調査　　101 道教え

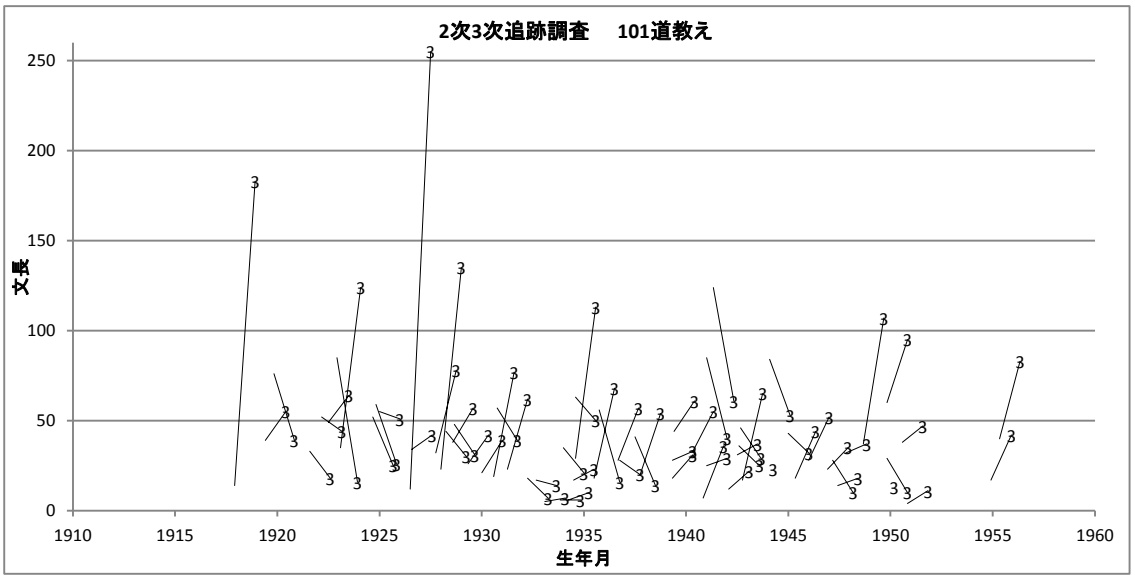


図 8-18-1b　　第 2，3 次追跡調査　　101 道教え

102 電報振込

図 8-18-2a，全体としてそもそも短く，簡潔な言い方である．しかし長く言う人が増えた．図 8-18-2b，第 2 次から第 3 次にかけて長くなっている理由としては，場面が電報用紙から振込用紙に変わったこともあるだろう．また時勢が変わってこの場面での依頼行動が変わったことも考えられる．

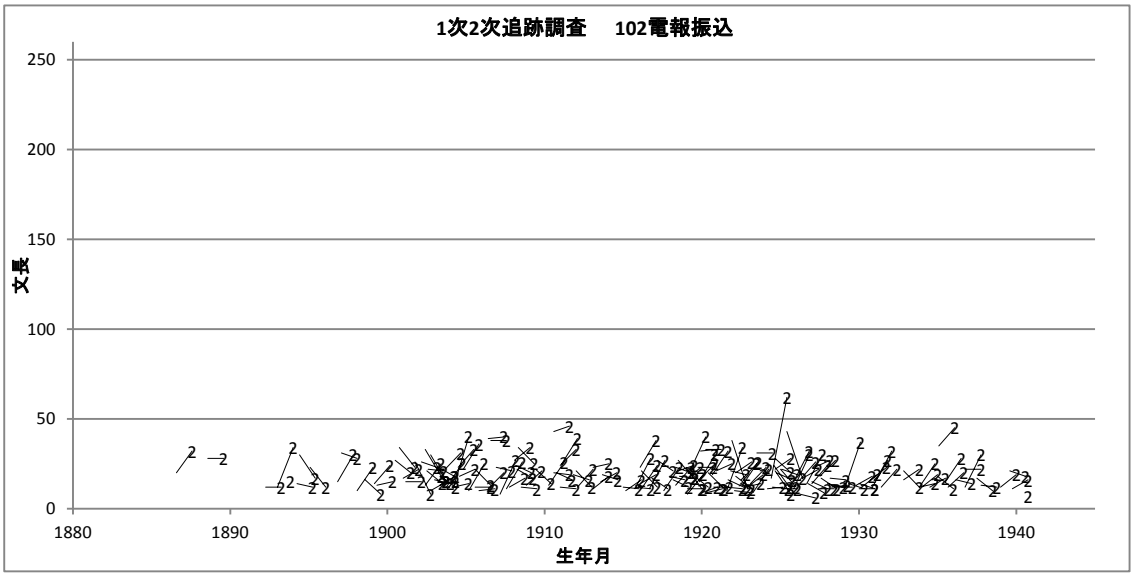


図 8-18-2a　　第 1，2 次追跡調査　　102 電報振込

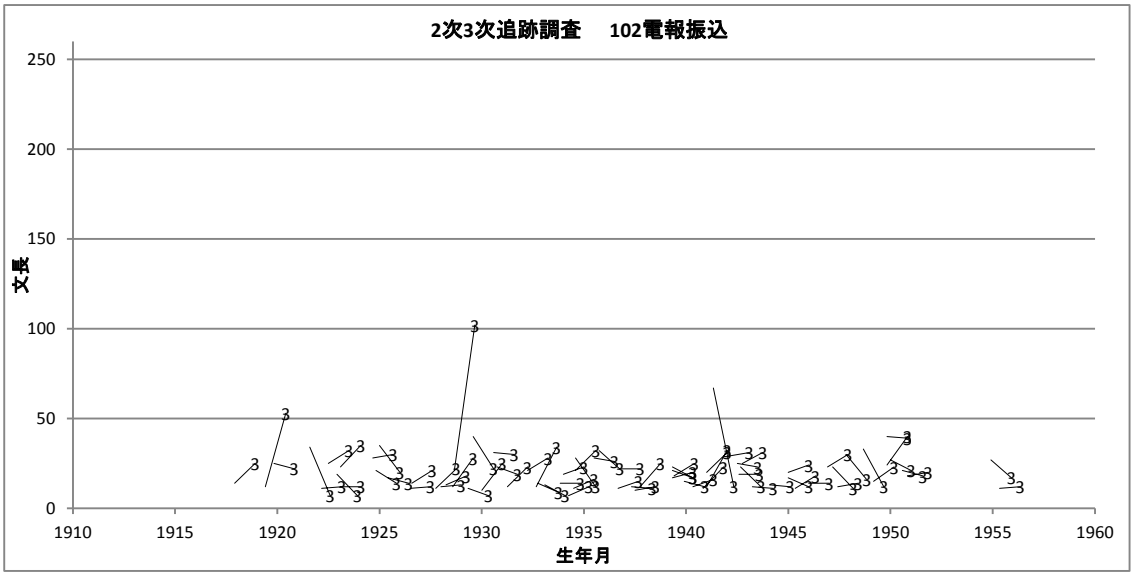


図 8-18-2b　　第 2，3 次追跡調査　　102 電報振込

103 荷物預け

図 8-18-3a，のちの調査で長く言う人が増えたが，依頼行動の典型として期待したよりも，長くなっていない. 昔に比べて荷物を預けるという行動が少なくなり, 負担度が増したと考えたが, そう長くない．第 2 章によれば「ていただく」のような具体的な言語表現の使用が増えたが，談話として様々なことを長く話して相手の理解を求めるわけではなさそうである.

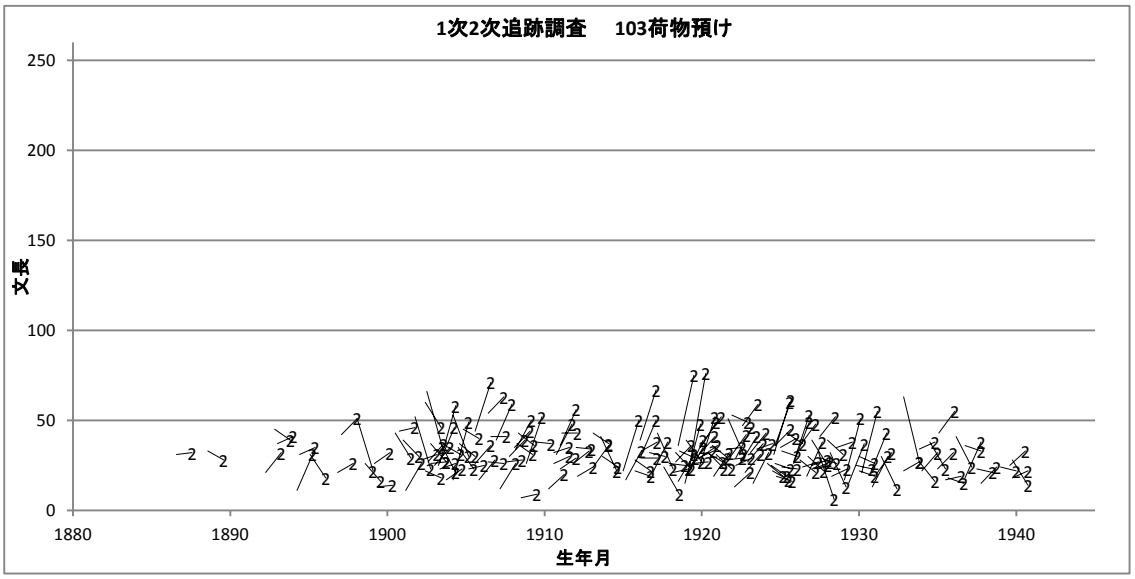


図 8-18-3a　　第 1，2 次追跡調査　　103 荷物預け

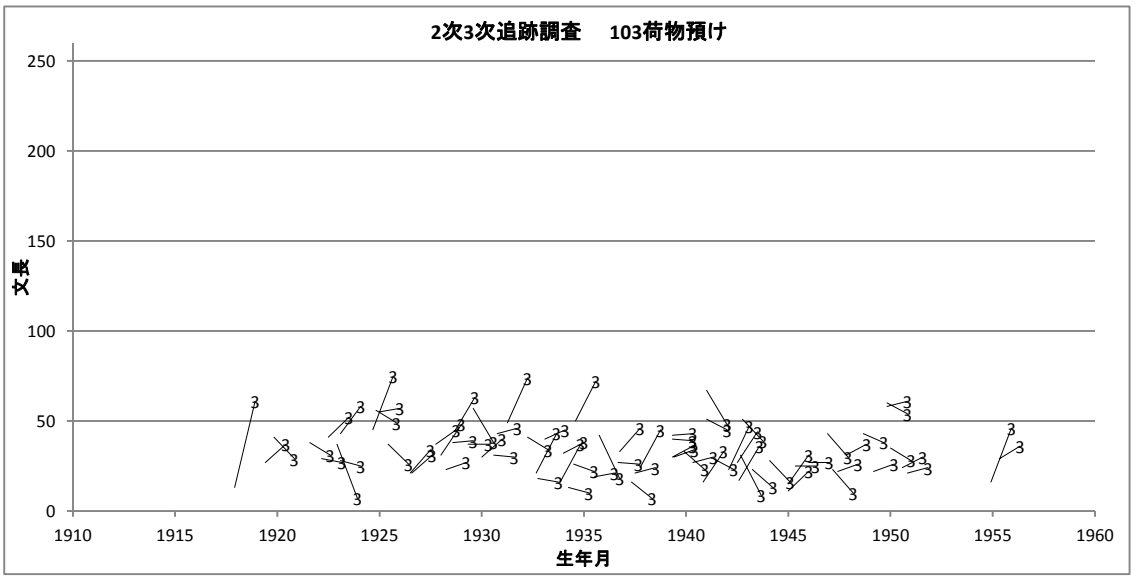


図 8-18-3b　　第 2，3 次追跡調査　　103 荷物預け

104 傘忘れ

図 8-18-4a，b は，傘を忘れた人に声をかけるだけの場面である．単純な声がけですみそうな場面だが，昔に比べて長くなった．予期したよりも長くなっている．

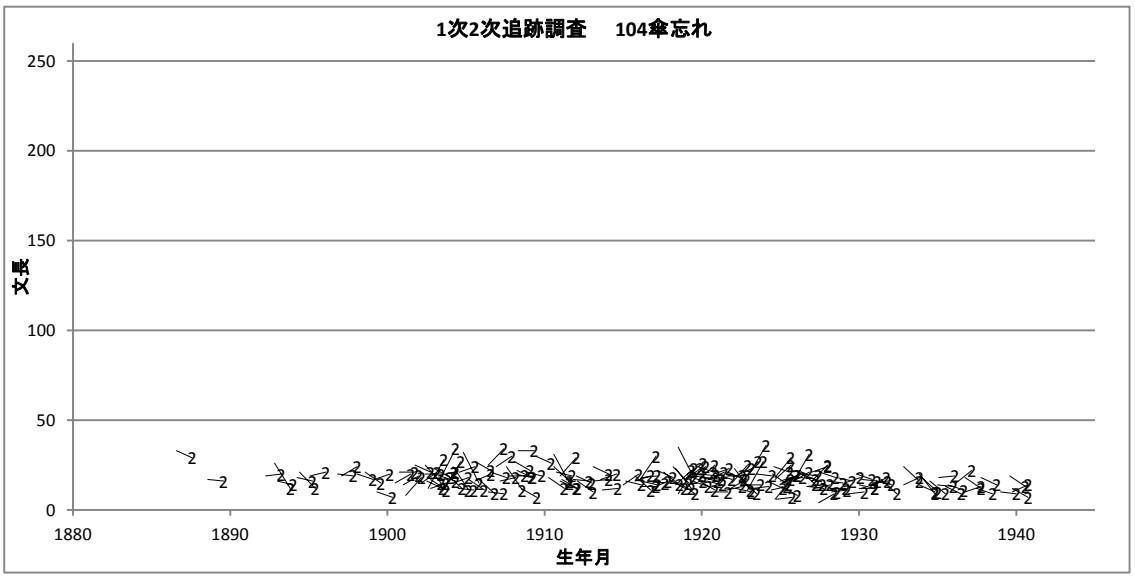


図 8-18-4a　　第 1，2 次追跡調査　　104 傘忘れ

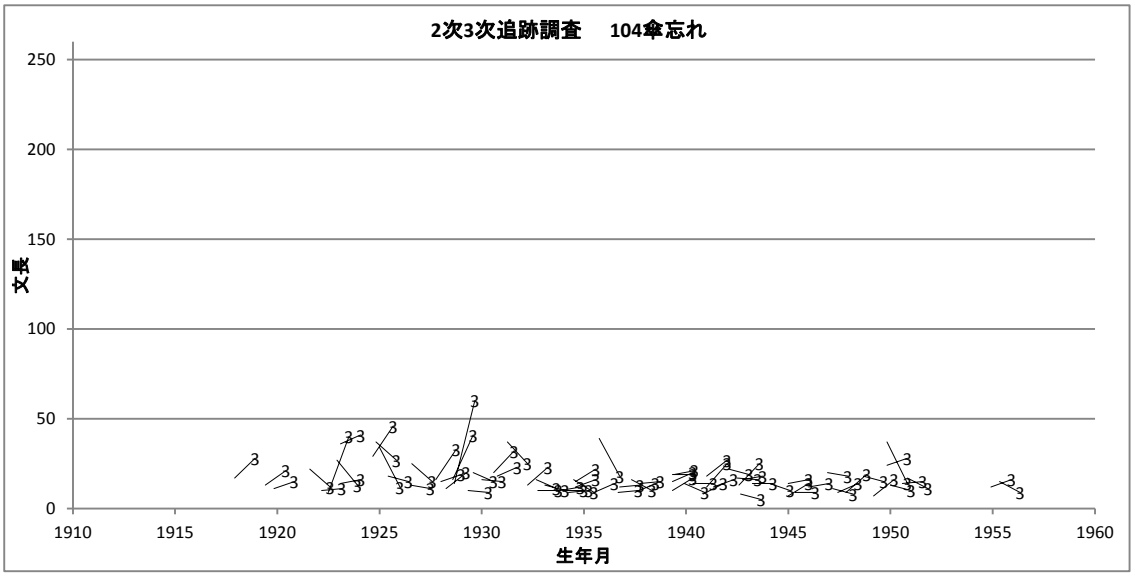


図 8-18-4b　　第 2，3 次追跡調査　　104 傘忘れ

105 先生

図 8-18-5a，b は，かつての受け持ちの先生に同伴の家族を紹介する場面である．図 8-18-5a 第 1 次と第 2 次では短い表現が多く，しかも高年層の増加をのぞくと，ほとんどの人は短くて，変化も見られない．図 8-18-5b 第 2 次から第 3 次にかけては，大幅に長くなっている．個人差があるが，昔に比べて先生に対して長く説明する人が多くなったわけである．

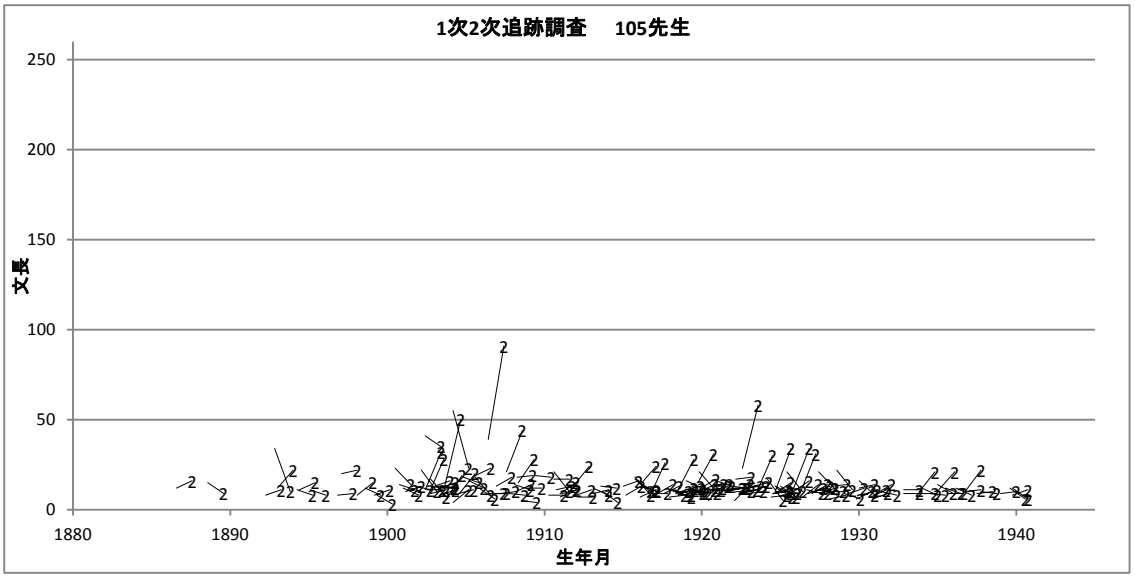


図 8-18-5a　　第 1，2 次追跡調査　　105 先生

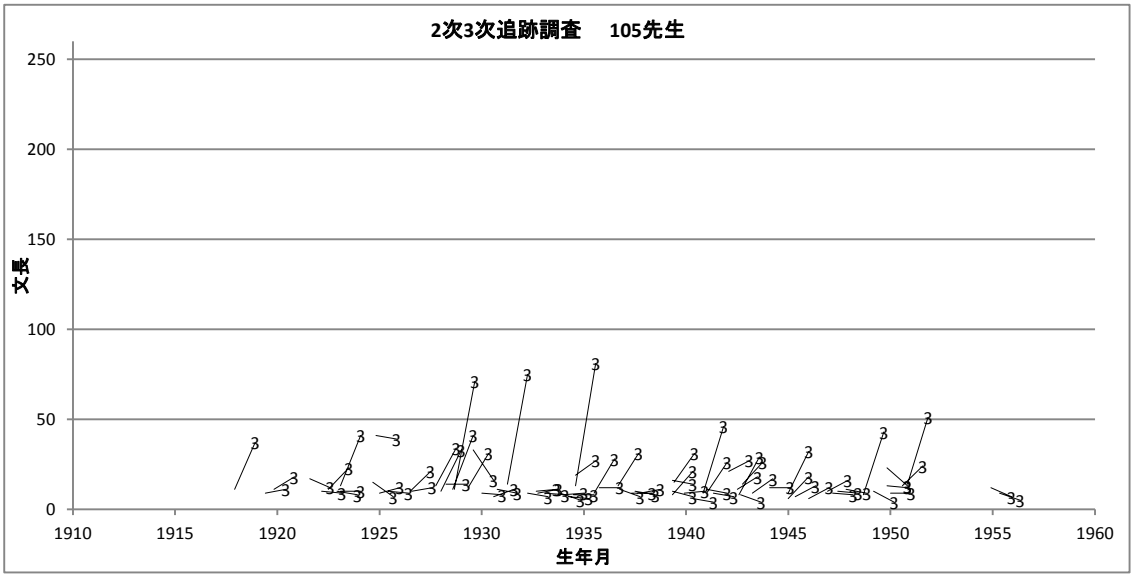


図 8-18-5b　　第 2，3 次追跡調査　　105 先生

106 電灯新聞

電灯代，新聞代の二重請求については，個人差が大きい．図 8-18-6a 第 1 次から第 2 次にかけて特に長くなった人がいる．一方図 8-18-6b 第 2 次から第 3 次にかけては短くなった人もいる．電灯代と新聞代で事情が違うし，自動振り込みやコンピュータ処理が普及して調べやすいなどの社会的事情が働いたことも考えられる．

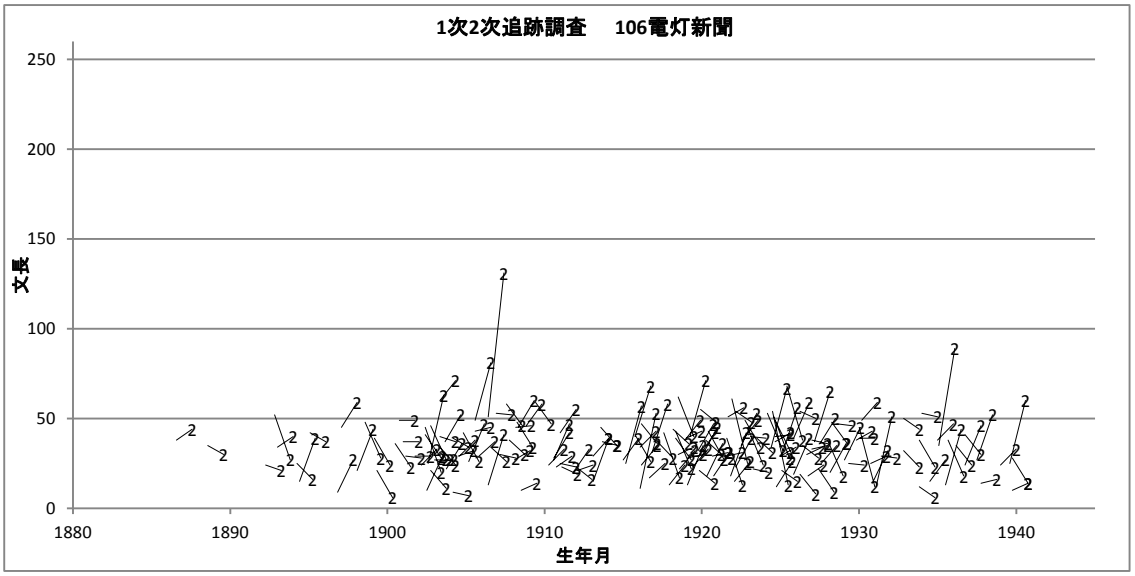


図 8-18-6a　　第 1，2 次追跡調査　　106 電灯新聞

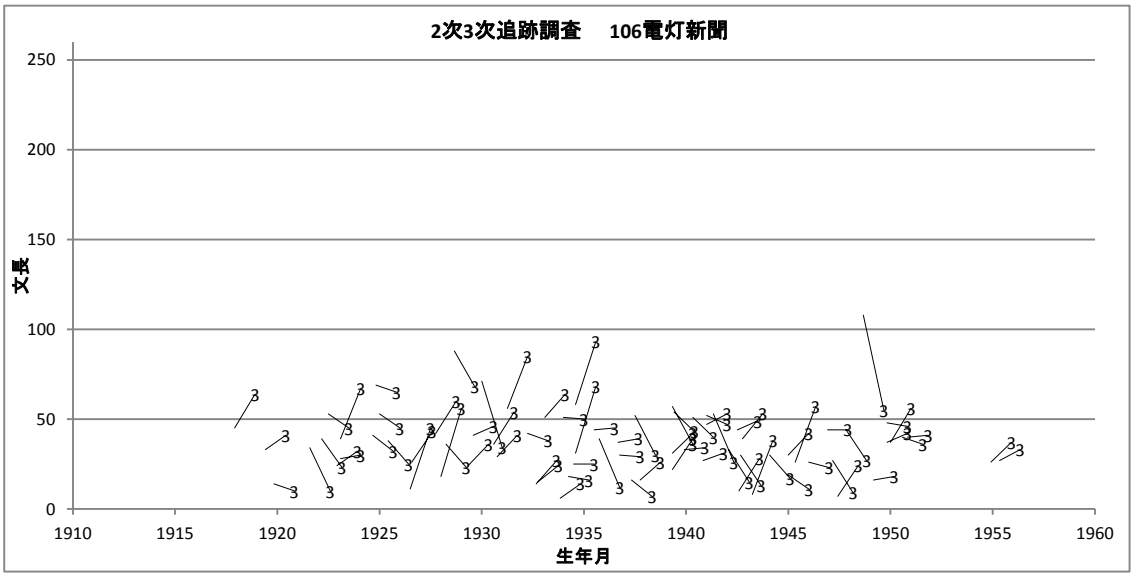


図 8-18-6b　　第 2，3 次追跡調査　　106 電灯新聞

107 議事堂

唯一東京での場面である．道を聞くなら短くてもよさそうだが，予期したよりも長い．単純な道聞きの質問ですみそうな場面だが，昔に比べて長くなった．田舎から出てきたとか，困っているなどと（余分な？）説明を加える人がいるためもある．個人差でなく地域差の反映かも知れない．しかも図 8-18-7a 第 1 次から第 2 次にかけても，図 8-18-7b 第 2 次から第 3 次にかけても長くなっている．図 8-2 の場面ごとのランダムデータの平均モーラ数でみても，増加傾向が見られるので，岡崎全体の動きを反映していると考えていい．

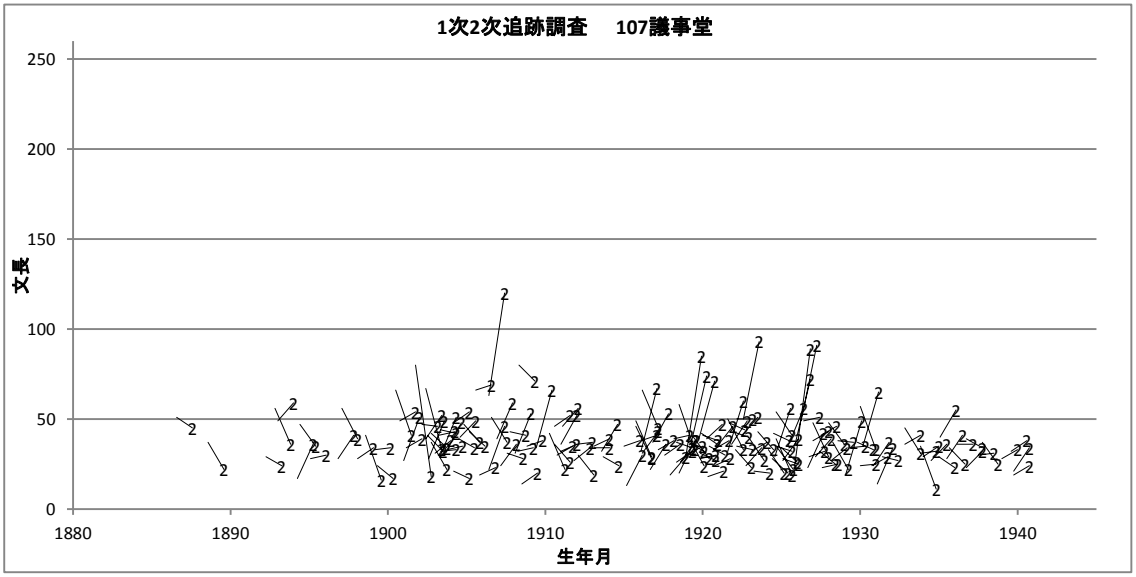


図 8-18-7a　　第 1，2 次追跡調査　　107 議事堂

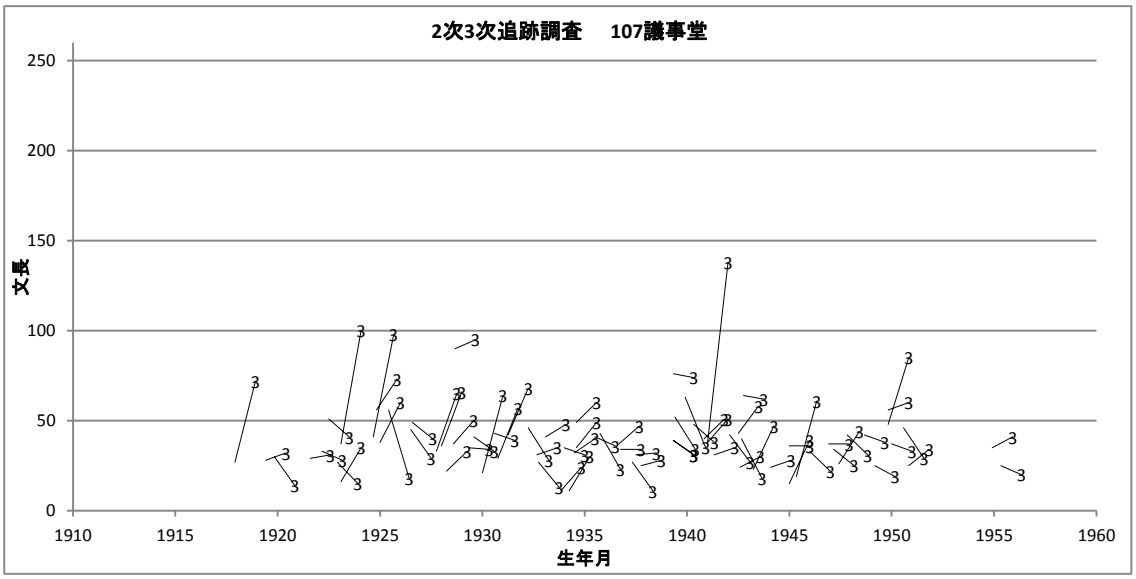


図 8-18-7b　　第 2，3 次追跡調査　　107 議事堂

108 医者

図 8-18-8a, b 医者への往診依頼場面で，ポライトネス理論でいう相手の負担度からいうと大きい．全体としては他の場面よりも長い．しかし予期したよりも長くなっていない．昔に比べて往診という行動が少なくなり，負担度が増したと考えたが，そう長くならない．むしろ短くなった人が目立つ．「ていただく」のような具体的な表現の使用が増えたが，談話として様々なことを話して相手の理解を求めるわけではなさそうである．

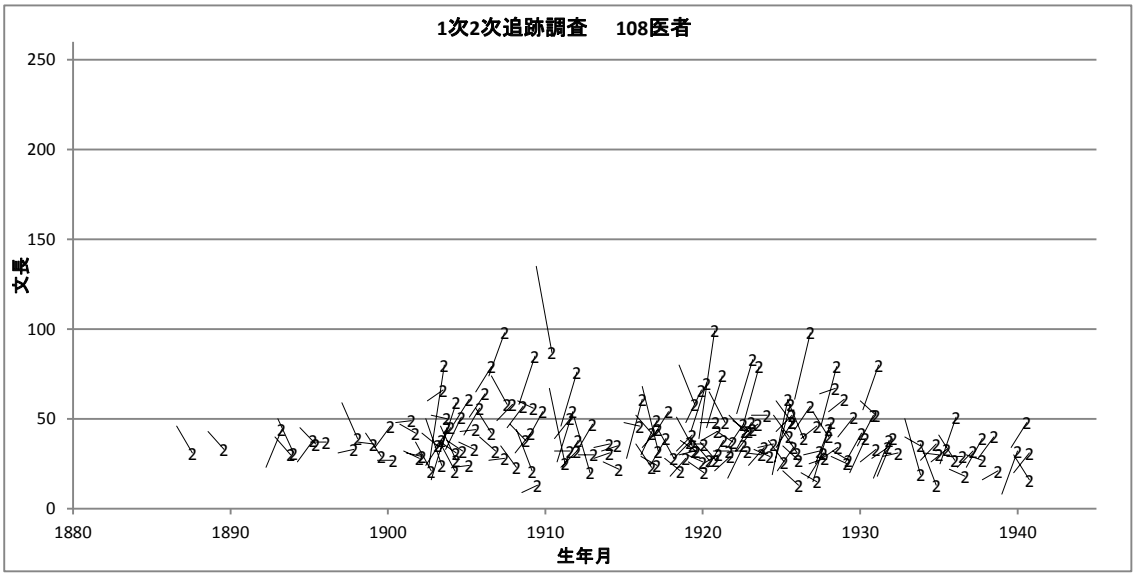


図 8-18-8a　　第 1，2 次追跡調査　　108 医者

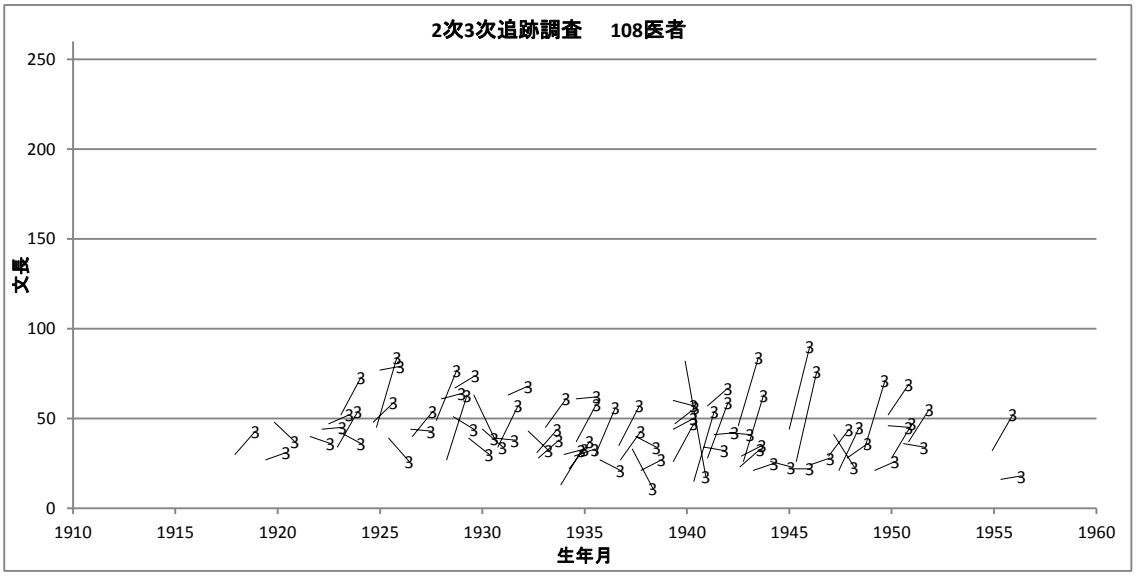


図 8-18-8b　　第 2，3 次追跡調査　　108 医者

109 席譲られ

乗り物の中で席を譲られたときの言い方だが，他の場面よりは長いほうである．図 8-18-9a 第 1 次から第 2 次にかけて，予期したよりも長くなっている．単純なお礼のことばですみそうな場面だが，昔に比べて，長くなった．特に図 8-18-9b 第 3 次で長く話す人が目立つ．

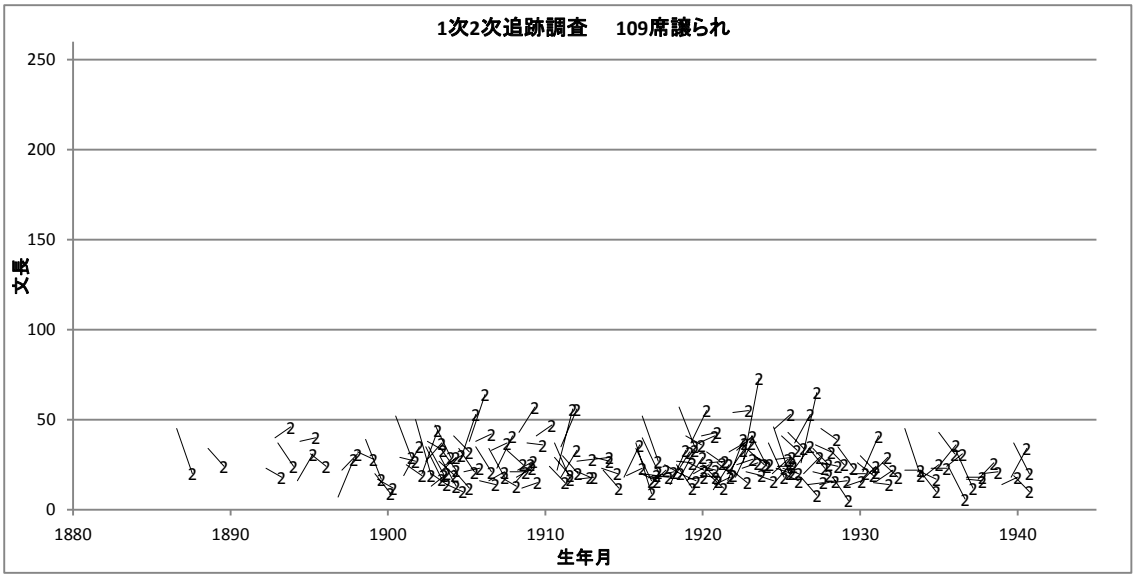


図 8-18-9a　　第 1，2 次追跡調査　　109 席譲られ

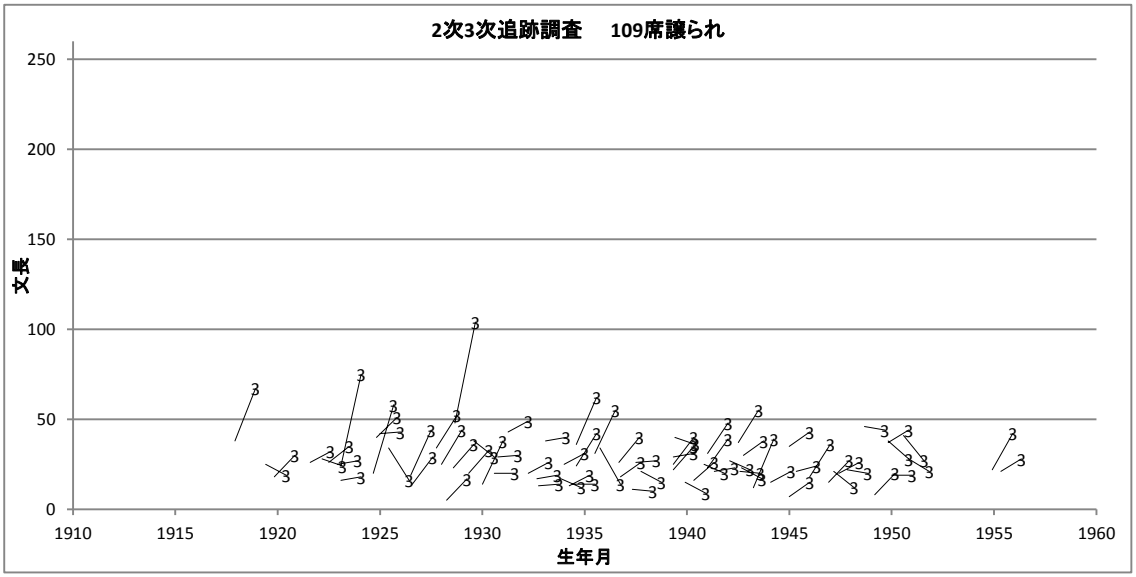


図 8-18-9b　　第 2，3 次追跡調査　　109 席譲られ

110 おつり

お釣りの額の間違いを指摘する場面である．個人差が大きい．個別に見ると，図 8-18-10a 第 1 次から第 2 次にかけてむしろ短くなった人が目立つ．図 8-2 の場面ごとのランダムデータの平均モーラ数でみても，減少傾向が見られるので，岡崎全体の動きを反映していると考えていい．なぜこの場面で長くなる変化が見られないのか，考える必要がある．

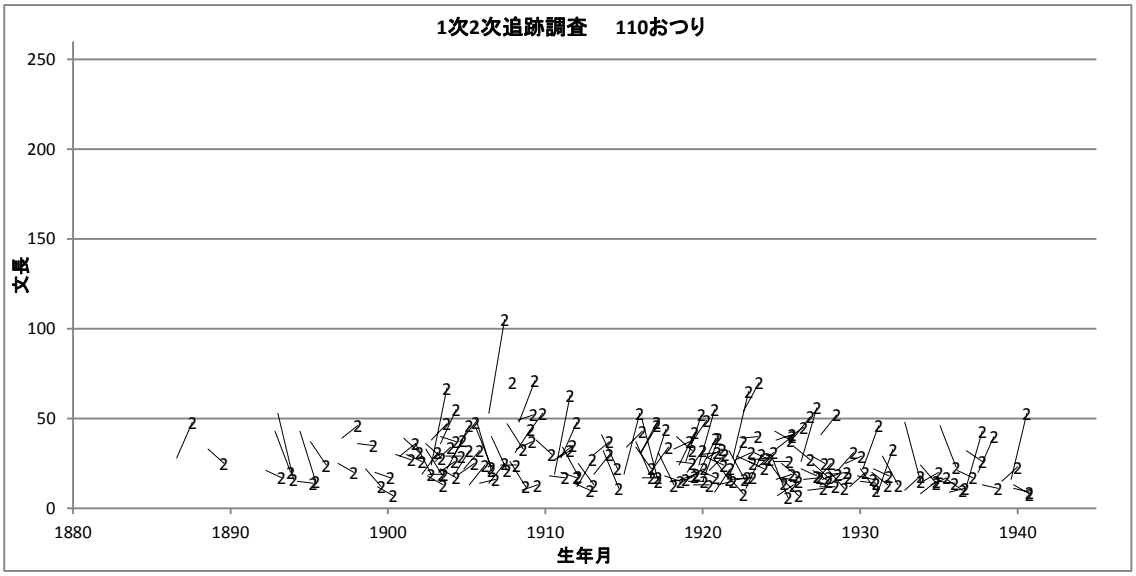


図 8-18-10a　　第 1，2 次追跡調査　　110 おつり

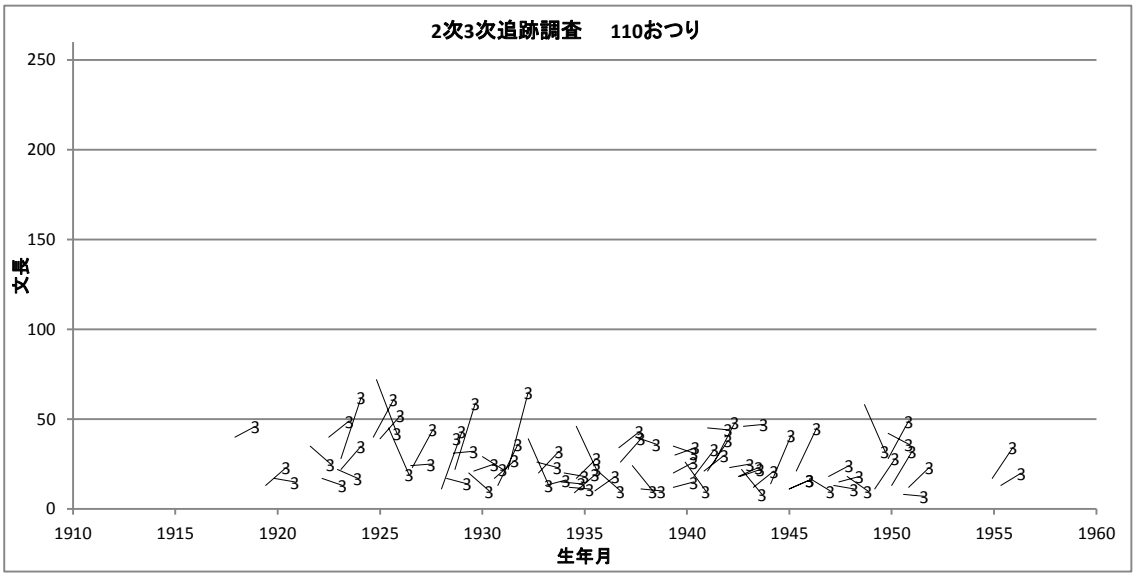


図 8-18-10b　　第 2，3 次追跡調査　　110 おつり

111 傘貸し

図 8-18-11a 第 1 次では短かったが，第 2 次にかけて，予期したよりも長くなっている．図 8-18-11b，第 3 次でも長い人が目立つ．個人差があるが，昔に比べて長く説明する人が多くなった．傘を貸すにも談話として様々なことを話して相手の理解を求めることが多くなったのか．昔に比べて傘が安くなり，家にたくさんある状況なのに，貸すときのことば数は増えたわけである．西尾（2015）は，相手の領域に踏み込んだ表現をしないことが影響すると，分析している．

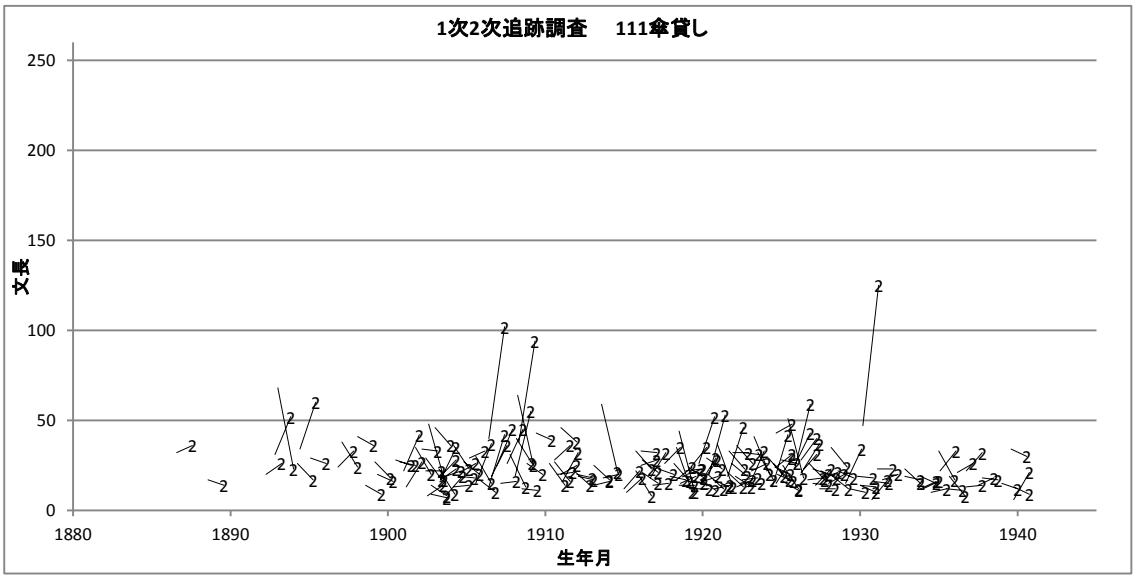


図 8-18-11a　　第 1，2 次追跡調査　　111 傘貸し

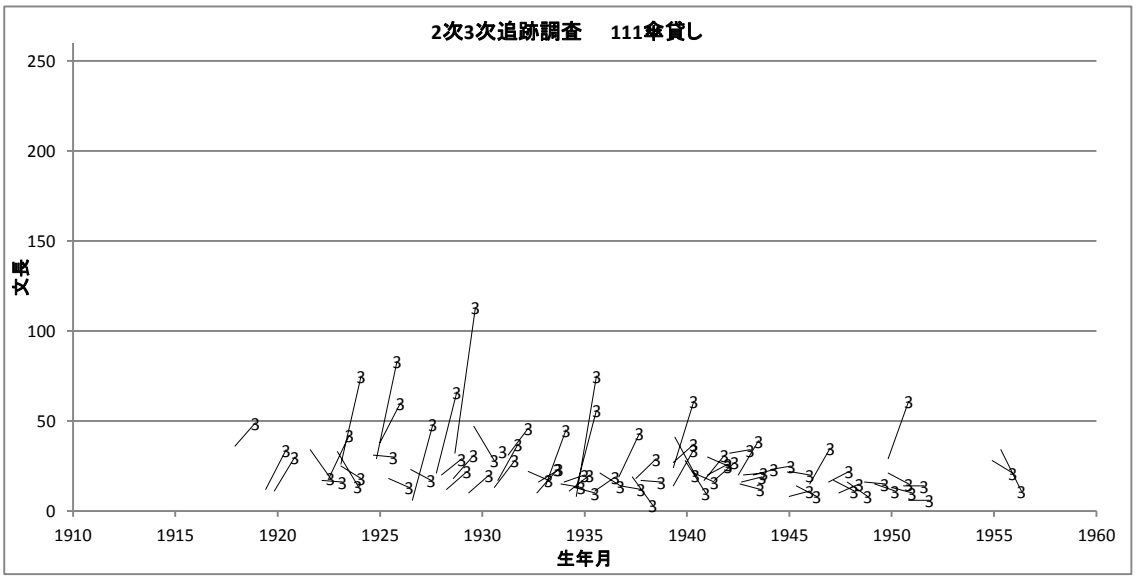


図 8-18-11b　　第 2，3 次追跡調査　　111 傘貸し

8. 岡崎パネル調査（追跡調査）の成果

以上のパネル調査（同一人物追跡調査）で，同じ人が 19 年後，36 年後に同じ中身を伝えるのに長く話すようになったことが示された．文が長くなるのは，岡崎の住民構成が変わった（よそものが増えた）という理由ではないと推論できる．これこそ同一人物を追跡して行うパネル調査の価値である．実時間の差が分かるし，個人の経年変化，加齢変化が実証できた．しかも 100 人前後の全体的傾向が把握できた．

この章では，パネルサンプルにおける 3 次にわたる調査の変化を考察するために，従来の平均値を計算する手法などに代えて，個人の数値を散布図で表現する技法を適用した．反応文が長くなるという経年変化が再確認できた．世の中の状況が変わったために長く話す必要が生じた可能性もあり，言語的に長くなる表現が普及したためもある．また対人配慮のための要素が多く使われるようになったとも考えられる．さらに加齢によって長話をするようになったこともありうる．これらの要因の一部の可能性についてはすでに論じた．他の可能性については，さらに具体的データの分析を通じて解明を目指す．

加齢変化には様々なものがありうる．敬語の成人後採用はそのうちの 1 種にすぎない． 1 個人の個人語 idiolect の変化にあたるもので，一部の人については，長年の著作・日記などの追跡や異なった時期の録音録画資料によって，書きことば，話しことばの変化を確認できる．また「記憶時間」を利用して（井上 2015），本人の記憶・思い出を内省してもらうことにより，著作や録音のない普通の人の生涯変化も研究できる．ただしまったく同一条件での比較というのは困難である．年齢という「見かけ（の）時間」，（繰り返し）調査時点による「実時間」以外にも，現代の言語変化を知る手段はある．実践の結果も多い．研究史展望と理論的考察は別稿に譲る．

第９章

敬語の成人後採用とライフステージ

はじめに

敬語にまつわる多くの現象について，成人後採用 late adoption が観察された．ここではライフステージと関連付けて基本メカニズムを説明する．

国立国語研究所の敬語関係の報告書と文化庁の『国語に関する世論調査』を有機的に関連付けることによって，現代日本の敬語使用の実態と，その使用原理，歴史的変化を解明することができる．さらに敬語体系の歴史的生成発展過程と結び付けることができ，人類の集団発展史の中に位置づけることも可能である．

岡崎敬語の経年調査による時系列データは，個人のライフステージという別の意味の時系列データと関連付けられるべきである．岡崎データについて，生年実年代によるグラフを活用して，同時出生集団・コーホート cohort の変化を追跡する手法をとった．音韻などのように人生初期に身につく現象と，敬語のように成人後に採用される現象との違いがきわだった．

「敬語を身に付けてきた機会」として，四つの主な場面が考えられる．成長に伴うライフステージの順に地域社会，家庭，学校，職場である．調査結果では，それぞれで異なった敬語要素，使用原理が習得される．少し以前の過去の日本社会の就業構造を考えると，説明できる．

9.1. 世論敬語・通説敬語・指針敬語

これまで敬語にまつわる多くの現象について，年齢層と使用率の関係を考察し，敬語の成人後採用 late adoption が観察された．ここではライフステージと関連付けて基本メカニズムを説明する．

文化庁『国語に関する世論調査』の「敬語を身に付けてきた機会」の問は，多くのことを語る．理論的に考えられる三つの主な場面，家庭，学校，職場について，国民がどう把握しているかが分かる．**家庭，学校，職場**は個人の成長過程でこの順に接するので，ライフステージとしてとらえることができる．また血縁集団，地縁集団，職場集団（機能集団，目的集団）として位置付けることもできる．世論調査の結果では，それぞれの場面が異なった集団（年齢，性，地方，職業）の人に影響を及ぼす．少し以前の過去の日本社会の就業構造を考えると，性差も説明できる．この３場面の基盤として**地域（社会）**がある．

図９‐１の説明に入る前に，「敬語」のとらえ方（分類）について，整理しておこう．文化庁世

論調査や国語研の各種敬語調査によると，国民，一般人が一致して「敬語」の実例としてとらえるのは，尊敬語と謙譲語だけである．これを「**世論敬語**」と呼ぼう．これに対し，敬語論の通説では尊敬語・謙譲語（素材敬語）と丁寧語（対者敬語）の 3 分類を採用し，学校教育でも敬語の入門書でも用いられている．「**通説敬語**」と呼ぼう．文化審議会(2007)『敬語の指針』では謙譲語を 2 分し，美化語を敬語と見なして，5 分類を採用した．「**指針敬語**」と呼ぼう．敬語に関する世論調査結果を読み取るには，「世論敬語」の結果であることを意識する必要がある．一方敬語のマニュアル本の類ではもっと多様な実例が扱われていて，「敬語的表現，敬意表現，配慮表現」さらには「**待遇表現**」にあたる広い範囲が含まれる．

9.2. 家庭，地域，学校，職場とライフステージ

敬語とライフステージの全体像を**図 9 - 1** に示した．個人のライフステージからいうと，下の家庭の場面から上の場面に向かう．下のほうから解説を加える．

もう一つ別の基準も持ち込もう．上が公的場面，下が私的場面で，H と L，つまり High と Low の場面に相当する．言語併存 diglossia 論から広がった High と Low の軸である．言語間に H と L の格差があると同様に，1 言語の中にも標準語・共通語対方言との格差がある．また敬語を使う文体と使わない文体の間にも H と L の格差がある．

１．　家庭

ライフステージから言うと，子供はまず**家庭**内で育つ．母語として身に付けることばは常体（ダ体）である．現代社会では家庭内では無敬語で，目上の家族成員（父や祖父）にも敬語（国民が考える世論敬語の尊敬語と謙譲語）を使うことはない．小学校中学年くらいまでは，教室外でデスマスを使いこなせなくとも大目に見てもらえる．家族内呼称（おかあさま，おかあさん，おかあちゃん，かあさん，かあちゃん，ママなど）の選択は家族の階層意識と関係するが，子供が使い分けるわけではない．また，よその人に向かって呼称 address term「おかあさん」などでなく，名称 reference term「はは」を使うようにしつけられるのは，地域差，階層差があるが，ほぼ中学生，高校生の時期である（柴田 1978，Sibata1998，井上 2011.12）．

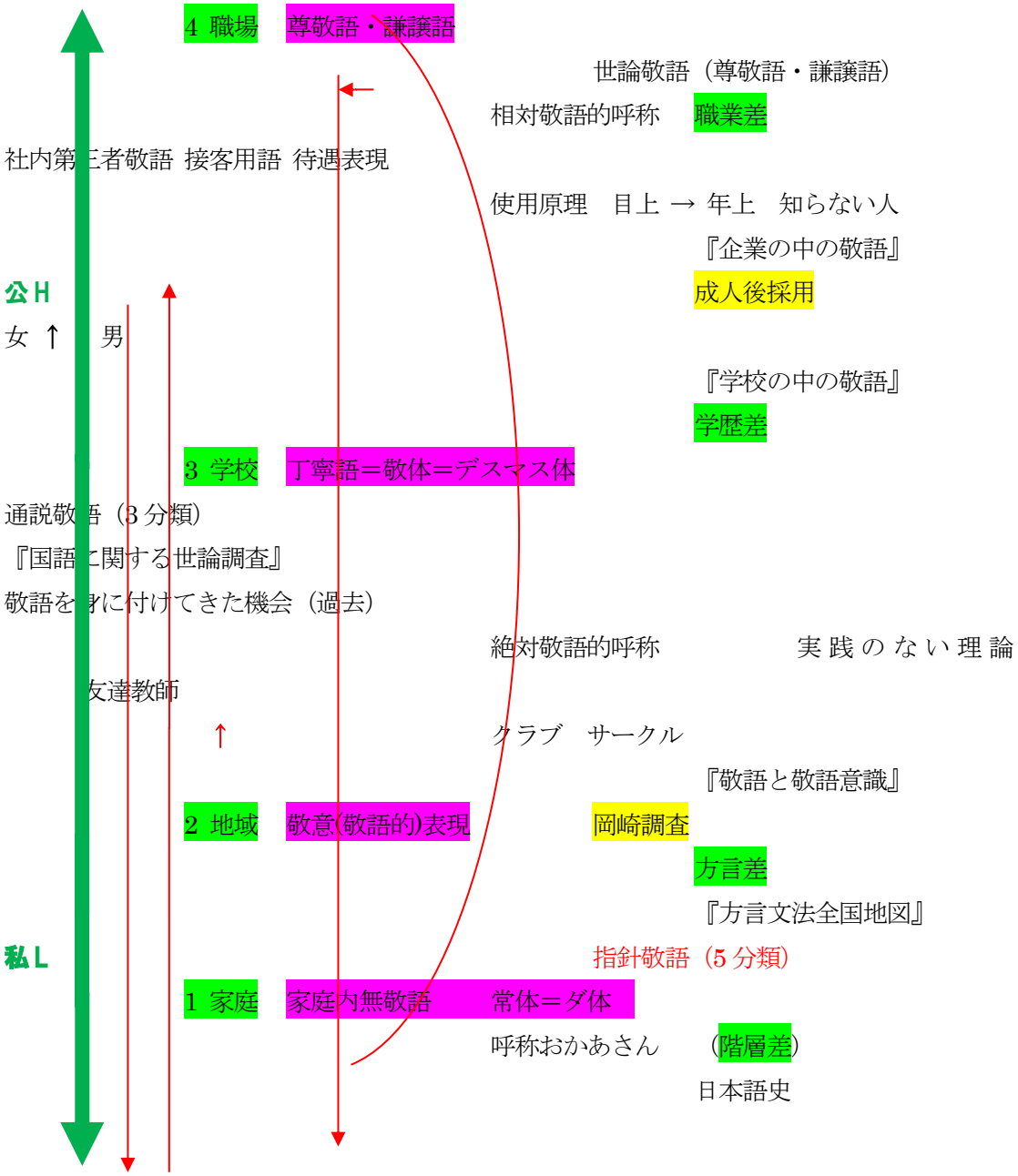


図9-1 敬語とライフステージ

２．　地域

少し大きくなると，**地域社会**の遊び仲間や大人に接するが，そこで敬語が（世論敬語も通説敬語も）問題になることはない．近所の店で「ください」を使えれば上等である．大人に「デスマス」を使わなくとも，免除される．敬語モラトリアム段階で，使えなくて当然と見なされる．昔は地域全体でこどもを見守り，ときには叱ってしつけをすることもあったが，現在はこの機能は働かず，学校に期待されることが多くなった．岡崎調査でとらえた場面は，地域社会の様々な人との接触場面である．

地域の敬語には大きな方言差が見られ，西高東低および都市化の程度と関連する(井上 2011.11)．『方言文法全国地図』によって，基本的な情報が得られる．

３．　学校

次のライフステージとして幼稚園，保育園の段階も国民に広がり，ここでは「保母ことば」（昔の「乳母ことば」の後継）とも呼ばれる「お」の多用に接する．

全員が義務教育として**学校**に入る．小学校で低学年は狭義の敬語（世論敬語）は要求されない．教室場面で先生の「デスマス」に接し，発言での使用が要求される．つまり敬体，丁寧語，対者敬語が要求される．ただ使用の見本に接するだけで，系統的な指導が行われるわけではない．中学に入り，そして高校で素材敬語（世論敬語）としての尊敬語・謙譲語を学ぶ．国語の授業でも学ぶし，先生との会話でも使われる．実践のない理論的説明で，『国語に関する世論調査』の質問項目によれば，実際には教室場面でも要求されない．むしろ友達教師の関係がもてはやされるようになった．また『学校の中の敬語』によっても，中学，高校では上級生にデスマスを使うことはあるが，尊敬語，謙譲語は使わない．しかし昔の学校では教師が（低学年に）自分を「先生が」のように呼ぶように，絶対敬語的呼称があった．教師どうしが，または父母と話すときに「○○先生」のように言及するのも絶対敬語的である．

高校を出たあとも半数近い若者が大学で学ぶ．学内では講義・ゼミなどという公的場面以外で教員と接する機会はそう多くない．学生は敬語モラトリアムで，誤用も大目に見てもらえる．《未知の学生にはデスマスで会話を始め，学年，年齢の違いが明らかになったら，一方が「ため口」「タメ語」になる；親しくなると相互に「ため口」を使う》という傾向もある．親疎に応じた使い分けである．しかし学外に出れば，この年齢と場面ではまともな敬語を使いこなすことが要求される．実践としては課外活動の先輩（後輩関係），指導者への敬語が役立つ．

４．　職場

その後**職場**というライフステージに入る．人によっては学生時代にアルバイトの形で接客用語を身に付ける．単純化され，定型化された，「マニュアル敬語，バイト敬語，ファミレス敬語，ファミコン敬語」などと言われるもので，従来使われなかった表現が混じるために，識者の非難を浴びる．

正社員として就職すると，会社内と社外とで，上下関係をわきまえたまっとうな敬語が要求される．敬語モラトリアムは通用しなくなる．社内の職階の上下関係をわきまえ，話題に出た人物について相対敬語の立場から適切な表現をたちどころに使いわけるのは，かなり難しい．運動部やバイト先で覚えた敬語が役立つ．なお職場の敬語のうちの接客用語は，地域社会での商店の接客用語として児童が接するものと基本的に同じである．敬語使用原理に変化のきざしが見え，「目上」という基準から単なる「年上」または「知らない人」という基準が広がりつつある．

『企業の中の敬語』によれば，職階に応じた見事なことばの使い分けが観察される．文化庁『国語に関する世論調査』によれば，職種によって敬語の使用能力や敬語意識に違いがあり，ホワイトカラーほど高い能力を持つ．またマニュアルや講習会で意図的に身に付ける機会も多い．

敬語使用原理としては，昔は「目上」で良かった．江戸時代までさかのぼれば，身分・階級（武家と町人）などの差別が大きく，非相互的，一方向的な敬語使用が行われていた．外見からも階級の判断ができたので，問題は少なかった．近代以降「封建的」な考え方が排除され，ことに戦後，民主化・平等化が進んだ．年上の上司，転職のための入社年からいうと後輩の年長者などが生じた．敬語不使用が原因で敬語殺人事件も起こっている．職階と年齢が矛盾するときに無難な方策は，年齢重視である．または常に敬語表現を使うことである．目上という基準が利きにくくなった．同様に知らない人には失礼のない表現として敬語を使うことにより「知らない人」という基準が浮上した．拡大すると西欧で観察された上下関係 power から親疎関係（左右関係）solidarity への変化の先端が観察される．

学校という職場の教師間でお互いに「先生」と呼び合い，外部の人と話すときにも「○○先生」と言及するのは，近世までの絶対敬語的な用法である．病院の医師も同様である．ふつうの会社に普及した近代東日本の第 3 者敬語と原理が違う．

いずれにせよ，人々が「世論敬語」としてとらえる尊敬語や謙譲語を実際に使いこなす必要があるのは，職場においてである．その前の学校（大学）段階は，敬語モラトリアムと考えていい．敬語の変化に関する諸調査で，敬語の「成人後採用」が観察されるのは，このライフステージによって説明される．

9.3.成人後採用のメカニズムと性差

世論調査の結果で，**成人後採用**が敬語で際立つのは以上のためである．社会人として，職場で，はじめてまともな敬語「世論敬語」が要求されるので，採用，習得，獲得が遅れる．敬語にまつわる社会言語学的能力（待遇表現，敬意表現，ポライトネス，配慮表現）も同様に成人後採用を示す．

以上には性差がからむ．男性は終身雇用が盛んだったときには定年まで勤めた．職階に応じた敬語を使った．定年後は家庭に戻り，地域社会に復帰して，地域社会の（上下関係のゆるやかな）敬語を使う．

女性のライフステージは少し前までの日本社会では違っていた．敬語の使用原理も違う点があった．女性の就職期間は短く，「結婚退職」が多かった．図 9 - 1 で示したように，女性は 1 家庭

から 2 地域，3 学校に社会的場面を広げた後，短期間 4 職場にあって，ふさわしい敬語を身に付けた．多くは目下としての敬語である．その後女性の社会進出にともない，女性の上司，女性の経営者が登場し，部下の男性へのことばづかいが問題になり，興味を引いた時期があった．今は男女雇用機会均等法の影響もあり，女性の上司は多くなってきた．現代は子育て期間に退職してそのあと復帰するために「M 字雇用」が増えた．勤め続ける女性も増えたので，職場の女性の敬語は，研究対象にはなっても，特殊なものとは位置づけられない．

9.4.言語調査と世論調査

以上 4 個の場面に分けて，ライフステージと関連づけて説明した．敬語の実地調査に基づく研究書と結びつけよう．文化庁の『国語に関する世論調査』は敬語について多様な問を含むが，大部分が都会の職場に関わるもので，一部学校の敬語や家庭や地域社会の敬語について調査しているだけである．その先駆として NHK 放送文化研究所の言語環境調査や総務庁の『国語に関する世論調査』がある．国語研の調査項目にも世論調査的な意識，社会心理項目が含まれている．ワーディングが異なるなど，相互の直接比較は用心すべきである（Inoue 2008）．しかし経年調査の形をとると，それぞれの調査の内部での動向に着目して全体的傾向を見ることになるので，相互比較が可能になる．例えば日本語の乱れ意識が国民の間に広がったと思われるが，それは各種の世論調査を集成して証明できる．

1 家庭については，大規模な調査は思いあたらない．個別には家庭内の呼称，夫婦間・親子間の敬語についての研究がある．アンケートやシナリオなどによる分析である．家庭内の敬語については，最初に習得の行われる場として今後の研究が期待される．しかし尊敬語，謙譲語が使われなくなったので，面白みが薄れ，呼称などに絞るしかない．

2 地域の敬語については，国立国語研究所の岡崎の調査『敬語と敬語意識』の経年調査が重要な位置を示す．京都についての対照調査もある（井之口・堀井 1972）．地域社会を位置づけるためには『方言文法全国地図』が基礎資料となる．ただ地理的平面の分布を主眼にしているので，場面差などについては，数枚の地図を対比する（または総合図を作る）などの手間が必要である．1 地点の状況を知るには，岡崎調査が重要な位置を占める．その項目の中に，地域社会の成員どうしの（以下の学校や企業の中の調査で見逃される）項目が入っているからである．国語研の岡崎調査は，大規模経年調査の一部として，地理的に全国 3 か所（鶴岡，岡崎，富良野）の中に位置づけられている．ことばの定点観測計画の候補地だが，ライフステージから言うと，地域，家庭，学校，職場の中に位置づけられる．それぞれの報告書を相互に関連づけるにも役立つ．また『社会変化と敬語行動の標準』が役立つ．

なお『国語に関する世論調査』の「敬語を身に付けてきた機会」で，地域と関わりそうな選択肢は「話し方教室や作法教室，自治体や民間の講習会など」だが，最下位である．地域社会の自然習得の場面は選択肢にない．あったとしても現代日本では近所の年長者や友人などが敬語について注意してくれることは考えられない．ただし地元の商店に就職した人が周囲の敬語を真似ながら身に付ける事態は考えられる（報告もある）．しかし敬語に関して地域社会の果たす役割は現

在は小さくなったと判断される．国立国語研究所の岡崎調査でもうかがえる．

3 学校については国立国語研究所の『学校の中の敬語』がある．国語研の調査・分析の主眼は，これまで執筆者の関心の置きどころのせいもあって，言語的な事項に置かれていた．幸いなことに言語項目も NHK や文化庁の世論調査で扱われており，たとえ同一項目，同一手法でなくとも，また 1 回だけの調査でも，相互に関連付けることは可能である．全国レベルの大規模経年調査と扱っていい．

4 職場については国立国語研究所の『企業の中の敬語』がある．典型的な大企業の内部の敬語使用が数値で確認できる．職場の敬語については，談話資料による研究もある．『国語に関する世論調査』の項目のかなりは大都市の企業などの敬語使用に関わるもので，全国の地域差，職業差などを知るにも役立つ．また建前としての敬語，敬意表現については，多くのマニュアル本，入門書，実用書が役立つ．

9.5.言語以外の加齢変化

似たような加齢現象は言語以外でも見つかるだろうか．統計数理研究所の『日本人の国民性調査』をはじめ，長年繰り返している調査は多い．「年寄りを大事に」「年金を保証せよ」だと年をとると多くなるだろうか．継続調査の代表例「日本人の国民性」調査のまとめによると，パターンは表 9-1 の 4 タイプに分けられる．このうち B タイプ（加齢により変化）に相当し，例としては「宗教を信じるか」があるという（統計数理研究所 1992: 248）．「宗教を信じるか」（信心とか信仰とかを持っているか）の例をグラフでみると（林 2001: 116），確かにすべての調査で老年層に多い．「宗教を信じる」人は 20 代では 10%台，60 代では 40～60%台で，加齢の影響と考えられる．しかし 5 年ごとの調査を比べると，1958 年の第 1 回調査以降ほぼ全世代で割合が減っている．敬語の成人後採用と似たパターンである．

表 9-1　国民性調査の変化 4 タイプ

		全体データ（国民性）	
		変化しない	変化する
コホートのデータ（個人の意見）	変化しない	A（不変の国民性）	C（世代により変化）
	変化する	B（加齢により変化）	D（時勢により変化）

調査データがあるかさだかでないが，冠婚葬祭のしきたりについては，加齢に応じて詳しさが増すと思われる．実際に必要に応じて尋ね，調べ，教えてもらうことが多い．インターネットや書物に頼らないとしたら，経験豊かな物知りの古老に尋ねることが多かった．もし世論調査の形で調べたら，明らかな成人後採用パターンを示すだろう．かつての工場での物作りにかかわる熟練労働も同様である．団塊の世代の大量退職によって伝承，伝統が途絶えることが心配されたが，まさに「成人後採用」の典型だった．敬語や談話行動一般を熟練労働にたとえるのは，適切な比喩と言える．現在は一部が FA(Factory Automation)として実現され，コンピューター（マシニン

グセンター）に記憶され，後代に伝えられる．敬語にも将来同様のプロセスが働くことが考えられる．

ちなみにA タイプ（不変の国民性）の例としては「めんどうを見る課長」がある（林 2001：114ff.）．ことばについては，基本的な単語の大部分がこれに属する．

C タイプ（世代により変化）は，コーホート（同時出生集団）に結びつく例で，新しい傾向を持った若い人が登場し，古い傾向のお年寄りが調査対象からはずれる（または世を去る）ことによって，国民全体の比率が変わるような現象である．例としては「趣味にあった暮らし」や「男女の能力差の有無」についての意見があるという．ことばについては，鶴岡市の音声共通語化でも観察された．こどもの遊びのことばも，一時期の子どもに流行って，しばらくするとすたれるものがあり，コーホートに結びつく．またある時期の子どもに人気のあった番組（の主人公）などが，その世代の生涯にわたって記憶されるような現象も考えられる．ことばと離れるが，流行歌，懐かしのメロディーなどがコーホートに結びつく．

D タイプ（時勢により変化）は，全年齢層で同じように一斉に増加したり減少したりするパターンである．具体例としては「日本人は西洋人よりすぐれている」という回答があるという．ことばについては，流行語や時事用語（世相語）の使用や廃用（忘却）で観察される．

表 9-1 のパターンは，一時的流行語とコーホート語と若者世代語と新方言・言語変化などについて整理した表とよく似ている（井上 1994.4: 4）．

集団の経年変化の，大規模な追跡調査としては文化庁「国語に関する世論調査」がある．その中の敬語関係（「わたくし」）で似たパターンが見つかった．第 5 章で取り上げた「わたくし」が全国データで 10 年後に増えた．集団の加齢変化が推測できる例として，方言や外来語の使用と意識の調査がある．経年変化は文化庁調査でうかがえる．外来語の使用については，10 代がピークになるわけではなく，成人後採用が観察された（井上 2008.5）．

傍証データとしては，国語研の鶴岡調査での道案内の場面がある．しかし被調査者の家から同一場所への行き方が違うので，経年比較は不可能である．陣内の道案内データがあるが，経年調査でないし，世代差，年齢差も分からない．

岡崎敬語調査のデータは貴重である．3 回の調査の話者を生れた年によって忠実に並べたグラフを作ったからである．

9.6.方言と敬語の習得　世論調査

以上ライフステージと関連づけて説明したが，敬語は実は方言と深い関係にある（井上 2011.11）．母語として身につける「地域社会」のことばは，多くの場合方言である．方言は共通語化により，急速に消滅しようとしているが，他方，今なお新方言が生まれて若い人に使われるし，また場面によって方言と共通語が使い分けられる．しかし前述のように，学校（の授業）では共通語が使用され，同時にデスマス体が使われる．方言の世論敬語（尊敬語，謙譲語）は学校という集団では習得の機会がない．児童生徒学生が家に帰れば地域社会の大人の成員に接する機会が生じるが，これまでの対話場面調査によれば，敬語の要求されるような目上の人と接する機

会は少ない．学校を卒業して，地域社会の成員の一人（例：地元の商店主）となったときに，本格的な敬語を使う（採用する）必要が出る．しかしその場面は同時に共通語がふさわしい場面でもありうるので，共通語敬語が採用されることになる．このようなライフステージ事情が背後にあるので，岡崎でも方言敬語はすたれる一方である（辻 2014）．

言語併存 diglossia 論から広がった High と Low の軸は，拡大して多重に適用することができる．図 9 - 2 を使って，説明しよう．

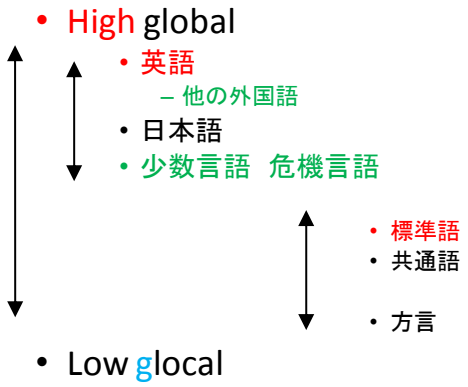


図 9 - 2 言語の格差 High Low

ことばとライフステージとの関係を単純化して言うと，成長に従って L のことばから H のことばを習得する過程である．幼いときに L のことばとしての方言を身につけ，学校で H のことばとしての標準語・共通語を習得する．また H に位置づけられるデスマス体（敬体）を使うようになる．卒業後職場に入ると，H としての尊敬語，謙譲語も使いこなす．なお学校において重視される技能の一つに外国語がある．既成の教育システムでは英語になっており，つまりは日本語より H に位置づけられる言語を身につける．社会化のプロセスとして，言語面では H のことばを身につけるのだが，個人としては，身につけることばの順番を無意識のうちに H と L の軸に位置づける．その個人の意識の集成が社会意識，知識としての言語格差を構成する．かつて言語相対論について述べたと同じ循環過程を考えることができる（井上 2011.11）．

以上の視点を入れると，これまでの言語調査は視野が狭かったと言える．方言の調査と敬語の調査の理論的接合が不十分だった．日本語と外国語の接触についても，外来語の使用と意識の調査を行っても英語の使用と意識（学歴または英語の成績）と結び付けることが（個人の成長過程についても国家の政策や教育法についても）少なかった．差別，格差と結び付くために，「客観性」を尊ぶ研究者が無意識のうちに回避していた研究テーマ，問題意識だった．

さらに，普通の世論調査では 10 代後半（または 20 代）からが対象で，児童生徒の状況がつかめない．学校経由で行う調査では，地域や家庭の状況がつかみにくい．さらに幼児や小学生のことばに関する調査は，小規模なものになりがちで，ライフステージのあとで問題になる現象が分

かりにくい．例えば小学生の敬語はほとんど使われていないという予測があるので，わざわざ調査されることも最近までは少なかった．

岡崎敬語調査の結果は，これまでの国語研の報告書のように，単独の自律的な体系を持つものとして記述されるべきだが，一方で方言と結び付ける必要がある（辻 2014）．またライフステージの関係から，学校や職場の敬語と関連付けた記述が必要である．

この観点から言うと，『学校の中に敬語』で山形県も対照として組み入れたのは成功だった．デスマス体の使用について，男女差が際立った点は，上記の観点からいうと重要である．学年が上の人をセンパイと呼ぶか，デスマス体（敬体）を使うかで，山形県の女子生徒は東京，大阪と似るが，男子生徒は違う．センパイと呼ぶことが少ないし，デスマス体（敬体）もあまり使わない．隣接都市鶴岡市で 1950 年代を生徒として過ごした井上の体験と一致する．女子生徒が東京と同じになったのは，共通語化が急速に進展し，女性だけにいち早く取り入れられたと，説明できる．従来女性には目上目下にもとづく厳格な敬語使用は要求されず，女性は親疎関係を重視する，という理解があり，それに矛盾するが，共通語化の早期受容なら納得がいく．これは生徒の方言使用とも関連付けられるべきである．

以上のような広いかつ多様な視点・視野のもとに，岡崎敬語調査は位置づけられる．総合的・包括的なまとめが要求される．

9.7.敬語使用基準の変化とポライトネスの要素

南（1987）の考察における「顧慮」すなわち敬語使用の際に考慮に入れられる現象にも変化がある．古代絶対敬語では話題の（人物，神仏の）地位だった．敬語の出発点としてのタブーから引き継いだ要素である．その後の相対敬語では，人物間の関係にも顧慮が及ぶが，身分，社会的地位に基づく．現代の丁寧語化の進んだ敬語では，聞き手，面前の（また居合わせた）人物への顧慮が優先し，話題の人物は，デスマス体に連動して敬語的顧慮を受ける傾向がある（井上 1999.5）．

ポライトネス理論では，以下の 3 要素によって調整されると仮説をたてている（Brown and Levinson 1987，田中典子他 2011）．理論上第 3 者への敬語は考慮に入らない．岡崎の場面がこの 3 要素によってどう位置付けらえるかを考える価値がある．

フェイスを脅かす行為 FTA (Face Threatening Act)の見積もり公式

Wx=D(S, H)＋P(S, H)＋Rx

ただし Wx＝ある行為 x が相手のフェイスを脅かす度合い，Weightiness

D(S, H)＝話し手と聞き手との社会的距離，Distance

P(S, H)＝聞き手と話し手の相対的権力，Power

Rx=ある行為 x の押し付けがましさの程度の絶対的な順位付け，Ranking

9.8. ディスコースポライトネスの可能性とわきまえ理論

ポライトネスを一連の談話連鎖の中でとらえる研究が日本で盛んになった．談話におけるポライトネスの動態的 dynamic 変動は，例えば学生の（初対面）談話で観察可能である．現代日本語では，ダ体，デスマス体の使い分けが親疎関係 solidarity の表出手段として短時間で変動するからである．しかし現代ヨーロッパの諸言語では，2 人称代名詞などは数週間または数年の単位で変化した後固定する傾向があるために，ディスコースポライトネス（Usami 2003）の適用は困難でありうる．ちなみに井出（2006）は「わきまえ」として日本語敬語を位置づけ，英語などの「働きかけ」と区別した．日本語で使用基準の変質がみられるわけである．

第 10 章　結論

岡崎調査と敬語の採用時期

1.　研究の背景

本報告では，岡崎の敬語調査の結果を広い立場から位置づけようと試みた．

1. 地理的軸としては，世界の敬語の中に日本の敬語を位置づけ，その方言差の中に岡崎敬語を位置づけようとした．ただし紙数の関係で具体的言及は避け，先行研究を示すにとどめた（井上 2011.12）．

2. また歴史的軸としては，日本語敬語史，特に（東京の共通語の）現代敬語との対比，位置付けを試みた（井上 2011.12）．

3. 岡崎調査自体から生れた社会言語学的現象としては，敬語の成人後採用がある．これまでの敬語論でも指摘はあったが，実証的な調査で確認されたのは初めてだった．生年実年代で 3 回の調査を示すという技法から見えた成果である．

4. これは個人のライフステージとも関わる．また話者の社会的・心理的属性とも関連する．どのような人がどのようにことばを使い分けるかが，あきらかになった．

5. 言語的軸としては，「丁寧さ」の再分析を行い，いただく，わたくし，言い淀みなどの現象を分析して，それらの総合として，反応文の長さを考察した．社会言語学の発展としての談話研究の成果を取り入れることができた．

6. さらにパネル調査，つまり同一人物の追跡調査の結果も，個人ごとに表示できる技法を採用して，岡崎という（外来者の多い）地域社会全体の変化と一個人の加齢変化との関連を考察した．

岡崎敬語調査の第 2 次報告書によると，16 年間の変化は少なかった．第 3 次の半世紀という長いタイムスパンを隔てたが調査が必要だった．これは敬語に関しては，話者や場面による使い分け（変異）の幅が大きいことによる．語形の変化は大きく，方言敬語の不使用傾向が見られた．しかし東京におけるような過剰敬語，美化語化は，それほど及んでいない．第 2 次報告書で，成人後採用を見落としていたのは，経年変化の差が小さかったことにもよるが，鶴岡共通語化の音韻と同じような順調な増加を示す年齢差を期待していたからでもあろう．

第 3 回の分析者は有利な立場にあった．過去の成果を利用できたし，PC の普及と統計ソフトの機能向上で，各種のグラフ化の技法を簡単に適用できた．生年実年代のグラフにより，10 年ごとの年齢層きざみのまま，19 年後，36 年後の調査結果を表示できた．目で見て直観的に把握す

るためには便利な技法である．理論的背景としては，社会言語学の発展がある．ことに長い発話・談話を扱う研究が出て，その成果やアイデアを岡崎敬語の分析に適用できた．岡崎敬語の反応文は連続的談話の断片と見ることもできる．

2. 結果のまとめ

岡崎敬語の成果としては，以下のように要約できる．

まず言語現象としては，いただく（2 章），丁寧さ（3 章），ゴザイマス，デス，マス（4 章），わたくし（5 章），あのー（6 章），反応文の長さ（7 章）などを分析した．いただくで成人後採用が見られ，各現象の相互影響関係を考えた（2 章）．これまでの敬語論では，個人の習得時期，採用時期についての考慮が不十分だった．成人後採用を基本に据えれば，敬語実用書の書き方も変わるし，社員研修のやり方も変わるし，教科書の書き方も変わるだろう．岡崎の特殊例ではない．第 1 人称代名詞「わたくし」については，札幌も，東京も，大阪も成人後採用に合致する年齢カーブ（中年以上が多く使う）を示した．全国規模の継続調査結果も同様である．これは，鶴岡調査の敬語項目で若い人が先に採用したのと食い違う．高度な敬語は，共通語化の中でも最高峰で，採用が遅れるのである．

敬語変化の根本原理の共通性がここから浮かび上がる．いただくの増加と成人後採用は，反応文の長さにも影響する．その背景にあるのは，談話パターンの変化で，さらにその背後には，配慮の変化，人間関係のとらえ方があるだろう．荷物を預ける場面でのことばで，相手をもっと気遣うようになり，かつての受け持ちの先生へのことばが簡略になったのが例である．社会の人間関係把握が変わってきたので，「民主化・平等化」の流れととらえることができる．

かつて言語相対性理論 linguistic relativity に関して 3 角形のモデルで説明したが，敬語にも同様に応用できる．考え方，とらえ方の変化は，言語行動に影響する．言語行動パターンが個人に固定すれば個人差になる．集団のパターンととらえれば県民性に結びつくし，性差や職業による違いととらえられることもある．やがては社会習慣としてある集団の基準，標準となる．（敬語については集団差が大きく，場面差も広いので規範として設定するには遠い．）

現代日本語敬語の変化傾向は，次のようにまとめられる（井上 2011.12）．

1 敬意低減（イタダクの増加）．

2 民主化・平等化（イタダクの文法化 grammaticalization，他の表現，配慮表現の使用）．

3 丁寧語化（デスマス体の普及，第 3 者敬語の衰退）

なお東京の最近の動きには 4 方言化があるが，岡崎では別方向の動きが見られた．テミエルの増加について辻（2014）参照．

岡崎敬語の社会的属性の分析は本書各所に挿入したグラフを通じて行った．グラフの場面差等を利用して，様々な動きが読み取れた．まず半世紀を隔てて，実年齢差と加齢変化を重ねてみて，丁寧さの広がりが分かった．男女差がある点では大きくなり，別の点では薄れた．学歴差も，敬語の場面に応じた使い分けについては広がった．

さらに大きくまとめると，岡崎の敬語は半世紀（話者の生年を考えると 1 世紀以上）のうちに，聞き手＝話し相手との人間関係により多く気を使うように変化した．そして（話題の人物への）身分や地位にはさほど配慮しないようになった．この点は日本の共通語で今進行中の変化と軌を一にしている．言語的表現としては，いわゆる敬語，特に教科書で習う通説敬語のうちの尊敬語・謙譲語などに頼るよりも，談話全体で相手との関係を調整する傾向がうかがえる．広義の敬語，配慮表現とか待遇表現と言われる現象を駆使している．表現手段が多様であるだけに，たった一つの正解にあたるような表現はない．初心者に教え込むのに苦労する．世にマニュアル敬語がはびこるのもそのせいと言える．

3．　将来の課題

今回の報告は岡崎敬語調査の中心部分の 12 項目に限った．対面コミュニケーションにおける場面差を比較したことになる．第 3 次調査で第 3 者敬語の項目を補った．言及 reference の敬語で，東アジアの敬語で発達した「王侯敬語」の名残である（井上 2011.12）．談話研究で発展したポライトネス理論では扱いにくい現象である．一方現代敬語でも使用が衰退しており，しかし現場では必要とされる（成人後採用が見られるはずの）使い分けである．辻による分析が進行中で，この報告書の次の作業である．

話者の意見・態度などについては，留め置きの自記式回収調査票で情報を集めたが，集計はまだである．項目相互間でのクロス集計を進める必要がある．ここでもグラフ化の効果が発揮されるだろう．多くの言語現象に，生年実年代グラフを適用する．平均値，標準偏差，有意差などの計算をして信頼度を確認する必要もある．

当初の目標では多変量解析法を適用する予定だった．もっと多くの言語現象について，基礎データをそろえてからのほうが有効だろうと考えて，あと回しにした．

社会的心理的要因・属性としては，生育地・職業などが未分析である．また現在岡崎市には自動車関連産業の隆盛もあり，外国人の居住も増えており，住民票のランダムサンプリングでも対象として登場するようになった．大量調査では数に埋もれて目立たないが，平行して行われた言語景観調査では，きちんと証拠の看板類が記録された．これらは後世の景観調査の基盤となりうる．実際の話しことばや言語行動について古くからの住民にどんな（そもそも）影響を与えるかは，未知数である．

継続調査は日本の社会言語学の宝物である．将来も繰り返されることを願う．なお青山（1969, 1970）により韓国でも同様の調査が行われて報告された．こちらも継続調査が行われれば，稀有な継続の調査対照研究になる．なお岡崎継続調査の中心の 12 項目のかなりは，どの国・文化でもありうる場面である．実地調査は言語学の専門家に限るわけではない．世論調査会社に委託して IC レコーダーに録音し，文字起こし専門業者に依頼すれば，早く分析用データが入手できる．予算さえあれば，研究者本人が汗水たらして歩き回り，断られてショックを受けたりすることなく，しかも年月をかけずに，研究ができるわけである．

4. 関係者　分担　謝辞

第 3 次岡崎敬語調査は科学研究費の企画として始まった．当時の研究メンバーは以下のとおりである．

杉戸清樹，横山詔一，朝日祥之，礒部よし子，塚田実知代，江川清，井上史雄，真田信治，米田正人，吉岡泰夫，水野義道，松田謙次郎，片岡邦芳，西尾純二，辻加代子，松丸真大，吉野諒三，久木田恵．

現地岡崎市の多大の協力を得た．とくに下記の方にはお世話になった．

近藤勉，大久保貴子，野田光宏，鈴木誠，稲垣満春，林光，谷口善一，足立晴義，中根則夫，杉山延治，辻川幸弘，鈴木康弘，鈴木智晴，鈴木明正，野村征司，鈴木孝司，杉山延治，杉浦美穂，安藤耕一，湯口典子，早川喜晴，加藤芳郎，藤谷秀岳．

調査結果の整理と分析については，4 冊の科学研究費報告書がある（国立国語研究所 2010）．調査票の整理や電子化の段階から，阿部貴人の担当だった．整理は国語研究所のプロジェクトとして進められた．

この報告書をまとめるにあたっては，以下のメンバー（国研職員，非常勤研究員，業務委託）の協力があった．

礒部よし子（国研職員），中野敦子（国研職員），阿部貴人（非常勤研究員），鑓水兼貴（非常勤研究員），原田幸一（非常勤研究員），柳村裕（非常勤研究員），丁美貞ジョンミジョン Jeong MiJeong（非常勤研究員），藏屋伸子（業務委託），齋藤敬太（業務委託），井上史雄（国研客員教授）．

作業の途中の段階については，『大規模経年調査資料集』としてインターネットで随時公表してきた．本報告はそれらを配列しなおして，相互関連を考えた上で加筆したものである．

以下のメンバーについては，関連研究として，個別の口頭発表や論文がある．文献目録を参照されたい．

松田謙次郎(2014)，西尾純二（2015），辻加代子（2014），阿部貴人(2010)，彦坂佳宣（のちに参加），井上史雄，鑓水兼貴，原田幸一，柳村裕，丁美貞ジョンミジョン．

参考文献 （五十音順）

青山秀夫「現代朝鮮語の敬語と敬語意識」京畿道驪州邑における実態調査報告」(1)～(3)『朝鮮学報 51 (1969) 1-18, 53 (1969) 1-32, 57 (1970) 13-34.

朝日祥之（2008）『ニュータウン言葉の形成過程に関する社会言語学的研究』（ひつじ書房）

阿部貴人(2010)＝ 国立国語研究所（2010）第 2 分冊

井出祥子（2006）『わきまえの語用論』東京：大修館書店.

井出祥子・荻野綱男・川崎晶子・生田少子（1986）『日本人とアメリカ人の敬語行動』東京：南雲堂.

井上史雄(1979.5)「若者の敬語行動」言語 8-6　pp.38-46.9【井上 1989.10 第 4 節】

井上史雄（1989.10）『言葉づかい新風景（敬語・方言）』秋山書店

井上史雄(1994.4)『方言学の新地平』明治書院

井上史雄(1999.5)『敬語はこわくない』(講談社現代新書)

井上史雄（2007）『その敬語では恥をかく!』東京：PHP.

Inoue, Fumio (2008) "Population ageing and language change". Coulmas, F. et al. *The Demographic Challenge: Handbook about Japan* (Lijden) pp.473-490.

井上史雄(2008.5)『社会方言学論考---新方言の基盤---』（明治書院）

井上史雄(2011.12)『経済言語学論考―言語・方言・敬語の値打ち―』明治書院

井上史雄（2012a）「岡崎敬語の現代史と世界の敬語史」国立国語研究所理論構造研究系合同発表会.

井上史雄（2012b）「美化語「お」の循環過程と幼児語の「お」」『明海大学外国語学部論集』24 : 35–51.

井上史雄（2012c）「美化語の「お」と幼児語「お」の全国分布」『明海大学応用言語学研究』14 : 63-74.

井上史雄（2012d）「横文字雑誌名」（ことばの散歩道）『日本語学』31(6) : 65.

井上史雄（2012.9）「岡崎敬語の現代史」日本語学 31-11 pp.2-13

井上史雄（2012.12）「日本語敬語の変化とアジアの敬語」三宅和子・野田尚史・生越直樹（編）『「配慮」はどのように示されるか』（ひつじ書房）.

Inoue, Fumio (2013.4.2) "A Contemporary History of Okazaki Honorifics — Democratization and te- itadaku —"

http://www.ninjal.ac.jp/socioling/nwavap02/Inoue-NWAVAP2-2013.pdf pp.1-9 ("Working Papers from NWAV Asia-Pacific 2 ")

井上史雄（2013.11）『岡崎敬語調査資料集　1』 Material for Okazaki Survey of Honorifics, 岡崎「ていただく」の増加 Increase of "te itadaku"in Okazaki 国立国語研究所 National Institute for Japanese Language and Linguistics

井上史雄（2012.9）「岡崎敬語の現代史」日本語学 31-11 pp.2-13

井上史雄（2012.12）「日本語敬語の変化とアジアの敬語」三宅和子・野田尚史・生越直樹（編）

『「配慮」はどのように示されるか』ひつじ書房.

Inoue, Fumio (2013.4.2) "A Contemporary History of Okazaki Honorifics — Democratization and te- itadaku —" ("Working Papers from NWAV Asia-Pacific 2 ") http://www.ninjal.ac.jp/socioling/nwavap02/Inoue-NWAVAP2-2013.pdf pp.1-9

井上史雄（2013.11）『岡崎敬語調査資料集　1』　Material for Okazaki Survey of Honorifics, 岡崎「ていただく」の増加 Increase of "te itadaku"in Okazaki 国立国語研究所 National Institute for Japanese Language and Linguistics

井上史雄（2014）『岡崎の「ですます」と「ございます」』大規模経年調査資料集 9 http://keinen.info/download/Desu_masu_and_gozaimasu_in_Okazaki(1.0).pdf

井上史雄(2014.12)「昭和の方言　鶴岡と郊外の言語変化」日本語学 32-15 pp.16-24.

井上史雄(2015.2「敬語の成人後採用」『国語研プロジェクトレビュー』5 巻 3 号 pp.98—107

井上史雄（2015 年 3 月 8 日）「大規模経年調査から岡崎敬語調査パネルサンプルの生年順表示」大規模経年調査研究発表会

井上史雄(予定)「「お父さん」の記憶時間—グロットグラムによる地域差と年齢差—」社会言語科学.

井上史雄・江川清・佐藤亮一・米田正人(2009.3)「音韻共通語化のＳ字カーブ---鶴岡・山添６回の調査から---」計量国語学 26 巻 8 号 pp.269-289

井上史雄・半沢康・山下暁美(予定)「「お父さん」の記憶時間と実時間—グロットグラムと数値化データ—」計量国語学.国立国語研究所（1958）『敬語と敬語意識』（秀英出版）

井上史雄・松田謙次郎・金順任（2012.11）「岡崎 100 年間の「ていただく」増加傾向—受恵表現にみる敬語の民主化—」国立国語研究所論集第 4 号 pp.1-25

Inoue, Fumio & Akemi YAMASHITA (2014.1) "Change in the use of beautifying "o-" and late adoption A historical interpretation of data one decade apart", Alena Barysevich, Alexandra D'arcy and Davi Heap (eds) *Proceedings of Methods XIV --Papers from the Fourteenth Internatonal Conference on Methods in Dialectology, 2011, Bamberg Studies in English Linguistics* 57 pp.315-326.

井之口有一・堀井令以知（1972）『京都語位相の調査研究』（東京堂出版）

Usami Mayumi (2003) Discourse Politeness in Japanese Conversation:Some Implications for a Universal Theory of Politeness (ひつじ研究叢書)

NHK 放送文化研究所(1997a)『データブック全国県民意識調査 1996』(日本放送出版協会)

NHK 放送文化研究所(1997b)『現代の県民気質』(日本放送出版協会)

大石初太郎（1983）『現代敬語研究』東京：筑摩書房.

尾崎喜光(1989)「<私><母>を表わす語の性差・場面差およびその移り変わり—札幌市における社会言語学的調査から—」日本方言研究会第 49 回発表原稿集:28-37

尾崎喜光(2013)「"道理に合わない" 授受表現の使用と動態—愛知県岡崎市での経年調査および最近の言語調査から—」相沢正夫編『現代日本語の動態研究』おうふう, pp104-126

北野浩章（2014）「日本語とカパンパンガン語のフィラー」日本語学 33-7： 78-88
金田一京助（1959）『日本の敬語』東京：角川書店（『金田一京助全集 3』三省堂に再録）.
小池ユリ（1987）「岡崎京都方言と京浜方言の敬語に関する調査報告」『言語・文化研究』5, 89-99
国立国語研究所（1958）『敬語と敬語意識』秀英出版.
国立国語研究所（1981）『大都市の言語生活』東京：三省堂.
国立国語研究所（1982）『企業の中の敬語』(三省堂)
国立国語研究所（1986）『社会変化と敬語行動の標準』（秀英出版）
国立国語研究所（1989～2006）『方言文法全国地図（GAJ）I～VI』東京：大蔵省印刷局.
国立国語研究所（2002）『学校の中の敬語 1－アンケート調査編－』三省堂
国立国語研究所（2003）『学校の中の敬語 2－面接調査編－』三省堂
国立国語研究所（1983）『敬語と敬語意識 ― 岡崎における 20 年前との比較―』三省堂.
国立国語研究所(2007)『地域社会の言語生活---鶴岡における 20 年間隔 3 回の継続調査』国立国語研究所
国立国語研究所（2010）『敬語と敬語意識―愛知県岡崎市における第三次調査―』科学研究費補助金研究成果報告書 第 1～4 分冊.
後藤真孝, 伊藤克亘, 速水悟(1999)「自然発話中の言い淀み箇所のリアルタイム検出システム」情報処理学会研究報告. SLP, 99(64) : 9-16
小林隆・澤村美幸（2010）「言語的発想法の地域差と社会的背景」『東北大学文学研究科年報』59： 162–127.
小林隆・澤村美幸(2014.8)『ものの言いかた西東』岩波新書新赤版 1496

佐野真一郎（2008）「『日本語話し言葉コーパス』に現れる「さ入れ言葉」に関する数量的分析」言語研究 133: 77-106
柴田武（1978）『社会言語学の課題』（三省堂）
Sibata, Takesi (1998) Sociolinguistics in Japanese Contexts. Edited by Tetsuya Kunihiro, Fumio Inoue & Daniel Long (Mouton de Gruyter) (Partly accessible through Google Books)
杉戸清樹（1983）「待遇表現としての言語行動: 注釈という視点」日本語学
杉戸清樹（2001）「敬意表現の広がり」日本語学 20(4): 22-33.
鈴木智映子（2000）「小学生作文にみられることばの変化 : 特に敬語の変遷をめぐって」『学習院大学国語国文学会誌 』43: 14-25.

高橋顕志・井上史雄（1996）『気づかない方言 全国分布図---1995---速報版』（自家版）
田中典子他（2011）『ポライトネス』東京：研究社.
辻加代子（2014）「岡崎市方言敬語伝統形式および新形式ミエルの消長―継続サンプルの分析

より―」『国立国語研究所論集』第 7 号 pp.265-287
辻村敏樹（1968）『敬語の史的研究』（東京堂）
土屋菜穂子（2000）「対話コーパスを用いた言い淀みの統語論的考察」青山語文 30: 13-26
鶴岡市における言語調査研究グループ編(2014)『第 4 回鶴岡市における言語調査　ランダムサンプリング調査の概要　資料編：第 1 分冊「音声・音韻」編』統計数理研究所・国立国語研究所

西尾純二（2015）『マイナスの待遇表現行動―対象を低く悪く扱う表現への規制と配慮―』くろしお出版
ネウストプニー, J. V. (2003)「日本人の言語行動の過去と未来」『朝倉日本語講座 9 言語行動』1-28.東京：朝倉書店.

服部四郎（1960）『言語学の方法』岩波書店
原田幸一（2013）「テイタダク使用に関わる要因とその予測―岡崎敬語調査 12 場面の分析―」日本方言研究会第 96 回研究発表会原稿集
彦坂佳宣 (1991)「東海西部地方における尊敬語の分布と歴史――『あなたはどこに行くのか』を例に――」『国語学』166: 22-33. 国語学会.
彦坂佳宣（2015）「東海地方の敬語の歴史と地理」『大規模経年調査資料集 20』
Brown, Roger and Albert Gilman (1960) The pronouns of power and solidarity. In: Thomas A. Sebeok (ed.) *Style in Language*, 350-377. Cambridge: MIT.
文化審議会(2007)『敬語の指針(PDF)』www.bunka.go.jp/1kokugo/pdf/keigo_tousin.pdf
文化庁国語課(1996)『国語に関する世論調査（平成 7 年 4 月調査）』（大蔵省印刷局）
（途中省略）
文化庁国語課(2013)『平成 24 度国語に関する世論調査（平成 25 年 3 月調査）』（国立印刷

Matsuda, Kenjiro (2012) What happened to the honorifics in a local Japanese dialect in 55 years: A report from the Okazaki Survey on Honorifics, *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics* 18–2
松田謙次郎(2014)「形態素解析の大規模言語調査データへの応用―岡崎敬語調査パネルデータにおける名詞・代名詞・動詞の相対頻度に対する話者性別効果の検証―」『国立国語研究所論集』第 7 号 pp.151-165
松田謙次郎・阿部貴人・辻加代子・西尾純二（2012）「岡崎敬語調査報告―継続サンプルの分析―」日本語学会 2012 年度春季大会予稿集 pp.37-54.
丸山林平（1941）『日本敬語法』健文社
三尾砂(1958)『話しことばの文法』（法政大学出版局）
南不二男(1987)『敬語』(岩波新書)
宮島達夫（1977）「単語の文体的特徴」（『松村明教授還暦記念　国語学と国語史』明治書院）

柳村裕（2014）「ことばの丁寧さの経年変化と社会的要因―岡崎敬語調査から―」国立国語研究所論集 8, 177-196

山岡政紀・牧原功・小野正樹（2010）『コミュニケーションと配慮表現－日本語語用論入門』東京：明治書院.

柳田国男（1963）『定本柳田国男集　第一八巻』東京：筑摩書房.

山根智恵（2002）『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版

横山詔一（2006）「異体字選好における単純接触効果と一般対応法則の関係」計量国語学 25－5：199-214

吉岡泰夫（2000）「敬語使用と規範意識の社会差・地域差」『計量国語学』22(6): 239-251.

吉岡泰夫（2011）『コミュニケーションの社会言語学』東京：大修館書店.

第 3 部

岡崎継続調査　詳細グラフと解説

詳細グラフの見方

第 3 部では，第 2 部で論じた各現象のうち主なものについて，各場面（項目）ごと，および話者の属性ごとに，データの概要を示す．従来は数表として提示することが多かったが，グラフのほうが読み取りやすい．

詳細グラフ全体の構成は以下のようである．

全体像提示（図 1，2）
場面別（図 3〜4）
性別，学歴別（図 5〜9）
丁寧さ別（図 10）

折れ線グラフの見方

折れ線グラフでは，縦軸は観察対象変数の平均値（丁寧さの段階付けの平均値，特定の形式の使用率や使用度数など）を示し，横軸は年代（生年絶対年代または 3 回の調査の時点）を示す．

図 1-1，1-2，5-1，7-1，10-2 では，横軸は 3 回の調査の時点（調査年）を表す．図 1-1 は全場面，全話者を平均したものであり，図 1-2 はそれを場面別に分けたものである．以下同様に，図 5-1 は男女別，図 7-1 は学歴別，図 10-2 は丁寧さ別のグラフである．第 1 次調査の PC 両方のデータが利用可能な項目については，P と C を区別して，黒マーカーが P を，白抜きマーカーが C を表す．その際，見やすさを考慮し，C の横軸上の位置を左に 3 年分ずらした．PC の区別が表示されていないグラフでは，第 1 次調査の値は C を含まず，P のみを表示する．

図 2-1，3-1〜4-6，5-2〜5-3，7-2〜7-4 の横軸は生年絶対年代を示す．図 2-1 は全場面，全話者の平均であり，これを，図 3-1〜4-6 では場面別，5-2〜5-3 では男女別，図 7-2〜7-4 では学歴別に，複数のグラフに分けて表示する．曲線の種類によって調査次を区別し，点線が 1 次，破線が 2 次，実線が 3 次を表す．さらに第 1 次調査の C のデータが利用可能な項目については，1 次 C を細線と白抜きマーカーで表示する（1 次 P，2 次，3 次は太線＋黒マーカー）．横軸の生年は，調査時点での話者の年齢によって 10 年ごとに区切り（10 代〜70 代，10 代は 15〜19 歳），各年齢層の中央の年にプロットした．これまで 10 代の調査対象は一般の世論調査同様ハイティーンのみだが，20 代以上と同じ 10 年間隔でプロットしていた．その後各年齢層の中央の値，平均年齢などによるグラフを作成して比較したが，視覚的に大きな違いの印象はなく，グラフの読み取りを間違える可能性は少ない．また各調査の 30 代のマークを大きくした．成人後採用がある場合に，10 代も高年層も全体からずれた値をとることがあり，30 代が全体を代表しうると考えた．また 30 代の位置を手がかりにすると，第 1 次調査の P と C と第 2 次調査の線を判別しやすい．

ラベル付き散布図の見方

散布図は全て，特定の変数（調査次，性別，または学歴）の異なる水準ごとに集計された観察対象変数の平均値を各軸にとる．例えば，丁寧さを観察対象とするグラフでは，横軸に第 1 次調査の丁寧さの平均値，縦軸に第 2 次調査の丁寧さの平均値をとるなどである．

また，全ての散布図において，観察対象変数の平均値を場面ごとに計算し，各プロットが各場面の平均値を表す．散布図が第 1 次調査の値を含む場合は，C を含まず，P の平均値のみを表示する．図 2-2 と図 2-3 は，図 1-2 の別表現である．第 1 次調査 P (Proper or Professional)のみと，第 2 次調査・第 3 次調査の結果を散布図の形で示した．3 回の調査の結果を凡例と照合せずにラベルの付いた形で考察でき，各調査での場面配列の原理を探るには便利である．

図横軸が第 1 次，縦軸が第 2 次・第 3 次の数値である．

場面別の生年実年代グラフの見方

図 3〜4 では，場面ごとに生年実年代のグラフを示した．12 場面を第 1 次調査の平均使用数の順に並べて，3 回の調査の結果を示した（第 1 回調査の調査者による違いの P と C も分けた．）

性別・学歴別の散布図の見方

図 5 以下では，性別・学歴別にグラフを示した．5〜6 ページが性別，7〜9 ページが学歴に関わるものである．図 8-1〜9-3 は 3×3 の 9 枚セットで，学歴 3 段階と調査 3 回を組み合わせて比較する．

各グラフの見方の詳細

図 1-1　11（12）場面全体　調査次

調査次ごとに 11 ないし 12 場面全体を平均した観察対象変数の値を示す．観察対象変数の調査次による変化（経年変化）のパターンを表す．

図 1-2　場面ごと調査次

調査次ごと，および場面ごとに平均した観察対象変数の値を示す．図 1-1 の各値を場面ごとに分けて表示したものである．各曲線が一つの場面に対応し，各場面での観察対象変数の調査次による変化（経年変化）のパターンを表す．全体として，観察対象変数の経年変化パターンの場面による違いを表す．

図 2-1　11（12）場面全体　調査次ごと年代

調査次ごと，および話者の年代（生年）ごとに平均した観察対象変数の値を示す．11 ないし 12 場面全体の平均値である．図 1-1 の各値を年代（生年）で分けたものである．4 本の曲線は上述の通り調査次および PC の区別に対応する．つまり各曲線は 1 次 P，1 次 C，2 次，3 次の値をそれぞれ示す．曲線ごとに見ると，各曲線は，各調査次における観察対象変数の年代（生年）による差異（見かけの時間上の変化）を表す．全体として見ると，観察対象変数の大きな経年変化パターンを表す．また，縦に見て，特定の年代において曲線間で比較をすると，その年代における話者の年齢による差異（実時間上の変化）を知ることもできる．

図 2-2〜2-3　散布図　場面ごと調査次

調査次ごと，および場面ごとに平均した観察対象変数の値を示す．各プロットが一つの場面に対応し，調査次による観察対象変数の差異（経年変化）を表す．図 2-2 では 1 次と 2 次，図 2-3 では 1 次と 3 次の値を比較する．斜めの線の左上か右下かに着目すると，増減が分かりやすい．

図 3-1〜3-6，4-1〜4-6　場面別調査次ごと年代

12 場面のそれぞれについて，調査次ごと，および話者の年代（生年）ごとに平均した観察対象変数の値を示す．図 2-1 を，場面ごとに別グラフで示したものである（図の見方は図 2-1 の解説参照）．図 3-1 から図 4-6 の順番は，第 3 次調査での観察対象変数の平均値が高い順に並ぶ．

図 5-1　11（12）場面全体　性別ごと調査次

話者の性別を区別して，調査次ごとに 11 ないし 12 場面全体を平均した観察対象変数の値を示す．図 1-1 の各値を話者の性別で分けて別曲線で示したものである．男女別に，観察対象変数の調査次による変化（経年変化）のパターンを表す．

図 5-2〜5-3　男女別調査次ごと年代

話者の性別を区別して，調査次ごと，および話者の年代（生年）ごとに平均した観察対象変数の値を示す．11 ないし 12 場面全体の平均値である．図 2-1 を，話者の性別ごとに別グラフで示したものである（図の見方は図 2-1 の解説参照）．

図 5-4〜5-6　調査次別　場面ごと性別

調査次，話者の性別，および場面を区別して，観察対象変数の平均値を示す．調査次ごとに別グラフで表示し，いずれも横軸に男性の値，縦軸に女性の値をとる．各プロットが一つの場面に対応し，話者の性別による観察対象変数の差異を表す．

図 6-1〜6-4　男女別　場面ごと調査次

話者の性別，調査次，および場面を区別して，観察対象変数の平均値を示す．図 2-2 と図 2-3 のそれぞれを，話者の性別ごとに別グラフで表示したものである（図の見方は図 2-2〜2-3 の解説参照）．

図 7-1　11（12）場面全体　学歴ごと調査次

話者の学歴を区別して，調査次ごとに 11 ないし 12 場面全体を平均した観察対象変数の値を示す．図 1-1 の各値を話者の学歴で分けて別曲線で示したものである．学歴別に，観察対象変数の調査次による変化（経年変化）のパターンを表す．

図 7-2〜7-4　学歴別調査次ごと年代

話者の学歴を区別して，調査次ごと，および話者の年代（生年）ごとに平均した観察対象変数の値を示す．11 ないし 12 場面全体の平均値である．図 2-1 を，話者の学歴ごとに別グラフで示したものである（図の見方は図 2-1 の解説参照）．

図 8-1〜8-6，9-1〜9-3　調査次別　場面ごと学歴

調査次，話者の学歴，および場面を区別して，観察対象変数の平均値を示す．各グラフは，3 回の調査次のいずれかについて，学歴水準 3 段階（低，中，高学歴）のうちの二つを各軸にとってその差異を比較する．各プロットが一つの場面に対応し，当該調査次における話者の学歴による観察対象変数の差異を表す．

詳細グラフ1　第3章丁寧さ

岡崎敬語調査　丁寧さ平均使用数

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'politeness'

11場面：　101道教え～111傘貸し　　11 contexts: 101 Tell the way ~~~ 111 Lend umbrella

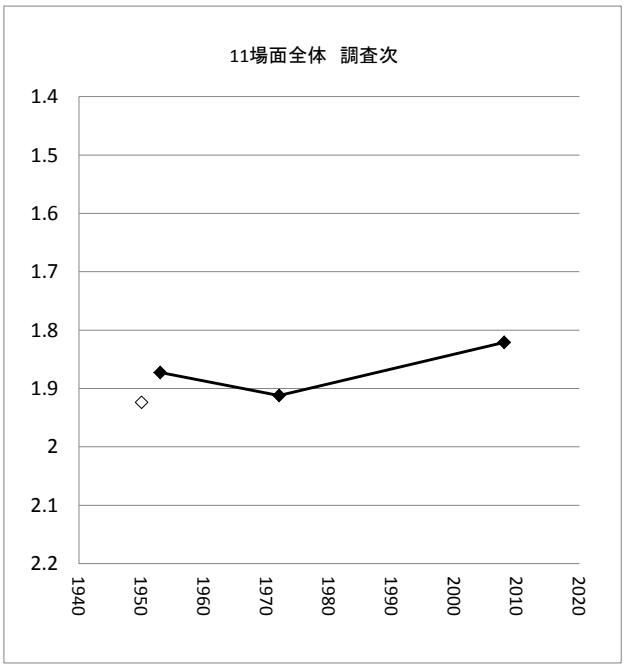


図1-1　11場面全体　調査次　（◆：プロパー、◇：コントロール）

Figure 1-1　In all the 11 contexts, by year of survey (◆: proper or professional ◇: control or college)

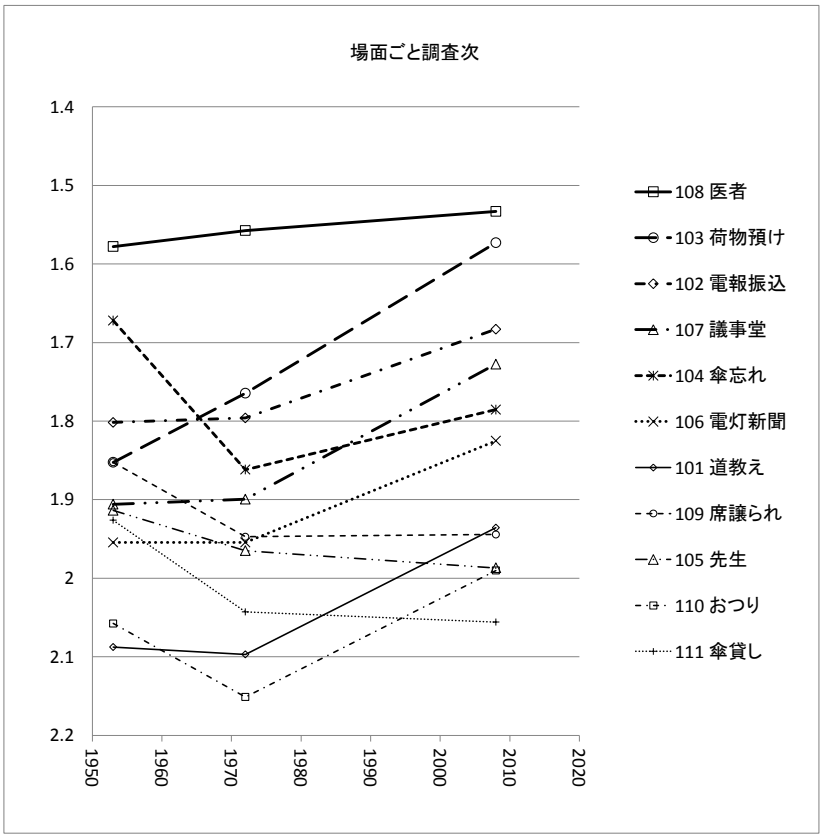


図1-2　場面ごと調査次　（プロパーのみ）

Figure 1-2　In each context, by year of survey (proper or professional only)

岡崎敬語調査　丁寧さ平均使用数　11場面全体調査次ごと年代

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'politeness'　All the 11 contexts　by generations of three surveys

11場面：　101道教え～111傘貸し　11 contexts: 101 Tell the way ~~~ 111 Lend umbrella

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代　Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

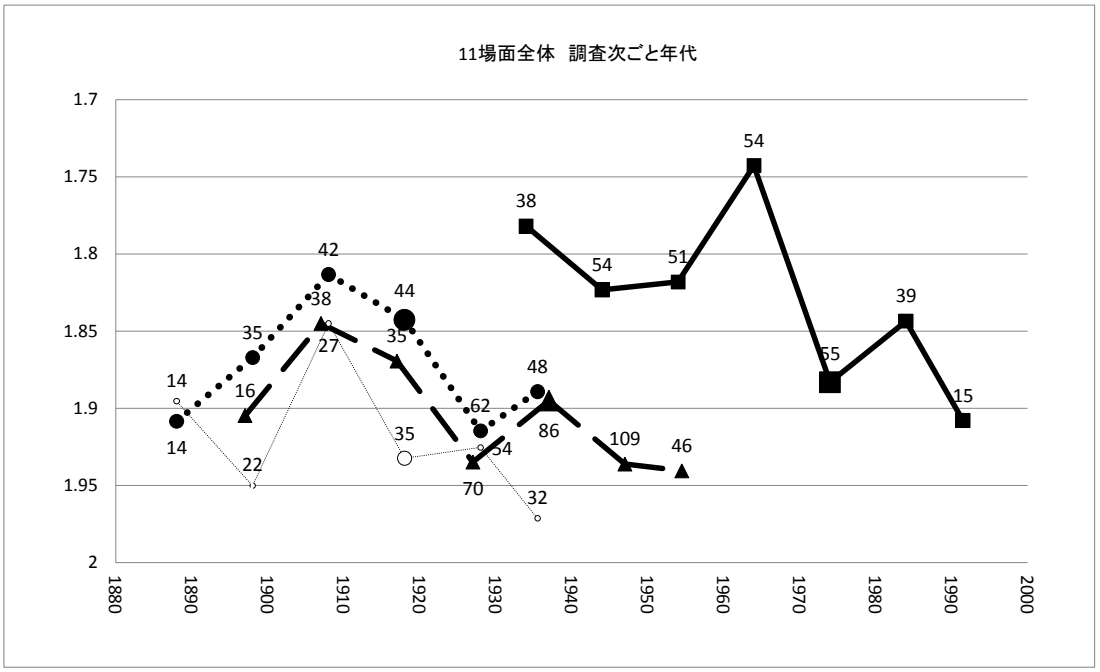
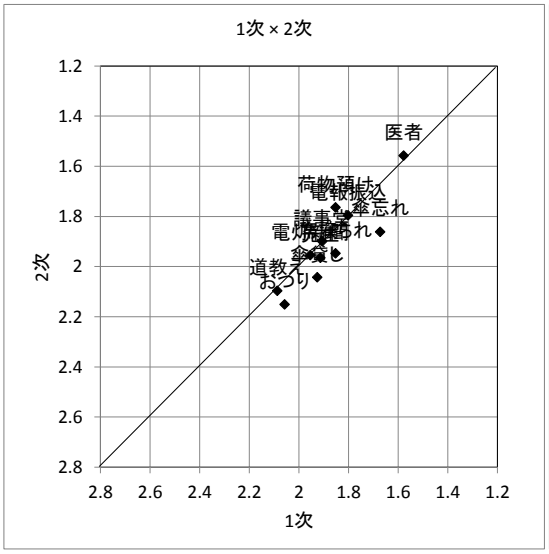


図2-1　11場面全体　調査次ごと年代　（◆：プロパー、◇：コントロール）

Figure 2-1　All the 11 contexts, generations of three surveys (◆: proper or professional ◇: control or college)

岡崎敬語調査　丁寧さ平均使用数の散布図　場面ごと調査次（プロパーのみ）

Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'politeness'　In each context, by year of survey (proper or professional only)



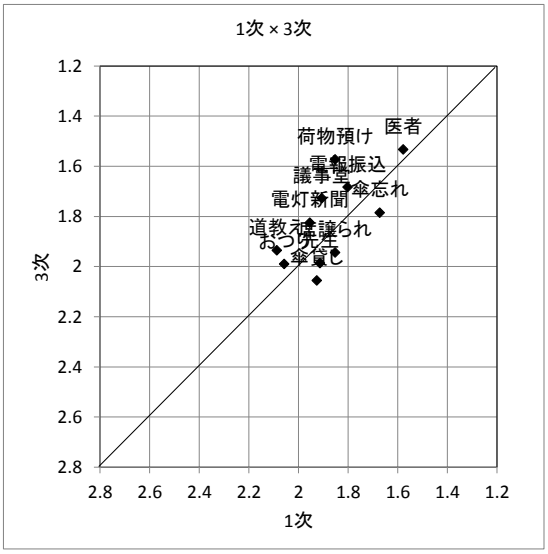


図2-2　場面ごと1次×2次　（プロパーのみ）

Figure 2-2　2nd against 1st survey, in each context (proper or professional only)

図2-3　場面ごと1次×3次　（プロパーのみ）

Figure 2-3　3rd against 1st survey, in each context (proper or professional only)

岡崎敬語調査　丁寧さ平均使用数　場面別調査次ごと年代

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'politeness'　In each context, by generations, year of survey

場面：　縦に第3次平均使用数順　Context: Figure No. is given in order of the average usage rate in the third survey.

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代

Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

◆：プロパー、◇：コントロール

（◆: proper or professional ◇: control or college）

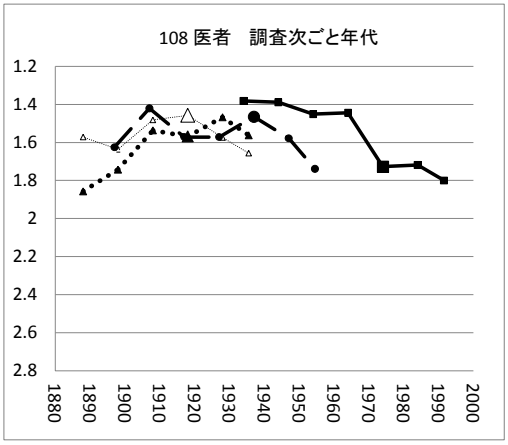


図3-1　108医者　調査次ごと年代

Figure 3-1　In 108 Doctor, by year of survey, generations

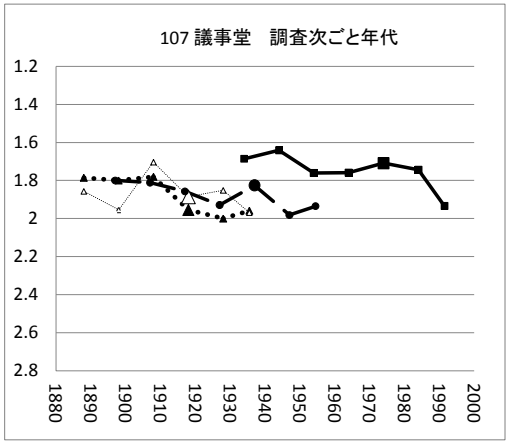


図3-4　107議事堂　調査次ごと年代

Figure 3-4　In 107 National Diet, by year of survey, generations

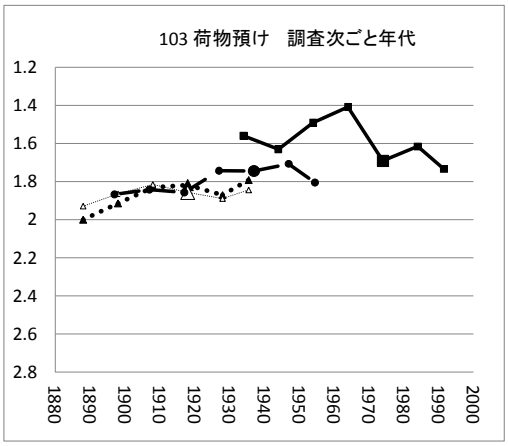


図3-2　103荷物預け　調査次ごと年代

Figure 3-2　In 103 Check baggage, by year of survey, generations

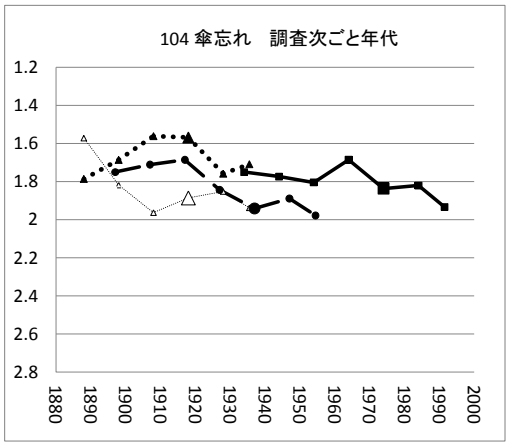


図3-5　104傘忘れ　調査次ごと年代

Figure 3-5　In 104 Left umbrella, by year of survey, generations

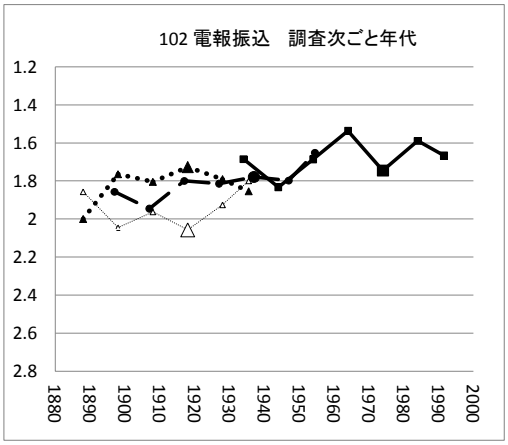


図3-3　102電報振込　調査次ごと年代

Figure 3-3　In 102 Remittance slip, by year of survey, generations

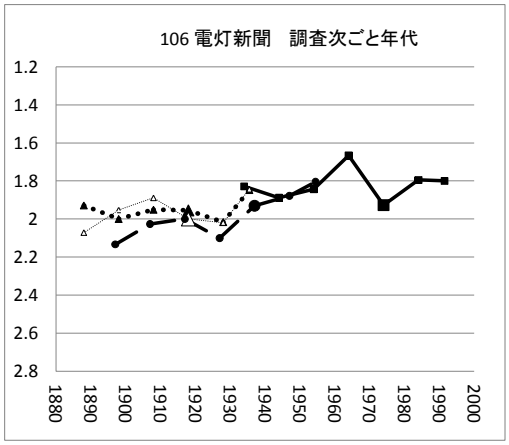


図3-6　106電灯新聞　調査次ごと年代

Figure 3-6　In 106 Newspaper bill, by year of survey, generations

岡崎敬語調査　丁寧さ平均使用数　場面別調査次ごと年代　（続き）

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'politeness'　In each context, by generations, year of survey (continued)

場面：　縦に第3次平均使用数順　Context: Figure No. is given in order of the average usage rate in the third survey.

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代　◆：プロパー、◇：コントロール

Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's（◆: proper or professional ◇: control or college）

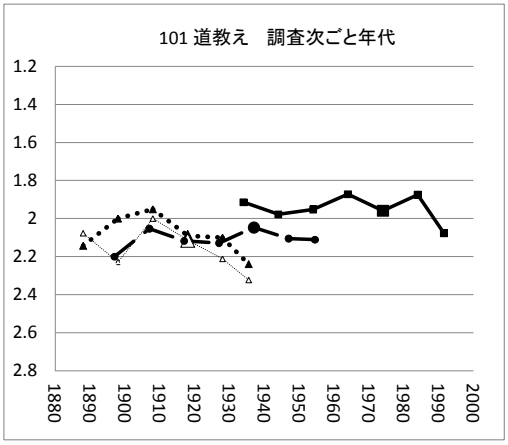


図4-1　101道教え　調査次ごと年代

Figure 4-1　In 101 Tell the way, by year of survey, generations

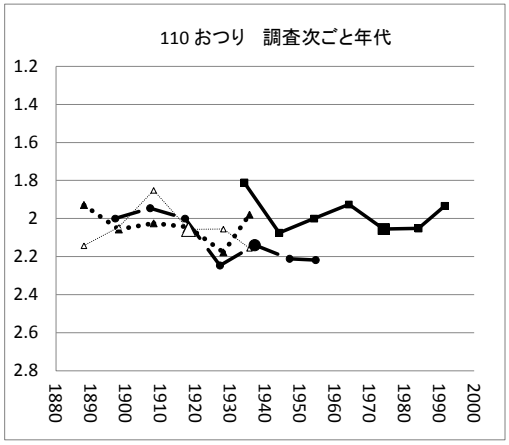


図4-4　110おつり　調査次ごと年代

Figure 4-4　In 110 Small change, by year of survey, generations

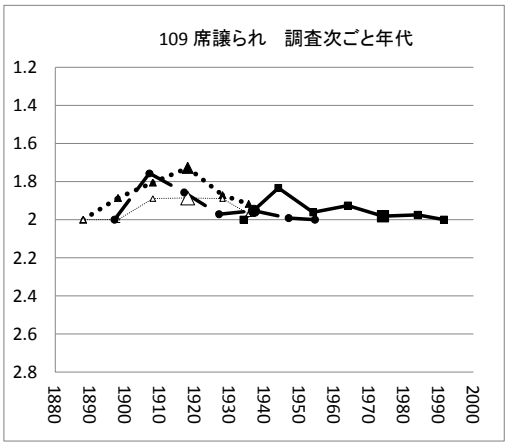


図4-2　109席譲られ　調査次ごと年代

Figure 4-2　In 109 Offered seat, by year of survey, generations

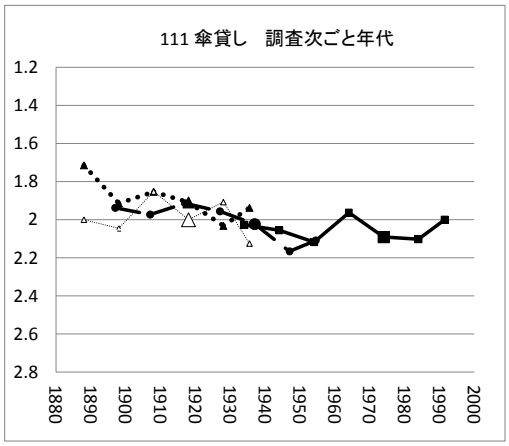


図4-5　111傘貸し　調査次ごと年代

Figure 4-5　In 111 Lend umbrella, by year of survey, generations

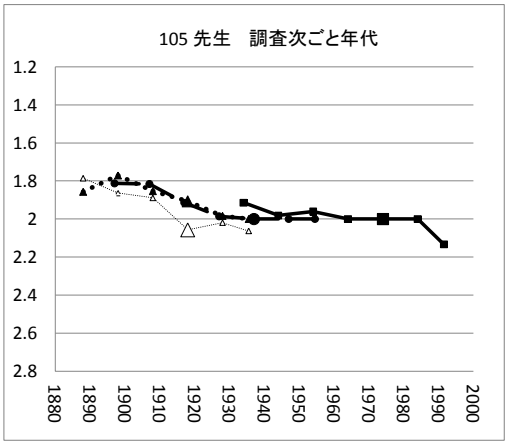


図4-3　105先生　調査次ごと年代

Figure 4-3　In 105 Ex-teacher, by year of survey, generations

岡崎敬語調査　丁寧さ平均使用数とその散布図
Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'politeness'

11場面全体　性別ごと調査次
All the 11 contexts, by gender, year of survey

11場面：　101道教え～111傘貸し
11 contexts: 101 Tell the way --- 111 Lend umbrella

◆：プロパー、◇：コントロール
◆: proper or professional ◇: control or college

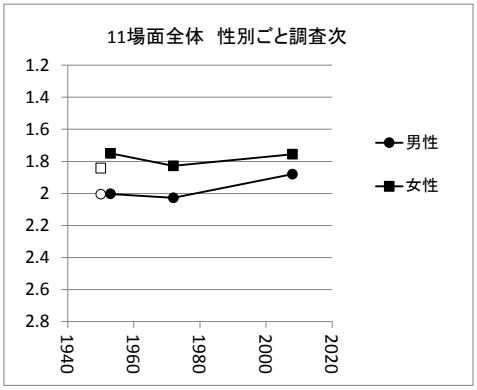


図5-1　11場面全体　性別ごと調査次
Figure 5-1 In all the 11 contexts, by gender, year of survey

男女別調査次ごと年代
By gender, generations, year of survey

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代
Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

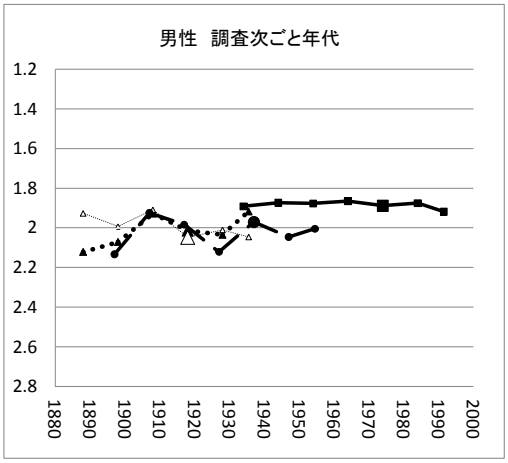


図5-2　男性　調査次ごと年代
Figure 5-2　Male, by year of survey, generations

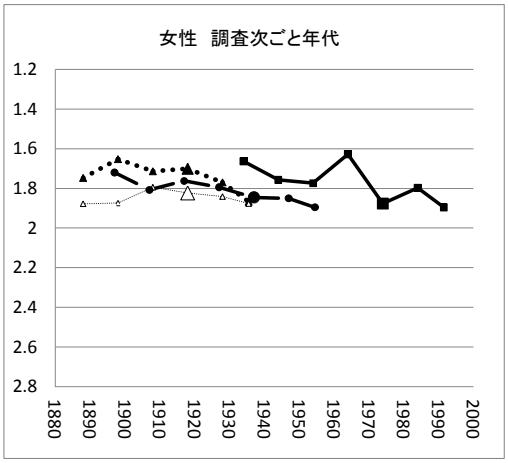


図5-3　女性　調査次ごと年代
Figure 5-3　Female, by year of survey, generations

調査次別　場面ごと性別（プロパーのみ）
By year of survey,　in each context, by gender (proper or professional only)

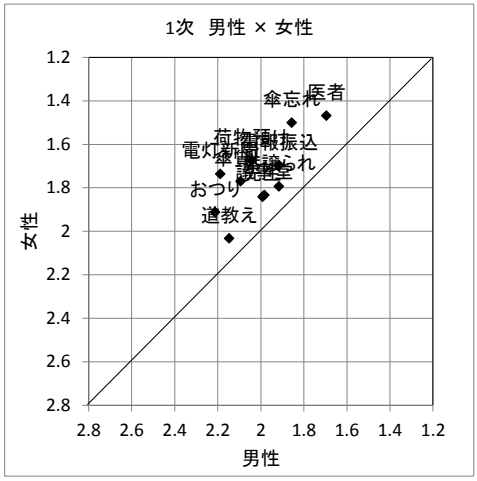


図5-4　1次　場面ごと男性×女性　（プロパーのみ）
Figure 5-4　1st survey, in each context,
female against male (proper or professional only)

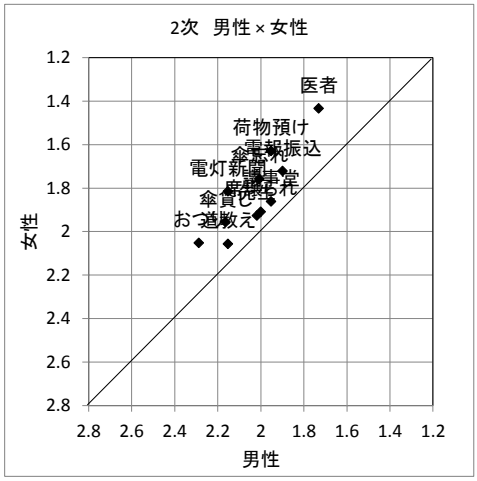


図5-5　2次　場面ごと男性×女性　（プロパーのみ）
Figure 5-5　2nd survey, in each context,
female against male (proper or professional only)

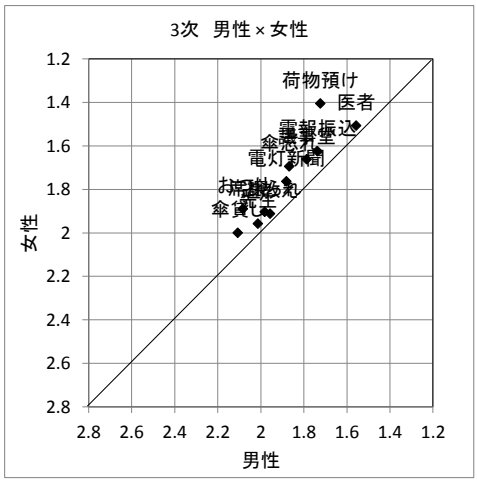


図5-6　3次　場面ごと男性×女性　（プロパーのみ）
Figure 5-6　3rd survey, in each context,
female against male (proper or professional only)

岡崎敬語調査　丁寧さ平均使用数の散布図　男女別　場面ごと調査次（プロパーのみ）

Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'poli By gender, in each context, by year of survey (proper or professional only)

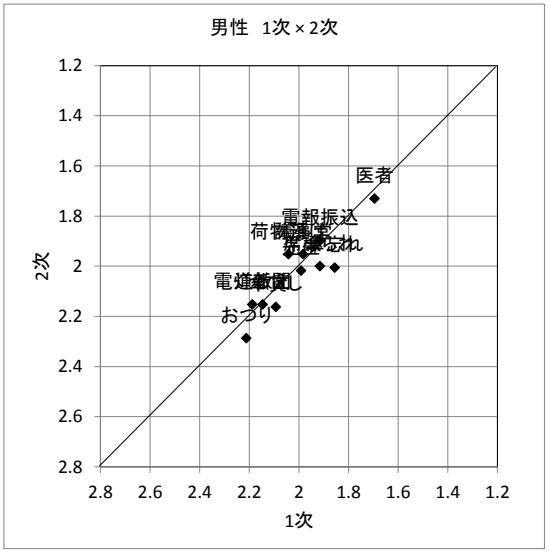


図6-1　男性　場面ごと1次×2次　（プロパーのみ）

Figure 6-1　Male, 2nd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

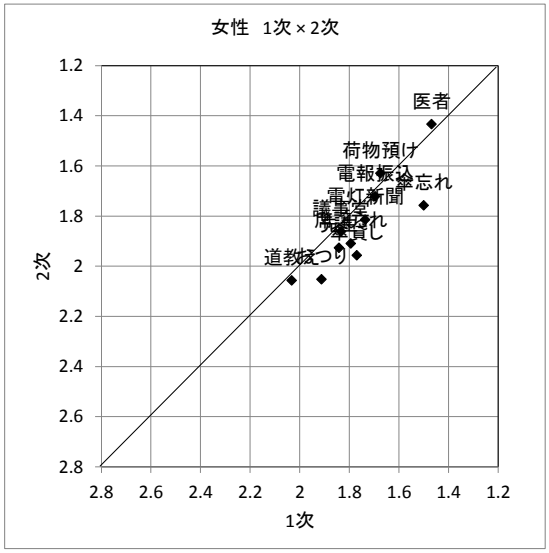


図6-2　女性　場面ごと1次×2次　（プロパーのみ）

Figure 6-2　Female, 2nd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

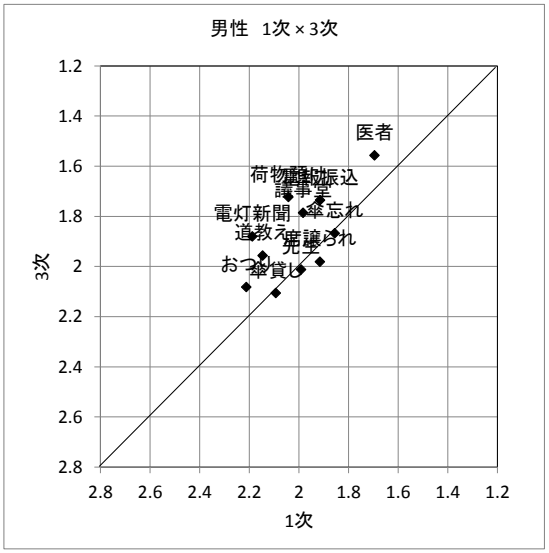


図6-3　男性　場面ごと1次×3次　（プロパーのみ）

Figure 6-3　Male, 3rd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

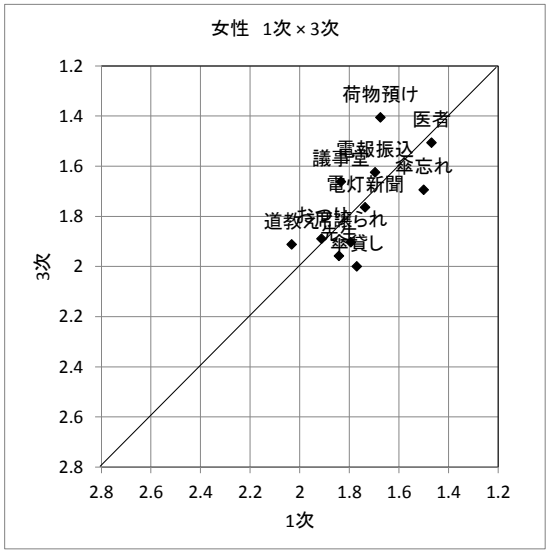


図6-4　女性　場面ごと1次×3次　（プロパーのみ）

Figure 6-4　Female, 3rd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

岡崎敬語調査　丁寧さ平均使用数　　◆: プロパー、◇: コントロール

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'politene ◆: proper or professional ◇: control or college

11場面全体　学歴ごと調査次

All the 11 contexts, by academic background, year of survey

11場面:　101道教え～111傘貸し

11 contexts: 101 Tell the way --- 111 Lend umbrella

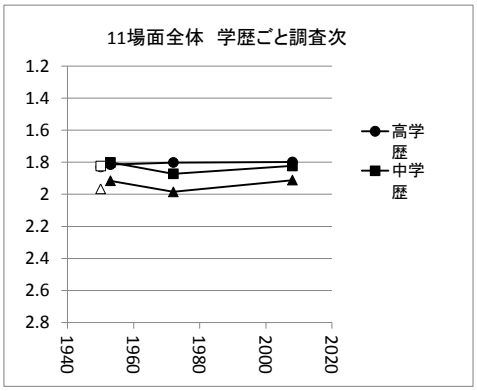


図7-1　11場面全体　学歴ごと調査次

Figure 7-1 In all the 11 contexts, by academic background, year of survey

学歴別調査次ごと年代

By academic background, generations, year of survey

年代:　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代

Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

無回答　No response

高学歴:1次P10代、60代;1次C10代;2次70代

High education: 1st proper 10's, 60's; 1st control 10's; 2nd 70's

中学歴:1次P60代;2次70代　Middle education: 1st proper 60's; 2nd, 70's

低学歴:3次20代、3次40代　Low education: 3rd, 20's and 3rd, 40's

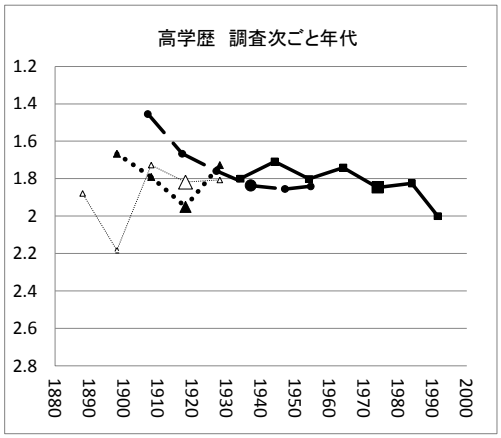


図7-2　高学歴　調査次ごと年代

Figure 7-2 High education, by year of survey, generations

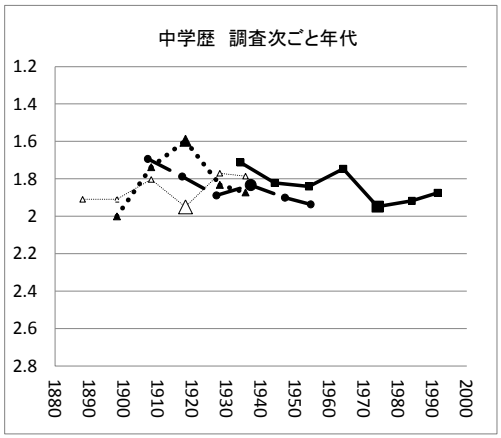


図7-3　中学歴　調査次ごと年代

Figure 7-3 Middle education, by year of survey, generations

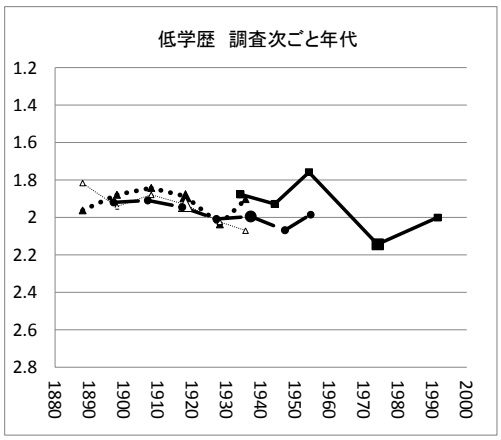


図7-4　低学歴　調査次ごと年代

Figure 7-4 Low education,by year of survey, generations

岡崎敬語調査　丁寧さ平均使用数の散布図　調査次別　場面ごと学歴(プロパーのみ)

Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'poli By year of survey, in each context, by academic background (proper or professional only)

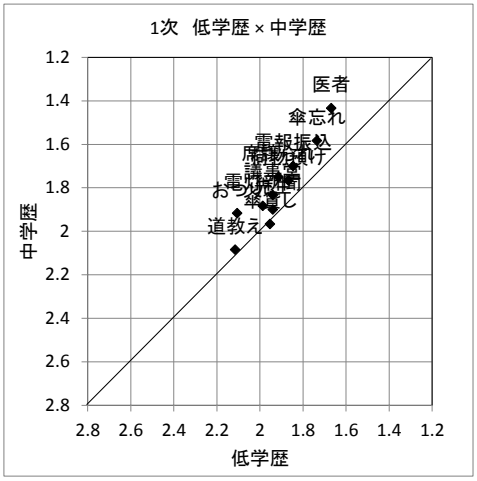


図8-1　1次　場面ごと低学歴×中学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-1　1st survey, in each context,
middle against low education (proper or professional only)

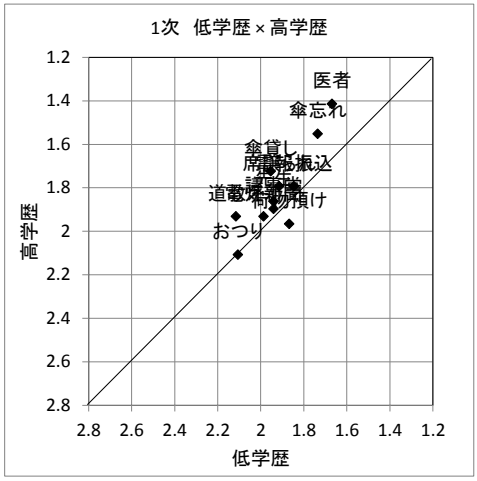


図8-2　1次　場面ごと低学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-2　1st survey, in each context,
high against low education (proper or professional only)

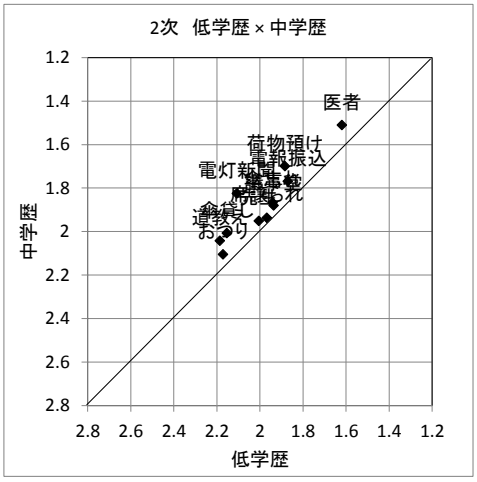


図8-3　2次　場面ごと低学歴×中学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-3　2nd survey, in each context,
middle against low education (proper or professional only)

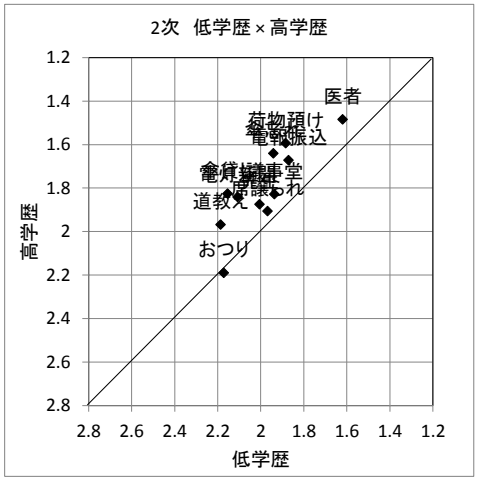


図8-4　2次　場面ごと低学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-4　2nd survey, in each context,
high against low education (proper or professional only)

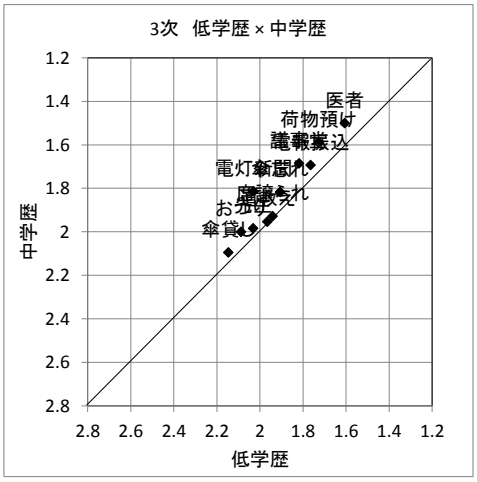


図8-5　3次　場面ごと低学歴×中学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-5　3rd survey, in each context,
middle against low education (proper or professional only)

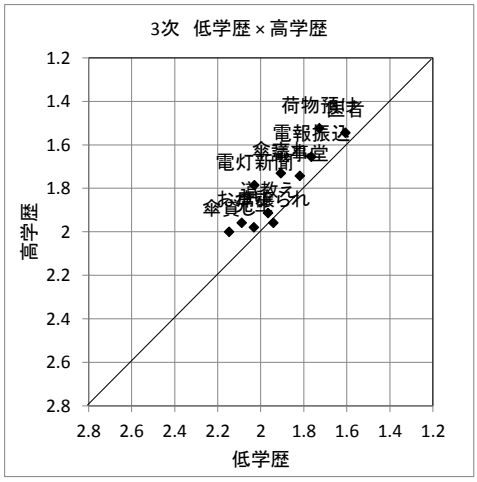


図8-6　3次　場面ごと低学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-6　3rd survey, in each context,
high against low education (proper or professional only)

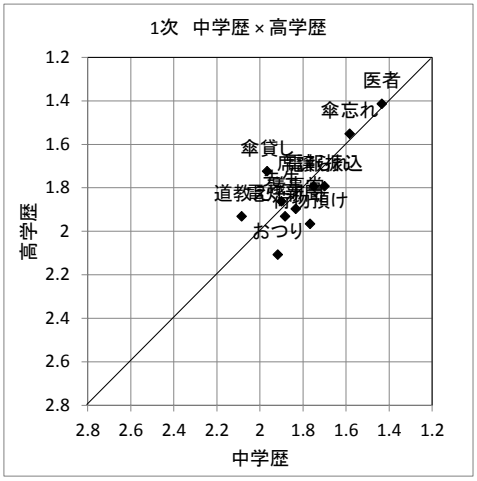


図9-1　1次　場面ごと中学歴×高学歴　（プロパーのみ）
Figure 9-1　1st survey, in each context,
high against middle education (proper or professional only)

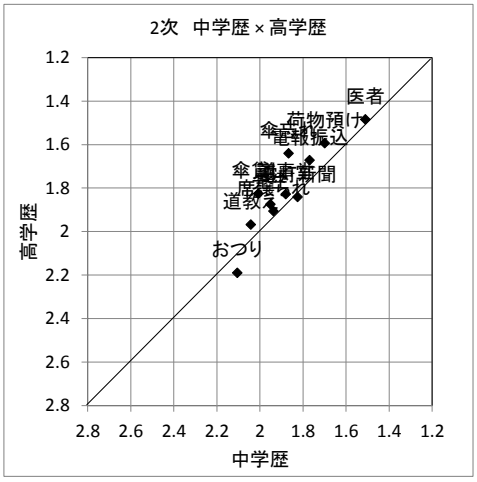


図9-2　2次　場面ごと中学歴×高学歴　（プロパーのみ）
Figure 9-2　2nd survey, in each context,
high against middle education (proper or professional only)

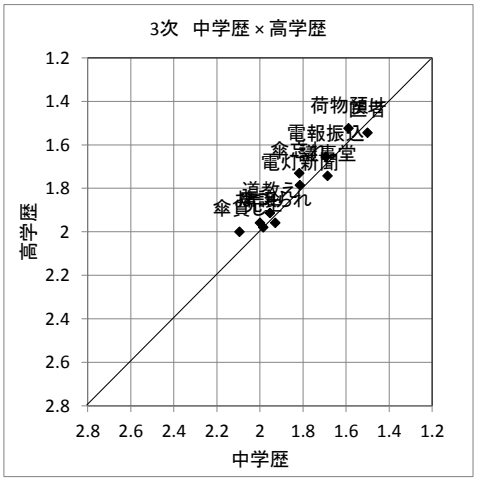


図9-3　3次　場面ごと中学歴×高学歴　（プロパーのみ）
Figure 9-3　3rd survey, in each context,
high against middle education (proper or professional only)

岡崎敬語調査　丁寧さ平均使用数と丁寧さ

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'politeness' and pliteness

11場面：　101道教え～111傘貸し

11 contexts: 101 Tell the way --- 111 Lend umbrella

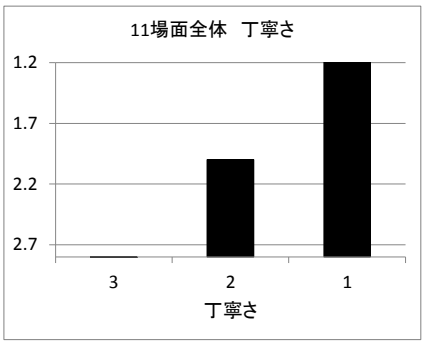


図10-1　11場面全体　丁寧さ

Figure 10-1　In all the 11 contexts, by politeness

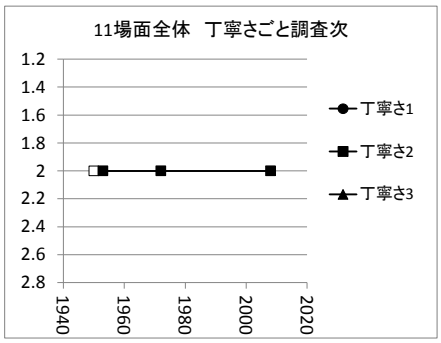


図10-2　11場面全体　丁寧さごと調査次

Figure 10-2　In all the 11 contexts, by politeness, year of survey

（◆：プロパー、◇：コントロール）

（◆：proper or professional ◇：control or college）

2.丁寧さ　第３章詳細グラフ解説

詳細グラフから読み取れることの概要

「丁寧さ」の状況について，詳細グラフ化したことにより，以下の様相が読み取れた．丁寧さの度合いが，時が経つごとに上がることが分かり，ただし若い人が先導するのでなく，中年層がいつも丁寧な言い方を答えることが分かった．「敬語の成人後採用」が敬語の典型とも言える「丁寧さの段階付け」でも観察された．

図１-１　11 場面全体　場面ごと調査次

まず図 1-1 では「丁寧さ」が全体として数十年にわたって増加しつつあることが示された．ただ第 1 次調査から第 2 次調査にかけては，一時減少する．後述のように，第 1 次調査の◆P (Proper or Professional)と◇C (Control or College)の違いが問題になる．当時の大学生（愛知学芸大学，現愛知教育大学）は，やや乱暴な言い方を得たわけだが，都会から来た研究所員に対するよりも，地元の大学生に対して，話者がふだんのことば（敬語）を多く答えた可能性を否定できない．P と C の人数はほぼ同等なので，第 1 次調査の数値を P と C の中間にプロットすると，第 2 次調査との違いがそれほど大きくならない．

後述図 2-1 によると，第 1 次調査の P と C は違いがあり，第 2 次調査は（10 代を除くと）P と C の中間になる．つまり第 1 次調査の C の値を基準にすると，丁寧さは大きくなる一方ということになる．第 2 次調査の報告書で，20 年間の変化について明瞭な結果が出にくかったのは，第 1 次調査のデータのうち，P (Proper or Professional)だけを扱ったためとも考えられる．

解明のヒントは面接調査第 1 問「道教え」である．後掲図 3-5 で見よう．「わたしのような旅行で来た者が，東岡崎駅の北口で，明代橋（みょうだいばし）はどちらかということをあなたにたずねました．何と言って教えますか．」である．第 1 次調査の調査員 P (Proper or Professional)は，「熟練した調査員 6 人」で，C (Control or College)は愛知学芸大学の男女学生 9 人だった．ここで面接の相手が，戦後まもなくの旧師範学校の学生に，年下だということで「常体（ダ体）」を使ったとして，この文体選択が第 2 問以下の場面設定にかかわらず影響を及ぼしたことが考えられる．

図１-２　11 場面全体　場面ごと調査次

「道教え」の丁寧さ

図 1-2 では場面によって増加ぶりが違うことが分かる．なおこの図の第 1 次のデータは P のみである．グラフでは道教えは丁寧さの低い場面に属し，第 1 次から第 2 次にかけて少し下がったあと第 3 次で上昇する．医者の場面では 3 回を通じて丁寧さが高い．荷物預けでは上昇ぶりが著しい．第 2 次調査で減るものが混じる．後掲の図 2 の散布図では，場面の名称と相互関係が読み取りやすい．

図 2-1　11 場面全体　調査次ごと年代

図 2-1 では 3 回の調査結果を「生年実年代による表示法」で示した．丁寧さが場面全体として数十年にわたって増加しつつあることが示された．第 1 次調査の報告書では P (proper or professional)しか扱っていないが，ここでは C (control or college)のデータも別の細い線で示した．第 3 次調査の結果が過去の調査と大きくずれることが分かった．

各調査次の年齢差を見ると，すべてでほぼ右下がり（または中高）を示す．つまり若い人の丁寧さは低く，中年層は高い．高年層は再び低くなる．1950 年の鶴岡市の共通語化調査で，10 代でなく壮年層がピークになった現象と似ている．鶴岡では「社会的活躍層」が共通語化の頂点をなすと説明された．実務での共通語使用が要求されることを想定しての命名だった．この岡崎では，類似の現象について，「成人後採用」という用語で説明する．10 代が初期採用者，先駆者，ピークでないという点では，共通のメカニズムに支配されている．

図 2-1 では, 同一コーホートに属する人々が, のちの調査でどう変わったかも読み取れる. 1940 年代前後に生まれた人たちは，（第 1 次調査では若い世代として，第 2 次で壮年層，第 3 次で高年層として）3 度の調査の対象になったが，半世紀経って際立って丁寧さを増やしている．岡崎の「ていただく」をはじめとして敬語現象でも「成人後採用」が目立ったが，岡崎調査の中心課題としての丁寧さでも認められたわけである．これは同じ生年世代の実時間 real time による比較に基づく．

一方，3 回の調査の 4 本の線すべてで，世代差という見かけの時間 apparent time で，中年層以上が丁寧で，若年層は乱暴またはぶっきらぼうという傾向が見られる．理論的射程の大きい現象である．なおこのパターンは，「大規模経年調査資料集 1」で扱った「ていただく」でも見られたし，文の長さ（モーラ数）でも見られた．日本語の「丁寧」は，長いというニュアンスも含む．もっと多くの現象とともに，総合的分析を進める必要がある．

図 2-2, 図 2-3　11 場面全体　場面ごと　調査次散布図

丁寧さについて，第 3 次調査で大きな変化があった．その性格を知るために第 1 次と第 3 次の調査結果を散布図の形で考察する．

図横軸が第 1 次, 縦軸が第 2 次・第 3 次の数値である. 丁寧な言い方が右上に位置するように, 数値を逆転した．数値 2 の線は，単純な「デスマス体」で，「あります」「すぐです」などの類である．それより上または右（少ない数値）は，もっと丁寧な言い方，下または左（多い数値）は，もっと乱暴な言い方である．

図 2-2，第 1 次，第 2 次の散布図では，変化がそれほど大きくないので，これを手がかりに第 1 次，第 2 次の丁寧さの原理を探ろう．全体は 3 グループに分かれる．まず医者が右上に飛び離れ，左下の丁寧でない言い方に道教えとおつりがある．他の場面はその中間である．相手との力関係(強い立場か弱い立場か)が影響すると読み取れる．その中で，傘忘れ，傘貸しの丁寧さが第 2 次で落ちた．他の場面でも丁寧さが落ちた．

いずれにしろ第 1 次・第 2 次の間の場面差の変化は大きくなかった．両極端で，医者という社

会的地位の高い人への依頼では丁寧さが高く，道教え，おつりという相手より優位な立場で雑になる，と説明できる．荷物預け，振込用紙，傘忘れは，相手に依頼するまたは注意するという場面なので，やや丁寧な言い方になったと，説明できる．

次に図 2-3 の第 1 次，第 3 次の散布図で，大きな変化傾向をつかむ．図 2-2 よりも散らばりが大きい．対角線の左上は第 3 次調査で丁寧さが急増した場面である．特に荷物預けが目立つ．上方に位置するのは，第 3 次調査で丁寧さの大きい項目で，医者，荷物預けを筆頭に，電報振込，議事堂のように，相手に依頼する項目が多い．右下の丁寧さの減った項目は少ない．傘貸し，席譲られが少し減っている．下半分に位置するのは自分が優位に立つ（または中立的な）場面である．左下は空白で，数値 2 の線より下にプロットされたのは傘貸しのみである．

グラフの横方向の固まりに着目すると第 3 次調査の使い分け原理が分かる．第 3 次調査では，全体として丁寧さが増したと読み取れる．話し手と相手との心理的優劣関係が，丁寧さの基準として働きはじめたようである．

図 3-1～6　図 4-1～6　場面別調査次ごと年代

図 3～4 では，場面ごとに生年実年代のグラフを示した．12 場面を第 3 次調査の平均使用数の順に並べて，3 回の調査の結果を示した（第 1 回調査の調査者による違いの P と C も分けた.）

場面により「丁寧さ」の程度は違う．また全体として増加を示す図と減少を示す図とがある．増加を示す図としては，104 傘忘れ，103 荷物預け，107 議事堂，106 電灯新聞，102 電報振込，110 おつり，101 道教えがあり，減少を示す図としては，108 医者，109 席譲られ，105 先生，111 傘貸しがある．説明原理としては，依頼では丁寧さが高まり，心理的優位に立つときには丁寧さが低くなると考えられる．

1940 年代生まれの動きをみると，**成人後採用が際立つ場面は**，医者，荷物預け，議事堂，おつり，道教えで，(医者を除くと)増加を示す図と一致する．傘忘れは，第 2 次で落ちて復帰するという変則的パターンである．年齢差としては右下がりで成人後採用が際立つ．他の項目は 3 回の 4 本の線がほぼ重なる．

調査用さし絵の変化

第 1 次，第 2 次の調査法に，何か違いがあった可能性もある．この背景として考慮すべき現象に調査用さし絵の変化がある．半世紀前と服装などが違うからというので，全部のさし絵を描き直した．メンバーの一人が唱えた「何も足さない　何も引かない」という標語は，守られなかった．以上の変化にさし絵がどれほど影響したかは，判定が難しい．

しかし図 3～4 を詳細に見れば分かるとおり，ほぼすべての場面（反応文）で「丁寧さ」は一定の変化を示す．永い歴史的変化過程の中に位置付けて，考えるべきだろう．

第 2 次調査の報告書では，約 20 年の変化についての記述で，歯切れが悪いが，このグラフによれば，仕方がない．第 3 次調査による半世紀以上という長いタイムスパンをおいてはじめて，変化の趨勢をつかめたことになる．敬語は一般にことばの「乱れ」論議の対象になりやすいが，

変化しやすいとは言っても，個人差や場面差が大きく，文脈別の用法まで考えると，大量調査によっても，確定しにくい現象がある．

図 5 以下では，性別・学歴別にグラフを示した．5〜6 ページが性別，7〜9 ページが学歴に関わるものである．女性の丁寧度が高いこと，高学歴の丁寧度が高いことが，くっきりと示された．

図 5-1 外的　社会項目　性別

図 5-1 では男女差を大まかに確認できる．3 回の調査で，差が縮まったと見られる．

図 5-2〜3 では性別に 4 本の線を見る．図 5-2 男性の場合は，太い 3 本の線の年齢差を見せずに，のちになるほど上に位置する．つまり丁寧な言い方が増えている．図 5-3 女性では，第 1 次と第 2 次の太い線の位置が逆転するが，第 3 次で上方に移動し，右下がりは維持される．典型的な成人後採用繰り返しパターンである．

図 5-4〜6 外的　社会項目　性別

図 5-4〜6 では 3 回の調査ごとに，性差の場面による違いを見る．散布図によれば，第 1 次から第 3 次のいつの段階でも全場面左上に位置する．つまり女性のほうが丁寧さの高い表現を使う．性差は大きい．第 1 次と 2 次では医者が男女ともトップだったが，第 3 次で女性が荷物預けの丁寧さを急上昇させた．全体で見た流れを女性が先導していたと，解釈できる．

図 6-1〜4 外的　社会項目　性別，調査次別

図 6-1〜4 では男女を左右に分けた上で，場面による調査次ごとの違いを見る．4 個の散布図を全体として比べると，右側の女性で場面が上方に固まる．また右下図 6-4 の女性の 1 次 3 次の組み合わせで，散らばりが大きい．つまり女性のほうが丁寧なことばを使うし，第 3 次で場面別の使い分け基準を大きく変えた（それまでの医者場面でなく，荷物預け場面で丁寧になった）．左下の図 6-3 によれば，男性も第 3 次になって，場面別の使い分け基準を変えたと見られる．

図 7-1　学歴別

図 7-1 以下では学歴を扱う．**図 7-1** では高学歴ほど丁寧さが高いという比例関係が見える．ただし，第 2 次では明確だが，第 1 次と 3 次では高学歴と中学歴の違いが小さい．

図 7-2〜4　学歴別

生年実年代のグラフで見ると，年代差がある．**図 7-2** の高学歴の高年層は丁寧である．右下がりの線が繰り返されるというパターンがきれいに示された．**図 7-3** の中学歴は線が乱れる．**図 7-3** の低学歴では，中高のパターンが示され，第 3 次で丁寧な言い方が多くなった．各学歴の各年齢層の人数は違うが，きれいな成人後採用パターンを示すのが高学歴に多いと考えられる．

図 8-1～6 学歴別　散布図　調査次

図 9-1～3 学歴別　散布図　調査次

図 8-1～9-3 は 3×3 の 9 枚セットである．学歴 3 段階と調査 3 回を組み合わせて比較する．はじめに全体を概観すると，9 枚ともほぼ全場面が左上にプロットされる．つまり学歴が高いほど丁寧な言い方を多く使う．またほぼすべてのグラフで医者が左上になる．図 8-6 下中と図 8-7 下左は例外で, 荷物預けと重なる. つまり荷物預けという依頼場面で丁寧な言い方を増やしたのは, 第 3 次調査の高学歴ということである．敬語の民主化・平等化の典型ともいえる現象だが，人間関係の把握とそれに伴うことばの選択について，高学歴の市民が先駆的役割を担ったと考えられる．

図 10-1 丁寧さ

図 10-2　丁寧さごと調査次

他のグラフに合わせて自動的に出力されたグラフである．同じ項目どうしのクロスグラフなので，解説は略す．

詳細グラフ2　第4章2-2文末「ゴザル．」

岡崎敬語調査　文末ござる平均使用数

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'gozaru (final position)'

11場面：　101道教え～111傘貸し　　11 contexts: 101 Tell the way ~~~ 111 Lend umbrella

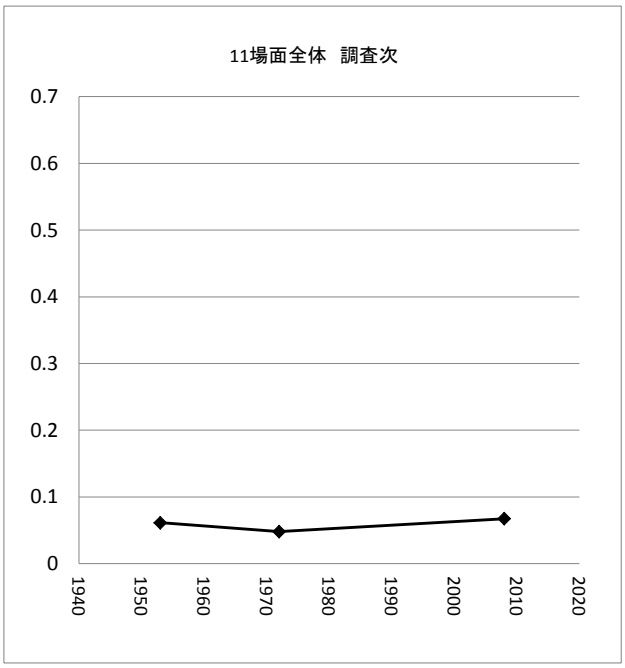


図1-1　11場面全体　調査次　（◆：プロパー、◇：コントロール）

Figure 1-1　In all the 11 contexts, by year of survey (◆: proper or professional ◇: control or college)

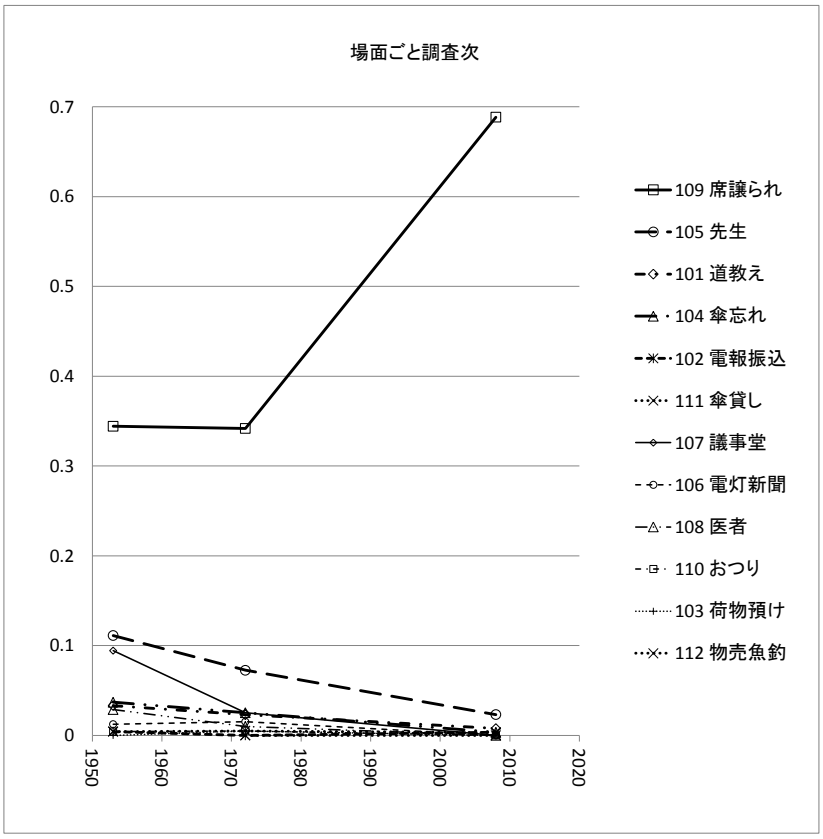


図1-2　場面ごと調査次　（プロパーのみ）

Figure 1-2　In each context, by year of survey (proper or professional only)

岡崎敬語調査　文末ござる平均使用数　11場面全体調査次ごと年代

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'gozaru (final positi All the 11 contexts　by generations of three surveys

11場面：　101道教え～111傘貸し　　11 contexts: 101 Tell the way ~~~ 111 Lend umbrella

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代　　Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

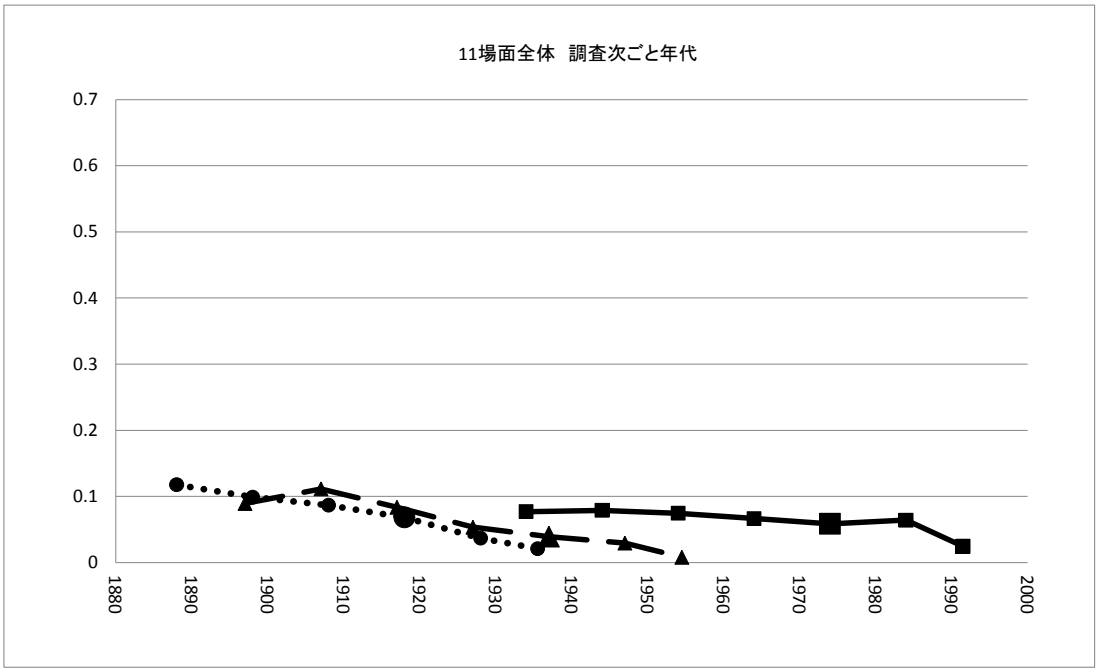


図2-1　11場面全体　調査次ごと年代　（◆：プロパー、◇：コントロール）

Figure 2-1　All the 11 contexts, generations of three surveys (◆: proper or professional ◇: control or college)

岡崎敬語調査　文末ござる平均使用数の散布図　場面ごと調査次(プロパーのみ)

Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'gozaru (final p In each context, by year of survey (proper or professional only)

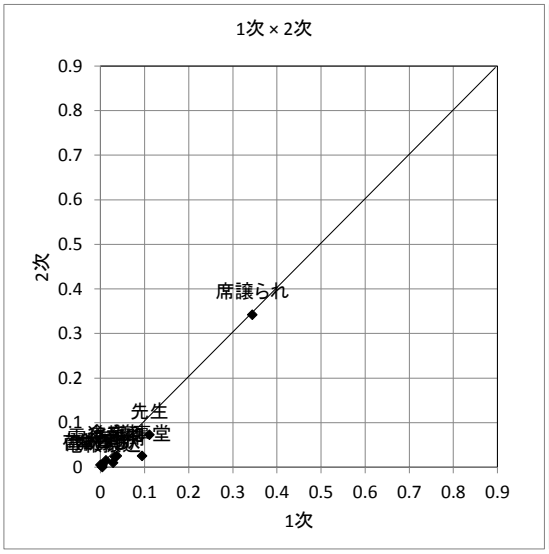


図2-2　場面ごと1次×2次　（プロパーのみ）

Figure 2-2　2nd against 1st survey, in each context (proper or professional only)

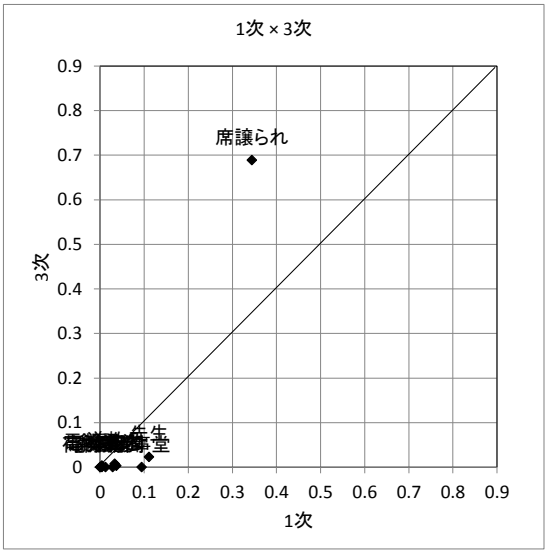


図2-3　場面ごと1次×3次　（プロパーのみ）

Figure 2-3　3rd against 1st survey, in each context (proper or professional only)

岡崎敬語調査　文末ござる平均使用数　場面別調査次ごと年代

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'gozaru (final positi In each context, by generations, year of survey

場面：　縦に第3次平均使用数順 Context: Figure No. is given in order of the average usage rate in the third survey.

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代

Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

◆：プロパー、◇：コントロール

(◆: proper or professional ◇: control or college)

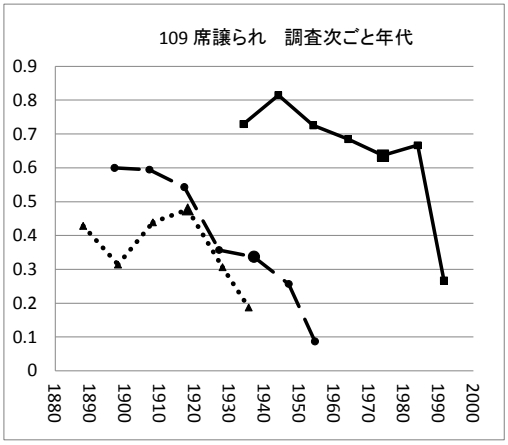


図3-1　109席譲られ　調査次ごと年代

Figure 3-1 In 109 Offered seat, by year of survey, generations

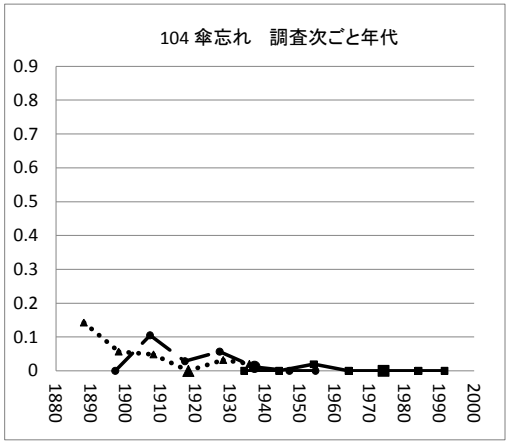


図3-4　104傘忘れ　調査次ごと年代

Figure 3-4 In 104 Left umbrella, by year of survey, generations

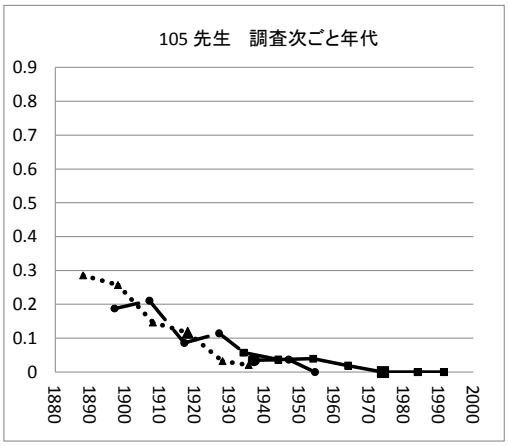


図3-2　105先生　調査次ごと年代

Figure 3-2 In 105 Ex-teacher, by year of survey, generations

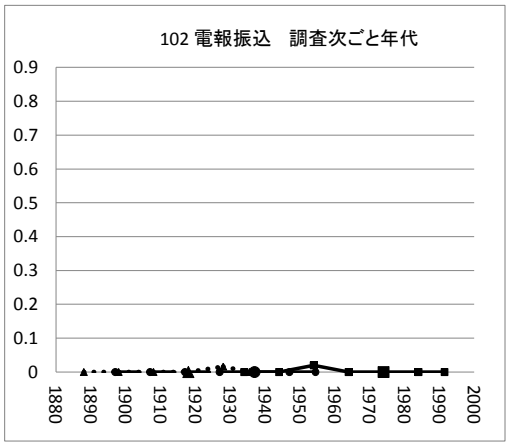


図3-5　102電報振込　調査次ごと年代

Figure 3-5 In 102 Remittance slip, by year of survey, generations

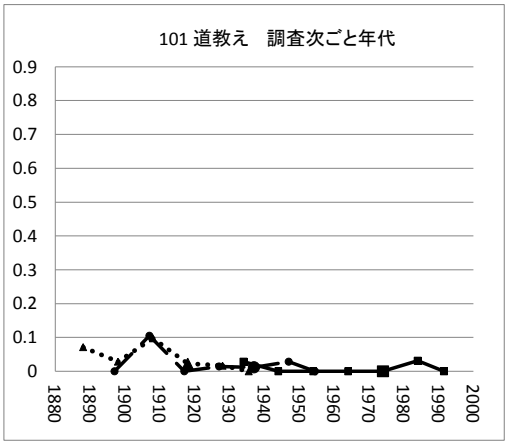


図3-3　101道教え　調査次ごと年代

Figure 3-3 In 101 Tell the way, by year of survey, generations

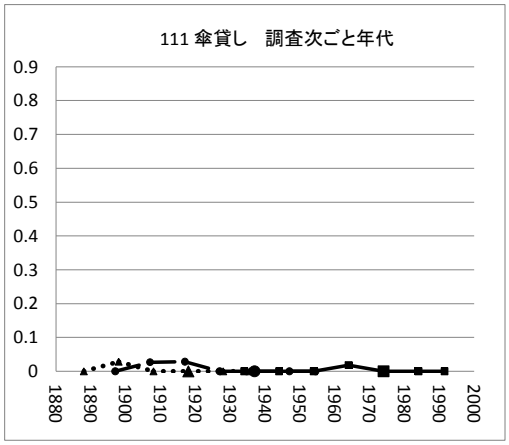


図3-6　111傘貸し　調査次ごと年代

Figure 3-6 In 111 Lend umbrella, by year of survey, generations

岡崎敬語調査　文末ござる平均使用数　場面別調査次ごと年代　（続き）

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'gozaru (final positi In each context, by generations, year of survey (continued)

場面：　縦に第3次平均使用数順 Context: Figure No. is given in order of the average usage rate in the third survey.

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代　　◆：プロパー、◇：コントロール

Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's (◆: proper or professional ◇: control or college)

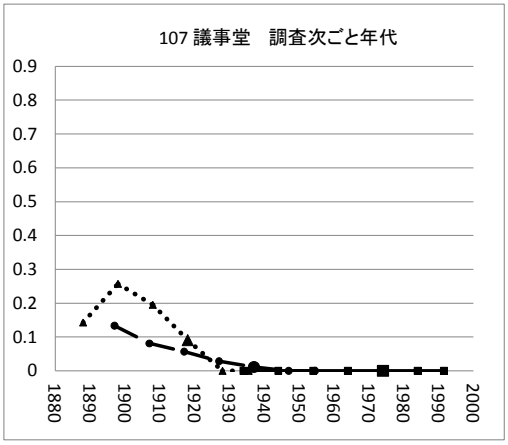


図4-1　107議事堂　調査次ごと年代

Figure 4-1 In 107 National Diet, by year of survey, generations

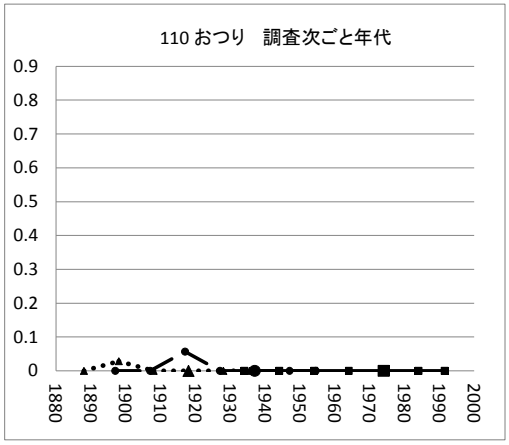


図4-4　110おつり　調査次ごと年代

Figure 4-4 In 110 Small change, by year of survey, generations

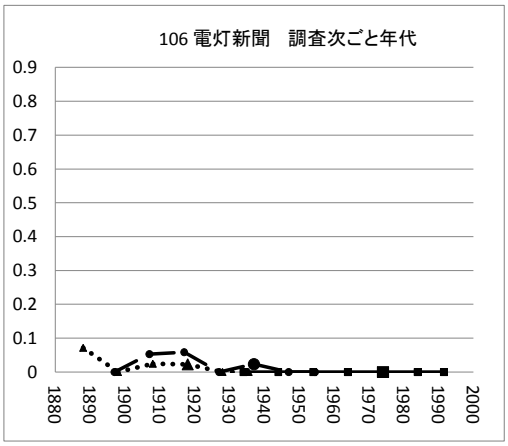


図4-2　106電灯新聞　調査次ごと年代

Figure 4-2 In 106 Newspaper bill, by year of survey, generations

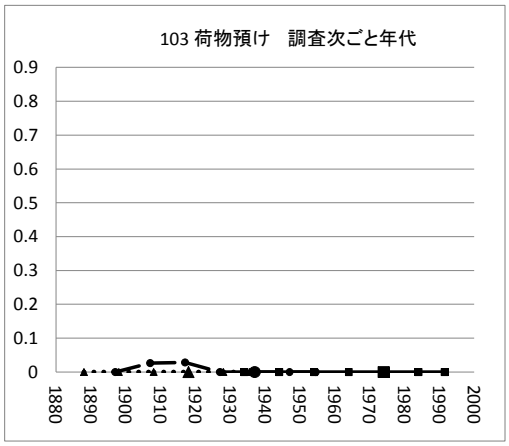


図4-5　103荷物預け　調査次ごと年代

Figure 4-5 In 103 Check baggage, by year of survey, generations

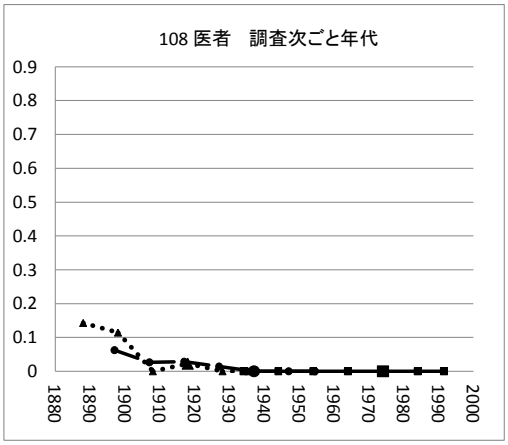


図4-3　108医者　調査次ごと年代

Figure 4-3 In 108 Doctor, by year of survey, generations

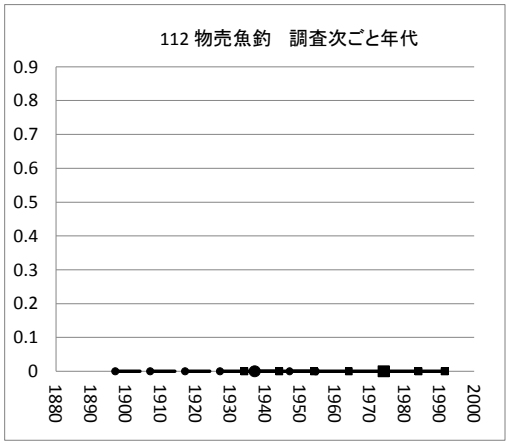


図4-6　112物売魚釣　調査次ごと年代

Figure 4-6 In 112 Fishing, by year of survey, generations

岡崎敬語調査　文末ござる平均使用数とその散布図

Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'gozaru (final position)'

11場面全体　性別ごと調査次

All the 11 contexts, by gender, year of survey

11場面：　101道教え～111傘貸し

11 contexts: 101 Tell the way --- 111 Lend umbrella

◆：プロパー、◇：コントロール

◆: proper or professional ◇: control or college

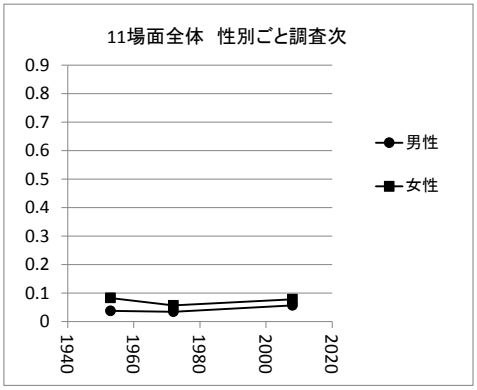


図5-1　11場面全体　性別ごと調査次

Figure 5-1 In all the 11 contexts, by gender, year of survey

男女別調査次ごと年代

By gender, generations, year of survey

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代

Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

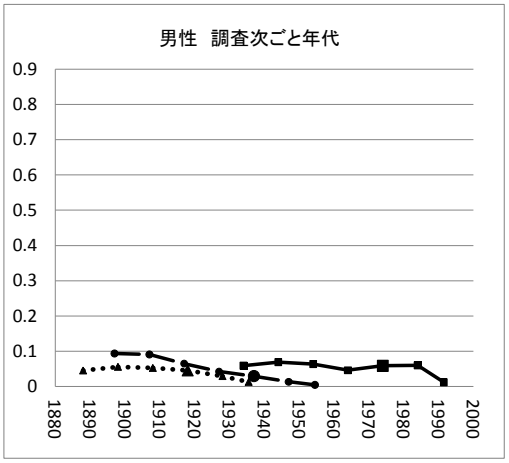


図5-2　男性　調査次ごと年代

Figure 5-2　Male, by year of survey, generations

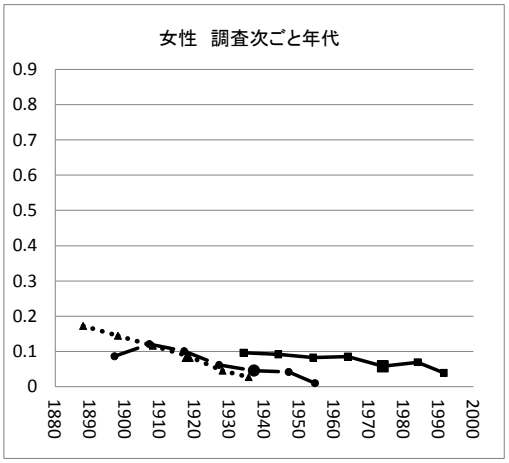


図5-3　女性　調査次ごと年代

Figure 5-3　Female, by year of survey, generations

調査次別　場面ごと性別（プロパーのみ）

By year of survey,　in each context, by gender (proper or professional only)

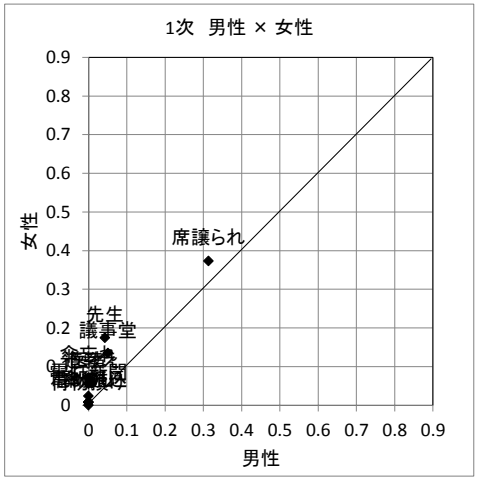


図5-4　1次　場面ごと男性×女性　（プロパーのみ）

Figure 5-4　1st survey, in each context,
female against male (proper or professional only)

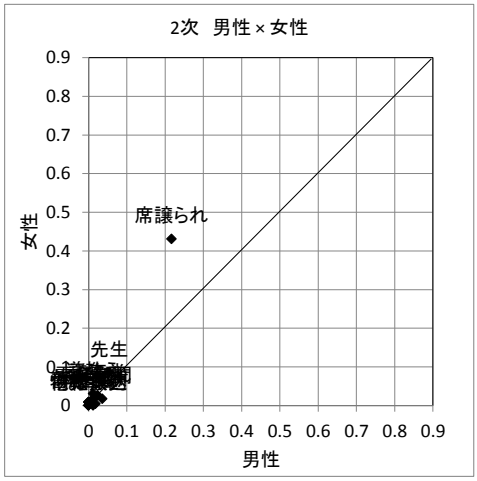


図5-5　2次　場面ごと男性×女性　（プロパーのみ）

Figure 5-5　2nd survey, in each context,
female against male (proper or professional only)

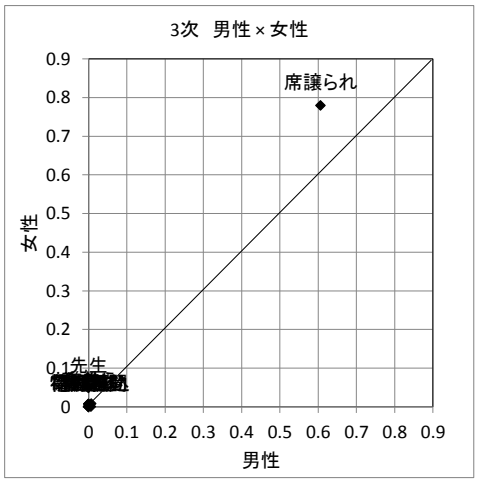


図5-6　3次　場面ごと男性×女性　（プロパーのみ）

Figure 5-6　3rd survey, in each context,
female against male (proper or professional only)

岡崎敬語調査　文末ござる平均使用数の散布図　男女別　場面ごと調査次(プロパーのみ)

Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'goz By gender, in each context, by year of survey (proper or professional only)

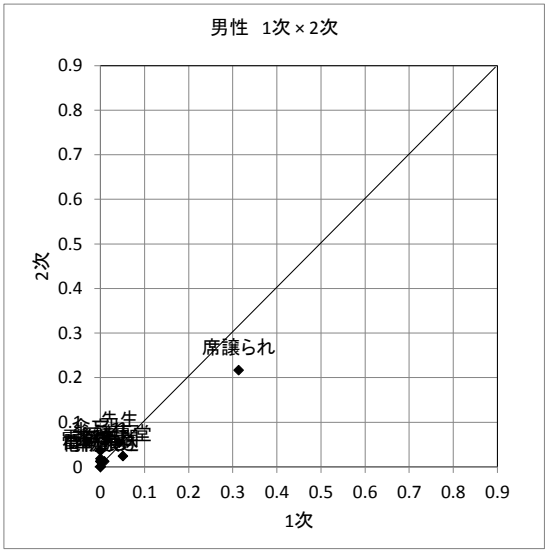


図6-1　男性　場面ごと1次×2次　(プロパーのみ)

Figure 6-1　Male, 2nd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

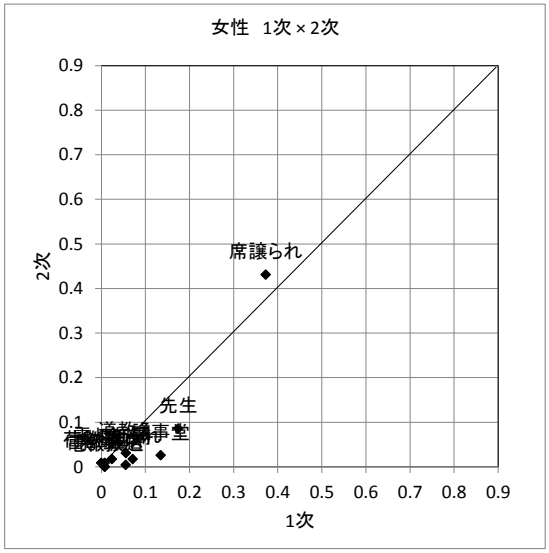


図6-2　女性　場面ごと1次×2次　(プロパーのみ)

Figure 6-2　Female, 2nd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

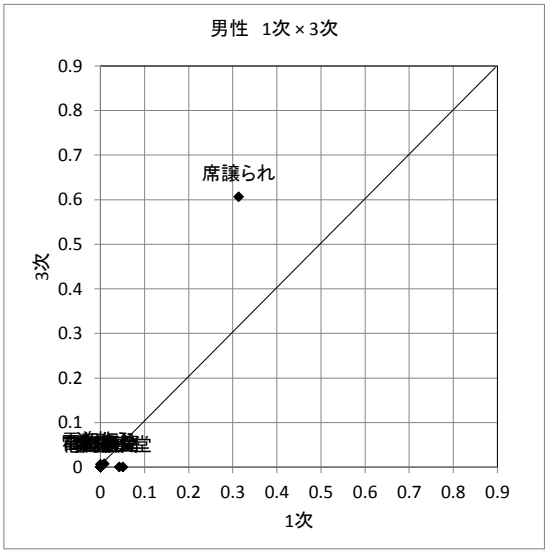


図6-3　男性　場面ごと1次×3次　(プロパーのみ)

Figure 6-3　Male, 3rd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

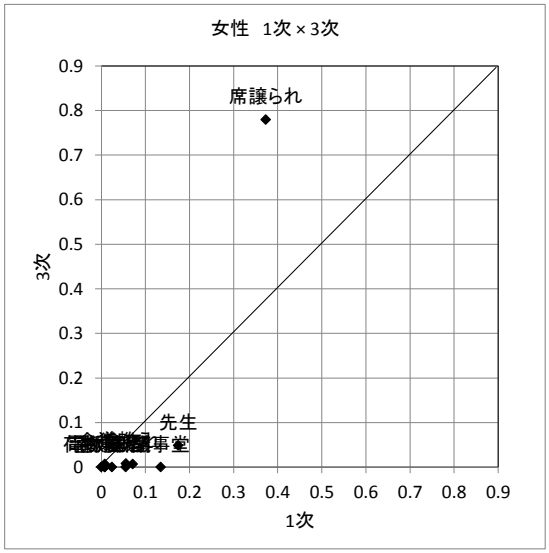


図6-4　女性　場面ごと1次×3次　(プロパーのみ)

Figure 6-4　Female, 3rd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

岡崎敬語調査　文末ござる平均使用数　　◆: プロパー、◇: コントロール

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'gozaru (◆: proper or professional ◇: control or college

11場面全体　学歴ごと調査次

All the 11 contexts, by academic background, year of survey

11場面:　101道教え～111傘貸し

11 contexts: 101 Tell the way --- 111 Lend umbrella

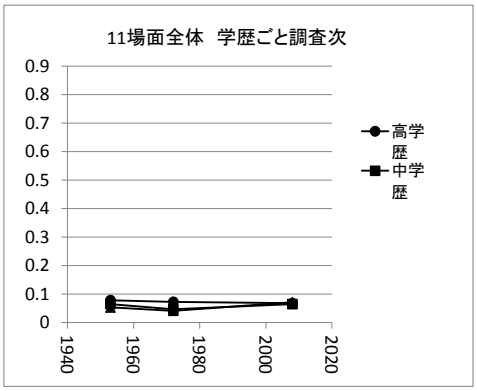


図7-1　11場面全体　学歴ごと調査次

Figure 7-1 In all the 11 contexts, by academic background, year of survey

学歴別調査次ごと年代

By academic background, generations, year of survey

年代:　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代

Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

無回答　No response

高学歴:1次P10代、60代;1次C10代;2次70代

High education: 1st proper 10's, 60's; 1st control 10's; 2nd 70's

中学歴:1次P60代;2次70代　Middle education: 1st proper 60's; 2nd, 70's

低学歴:3次20代、3次40代　Low education: 3rd, 20's and 3rd, 40's

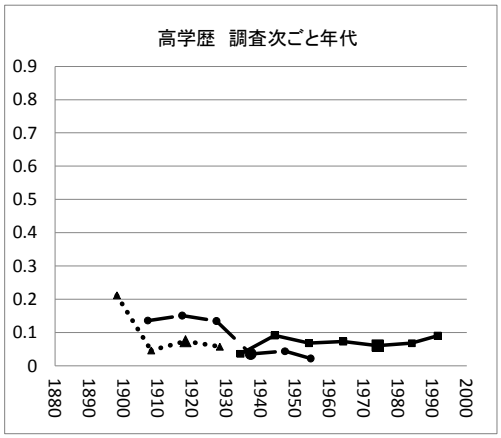


図7-2　高学歴　調査次ごと年代

Figure 7-2 High education, by year of survey, generations

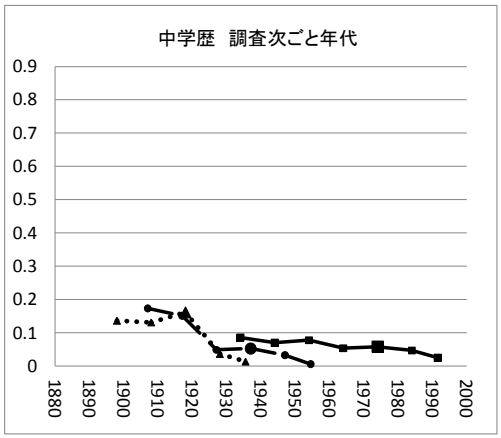


図7-3　中学歴　調査次ごと年代

Figure 7-3 Middle education, by year of survey, generations

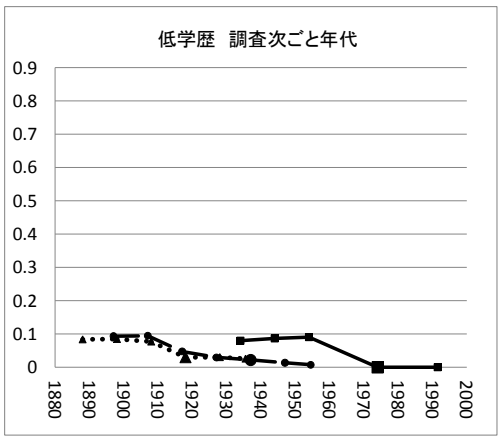


図7-4　低学歴　調査次ごと年代

Figure 7-4 Low education,by year of survey, generations

岡崎敬語調査　文末ござる平均使用数の散布図　調査次別　場面ごと学歴(プロパーのみ)

Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'goz By year of survey, in each context, by academic background (proper or professional only)

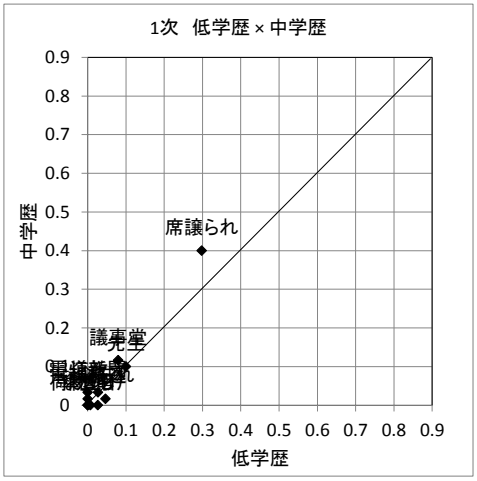


図8-1　1次　場面ごと低学歴×中学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-1　1st survey, in each context,
middle against low education (proper or professional only)

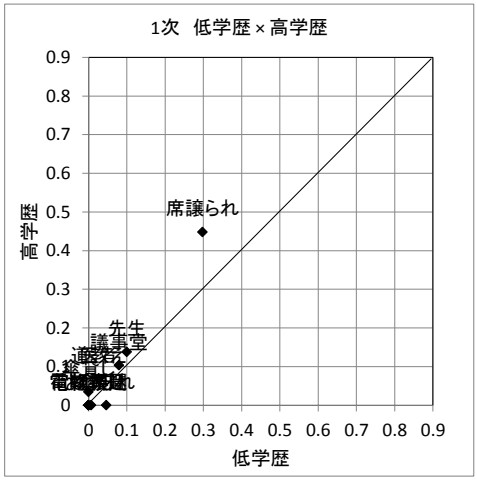


図8-2　1次　場面ごと低学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-2　1st survey, in each context,
high against low education (proper or professional only)

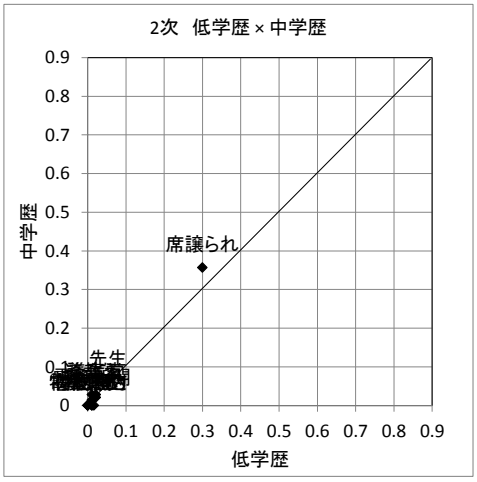


図8-3　2次　場面ごと低学歴×中学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-3　2nd survey, in each context,
middle against low education (proper or professional only)

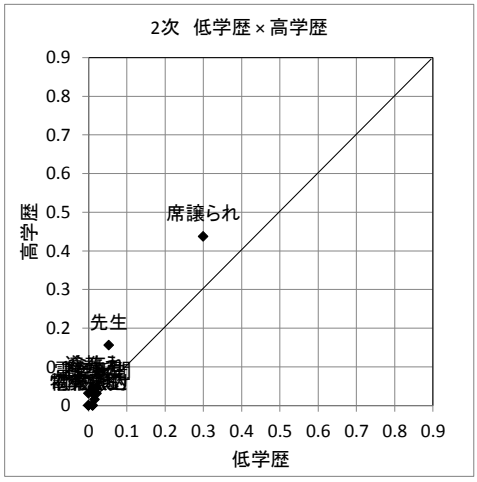


図8-4　2次　場面ごと低学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-4　2nd survey, in each context,
high against low education (proper or professional only)

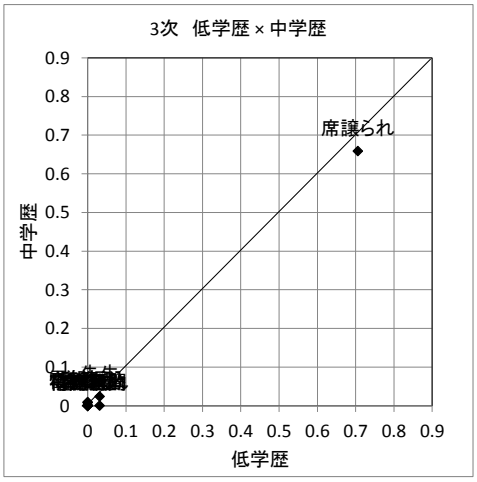


図8-5　3次　場面ごと低学歴×中学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-5　3rd survey, in each context,
middle against low education (proper or professional only)

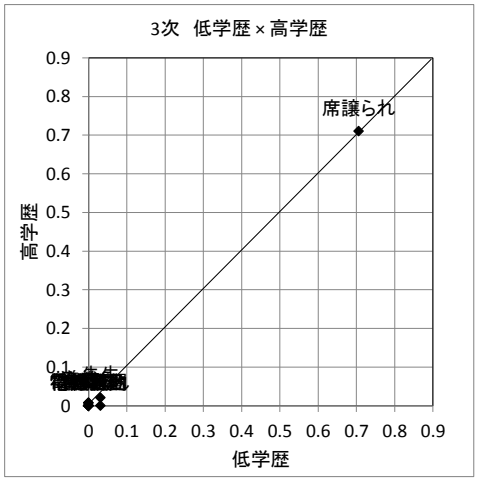


図8-6　3次　場面ごと低学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-6　3rd survey, in each context,
high against low education (proper or professional only)

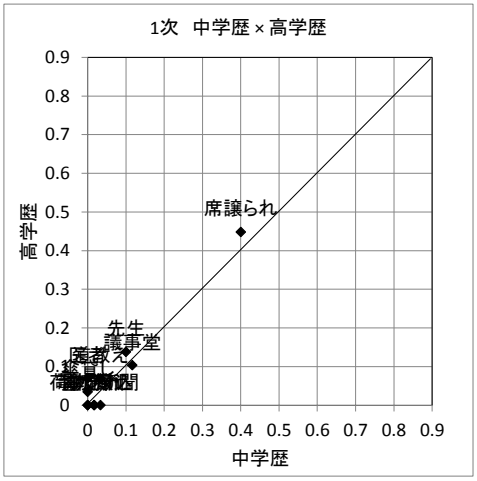


図9-1　1次　場面ごと中学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 9-1　1st survey, in each context,
high against middle education (proper or professional only)

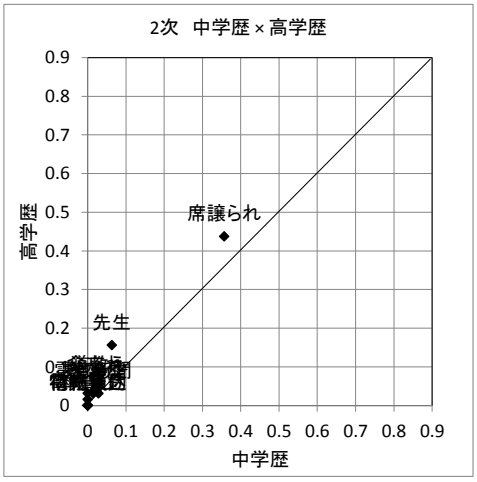


図9-2　2次　場面ごと中学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 9-2　2nd survey, in each context,
high against middle education (proper or professional only)

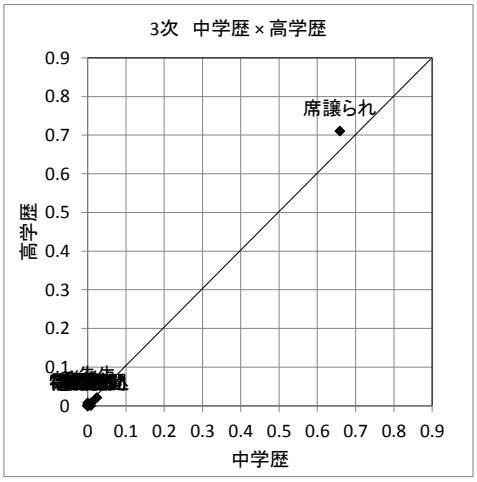


図9-3　3次　場面ごと中学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 9-3　3rd survey, in each context,
high against middle education (proper or professional only)

岡崎敬語調査　文末ござる平均使用数と丁寧さ

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'gozaru (final position)' and pliteness

11場面：　101道教え～111傘貸し

11 contexts: 101 Tell the way --- 111 Lend umbrella

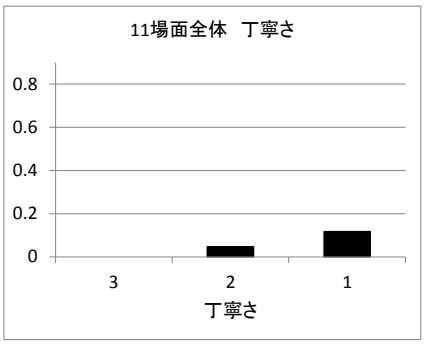


図10-1　11場面全体　丁寧さ

Figure 10-1　In all the 11 contexts, by politeness

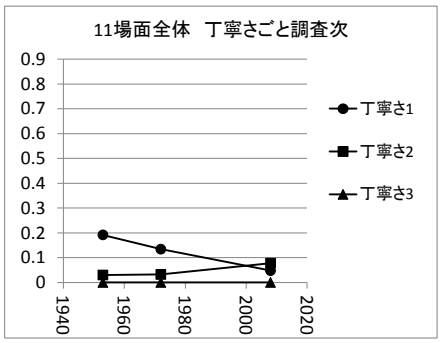


図10-2　11場面全体　丁寧さごと調査次

Figure 10-2　In all the 11 contexts, by politeness, year of survey

（◆：プロパー、◇：コントロール）

（◆：proper or professional ◇：control or college）

2.2. 文末「ゴザル.」の成人後採用　詳細グラフ解説

以下では「デゴザイマス体」(特別丁寧体，御丁寧体)を扱う．手がかりとして，「ゴザル」（実質的には「ゴザイマス」）の出現を見る．

実際の使用率は大変低い．後述のように使用場面も限られていて，ほぼ「席譲られ」のみである．他は「先生」と「議事堂」でともに自分に関する紹介の入りうる場面である．現代敬語の特質の一つで，「ゴザル」が単独で使われることはまれで，丁寧語マスが付き，岡崎の文例の大部分はお礼の「ありがとうございます」である．

「ありがとうございます」の文体的位置付けには問題がある．ダ体・デスマス体・デゴザイマス体に 3 分したときに，対応が体系的でないからである．ダ体の文脈では「ありがとう」で十分である．デゴザイマス体には「ありがとうございます」がふさわしい．しかし中間のデスマス体には「ありがとう」では不十分で，「ありがとうございます」は丁寧すぎる．ちょうど「おはよう」と「おはようございます」の使い分けと似ている．これに対して「こんにちは」は文体的使い分けがない．

現在デスマス体の確立に伴ってさまざまなことばにデスマスが付くようになった．「それでですね，そこでですね，なるほどですね」などである．しかし「ありがとう」にはデスの付いた形が成立していない．この事情が岡崎の「ございます」の年齢差に働いたと見ることもできる．

図 1-1　12 場面全体　場面ごと調査次

図 1-1 に 12 場面全体の文末の「ゴザル」の出現頻度推移を示した．少ない上に横ばいで，一定方向の推移を示さない．

図 1-2　12 場面全体　場面ごと調査次

図 1-2 は 12 場面個々の推移を示す．横軸は 3 回の調査の間隔，実時間（19 年と 36 年）に合わせた．どの場面で多いかは，図 2-2-,2-3 のほうが分かりやすい．顕著な増加が「席譲られ」で見られた．減少を示したのは「先生，議事堂」などである．

図 2-1　12 場面全体　調査次ごと年代

図 2-1 の生年実年代による 12 場面全体の「ゴザル」使用は，右下がり復活パターンとでも呼びうるものである．典型的な成人後採用を示す．形から「川の字変化」「Ⅱの字変化」と呼べる．これまでモーラ数，いただく，丁寧さなどで観察された．「ございます」を使いこなすのは，若いときではなく，壮年期以降であることによる．ただし使用頻度数は少ない．

第 3 節で後述の「デスマス」では順調な右上がりパターンである．第 3 章丁寧さで見られた右下がり復活パターン，「川の字変化」は，「ゴザル」の影響で生じたと推定できる．しかも「席譲られ」の「ありがとうございます」に影響された可能性がある．

図 2-2, 図 2-3　12 場面全体　場面ごと　調査次散布図

図 2-2, 図 2-3 では，散布図を用いて，第 2 次，第 3 次で増加した場面を見分けやすく示した．対角線の左上はモーラ数の増えた場面である．「席譲られ」が他と離れることが，示された．特に第 3 次調査で増えた．前述のように，第 3 次調査で減少を示したのは「先生，議事堂」などである．

図 3-1～6　図 4-1～6　場面別調査次ごと年代

図 3～4 では，場面ごとに生年実年代のグラフを示した．12 場面ごとの計 100 年近くの推移が分かる．全体グラフと同様の右下がり復活パターンがあるかに着目すると，「席譲られ」が典型である．他の 11 場面と使用度数に大きな違いがあることに注意すべきである．第 1,2 次で「ゴザル」が多少とも使われていた場面は，「席譲られ，先生，道教え，傘忘れ，議事堂，おつり，新聞代，医者，荷物預け」などである．場面差が甚だしい．「席譲られ」がきれいな「川の字変化」を示す．お礼のあいさつとして「～ございます」を使いこなせるようになるのは，半世紀間にわたって 20 代以降である．他の場面では使用率が低い．「先生」場面は 3 回の調査をつなげると，衰退のパターンである．実際にあいさつ以外の形でゴザイマス体を使う機会は少なくなっている．さらに先生に対する社会的態度が変化したという非言語的事情もある．国民性調査で「先生の不祥事をこどもに言うか」という問について，昔は聖職者扱いしていたのが，今はふつうの人間として扱うように変化したという経年変化と平行的である．当然ながら，同等または目下とされる話し相手が登場する「電報振込」「電灯新聞」「おつり」「荷物預け」「傘貸し」「物売魚釣」ではあまり使われない．

図 5-1 外的　社会項目　性別

図 5-1 でみると性差はある．第 1 次調査では女性が男性の 2 倍近く使っていたが，第 3 次ではお互いに近づいた．

図 5-2～6 外的　社会項目　性別

図 5-2～3 では男女に分けて，生年実年代グラフで 100 年以上の変化を見る．男性できれいな川の字変化が見られたが，女性は第 2 次の高年層の線が少し乱れた．女性が多く使う傾向はどの世代でも見られた．

図 5-4～6 で性差の場面による違いを見る．散布図によれば，使われる場面がほぼ「席譲られ」に限定され，しかも第 3 次で多く使われる．

図 6-1～4 外的　社会項目　性別，調査次別

図 6-1～4 では性差の場面による違いを調査次ごとに細分して見る．「ゴザル」の使用はほぼ「席譲られ」に限られ，他は使用率が低い．1 次から 2 次にかけては男性で減り，女性で増える．1 次から 3 次にかけては男性と女性で増える．あいさつで使われる文末「ゴザル」は，増加過程と

みてよい.

図 7-1 学歴別

図 7-1 以下では学歴差を扱う.かつては学歴差が少しあったが,第 3 次で差が見えなくなった.

図 7-2　高学歴　学歴別

図 7-3　中学歴　学歴別

図 7-4　低学歴　学歴別

図 7-2～4 によれば，どの学歴でも川の字変化が観察される．第 3 次の高学歴が使いこなしているのは，この時代には大学生の割合が増えたことにもよるだろう．

図 8-1～6 学歴別　散布図　調査次

図 8-1 以下 9 枚セットのグラフで学歴差を見る.「席譲られ」の大きな値の動きが見えるが,他の場面も見える．どの図でも学歴が高いほど多く使う．

下段の**図 8-5，8-6，9-3**，第 3 次の結果を見ると，「席譲られ」以外の場面差がなくなった.高学歴が先生の場面でやや多く使う．

図 10-1 丁寧さ

図 10-1 によれば，丁寧さ 1 のゴザイマス体中心の場面で一番多く使われるが，丁寧さ 2 のデスマス体でも多い．あいさつ文で使われるからである．

図 10-2　丁寧さと調査次

図 10-2 によれば，第 1 次から第 3 次にかけて，丁寧さ 1 のゴザイマス体の場面でかなり減少しているが，丁寧さ 2 のデスマス体では微増している．定型的な表現で使われるのだろう．

以上，文末の「ゴザル」使用に関して生年実年代とからめて年次推移を考察し，かつ性，学歴という言語外的条件との関係を見た.「丁寧さ（の段階づけ)」で観察されたのと同様のきれいな川の字変化が見られた．「ありがとうございます」などの表現で使われたのだろう．

詳細グラフ3　第4章2-3文中「ゴザル」

岡崎敬語調査　文中ござる平均使用数

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'gozaru (medium position)'

11場面：　101道教え～111傘貸し　　11 contexts: 101 Tell the way ~~~ 111 Lend umbrella

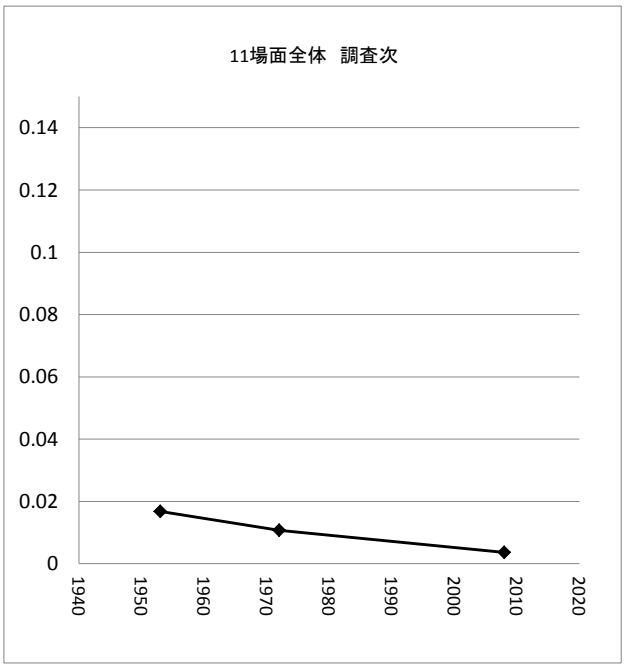


図1-1　11場面全体　調査次　（◆：プロパー、◇：コントロール）

Figure 1-1　In all the 11 contexts, by year of survey (◆: proper or professional ◇: control or college)

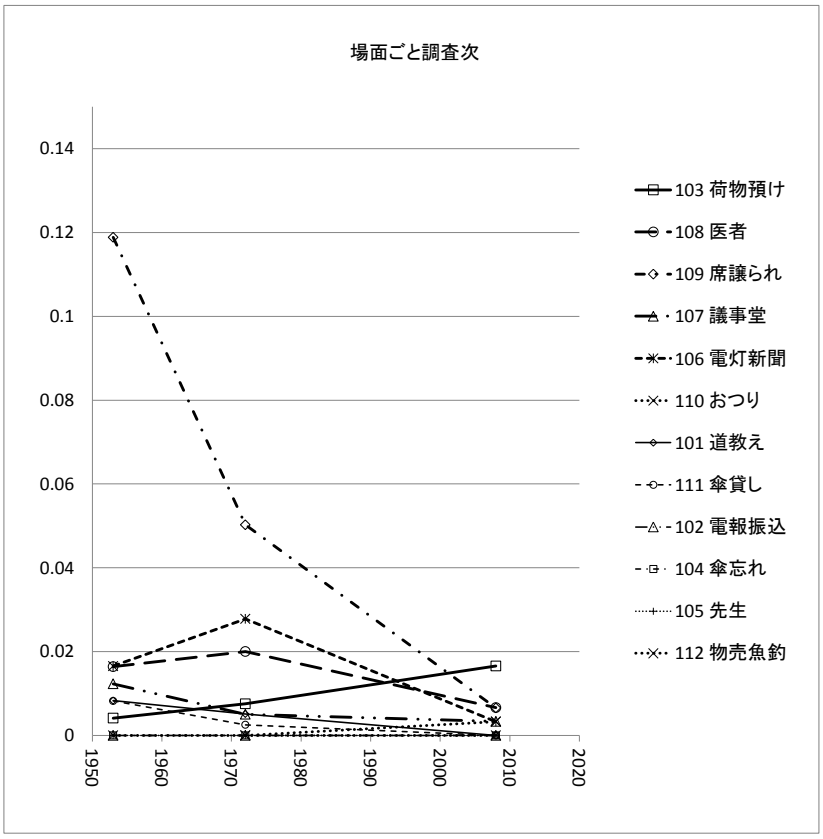


図1-2　場面ごと調査次　（プロパーのみ）

Figure 1-2　In each context, by year of survey (proper or professional only)

岡崎敬語調査　文中ござる平均使用数　11場面全体調査次ごと年代

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'gozaru (medium po All the 11 contexts　by generations of three surveys

11場面：　101道教え～111傘貸し　　11 contexts: 101 Tell the way ~~~ 111 Lend umbrella

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代　　Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

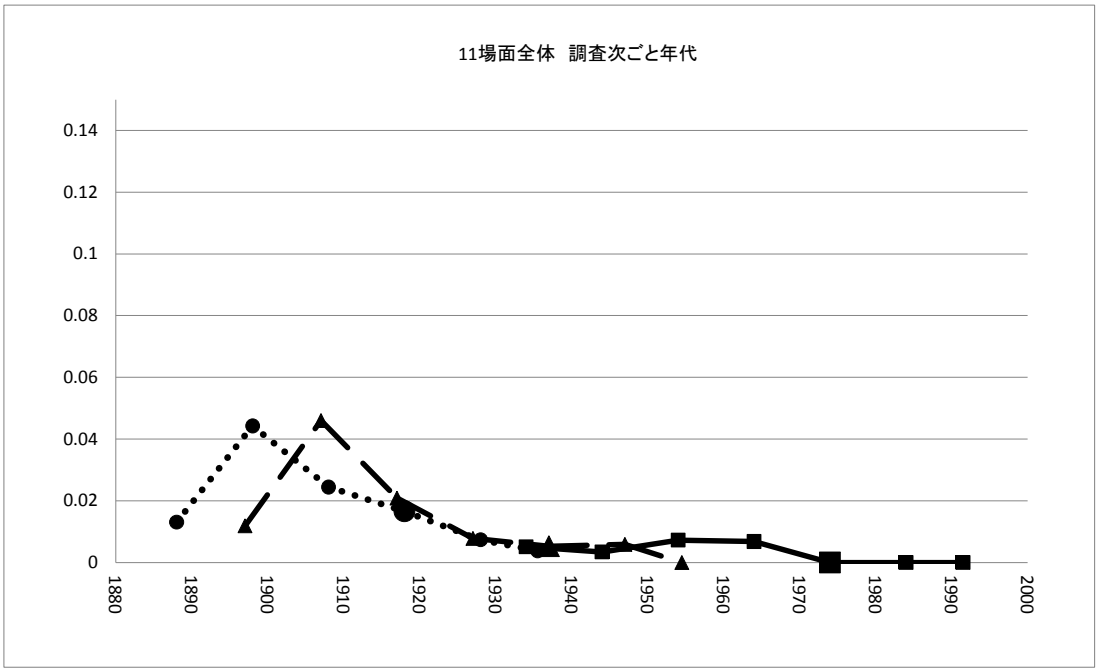
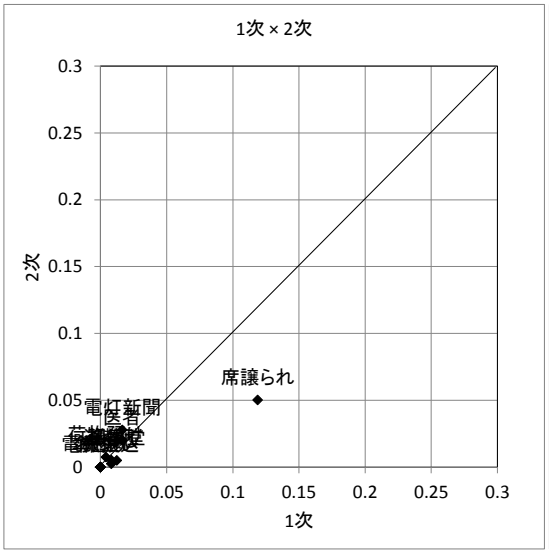


図2-1　11場面全体　調査次ごと年代　（◆：プロパー、◇：コントロール）

Figure 2-1　All the 11 contexts, generations of three surveys (◆: proper or professional ◇: control or college)

岡崎敬語調査　文中ござる平均使用数の散布図　場面ごと調査次(プロパーのみ)

Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'gozaru (mediu In each context, by year of survey (proper or professional only)



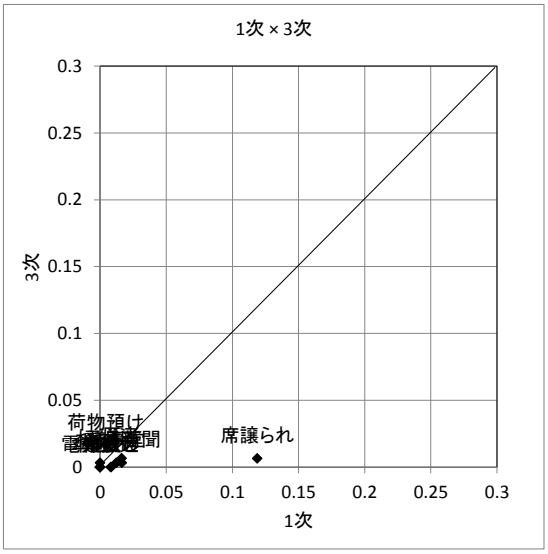


図2-2　場面ごと1次×2次　（プロパーのみ）

Figure 2-2　2nd against 1st survey, in each context (proper or professional only)

図2-3　場面ごと1次×3次　（プロパーのみ）

Figure 2-3　3rd against 1st survey, in each context (proper or professional only)

岡崎敬語調査　文中ござる平均使用数　場面別調査次ごと年代

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'gozaru (medium po In each context, by generations, year of survey

場面：　縦に第3次平均使用数順 Context: Figure No. is given in order of the average usage rate in the third survey.

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代

Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

◆：プロパー、◇：コントロール

(◆: proper or professional ◇: control or college)

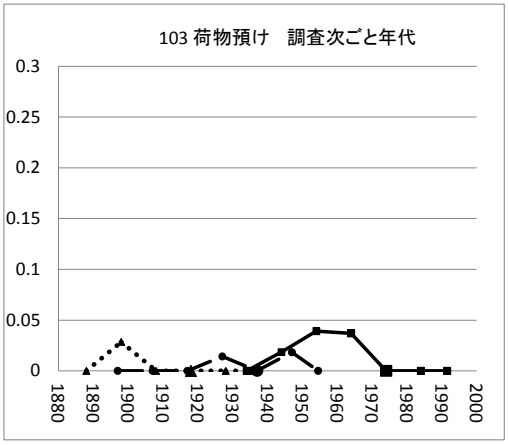


図3-1　103荷物預け　調査次ごと年代

Figure 3-1 In 103 Check baggage, by year of survey, generations

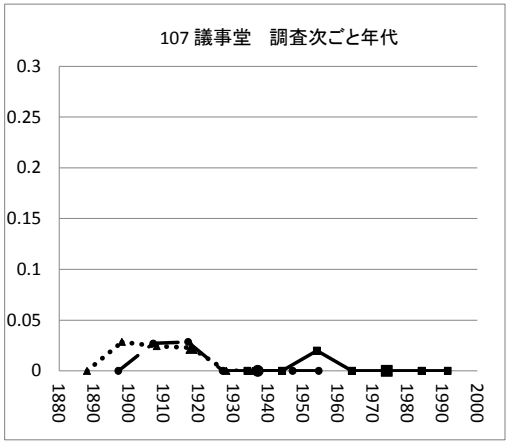


図3-4　107議事堂　調査次ごと年代

Figure 3-4 In 107 National Diet, by year of survey, generations

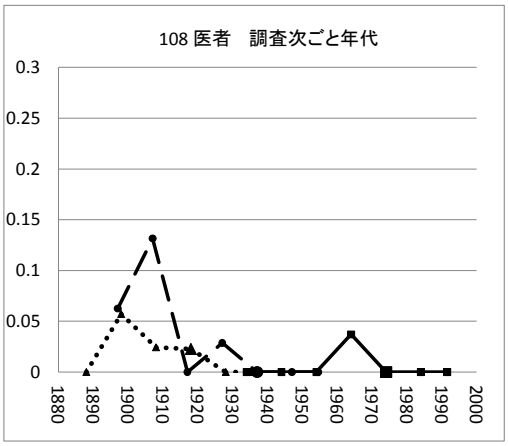


図3-2　108医者　調査次ごと年代

Figure 3-2 In 108 Doctor, by year of survey, generations

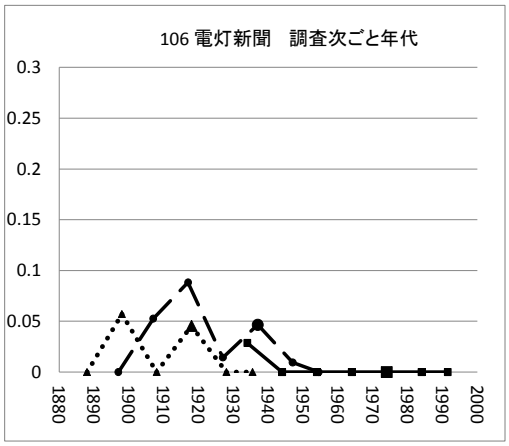


図3-5　106電灯新聞　調査次ごと年代

Figure 3-5 In 106 Newspaper bill, by year of survey, generations

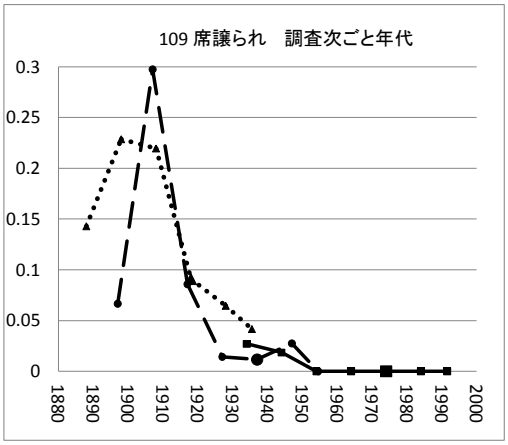


図3-3　109席譲られ　調査次ごと年代

Figure 3-3 In 109 Offered seat, by year of survey, generations

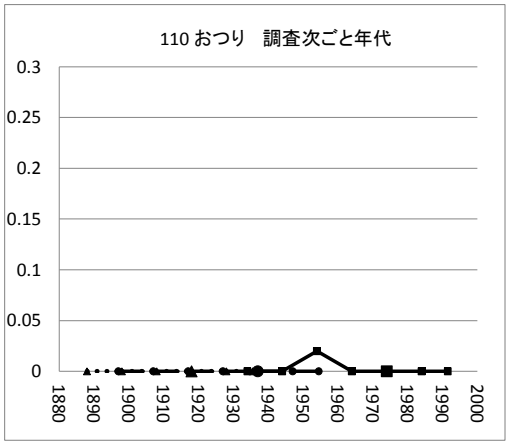


図3-6　110おつり　調査次ごと年代

Figure 3-6 In 110 Small change, by year of survey, generations

岡崎敬語調査　文中ござる平均使用数　場面別調査次ごと年代 （続き）

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'gozaru (medium po In each context, by generations, year of survey (continued)

場面：　縦に第3次平均使用数順 Context: Figure No. is given in order of the average usage rate in the third survey.

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代　　◆: プロパー、◇: コントロール

Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's (◆: proper or professional ◇: control or college)

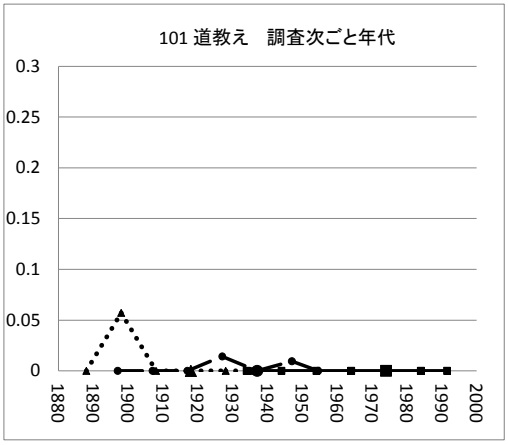


図4-1　101道教え　調査次ごと年代

Figure 4-1 In 101 Tell the way, by year of survey, generations

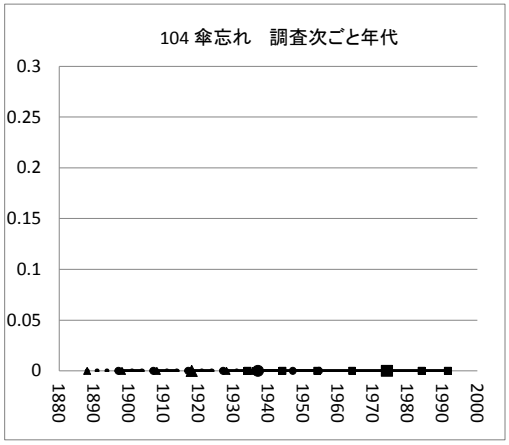


図4-4　104傘忘れ　調査次ごと年代

Figure 4-4 In 104 Left umbrella, by year of survey, generations

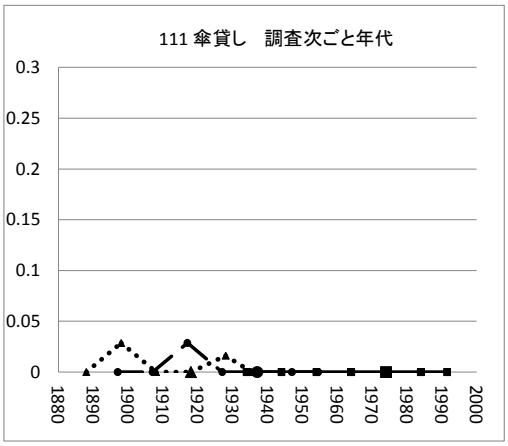


図4-2　111傘貸し　調査次ごと年代

Figure 4-2 In 111 Lend umbrella, by year of survey, generations

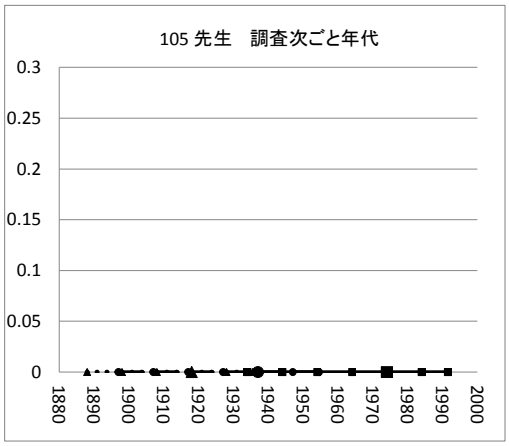


図4-5　105先生　調査次ごと年代

Figure 4-5 In 105 Ex-teacher, by year of survey, generations

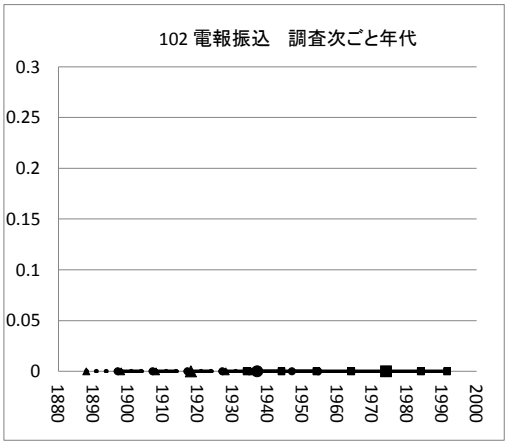


図4-3　102電報振込　調査次ごと年代

Figure 4-3 In 102 Remittance slip, by year of survey, generations

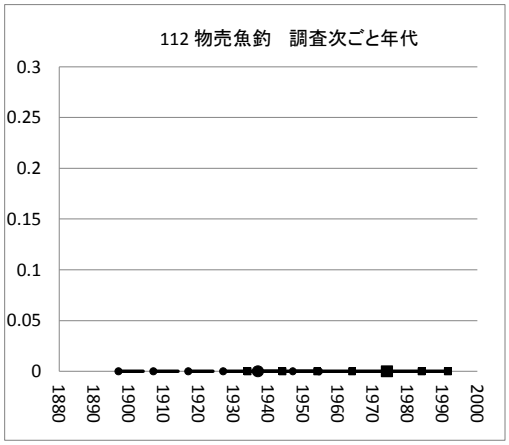


図4-6　112物売魚釣　調査次ごと年代

Figure 4-6 In 112 Fishing, by year of survey, generations

岡崎敬語調査　文中ござる平均使用数とその散布図
Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'gozaru (medium position)'

11場面全体　性別ごと調査次
All the 11 contexts, by gender, year of survey

11場面：　101道教え～111傘貸し
11 contexts: 101 Tell the way --- 111 Lend umbrella

◆：プロパー、◇：コントロール
◆: proper or professional ◇: control or college

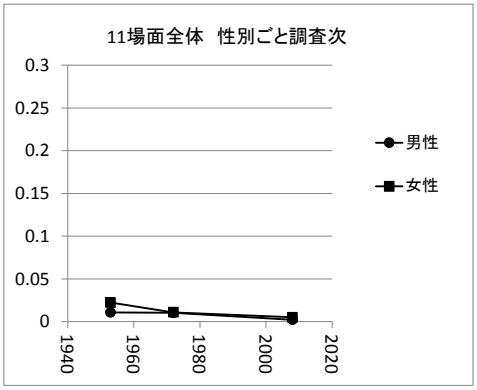


図5-1　11場面全体　性別ごと調査次
Figure 5-1 In all the 11 contexts, by gender, year of survey

男女別調査次ごと年代
By gender, generations, year of survey

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代
Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

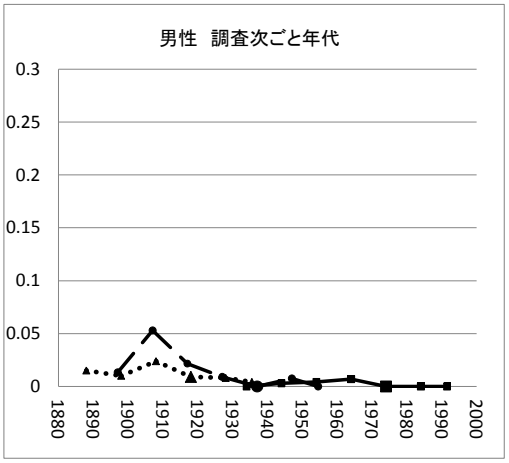


図5-2　男性　調査次ごと年代
Figure 5-2 Male, by year of survey, generations

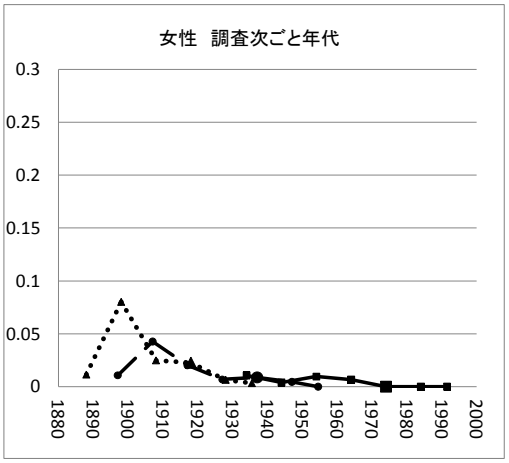


図5-3　女性　調査次ごと年代
Figure 5-3 Female, by year of survey, generations

調査次別　場面ごと性別（プロパーのみ）
By year of survey, in each context, by gender (proper or professional only)

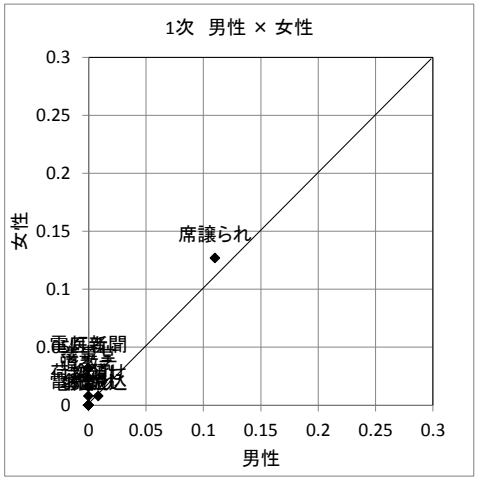


図5-4　1次　場面ごと男性×女性　（プロパーのみ）
Figure 5-4 1st survey, in each context, female against male (proper or professional only)

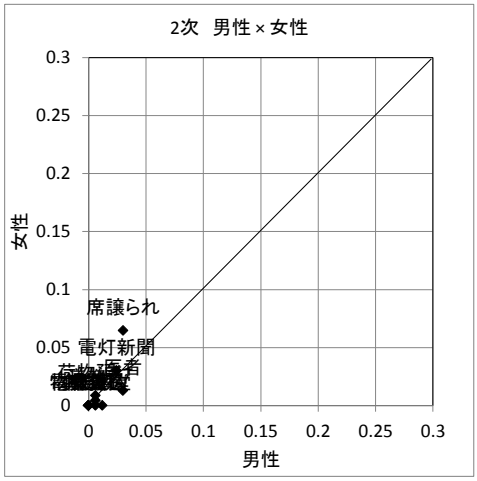


図5-5　2次　場面ごと男性×女性　（プロパーのみ）
Figure 5-5 2nd survey, in each context, female against male (proper or professional only)

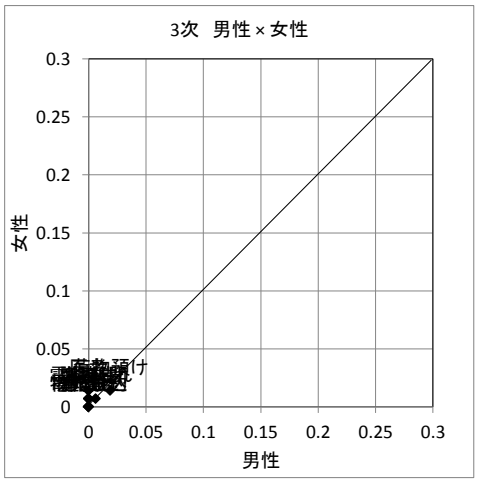


図5-6　3次　場面ごと男性×女性　（プロパーのみ）
Figure 5-6 3rd survey, in each context, female against male (proper or professional only)

岡崎敬語調査　文中ござる平均使用数の散布図　男女別　場面ごと調査次(プロパーのみ)

Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'goz By gender, in each context, by year of survey (proper or professional only)

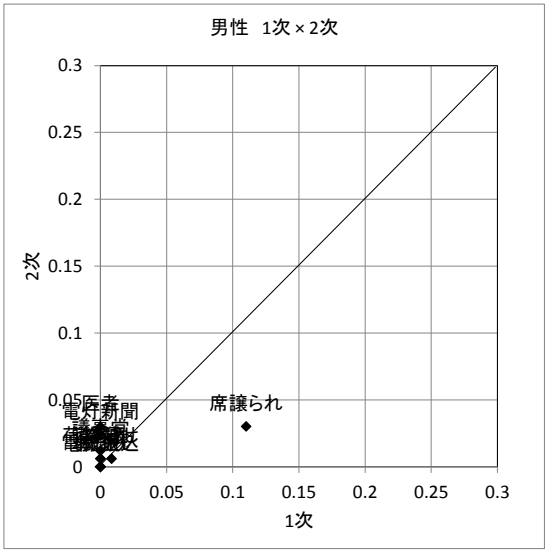


図6-1　男性　場面ごと1次×2次　(プロパーのみ)

Figure 6-1　Male, 2nd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

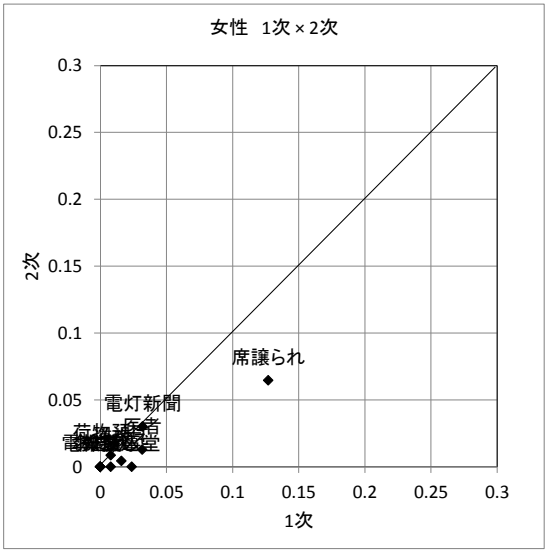


図6-2　女性　場面ごと1次×2次　(プロパーのみ)

Figure 6-2　Female, 2nd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

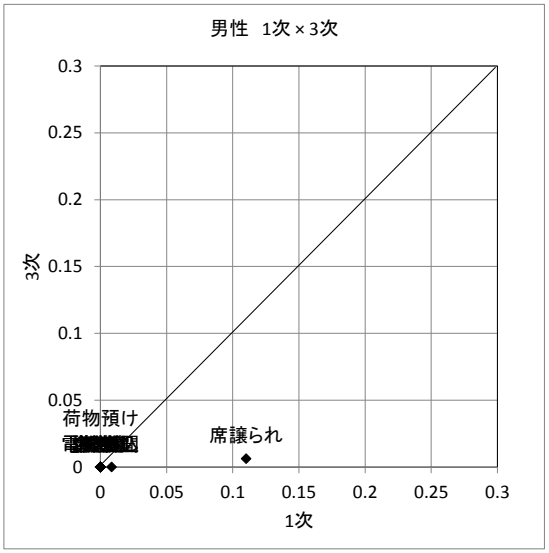


図6-3　男性　場面ごと1次×3次　(プロパーのみ)

Figure 6-3　Male, 3rd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

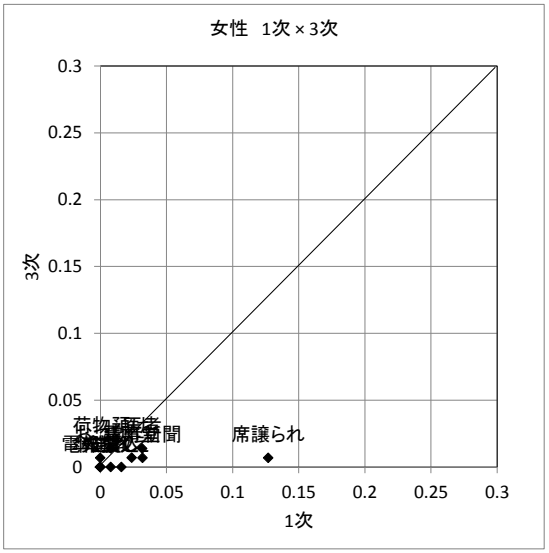


図6-4　女性　場面ごと1次×3次　(プロパーのみ)

Figure 6-4　Female, 3rd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

岡崎敬語調査　文中ござる平均使用数　　◆: プロパー、◇: コントロール

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'gozaru (◆: proper or professional ◇: control or college

11場面全体　学歴ごと調査次

All the 11 contexts, by academic background, year of survey

11場面:　101道教え～111傘貸し

11 contexts: 101 Tell the way --- 111 Lend umbrella

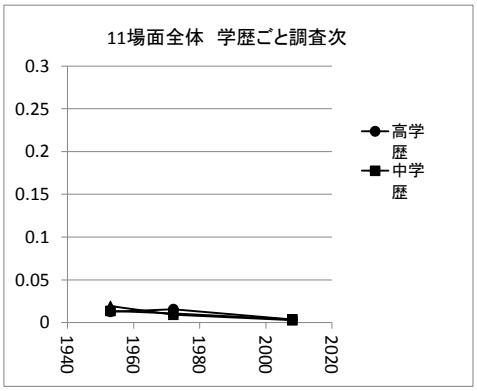


図7-1　11場面全体　学歴ごと調査次

Figure 7-1 In all the 11 contexts, by academic background, year of survey

学歴別調査次ごと年代

By academic background, generations, year of survey

年代:　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代

Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

無回答　No response

高学歴:1次P10代、60代;1次C10代;2次70代

High education: 1st proper 10's, 60's; 1st control 10's; 2nd 70's

中学歴:1次P60代;2次70代　Middle education: 1st proper 60's; 2nd, 70's

低学歴:3次20代、3次40代　Low education: 3rd, 20's and 3rd, 40's

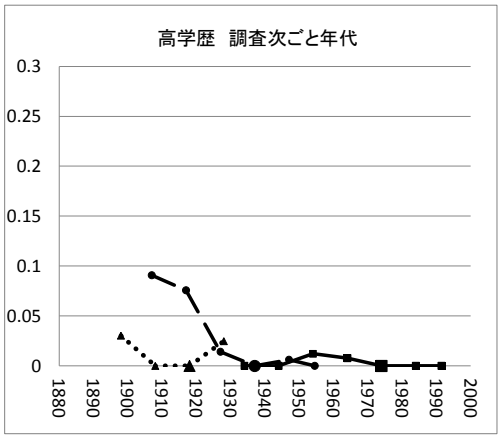


図7-2　高学歴　調査次ごと年代

Figure 7-2 High education, by year of survey, generations

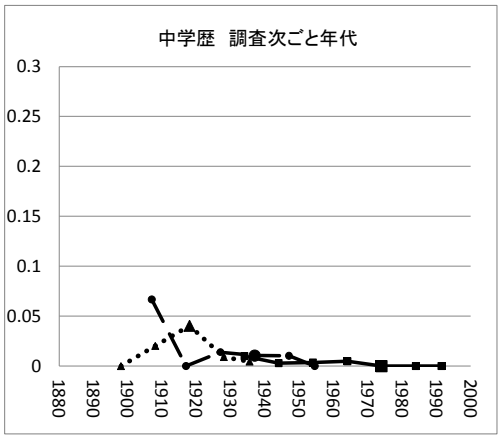


図7-3　中学歴　調査次ごと年代

Figure 7-3 Middle education, by year of survey, generations

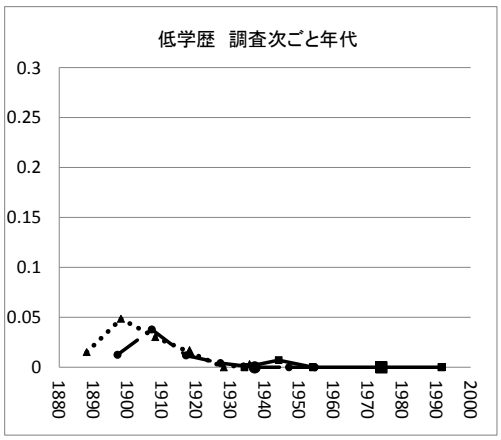


図7-4　低学歴　調査次ごと年代

Figure 7-4 Low education,by year of survey, generations

岡崎敬語調査　文中ござる平均使用数の散布図　調査次別　場面ごと学歴(プロパーのみ)

Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'goz By year of survey, in each context, by academic background (proper or professional only)

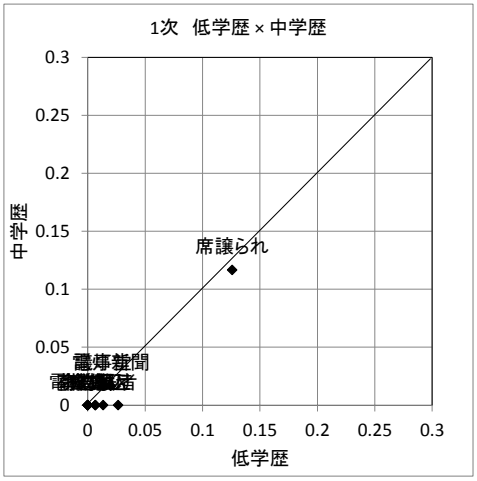


図8-1　1次　場面ごと低学歴×中学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-1　1st survey, in each context,
middle against low education (proper or professional only)

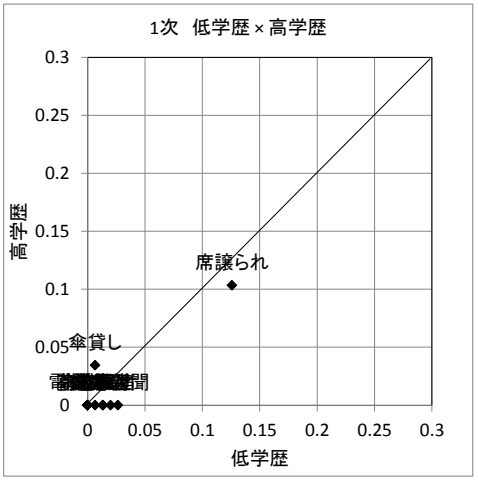


図8-2　1次　場面ごと低学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-2　1st survey, in each context,
high against low education (proper or professional only)

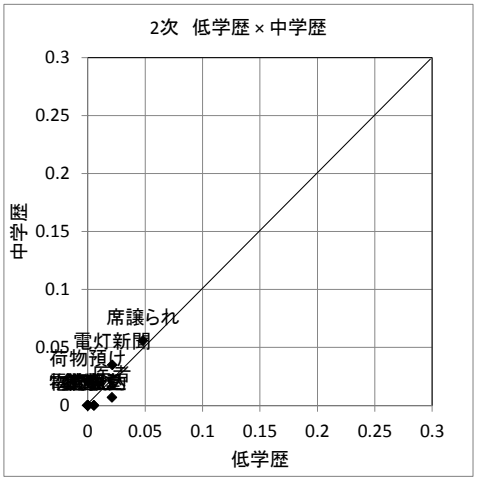


図8-3　2次　場面ごと低学歴×中学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-3　2nd survey, in each context,
middle against low education (proper or professional only)

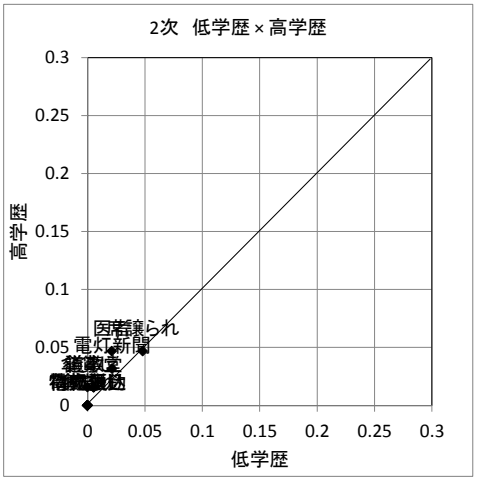


図8-4　2次　場面ごと低学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-4　2nd survey, in each context,
high against low education (proper or professional only)

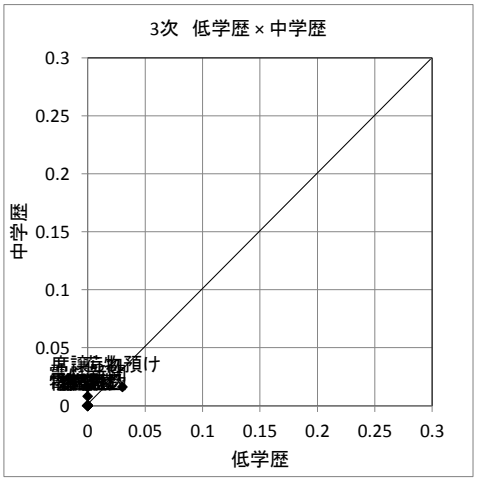


図8-5　3次　場面ごと低学歴×中学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-5　3rd survey, in each context,
middle against low education (proper or professional only)

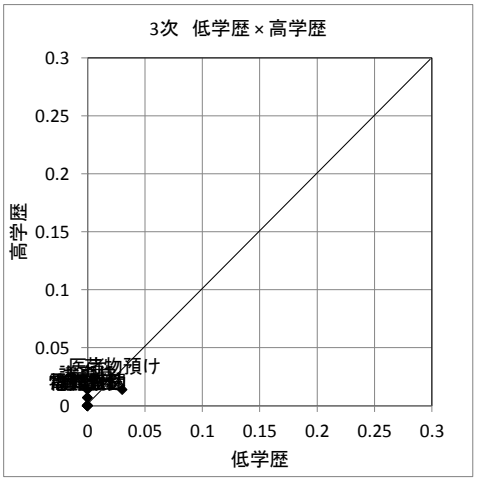


図8-6　3次　場面ごと低学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-6　3rd survey, in each context,
high against low education (proper or professional only)

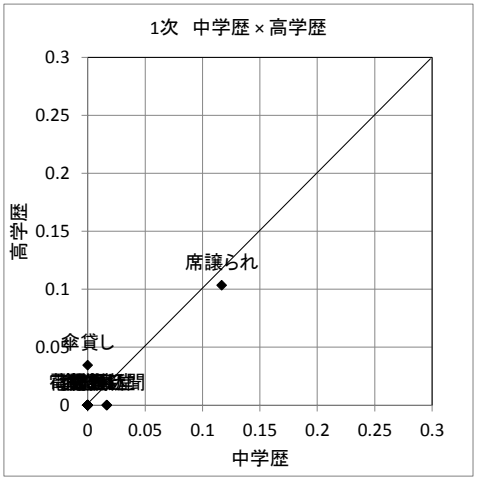


図9-1　1次　場面ごと中学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 9-1　1st survey, in each context,
high against middle education (proper or professional only)

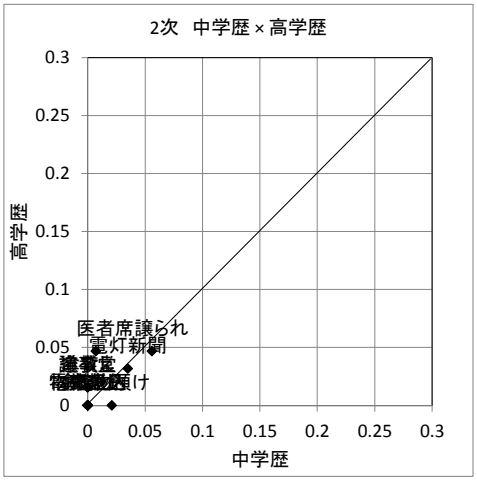


図9-2　2次　場面ごと中学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 9-2　2nd survey, in each context,
high against middle education (proper or professional only)

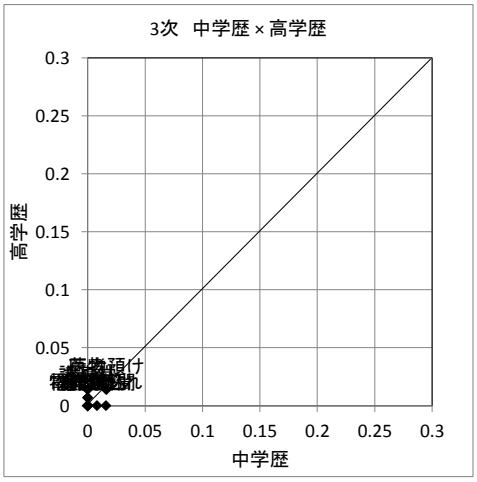


図9-3　3次　場面ごと中学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 9-3　3rd survey, in each context,
high against middle education (proper or professional only)

岡崎敬語調査　文中ござる平均使用数と丁寧さ

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'gozaru (medium position)' and pliteness

11場面：　101道教え～111傘貸し

11 contexts: 101 Tell the way --- 111 Lend umbrella

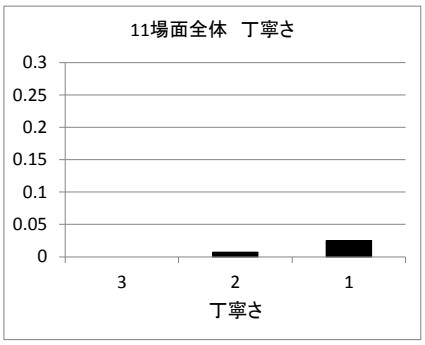


図10-1　11場面全体　丁寧さ

Figure 10-1　In all the 11 contexts, by politeness

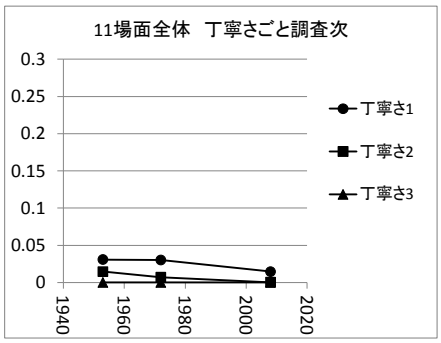


図10-2　11場面全体　丁寧さごと調査次

Figure 10-2　In all the 11 contexts, by politeness, year of survey

（◆：プロパー、◇：コントロール）

（◆：proper or professional ◇：control or college）

2.3. 文中「ゴザル」の減少　詳細グラフ解説

「ゴザル」文中については，重要なので，ここでもグラフを示して，論じる．

以下では「ゴザイマス体」の「ゴザル」の文中の出現を見る．使用度数が低いので，差がはっきり見えるように，グラフの軸の上限値をすべて 0.2 または 0.4 にした．

図 1-1　12 場面全体　場面ごと調査次

図 1-1 に 12 場面全体の「ゴザル」の出現頻度推移を示した．使用率は大変低い．3 回の調査を通じて，減少傾向を示す．

図 1-2　12 場面全体　場面ごと調査次

図 1-2 は 12 場面個々の推移を示す．横軸は 3 回の調査の実時間（19 年と 36 年）に合わせた．使用場面が限られていて，実質的に「席譲られ」のみである．その使用が顕著に減少している．

図 2-1　12 場面全体　調査次ごと年代

図 2-1 の生年実年代による 12 場面全体の「ゴザル」使用は，右下がりが連続している．第 1 次，第 2 次の高年層でわずかな使用者がいたが，第 3 次の若い世代ではゼロに近くなった．

図 2-2, 図 2-3　12 場面全体　場面ごと　調査次散布図

図 2-2, 図 2-3 では，散布図を用いて，第 2 次，第 3 次で増加した場面を見分けやすく示した．対角線の右下は「ゴザル」の減った場面である．「席譲られ」が他と離れ，しかも減少しつつあることが，示された．第 3 次調査の「荷物預け」がやや増加を示した．他の場面の変動は小さい．

図 3-1～6　図 4-1～6　場面別調査次ごと年代

図 3～4 では，12 場面ごとに生年実年代のグラフを示した．「席譲られ」が図 2－1 と似たパターンを見せる．第 1 次 2 次の高年層で多かったのが，第 3 次ではほとんどゼロに近くなる．わずかの使用率だが，「新聞代，医者，傘貸し，議事堂」でも似たパターンが読み取れる．「荷物預け」のみが異質で，第 3 次の中年層で使用が多くなる．典型的な依頼場面として，「丁寧さ」「ていただく」「モーラ数」などで観察された異質性と関係があるだろう．

図 5-1 外的　社会項目　性別

図 5-1 でみると性差はわずかに観察される．第 1 次では女性がやや多く使っていた．

図 5-2～6 外的　社会項目　性別

図 5-2～3 で男女に分けて，生年実年代グラフで 100 年以上の変化を見る．男性女性ともに減少傾向を見せる．

図 5-4～6 で性差の場面による違いを見る．散布図によれば，「席譲られ」で第 1 次に女性に多かったが，第 3 次では使われなくなった．

図 6-1～4 外的　社会項目　性別，調査次別

図 6-1～4 では性差の場面による違いを調査次ごとに細分して見る．「ゴザル」の使用がほぼ「席譲られ」に限られ，男性でゼロなので，グラフのパターンが他とまったく違う．「席譲られ」は，第 3 次と第 1 次の間で変動が大きく，男女ともに 1 次のときに多く使われていた．

他は使用率が低い．文中の「ゴザル」は衰退過程とみてよい．

図 7-1 学歴別

図 7-1 以下では学歴差を扱う．学歴差はほとんど見られない．

図 7-2　高学歴　学歴別

図 7-3　中学歴　学歴別

図 7-4　低学歴　学歴別

図 7-2～4 によれば，どの学歴でも使うのは高年層のみである．使うと答えた人数が少ないので，学歴差は読み取りにくい．

図 8-1～6 学歴別　散布図　調査次

図 8-1 以下 9 枚セットのグラフで学歴差を見る．「席譲られ」の動きが見えるが，学歴差は読み取りにくい．

図 10-1 丁寧さ

図 10-1 によれば，丁寧さ 1 のゴザイマス体中心の場面で一番多く使われる．

図 10-2　丁寧さと調査次

図 10-2 によれば，第 1 次から第 3 次にかけて，丁寧さ 1 のゴザイマス体の場面でかなり減少している．

詳細グラフ4　第4章3-1文末「デスマス」

岡崎敬語調査　文末ですます平均使用数

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'desu masu (final position)'

11場面：　101道教え～111傘貸し　　11 contexts: 101 Tell the way ~~~ 111 Lend umbrella

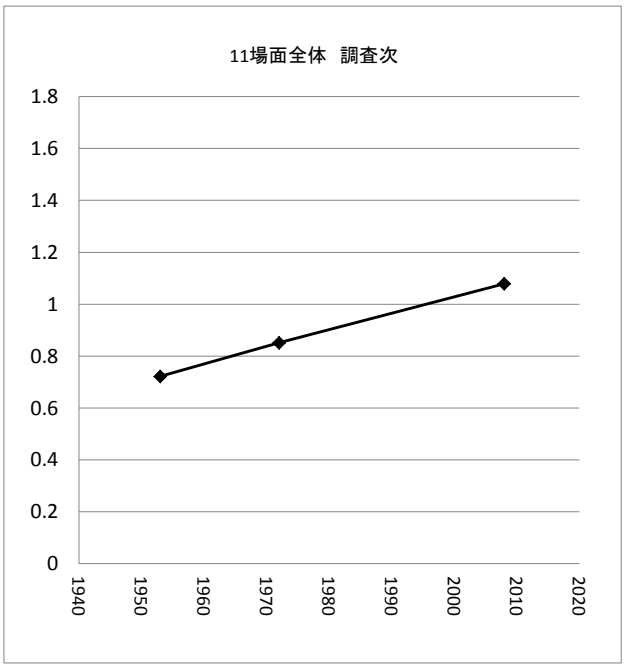


図1-1　11場面全体　調査次　（◆：プロパー、◇：コントロール）

Figure 1-1　In all the 11 contexts, by year of survey (◆: proper or professional ◇: control or college)

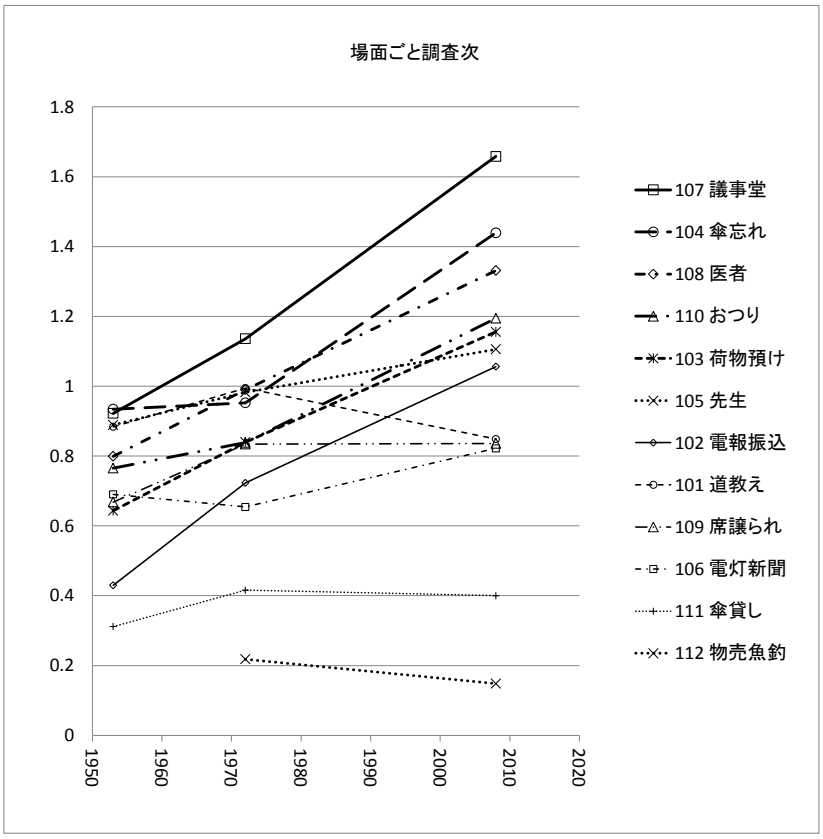


図1-2　場面ごと調査次　（プロパーのみ）

Figure 1-2　In each context, by year of survey (proper or professional only)

岡崎敬語調査　文末ですます平均使用数　11場面全体調査次ごと年代

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'desu masu (final p All the 11 contexts　by generations of three surveys

11場面：　101道教え～111傘貸し　　11 contexts: 101 Tell the way --- 111 Lend umbrella

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代　　Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

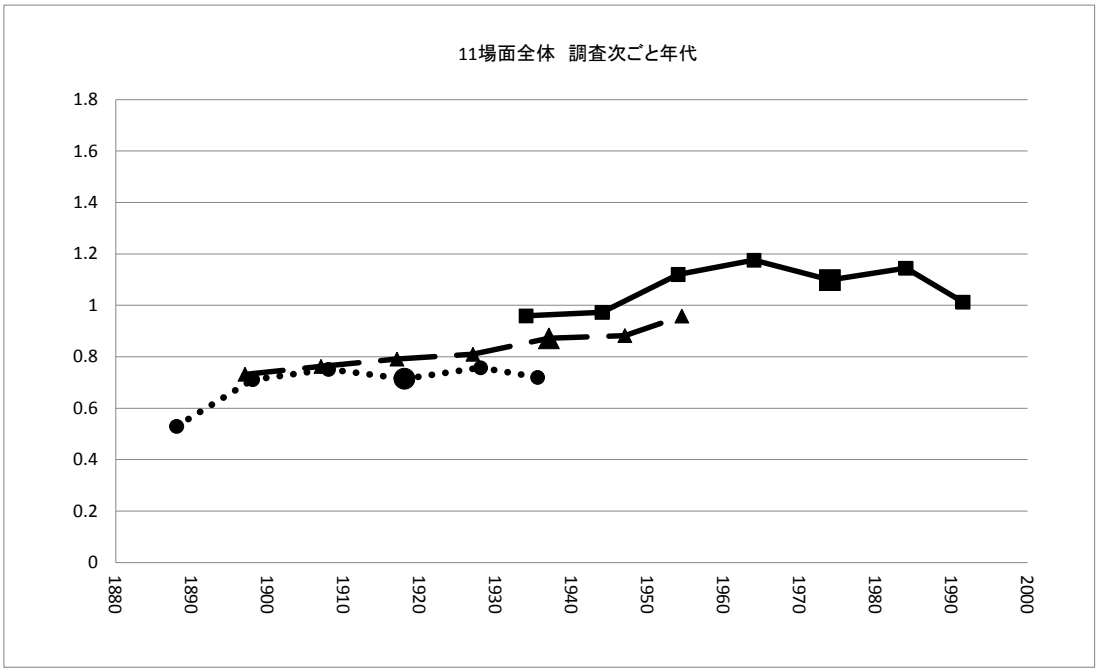


図2-1　11場面全体　調査次ごと年代　（◆：プロパー、◇：コントロール）

Figure 2-1　All the 11 contexts, generations of three surveys (◆: proper or professional ◇: control or college)

岡崎敬語調査　文末ですます平均使用数の散布図　場面ごと調査次（プロパーのみ）

Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'desu masu (fi In each context, by year of survey (proper or professional only)

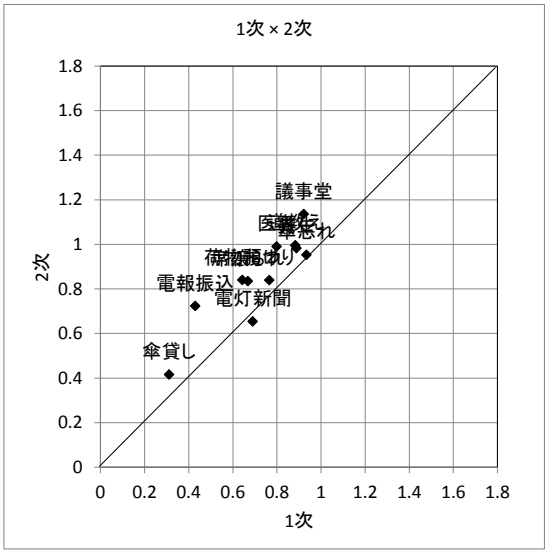


図2-2　場面ごと1次×2次　（プロパーのみ）

Figure 2-2　2nd against 1st survey, in each context (proper or professional only)

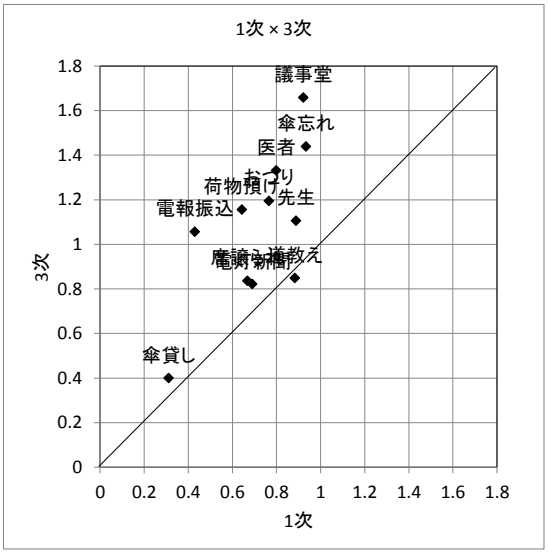


図2-3　場面ごと1次×3次　（プロパーのみ）

Figure 2-3　3rd against 1st survey, in each context (proper or professional only)

岡崎敬語調査　文末ですます平均使用数　場面別調査次ごと年代

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'desu masu (final pa In each context, by generations, year of survey

場面：　縦に第3次平均使用数順 Context: Figure No. is given in order of the average usage rate in the third survey.

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代

Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

◆：プロパー、◇：コントロール

(◆: proper or professional ◇: control or college)

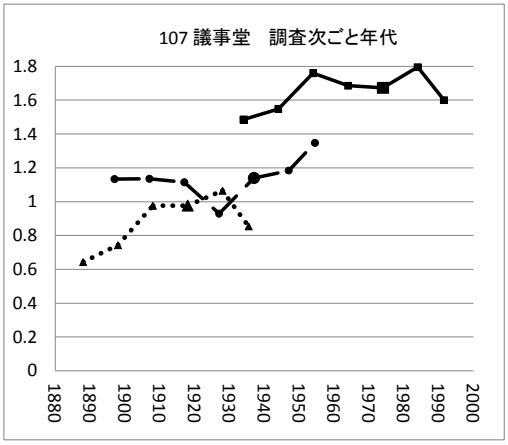


図3-1　107議事堂　調査次ごと年代

Figure 3-1 In 107 National Diet, by year of survey, generations

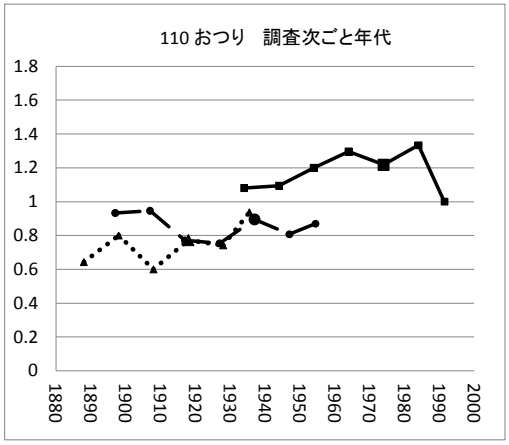


図3-4　110おつり　調査次ごと年代

Figure 3-4 In 110 Small change, by year of survey, generations

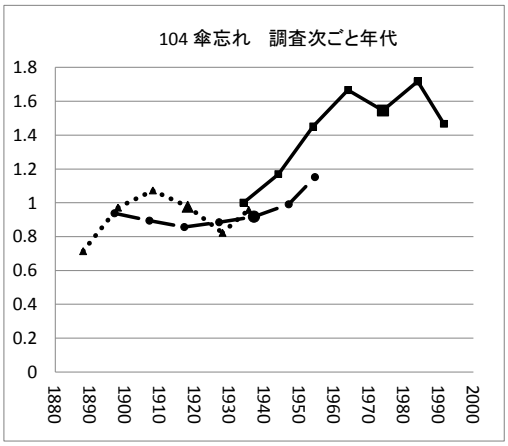


図3-2　104傘忘れ　調査次ごと年代

Figure 3-2 In 104 Left umbrella, by year of survey, generations

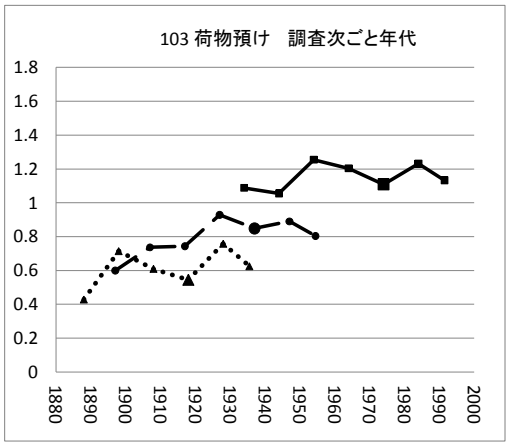


図3-5　103荷物預け　調査次ごと年代

Figure 3-5 In 103 Check baggage, by year of survey, generations

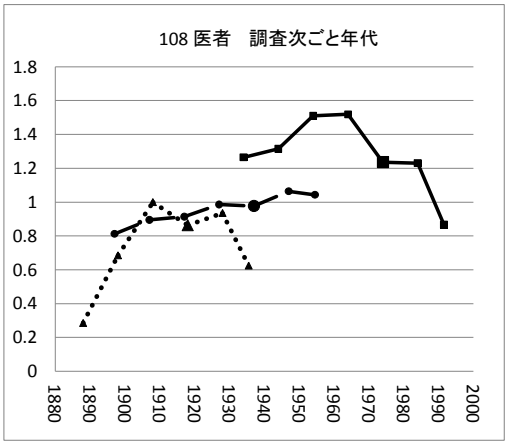


図3-3　108医者　調査次ごと年代

Figure 3-3 In 108 Doctor, by year of survey, generations

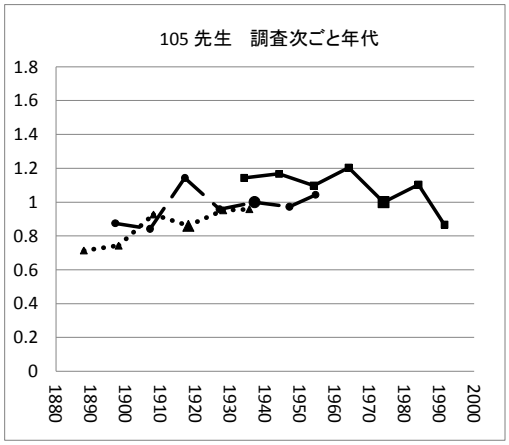


図3-6　105先生　調査次ごと年代

Figure 3-6 In 105 Ex-teacher, by year of survey, generations

岡崎敬語調査　文末ですます平均使用数　場面別調査次ごと年代 （続き）

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'desu masu (final pa In each context, by generations, year of survey (continued)

場面：　縦に第3次平均使用数順 Context: Figure No. is given in order of the average usage rate in the third survey.

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代　　◆：プロパー、◇：コントロール

Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's (◆: proper or professional ◇: control or college)

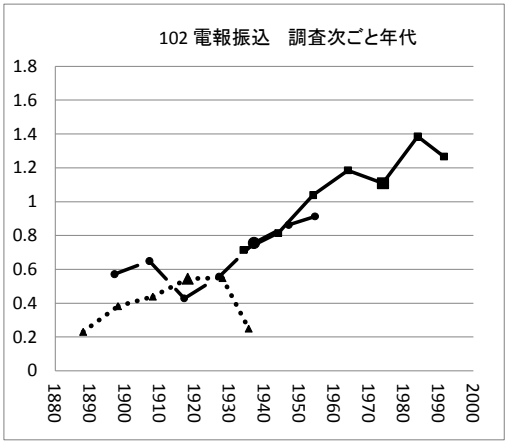


図4-1　102電報振込　調査次ごと年代

Figure 4-1 In 102 Remittance slip, by year of survey, generations

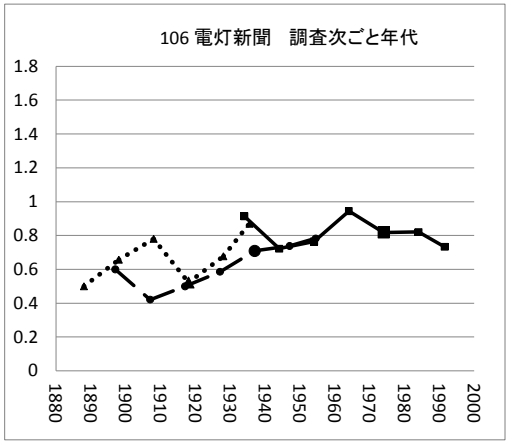


図4-4　106電灯新聞　調査次ごと年代

Figure 4-4 In 106 Newspaper bill, by year of survey, generations

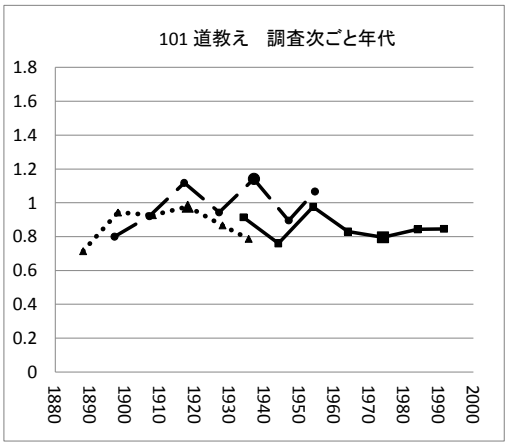


図4-2　101道教え　調査次ごと年代

Figure 4-2 In 101 Tell the way, by year of survey, generations

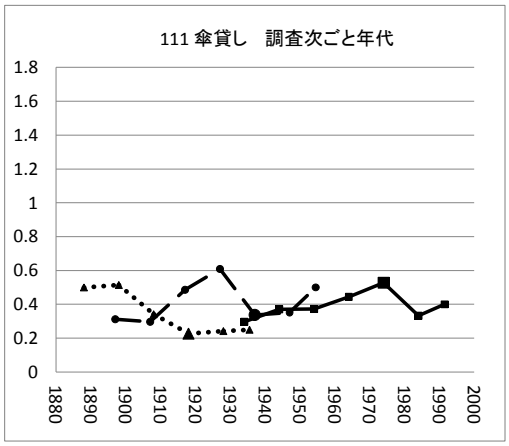


図4-5　111傘貸し　調査次ごと年代

Figure 4-5 In 111 Lend umbrella, by year of survey, generations

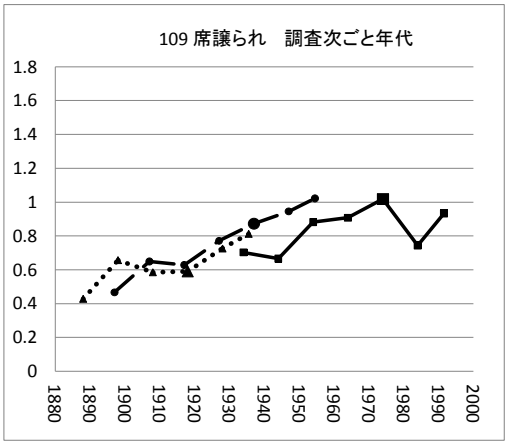


図4-3　109席譲られ　調査次ごと年代

Figure 4-3 In 109 Offered seat, by year of survey, generations

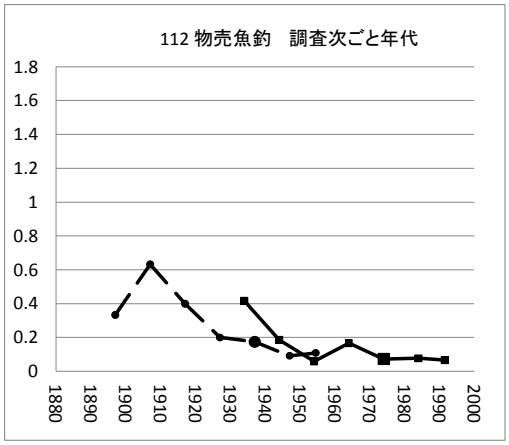


図4-6　112物売魚釣　調査次ごと年代

Figure 4-6 In 112 Fishing, by year of survey, generations

岡崎敬語調査　文末ですます平均使用数とその散布図
Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'desu masu (final positior

11場面全体　性別ごと調査次
All the 11 contexts, by gender, year of survey

11場面：　101道教え～111傘貸し
11 contexts: 101 Tell the way --- 111 Lend umbrella

◆：プロパー、◇：コントロール
◆: proper or professional ◇: control or college

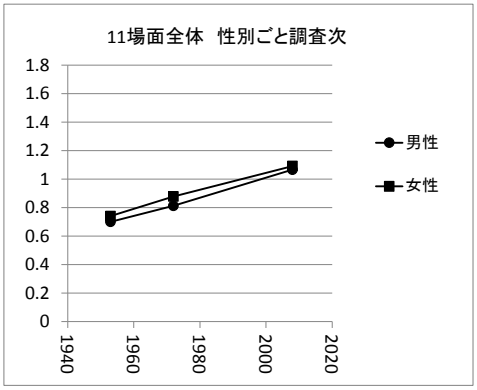


図5-1　11場面全体　性別ごと調査次
Figure 5-1 In all the 11 contexts, by gender, year of survey

男女別調査次ごと年代
By gender, generations, year of survey

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代
Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

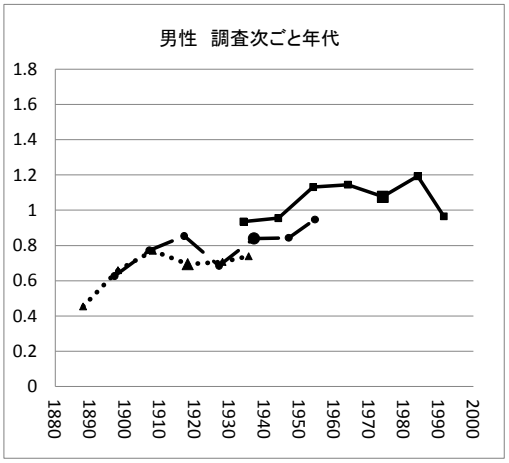


図5-2　男性　調査次ごと年代
Figure 5-2　Male, by year of survey, generations

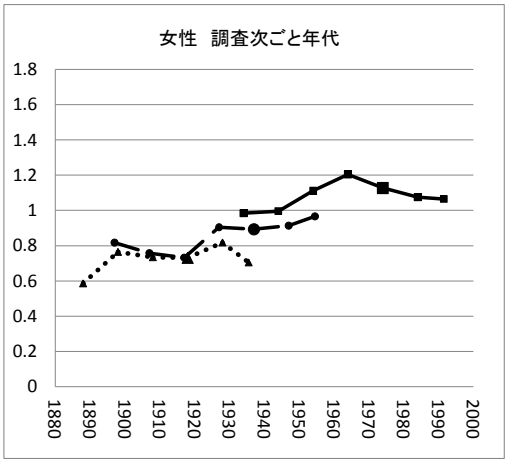


図5-3　女性　調査次ごと年代
Figure 5-3　Female, by year of survey, generations

調査次別　場面ごと性別（プロパーのみ）
By year of survey,　in each context, by gender (proper or professional only)

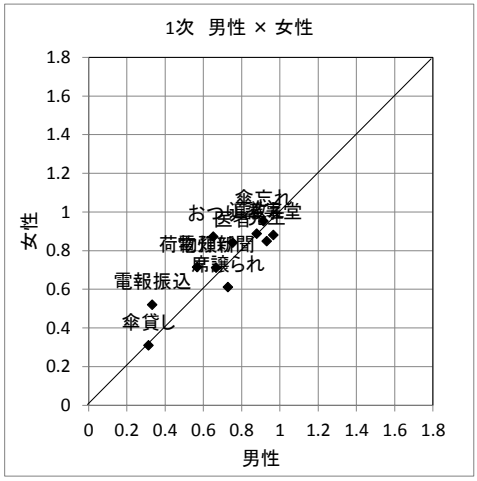


図5-4　1次　場面ごと男性×女性　（プロパーのみ）
Figure 5-4　1st survey, in each context,
female against male (proper or professional only)

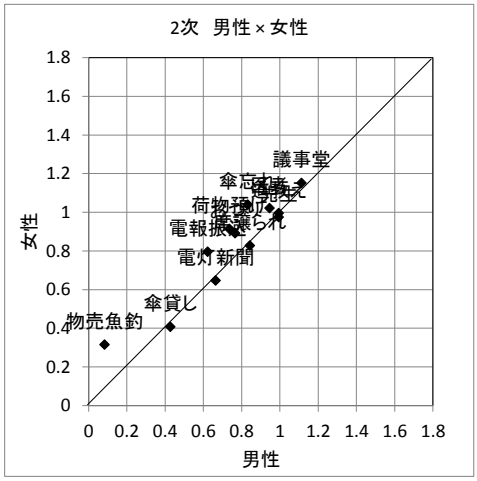


図5-5　2次　場面ごと男性×女性　（プロパーのみ）
Figure 5-5　2nd survey, in each context,
female against male (proper or professional only)

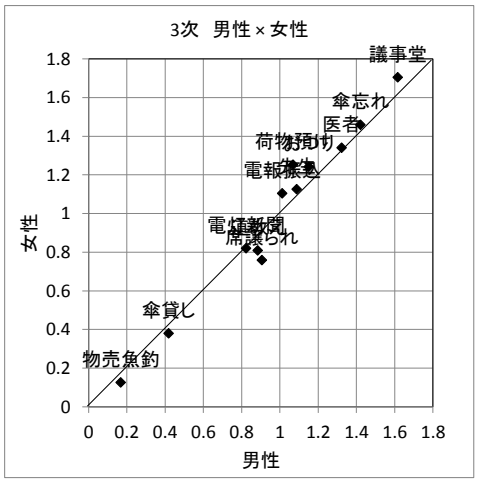


図5-6　3次　場面ごと男性×女性　（プロパーのみ）
Figure 5-6　3rd survey, in each context,
female against male (proper or professional only)

岡崎敬語調査　文末ですます平均使用数の散布図　男女別　場面ごと調査次(プロパーのみ)

Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'des By gender, in each context, by year of survey (proper or professional only)

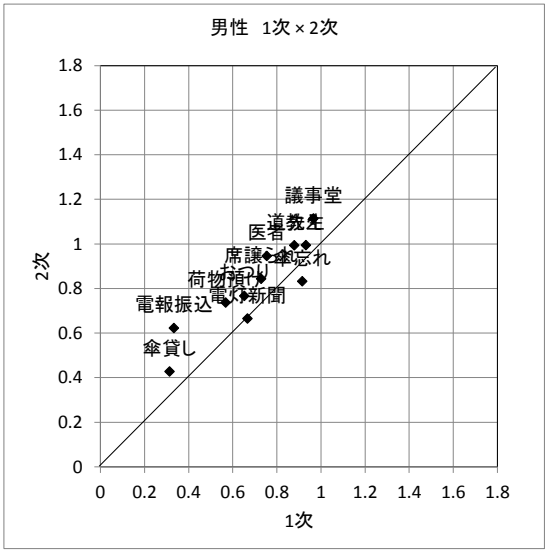


図6-1　男性　場面ごと1次×2次　(プロパーのみ)

Figure 6-1　Male, 2nd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

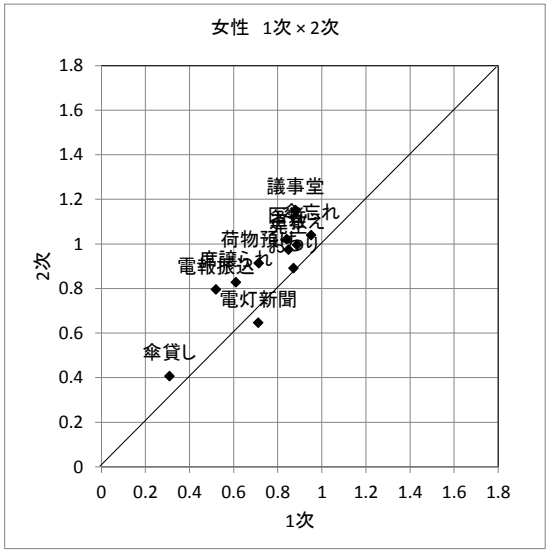


図6-2　女性　場面ごと1次×2次　(プロパーのみ)

Figure 6-2　Female, 2nd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

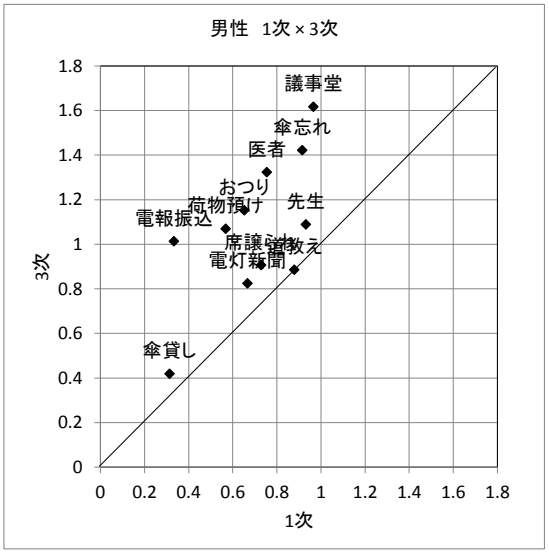


図6-3　男性　場面ごと1次×3次　(プロパーのみ)

Figure 6-3　Male, 3rd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

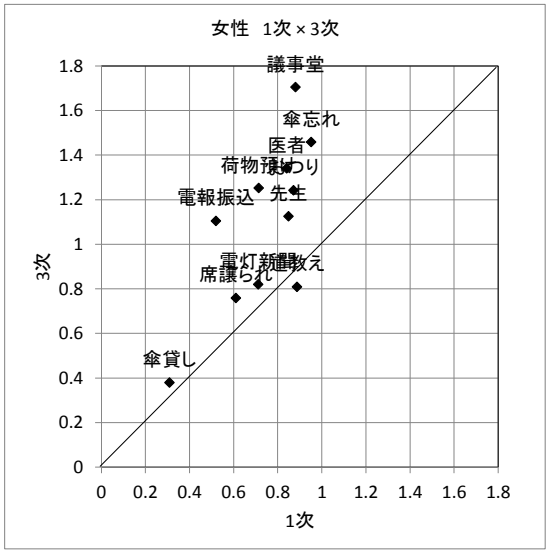


図6-4　女性　場面ごと1次×3次　(プロパーのみ)

Figure 6-4　Female, 3rd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

岡崎敬語調査　文末ですます平均使用数　◆: プロパー、◇: コントロール

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'desu ma ◆: proper or professional ◇: control or college

11場面全体　学歴ごと調査次

All the 11 contexts, by academic background, year of survey

11場面:　101道教え～111傘貸し

11 contexts: 101 Tell the way --- 111 Lend umbrella

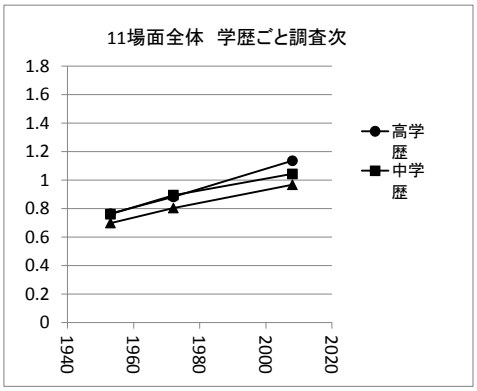


図7-1　11場面全体　学歴ごと調査次

Figure 7-1 In all the 11 contexts, by academic background, year of survey

学歴別調査次ごと年代

By academic background, generations, year of survey

年代:　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代

Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

無回答　No response

高学歴:1次P10代、60代;1次C10代;2次70代

High education: 1st proper 10's, 60's; 1st control 10's; 2nd 70's

中学歴:1次P60代;2次70代　Middle education: 1st proper 60's; 2nd, 70's

低学歴:3次20代、3次40代　Low education: 3rd, 20's and 3rd, 40's

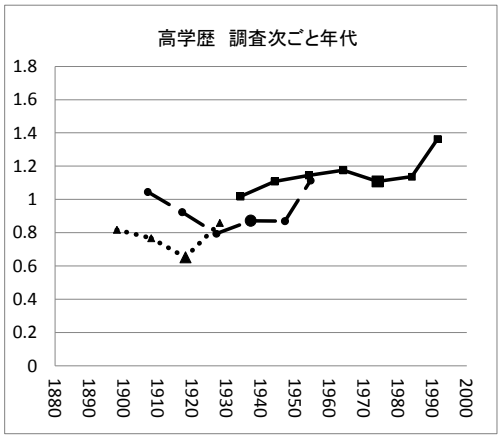


図7-2　高学歴　調査次ごと年代

Figure 7-2 High education, by year of survey, generations

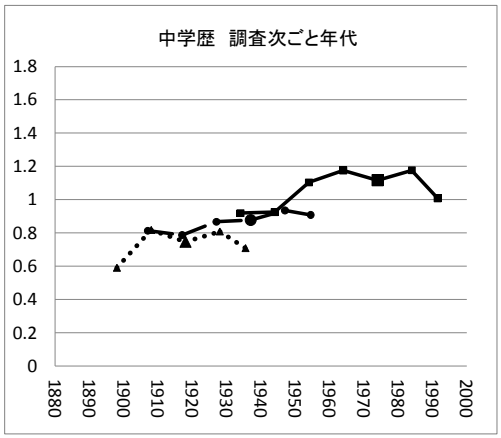


図7-3　中学歴　調査次ごと年代

Figure 7-3 Middle education, by year of survey, generations

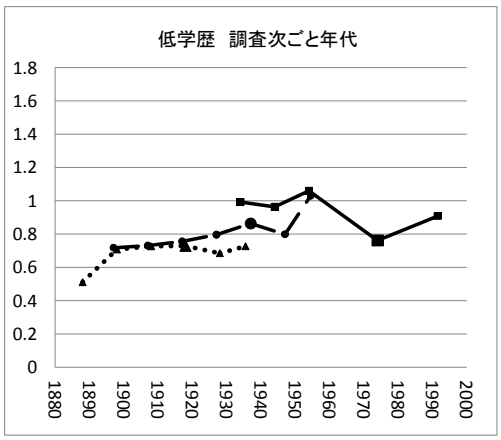


図7-4　低学歴　調査次ごと年代

Figure 7-4 Low education,by year of survey, generations

岡崎敬語調査　文末ですます平均使用数の散布図　調査次別　場面ごと学歴(プロパーのみ)

Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'des By year of survey, in each context, by academic background (proper or professional only)

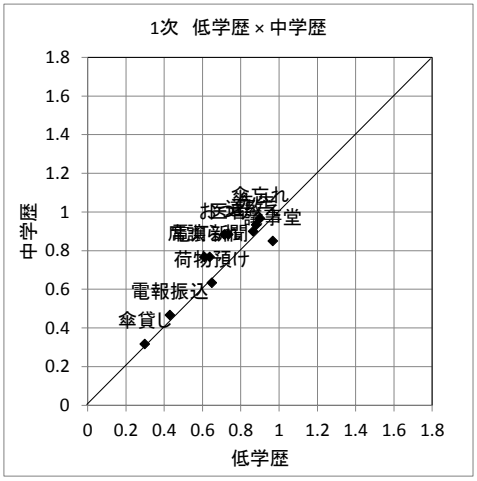


図8-1　1次　場面ごと低学歴×中学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-1　1st survey, in each context,
middle against low education (proper or professional only)

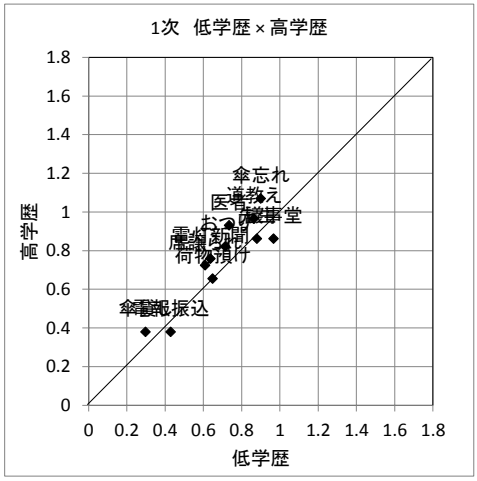


図8-2　1次　場面ごと低学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-2　1st survey, in each context,
high against low education (proper or professional only)

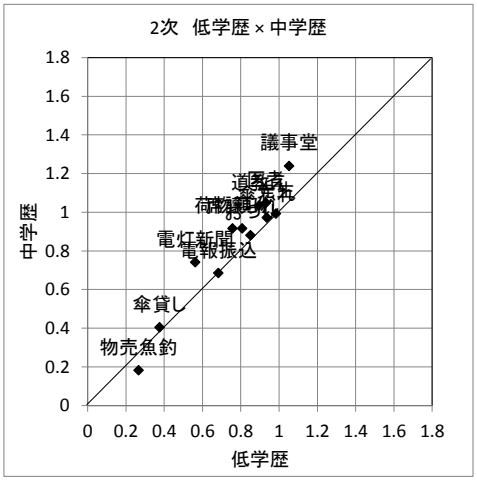


図8-3　2次　場面ごと低学歴×中学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-3　2nd survey, in each context,
middle against low education (proper or professional only)

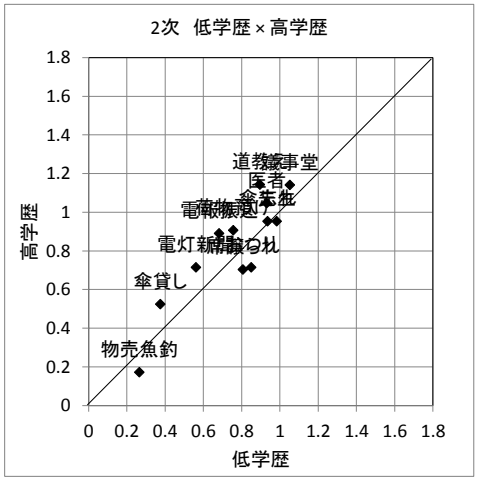


図8-4　2次　場面ごと低学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-4　2nd survey, in each context,
high against low education (proper or professional only)

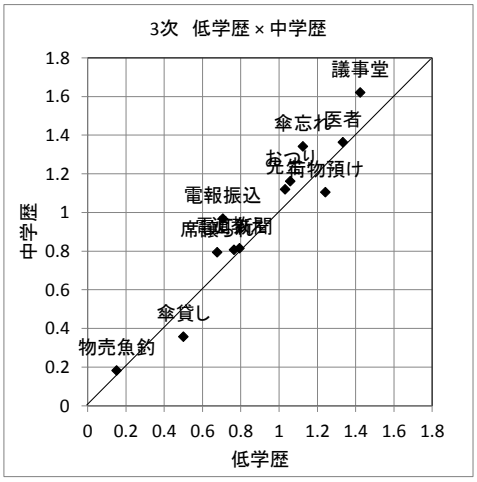


図8-5　3次　場面ごと低学歴×中学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-5　3rd survey, in each context,
middle against low education (proper or professional only)

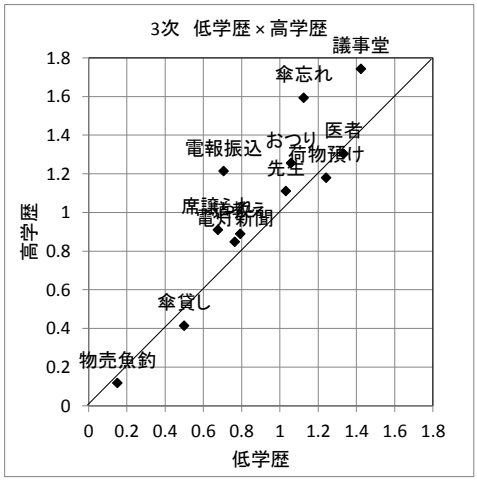


図8-6　3次　場面ごと低学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-6　3rd survey, in each context,
high against low education (proper or professional only)

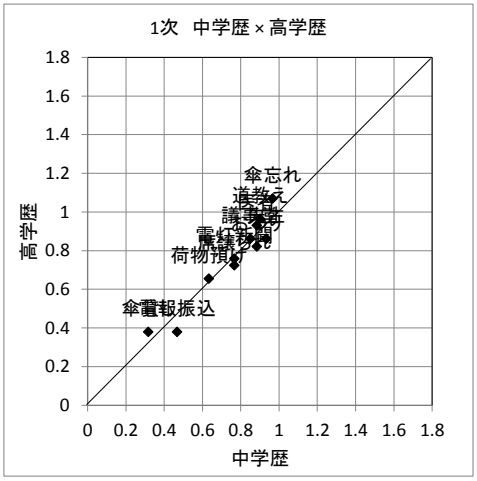


図9-1　1次　場面ごと中学歴×高学歴　（プロパーのみ）
Figure 9-1　1st survey, in each context,
high against middle education (proper or professional only)

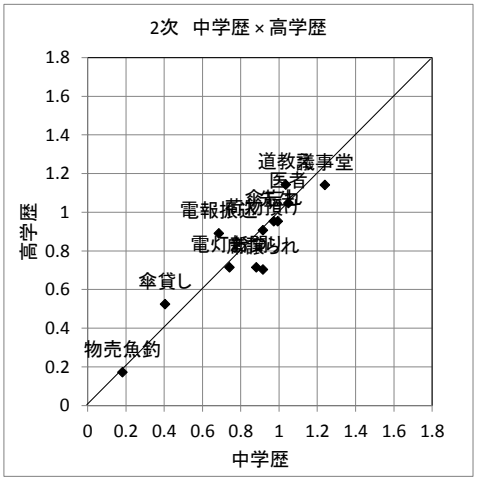


図9-2　2次　場面ごと中学歴×高学歴　（プロパーのみ）
Figure 9-2　2nd survey, in each context,
high against middle education (proper or professional only)

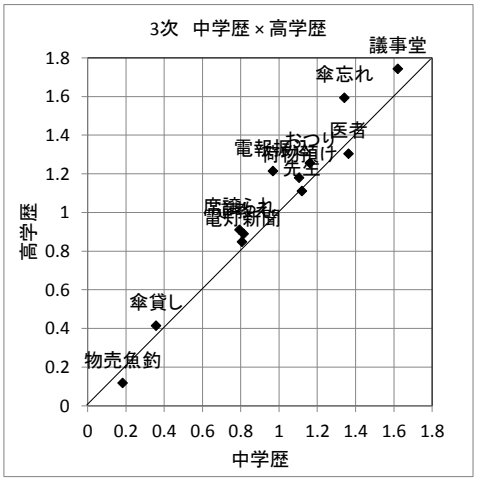


図9-3　3次　場面ごと中学歴×高学歴　（プロパーのみ）
Figure 9-3　3rd survey, in each context,
high against middle education (proper or professional only)

岡崎敬語調査　文末ですます平均使用数と丁寧さ

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'desu masu (final position)' and pliteness

11場面：　101道教え～111傘貸し

11 contexts: 101 Tell the way --- 111 Lend umbrella

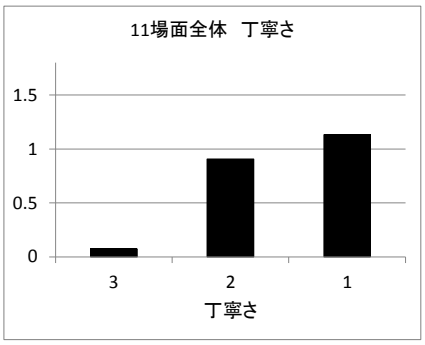


図10-1　11場面全体　丁寧さ

Figure 10-1　In all the 11 contexts, by politeness

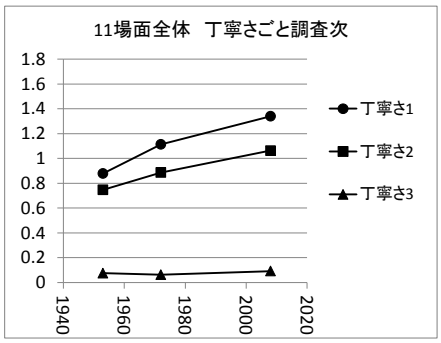


図10-2　11場面全体　丁寧さごと調査次

Figure 10-2　In all the 11 contexts, by politeness, year of survey

（◆：プロパー、◇：コントロール）

（◆：proper or professional ◇：control or college）

3.1. 文末「デスマス」の増加　詳細グラフ解説

図 1-1　12 場面全体　場面ごと調査次

以下では，第 4 章の「デスマス」詳細グラフについて解説を加える．

図 1-1 に 12 場面全体の「デスマス」の出現頻度推移を示した．右上がりで，全体として約半世紀の増加傾向を示す．「デスマス」使用が多くなったことを示す．共通語化でよく見られるパターンである．未知の人に無難な言い方，デフォルトとして「デスマス」体が使われるようになったという観察と符合する．ここで，数値の 1 というのは，「デスマス」使用が，一人のインフォーマントの 1 問（1 場面）につき平均 1 回あったことを示す．それより線が上【下】だとしたら，平均 1 回以上【以下】あったことを示す．（なお「丁寧さ 3 段階」の点数の与え方では，「デスマス」体が 2 点になる．「ゴザイマス体」が 1 点，「ダ体」，「デアル体」は 3 点になり，順番が常識に合うが，使用度の数え方と逆になる．）つまり，半世紀をへだてた調査の全体で，「デスマス」使用がほぼ全場面に及ぶようになったことを示す．昔は「ダ体」，「デアル体」がかなり使われていたのである．

図 1-2　12 場面全体　場面ごと調査次

図 1-2 は 12 場面個々の推移を示す．横軸は 3 回の調査の間隔，実時間（19 年と 36 年）に合わせた．大多数の場面で「デスマス」使用増加を示す．数値 1 を基準と考えると，第 1 次調査では全場面で 1 以下だった．第 3 次調査では半数以上の場面で「デスマス」が優勢になった．

どの場面で多いかは，図 2-2, 2-3 のほうが分かりやすい．「傘貸し，物売魚釣」の 2 場面が他と離れて，低い位置にある．片方は恩恵を与えようという場面，もう一方はこどもへの話しかけ場面である．「デスマス」体が出ない理由は説明が付く．

顕著な増加が「議事堂，傘忘れ，医者，おつり，荷物預け，振込用紙」などで見られる．基準線 1 を越えるようになった．デフォルトとして「デスマス」を使うのが多くの場面で当たり前になったのだ．「医者」での使用が第 1 次で少なかった理由は，未解明である．後述のように，「ゴザル」が代わりに多かったわけではない．減少を示したのは「道教え」である．これも恩恵を与えようという場面である．ただしこれまでこのような心理的負担関係の要素が「デスマス体」の使用に直接働きかけるという指摘は少なかった（南 1987）．

図 2-1　12 場面全体　調査次ごと年代

図 2-1 の生年実年代による 12 場面全体のグラフは，有用で，多くの読み取り成果をもたらす．「デスマス」使用は，若い世代ほど多く，かつ年数が経つにつれ多くなったことを示す．ただし第 3 次では 10 代の数値が低い．鶴岡の共通語化で見られたパターンと似る．敬語のとらえ方全体に関わる重要なパターンである．

典型的な成人後採用のパターンではない．つまりこれまで「丁寧さ」「ていただく」「モーラ数」などで出てきた右下がり矢印の繰り返しパターン（3 本の右下がり線が復活する）傾向とまった

く違う．また第 3 次調査の 20～50 代で全平均として 1 を越えた．「デスマス」を使う場面が優勢になったわけである．第 1 次，2 次には 0.7 から 0.8 だったから，かつては「ダ体」による会話場面がかなり多かったことになる．

図 2-2, 図 2-3　12 場面全体　場面ごと　調査次散布図

図 2-2, 図 2-3 では，散布図を用いて，第 2 次，第 3 次で増加した場面を見分けやすく示した．真ん中で等分する線が数値 1 の「デスマス」使用基準線である．対角線の左上【右下】は文末の「デスマス」が増えた【減った】場面である．**図 2-3** によれば，第 3 次調査で顕著な増加が「議事堂，傘忘れ，医者，おつり，荷物預け，振込用紙」などで見られる．ことに場面が東京の「議事堂」で第 3 次の跳ね上がりが見られた．共通語的使用と見なされる．やや減少を示したのは「道教え，物売魚釣」である．「傘貸し」は他と離れて「デスマス」が少ない．**図 2-2** によれば，第 2 次調査までの推移は小さい．基準線 1 に注目すると，第 3 次調査になっていくつかの場面が他と離れて 1 以下になった．相手より心理的に優位に立つ場面と読み取れそうだが，数値の差が小さいので，結論とするほどの説得力はない．いずれにしろ，半世紀ほど年数をへだてたからこそ，変化が際立ったわけである．

なお井出・荻野・川崎・生田（1986）によれば，日本の大学生では「デスマス」を使うかどうかで言語表現がきれいに 2 分され，かつ話し相手も目上か目下かできれいに 2 分された．それにくらべると，岡崎の 12 場面はそれほどきれいには分かれない．

図 3-1～6　図 4-1～6　場面別調査次ごと年代

図 3～4 では，場面ごとに生年実年代のグラフを示した．場面ごとの計 100 年近くの推移が分かる．基準線 1 より上か下かが文体の推移としては重要である．生年実年代 3 回の調査で全世代で 1 を越える場面はない．それに近いものとして，「傘忘れ，議事堂，先生」がある．目上と見なされる人または未知の人が相手である．共通語の要求される場面でもある．他の多くの場面では，第 1 次で 1 以下で，第 3 次で 1 以上になる．「おつり，医者，振込用紙，荷物預け」である．一方ずっと 1 以下の項目もある．「席譲られ，新聞代，傘貸し」である．1 以下でしかも右下がりを示す項目もある．子どもが相手の「物売魚釣」である．「道教え」は，第 2 次で 1 以上の値を示したが，第 3 次で下がった．

全体グラフと同様の右上がりパターンがあるかに着目すると，かなり多い．3 本の線の傾きに着目すると，大きく 3 パターンになる．大部分は右上がりの自然な増加パターンである．右下がりの減少パターンを示すのは，「物売魚釣，道教え」，中高パターンを示すのは，「医者，傘貸し」である．「医者」の第 3 次若年層での減少は不可解である．「ゴザイマス」が代わりに増えているわけではない．

図 2-1 の生年実年代による 12 場面全体のグラフでは，数値 1 の線より丁寧な言い方が増える大傾向が見られたが，図 3～4 のように場面ごとに生年実年代のグラフを見ると，事態はそれほど単純ではない．場面のとらえ方が半世紀を隔てて変わったし，その時々の年齢差もある．目上

目下の関係は年齢差もからむから，同一時期の年齢差から言って，中年以上の人は「ダ体」を使う権利があり，若年層は「デスマス体」を使う義務があると考えたくなる．その目でもう一度，図 3〜4 を見ると，「物売魚釣」と「道教え」で期待に近い線が見えるが，他の多くの場面でむしろ若い人が「デスマス」をよく使う．共通語として普及しつつある（岡崎の方言としては「デスマス」をあまり使わなかった）と見られる．辻 2014 によると，岡崎では古風な尊敬語的な「マス」の用法も見られたという．

図 5-1 外的　社会項目　性別

図 5-1 では性差を扱う．男女ともに右上がりで，女性が「デスマス」を多く使う傾向があったが，第 3 次には差がなくなった．

図 5-2〜4 外的　社会項目　性別

図 5-2〜3 では男女に分けて，生年実年代グラフで 100 年以上の変化を見る．男性でも女性でもきれいな増加パターンが見られた．女性が多く使う傾向はどの世代でも見られた．

図 5-2〜4 では性差の場面による違いを調査次別に見る．散布図によれば，第 1 次では男女ともに 1 以下だったが，第 2 次で 1 付近に集中し，ほぼすべての場面で女性に多い．第 3 次では男女差なく対角線上に分散した．つまり場面による「デスマス」使い分けが大きくなった．ただ第 3 次のいくつかの場面で女性に少なくなる．「傘貸し，物売魚釣」は 3 回を通じて，他と離れて「デスマス」が少ない．

図 6-1〜4 外的　社会項目　性別，調査次別

図 6-1〜4 では性差の場面による違いを調査次ごとに細分して見る．男女ともに，1 次から 3 次にかけての増加が見られる．半世紀を経た第 3 次調査になって，場面の差が大きくなった．「傘貸し」が他と離れて「デスマス」が少ない．

図 7-1 学歴別

図 7-1 以下では学歴差を扱う．かつては学歴差が少しあったが，第 3 次でやや差が拡大した．

図 7-2　高学歴　学歴別

図 7-3　中学歴　学歴別

図 7-4　低学歴　学歴別

図 7-2〜4 によれば，どの学歴でも増加傾向が観察された．第 3 次の高学歴が多く使っているのは，この時代には大学生の割合が増えたことにもよるだろう．

図 8-1〜6 学歴別　散布図　調査次

図 8-1 以下 9 枚セットのグラフで学歴差を見る．どの場面でも斜めの線の左上にプロットされ

る．つまり学歴が高い人はいつの時代でもどの場面でもデスマスを多く使う．

下段の**図 8-5，8-6，9-3**，第 3 次の結果を見ると，全体の点数が上がって 1 以上の数値をとるものが多くなった．また場面差が広がった．

図 10-1 丁寧さ

図 10-1 によれば，丁寧さ 1 のゴザイマス体中心の場面で一番多く使われるが，丁寧さ 2 のデスマス体でも多い．

図 10-2　丁寧さと調査次

図 10-2 によれば，第 1 次から第 3 次にかけて，丁寧さ 1 のゴザイマス体の場面でも，丁寧さ 2 のデスマス体では増加している．ダ体の中でもまれに使われることがある．

詳細グラフ5　第4章3-2文末「デス．」

岡崎敬語調査　デス。平均使用数

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'desu.'

11場面：　101道教え～111傘貸し　　11 contexts: 101 Tell the way ~~~ 111 Lend umbrella

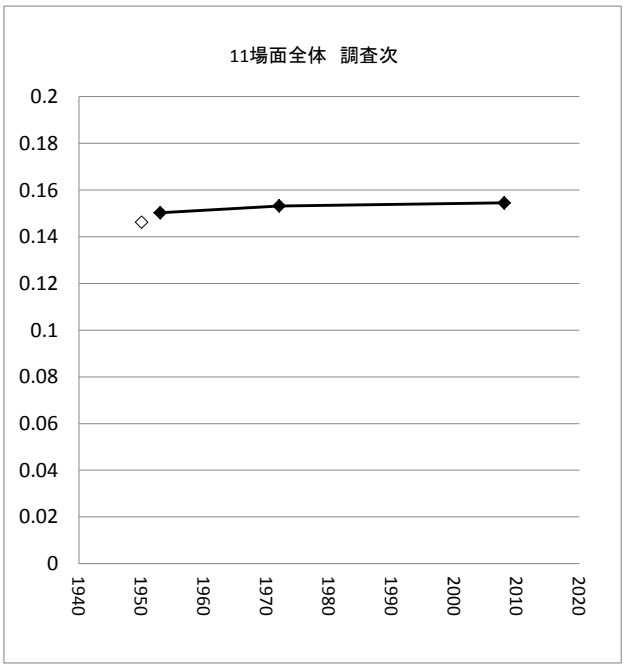


図1-1　11場面全体　調査次　（◆：プロパー、◇：コントロール）

Figure 1-1　In all the 11 contexts, by year of survey (◆: proper or professional ◇: control or college)

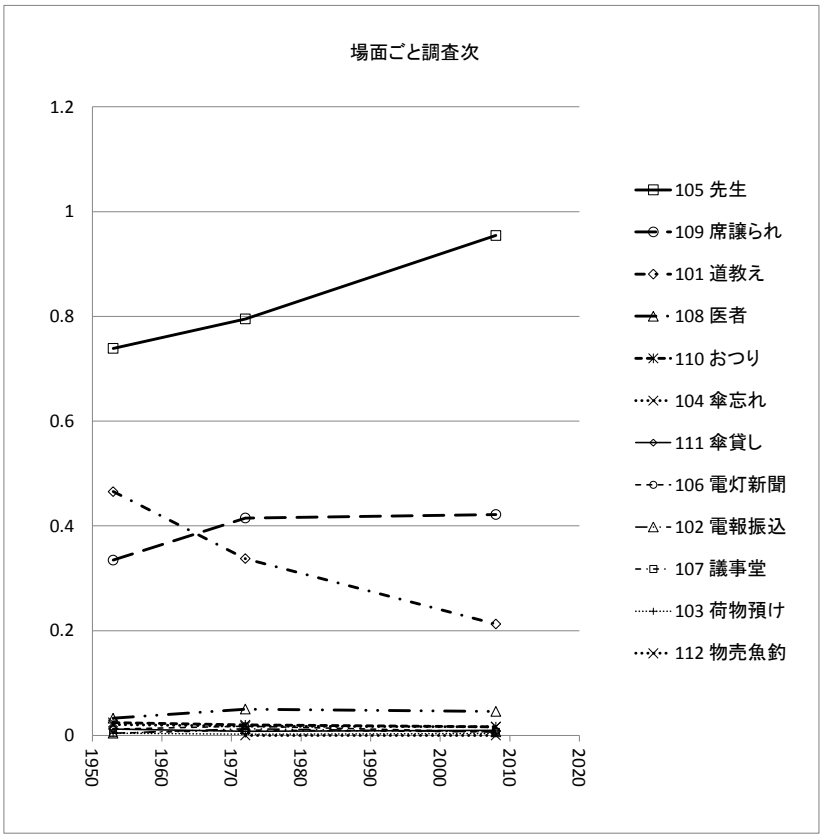


図1-2　場面ごと調査次　（プロパーのみ）

Figure 1-2　In each context, by year of survey (proper or professional only)

岡崎敬語調査　デス。平均使用数　11場面全体調査次ごと年代

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'desu.'　All the 11 contexts　by generations of three surveys

11場面：　101道教え～111傘貸し　11 contexts: 101 Tell the way --- 111 Lend umbrella

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代　Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

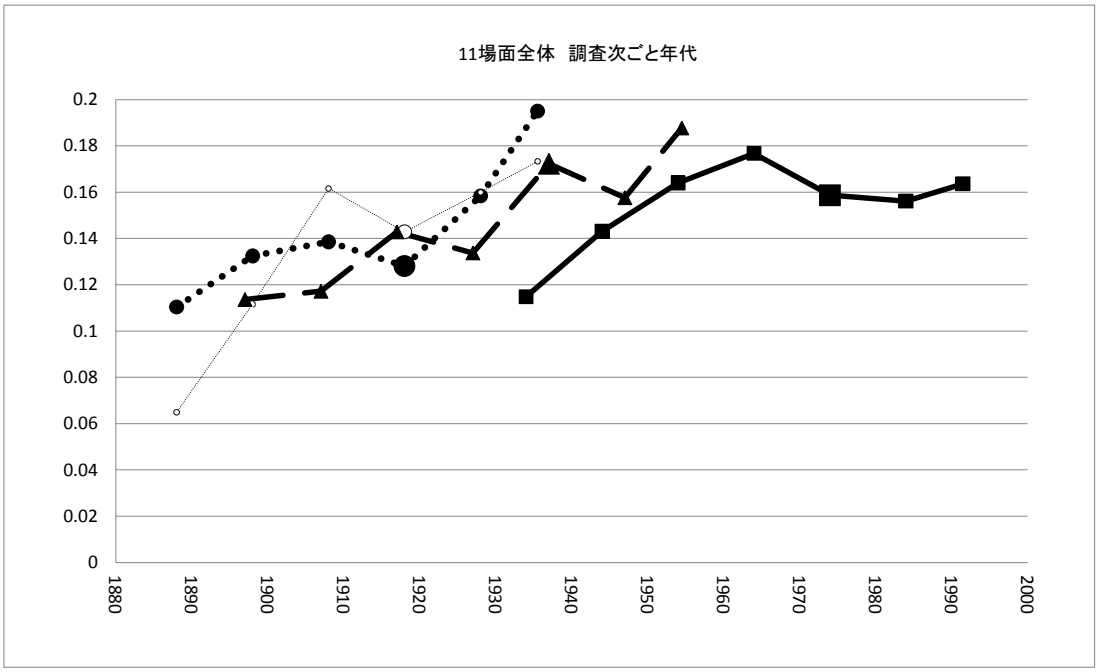


図2-1　11場面全体　調査次ごと年代　（◆：プロパー、◇：コントロール）

Figure 2-1　All the 11 contexts, generations of three surveys (◆: proper or professional ◇: control or college)

岡崎敬語調査　デス。平均使用数の散布図　場面ごと調査次（プロパーのみ）

Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'desu.'　In each context, by year of survey (proper or professional only)

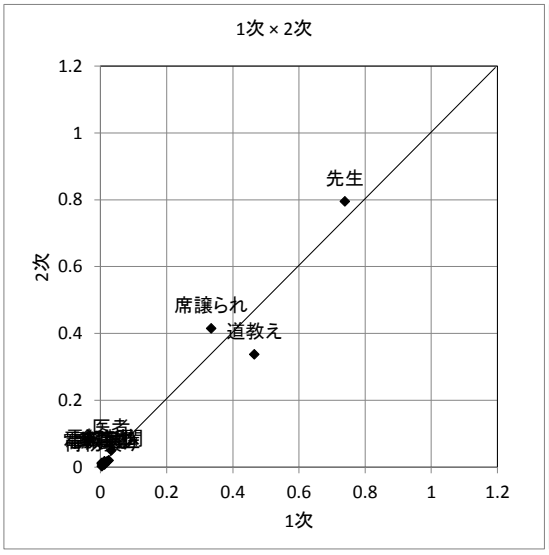


図2-2　場面ごと1次×2次　（プロパーのみ）

Figure 2-2　2nd against 1st survey, in each context (proper or professional only)

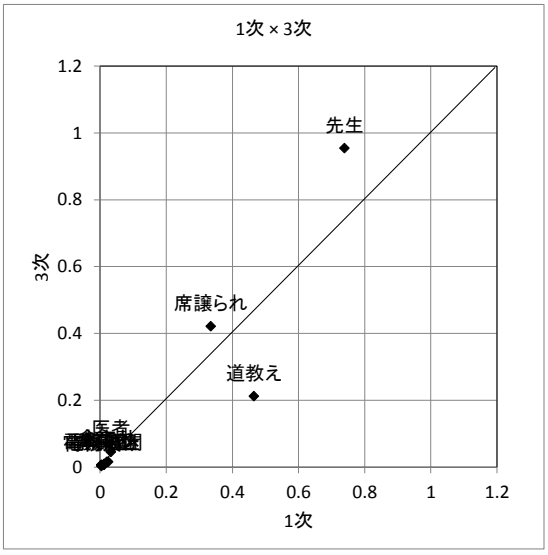


図2-3　場面ごと1次×3次　（プロパーのみ）

Figure 2-3　3rd against 1st survey, in each context (proper or professional only)

岡崎敬語調査　デス。平均使用数　場面別調査次ごと年代

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'desu.'　In each context, by generations, year of survey

場面：　縦に第3次平均使用数順 Context: Figure No. is given in order of the average usage rate in the third survey.

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代

Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

◆：プロパー、◇：コントロール

(◆: proper or professional ◇: control or college)

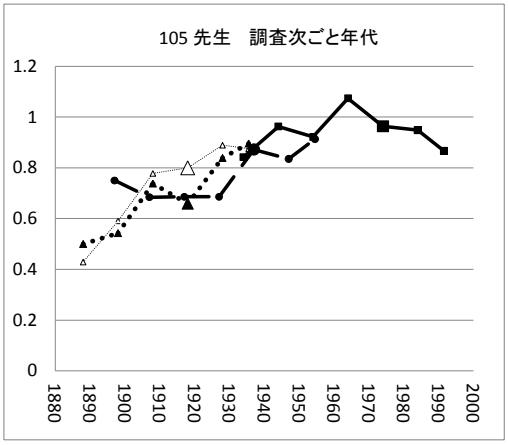


図3-1　105先生　調査次ごと年代

Figure 3-1 In 105 Ex-teacher, by year of survey, generations

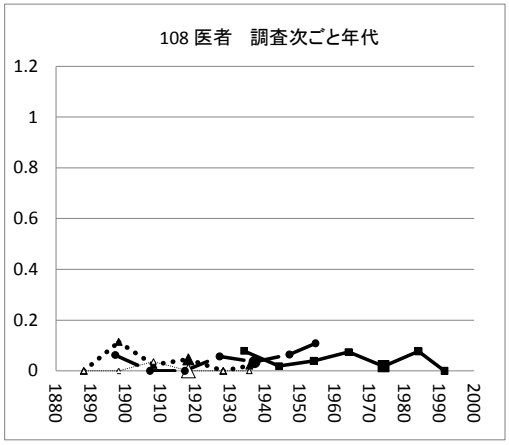


図3-4　108医者　調査次ごと年代

Figure 3-4 In 108 Doctor, by year of survey, generations

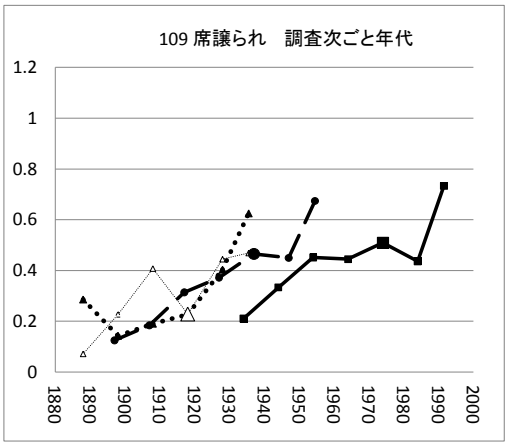


図3-2　109席譲られ　調査次ごと年代

Figure 3-2 In 109 Offered seat, by year of survey, generations

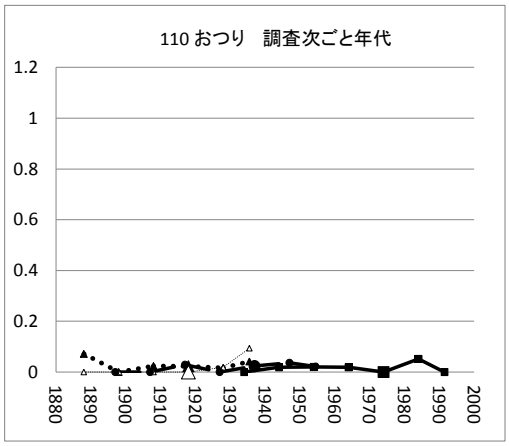


図3-5　110おつり　調査次ごと年代

Figure 3-5 In 110 Small change, by year of survey, generations

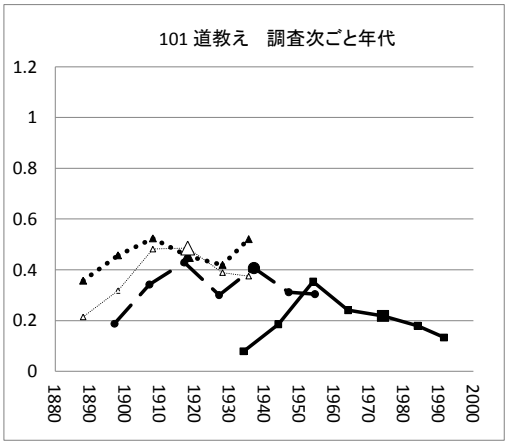


図3-3　101道教え　調査次ごと年代

Figure 3-3 In 101 Tell the way, by year of survey, generations

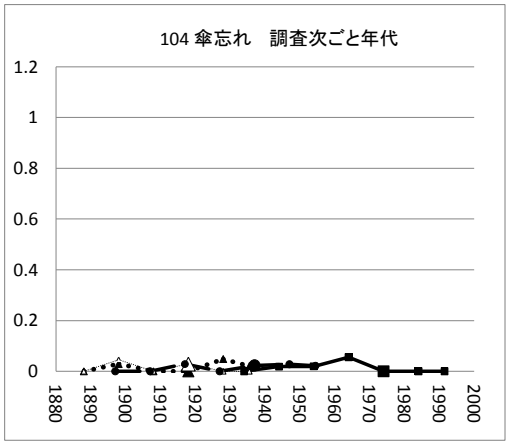


図3-6　104傘忘れ　調査次ごと年代

Figure 3-6 In 104 Left umbrella, by year of survey, generations

岡崎敬語調査　デス。平均使用数　場面別調査次ごと年代　（続き）

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'desu.'　In each context, by generations, year of survey (continued)

場面：　縦に第3次平均使用数順 Context: Figure No. is given in order of the average usage rate in the third survey.

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代　◆：プロパー、◇：コントロール

Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's (◆: proper or professional ◇: control or college)

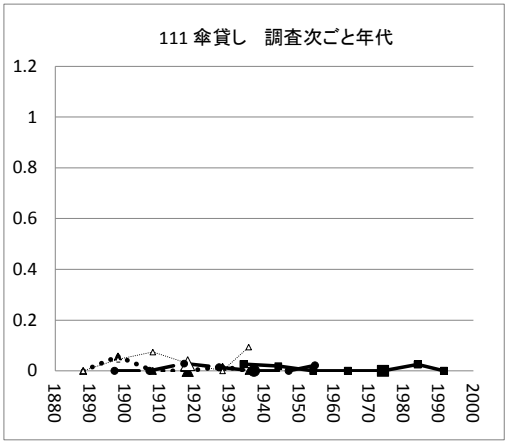


図4-1　111傘貸し　調査次ごと年代

Figure 4-1 In 111 Lend umbrella, by year of survey, generations

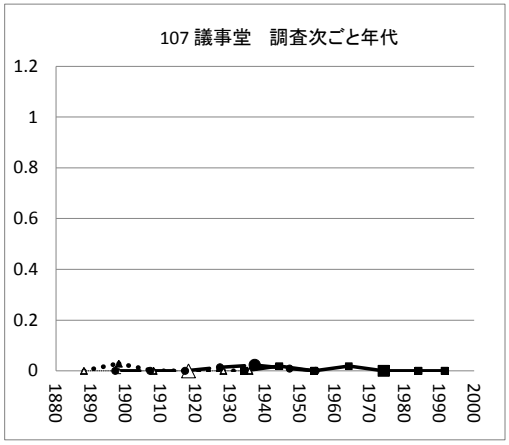


図4-4　107議事堂　調査次ごと年代

Figure 4-4 In 107 National Diet, by year of survey, generations

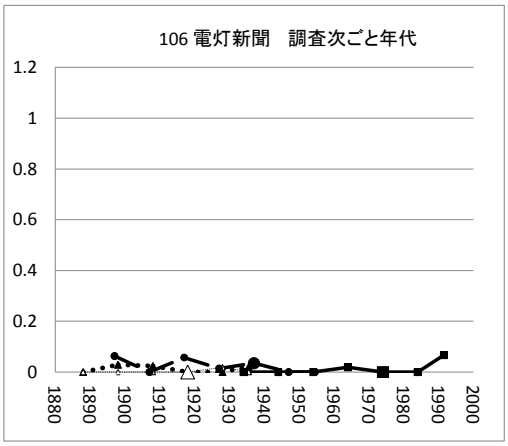


図4-2　106電灯新聞　調査次ごと年代

Figure 4-2 In 106 Newspaper bill, by year of survey, generations

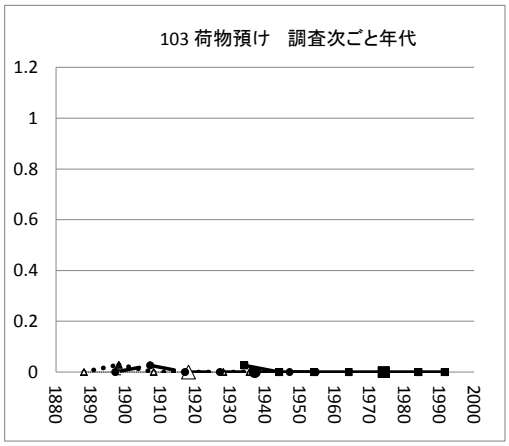


図4-5　103荷物預け　調査次ごと年代

Figure 4-5 In 103 Check baggage, by year of survey, generations

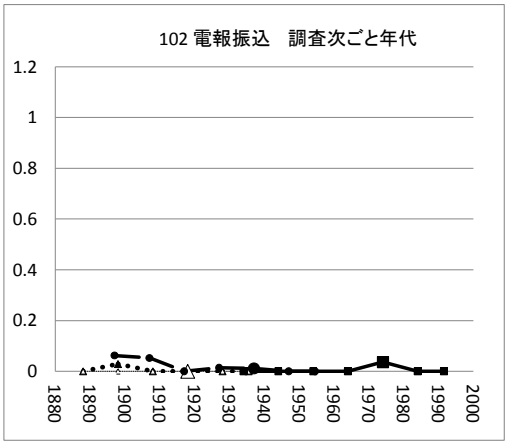


図4-3　102電報振込　調査次ごと年代

Figure 4-3 In 102 Remittance slip, by year of survey, generations

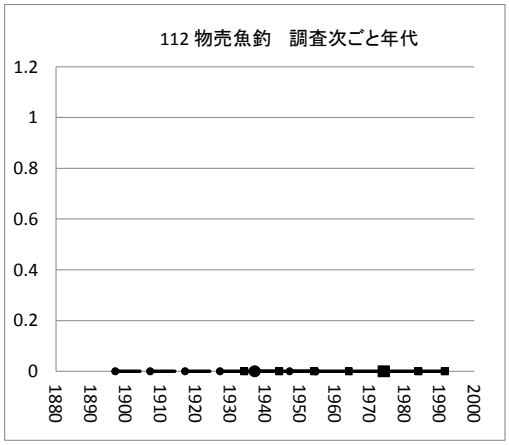


図4-6　112物売魚釣　調査次ごと年代

Figure 4-6 In 112 Fishing, by year of survey, generations

岡崎敬語調査　デス。平均使用数とその散布図
Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'desu.'

11場面全体　性別ごと調査次
All the 11 contexts, by gender, year of survey

11場面：　101道教え～111傘貸し
11 contexts: 101 Tell the way --- 111 Lend umbrella

◆：プロパー、◇：コントロール
◆: proper or professional ◇: control or college

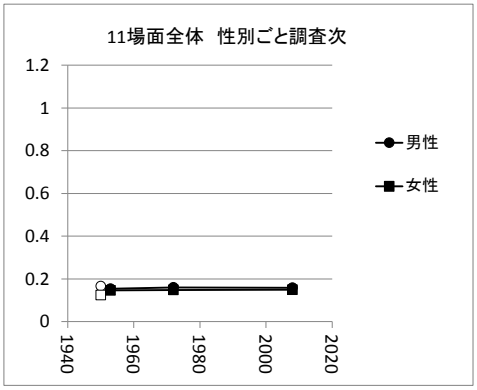


図5-1　11場面全体　性別ごと調査次
Figure 5-1 In all the 11 contexts, by gender, year of survey

男女別調査次ごと年代
By gender, generations, year of survey

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代
Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

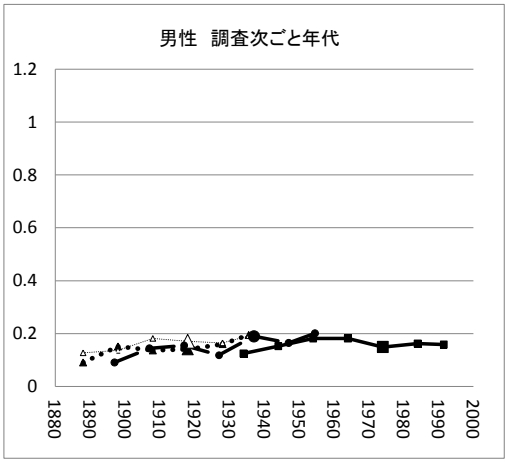


図5-2　男性　調査次ごと年代
Figure 5-2 Male, by year of survey, generations

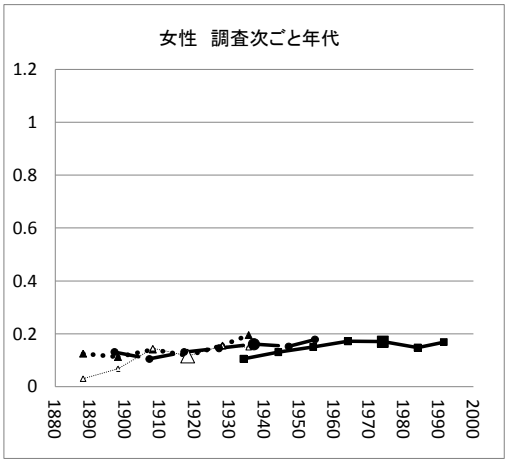


図5-3　女性　調査次ごと年代
Figure 5-3 Female, by year of survey, generations

調査次別　場面ごと性別（プロパーのみ）
By year of survey, in each context, by gender (proper or professional only)

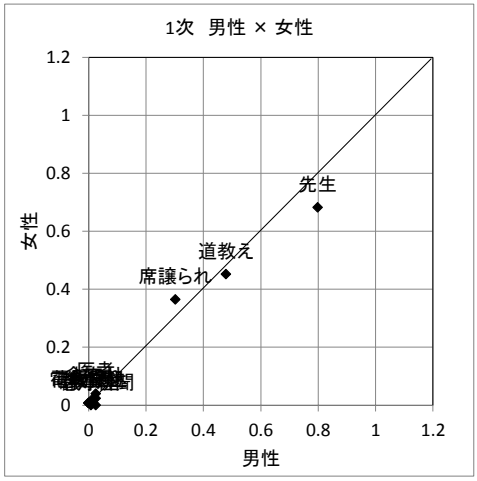


図5-4　1次　場面ごと男性×女性　（プロパーのみ）
Figure 5-4　1st survey, in each context,
female against male (proper or professional only)

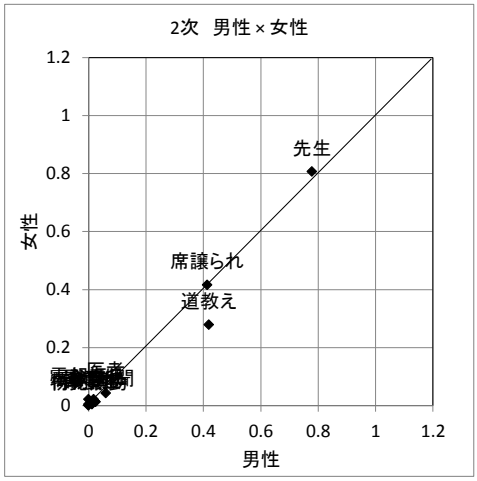


図5-5　2次　場面ごと男性×女性　（プロパーのみ）
Figure 5-5　2nd survey, in each context,
female against male (proper or professional only)

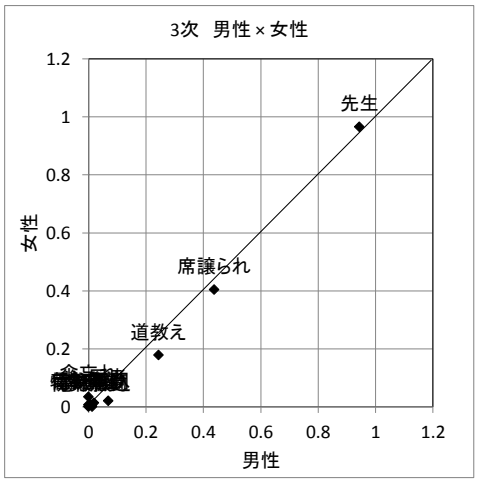


図5-6　3次　場面ごと男性×女性　（プロパーのみ）
Figure 5-6　3rd survey, in each context,
female against male (proper or professional only)

岡崎敬語調査　デス。平均使用数の散布図　男女別　場面ごと調査次(プロパーのみ)

Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'des By gender, in each context, by year of survey (proper or professional only)

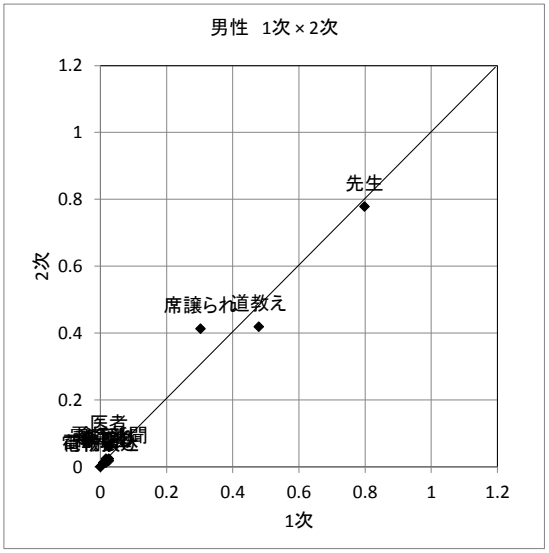


図6-1　男性　場面ごと1次×2次　(プロパーのみ)

Figure 6-1　Male, 2nd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

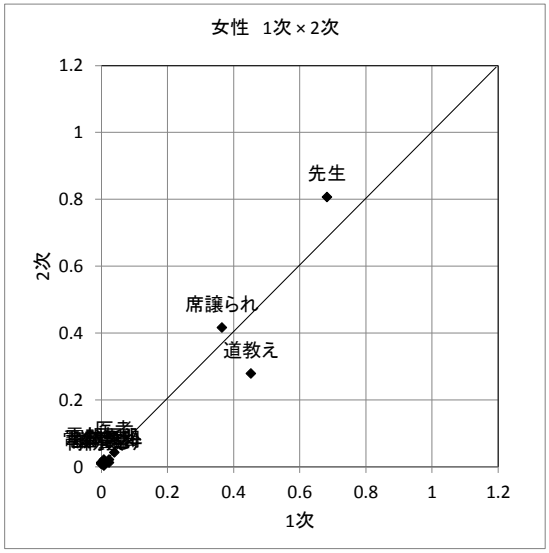


図6-2　女性　場面ごと1次×2次　(プロパーのみ)

Figure 6-2　Female, 2nd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

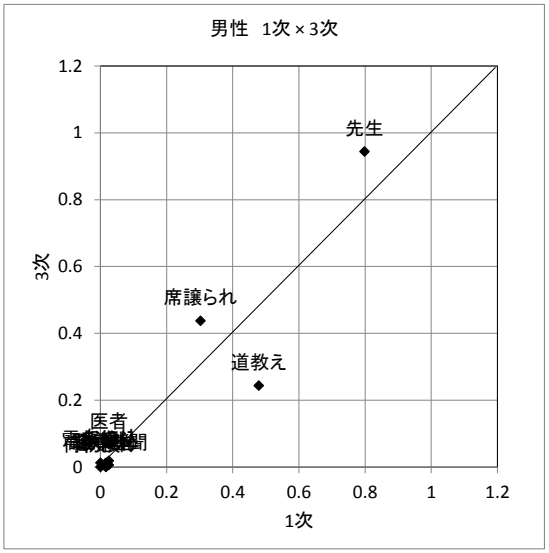


図6-3　男性　場面ごと1次×3次　(プロパーのみ)

Figure 6-3　Male, 3rd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

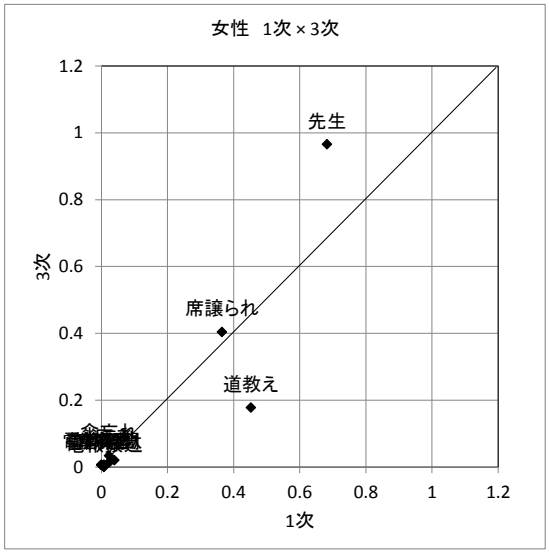


図6-4　女性　場面ごと1次×3次　(プロパーのみ)

Figure 6-4　Female, 3rd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

岡崎敬語調査　デス。平均使用数　　◆：プロパー、◇：コントロール

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'desu.'　◆：proper or professional ◇：control or college

11場面全体　学歴ごと調査次

All the 11 contexts, by academic background, year of survey

11場面：　101道教え～111傘貸し

11 contexts: 101 Tell the way --- 111 Lend umbrella

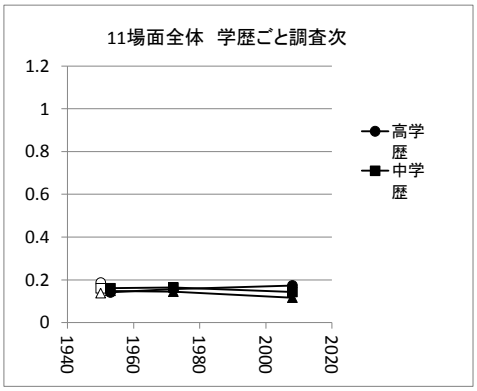


図7-1　11場面全体　学歴ごと調査次

Figure 7-1 In all the 11 contexts, by academic background, year of survey

学歴別調査次ごと年代

By academic background, generations, year of survey

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代

Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

無回答　No response

高学歴：1次P10代、60代；1次C10代；2次70代

High education: 1st proper 10's, 60's; 1st control 10's; 2nd 70's

中学歴：1次P60代；2次70代　Middle education: 1st proper 60's; 2nd, 70's

低学歴：3次20代、3次40代　Low education: 3rd, 20's and 3rd, 40's

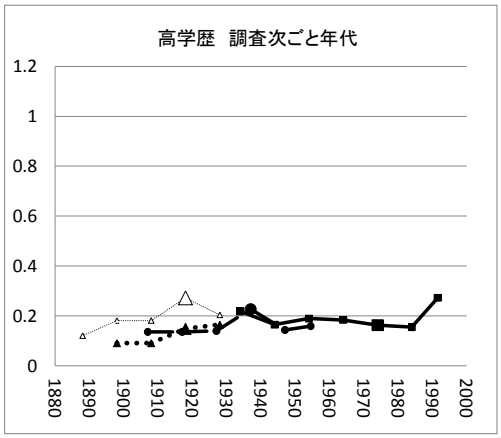


図7-2　高学歴　調査次ごと年代

Figure 7-2 High education, by year of survey, generations

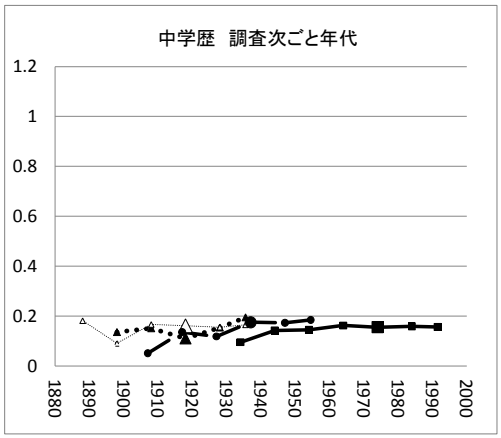


図7-3　中学歴　調査次ごと年代

Figure 7-3 Middle education, by year of survey, generations

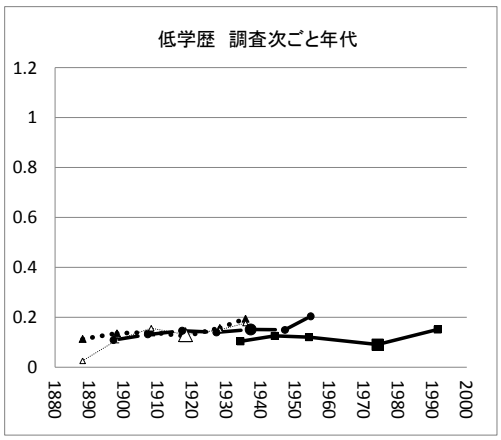


図7-4　低学歴　調査次ごと年代

Figure 7-4 Low education,by year of survey, generations

岡崎敬語調査　デス。平均使用数の散布図　調査次別　場面ごと学歴(プロパーのみ)

Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'des By year of survey, in each context, by academic background (proper or professional only)

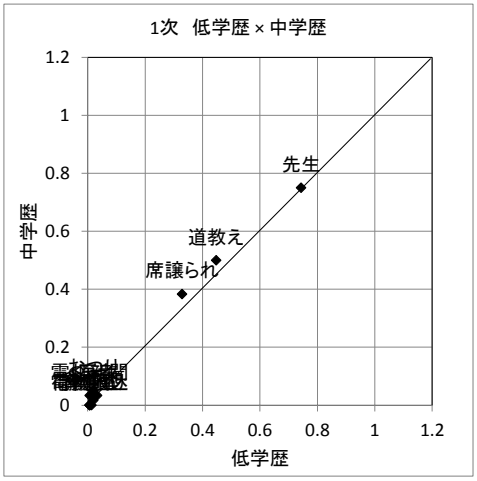


図8-1　1次　場面ごと低学歴×中学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-1　1st survey, in each context,
middle against low education (proper or professional only)

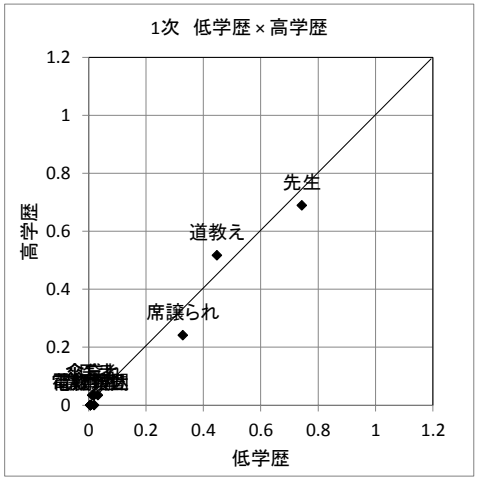


図8-2　1次　場面ごと低学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-2　1st survey, in each context,
high against low education (proper or professional only)

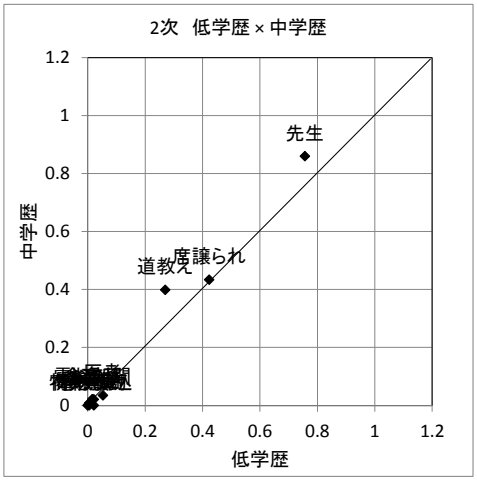


図8-3　2次　場面ごと低学歴×中学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-3　2nd survey, in each context,
middle against low education (proper or professional only)

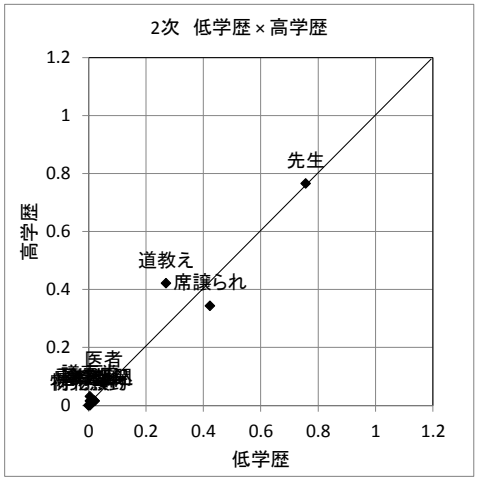


図8-4　2次　場面ごと低学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-4　2nd survey, in each context,
high against low education (proper or professional only)

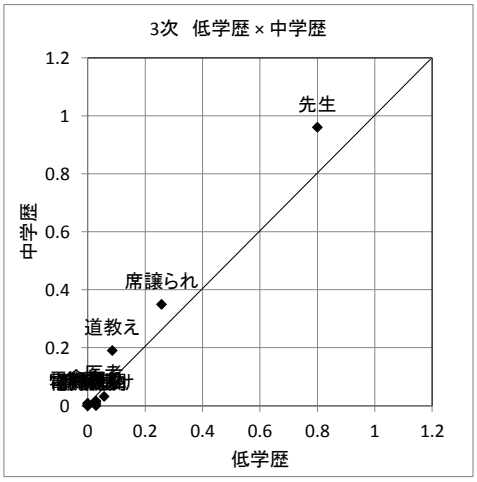


図8-5　3次　場面ごと低学歴×中学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-5　3rd survey, in each context,
middle against low education (proper or professional only)

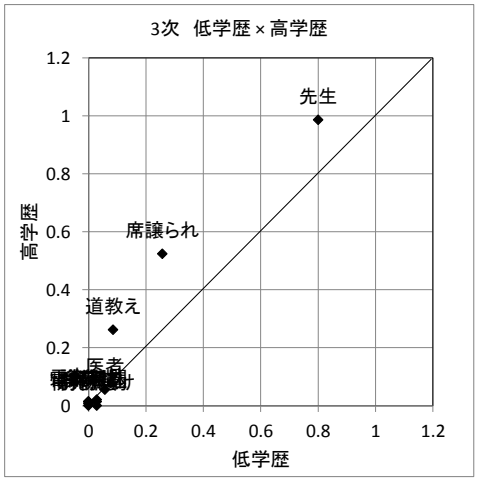


図8-6　3次　場面ごと低学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-6　3rd survey, in each context,
high against low education (proper or professional only)

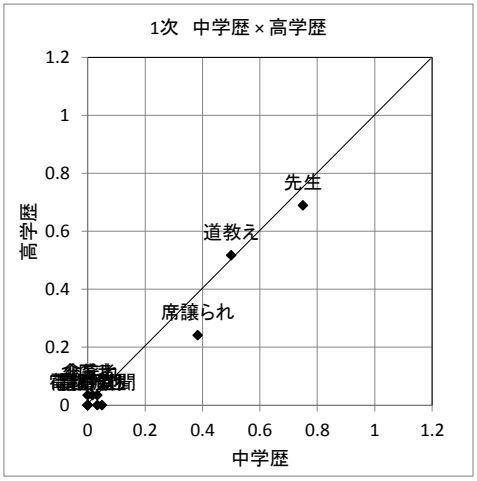


図9-1　1次　場面ごと中学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 9-1　1st survey, in each context,
high against middle education (proper or professional only)

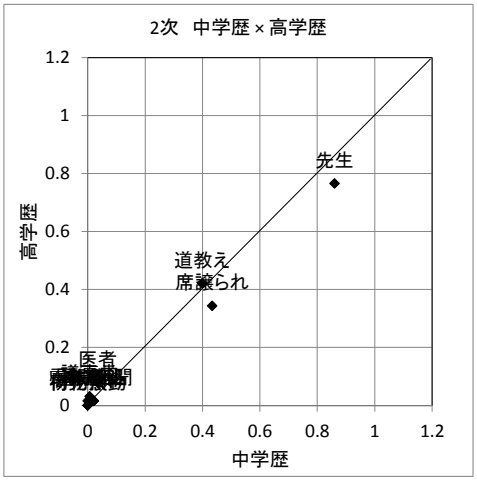


図9-2　2次　場面ごと中学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 9-2　2nd survey, in each context,
high against middle education (proper or professional only)

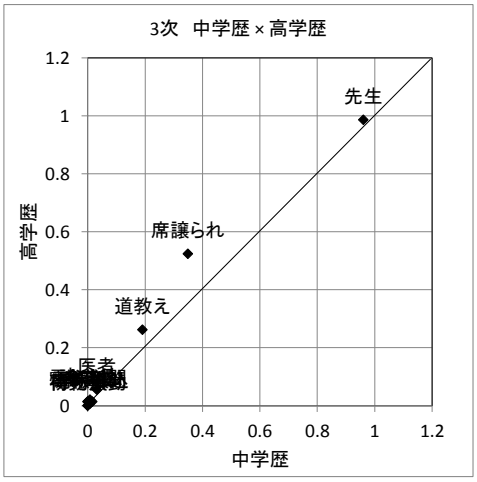


図9-3　3次　場面ごと中学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 9-3　3rd survey, in each context,
high against middle education (proper or professional only)

岡崎敬語調査　デス。平均使用数と丁寧さ

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'desu.' and pliteness

11場面：　101道教え～111傘貸し

11 contexts: 101 Tell the way --- 111 Lend umbrella

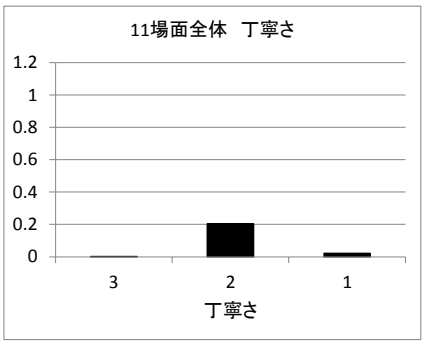


図10-1　11場面全体　丁寧さ

Figure 10-1　In all the 11 contexts, by politeness

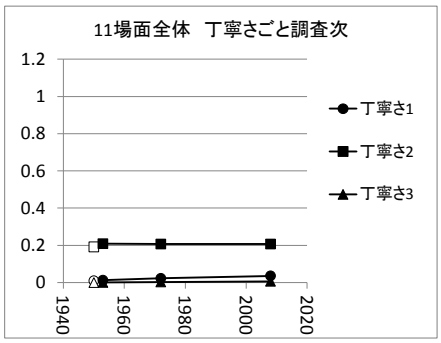


図10-2　11場面全体　丁寧さごと調査次

Figure 10-2　In all the 11 contexts, by politeness, year of survey

（◆：プロパー、◇：コントロール）

（◆：proper or professional ◇：control or college）

3.2. 文末「デス.」の横ばい　詳細グラフ解説

以上では文体を大きく分けるために，「デスマス」体としてまとめてグラフ化して解説した．以下では「デス」と「マス」を区別して，各グラフについて解説を加える．まず最近色々な形で進出著しい文末の「デス」を見る．文中・文末には助動詞，助詞を伴うもの，なしで終わるものなど様々あるが，ここでは助詞などをともなわずに，文を終えるものを選んだ．ただし話しことばの宿命で，単独の文なのか，2 文なのかの判別のつきにくいものもある．

以下では，第 4 章 3.2 の「デス」詳細グラフについて解説を加える．

図 1-1　12 場面全体　場面ごと調査次

図 1-1 に 12 場面全体の「デス」の出現頻度推移を示した．全体としてほとんど変化が見られない．文末「デスマス」の使用が多くなったことと矛盾する．次節 3.3 でマスも減っている．何かが代わりに増えたのだろう．

図 1-2　12 場面全体　場面ごと調査次

図 1-2 は 12 場面個々の推移を示す．横軸は 3 回の調査の間隔，実時間（19 年と 36 年）に合わせた．大多数の場面で「デス」が使われない．どの場面で多いかは，図 2-2, 2-3 のほうが分かりやすい．「先生」で増え続けている．「席譲られ」では第 2 次で多くなり，第 3 次では横ばいである．「道教え」では減り続けている．

図 2-1　12 場面全体　調査次ごと年代

図 2-1 の生年実年代による 12 場面全体のグラフで，「デス」使用は，3 回の調査の 4 本の線でゆるやかな右上がりが繰り返される．中年以下の世代で多くなることを示す．ただし 1940 年前後生れの人で分かるように，のちの時代になり，年を取ると「デス」を使わなくなる．『大規模経年調査資料集 11 岡崎の「ですます」と「ございます」』でみると，「ゴザル」が増えるわけでもないので，「ダ体」＝常体＝普通体になるのだろう．加齢に従い，調査で設定された相手が話者よりも年下になることも働くだろう．典型的な成人後採用の逆パターンである．

図 2-2, 図 2-3　12 場面全体　場面ごと　調査次散布図

図 2-2, 図 2-3 では，散布図を用いて，第 2 次，第 3 次で増加した場面を見分けやすく示した．真ん中で等分する線が数値 1 の「デス」使用基準線である．図 2-2 によれば，第 2 次調査までの推移は小さい．**図 2-3** によれば，第 3 次調査で顕著な増加が「先生」と「席譲られ」で見られる．「道教え」では減少した．他の場面ではほとんど使われない．

図 3-1〜6　図 4-1〜6　場面別調査次ごと生年実年代

図 3〜4 では，場面ごとに生年実年代のグラフを示した．場面ごとの計 100 年近くの推移が分

かる．使用率の多い場面から並べた．「先生」と「席譲られ」「道教え」が多い．恐らく定型的な表現が多いのだろう．この三つのパターンが違う．

「先生」では 3 回の調査全体として右上がりパターンを示す．若い人ほどまた近年になるほど「デス」が増えており，先生への（自分の子供の）紹介が画一化に向かいつつある．

「席譲られ」では 3 回の調査で右上がりパターンが繰り返されている．若い人がいつの時代にもデスを多用する．12 項目全体のパターンはこの項目に左右されたようだ．

「道教え」では逆で，3 回の調査全体として右下がりパターンが見られる．ただし各調査次で見ると中高である．テイタダクなどで観察された成人後採用のパターンある．ただし全体としては回を重ねるごとに使用率が下がる．

他の場面は出現頻度が少ないので，考察を控える．デスで終わる文は少ないわけだ．そのあとに終助詞ネなどが付く表現が普及した可能性がある．

図 5-1 図 5-2～3 外的　社会項目　性別

図 5-1 では性差を扱う．差がない．

図 5-2～3 で男女別に実年代グラフを見る．上下のグラフを比べると男性がやや多い．ただしグラフのパターンが複雑で，読み取りが困難である．

図 5-4～6 外的　社会項目　性別

図 5-4～6 では性差の場面による違いを調査次別に見る．散布図によれば，「先生」「席譲られ」「道教え」だけが考察に値する．第 1 次の「先生」で男性に多いことを除くと，性差は目立たない．

図 6-1～4 外的　社会項目　性別，調査次別

図 6-1～4 では性差の場面による違いを調査次ごとに細分して見る．「先生」「席譲られ」「道教え」が大きい値をとる．男女ともに，1 次から 3 次にかけての推移が大きい．図 6-4 によると，ことに第 3 次調査の女性が第 1 次と離れる．「先生」では「デス」が多くなり，「道教え」では「デス」が少なくなった．

図 7-1 学歴別

図 7-1 以下では学歴差を扱う．かつては学歴差がないに等しかったが，第 3 次で，高学歴ほど「デス」使用が多くなった．

図 7-2　高学歴　学歴別

図 7-3　中学歴　学歴別

図 7-4　低学歴　学歴別

図 7-2 によれば，生年実年代による差がある．高学歴の若年層で多い．**図 7-3** 中学歴，**図 7-4**

低学歴では右上がりカーブが繰り返される．

図 8-1～6 学歴別　散布図　調査次

図 8-1 以下 9 枚セットのグラフで各場面を個別に見る．

下段の**図 8-5，8-6，9-3**，第 3 次の結果を見ると，以前よりも先生が他の場面と離れる傾向がある．

図 10-1 丁寧さ

図 10-1 によれば，2 のデスマス体中心の場面で一番多く使われる．当然の結果だが，後述「ません」と対照すると，位置づけが分かる．

図 10-2　丁寧さと調査次

図 10-2 によれば，第 1 次から第 3 次にかけて，変化は見られない．しかし 2 のデスマス体中心の場面で一番多く使われる．

詳細グラフ6　第4章3-3文末「マス．」

岡崎敬語調査　マス。平均使用数

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'masu.'

11場面：　101道教え～111傘貸し　　11 contexts: 101 Tell the way --- 111 Lend umbrella

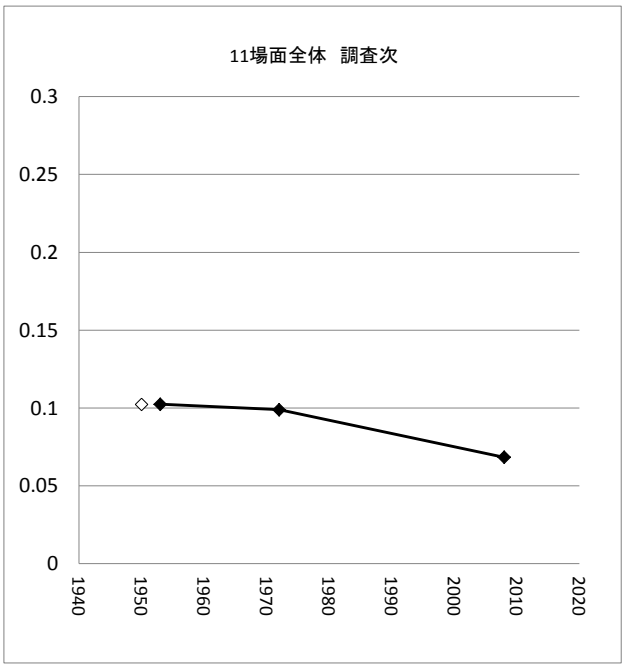


図1-1　11場面全体　調査次　（◆：プロパー、◇：コントロール）

Figure 1-1　In all the 11 contexts, by year of survey (◆: proper or professional ◇: control or college)

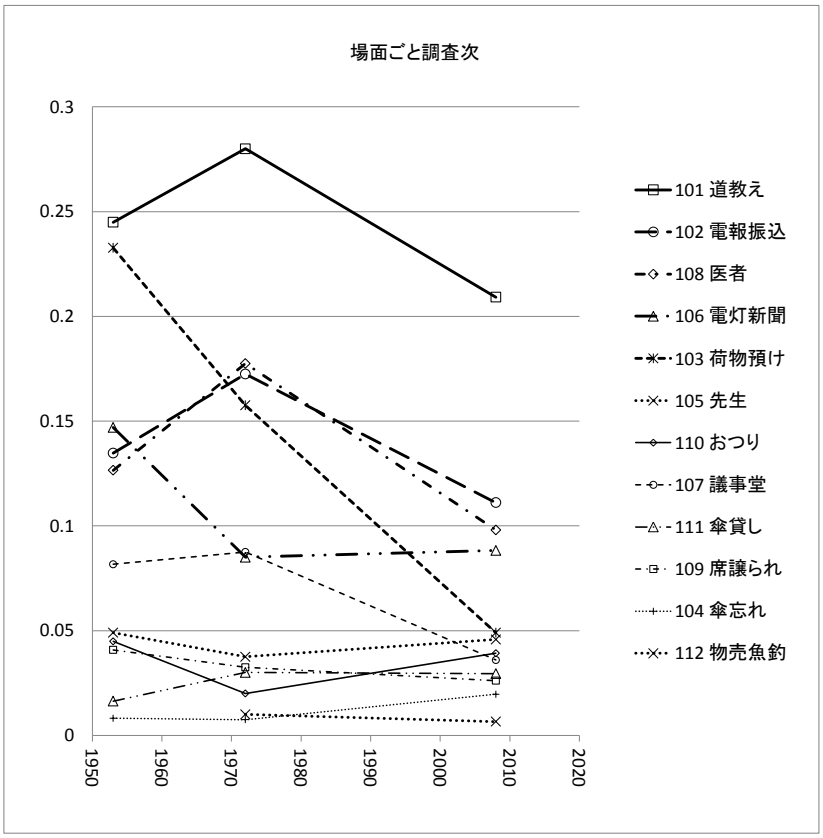


図1-2　場面ごと調査次　（プロパーのみ）

Figure 1-2　In each context, by year of survey (proper or professional only)

岡崎敬語調査　マス。平均使用数　11場面全体調査次ごと年代

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'masu.'　All the 11 contexts　by generations of three surveys

11場面：　101道教え～111傘貸し　11 contexts: 101 Tell the way ~~~ 111 Lend umbrella

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代　Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

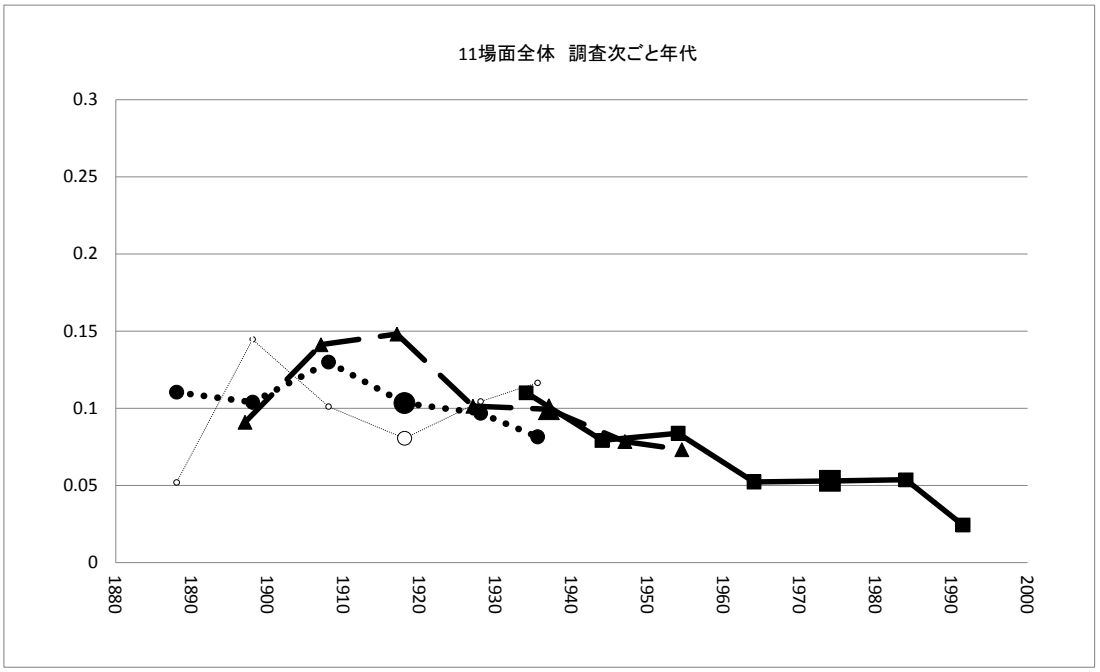


図2-1　11場面全体　調査次ごと年代　（◆：プロパー、◇：コントロール）

Figure 2-1　All the 11 contexts, generations of three surveys (◆: proper or professional ◇: control or college)

岡崎敬語調査　マス。平均使用数の散布図　場面ごと調査次（プロパーのみ）

Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'masu.'　In each context, by year of survey (proper or professional only)

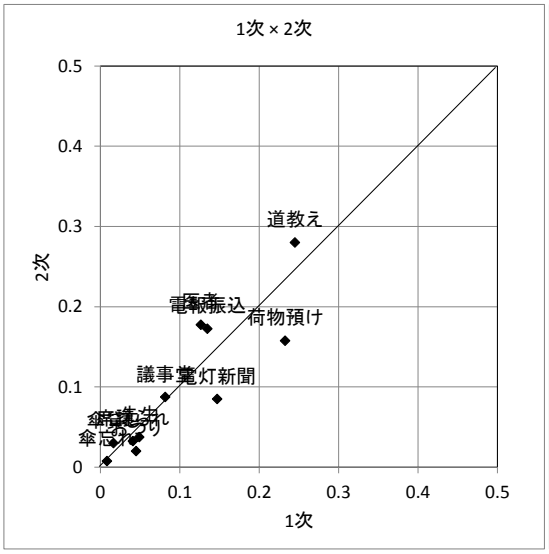


図2-2　場面ごと1次×2次　（プロパーのみ）

Figure 2-2　2nd against 1st survey, in each context (proper or professional only)

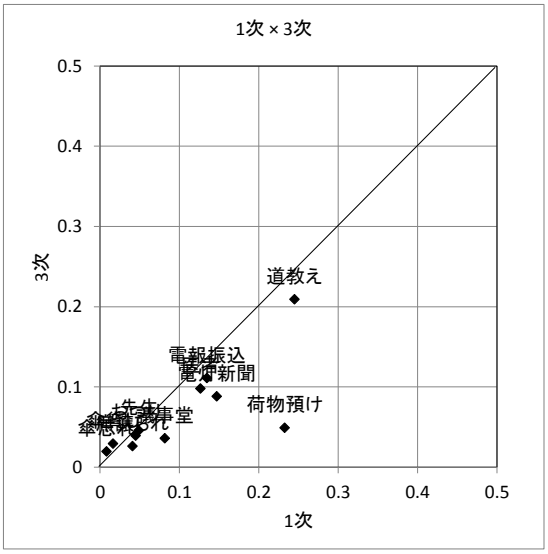


図2-3　場面ごと1次×3次　（プロパーのみ）

Figure 2-3　3rd against 1st survey, in each context (proper or professional only)

岡崎敬語調査　マス。平均使用数　場面別調査次ごと年代

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'masu.'　In each context, by generations, year of survey

場面：　縦に第3次平均使用数順　Context: Figure No. is given in order of the average usage rate in the third survey.

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代　◆：プロパー、◇：コントロール

Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's　(◆: proper or professional ◇: control or college)

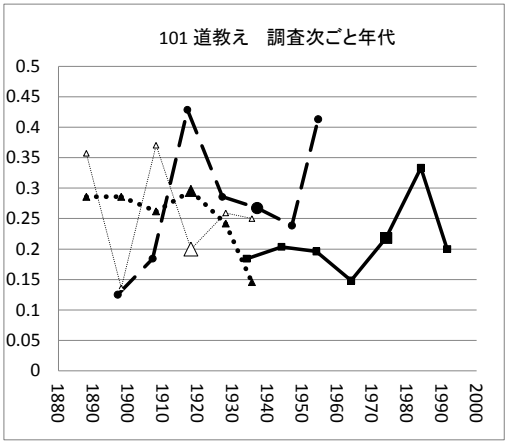


図3-1　101道教え　調査次ごと年代

Figure 3-1　In 101 Tell the way, by year of survey, generations

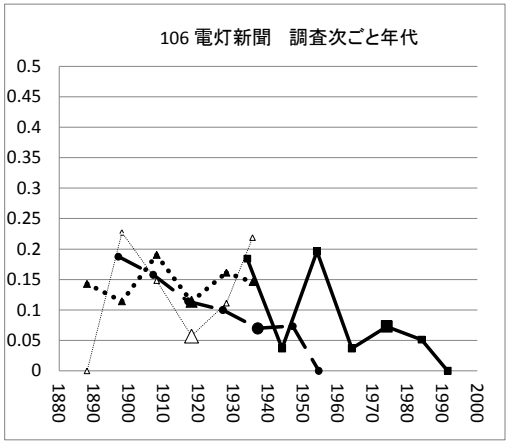


図3-4　106電灯新聞　調査次ごと年代

Figure 3-4　In 106 Newspaper bill, by year of survey, generations

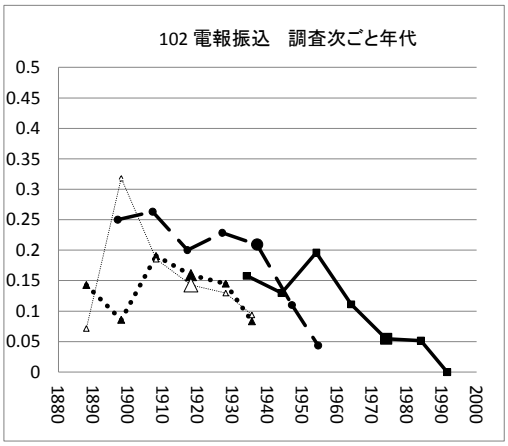


図3-2　102電報振込　調査次ごと年代

Figure 3-2　In 102 Remittance slip, by year of survey, generations

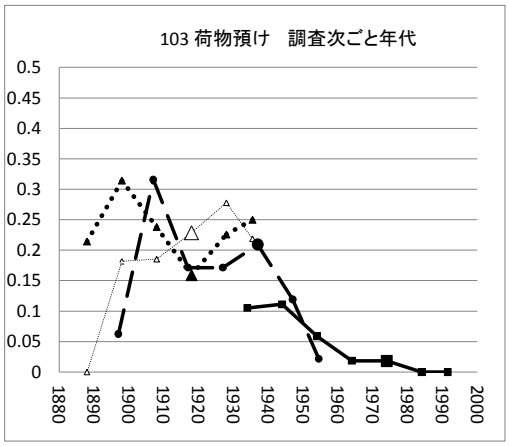


図3-5　103荷物預け　調査次ごと年代

Figure 3-5　In 103 Check baggage, by year of survey, generations

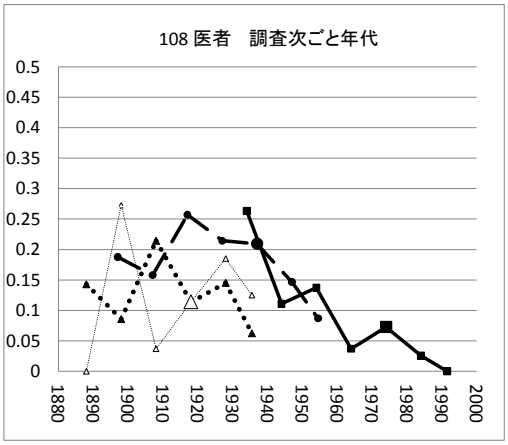


図3-3　108医者　調査次ごと年代

Figure 3-3　In 108 Doctor, by year of survey, generations

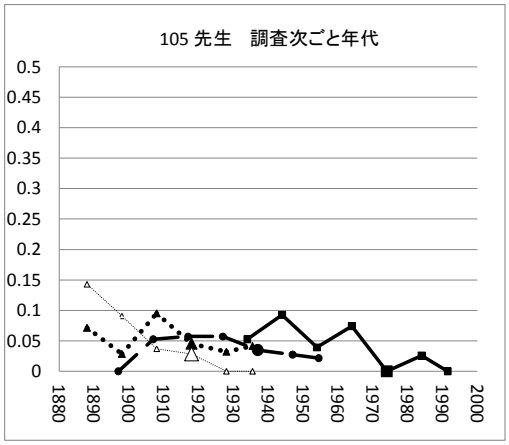


図3-6　105先生　調査次ごと年代

Figure 3-6　In 105 Ex-teacher, by year of survey, generations

岡崎敬語調査　マス。平均使用数　場面別調査次ごと年代　（続き）

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'masu.'　In each context, by generations, year of survey (continued)

場面：　縦に第3次平均使用数順 Context: Figure No. is given in order of the average usage rate in the third survey.

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代　◆：プロパー、◇：コントロール

Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's (◆: proper or professional ◇: control or college)

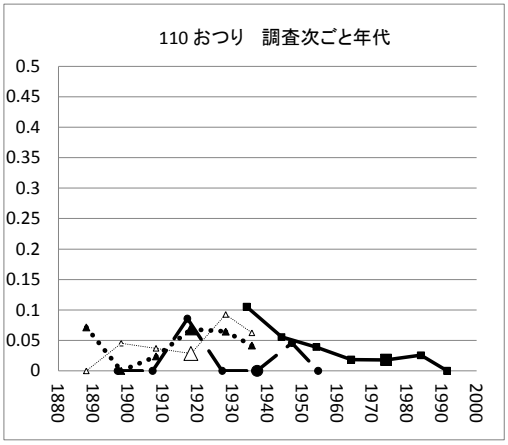


図4-1　110おつり　調査次ごと年代

Figure 4-1　In 110 Small change, by year of survey, generations

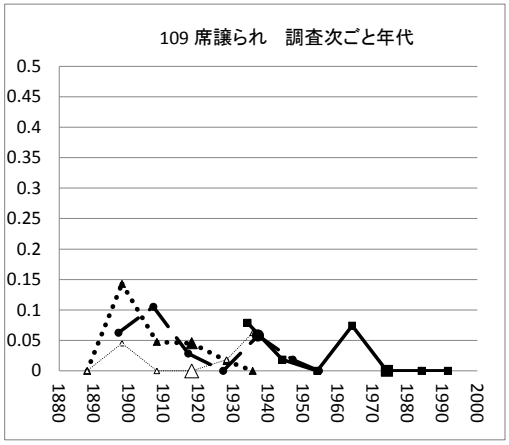


図4-4　109席譲られ　調査次ごと年代

Figure 4-4　In 109 Offered seat, by year of survey, generations

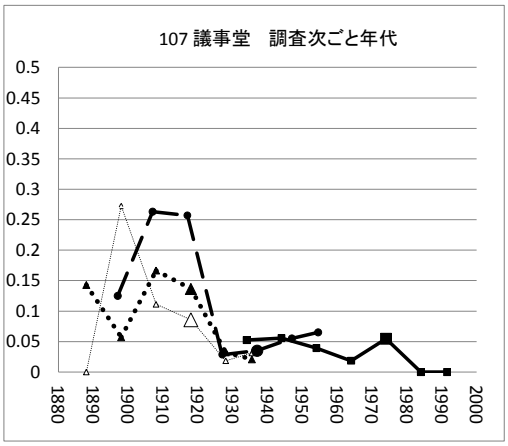


図4-2　107議事堂　調査次ごと年代

Figure 4-2　In 107 National Diet, by year of survey, generations

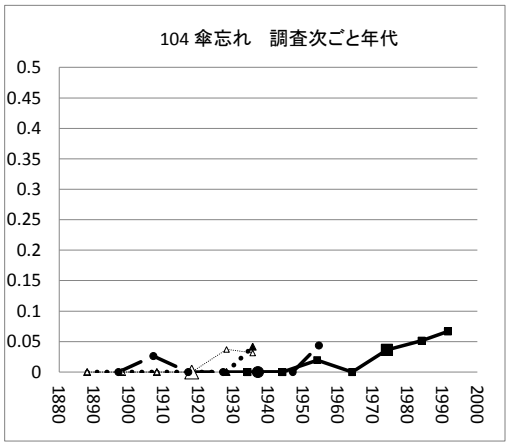


図4-5　104傘忘れ　調査次ごと年代

Figure 4-5　In 104 Left umbrella, by year of survey, generations

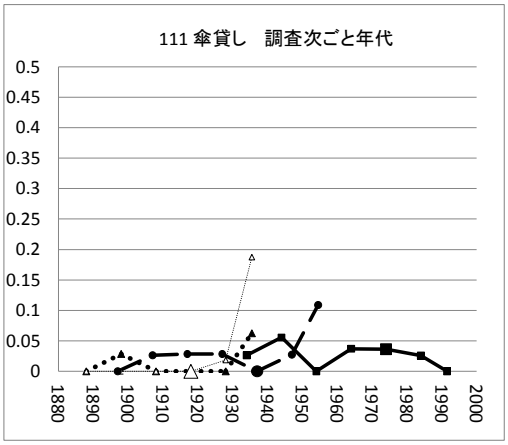


図4-3　111傘貸し　調査次ごと年代

Figure 4-3　In 111 Lend umbrella, by year of survey, generations

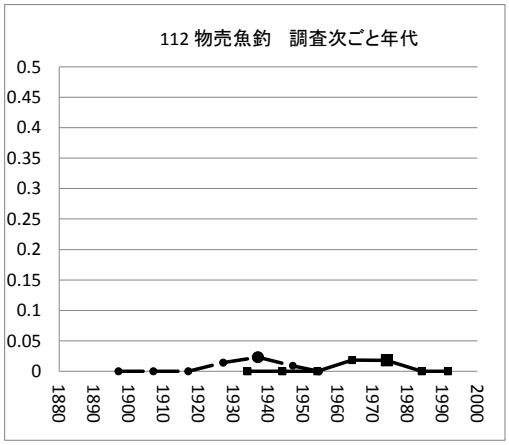


図4-6　112物売魚釣　調査次ごと年代

Figure 4-6　In 112 Fishing, by year of survey, generations

岡崎敬語調査　マス。平均使用数とその散布図
Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'masu.'

11場面全体　性別ごと調査次
All the 11 contexts, by gender, year of survey

11場面：　101道教え～111傘貸し
11 contexts: 101 Tell the way --- 111 Lend umbrella

◆：プロパー、◇：コントロール
◆: proper or professional ◇: control or college

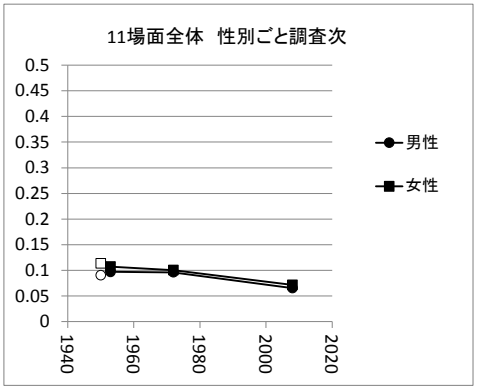


図5-1　11場面全体　性別ごと調査次
Figure 5-1 In all the 11 contexts, by gender, year of survey

男女別調査次ごと年代
By gender, generations, year of survey

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代
Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

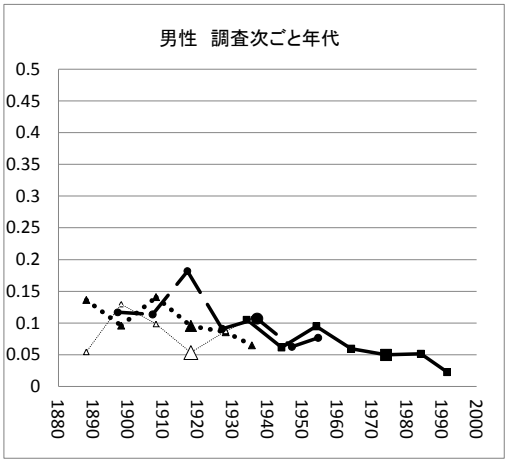


図5-2　男性　調査次ごと年代
Figure 5-2　Male, by year of survey, generations

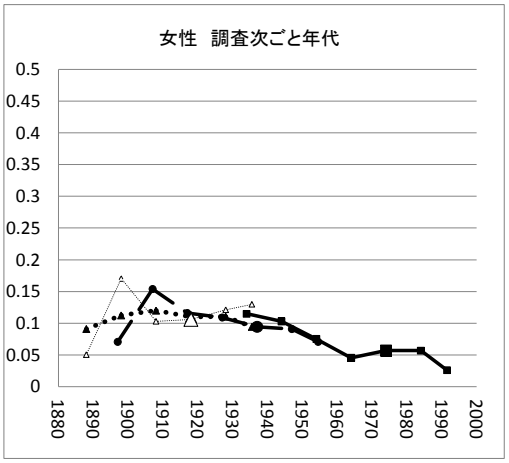


図5-3　女性　調査次ごと年代
Figure 5-3　Female, by year of survey, generations

調査次別　場面ごと性別（プロパーのみ）
By year of survey,　in each context, by gender (proper or professional only)

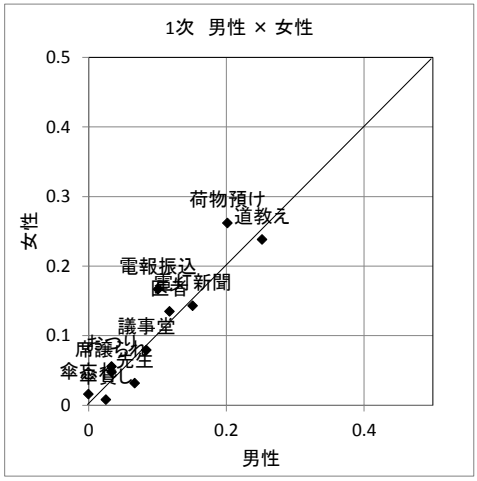


図5-4　1次　場面ごと男性×女性　（プロパーのみ）
Figure 5-4　1st survey, in each context,
female against male (proper or professional only)

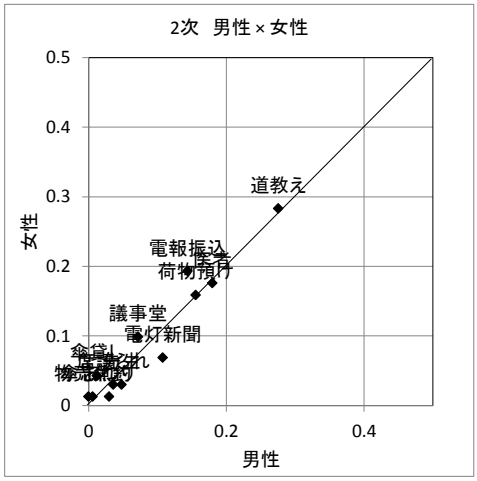


図5-5　2次　場面ごと男性×女性　（プロパーのみ）
Figure 5-5　2nd survey, in each context,
female against male (proper or professional only)

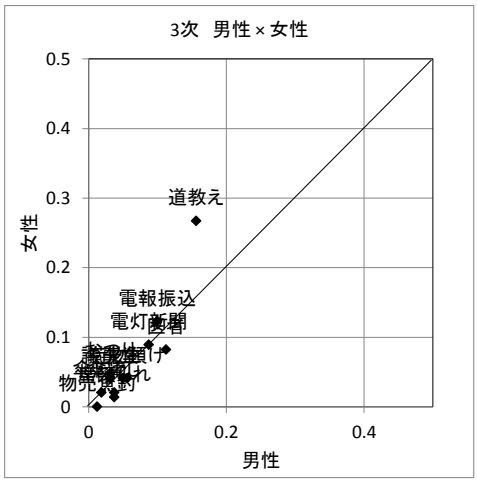


図5-6　3次　場面ごと男性×女性　（プロパーのみ）
Figure 5-6　3rd survey, in each context,
female against male (proper or professional only)

岡崎敬語調査　マス。平均使用数の散布図　男女別　場面ごと調査次(プロパーのみ)

Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'ma: By gender, in each context, by year of survey (proper or professional only)

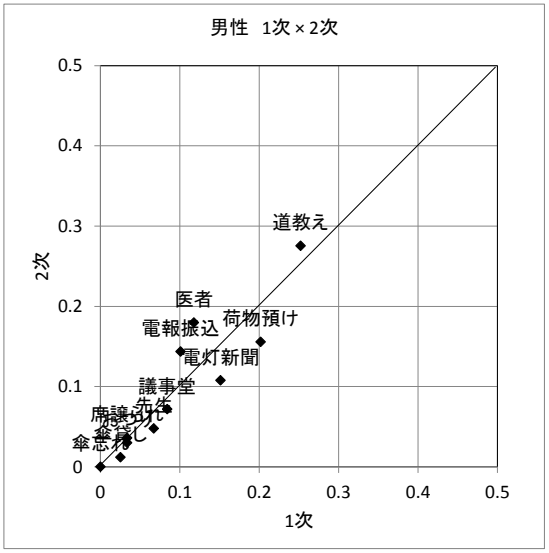


図6-1　男性　場面ごと1次×2次　(プロパーのみ)

Figure 6-1　Male, 2nd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

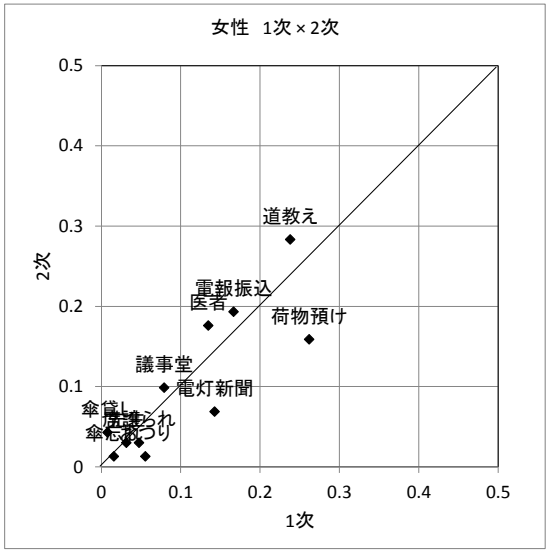


図6-2　女性　場面ごと1次×2次　(プロパーのみ)

Figure 6-2　Female, 2nd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

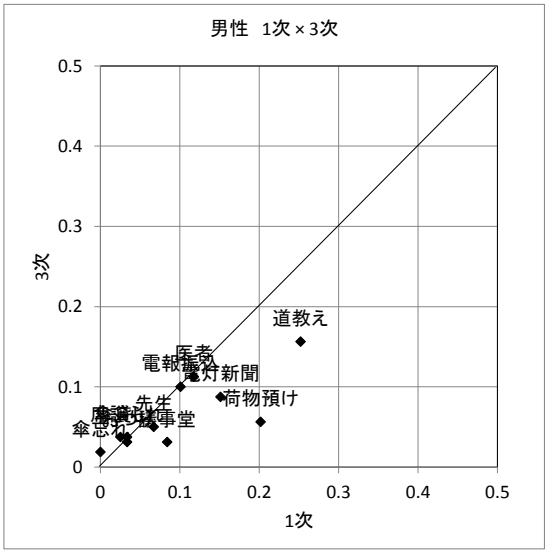


図6-3　男性　場面ごと1次×3次　(プロパーのみ)

Figure 6-3　Male, 3rd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

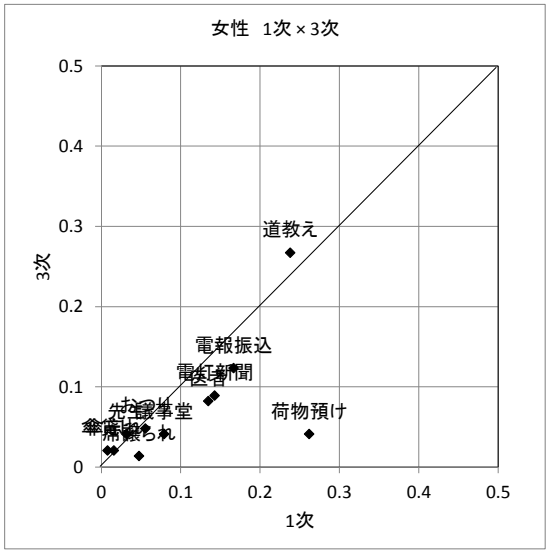


図6-4　女性　場面ごと1次×3次　(プロパーのみ)

Figure 6-4　Female, 3rd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

岡崎敬語調査　マス。平均使用数　　◆：プロパー、◇：コントロール

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'masu.'　◆：proper or professional ◇：control or college

11場面全体　学歴ごと調査次

All the 11 contexts, by academic background, year of survey

11場面：　101道教え～111傘貸し

11 contexts: 101 Tell the way ~~~ 111 Lend umbrella

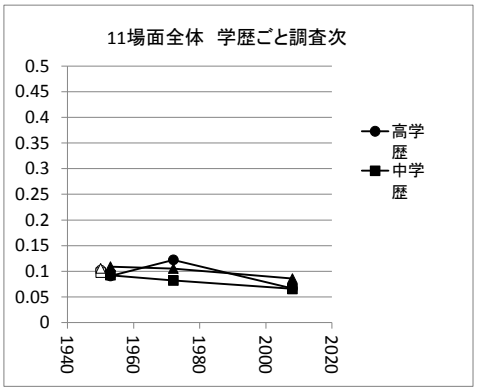


図7-1　11場面全体　学歴ごと調査次

Figure 7-1 In all the 11 contexts, by academic background, year of survey

学歴別調査次ごと年代

By academic background, generations, year of survey

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代

Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

無回答　No response

高学歴：1次P10代、60代；1次C10代；2次70代

High education: 1st proper 10's, 60's; 1st control 10's; 2nd 70's

中学歴：1次P60代；2次70代　Middle education: 1st proper 60's; 2nd, 70's

低学歴：3次20代、3次40代　Low education: 3rd, 20's and 3rd, 40's

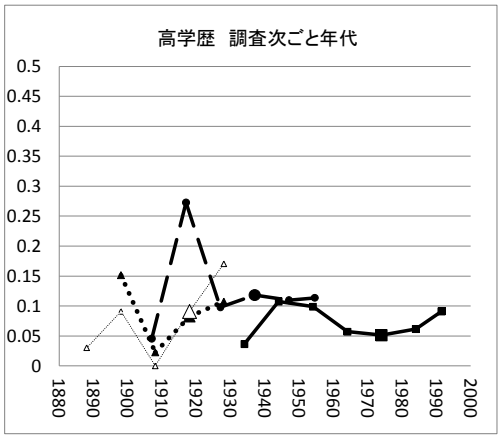


図7-2　高学歴　調査次ごと年代

Figure 7-2 High education, by year of survey, generations

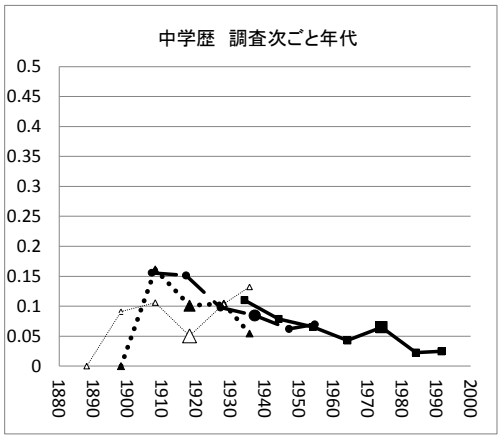


図7-3　中学歴　調査次ごと年代

Figure 7-3 Middle education, by year of survey, generations

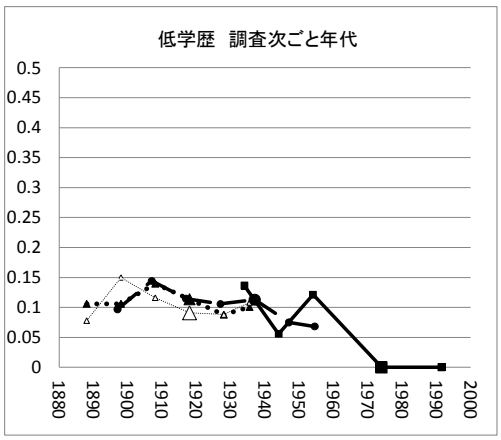


図7-4　低学歴　調査次ごと年代

Figure 7-4 Low education,by year of survey, generations

岡崎敬語調査　マス。平均使用数の散布図　調査次別　場面ごと学歴(プロパーのみ)

Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'ma: By year of survey, in each context, by academic background (proper or professional only)

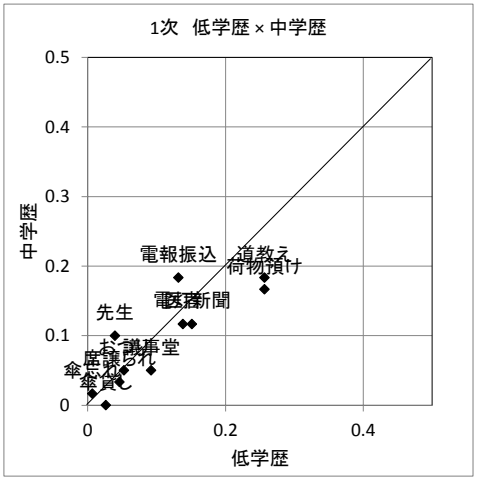


図8-1　1次　場面ごと低学歴×中学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-1　1st survey, in each context,
middle against low education (proper or professional only)

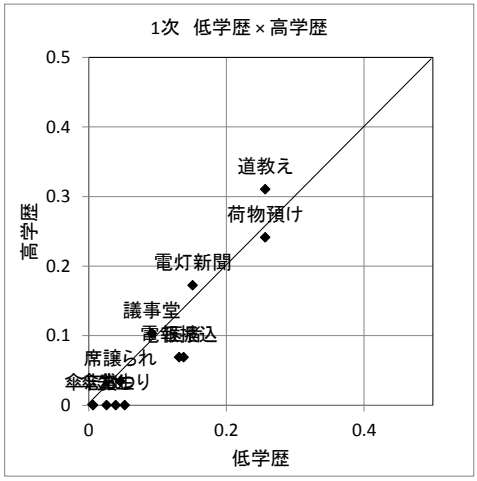


図8-2　1次　場面ごと低学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-2　1st survey, in each context,
high against low education (proper or professional only)

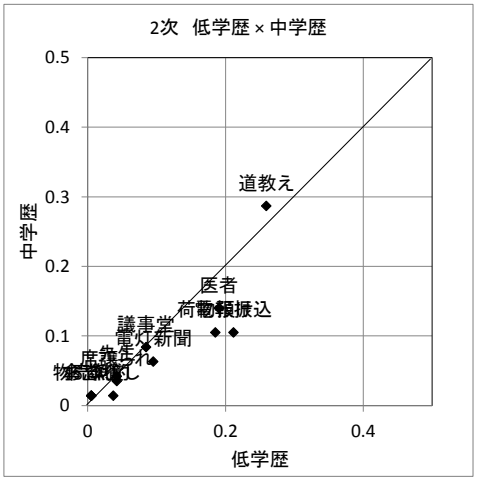


図8-3　2次　場面ごと低学歴×中学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-3　2nd survey, in each context,
middle against low education (proper or professional only)

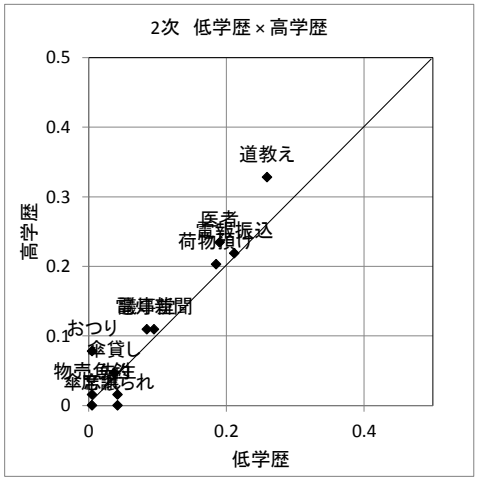


図8-4　2次　場面ごと低学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-4　2nd survey, in each context,
high against low education (proper or professional only)

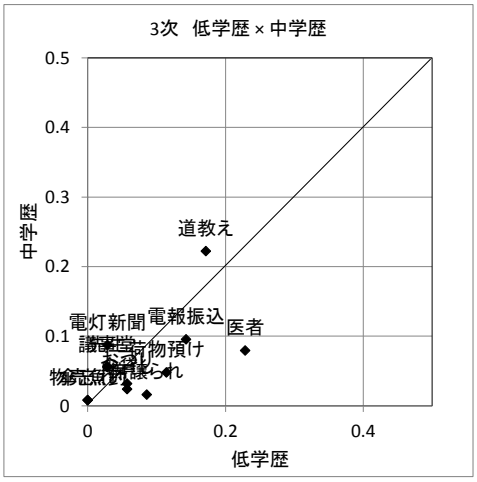


図8-5　3次　場面ごと低学歴×中学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-5　3rd survey, in each context,
middle against low education (proper or professional only)

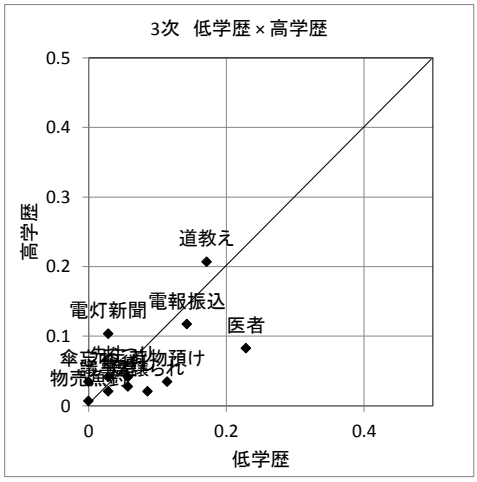


図8-6　3次　場面ごと低学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 8-6　3rd survey, in each context,
high against low education (proper or professional only)

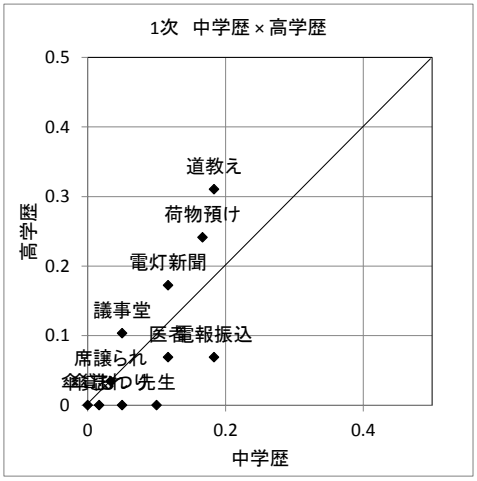


図9-1　1次　場面ごと中学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 9-1　1st survey, in each context,
high against middle education (proper or professional only)

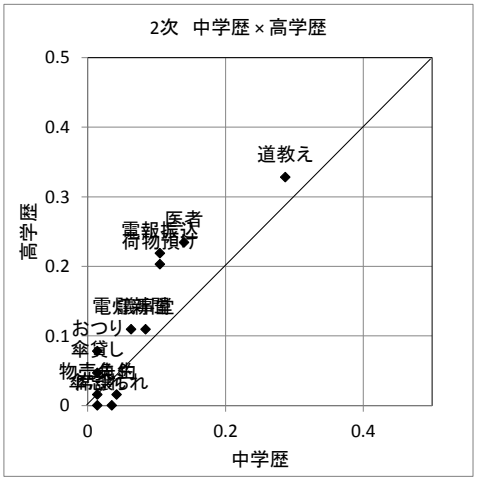


図9-2　2次　場面ごと中学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 9-2　2nd survey, in each context,
high against middle education (proper or professional only)

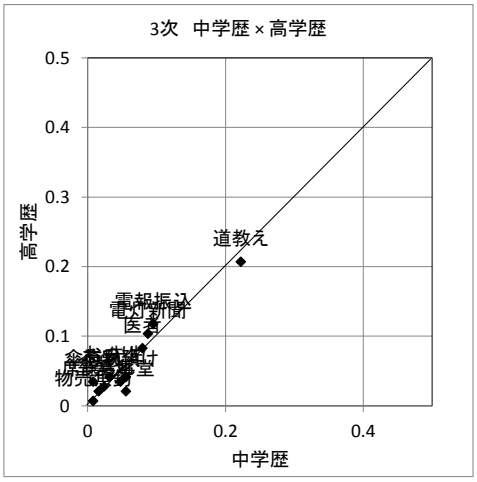


図9-3　3次　場面ごと中学歴×高学歴　(プロパーのみ)

Figure 9-3　3rd survey, in each context,
high against middle education (proper or professional only)

岡崎敬語調査　マス。平均使用数と丁寧さ

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'masu.' and pliteness

11場面：　101道教え～111傘貸し

11 contexts: 101 Tell the way --- 111 Lend umbrella

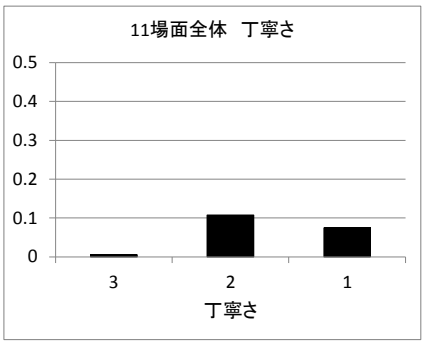


図10-1　11場面全体　丁寧さ

Figure 10-1　In all the 11 contexts, by politeness

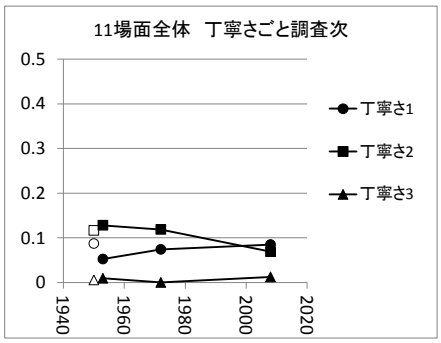


図10-2　11場面全体　丁寧さごと調査次

Figure 10-2　In all the 11 contexts, by politeness, year of survey

（◆：プロパー、◇：コントロール）

（◆：proper or professional ◇：control or college）

3.3. 文末「マス.」の減少　詳細グラフ解説

以下では，第 4 章 3.3 の文末の「マス.」詳細グラフについて解説を加える．「デスマス体」としてまとめて扱われるが，前述 3.2 の「デス」と異なった傾向を見せる．

図 1-1　12 場面全体　場面ごと調査次

図 1-1 に 12 場面全体の「マス.」の出現頻度推移を示した．全体として減少している．文末「デスマス」の使用が多くなったことと矛盾する．

図 1-2　12 場面全体　場面ごと調査次

図 1-2 は 12 場面個々の推移を示す．横軸は 3 回の調査の間隔，実時間（19 年と 36 年）に合わせた．「マス」の使用率の場面差は連続的である．「デス」で「先生」「席譲られ」「道教え」で特に多く使われたのと一致しない．どの場面で多いかは，図 2-2, 2-3 のほうが分かりやすい．「道教え」は横ばいで，「デス」の減少を補うわけではない．「先生」「席譲られ」はそもそも「マス」が表れない文脈なのか，回答が少ないので，「デス」との関係は見られない．「振込用紙」は第 2 次で少し増えた．「荷物預け」は減少が著しい．以上，文末の「デス」と「マス」で異なった傾向が見られた．少なくとも両者が連動する関係ではない．

図 2-1　12 場面全体　調査次ごと年代

図 2-1 の生年実年代による 12 場面全体のグラフでは，「マス.」使用は，3 回の調査の 4 本の線でゆるやかな右下がりがつながる．中年以下の世代で少なくなり，かつ半世紀かけて減っていることを示す．1940 年前後生れの人は，のちの時代になり，年を取っても「マス」の使用率は同様である．典型的な衰退パターンである．日本語敬語全体として「デス」が増えて「マス」が減るという予測には一致する（井上 1999.5）．定型的表現が変わった可能性がある．代わりに終助詞付きの文が増えた可能性がある．

図 2-2, 図 2-3　12 場面全体　場面ごと　調査次散布図

図 2-2, 図 2-3 では，散布図を用いて，第 2 次，第 3 次で増加した場面を見分けやすく示した．右上の場面ほど「マス.」が多い．道教え，電報振込，医者，新聞代が多い．真ん中で等分する線が数値 1 の「マス」使用基準線である．対角線の左上【右下】は文末の「マス.」が増えた【減った】場面である．図 2-2 によれば，第 2 次調査の荷物預けで減り，**図 2-3** によれば，第 3 次調査でほかの場面もさらに減った．

図 3-1～6,　図 4-1～6　場面別調査次ごと年代

図 3～4 では，場面ごとに生年実年代のグラフを示した．場面ごとの計 100 年近くの推移が分かる．使用率の多い場面から並べた．図 3-1「道教え」が多いが，線が入り乱れて，以下のよう

な減少傾向は見えない．むしろ若い世代で「マス.」が多いと読み取れる．図 3-2 以下の「振込用紙」「医者」「新聞代」「荷物預け」ともに減少傾向が見られる．図 4-2「議事堂」では 1920 年以前に生まれた人に「マス」が多い．定型的表現との関わりが考えられる．他の場面は出現頻度が少ないので，考察を控える．

図 5-1 図 5-2～3 外的　社会項目　性別

図 5-1 では性差を扱う．差がほとんどない．

図 5-2～3 で男女別に実年代グラフを見る．女性では単純な減少パターンが見られた．男性はやや複雑だが，減少パターンと見てよい．

図 5-4～6 外的　社会項目　性別

図 5-4～6 では性差の場面による違いを調査次別に見る．散布図によれば，性差は目立たないが，ほぼ全項目を通じて女性が「マス」をやや多く使う．第 3 次の道教えでの男女差が目立つ．

図 6-1～4 外的　社会項目　性別，調査次別

図 6-1～4 では性差の場面による違いを調査次ごとに細分して見る．男女ともに，1 次から 3 次にかけての推移が小さいので，重視すべきではない．

図 7-1 学歴別

図 7-1 以下では学歴差を扱う．かつては学歴差がないに等しかったが，第 2 次で，差が見えた．ただし単純な比例関係ではない．

図 7-2　高学歴　学歴別

図 7-3　中学歴　学歴別

図 7-4　低学歴　学歴別

図 7-2～4 によれば，どの学歴でも右下がりカーブが繰り返される．

図 8-1～6 学歴別　散布図　調査次

図 8-1 以下 9 枚セットのグラフで各場面を個別に見る．

下段の**図 8-5，8-6，9-3**，第 3 次の結果を見ると，場面差が減った．中段の第 2 次では使い分けが大きかったが，全体として使用が少なくなったことを反映するのだろう．

図 10-1 丁寧さ

図 10-1 によれば，丁寧さ 2 のデスマス体中心の場面で一番多く使われるが，丁寧さ 1 のゴザイマス体でも多い．後述「マセン」と対照すると，位置づけが分かる．

図 10-2　丁寧さと調査次

図 10-2 によれば, 第 1 次から第 3 次にかけて, 丁寧さ 1 のゴザイマス体で増加しているのに, 丁寧さ 2 のデスマス体中心の場面で減少している．定型的な表現で使われるのか，終助詞付きの文が広がったかであろう．

詳細グラフ7　第4章3-4文末「マセン．」

岡崎敬語調査　マセン。平均使用数

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'masen.'

11場面：　101道教え～111傘貸し　　11 contexts: 101 Tell the way ~~~ 111 Lend umbrella

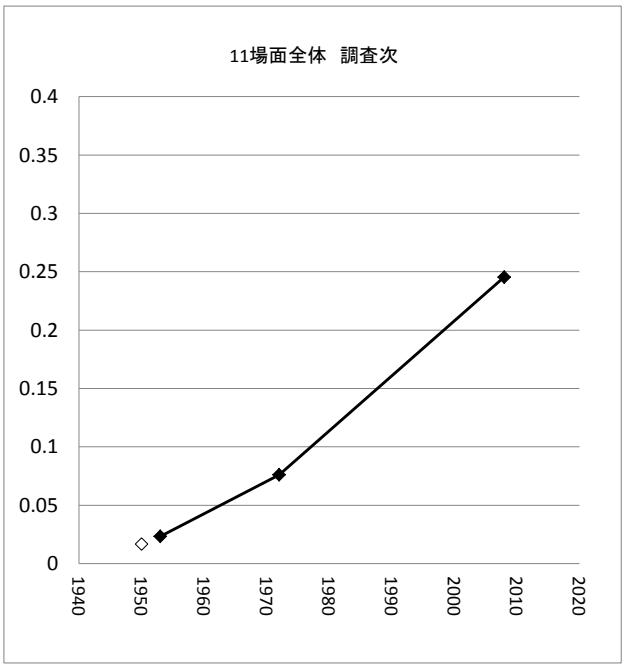


図1-1　11場面全体　調査次　（◆：プロパー、◇：コントロール）

Figure 1-1　In all the 11 contexts, by year of survey (◆: proper or professional ◇: control or college)

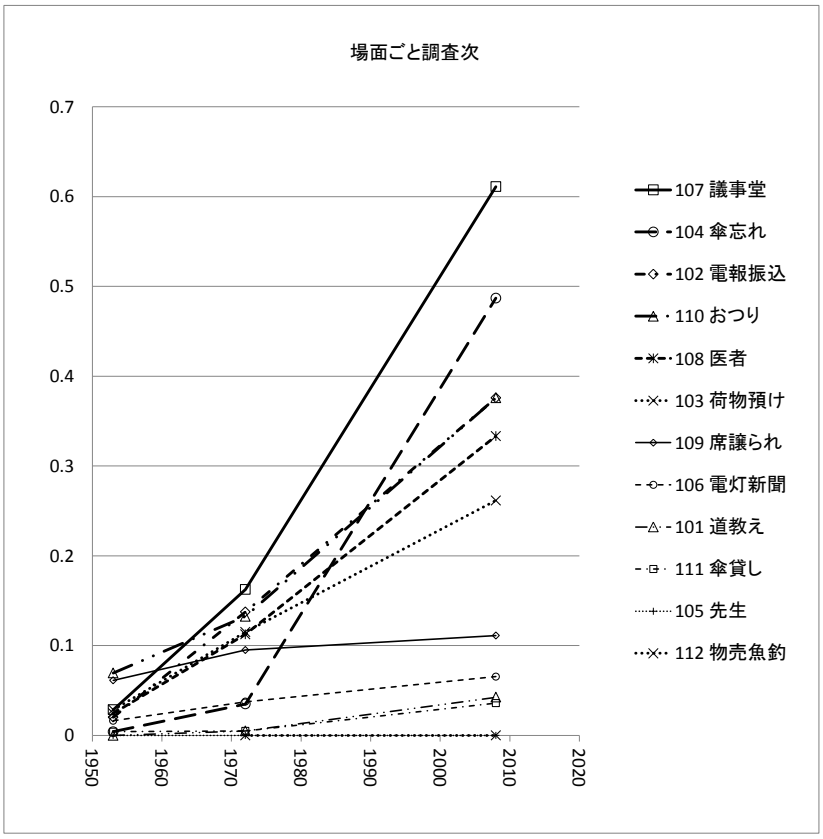


図1-2　場面ごと調査次　（プロパーのみ）

Figure 1-2　In each context, by year of survey (proper or professional only)

岡崎敬語調査　マセン。平均使用数　11場面全体調査次ごと年代

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'masen.'　All the 11 contexts　by generations of three surveys

11場面：　101道教え～111傘貸し　11 contexts: 101 Tell the way ~~~ 111 Lend umbrella

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代　Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

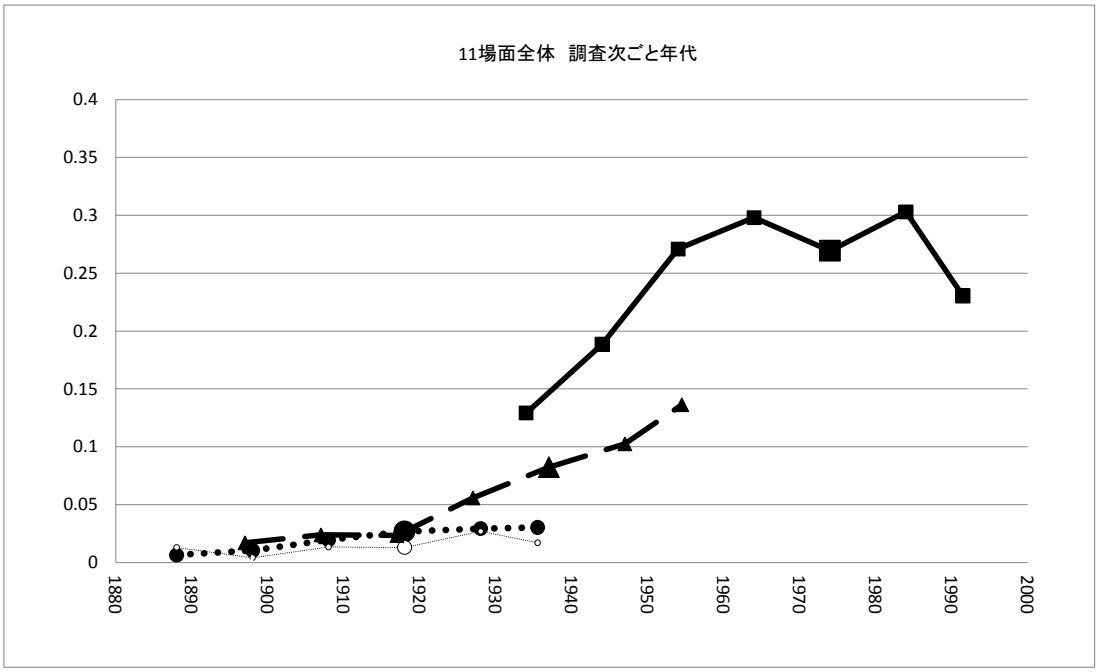


図2-1　11場面全体　調査次ごと年代　（◆：プロパー、◇：コントロール）

Figure 2-1　All the 11 contexts, generations of three surveys (◆: proper or professional ◇: control or college)

岡崎敬語調査　マセン。平均使用数の散布図　場面ごと調査次（プロパーのみ）

Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'masen.'　In each context, by year of survey (proper or professional only)

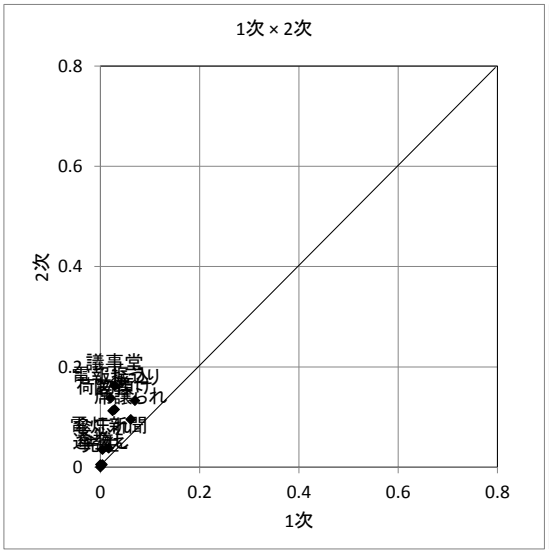


図2-2　場面ごと1次×2次　（プロパーのみ）

Figure 2-2　2nd against 1st survey, in each context (proper or professional only)

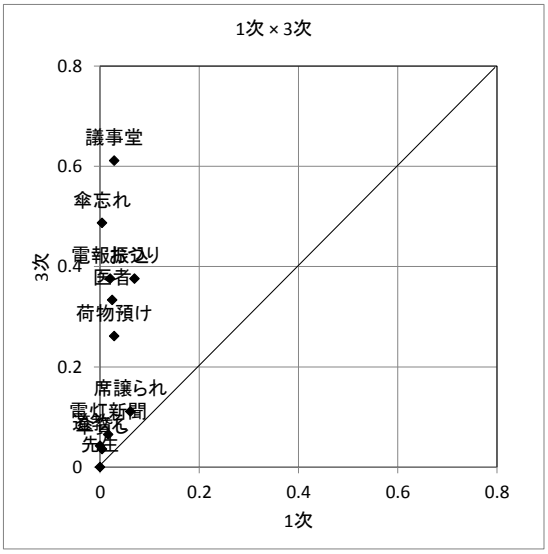


図2-3　場面ごと1次×3次　（プロパーのみ）

Figure 2-3　3rd against 1st survey, in each context (proper or professional only)

岡崎敬語調査　マセン。平均使用数　場面別調査次ごと年代

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'masen.'　In each context, by generations, year of survey

場面：　縦に第3次平均使用数順 Context: Figure No. is given in order of the average usage rate in the third survey.

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代

Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

◆：プロパー、◇：コントロール

（◆: proper or professional ◇: control or college）

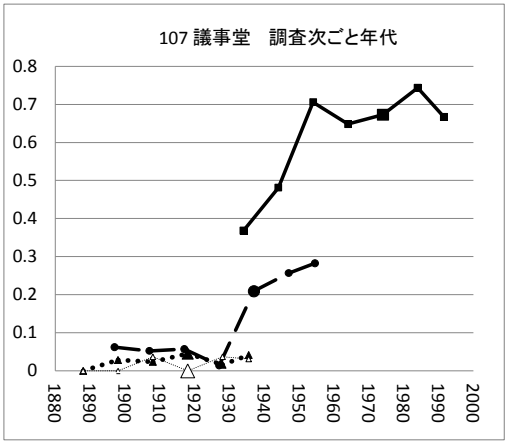


図3-1　107議事堂　調査次ごと年代

Figure 3-1 In 107 National Diet, by year of survey, generations

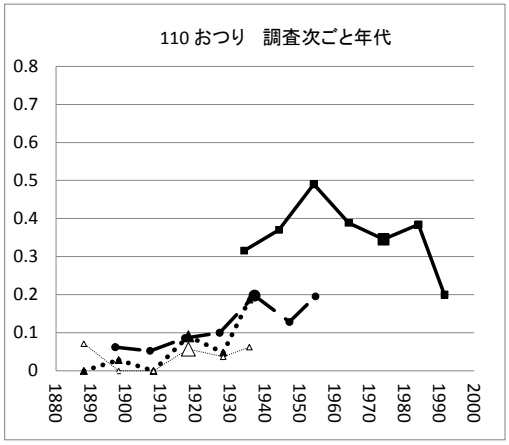


図3-4　110おつり　調査次ごと年代

Figure 3-4 In 110 Small change, by year of survey, generations

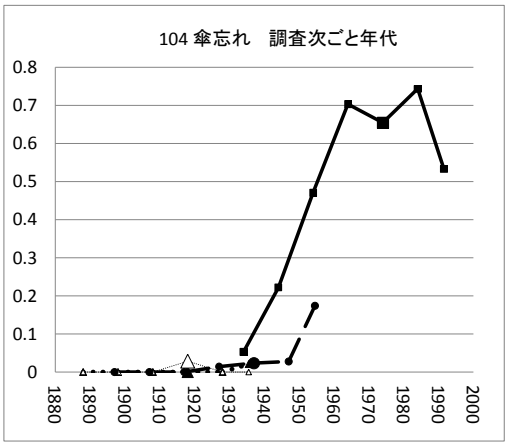


図3-2　104傘忘れ　調査次ごと年代

Figure 3-2 In 104 Left umbrella, by year of survey, generations

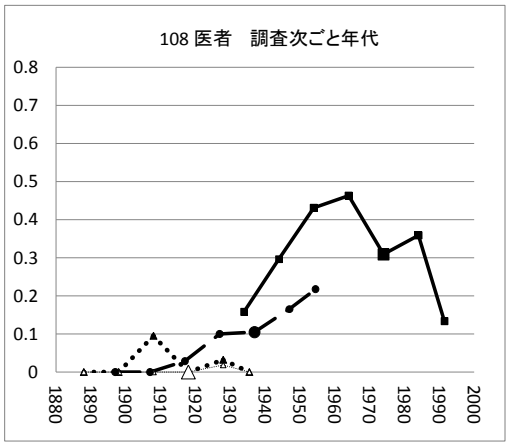


図3-5　108医者　調査次ごと年代

Figure 3-5 In 108 Doctor, by year of survey, generations

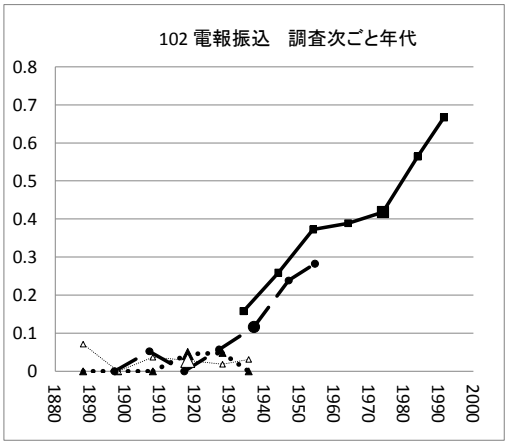


図3-3　102電報振込　調査次ごと年代

Figure 3-3 In 102 Remittance slip, by year of survey, generations

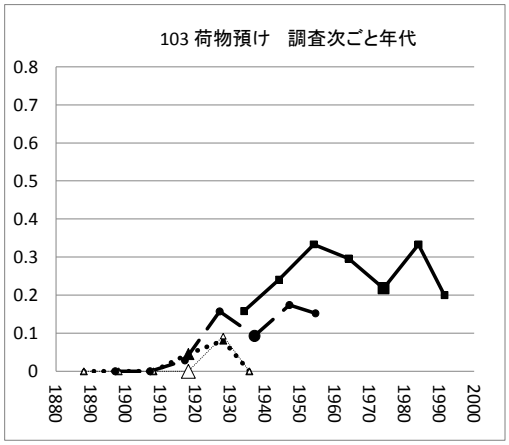


図3-6　103荷物預け　調査次ごと年代

Figure 3-6 In 103 Check baggage, by year of survey, generations

岡崎敬語調査　マセン。平均使用数　場面別調査次ごと年代 （続き）

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'masen.'　In each context, by generations, year of survey (continued)

場面：　縦に第3次平均使用数順 Context: Figure No. is given in order of the average usage rate in the third survey.

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代　◆：プロパー、◇：コントロール

Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's (◆: proper or professional ◇: control or college)

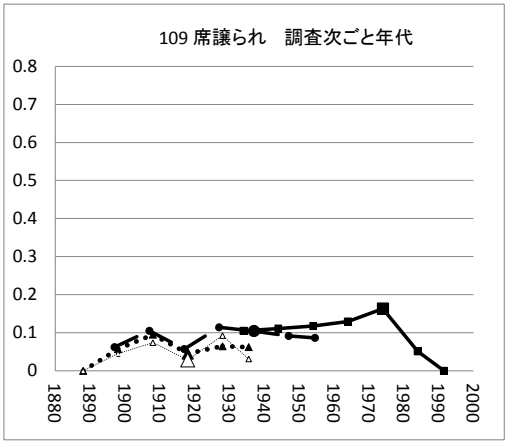


図4-1　109席譲られ　調査次ごと年代

Figure 4-1　In 109 Offered seat, by year of survey, generations

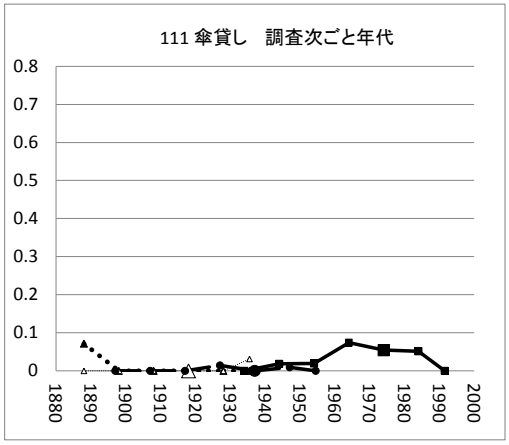


図4-4　111傘貸し　調査次ごと年代

Figure 4-4　In 111 Lend umbrella, by year of survey, generations

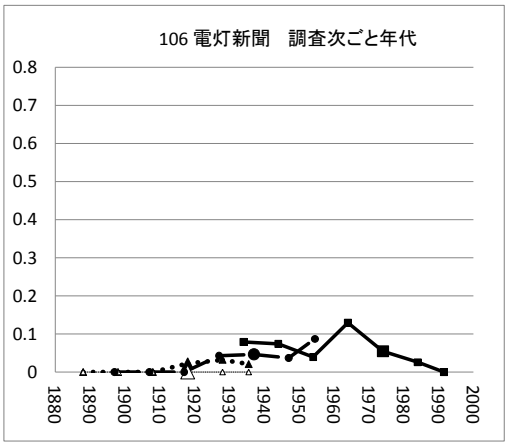


図4-2　106電灯新聞　調査次ごと年代

Figure 4-2　In 106 Newspaper bill, by year of survey, generations

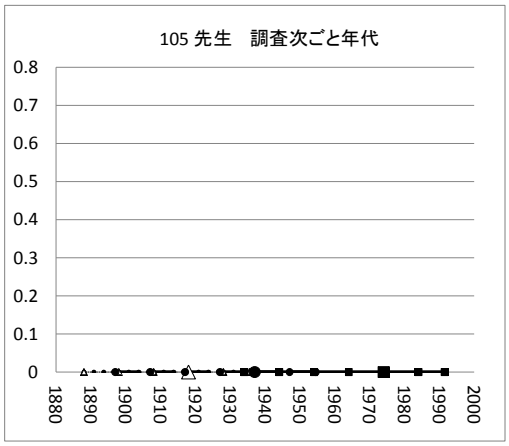


図4-5　105先生　調査次ごと年代

Figure 4-5　In 105 Ex-teacher, by year of survey, generations

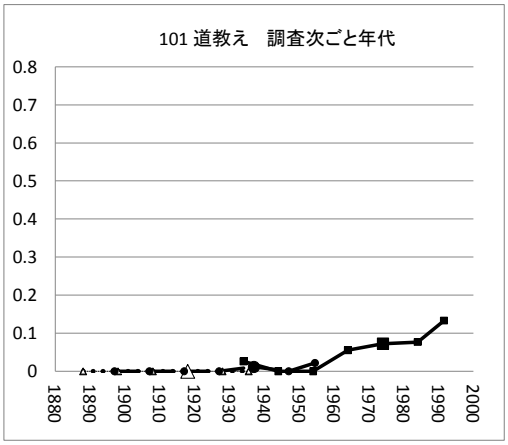


図4-3　101道教え　調査次ごと年代

Figure 4-3　In 101 Tell the way, by year of survey, generations

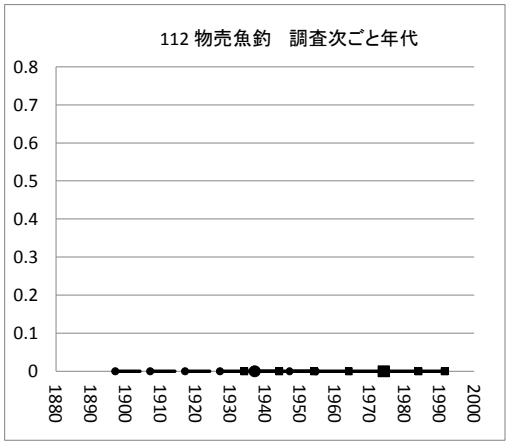


図4-6　112物売魚釣　調査次ごと年代

Figure 4-6　In 112 Fishing, by year of survey, generations

岡崎敬語調査　マセン。平均使用数とその散布図
Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'masen.'

11場面全体　性別ごと調査次
All the 11 contexts, by gender, year of survey

11場面：　101道教え～111傘貸し
11 contexts: 101 Tell the way --- 111 Lend umbrella

◆：プロパー、◇：コントロール
◆: proper or professional ◇: control or college

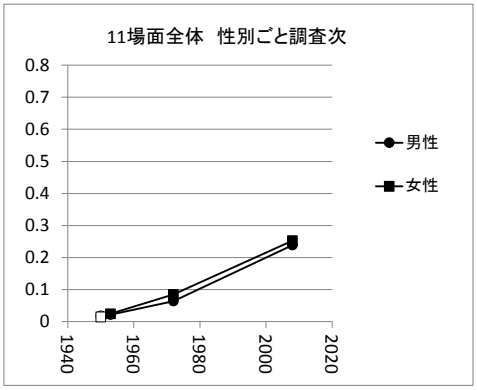


図5-1　11場面全体　性別ごと調査次
Figure 5-1 In all the 11 contexts, by gender, year of survey

男女別調査次ごと年代
By gender, generations, year of survey

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代
Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

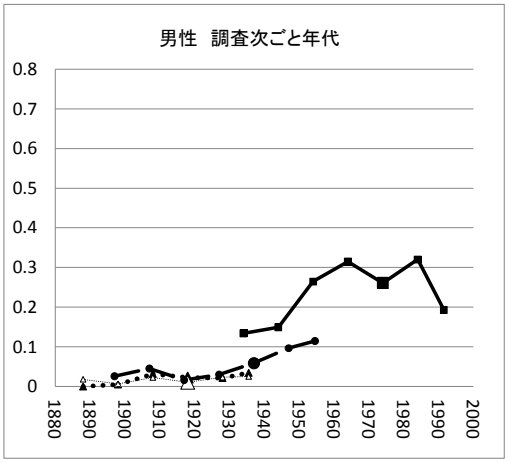


図5-2　男性　調査次ごと年代
Figure 5-2　Male, by year of survey, generations

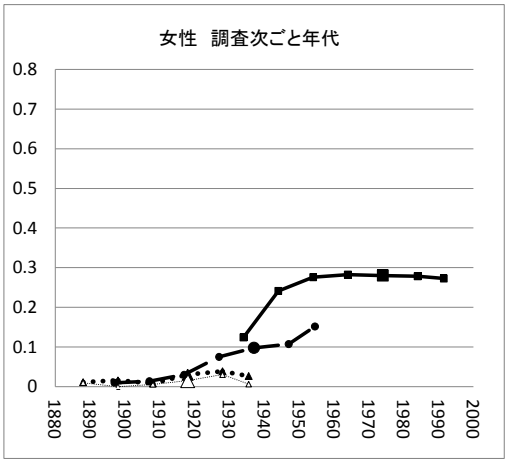


図5-3　女性　調査次ごと年代
Figure 5-3　Female, by year of survey, generations

調査次別　場面ごと性別（プロパーのみ）
By year of survey,　in each context, by gender (proper or professional only)

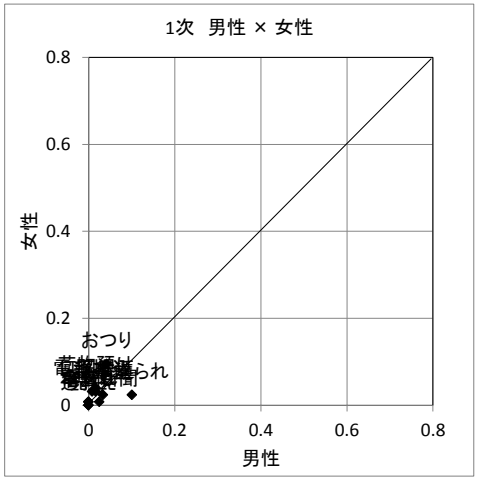


図5-4　1次　場面ごと男性×女性　（プロパーのみ）
Figure 5-4　1st survey, in each context,
female against male (proper or professional only)

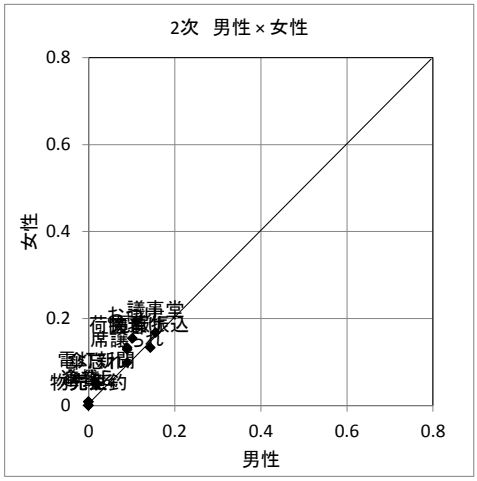


図5-5　2次　場面ごと男性×女性　（プロパーのみ）
Figure 5-5　2nd survey, in each context,
female against male (proper or professional only)

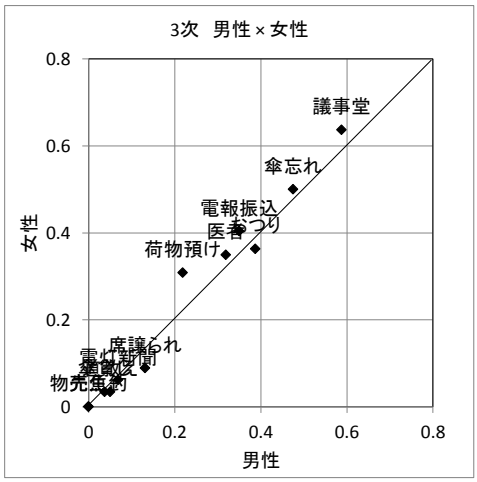


図5-6　3次　場面ごと男性×女性　（プロパーのみ）
Figure 5-6　3rd survey, in each context,
female against male (proper or professional only)

岡崎敬語調査　マセン。平均使用数の散布図　男女別　場面ごと調査次（プロパーのみ）

Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'ma: By gender, in each context, by year of survey (proper or professional only)

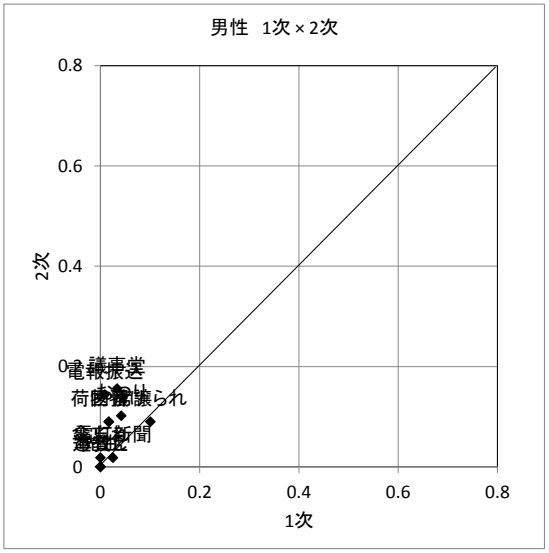


図6-1　男性　場面ごと1次×2次　（プロパーのみ）

Figure 6-1　Male, 2nd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

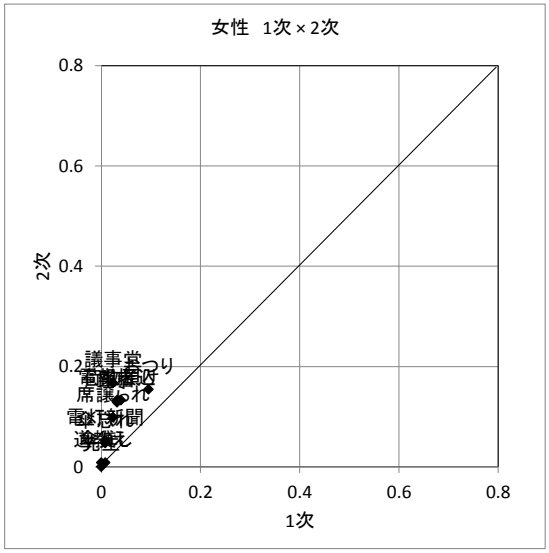


図6-2　女性　場面ごと1次×2次　（プロパーのみ）

Figure 6-2　Female, 2nd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

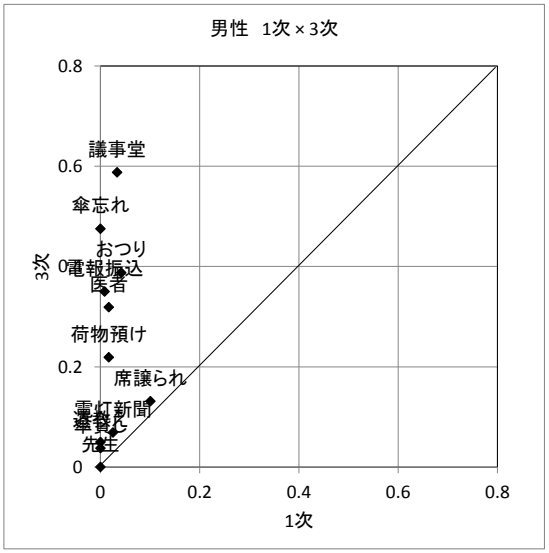


図6-3　男性　場面ごと1次×3次　（プロパーのみ）

Figure 6-3　Male, 3rd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

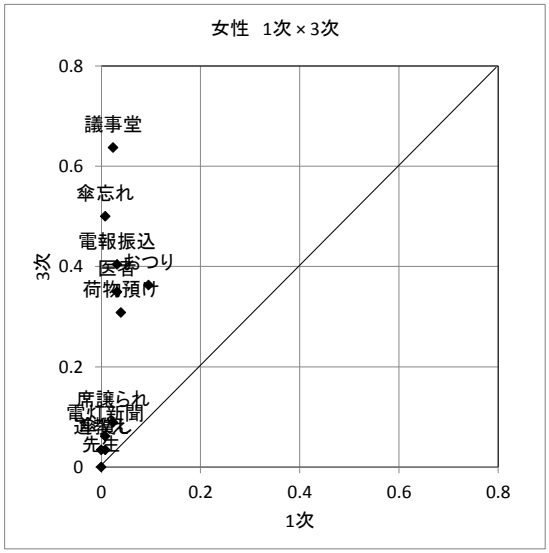


図6-4　女性　場面ごと1次×3次　（プロパーのみ）

Figure 6-4　Female, 3rd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

岡崎敬語調査　マセン。平均使用数　　◆: プロパー、◇: コントロール

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'masen.'　◆: proper or professional ◇: control or college

11場面全体　学歴ごと調査次

All the 11 contexts, by academic background, year of survey

11場面:　101道教え～111傘貸し

11 contexts: 101 Tell the way --- 111 Lend umbrella

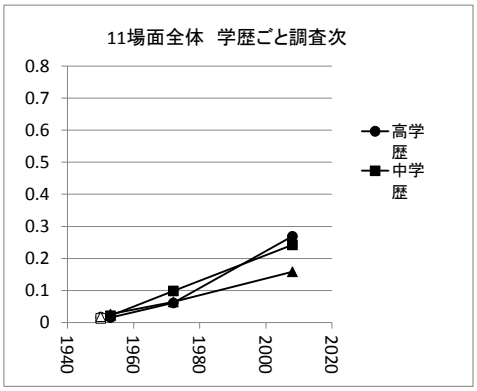


図7-1　11場面全体　学歴ごと調査次

Figure 7-1 In all the 11 contexts, by academic background, year of survey

学歴別調査次ごと年代

By academic background, generations, year of survey

年代:　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代

Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

無回答　No response

高学歴:1次P10代、60代;1次C10代;2次70代

High education: 1st proper 10's, 60's; 1st control 10's; 2nd 70's

中学歴:1次P60代;2次70代　Middle education: 1st proper 60's; 2nd, 70's

低学歴:3次20代、3次40代　Low education: 3rd, 20's and 3rd, 40's

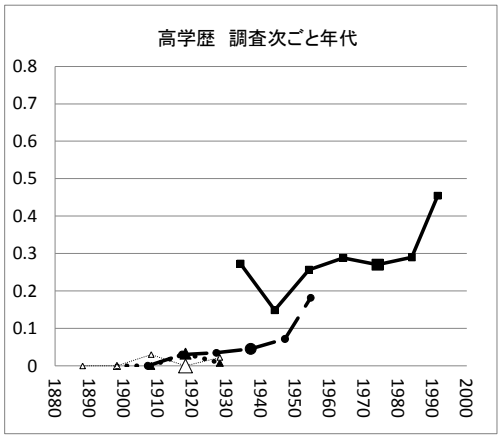


図7-2　高学歴　調査次ごと年代

Figure 7-2 High education, by year of survey, generations

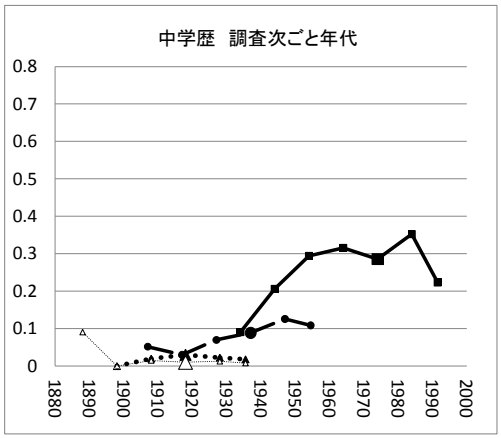


図7-3　中学歴　調査次ごと年代

Figure 7-3 Middle education, by year of survey, generations

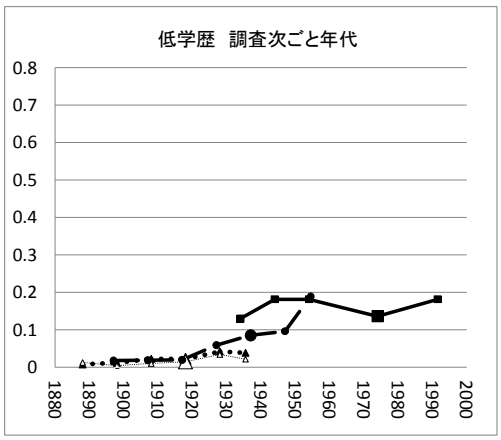


図7-4　低学歴　調査次ごと年代

Figure 7-4 Low education,by year of survey, generations

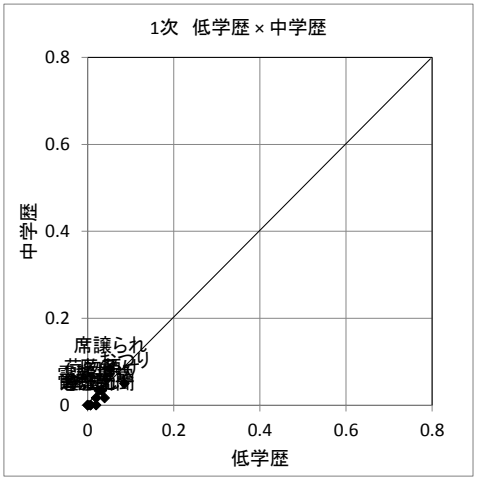


図8-1　1次　場面ごと低学歴×中学歴　(プロパーのみ)
Figure 8-1　1st survey, in each context,
middle against low education (proper or professional only)

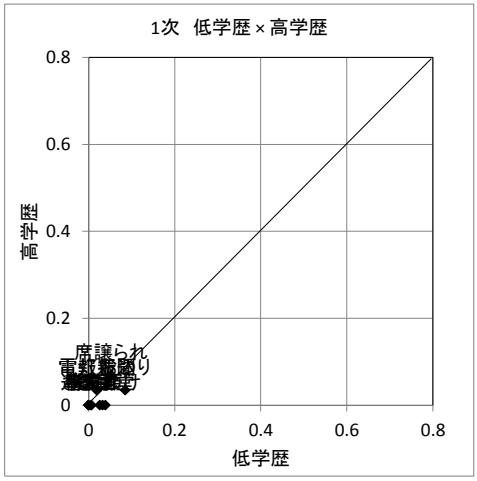


図8-2　1次　場面ごと低学歴×高学歴　(プロパーのみ)
Figure 8-2　1st survey, in each context,
high against low education (proper or professional only)

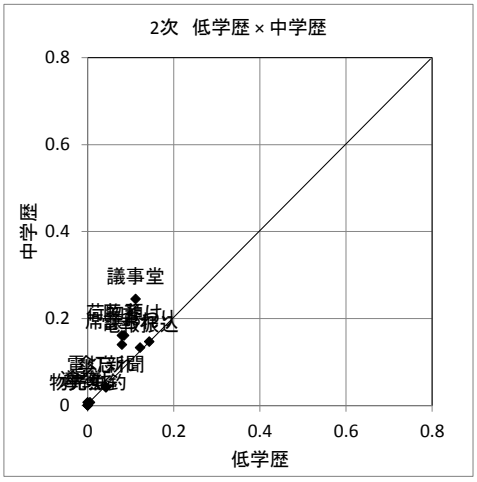


図8-3　2次　場面ごと低学歴×中学歴　(プロパーのみ)
Figure 8-3　2nd survey, in each context,
middle against low education (proper or professional only)

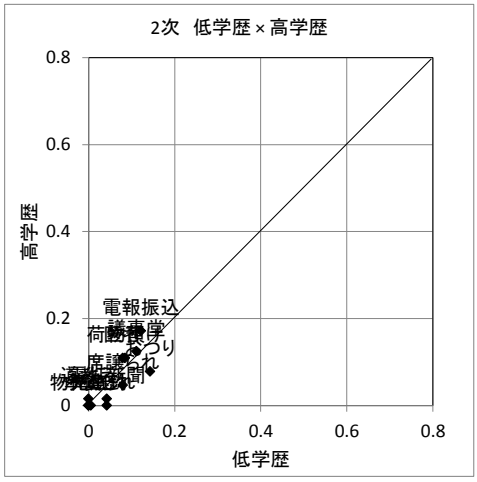


図8-4　2次　場面ごと低学歴×高学歴　(プロパーのみ)
Figure 8-4　2nd survey, in each context,
high against low education (proper or professional only)

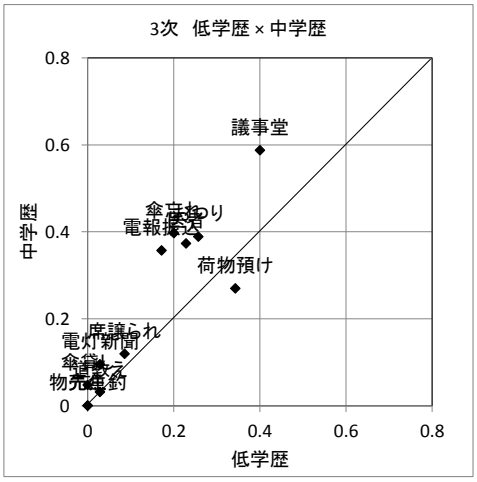


図8-5　3次　場面ごと低学歴×中学歴　(プロパーのみ)
Figure 8-5　3rd survey, in each context,
middle against low education (proper or professional only)

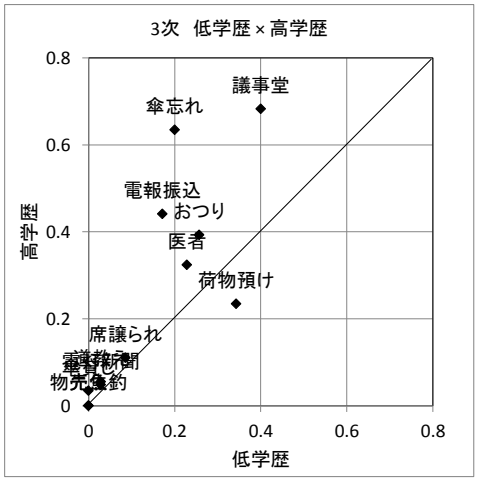


図8-6　3次　場面ごと低学歴×高学歴　(プロパーのみ)
Figure 8-6　3rd survey, in each context,
high against low education (proper or professional only)

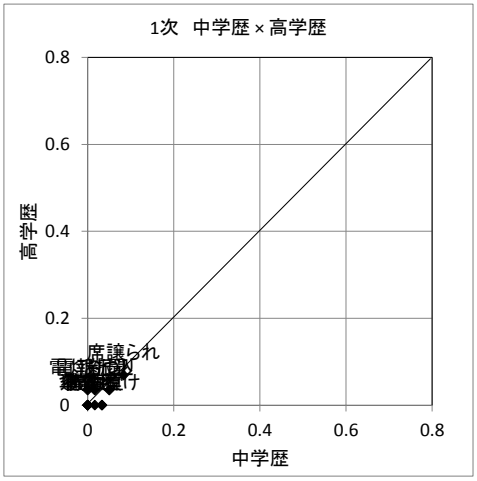


図9-1　1次　場面ごと中学歴×高学歴　(プロパーのみ)
Figure 9-1　1st survey, in each context,
high against middle education (proper or professional only)

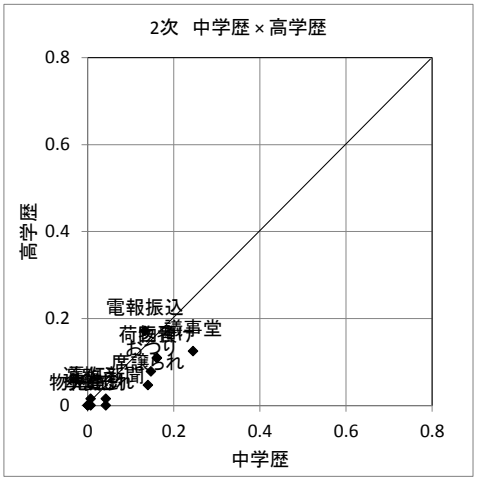


図9-2　2次　場面ごと中学歴×高学歴　(プロパーのみ)
Figure 9-2　2nd survey, in each context,
high against middle education (proper or professional only)

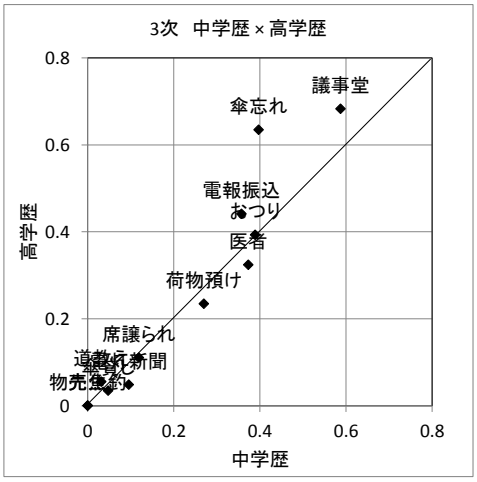


図9-3　3次　場面ごと中学歴×高学歴　(プロパーのみ)
Figure 9-3　3rd survey, in each context,
high against middle education (proper or professional only)

岡崎敬語調査　マセン。平均使用数と丁寧さ

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'masen.' and pliteness

11場面：　101道教え～111傘貸し

11 contexts: 101 Tell the way --- 111 Lend umbrella

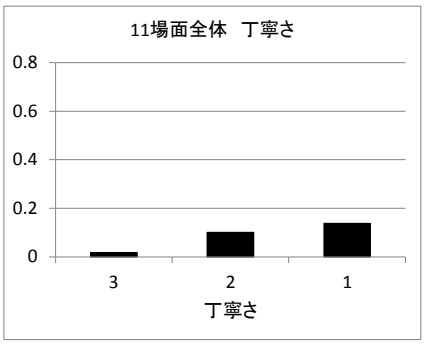


図10-1　11場面全体　丁寧さ

Figure 10-1　In all the 11 contexts, by politeness

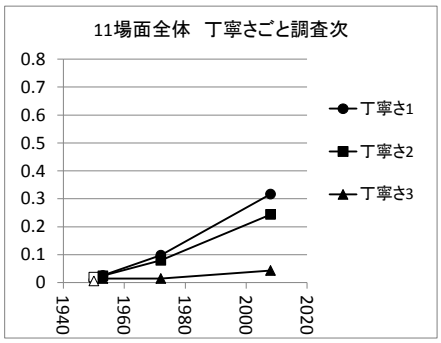


図10-2　11場面全体　丁寧さごと調査次

Figure 10-2　In all the 11 contexts, by politeness, year of survey

（◆：プロパー、◇：コントロール）

（◆：proper or professional ◇：control or college）

3.4. 文末「マセン.」の急増　詳細グラフ解説

以下では，第 4 章後半の文末「マセン.」詳細グラフについて解説を加える．「デスマス体」としてまとめて扱われるが，前述の「マス」と異なった傾向を見せる．同じ意味の「～ないです」が東京で普及していることとの対照を念頭におくべきである．結論からいうと，図 10-2 が手がかりで，「マセン.」はデスマス体と連携するのでなく，「スミマセン」という定型的表現として広がったものと考えられる．

図 1-1　12 場面全体　場面ごと調査次

図 1-1 に 12 場面全体の「マセン.」の出現頻度推移を示した．全体として急激な増加を見せる．文末「デスマス」の使用が多くなったことと合致する．しかし前節の「マス.」の減少とは食い違う．

図 1-2　12 場面全体　場面ごと調査次

図 1-2 は 12 場面個々の推移を示す．横軸は 3 回の調査の間隔，実時間（19 年と 36 年）に合わせた．「マセン.」の使用率は大多数の場面で増えた．どの場面で多いかは，図 2-2, 2-3 のほうが分かりやすい．「議事堂」「傘忘れ」「おつり」「振込用紙」「医者」「荷物預け」の増加が目立つ．「道教え」「先生」「席譲られ」はそもそも「マセン」と表れない文脈なのか，回答が少ない．以上，文末の「デス.」「マス.」と「マセン.」で異なった傾向が見られた．少なくとも 3 者が連動する関係ではない．

図 2-1　12 場面全体　調査次ごと年代

図 2-1 の生年実年代による 12 場面全体のグラフでは，「マセン.」使用は，3 回の調査の 4 本の線でゆるやかな右上がりがつながる．若い世代が多く使い，かつ半世紀かけて増えていることを示す．1940 年前後生れの人は，のちの時代になり，年を取って「マセン」の使用率を増やしている．典型的な増加パターンである．日本語敬語全体として「デス」が増えて「マス」が減るという予測に一致しない（井上 1999.5）．また東京で「～マセン」から「～ナイデス」に変化したことと食いちがう．定型的表現が岡崎で増えた可能性がある．

図 2-2, 図 2-3　12 場面全体　場面ごと　調査次散布図

図 2-2, 図 2-3 では，散布図を用いて，第 2 次，第 3 次で増加した場面を見分けやすく示した．真ん中で等分する線が数値 1 の「マセン」使用基準線である．図 2-2 によれば，第 2 次調査までの推移は小さい．**図 2-3** によれば，第 3 次調査で推移が大きくなった．談話の冒頭で「すみません」と声をかけそうな場面が上位に並ぶ．後述言い淀みの「あのー」の使われやすい場面と共通性がある．談話における機能からいうと，同等と言える．

図 3-1～6　図 4-1～6　場面別調査次ごと年代

図 3～図 4 では，場面ごとに生年実年代のグラフを示した．場面ごとの計 100 年近くの推移が分かる．使用率の多い場面から並べた．「議事堂」「傘忘れ」の第 3 次での増加が特に目立つ．「おつり」「振込用紙」「医者」「荷物預け」「道教え」でも，第 2 次と第 3 次にかけて順調に増える．「席譲られ」「新聞代」「傘貸し」は 3 回を通じて増加傾向だが，若い世代で使用が少ない．「先生」と「物売魚釣」では使われない．多くの場面で使われることが，「デス」「マス」と違う．「すみません」と声をかけそうな場面が上位に並ぶ．

図 5-1 図 5-2～3 外的　社会項目　性別

図 5-1 では性差を扱う．ほとんど差が見られない．

図 5-2～3 で男女別に実年代グラフを見る．男女でパターンが違う点があるが，増加パターンとしては一致している．第 3 次で全年齢層の使用増大があった．

図 5-4～6 外的　社会項目　性別

図 5-4～6 では性差の場面による違いを調査次別に見る．散布図によれば，性差は目立たないが，ほぼ全項目を通じて女性が「マセン．」をやや多く使う．第 3 次で場面による散らばりが急に大きくなった．

図 6-1～4 外的　社会項目　性別，調査次別

図 6-1～4 では性差の場面による違いを調査次ごとに細分して見る．男女ともに，2 次から 3 次にかけての推移が大きい．

図 7-1 学歴別

図 7-1 以下では学歴差を扱う．かつては学歴差がないに等しかったが，第 2 次，第 3 次で，差が見えた．

図 7-2　高学歴　学歴別

図 7-3　中学歴　学歴別

図 7-4　低学歴　学歴別

図 7-2～4 によれば，どの学歴でも第 3 次で全年齢層の使用増大があった．高学歴が多く使う．

図 8-1～6 学歴別　散布図　調査次

図 8-1 以下 9 枚セットのグラフで各場面を個別に見る．

下段の**図 8-5，8-6，9-3**，第 3 次の結果を見ると，場面差が大きくなった．ことに高学歴が議事堂と傘忘れの場面で多く使う．

図 10-1 丁寧さ

図 10-1 によれば，丁寧さ 2 のデスマス体中心の場面で使われるが，丁寧さ 1 のゴザイマス体で一番多い．前述のように「デス」と「マス」は丁寧さ 2 のデスマス体で多かった．「マセン．」は，「すみません」という表現で使われたのだろう．そのために丁寧さ 1 のゴザイマス体で多くなったのだろう．

図 10-2　丁寧さと調査次

図 10-2 によれば，第 1 次から第 3 次にかけて，丁寧さ 1 のゴザイマス体と，丁寧さ 2 のデスマス体中心の場面で増加している．定型的な表現で使われるのだろう．

以上，「マセン」使用に関して生年実年代とからめて年次推移を考察し，かつ性，学歴という言語外的条件との関係を見た．「丁寧さ（の段階づけ）」で観察されたのと違った傾向が見られた．「すみません」という表現で使われたのだろう．

詳細グラフ8　第6章言い淀み

岡崎敬語調査　アノ平均使用数

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'ano'

11場面：　101道教え～111傘貸し　　11 contexts: 101 Tell the way –– 111 Lend umbrella

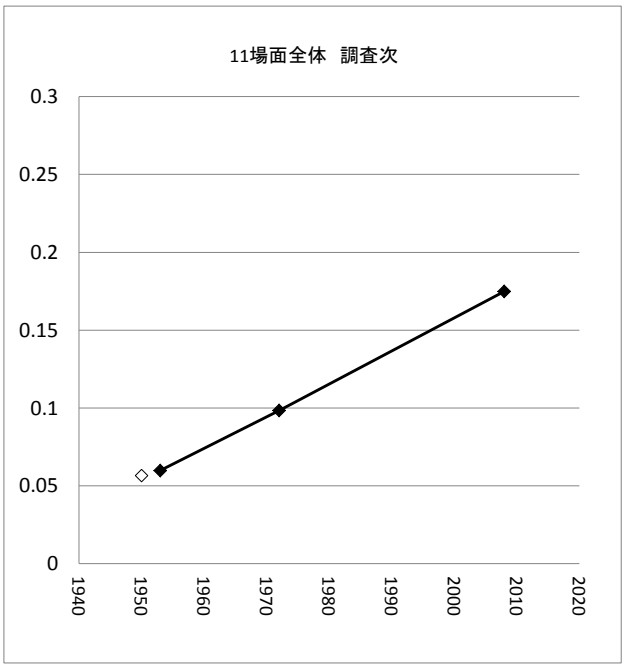


図1-1　11場面全体　調査次　（◆：プロパー、◇：コントロール）

Figure 1-1　In all the 11 contexts, by year of survey (◆: proper or professional ◇: control or college)

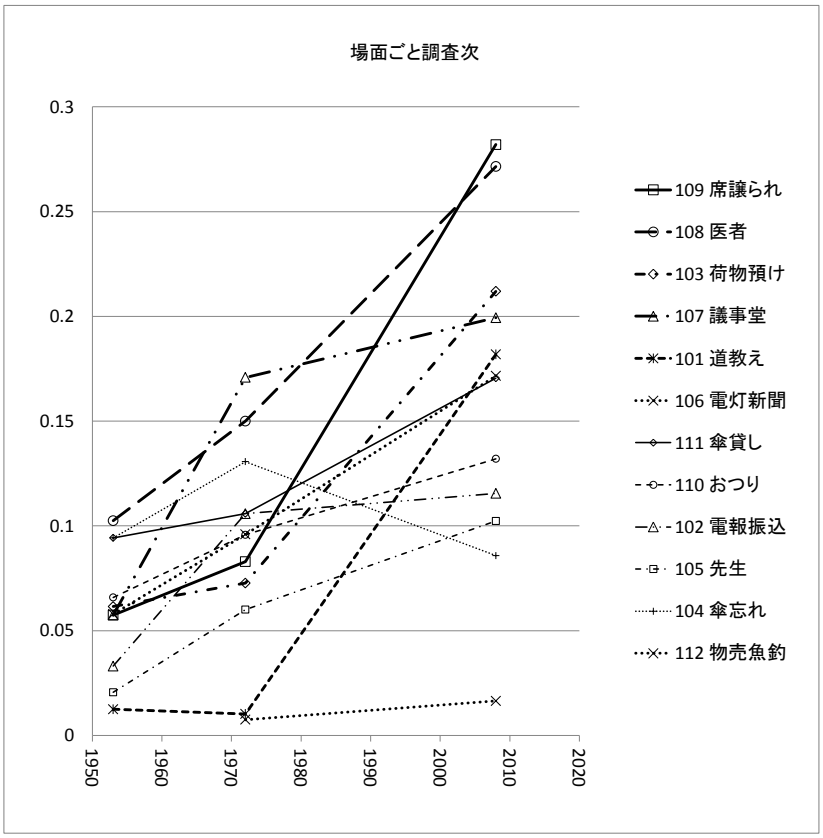


図1-2　場面ごと調査次　（プロパーのみ）

Figure 1-2　In each context, by year of survey (proper or professional only)

岡崎敬語調査　アノ平均使用数　11場面全体調査次ごと年代

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'ano'　All the 11 contexts　by generations of three surveys

11場面：　101道教え～111傘貸し　11 contexts: 101 Tell the way ~~~ 111 Lend umbrella

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代　Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

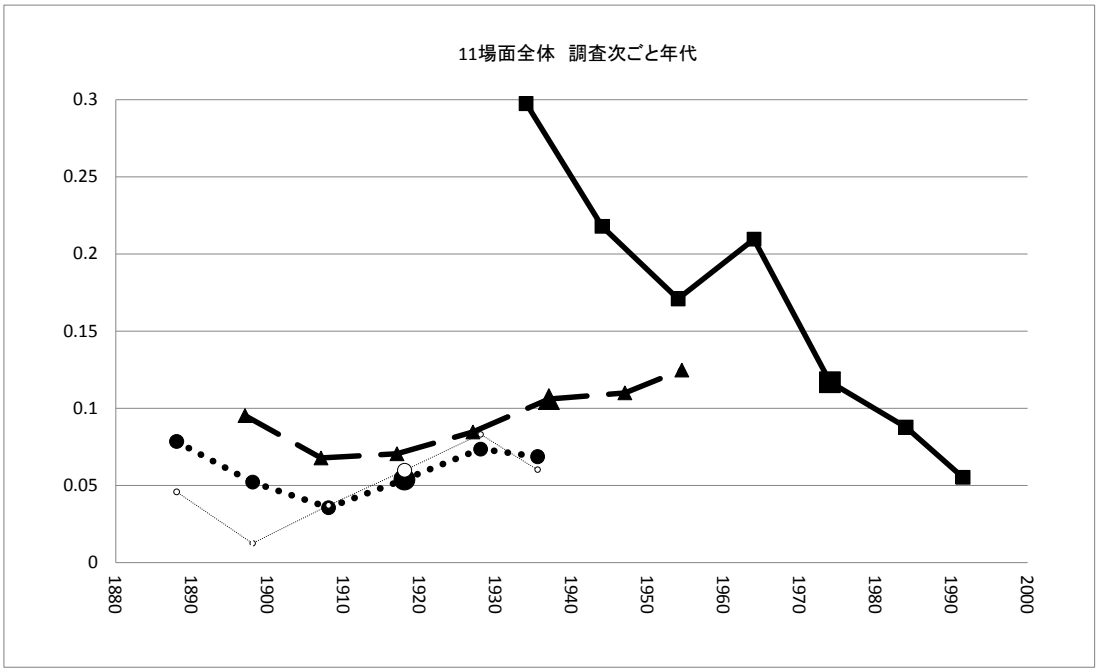


図2-1　11場面全体　調査次ごと年代　（◆：プロパー、◇：コントロール）

Figure 2-1　All the 11 contexts, generations of three surveys (◆: proper or professional ◇: control or college)

岡崎敬語調査　アノ平均使用数の散布図　場面ごと調査次（プロパーのみ）

Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'ano'　In each context, by year of survey (proper or professional only)

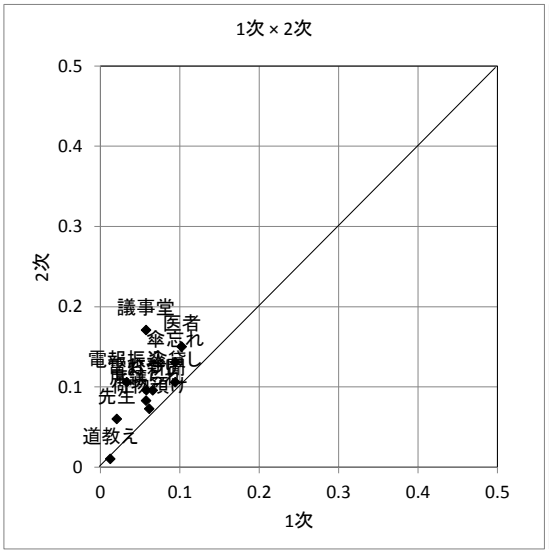


図2-2　場面ごと1次×2次　（プロパーのみ）

Figure 2-2　2nd against 1st survey, in each context (proper or professional only)

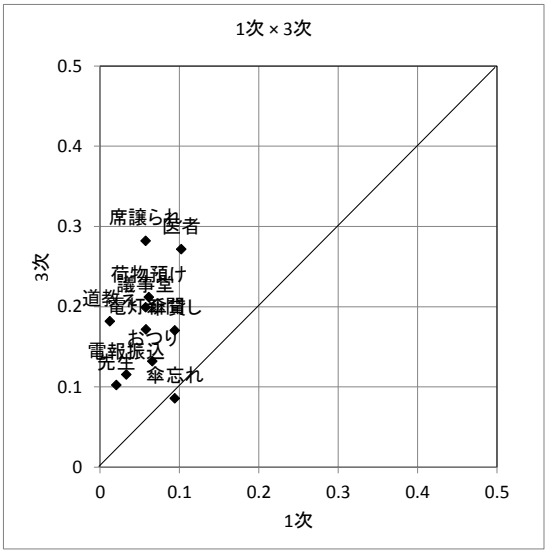


図2-3　場面ごと1次×3次　（プロパーのみ）

Figure 2-3　3rd against 1st survey, in each context (proper or professional only)

岡崎敬語調査　アノ平均使用数　場面別調査次ごと年代

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'ano'　In each context, by generations, year of survey

場面：　縦に第3次平均使用数順 Context: Figure No. is given in order of the average usage rate in the third survey.

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代

Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

◆：プロパー、◇：コントロール

（◆: proper or professional ◇: control or college）

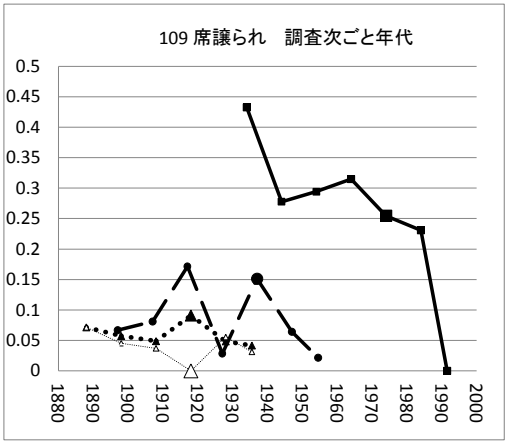


図3-1　109席譲られ　調査次ごと年代

Figure 3-1 In 109 Offered seat, by year of survey, generations

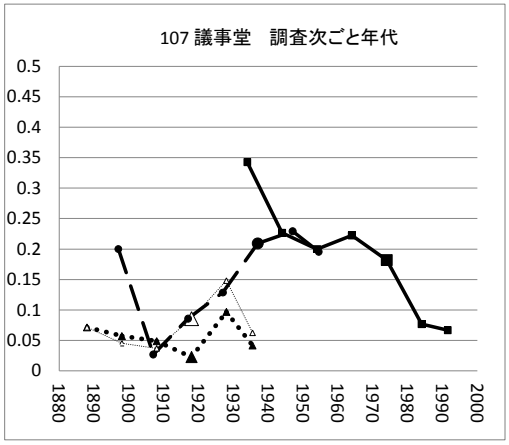


図3-4　107議事堂　調査次ごと年代

Figure 3-4 In 107 National Diet, by year of survey, generations

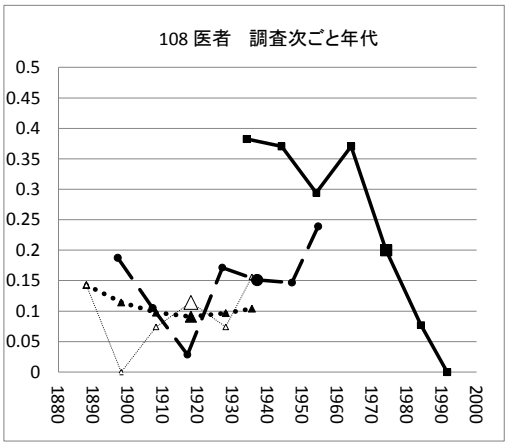


図3-2　108医者　調査次ごと年代

Figure 3-2 In 108 Doctor, by year of survey, generations

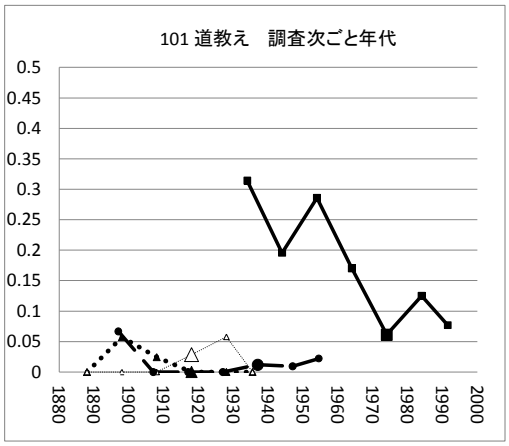


図3-5　101道教え　調査次ごと年代

Figure 3-5 In 101 Tell the way, by year of survey, generations

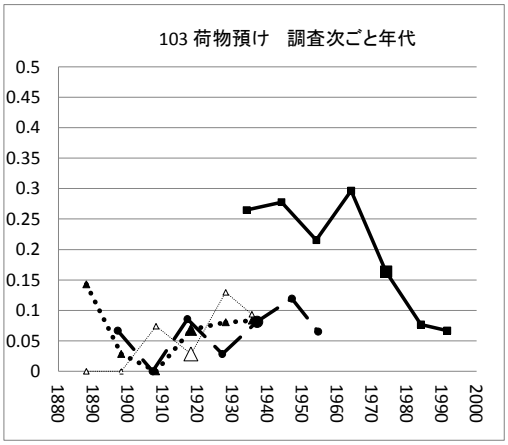


図3-3　103荷物預け　調査次ごと年代

Figure 3-3 In 103 Check baggage, by year of survey, generations

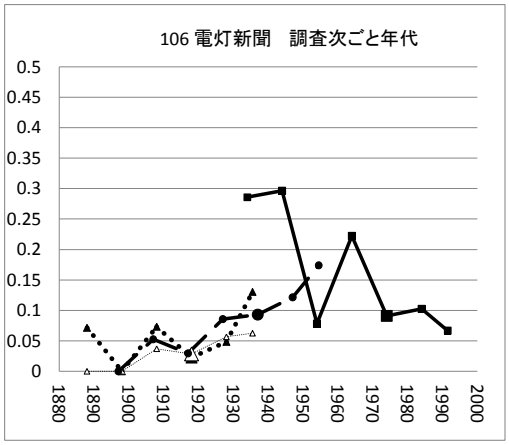


図3-6　106電灯新聞　調査次ごと年代

Figure 3-6 In 106 Newspaper bill, by year of survey, generations

岡崎敬語調査　アノ平均使用数　場面別調査次ごと年代　（続き）

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'ano'　In each context, by generations, year of survey (continued)

場面：　縦に第3次平均使用数順　Context: Figure No. is given in order of the average usage rate in the third survey.

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代　◆: プロパー、◇: コントロール

Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's (◆: proper or professional ◇: control or college)

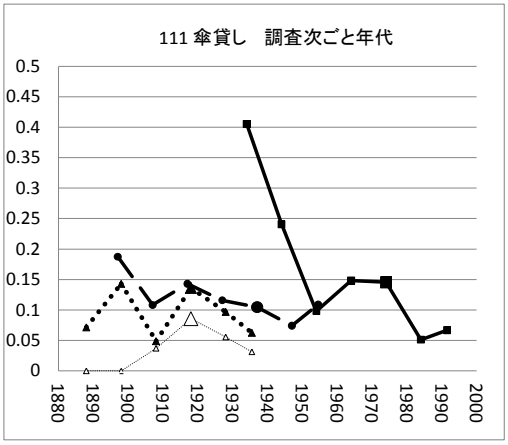


図4-1　111傘貸し　調査次ごと年代

Figure 4-1　In 111 Lend umbrella, by year of survey, generations

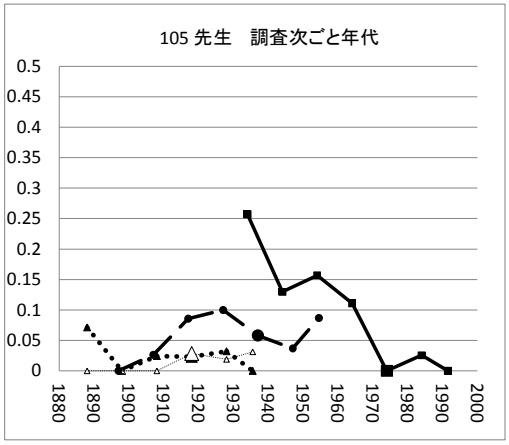


図4-4　105先生　調査次ごと年代

Figure 4-4　In 105 Ex-teacher, by year of survey, generations

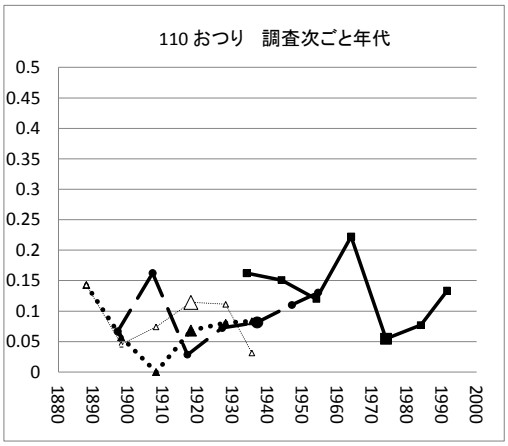


図4-2　110おつり　調査次ごと年代

Figure 4-2　In 110 Small change, by year of survey, generations

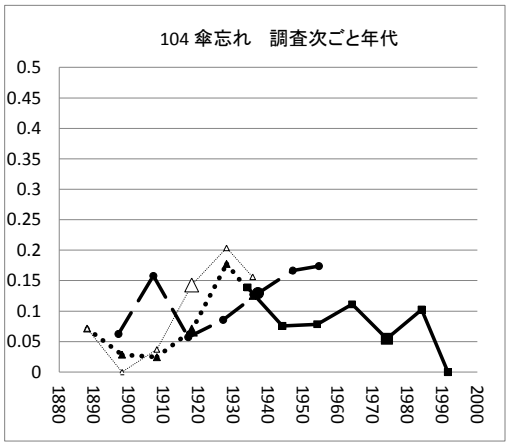


図4-5　104傘忘れ　調査次ごと年代

Figure 4-5　In 104 Left umbrella, by year of survey, generations

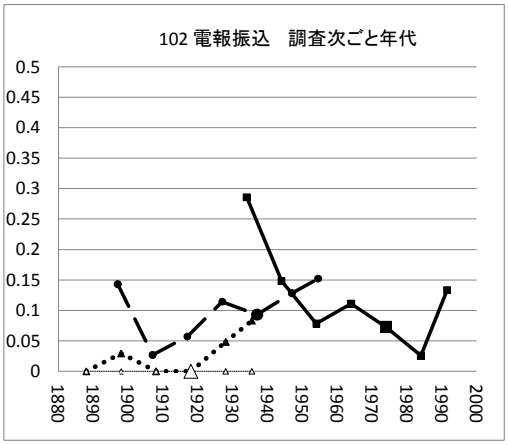


図4-3　102電報振込　調査次ごと年代

Figure 4-3　In 102 Remittance slip, by year of survey, generations

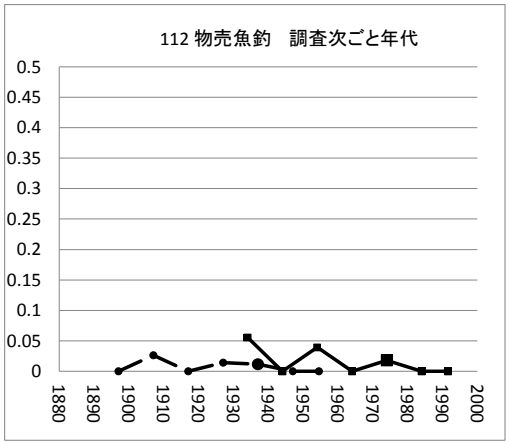


図4-6　112物売魚釣　調査次ごと年代

Figure 4-6　In 112 Fishing, by year of survey, generations

岡崎敬語調査　アノ平均使用数とその散布図
Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'ano'

11場面全体　性別ごと調査次
All the 11 contexts, by gender, year of survey

11場面：　101道教え～111傘貸し
11 contexts: 101 Tell the way --- 111 Lend umbrella

◆：プロパー、◇：コントロール
◆: proper or professional ◇: control or college

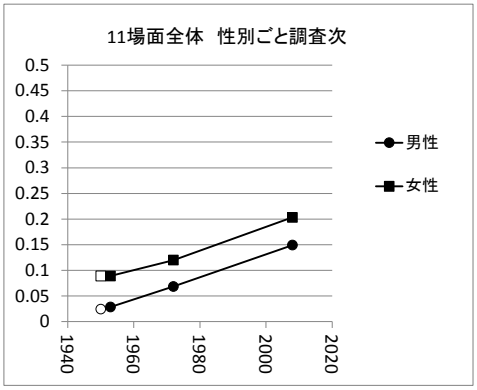


図5-1　11場面全体　性別ごと調査次
Figure 5-1 In all the 11 contexts, by gender, year of survey

男女別調査次ごと年代
By gender, generations, year of survey

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代
Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

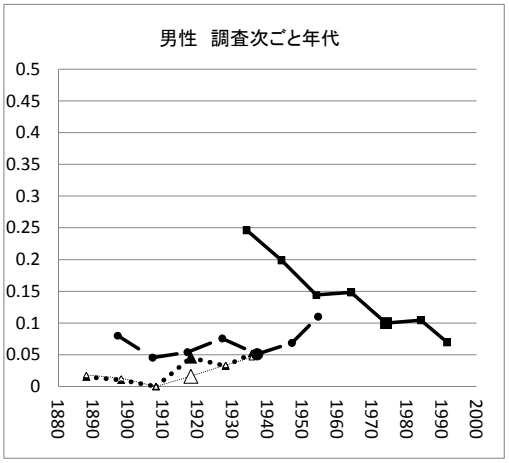


図5-2　男性　調査次ごと年代
Figure 5-2　Male, by year of survey, generations

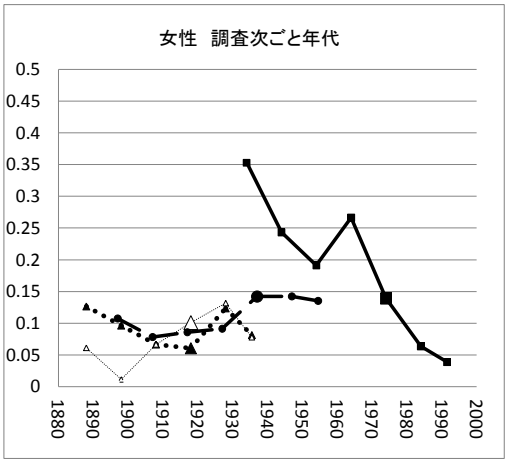


図5-3　女性　調査次ごと年代
Figure 5-3　Female, by year of survey, generations

調査次別　場面ごと性別（プロパーのみ）
By year of survey,　in each context, by gender (proper or professional only)

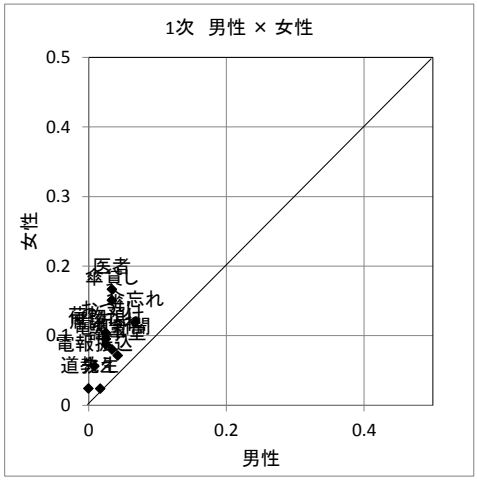


図5-4　1次　場面ごと男性×女性　（プロパーのみ）
Figure 5-4　1st survey, in each context,
female against male (proper or professional only)

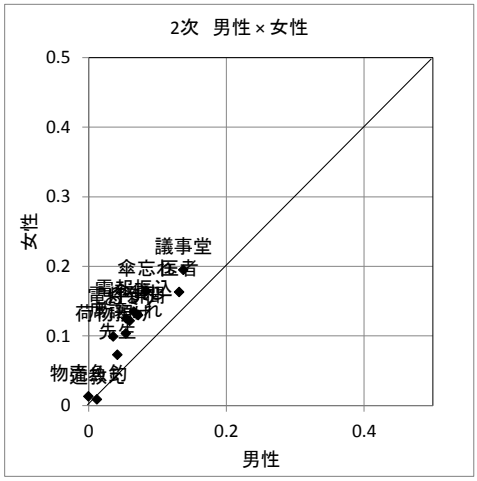


図5-5　2次　場面ごと男性×女性　（プロパーのみ）
Figure 5-5　2nd survey, in each context,
female against male (proper or professional only)

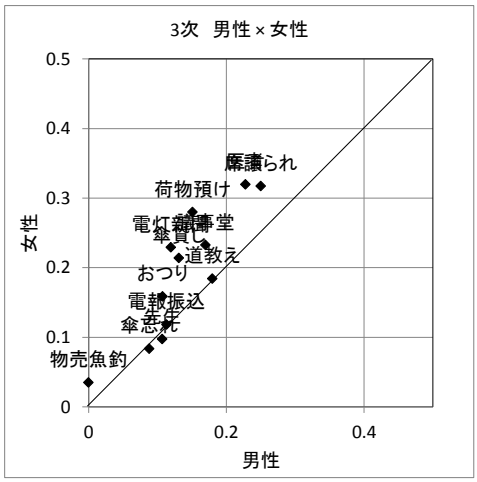


図5-6　3次　場面ごと男性×女性　（プロパーのみ）
Figure 5-6　3rd survey, in each context,
female against male (proper or professional only)

岡崎敬語調査　アノ平均使用数の散布図　男女別　場面ごと調査次(プロパーのみ)

Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'anc By gender, in each context, by year of survey (proper or professional only)

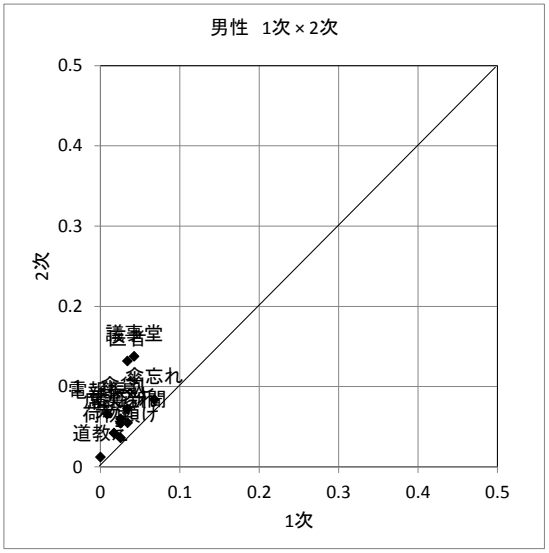


図6-1　男性　場面ごと1次×2次　(プロパーのみ)

Figure 6-1　Male, 2nd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

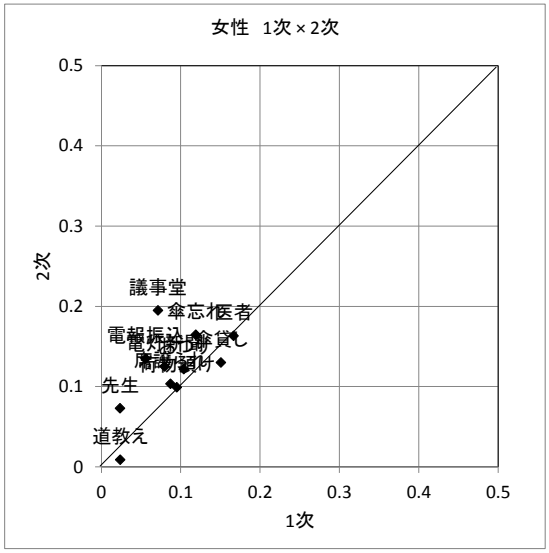


図6-2　女性　場面ごと1次×2次　(プロパーのみ)

Figure 6-2　Female, 2nd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

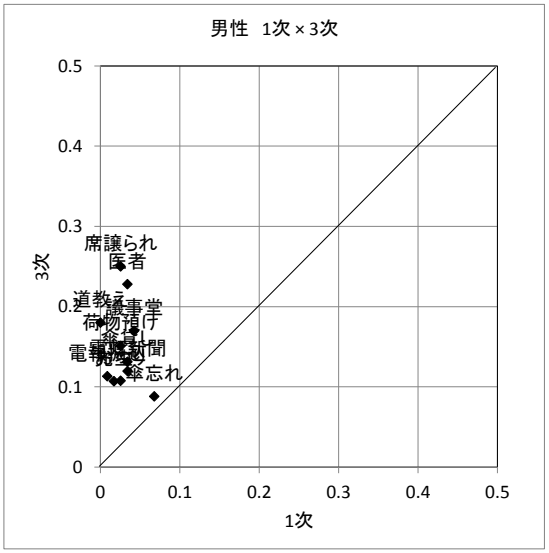


図6-3　男性　場面ごと1次×3次　(プロパーのみ)

Figure 6-3　Male, 3rd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

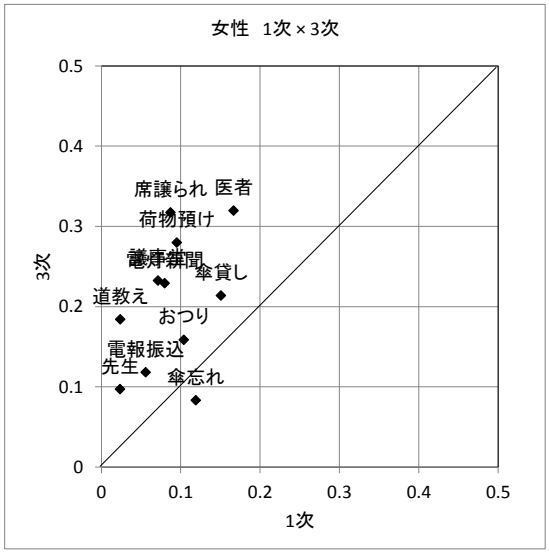


図6-4　女性　場面ごと1次×3次　(プロパーのみ)

Figure 6-4　Female, 3rd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

岡崎敬語調査　アノ平均使用数　　◆：プロパー、◇：コントロール

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'ano'　◆：proper or professional ◇：control or college

11場面全体　学歴ごと調査次

All the 11 contexts, by academic background, year of survey

11場面：　101道教え～111傘貸し

11 contexts: 101 Tell the way --- 111 Lend umbrella

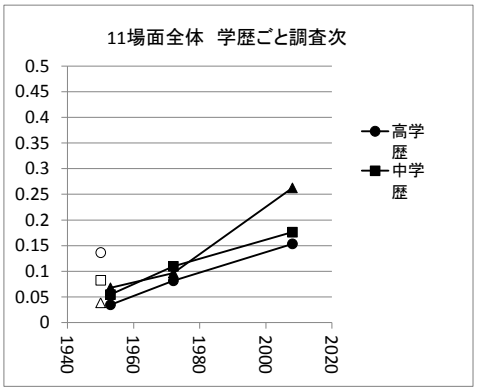


図7-1　11場面全体　学歴ごと調査次

Figure 7-1 In all the 11 contexts, by academic background, year of survey

学歴別調査次ごと年代

By academic background, generations, year of survey

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代

Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

無回答　No response

高学歴：1次P10代、60代；1次C10代；2次70代

High education: 1st proper 10's, 60's; 1st control 10's; 2nd 70's

中学歴：1次P60代；2次70代　Middle education: 1st proper 60's; 2nd, 70's

低学歴：3次20代、3次40代　Low education: 3rd, 20's and 3rd, 40's

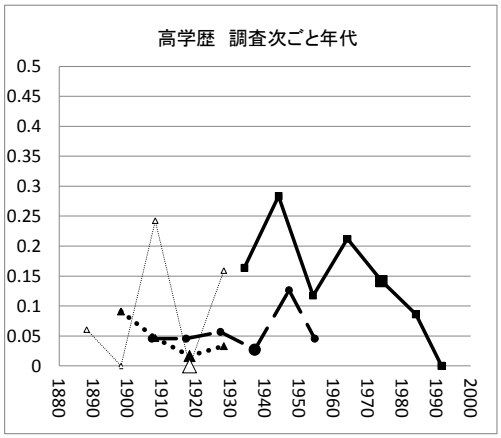


図7-2　高学歴　調査次ごと年代

Figure 7-2 High education, by year of survey, generations

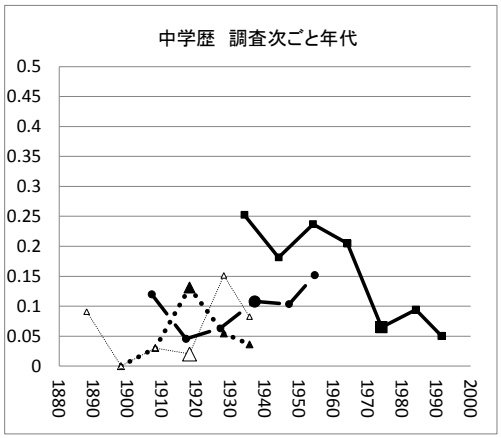


図7-3　中学歴　調査次ごと年代

Figure 7-3 Middle education, by year of survey, generations

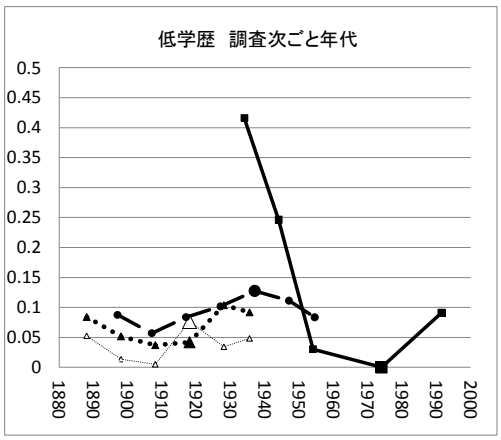


図7-4　低学歴　調査次ごと年代

Figure 7-4 Low education,by year of survey, generations

岡崎敬語調査　アノ平均使用数の散布図　調査次別　場面ごと学歴（プロパーのみ）

Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'anc By year of survey,　in each context, by academic background (proper or professional only)

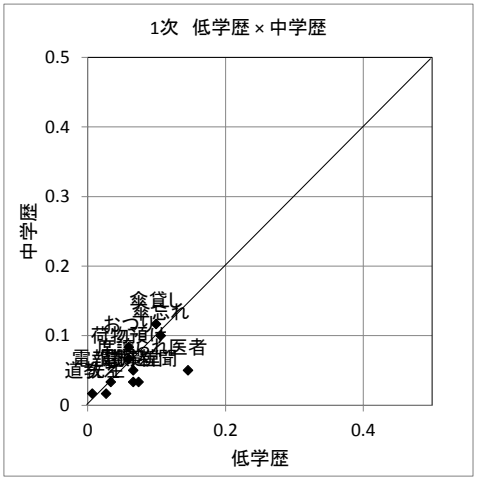


図8-1　1次　場面ごと低学歴×中学歴　（プロパーのみ）

Figure 8-1　1st survey, in each context,
middle against low education (proper or professional only)

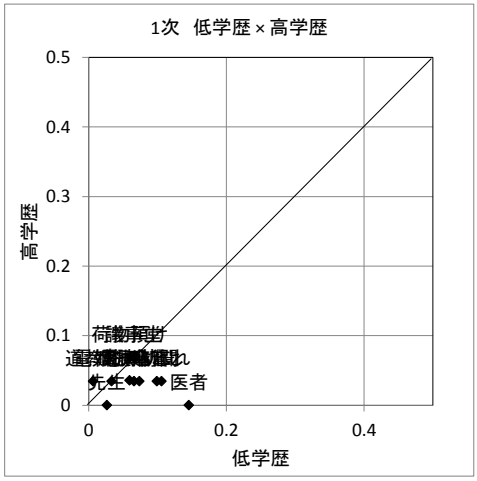


図8-2　1次　場面ごと低学歴×高学歴　（プロパーのみ）

Figure 8-2　1st survey, in each context,
high against low education (proper or professional only)

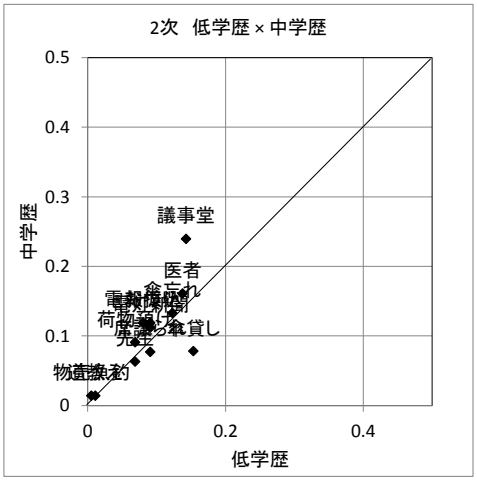


図8-3　2次　場面ごと低学歴×中学歴　（プロパーのみ）

Figure 8-3　2nd survey, in each context,
middle against low education (proper or professional only)

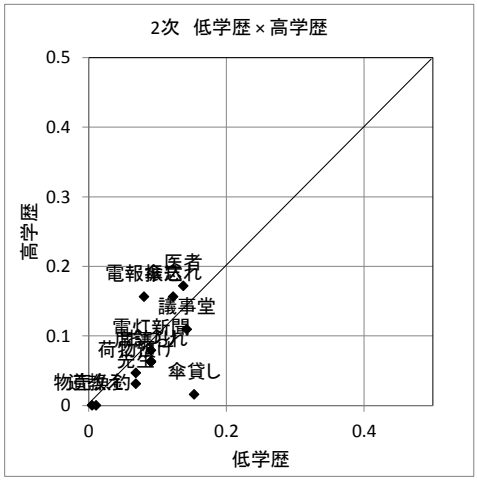


図8-4　2次　場面ごと低学歴×高学歴　（プロパーのみ）

Figure 8-4　2nd survey, in each context,
high against low education (proper or professional only)

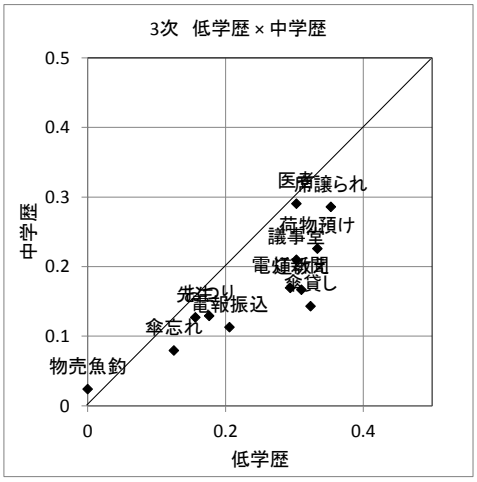


図8-5　3次　場面ごと低学歴×中学歴　（プロパーのみ）

Figure 8-5　3rd survey, in each context,
middle against low education (proper or professional only)

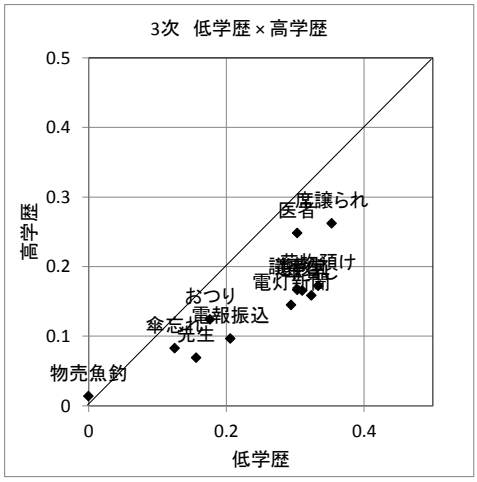


図8-6　3次　場面ごと低学歴×高学歴　（プロパーのみ）

Figure 8-6　3rd survey, in each context,
high against low education (proper or professional only)

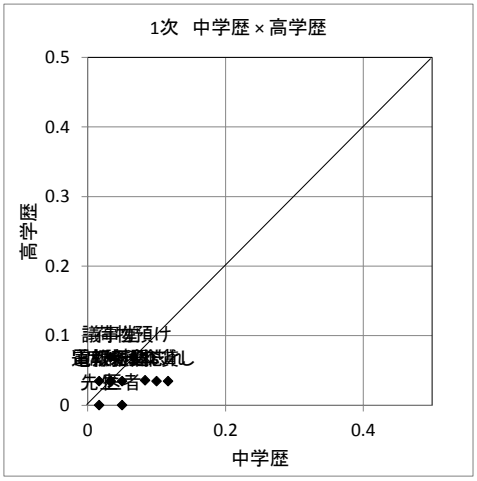


図9-1　1次　場面ごと中学歴×高学歴　(プロパーのみ)
Figure 9-1　1st survey, in each context,
high against middle education (proper or professional only)

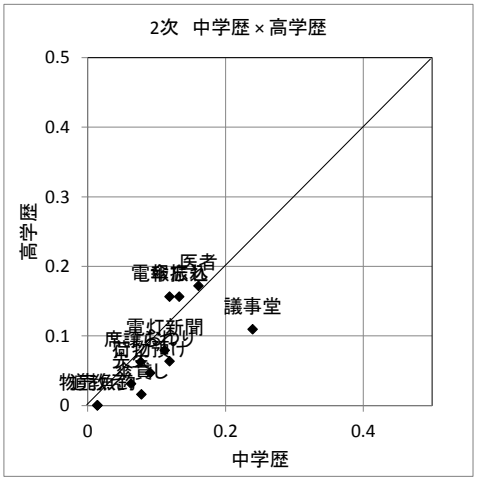


図9-2　2次　場面ごと中学歴×高学歴　(プロパーのみ)
Figure 9-2　2nd survey, in each context,
high against middle education (proper or professional only)

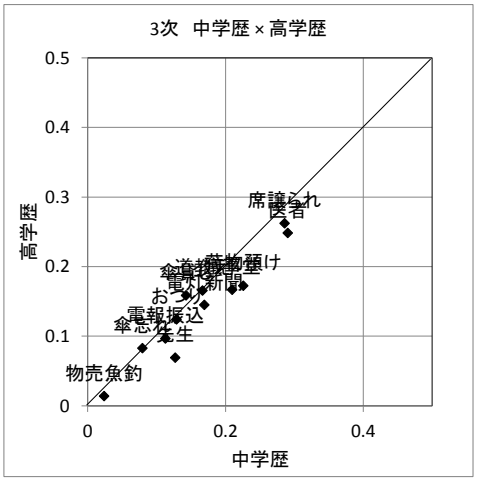


図9-3　3次　場面ごと中学歴×高学歴　(プロパーのみ)
Figure 9-3　3rd survey, in each context,
high against middle education (proper or professional only)

岡崎敬語調査　アノ平均使用数と丁寧さ

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'ano' and pliteness

11場面：　101道教え～111傘貸し

11 contexts: 101 Tell the way --- 111 Lend umbrella

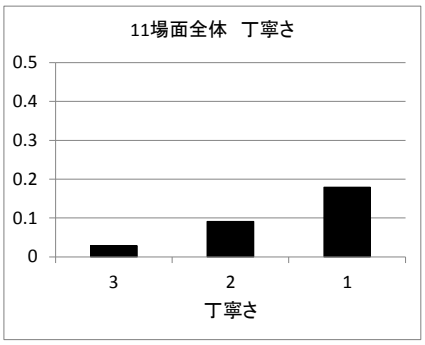


図10-1　11場面全体　丁寧さ

Figure 10-1　In all the 11 contexts, by politeness

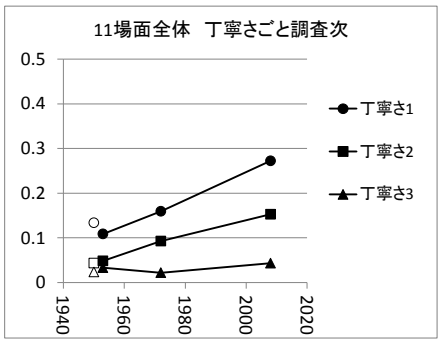


図10-2　11場面全体　丁寧さごと調査次

Figure 10-2　In all the 11 contexts, by politeness, year of survey

（◆：プロパー、◇：コントロール）

（◆：proper or professional ◇：control or college）

2. 「あのー」　詳細グラフ解説

以下では詳細グラフ第6章言い淀みのうち「あのー」の各グラフについて解説を加える.

図 1-1　12 場面全体　場面ごと調査次

図 1-1 に 12 場面全体の「あのー」の出現頻度推移を示した. 右上がりで, 全体として約半世紀の増加傾向を示す. ただし「あのー」使用が実際に多くなったと, すぐには判断できない. 前述のように文字化の方針について第 3 次とそれ以前で大きな方針転換があったからである. しかし第 1 次から第 2 次にかけて増えていること, 第 1 次の C と P の違いが見られないことなどは重要である. のちに詳論する.

図 1-2　12 場面全体　場面ごと調査次

図 1-2 は 12 場面個々の推移を示す. 大多数の場面で「あのー」使用増加を示す.

どの場面で多いかは, 図 2-2, 2-3 のほうが分かりやすい.「医者, 席譲られ」の 2 場面が他と離れて, 多くなる.「医者」場面では調査票の見本の文に「あのう」が印刷してあったことも影響しているだろう.

図 2-1　12 場面全体　調査次ごと年代

図 2-1 の生年実年代による 12 場面全体のグラフからは, 多くの読み取りができる. 録音に基づき忠実に文字化された第 3 次調査の結果をまず読み取ろう.「あのー」使用は右下がりで, 中年以上の世代で多い. 相手への配慮だけが使用の原理だとしたら, 年をとるほど調査で設定した相手に年下, 目下の人が増えるわけだから, 言い淀みの「あのー」は減るはずである. 待遇表現としてではなく, 年をとって適切な単語や表現が出なくなったための言い淀みの可能性も大きいが, 文字化のときにそれは省いてある.

しかし第 1 次, 2 次の年齢差をみると, わずかな違いだが, むしろ若い世代が「あのー」をよく使う. 解釈はのちに回す.

第 1 次調査の調査員は P と C に分かれる. 第 1 次調査の報告書では両者の結果を比較して, 大きな差がないことを確かめた上で, P (のみ) を優先的に扱っている. ところが今回「丁寧さ」や「ていただく」の分析をしたところ, P と C に大きな違いが見られた. C つまり愛知学芸大学の学生を相手にしたときのほうが, あまりかしこまった言い方でない答えが得られている. 時代の推移からみると, より古い段階をとらえている. 文の長さ (モーラ数) も短い. 学生調査員が忠実に書きとらなかったという疑いもあった. しかし今回の結果をみると, P も C もほぼ同様の結果を記録している (ただし細線で分かるように, 50 代, 60 代の話者のことばについては C のほうが「あのー」が少ない). 学生調査員が言い淀みの部分を書きとらなかったという推測は, あてはまらないようである. なお後述図 5-1 の性差は P と C が同じ値である. また図 7-1 の学歴差では P と C の違いが第 3 次と逆に反映している. 詳しくはのちに解釈を加える.

図 2-2, 図 2-3　12 場面全体　場面ごと　調査次散布図

図 2-2, 図 2-3 では，散布図を用いて，第 2 次，第 3 次で増加した場面を見分けやすく示した．対角線の左上【右下】は「あのー」が増えた【減った】場面である．**図 2-2** によれば，ほぼ全項目で第 2 次調査で増加が見られた．「議事堂，医者」で増えた．依頼場面で，相手への遠慮の意識が強く出る場面である．

図 2-3 によれば，ほぼ全項目で第 3 次調査で顕著な増加が見られた．同じく「席譲られ，議事堂，医者」で増えた．例外は「傘忘れ」である．ただし文字化の忠実さの反映でもありうる．

図 3-1～6　図 4-1～6　場面別調査次ごと年代

図 3～4 では，場面ごとに生年実年代のグラフを示した．場面ごとの計 100 年近くの推移が分かる．忠実に文字化された第 3 次の太線だけを先に考察しよう．大多数の場面で高年層ほど多い．「議事堂，医者，席譲られ，傘貸し，道教え」などで特に値が大きい．「魚釣り」というこどもに話しかける場面ではほとんど使われない．「傘忘れ，おつり」もそれほど心理的な負担の度合いが大きくない．「あのー」は待遇表現，配慮表現として機能していると考えてよい．

次に第 1，2 次の結果をその目でみると，線の傾きが一定でない．第 2 次の若い世代に向けて増加傾向が読み取れる場面が大部分で，例外は「席譲られ，傘貸し」などである．

図 5-1 外的　社会項目　性別

図 5-1 では性差を扱う．女性のほうが多く使い，男女ともに増えている．性差の間隔は平行的である．第 1 次の P と C の値がよく似ているのは，双方のデータの信頼性を語ると解しよう．

図 5-2～3 外的　社会項目　性別　調査次ごと年代

図 5-2～3 では男女別の生年実年代のグラフを示した．女性のほうが多く使い，男女ともに第 1，2 次には増えている．第 3 次にも増えているが，年齢カーブでは高年層が多く使う．

図 5-4～6 外的　社会項目　性別

図 5-4～6 では性差の場面による違いを調査次別に見る．散布図によれば，第 1 次でも第 2 次，3 次でも女性に多い．第 3 次で右上に広がっているのは，忠実に文字化されて多く記録されたからだろう．場面ごとの広がりが大きくなった．「デスマス，文末」の使い分けでも出た傾向である．実際に半世紀（生年を考えると 1 世紀）の間に場面や人間関係のとらえ方が変化して，多様化したとも考えられる．

図 6-1～4 外的　社会項目　性別，調査次別

図 6-1～4 では性差の場面による違いを調査次ごとに細分して見る．4 枚のグラフをくらべると，図 6-4 の散らばりが大きい．第 3 次では女性が「あのー」を多く使ったことを意味する．その目

でみると，第２次でも，第１次でも女性の広がりが大きい．この傾向にはこれまで気づかなかった．俗説では女性は言語能力が高く，談話もたくみで，よくしゃべり，言い淀みが少ないと思われている．しかし場面により相手との心理的距離を調節しまた表示する現象として「あのー」をとらえると，女性に目立つことを意味する．

細かく場面をみると，ここでも「医者，席譲られ」での増加が目立つ．

図 7-1 学歴別

図 7-1 以下では学歴差を扱う．第３次の結果によると，低学歴ほど「あのー」使用が多い．第1，2次では学歴ときれいな関係を見せない．なお第１次の C は，高学歴ほど「あのー」が多く，第３次の忠実に文字化された結果と逆である．解釈が難しい．

図 7-2　高学歴　学歴別

図 7-2 によれば，生年実年代による差がある．高学歴の高年層で多かったが，第３次には若年層がほとんど使わない．変化の可能性があるし，待遇表現として活用するにふさわしい年齢，階層に達していない可能性もある．つまり成人後採用が言い淀みにもあるかという課題に結びつく．

図 7-3　中学歴　学歴別

図 7-3 によれば，中学歴では順調に増えている．

図 7-4　低学歴　学歴別

図 7-4 によれば，第 1，2 次では低学歴はあまり使わなかった．第 3 次の忠実に文字化された結果では，高年層で際立った．

図 8-1～6 学歴別　散布図　調査次

図 8-1 以下９枚セットのグラフで各場面を個別に見る．９枚を全体として比べると，下のほう，つまり第３次調査で学歴差が広がったようにも読み取れる．しかし文字化の忠実度の反映の可能性もある．

最初に下段の**図 8-5，8-6，9-3** で第３次の忠実に文字化された結果を見よう．斜めの近似線の右下，低学歴に多い．中学歴と高学歴の差は小さい．「医者，席譲られ」で多く，「魚釣り」で少ない．上の段の第１次の学歴差をみると，３枚のグラフとも右下に固まり，使用頻度も少ないし，学歴差も少ない．中段の第２次の学歴差をみると，３枚のグラフで一定の傾向を示さない．「議事堂」という東京での道聞き場面では中学歴が多く「あのー」を使う．相対的に見て，学歴からは系統だった傾向が見出せない．

図 10-1 丁寧さ

図 10-1 によれば，１の丁寧な場面で「あのー」が多く使われる．

図 10-2　丁寧さと調査次

図 10-2 によれば，第 1 次から第 3 次にかけて，丁寧さの低い場面では「あのー」が増えない．しかし丁寧さの高いまたは中程度の場面では「あのー」が増えている．

これまで第 3 次の文字化の忠実度向上の影響に配慮して，読み取りに一定の保留をしてきたが，このグラフの線の推移をみると，一定の角度を保っており，第 1 次，第 2 次の文字化も「あのー」についてはそう変わりがなかったと解釈できる．

詳細グラフ9　第7章文の長さ

岡崎敬語調査　文長平均使用数

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'sentence length'

12場面：　101道教え～112物売魚釣　　12 contexts: 101 Tell the way ~~~ 112 Fishing

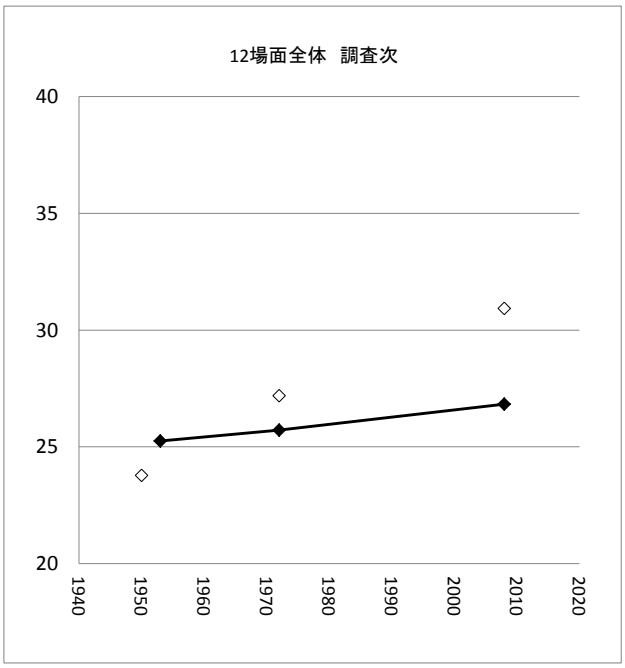


図1-1　12場面全体　調査次　（◆: プロパー、◇: コントロール）

Figure 1-1　In all the 12 contexts, by year of survey (◆: proper or professional ◇: control or college)

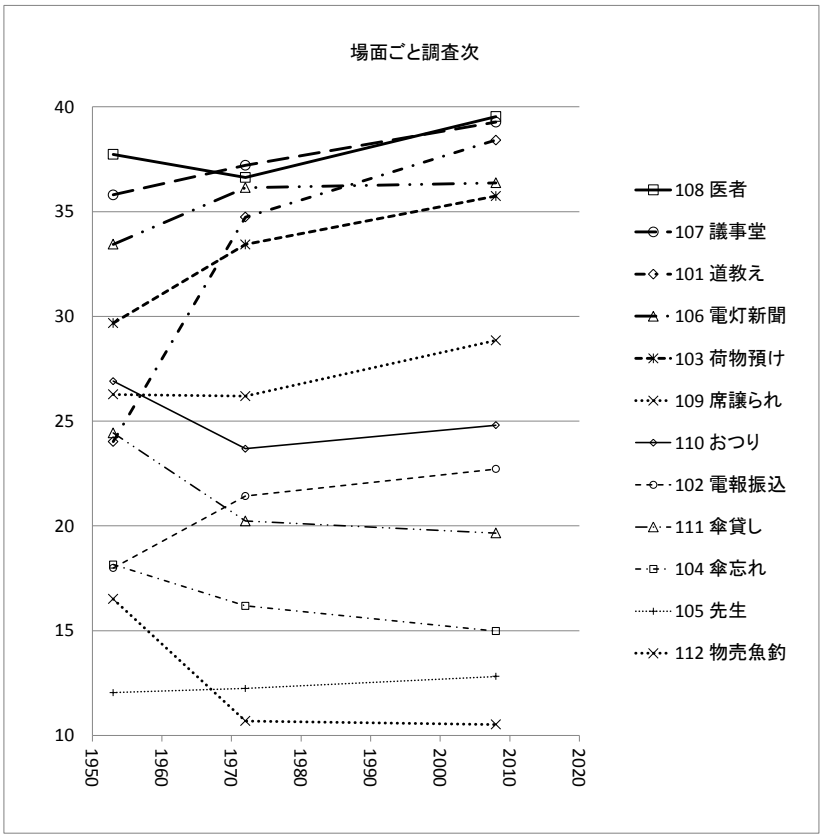


図1-2　場面ごと調査次　（プロパーのみ）

Figure 1-2　In each context, by year of survey (proper or professional only)

岡崎敬語調査　文長平均使用数　11場面全体調査次ごと年代

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'sentence length'　All the 11 contexts　by generations of three surveys

12場面：　101道教え～112物売魚釣　　12 contexts: 101 Tell the way ~~~ 112 Fishing

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代　　Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

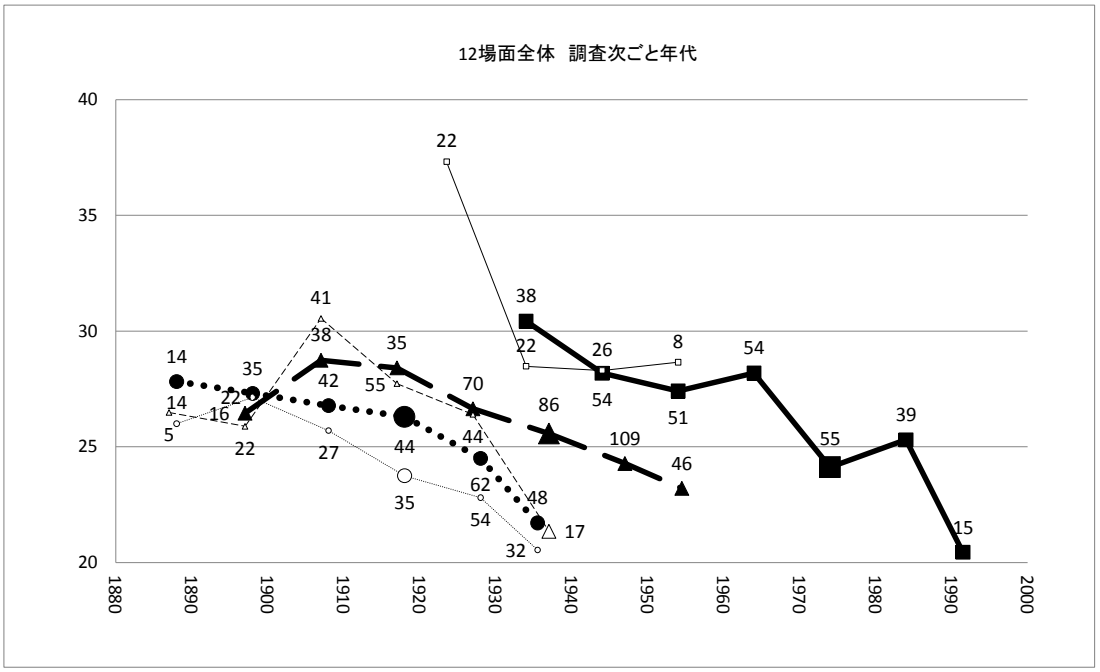


図2-1　12場面全体　調査次ごと年代　（◆：プロパー、◇：コントロール）

Figure 2-1　All the 12 contexts, generations of three surveys (◆: proper or professional ◇: control or college)

岡崎敬語調査　文長平均使用数の散布図　場面ごと調査次(プロパーのみ)

Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'sentence leng In each context, by year of survey (proper or professional only)

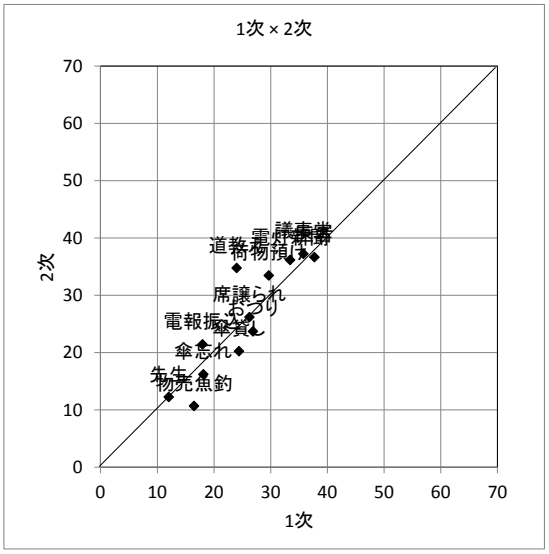


図2-2　場面ごと1次×2次　（プロパーのみ）

Figure 2-2　2nd against 1st survey, in each context (proper or professional only)

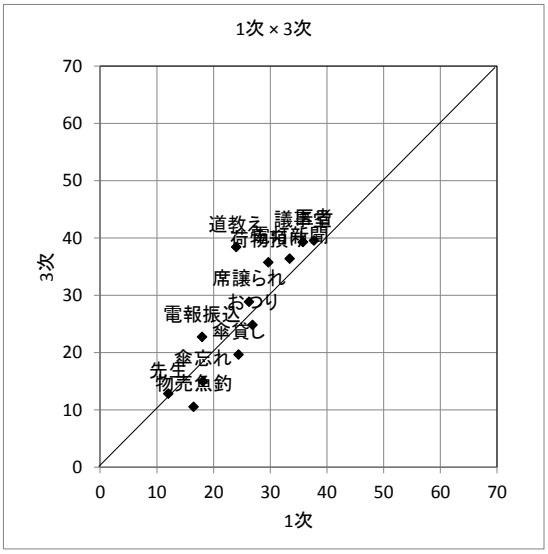


図2-3　場面ごと1次×3次　（プロパーのみ）

Figure 2-3　3rd against 1st survey, in each context (proper or professional only)

岡崎敬語調査　文長平均使用数　場面別調査次ごと年代

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'sentence length'　In each context, by generations, year of survey

場面：　縦に第3次平均使用数順 Context: Figure No. is given in order of the average usage rate in the third survey.

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代

Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

◆：プロパー、◇：コントロール

（◆: proper or professional ◇: control or college）

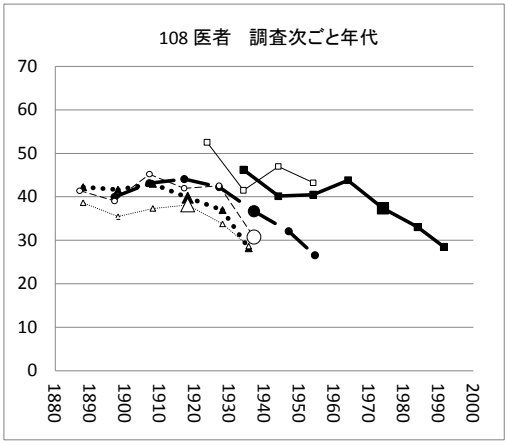


図3-1　108医者　調査次ごと年代

Figure 3-1 In 108 Doctor, by year of survey, generations

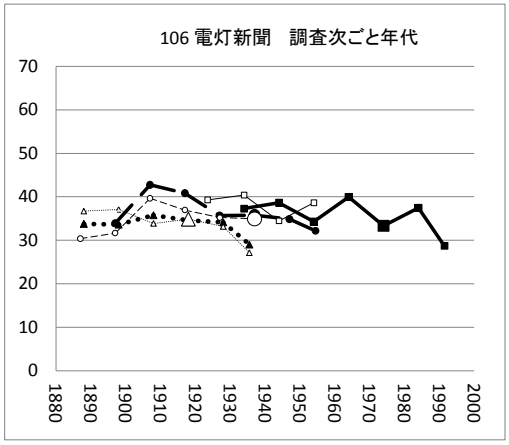


図3-4　106電灯新聞　調査次ごと年代

Figure 3-4 In 106 Newspaper bill, by year of survey, generations

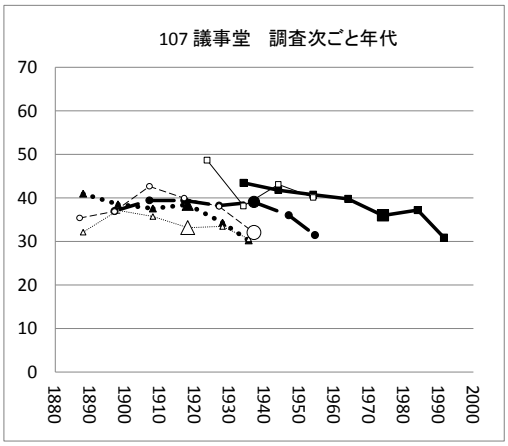


図3-2　107議事堂　調査次ごと年代

Figure 3-2 In 107 National Diet, by year of survey, generations

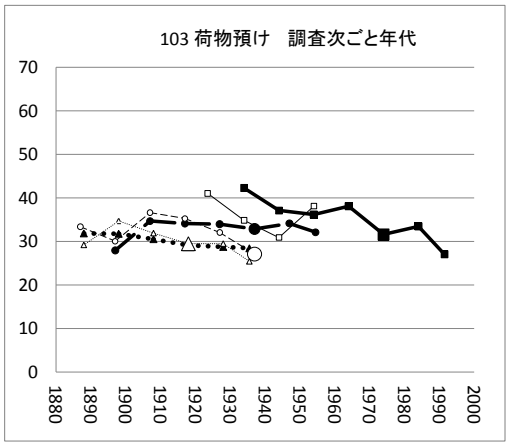


図3-5　103荷物預け　調査次ごと年代

Figure 3-5 In 103 Check baggage, by year of survey, generations

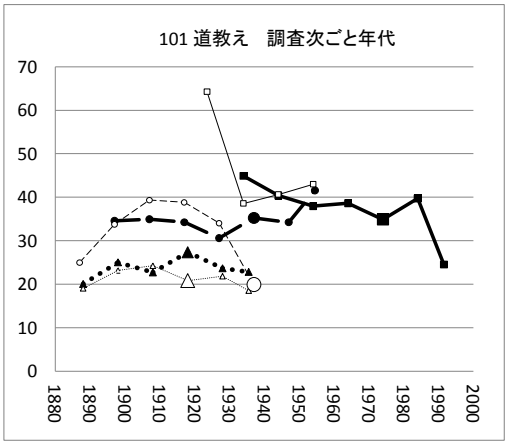


図3-3　101道教え　調査次ごと年代

Figure 3-3 In 101 Tell the way, by year of survey, generations

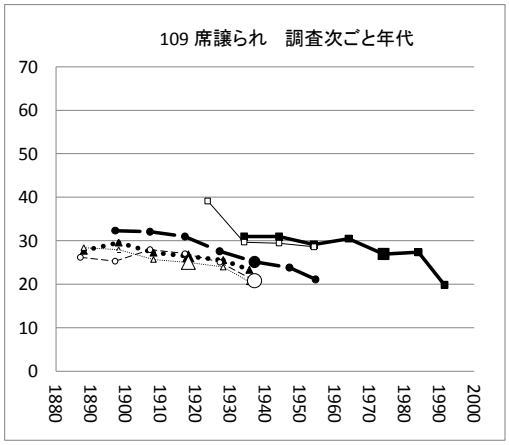


図3-6　109席譲られ　調査次ごと年代

Figure 3-6 In 109 Offered seat, by year of survey, generations

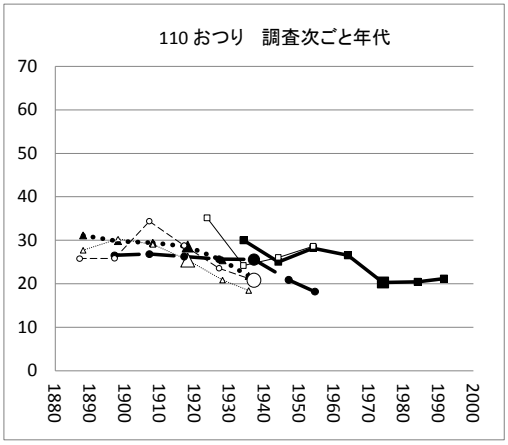


図4-1　110おつり　調査次ごと年代
Figure 4-1　In 110 Small change, by year of survey, generations

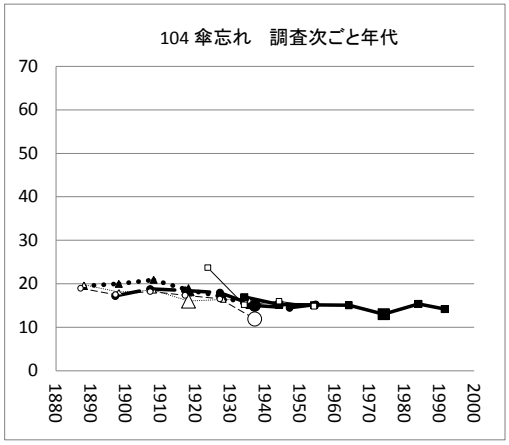


図4-4　104傘忘れ　調査次ごと年代
Figure 4-4　In 104 Left umbrella, by year of survey, generations

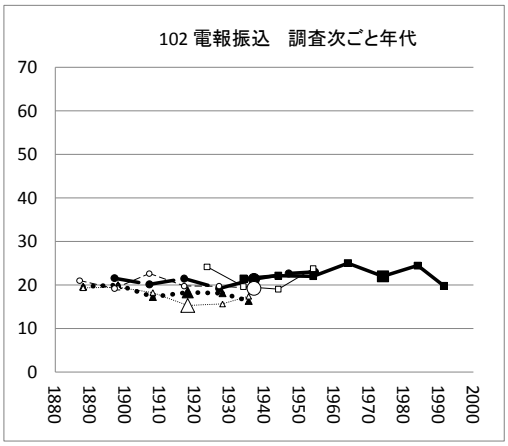


図4-2　102電報振込　調査次ごと年代
Figure 4-2　In 102 Remittance slip, by year of survey, generations

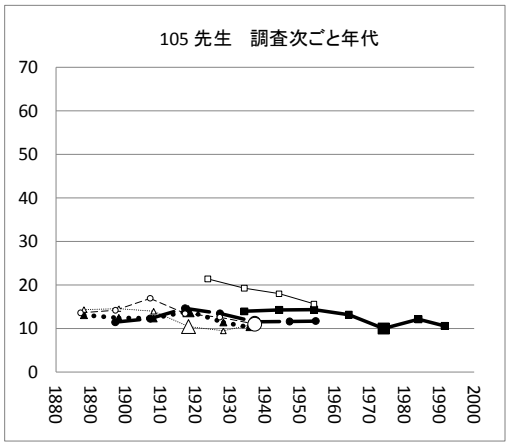


図4-5　105先生　調査次ごと年代
Figure 4-5　In 105 Ex-teacher, by year of survey, generations

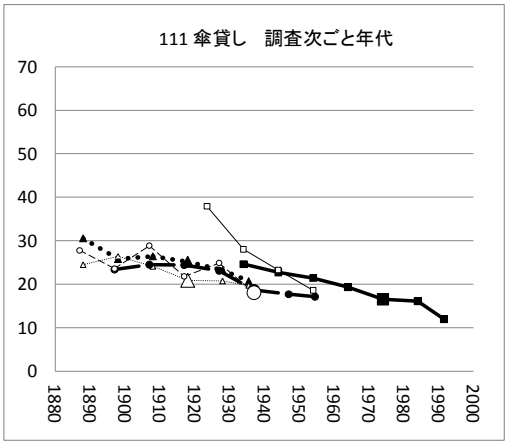


図4-3　111傘貸し　調査次ごと年代
Figure 4-3　In 111 Lend umbrella, by year of survey, generations

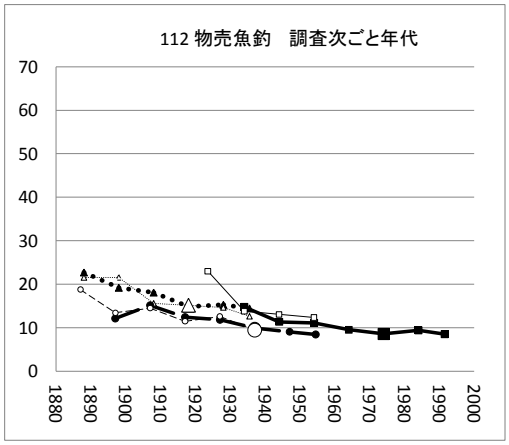


図4-6　112物売魚釣　調査次ごと年代
Figure 4-6　In 112 Fishing, by year of survey, generations

岡崎敬語調査　文長平均使用数とその散布図
Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'sentence length'

12場面全体　性別ごと調査次
All the 12 contexts, by gender, year of survey

12場面：　101道教え～112物売魚釣
12 contexts: 101 Tell the way --- 112 Fishing

◆：プロパー、◇：コントロール
◆: proper or professional ◇: control or college

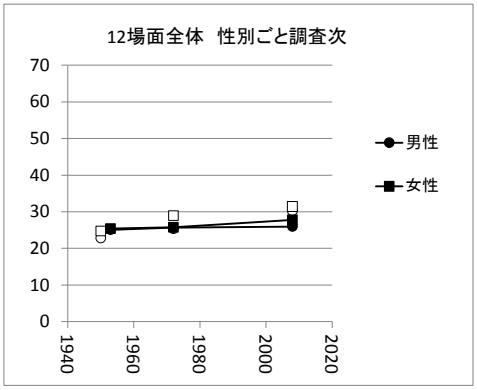


図5-1　12場面全体　性別ごと調査次
Figure 5-1 In all the 12 contexts, by gender, year of survey

男女別調査次ごと年代
By gender, generations, year of survey

年代：　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代
Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

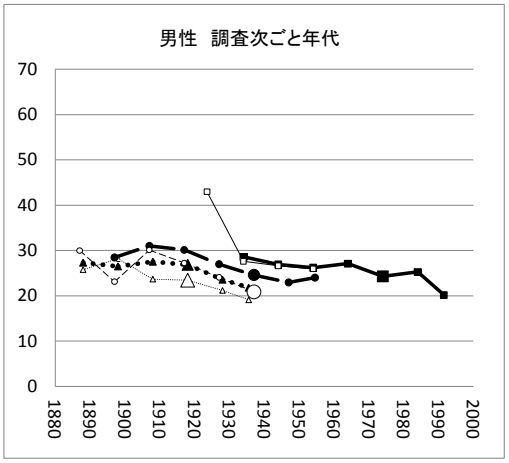


図5-2　男性　調査次ごと年代
Figure 5-2 Male, by year of survey, generations

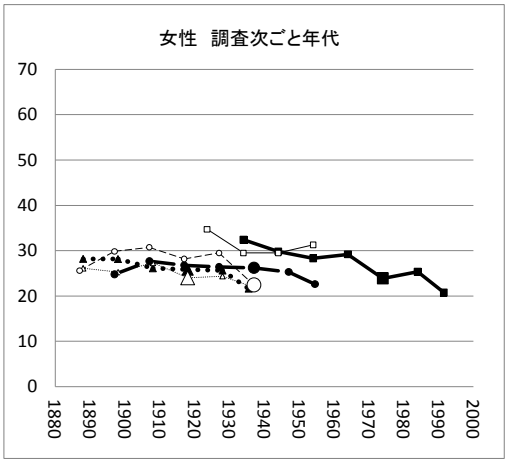


図5-3　女性　調査次ごと年代
Figure 5-3 Female, by year of survey, generations

調査次別　場面ごと性別（プロパーのみ）
By year of survey, in each context, by gender (proper or professional only)

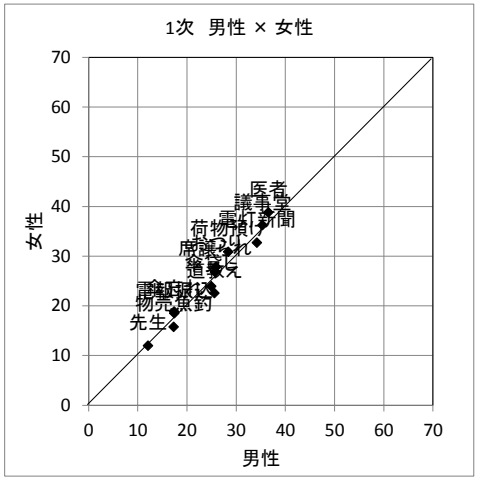


図5-4　1次　場面ごと男性×女性　（プロパーのみ）
Figure 5-4　1st survey, in each context,
female against male (proper or professional only)

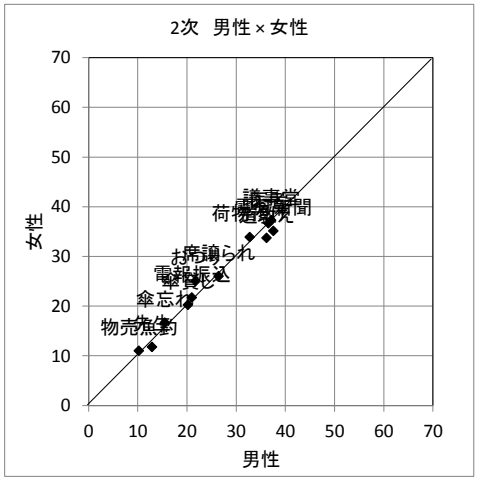


図5-5　2次　場面ごと男性×女性　（プロパーのみ）
Figure 5-5　2nd survey, in each context,
female against male (proper or professional only)

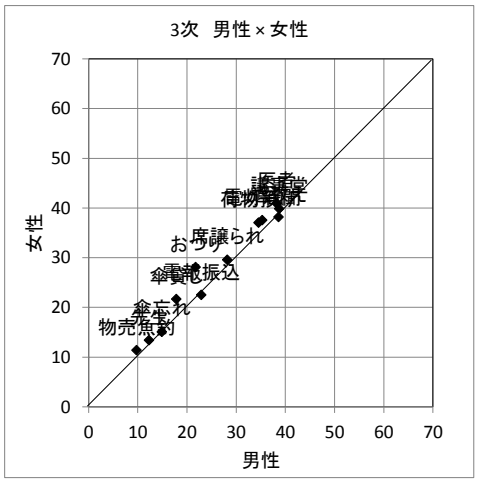


図5-6　3次　場面ごと男性×女性　（プロパーのみ）
Figure 5-6　3rd survey, in each context,
female against male (proper or professional only)

岡崎敬語調査　文長平均使用数の散布図　男女別　場面ごと調査次（プロパーのみ）

Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'ser By gender, in each context, by year of survey (proper or professional only)

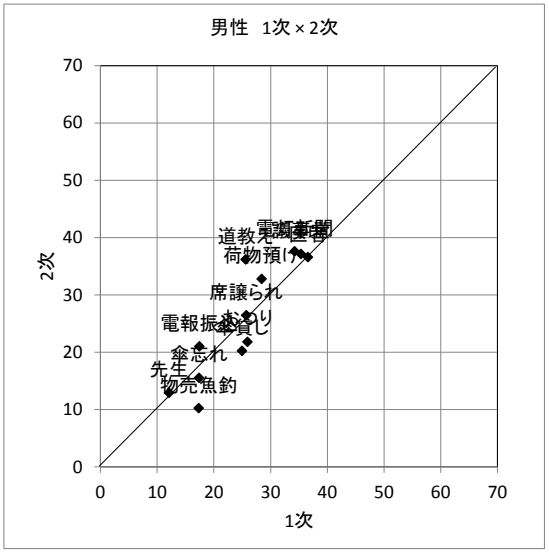


図6-1　男性　場面ごと1次×2次　（プロパーのみ）

Figure 6-1　Male, 2nd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

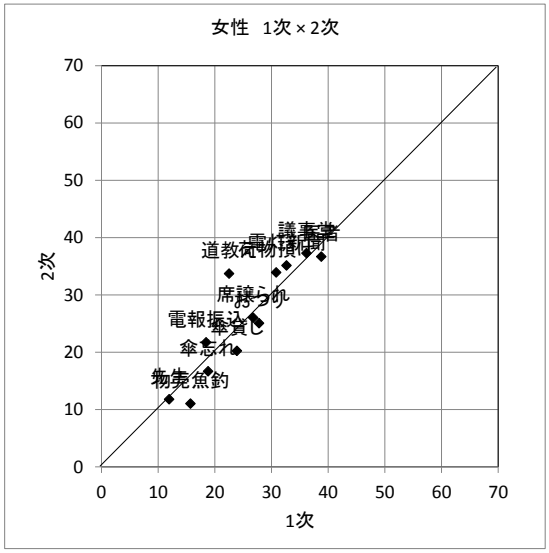


図6-2　女性　場面ごと1次×2次　（プロパーのみ）

Figure 6-2　Female, 2nd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

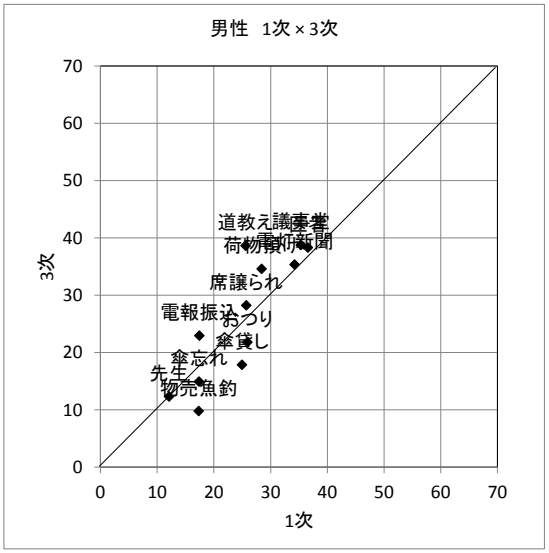


図6-3　男性　場面ごと1次×3次　（プロパーのみ）

Figure 6-3　Male, 3rd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

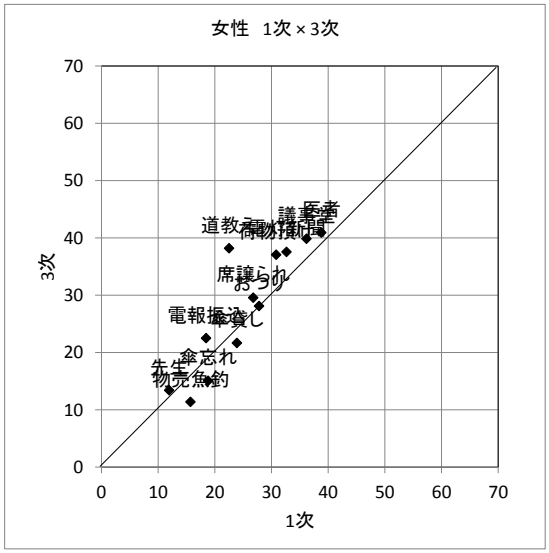


図6-4　女性　場面ごと1次×3次　（プロパーのみ）

Figure 6-4　Female, 3rd against 1st survey,
in each context (proper or professional only)

岡崎敬語調査　文長平均使用数　　◆: プロパー、◇: コントロール

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'sentenc ◆: proper or professional ◇: control or college

12場面全体　学歴ごと調査次

All the 12 contexts, by academic background, year of survey

12場面:　101道教え～112物売魚釣

12 contexts: 101 Tell the way --- 112 Fishing

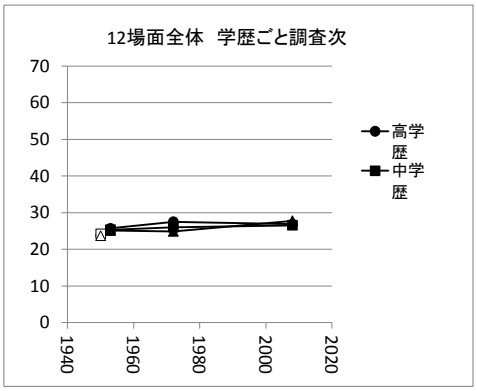


図7-1　12場面全体　学歴ごと調査次

Figure 7-1 In all the 12 contexts, by academic background, year of survey

学歴別調査次ごと年代

By academic background, generations, year of survey

年代:　1次10代～60代、2次＆3次10代～70代

Generations: first survey 10's – 60's; second and third surveys 10's – 70's

無回答　No response

高学歴:1次P10代、60代;1次C10代;2次70代

High education: 1st proper 10's, 60's; 1st control 10's; 2nd 70's

中学歴:1次P60代;2次70代　Middle education: 1st proper 60's; 2nd, 70's

低学歴:3次20代、3次40代　Low education: 3rd, 20's and 3rd, 40's

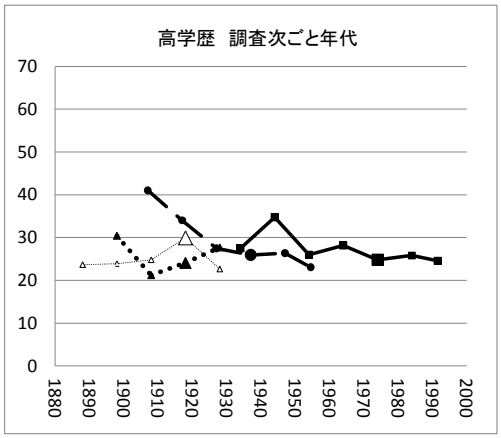


図7-2　高学歴　調査次ごと年代

Figure 7-2 High education, by year of survey, generations

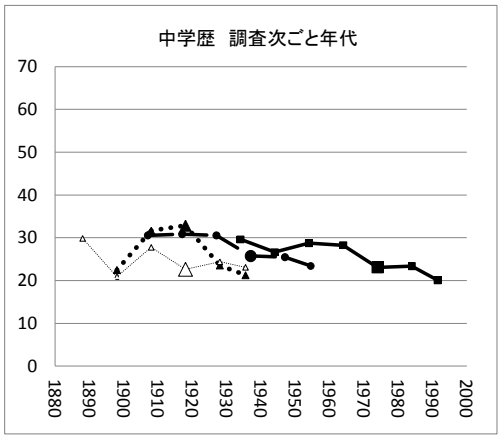


図7-3　中学歴　調査次ごと年代

Figure 7-3 Middle education, by year of survey, generations

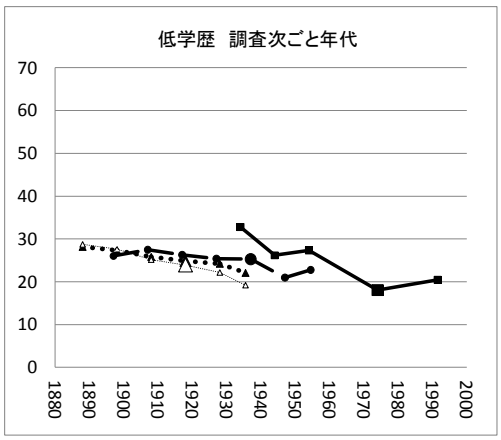


図7-4　低学歴　調査次ごと年代

Figure 7-4 Low education,by year of survey, generations

岡崎敬語調査　文長平均使用数の散布図　調査次別　場面ごと学歴（プロパーのみ）

Okazaki Survey on Honorifics　Scattergram of average usage rate of 'ser By year of survey, in each context, by academic background (proper or professional only)

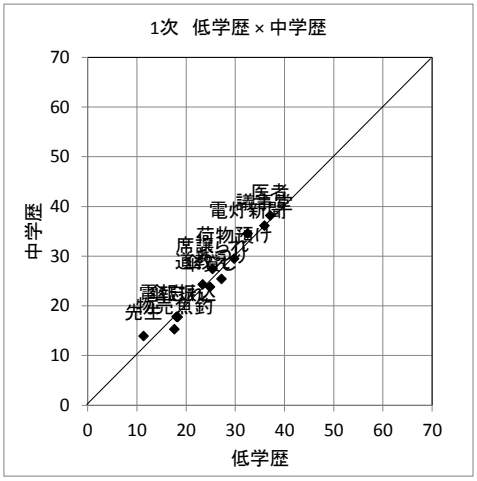


図8-1　1次　場面ごと低学歴×中学歴　（プロパーのみ）

Figure 8-1　1st survey, in each context,
middle against low education (proper or professional only)

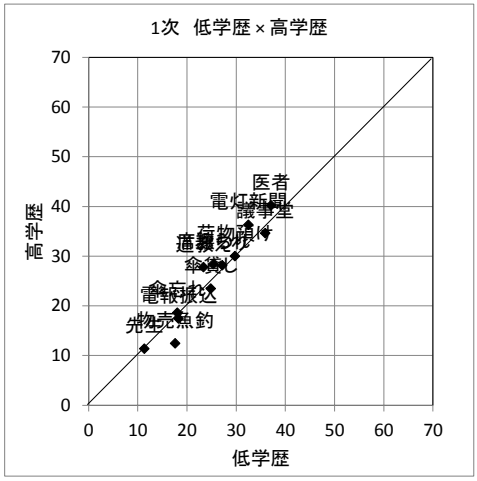


図8-2　1次　場面ごと低学歴×高学歴　（プロパーのみ）

Figure 8-2　1st survey, in each context,
high against low education (proper or professional only)

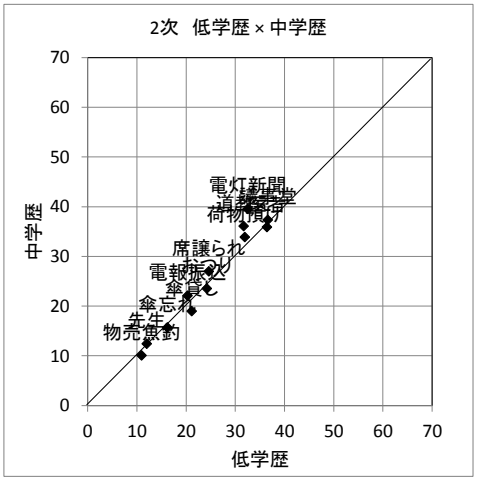


図8-3　2次　場面ごと低学歴×中学歴　（プロパーのみ）

Figure 8-3　2nd survey, in each context,
middle against low education (proper or professional only)

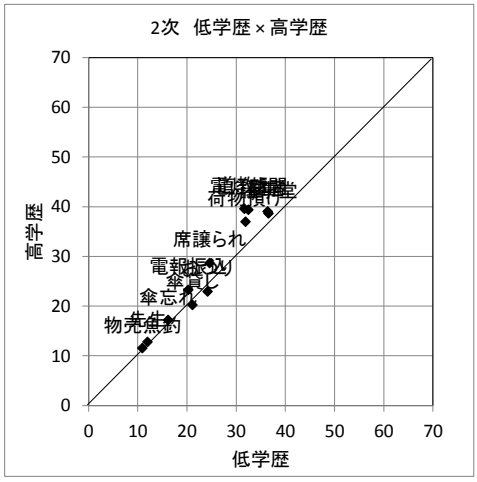


図8-4　2次　場面ごと低学歴×高学歴　（プロパーのみ）

Figure 8-4　2nd survey, in each context,
high against low education (proper or professional only)

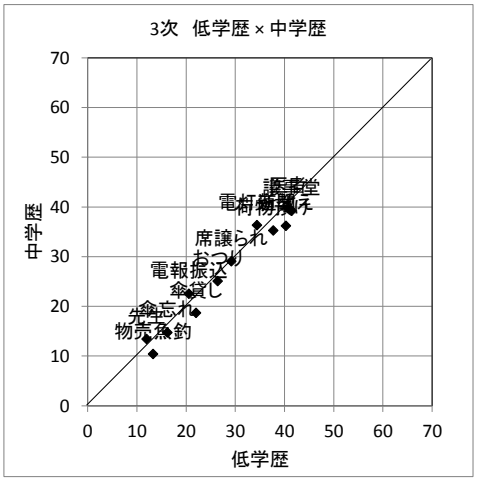


図8-5　3次　場面ごと低学歴×中学歴　（プロパーのみ）

Figure 8-5　3rd survey, in each context,
middle against low education (proper or professional only)

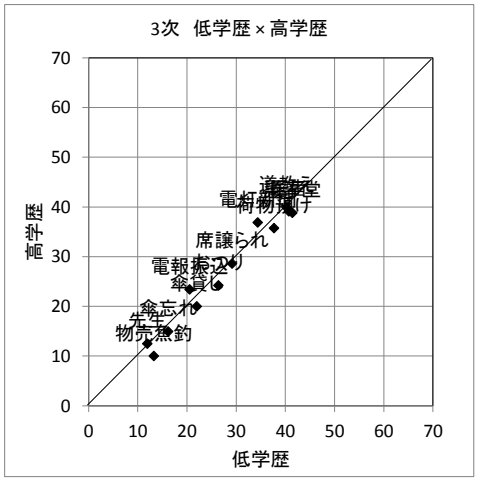


図8-6　3次　場面ごと低学歴×高学歴　（プロパーのみ）

Figure 8-6　3rd survey, in each context,
high against low education (proper or professional only)

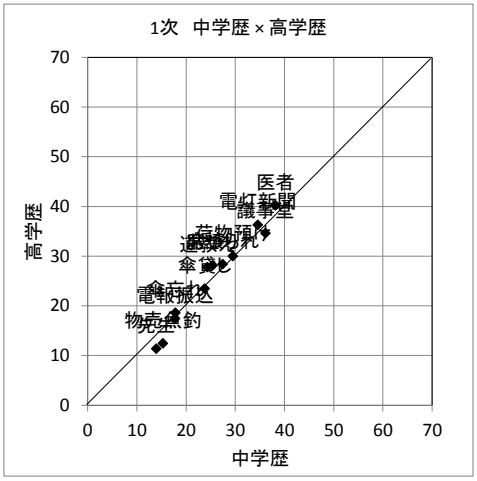


図9-1　1次　場面ごと中学歴×高学歴　（プロパーのみ）
Figure 9-1　1st survey, in each context,
high against middle education (proper or professional only)

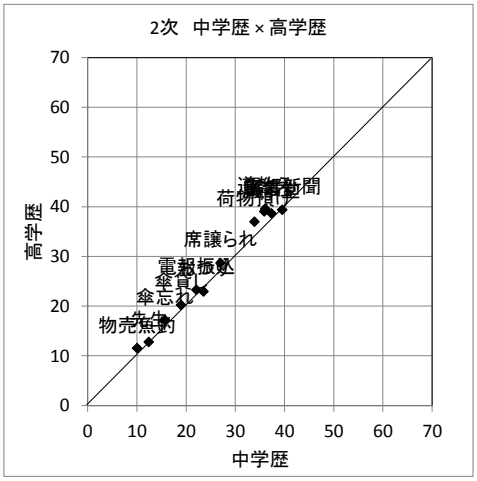


図9-2　2次　場面ごと中学歴×高学歴　（プロパーのみ）
Figure 9-2　2nd survey, in each context,
high against middle education (proper or professional only)

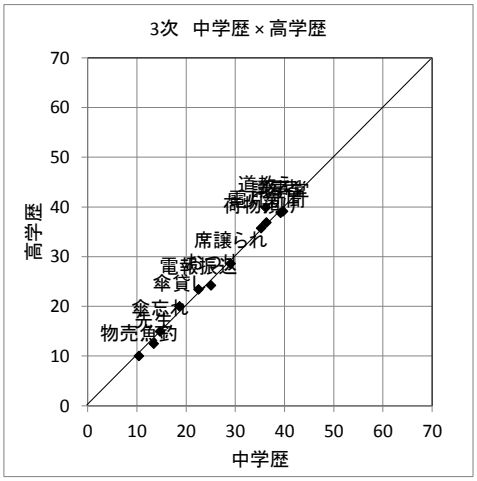


図9-3　3次　場面ごと中学歴×高学歴　（プロパーのみ）
Figure 9-3　3rd survey, in each context,
high against middle education (proper or professional only)

岡崎敬語調査　文長平均使用数と丁寧さ

Okazaki Survey on Honorifics　Average usage rate of 'sentence length' and pliteness

12場面：　101道教え～112物売魚釣

12 contexts: 101 Tell the way --- 112 Fishing

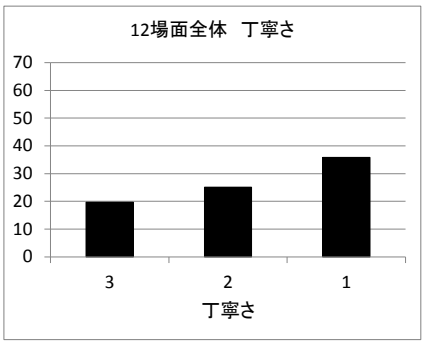


図10-1　12場面全体　丁寧さ

Figure 10-1　In all the 12 contexts, by politeness

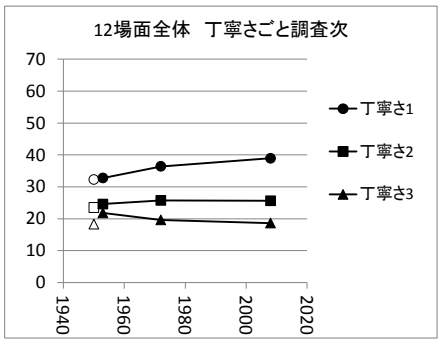


図10-2　12場面全体　丁寧さごと調査次

Figure 10-2　In all the 12 contexts, by politeness, year of survey

（◆：プロパー、◇：コントロール）

（◆：proper or professional ◇：control or college）

3. 文の長さ　第 7 章詳細グラフの解説

以下では第 7 章文の長さ詳細グラフについて解説を加える.

グラフ縦軸の目盛は，モーラ数の推移が分かりやすいように，最大値最小値を調整した．大部分は 10 モーラから 40 モーラの範囲である.

図 1-1　12 場面全体　場面ごと調査次

図 1-1 に 12 場面全体のモーラ数推移を示した．かつて井上他（2012）で示したグラフは第 2 次までの岡崎ランダム調査データを使って，第 3 次調査のデータを足したもので，凹型の分布を示した．一定方向の推移を示さなかった.

今回はすべてのデータを活用することを心がけて，6 個のデータにした．まず◆を実線で結んで表わした 3 個は，第 1 次調査の第 1 次調査の P ＝ Proper or Professional のデータと，第 2 次のランダム調査データと第 3 次のランダム調査の結果である．◇で表わした 3 個は，第 1 次調査の C ＝ Control or College と，第 2 次のパネル◇と，第 3 次のパネル◇の調査結果である.

3 個の◆を実線で結んで表わした線はゆるやかな右上がり増加パターンを示す．3 回とも信頼できる手法によるランダムサンプルの結果なので，岡崎全体として長く答えたことを意味する．ただし第 3 次の文字化に際して，言い淀みに関する部分を忠実に文字化したという点は考慮する必要がある．線で結んでいない 3 個の◇は，対照のために表示した．まず第 1 次の◇は C ＝ Control College で大学生調査員の結果だが，研究者よりも短く書きとっている．話者が短く答えたのか，調査員の書き落としがあったのかは，これだけでは判別できない．（なお第 1 次調査の Proper or Professional のデータは C に比べて学歴に偏りがあり，答えの偏りも想定される.）

ヒントは面接調査第 1 問，場面 1「道教え」である．「わたしのような旅行で来た者が，東岡崎駅の北口で，明代橋（みょうだいばし）はどちらかということをあなたにたずねました．何と言って教えますか.」である．ここで戦後まもなくの学芸大学（元の師範学校）の学生に年下だということで「常体（ダ体）」を使ったとして，この文体選択が第 2 問以下の場面設定にかかわらず影響を及ぼしたことが考えられる．東京から来た研究者向けと地元愛知学芸大学の学生向けで違う可能性がある．次の問との違いは，今後の課題である．図 1-2 で分かる.

第 2 次と第 3 次の◇は，それぞれの調査で追跡に成功したパネルサンプルの平均値である．若い世代は含まないので，高年層の傾向を反映することになる．後述のように文の長さには年齢差があって，年を取るほど長く答える傾向があるので，パネルサンプルはランダムサンプルよりも長くなると期待される．第 2 次と第 3 次の◇は，まさに期待どおりのパターンを示した.

図 1-2　12 場面全体　場面ごと調査次

図 1-2 は 12 場面個々の推移を示す．第 1 次調査は P のみのデータである．横軸は 3 回の調査の間隔，実時間（19 年と 36 年）に合わせた．場面ごとに増加と減少の双方を示す．確かに「道教え」は第 2 次以降で長くなるが，しかしモーラ数のトップではない．他の多くの項目でのわず

かな増加傾向が重なって，全体として図 1-1 の増加傾向が提示されたのである．

減少を示す例外的な場面として，「おつり，傘忘れ，傘貸し」がある．あとの二つについては，傘の価値，傘の値段の変化を考慮すべきだが，話し相手との交渉にしつこくなくなった，つまりは相手の領域（縄張り）への立ち入りを控えるという傾向が考えられる（西尾 2015）．後掲の散布図でまた考察する．

図 2-1　12 場面全体　調査次ごと年代

図 2-1 は生年実年代による 12 場面全体のモーラ数推移の増補改訂版である．類似のグラフの見本なので，図の見方について解説する．6 本の線の 10 歳刻みの年齢層の数字は，各セルの人数である．第 1 次調査の高年層，パネル調査の一部に人数の少ないセルがあり，グラフの線を乱すことがありうる．

まず太い線 3 本について，解説する．第 1 次調査の P ＝ Proper or Professional のデータ（●に点線）と，第 2 次のランダム調査（▲に破線）と，第 3 次のランダム調査（■に実線）の結果である．3 回の調査の全体傾向を示すものとして重視すべきである．3 本の線がそろって右下がりを示す. しかし調査を繰り返すと線はつながらず, 前回の調査を同じくらいの位置に復帰する．つまり同じくらいの長さの回答をする．さらに 1940 年前後に生れた世代は，第 1 次の若者，第 2 次の壮年層，第 3 次の高年層と，年を取るにつれて文が長くなる．

細い線 3 本について，解説する．第 1 次の C (Control or College) のデータ（○に点線）と，第 2 次のパネルサンプル（△に破線），第 3 次のパネルサンプル（□に実線）である．パネルサンプルは，年齢層別に分けると人数が少なくなって信頼度が落ちるので，読み取りに用心が必要である．同一個人の追跡という視点からは，第 8 章のようなアプローチを取るのがよい．しかし第 8 章の手法だと，パネルでとらえられた人がランダムサンプリングでとらえられた岡崎市民一般の中にどう位置づけられるか不明である．位置付けのために細い線で入れた．

第 1 次の細い点線 C (Control or College)は，太い点線 P（Proper or professonal）よりも下に位置する．学生への答えが簡潔だったとも考えられるし，学生の書きとりが忠実でなかったとも考えられる．ただし第 6 章言い淀みの図，**図 2-1** を見ると P も C もほぼ同様の結果を記録しているので，学生調査員が言い淀みの部分を書きとらなかったという推測は，あてはまらない．実質的情報を伝える部分で学生調査員向けの反応文が簡潔になったのだろう．

第 2 次のパネルサンプルの細い破線は，第 2 次ランダムサンプルの太い破線よりも下に位置する．つまり反応文が短い傾向がある．それはまた，第 1 次の線に近いとも言える．

第 3 次のパネルサンプルの細い実線は，第 3 次ランダムサンプルの太い実線と重なる年齢層が少ない．38 年を経たので，中年以上しかいないためである．大まかに見ると第 3 次のランダムサンプルと似ている．パネルサンプルは人数が少なくなるので，細かいきざみの年齢層などに分けて考察するときなどには用心すべきだが，この章のように，そもそも多段階の連続的数値になる文の長さについては，それほど大きな影響はなさそうである．第 8 章で個人内の生涯変化，加齢変化について分析するが，そこで取り上げられるパネルサンプルの回答パターンに，特に偏りが

あるわけではない．岡崎市民全体の言語変化を個人内で反映するものと，認められる．

図 2-2, 図 2-3　12 場面全体　場面ごと　調査次散布図

図 2-2, 図 2-3 では，散布図を用いて，第 2 次，第 3 次で増加した場面を見分けやすく示した．対角線の左上はモーラ数の増えた場面である．「道教え，議事堂，新聞代，荷物預け」などで，依頼関係の場面が多い．「ていただく」の多用される場面とかなり共通で，「丁寧さ」の高い場面とも共通である．理論的に射程の大きい問題である．

図 3-1～6　図 4-1～6　場面別調査次ごと年代

図 3～4 では，場面ごとに生年実年代のグラフを示した．12 場面を第 1 次調査の平均使用数の順に並べて，3 回のランダムサンプルとパネルサンプルの調査の結果を示した（第 1 回調査の調査者による違いの P と C も分けた.）場面ごとの計 100 年近くの推移が分かる．図 2-1 で見た全体グラフと同様の右下がり矢印の繰り返しパターンがあるかに着目すると，かなり多い.「道教え」では，全体として年をとるほどことばを多く使う．ただし第 2 次 10 代で急な跳ね上がりが見られた.「道教え」などの限られた場面ではない.「医者，議事堂，荷物預け，おつり，席譲られ，（傘貸し）」でも顕著である．ことば数が多くなり，丁寧に説明する．

これは，同じ年齢層の人のモーラ数が加齢によって増えることで分かる．1940 年ころのコーホートが典型である．例外に近いのは図 4-4「傘忘れ」で，モーラ数の年層差が少ない．

図 4-6，物売魚釣は，第 1 次と第 2 次以降で場面設定を変えた項目である．第 1 次の文が長いのはそのせいである．ただし右下がりの線（つまり高年層のほうが多く問いかける）という傾向は 3 回とも共通している．

図 3～4 の細い線 3 本について，結果を見渡したところ，パネルサンプルの回答の傾向は，ランダムサンプルとずれることが多い．しかし右下がりの線が観察され，しかも 3 回の調査で繰り返される．ランダムサンプルでとらえられた傾向が補強されたと見られる．

図 3-3 第 1 問の道教えで第 1 次の若い世代の C の数値が低いことは，調査開始時に地元の学生だと（名乗らなくとも服装や態度で）分かっていたら，そのせいだと言えるが，当時の状況は不明である．他のいくつかの問でも C の数値は低く，それが合計点として前述図 2-1 に表れた．

第 2 次のパネルサンプル，第 3 次のパネルサンプルの細い線は，ランダムサンプルの太い線よりも数値が大きかったり小さかったり，さまざまである．一定の傾向を見出すのは難しい．

図 5-1 外的　社会項目　性別

図 5-1 では性差を扱う．女性がやや長い．

図 5-2～3 では性別に 6 本の線を見る．**図 5-2** 男性の場合は，太い 3 本の線の右下がり繰り返しが鮮やかである．**図 5-3** 女性では，第 1 次と第 2 次の太い線が重なるが，右下がりは観察される．

図 5-4～6 外的　社会項目　性別

図 5-4～6 では性差の場面による違いを見る．散布図によれば，第 1 次から第 3 次にわけても性差は少ない．

図 6-1～4 外的　社会項目　性別，調査次別

図 6-1～4 では男女に分けた上で，場面による調査次ごとの違いを見る．散布図によれば，左の男性も右の女性も，第 2 次から第 3 次にかけて長く答える場面が増加傾向にある．前出のように「議事堂」「道教え」「荷物預け」「医者」などで，長かった文がさらに長くなる傾向がある．「先生」はいつも下位である．子どもの紹介なので短いのだろう．また無駄話をしないという場面でもあろう．「わたくし」という一番改まった自称が使われる場面でもあった．「物売魚釣」は場面設定が変わったために文が短くなった．モーラ数と丁寧さは正比例の関係にあるようにも解釈できるが，例外もある．

図 7-1　学歴別

図 7-1 以下では学歴を扱う．高学歴ほどモーラ数が多く，第 2 次で明確だが，以下のように，いつも長いとは限らず，年層による．

図 7-2～4　学歴別

生年実年代のグラフで見ると，年代差がある．高学歴の高年層で長い．数値を見ると，高学歴の高年層は平均 30 モーラを越えて，25 モーラ以下は少ない．中学歴で平均 30 モーラを越える年層は少なく，25 モーラ以下は多い．低学歴は第 3 次の 70 代（小人数）を除くと平均 30 モーラを越えない．

高学歴ほど長く話すのは，Bernstein 説の中産階級の精密コード elaborate code と労働者階級の制限コード restricted code の違いに対応するが，精査が必要である．

図 8-1～6 学歴別　散布図　調査次

図 9-1～3 学歴別　散布図　調査次

図 8-1～6，**図 9-1～3** で項目ごとの違いを見ると，第 1 次，第 2 次調査では高学歴のモーラ数がやや多い．第 3 次調査では，低学歴が多数の項目で多く，逆転する．「医者，新聞代，議事堂」など，モーラ数の多い項目で対角線から離れる．項目ごとの差は小さい．

以上，モーラ数に関して性，学歴という言語外的条件との関係を見た．相関が高いとは読み取れなかった．

図 10-1 丁寧さ

図 10-1 では丁寧さとのクロス集計を見る．「丁寧さ」は，第 1 次と第 2 次の調査報告の中心テーマだった．半世紀以上を経た第 3 次調査の結果を入れることによって，敬語の大きな変化傾向

を把握することができた．丁寧さは，過去の報告書では，3 段階，5 段階に分けて分析された．この資料集では，松田謙次郎による第 3 次調査の 3 段階判定をそのまま利用した．ほぼ「ゴザイマス体，デスマス体，ダ体」に相当する．「特別（御）丁寧体，丁寧体，普通体」「最高敬体，敬体，常体」などとも呼ばれる．

図 10-1 で丁寧さの段階はグラフ下端の数字で示した．縦軸は平均のモーラ数である．1 ゴザイマス体だとモーラ数が 35 モーラほどで多く，文が長くなる．2 デスマス体ではモーラ数が 25 モーラほどで中間である．3 ダ体ではモーラ数が 20 モーラほどで少ない．それぞれの文体の述部（コピュラ）の長さが違うから，その反映とも言える．しかしダ体とゴザイマス体の違いは，名詞文 1 文について 4 モーラである．それよりもモーラ数の違いが大きく，平均 15 モーラ，2 倍近くの長さになる．1 ゴザイマス体では，コピュラ以外の要素も多くなると考えられる．

図 10-2　丁寧さごと調査次

図 10-2 では調査次の違いも見ようとした．横軸は 3 回の調査の実施年を示す．縦軸は平均のモーラ数である．線の位置が示すように，丁寧さ 1 ゴザイマス体だとモーラ数が多く，丁寧さ 2 デスマス体ではモーラ数が中間，丁寧さ 3 ダ体ではモーラ数が少ない．第 1 次調査では文体間の開きが小さかったが，第 2 次調査で広がり，第 3 次調査でさらに丁寧さ 1 のモーラ数が増えた．つまり丁寧さごとの違いが広がった．調査次ごとにみて，丁寧さ 1 ゴザイマス体で長くなる．丁寧さ 1 ゴザイマス体はモーラ数が多く，他の二つと離れた位置を占める．

大規模経年調査資料集　18
Material for Large-Scale, Long-Term Studies of Japanese

敬語の変化と採用時期
―岡崎の継続調査―

Honorific Changes and Time of Adoption
―Repetitive Surveys in Okazaki―

(Ver. 1.1)

日本語の大規模経年調査に関する総合的研究
Comprehensive Research
Based on Large-Scale, Long-Term Studies of Japanese

井上史雄・阿部貴人・鑓水兼貴・柳村裕
INOUE Fumio, ABE Takahito, YARIMIZU Kanetaka, YANAGIMURA Yu

平成 27 年 8 月 31 日　31 Aug 2015
国立国語研究所
National Institute for Japanese Language and Linguistics
〒190-8561 東京都立川市緑町 10-2 Tel. 042-540-4300（代）
10-2 Midori-cho, Tachikawa City, Japan 190-8561